CS-78-03

ES/1 NEO

CSシリーズ

Control Center 使用者の手引き

12.20

株式会社 アイ・アイ・エム

第３版　２０２４年２月

©版権所有者　株式会社　ｱｲ･ｱｲ･ｴﾑ　２０２４年

©COPYRIGHT IIM CORPORATION, 2024

ALL RIGHT RESERVED. NO PART OF THIS PUBLICATION MAY REPRODUCED OR TRANSMITTED IN ANY FORM BY ANY MEANS, ELECTRONIC OR MECHANICAL, INCLUDING PHOTOCOPY RECORDING, OR ANY INFORMATION STORAGE AND RETRIEVAL SYSTEM WITHOUT PERMISSION IN WRITING FROM THE PUBLISHER.

“RESTRICTED MATERIAL OF IIM “LICENSED MATERIALS – PROPERTY OF IIM

目 次

第 1 章　はじめに 1

第 2 章　インストールの前提条件および事前準備 2

2.1.　ハードウェア要件 2
2.2.　ソフトウェア要件 4
2.3.　その他の要件 6
2.4.　システム管理者による事前準備 7
2.4.1.　Control Center 専用ユーザの作成 7
2.4.2.　ユーザーアカウント制御（UAC）の設定 8
2.4.3.　Threshold alerting で SNMP 通知機能を使用する場合の事前準備 10
2.4.4.　Portal を使用する場合の事前準備 12
2.4.5.　SQL Server のインストール 17
2.4.6.　SQL Server ネットワークの構成変更 20
2.4.7.　SQL Server に関する Windows ファイアウォールの規則登録 24
2.4.8.　SQL Server データベース配置フォルダの指定 27
2.4.9.　SQL Server 権限設定の変更 30
2.5.　ウィルスチェックソフトの対象外フォルダ設定 32

第 3 章　インストール 33

3.1.　Control Center の提供媒体 33
3.2.　新規インストール手順 34
3.2.1.　Microsoft .NET Framework 4.7.2 の事前インストール確認 35
3.2.2.　Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール 36
3.2.2.1.　Control Center のインストール 37
3.2.2.2.　Portal のインストール 48
3.2.2.3.　Job Scheduler のインストール 55
3.2.3.　Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成 62
3.2.4.　パフォーマンスデータベース（PDB）の復旧モデルの変更 70
3.2.5.　Control Center の開始 74
3.2.6.　Windows ファイアウォールの規則登録 74
3.3.　同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード手順 77
3.3.1.　Control Center の停止／既存のパフォーマンスデータベース(PDB)のバックアップ 77
3.3.2.　Athene 11.20 のアンインストール 78
3.3.3.　Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール 79
3.3.3.1.　Control Center のインストール 80
3.3.3.2.　Portal のインストール 88
3.3.3.3.　Job Scheduler のインストール 95
3.3.4.　パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレード 102
3.3.5.　Control Center の再開 105

3.4. Portal を使用する場合の権限設定 106
3.5. インストールログ.....109
3.6. アンインストール手順.....109

第 4 章 System Manager の使用方法 110

4.1. ターゲットについて.....110
4.2. System Manager の機能.....111
4.3. System Manager のメイン画面と基本操作 112
4.3.1. System Manager の概要 112
4.3.2. Display パネルの説明.....112
4.3.3. Target Groups の説明 113
4.3.4. 全ターゲットの表示方法.....114
4.3.5. 特定グループに所属するターゲットの表示方法 114
4.3.6. 特定ターゲットの詳細の表示方法.....115
4.3.7. Column Headers の操作.....115
4.3.8. Capture Profile／Collection Profile の表示方法 116
4.3.9. Control Center の詳細情報の表示方法.....117
4.3.10. Control Center イベントログの説明.....117
4.3.11. Threshold Alerts ログの説明.....118
4.4. 基本設定順序.....119
4.4.1. Control Center サービスの一時停止.....119
4.5. Capture Profile の設定.....122
4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定 122
4.5.2. データ収集設定の作成順序.....123
4.5.3. 基本データ用 Capture Profile の設定 124
4.5.4. Oracle データ用 Capture Profile の設定 130
4.5.5. SQL Server データ用 Capture Profile の設定 135
4.5.6. Symfoware データ用 Capture Profile の設定 137
4.6. Collection Profile の設定 139
4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定 139
4.6.2. データ転送設定の作成 140
4.7. Threshold Profile の設定.....145
4.7.1. しきい値設定の作成 145
4.8. 新規ターゲットの定義.....150
4.8.1. 基本データ用ターゲットの作成 150
4.8.1.1. ターゲット作成ウィザードの起動 150
4.8.1.2. Acquire タイプの選択.....151
4.8.1.3. Control Center の指定 154
4.8.1.4. ターゲット名と OS 種類の指定.....155
4.8.1.5. プロファイルの指定.....159
4.8.1.6. 接続方法の指定.....163
4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定 177
4.8.3. データベース用ターゲットの作成.....196

4.8.3.1. Oracle データベース用ターゲット作成手順 196
4.8.3.2. SQL Server データベース用ターゲット作成手順 210
4.8.3.3. Symfoware データベース用ターゲット作成手順 218
4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定 228
4.8.5. Integrator データ用ターゲット作成手順 236
4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定 252
4.9. データ収集／転送／変換処理の開始 262
4.9.1. Control Center の動作環境設定 262
4.9.2. Control Center サービスの開始 265
4.10. 複数ターゲットのグルーピング機能（Groups Editor） 266
4.10.1. Groups Editor の起動とメイン画面 266
4.10.2. グループの構成要素 267
4.10.3. グループの新規作成 268
4.10.4. グループのコピーとペースト 272
4.10.5. グループの編集 273
4.10.6. グループの削除 275
4.10.7. グループ単位での一括設定 277
4.11. 複数ターゲットの同時編集機能（Edit Multiple Targets） 279
4.11.1. Edit Multiple Targets で編集可能な設定項目 279
4.11.2. Edit Multiple Targets の使用方法 279
第 5 章 パフォーマンスデータベース（PDB）の運用 283
5.1. パフォーマンスデータベースの定期メンテナンス 283
5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル 285
5.1.2. パフォーマンスデータベースのバックアップ設定 286
5.1.3. パフォーマンスデータベースの削除設定 287
5.1.4. パフォーマンスデータベースの圧縮設定 303
5.1.5. パフォーマンスデータベースのインデックスの再構築設定 305
5.1.6. 旧バージョンでのパフォーマンスデータベースの削除設定 306
5.2. SQL Server Management Studio によるパフォーマンスデータベースの復元 319
5.3. Data Management による手動でのパフォーマンスデータベースの削除 324
5.3.1. 任意の Period の削除 324
5.3.2. ターゲットの削除 328
5.3.3. パフォーマンスデータベースの削除 331
第 6 章 添付資料 A. Control Center の稼働とエラーメッセージ 334
6.1. はじめに 334
6.2. Control Center の機能 334
6.2.1. 送受信データ 334
6.2.2. Control Center の作業フォルダ 334
6.3. 送信データ（Control Center からターゲットシステム） 334
6.3.1. Capture Profile の送信 334
6.3.2. Capture Profile の欠落や無効による問題 335

6.4. 受信データ（ターゲットシステムから Control Center） 336
6.4.1. Acquire ファイルの命名規則.....336
6.4.2. 受信データのフォルダ.....336
6.4.3. Windows データの受信.....337
6.4.4. Unix／Linux 受信データ.....338
6.5. Control Center ログ.....339
6.5.1. ログファイルの出力場所と名前 339
6.5.2. ログファイルのメンテナンス 339
6.5.3. ログメッセージのフォーマット 339
6.6. ログファイル内のメッセージ.....340
6.6.1. Control Center エラーの種類 340
6.6.2. Control Center エラーの詳細 345
第 7 章 添付資料 B. PuTTY の使用方法..... 356
7.1. はじめに.....356
7.2. PuTTY の導入方法 356
7.3. 鍵の作成と使用方法.....358
7.3.1. 鍵の作成方法 358
7.3.2. 鍵の登録.....361
7.3.3. PuTTY による SSH 接続設定.....363
7.4. PuTTY を System Manager で使用する際の注意点.....367
7.4.1. 公開鍵認証を使用する場合の注意事項 367
7.4.2. ssh サーバのホストキーが変更された場合の対応.....368
第 8 章 添付資料 C. Cygwin を Windows 上で SSH サーバとして使用する方法 371
8.1. サービス登録の設定とサービスの確認方法.....371
8.2. データ収集対象サーバのイベントビューアに出力される情報イベントについて 371

第1章　はじめに

このマニュアルでは、Unix／Linux／Windows システムにおけるパフォーマンスデータの変換／蓄積／管理を行う、ES/1 NEO CS シリーズの「Control Center 12.20」プログラムのセットアップおよび使用方法を説明します。
実際に対象システム上でパフォーマンスデータを収集する Acquire と ES/1 NEO CS シリーズのセットアップに関しては、それぞれ別紙マニュアル「Acquire 使用者の手引き Unix/Linux 編／Windows 編」、「インストールガイド」を参照してください。

本マニュアルは、次の各章で構成されています。

(1)はじめに

(2)インストールの前提条件および事前準備
Control Center を動作させるために必要なハードウェアおよびソフトウェアの推奨構成と、システム管理者が行う事前準備について説明します。

(3)インストール
Control Center およびパフォーマンスデータベース（PDB）のインストール手順をケースに分けて説明します。
・新規インストール
・同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード

(4)System Manager の使用方法
Control Center は対象システムからデータを収集し、パフォーマンスデータベース（PDB）へ格納します。Control Center 製品群の中で System Manager が対象システムの設定などを行います。メイン機能となる System Manager の使用方法について説明します。

(5)パフォーマンスデータベース（PDB）の運用
パフォーマンスデータベース（PDB）のバックアップ／削除などの運用について説明します。

(6)添付資料 A. Control Center の稼働とエラーメッセージ
参考資料として、Control Center のデータ転送動作の概要とエラーメッセージの一部について記載しています。

(7)添付資料 B. PuTTY の使用方法
参考資料として、Control Center がサポートしている SSH クライアント「PuTTY」のインストール手順および鍵の作成方法について記載しています。

(8)添付資料 C. Cygwin を Windows 上で SSH サーバとして使用する方法
参考資料として、Windows ターゲットにて SSH サーバを起動する方法の例を記載しています。

第2章　インストールの前提条件および事前準備

Control Center をインストールする管理用マシンは、以下の前提条件を満たしていることが必要です。プロトコルなどがインストールされていない場合は、事前にインストールしてください。

・2.1. ハードウェア要件
・2.2. ソフトウェア要件
・2.3. その他の要件
・2.4. システム管理者による事前準備
・2.5. ウィルスチェックソフトの対象外フォルダ設定

2.1. ハードウェア要件

(1)CPU

3GHz 以上の処理能力を持つ CPU で、4 コア以上（3GHz×4＝12GHz）を推奨
（IA-64 タイプの CPU には対応していません）

Control Center はマルチ CPU 構成に適した製品となっています。管理対象システム数が多い大規模環境の場合はマルチ CPU 構成を推奨します。使用する SQL Server の Edition によって、サポート可能な CPU の最大数が異なります。

【推奨 CPU 構成】

SQL Server の Edition	最大 CPU 数	コア数
Enterprise	OS がサポートする最大数	クアッドコア以上
Standard	4 ソケットまたは 24 コアの いずれか小さいほうに制限	クアッドコア以上

(2)メモリ

16GB 以上

(3)HDD

①システムドライブに 10GB 以上の空き領域

Control Center およびデータベースソフトウェアとして使用する SQL Server は、Microsoft .NET Framework 4.7.2 等の Windows コンポーネントの導入を必要とします。そのため、システムドライブ（通常 C ドライブ）に 10GB 以上の空き領域が必要となります。

②データ格納用として 500GB 以上の領域

データ格納領域はローカルディスクドライブ（SAN ストレージなどを含む）が必要です。

大規模なデータベースの場合は、PDB（CMIS）を SSD またはフラッシュストレージに配置することを推奨します。

注意！

Integrator によって外部データを取り込むターゲットが多い場合は、上記よりもさらにリソースが必要となります。

(4)ファイルシステム

NTFS (SQL Server の動作環境制限により、Windows のドライブ圧縮機能は使用できません)

(5)周辺装置

19 インチ 1280*1024 解像度 65536 色以上表示可能なモニター

Ethernet ネットワークカード

キーボード

マウス

注意！

VMware ハイパーバイザー上の仮想マシンでご使用の場合は、ControlCenter がインストールされたゲスト OS に充分な資源が割り当てられるように設定してください。仮想マシン環境での使用についてご不明な点は弊社担当 SE までご相談ください。

なお、VMware 以外の仮想マシンでの動作は保証外となります。

2.2. ソフトウェア要件

(1)OS

OS については、「サポート環境」の「ES/1 管理用マシン－OS」をご参照ください。

注意！
Control Center は 64-bit アプリケーションです。32-bit 環境では動作しません。

(2)データベースソフトウェア

データベースソフトウェアについては、「サポート環境」の「ES/1 管理用マシン－SQL Server」をご参照ください。

注意！
SQL Server と Control Center は同一のサーバにインストールします。複数の Control Center の構成とする場合は、それぞれのサーバに Control Center と SQL Server の導入が必要です。

(3)必要な Windows コンポーネント/ランタイムライブラリ

Control Center は、以下の Windows コンポーネントが必要となります。

【Control Center】
・Microsoft .NET Framework 4.7.2 または 4.8

注意！
(1) Windows Server 2022 の場合
Microsoft .NET Framework 4.8 がインストールされています。

(2) Windows Server 2019 の場合
Microsoft .NET Framework 4.7.2 がインストールされています。

(3) Windows Server 2016 の場合
Microsoft .NET Framework 4.7.2 をインストールしてください。

【Portal を使用する場合に必要な IIS バージョン】
・IIS 10

【Portal がサポートしている Web ブラウザ】
・Microsoft Edge
・Google Chrome

(4)通信環境

Acquire をインストールした対象システムとの間でファイル転送を行うために、以下の通信機能のいずれかが使用可能であることが必要です。
Control Center はクライアントとして、Acquire ターゲットのサーバに接続します。

・FTP
・SSH（SFTP）※
・ファイル共有（Windows。SMBv3 暗号化環境も含む）

※Control Center で SSH 機能(SFTP)を使用する場合は、下記①②③の条件を満たしている必要があります。

①接続の確立
Control Center と Acquire をインストールした対象システムとの間で、SFTP 接続が常時可能な状態であることが必要です。

②認証方法
クライアントーサーバ間の認証に、以下のいずれかを使用する必要があります。
・パスワード認証
・公開鍵（空パスフレーズ許可）認証
・公開鍵（パスフレーズ使用）認証

③SSH クライアント
Control Center がサポートしている下記の SSH クライアントを使用している必要があります。
・PuTTY バージョン：0.60/0.65/0.66/0.70/0.72
(http://www.chiark.greenend.org.uk/~sgtatham/putty/)

2.3. その他の要件

(1)ES/1 管理用マシンの他用途との併用

管理用マシンは ES/1 専用機として運用してください。他用途との併用は予期せぬ問題を引き起こす可能性があります。

(2)ES/1 管理用マシンで使用するユーザ

データ収集対象サーバと Control Center の間の通信に PuTTY を使用する場合は、ES/1 管理用マシンにおける次のユーザは同一ユーザを使用する必要があります。

・ES/1 管理用マシンの構築作業時のログオンユーザ
・CS シリーズ導入後の各種設定変更作業時のログオンユーザ
・Control Center サービスの実行ユーザ ※1

※1 PuTTY を使用する場合は、ローカルシステムアカウントは使用できません。

(3)システムロケールの設定

ES/1 管理用マシンの OS（Windows Server）のシステムロケールは「日本語（日本）」に設定されている必要があります。

(4)Integrator 機能が処理対象とするテキストファイルの文字コード

Integrator 機能を使用する場合、入力データとなるテキストファイルは、UTF-8 の文字コードであることが必要です。

2.4. システム管理者による事前準備

2.4.1. Control Center 専用ユーザの作成

以下の理由により、Control Center のインストールおよび運用において、ローカルまたはドメインの Administrators グループの権限を所有するユーザを必要とします。

(1)Control Center のインストーラはレジストリへの情報登録や Control Center サービスの登録を行うため、インストール時にはローカルまたはドメインの Administrators グループの権限を所有するユーザにて対象システムにログオンする必要があります。

(2)Control Center は、データベースソフトウェアとして SQL Server を使用します。Control Center の各アプリケーションは SQL Server と接続し、直接パフォーマンスデータベース（PDB）にアクセスします。SQL Server への接続とデータベース操作を行える権限を持つユーザが必要となります。

下記の条件にて Control Center 専用ユーザを用意してください。

ユーザ名　　：任意の名前
所属グループ：ローカルまたはドメインの Administrators

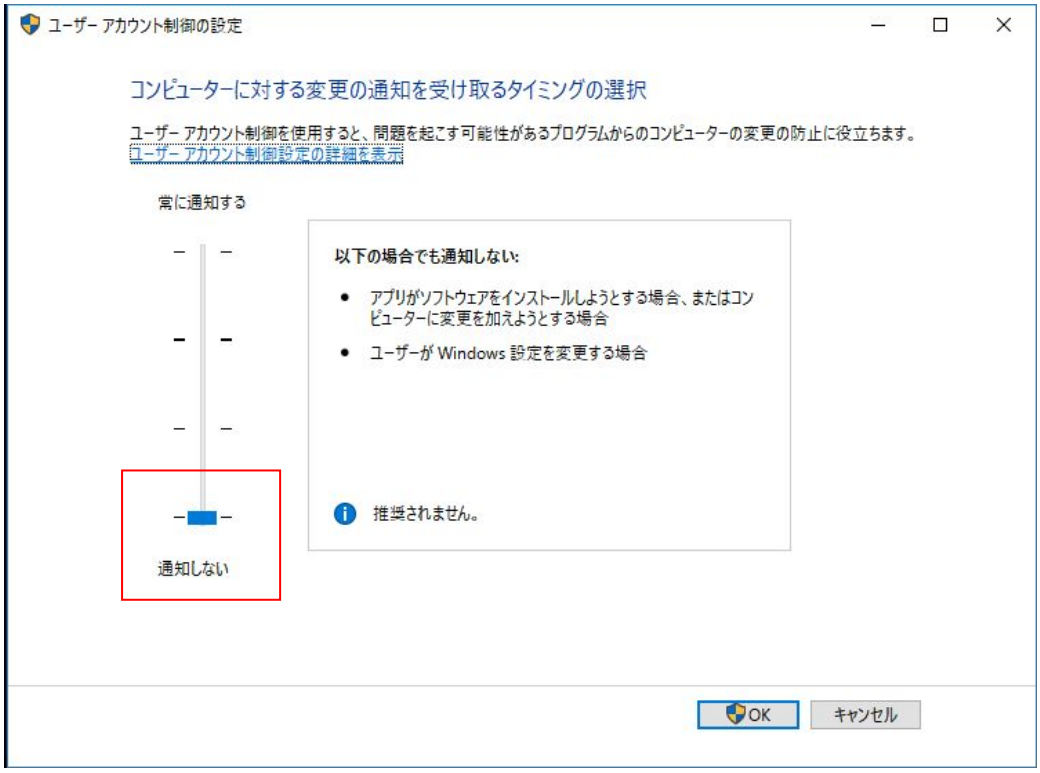
2.4.2. ユーザーアカウント制御（UAC）の設定

「2.4.1. Control Center 専用ユーザの作成」で作成したユーザで Control Center 製品群を使用するために、Control Center 専用ユーザでログオンした後、以下の設定を行います。

・ユーザーアカウント制御（UAC）の設定
・タスクスケジューラの設定

なお、UAC が有効になっていると、設定中に UAC による起動のブロック画面が表示される場合がありますが、[続行]ボタンをクリックして作業を進めてください。

(1)ユーザーアカウント制御（UAC）の設定
①「コントロールパネル」を開き、「ユーザーアカウント」を選択します。
②「ユーザーアカウント」画面で「ユーザーアカウント」を選択します。
③「ユーザーアカウント制御設定の変更」を選択します。
④「ユーザーアカウント制御の設定」画面にあるスライダーのサムを一番下に下げ、「通知しない」に設定し、UAC を無効にします。
⑤[OK]ボタンをクリックして終了します。
⑥OS を再起動します。



(2)ユーザアカウント制御(UAC)無効化設定後の確認

①スタートメニューより「Windows 管理ツール」を開き、「ローカルセキュリティポリシー」を選択します。
②「セキュリティの設定」から「ローカルポリシー」を選択し、「セキュリティオプション」を開きます。
③「セキュリティオプション」画面右側のリスト内に表示される「ユーザーアカウント制御: 管理者承認モードですべての管理者を実行する」が「無効」となっている事を確認します。
④「有効」になっている場合は「無効」に変更してください。
⑤設定の変更を行った場合は、Windows を再起動してください。

※「ユーザーアカウント制御: 管理者承認モードですべての管理者を実行する」を無効化した際、サーバ起動時に下記のエラーがイベントログに記録される場合があります。
本エラーが発生しても、CS シリーズ動作上問題はありません。

(例)

ログの名前	:System
ソース	:Service Control Manager
日付	:YYYY/MM/DD HH:MM:SS
イベント ID	:7000
タスクのカテゴリ	:なし
レベル	:エラー
キーワード	:クラシック
ユーザー	:N/A
コンピューター	:<ホスト名>

【説明】
UAC File Virtualization サービスを、次のエラーが原因で開始できませんでした:
このドライバーの読み込みはブロックされています。

(3)タスクスケジューラの設定

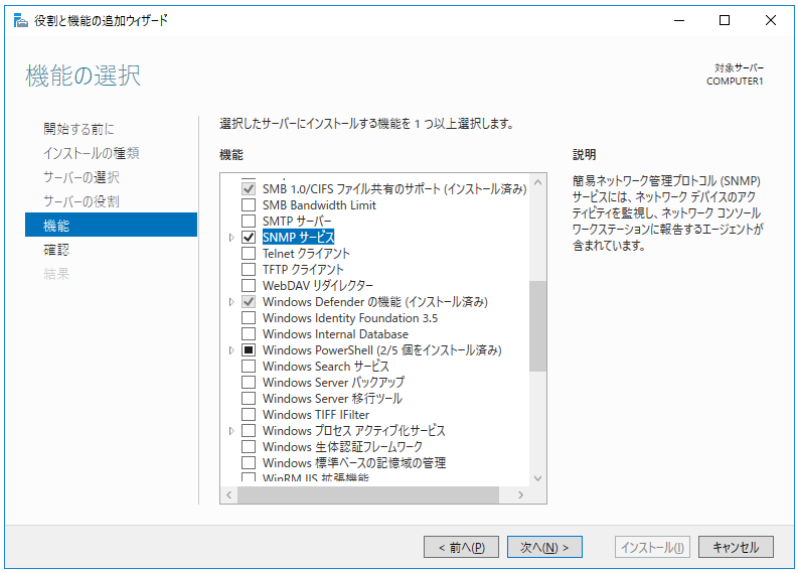
タスクスケジューラを使用して、Control Center 製品群に関連するプログラムやバッチファイルをログオフ状態で実行する場合に必要です。

①タスクスケジューラに登録したタスクのプロパティを開きます。
②「セキュリティオプション」欄にて「ユーザーがログオンしているかどうかにかかわらず実行する」を選択します。
③「セキュリティオプション」欄にて「最上位の特権で実行する」をチェックします。
④[OK]ボタンをクリックします。
⑤タスクを実行するユーザーアカウント情報を入力する画面が表示される場合があります。この場合はパスワードを入力してください。パスワードが設定されていないユーザーアカウントの場合、タスクの登録でエラーとなる場合があります。

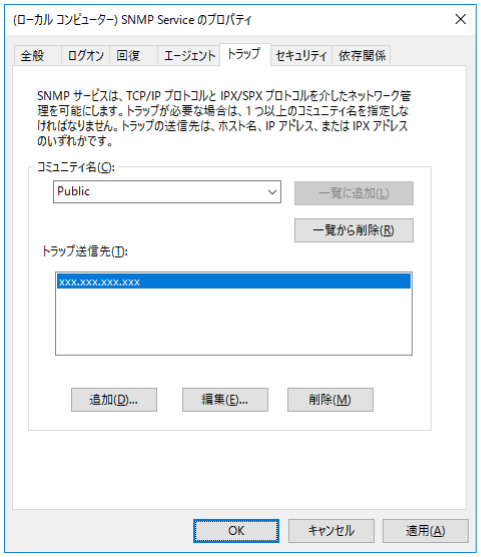
2.4.3. Threshold alerting で SNMP 通知機能を使用する場合の事前準備

Control Cneter のしきい値検知機能 Threshold alerting で SNMP 通知を使用する場合、Windows SNMP サービスをインストールします。

(1)「サーバーマネージャー－役割と機能の追加（または、機能の追加）」にて、SNMP サービスをインストールします。



(2)「サーバーマネージャー－ツール－サービス」にて、SNMP サービスを設定し、コミュニティ名とトラップ送信先を設定します。



(3)SNMP サービスの状態が実行中であることを確認します。

(4)下記の SNMP.reg ファイルを実行します。
セットアップメディアの「x:¥12.20CC01¥Threshold Alerting¥SNMP.reg」ファイル

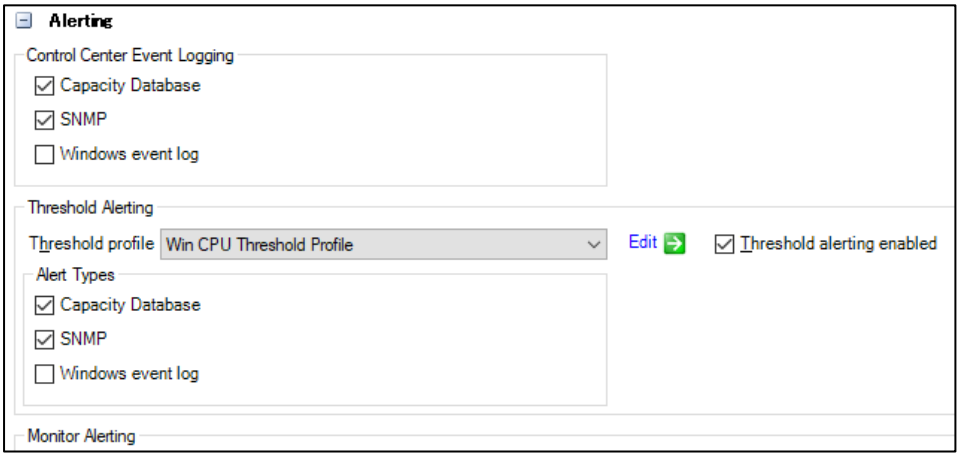
```
Windows Registry Editor Version 5.00

[HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥ControlSet001¥services¥SNMP¥Parameters¥ExtensionAgents]
"Syncsort Capacity Management Alerter"="SOFTWARE¥¥Metron¥¥Syncsort Capacity
Management Alerter¥¥CurrentVersion"

[HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Metron¥Syncsort Capacity Management
```

(5)Syncsort Capacity Management Control Center サービスを再起動します。

(6)System Manager で、アラートを生成するターゲットの SNMP アラートをチェックします。



2.4.4. Portal を使用する場合の事前準備

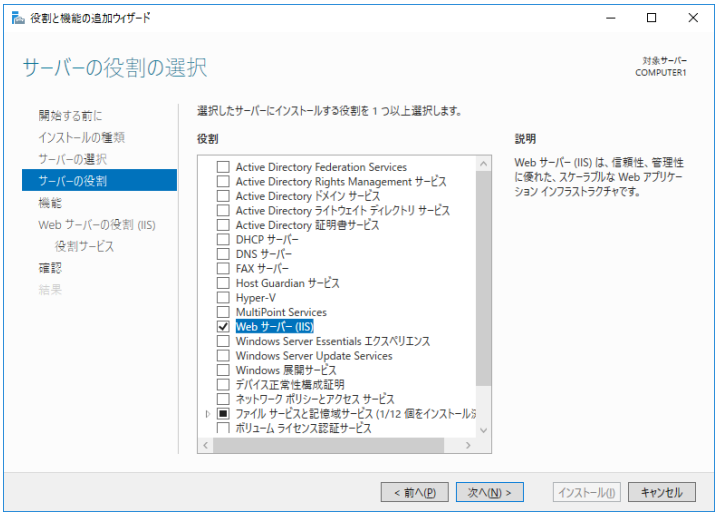
Portal を使用する場合、以下を事前に設定します。

(1)IIS のインストール

Portal を使用する場合、以下の追加項目がインストールされている必要があります。

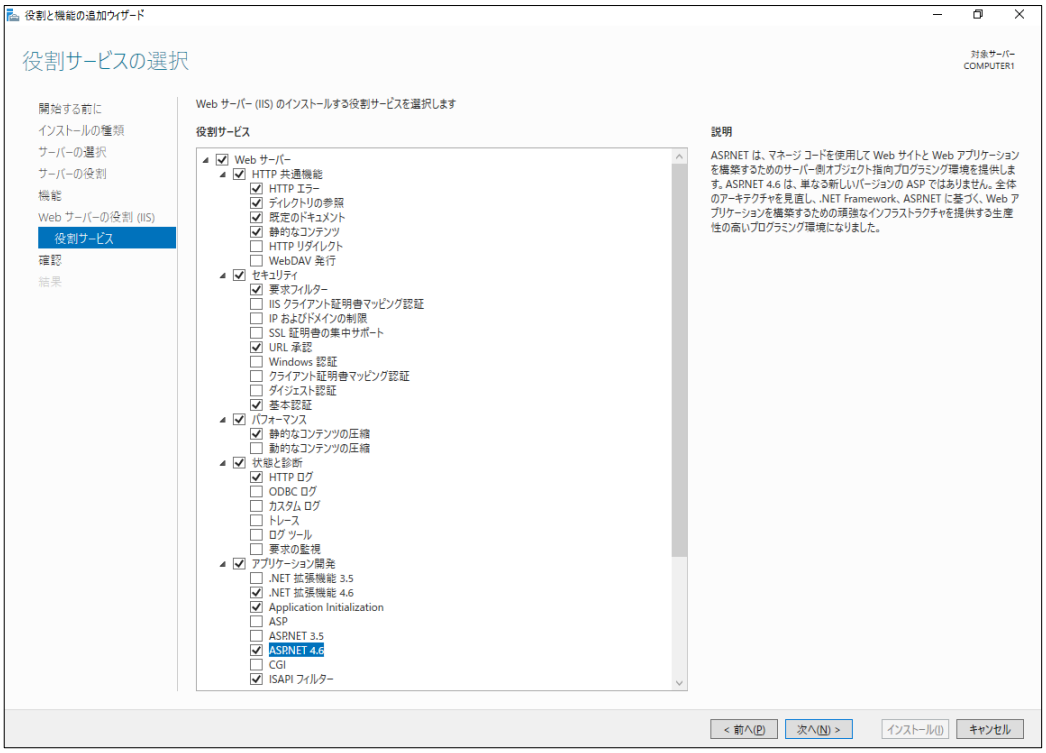
Internet Information Services version 10
- 基本認証
- URL 承認
- Application Initialization
- 静的なコンテンツ
- ASP.NET
- NET 拡張性
- ISAPI 拡張
- ISAPI フィルター

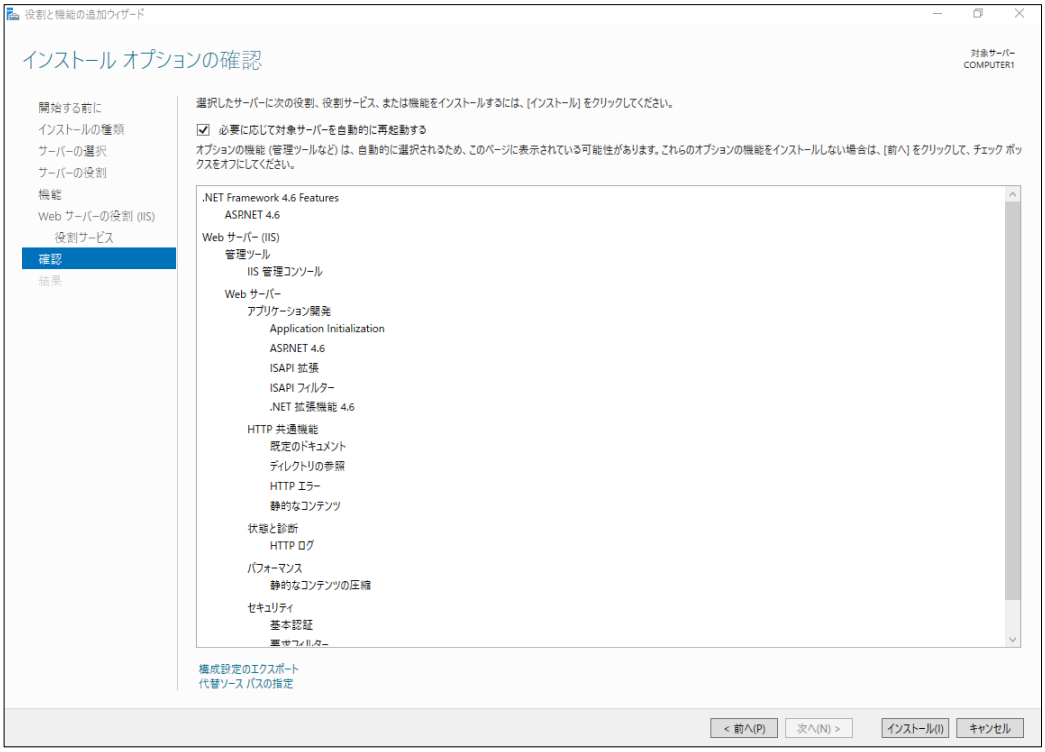
「サーバーマネージャー－役割と機能の追加」にて、Web サーバー（IIS）を選択します。



役割サービスの選択では、以下のサービスを選択してインストールします。
注意：デフォルトで選択されているオプションのチェックを外さないでください。

HTTP 共通機能	：静的なコンテンツ
セキュリティ	：URL 承認
	：基本認証
アプリケーション開発	：.NET 拡張機能 4.6 または 4.7 または 4.8
	：Application Initialization
	：ASP.NET 4.6 または 4.7 または 4.8 ※選択可能な高いバージョンを選択してください
	：ISAPI フィルター
	：ISAPI 拡張

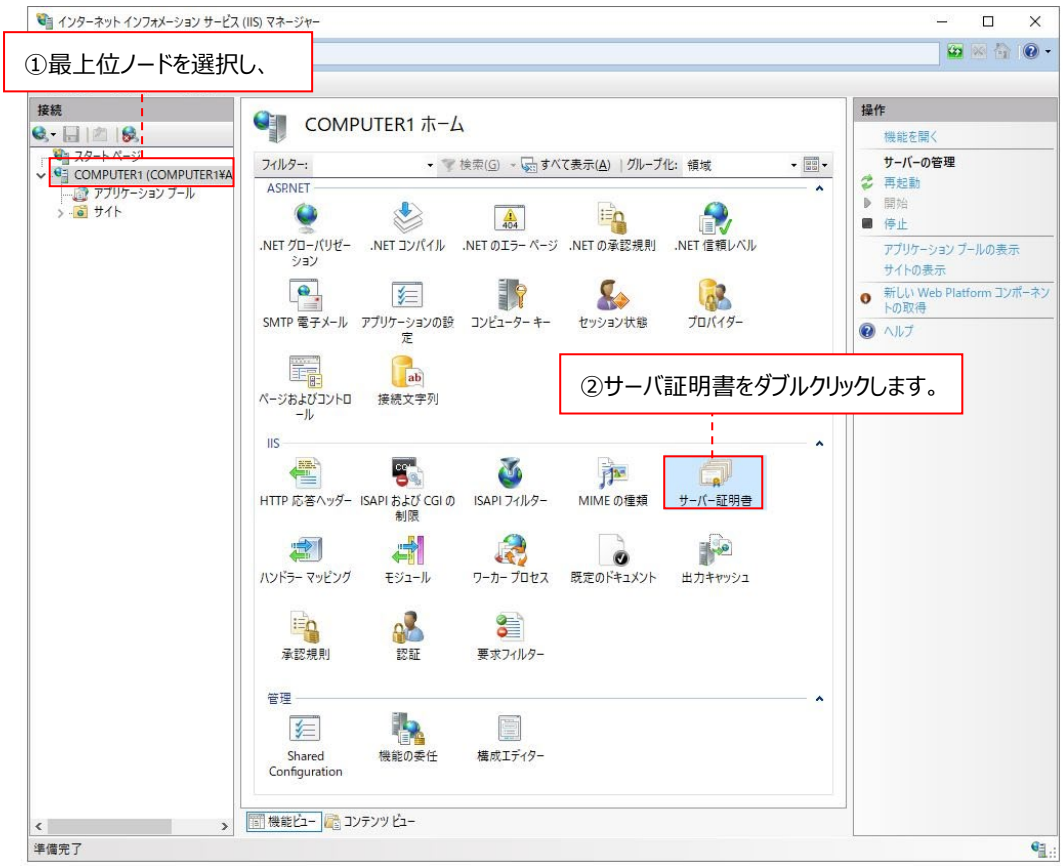

役割と機能の追加ウィザード
役割サービスの選択
対象サーバー
COMPUTER1
開始する前に
インストールの種類
サーバーの選択
サーバーの役割
機能
Web サーバーの役割 (IIS)
役割サービス
確認
結果
Web サーバー (IIS) のインストールする役割サービスを選択します
役割サービス
Web サーバー
HTTP 共通機能
HTTP エラー
ディレクトリの参照
既定のドキュメント
静的なコンテンツ
HTTP リダイレクト
WebDAV 発行
セキュリティ
要求フィルター
IIS クライアント証明書マッピング認証
IP およびドメインの制限
SSL 証明書の集中サポート
URL 承認
Windows 認証
クライアント証明書マッピング認証
ダイジェスト認証
基本認証
パフォーマンス
静的なコンテンツの圧縮
動的なコンテンツの圧縮
状態と診断
HTTP ログ
ODBC ログ
カスタム ログ
トレース
ログ ツール
要求の監視
アプリケーション開発
.NET 拡張機能 3.5
.NET 拡張機能 4.6
Application Initialization
ASP
ASPNET 3.5
ASPNET 4.6
CGI
ISAPI フィルター
説明
ASPNET は、マネージ コードを使用して Web サイトと Web アプリケーションを構築するためのサーバー側オブジェクト指向プログラミング環境を提供します。ASPNET 4.6 は、単なる新しいバージョンの ASP ではありません。全体のアーキテクチャを見直し、.NET Framework、ASPNET に基づく、Web アプリケーションを構築するための頑強なインフラストラクチャを提供する生産性の高いプログラミング環境になりました。
< 前へ(P)
次へ(N) >
インストール(I)
キャンセル


役割と機能の追加ウィザード
インストール オプションの確認
対象サーバー
COMPUTER1
開始する前に
インストールの種類
サーバーの選択
サーバーの役割
機能
Web サーバーの役割 (IIS)
役割サービス
確認
結果
選択したサーバーに次の役割、役割サービス、または機能をインストールするには、[インストール] をクリックしてください。
必要に応じて対象サーバーを自動的に再起動する
オプションの機能 (管理ツールなど) は、自動的に選択されるため、このページに表示されている可能性があります。これらのオプションの機能をインストールしない場合は、[前へ] をクリックして、チェック ボックスをオフにしてください。
.NET Framework 4.6 Features
ASPNET 4.6
Web サーバー (IIS)
管理ツール
IIS 管理コンソール
Web サーバー
アプリケーション開発
Application Initialization
ASPNET 4.6
ISAPI 拡張
ISAPI フィルター
.NET 拡張機能 4.6
HTTP 共通機能
既定のドキュメント
ディレクトリの参照
HTTP エラー
静的なコンテンツ
状態と診断
HTTP ログ
パフォーマンス
静的なコンテンツの圧縮
セキュリティ
基本認証
構成設定のエクスポート
代替ソース パスの指定
< 前へ(P)
次へ(N) >
インストール(I)
キャンセル

(2)自己署名入り証明書の作成

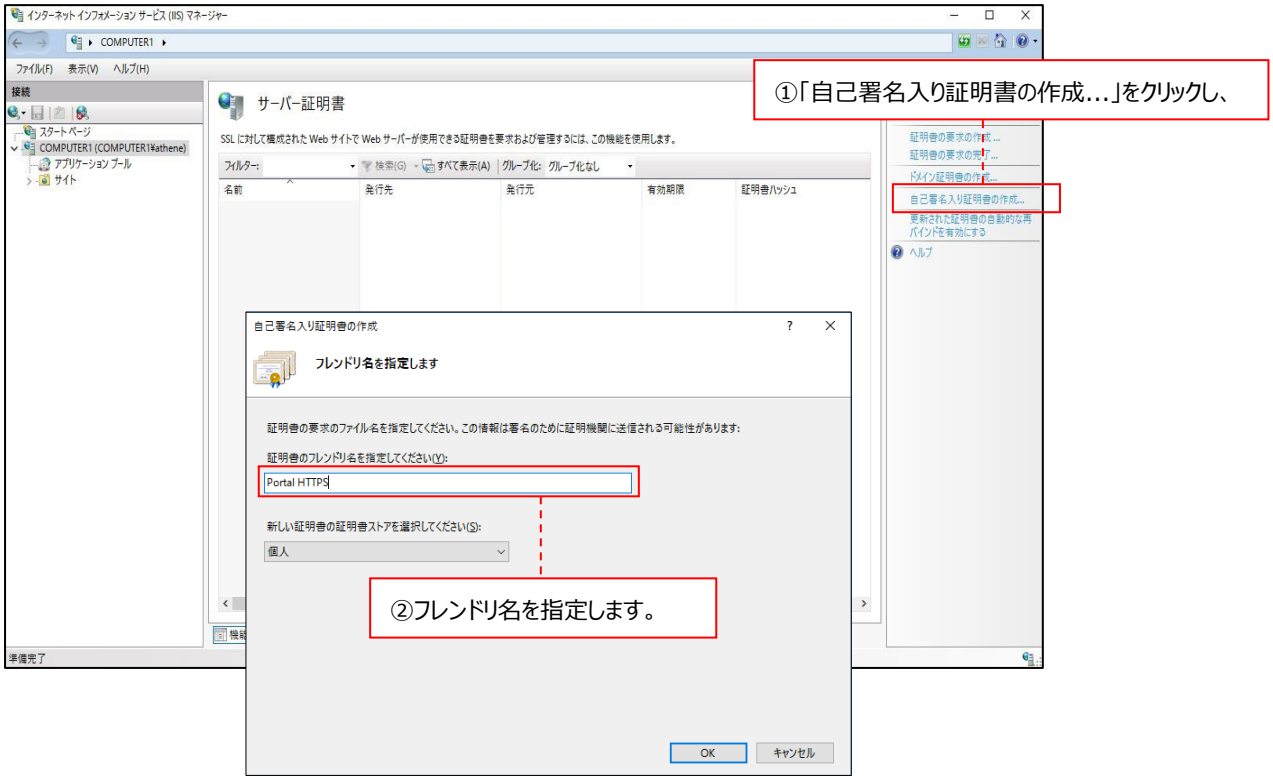
SSL サーバ証明書がある場合は、自己署名入り証明書の作成は不要です。

「サーバーマネージャー－ツール」にて、インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャーを起動します。

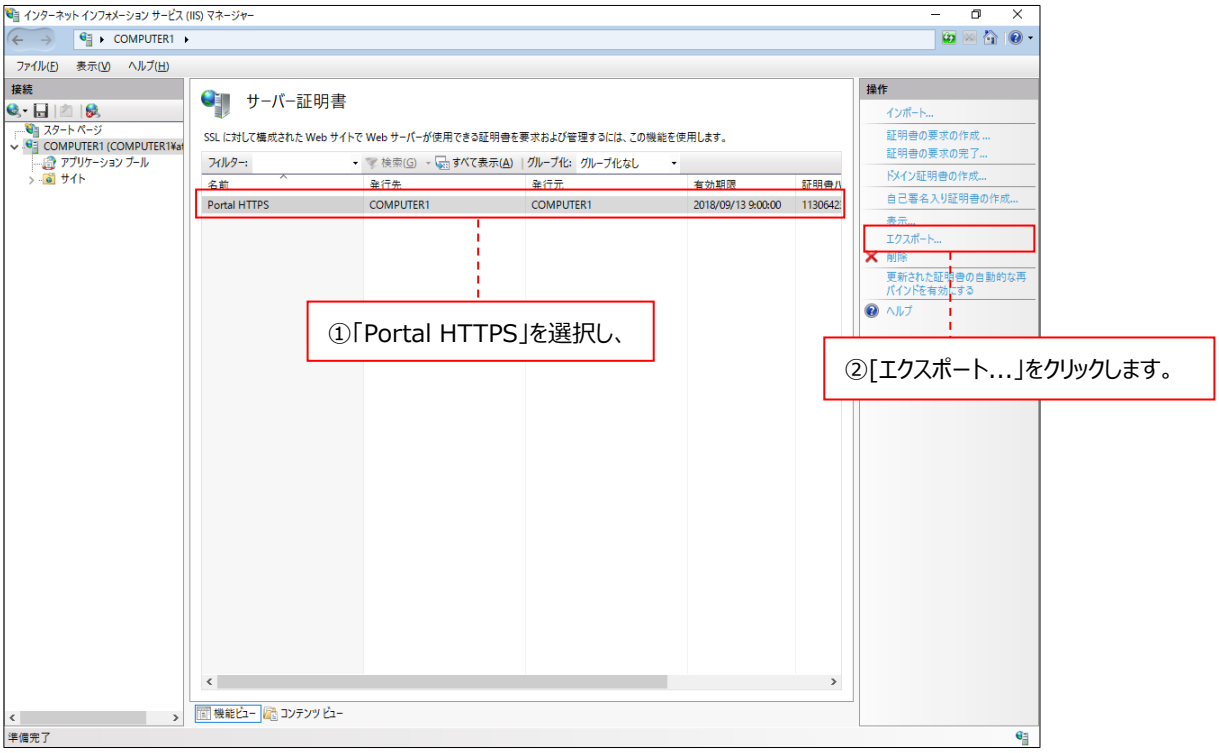


左の接続パネルの最上位ノード（マシン名を指定する場所）を選択し①、IIS の下にある「サーバー証明書」をダブルクリックします②。

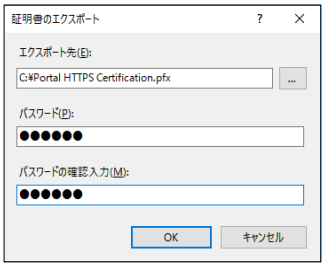
メインパネルがサーバ証明書に切り替わったら、右側の「自己署名入り証明書の作成…」をクリックし①、証明書のフレンドリ名を指定し（例 Portal HTTPS）②、[OK]をクリックします。



作成した「Portal HTTPS」エントリを選択し①、右の操作パネルの「エクスポート…」をクリックします②。



[証明書のエクスポート]ダイアログで、証明書のエクスポート先と名前を設定し（例 C:¥Portal HTTPS Certificate.pfx）、パスワードを設定し、[OK]をクリックします。



インターネット インフォメーション サービス（IIS）マネージャーを閉じます。

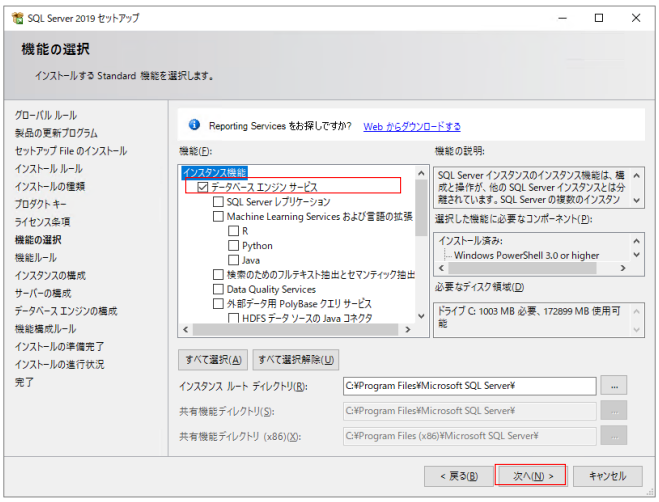
2.4.5. SQL Server のインストール

「2.2. ソフトウェア要件(2)データベースソフトウェア」にある SQL Server を事前にインストールします。既に旧バージョン 11.20 の Control Center を使用していて、バージョン 12.20 の Control Center がサポートする SQL Server がインストールされている環境の場合は不要です。SQL Server のインストールに際しては、下記について留意してください。

・データベースエンジンサービスのインストール
・SQL Server の照合順序設定
・SQL Server 権限設定の変更
・管理ツール(SQL Server Management Studio)のインストール
・SQL Server 2012 Native Client のインストール

(1)データベースエンジンサービスのインストール

「SQL Server インストール センター」画面で、「SQL Server の新規スタンドアロン インストールを実行するか、既存のインストールに機能を追加」をクリックします。

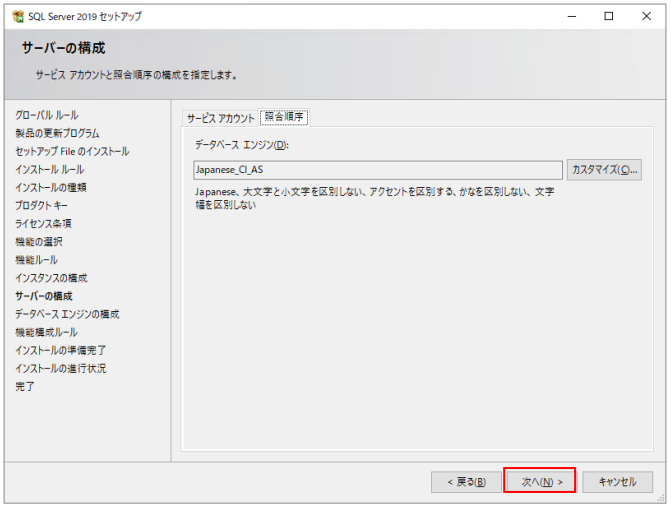


上の「機能の選択」画面で、「データベースエンジンサービス」を選択し、[次へ(N)]をクリックします。

(2)SQL Server の照合順序設定

Control Center および関連する ES/1 NEO CS シリーズ製品は、SQL Server の照合順序が「Japanese_CI_AS」に設定されていることを前提とします。SQL Server のインストーラにおける照合順序に関するデフォルトは、「Japanese_CI_AS」となっていますので、基本的に変更する必要はありません。

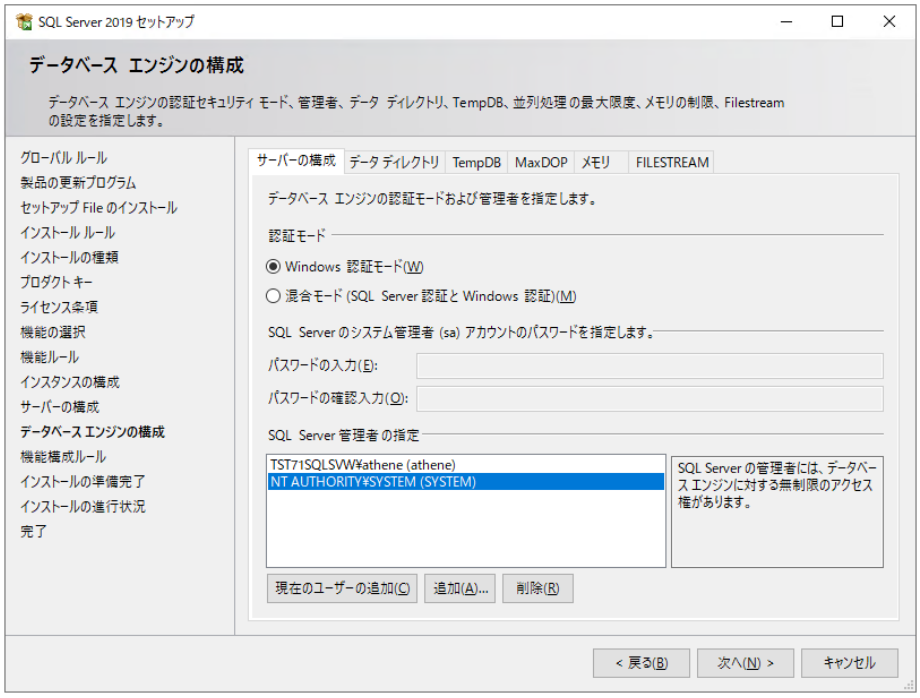
例として、SQL Server 2019 の照合順序に関するインストーラ画面を紹介します。
正式なインストール方法につきましては、Microsoft 社のドキュメントを参照してください。



上の「サーバーの構成 – 照合順序」画面で、初期表示のまま何も変更せずに、[次へ(N)]をクリックします。

(3)SQL Server 権限設定の変更

「データベース エンジンの構成 – サーバーの構成」画面で権限設定を行ってください。
SQL Server 管理者に「NT AUTHORITY¥SYSTEM」を登録します。



(4)SQL Server Management Studio のインストール

下記より SSMS-Setup-JPN.exe をダウンロードしてインストールします。

https://docs.microsoft.com/ja-jp/sql/ssms/download-sql-server-management-studio-ssms

(5)SQL Server 2012 Native Client のインストール

以下の条件を満たす場合、SQL Server 2012 Native Client が必要です。

（条件） ・Control Center 12.20 を新規にインストールする かつ

・Control Center 12.20 のデータベースとして、SQL Server 2022 を使用する

（理由） SQL Server 2022 から SQL Server Native Client がインストールされないため

下記より SQL Server 2012 Native Client をダウンロードしてインストールします。

https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=50402

2.4.6. SQL Server ネットワークの構成変更

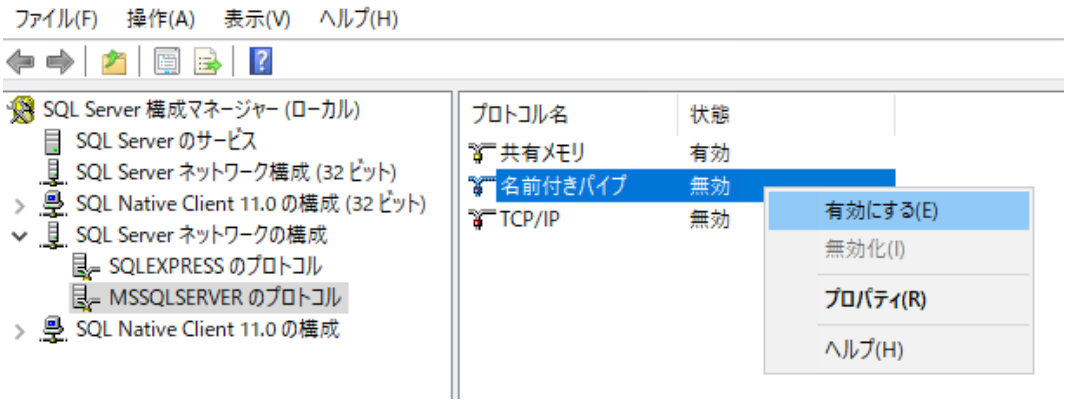
SQL Server をインストールした後、「SQL Server ネットワークの構成」にて以下の設定を行う必要があります。

・名前付きパイププロトコルの有効化
・TCP/IP プロトコルの有効化
・TCP/IP プロトコルの TCP ポートの設定

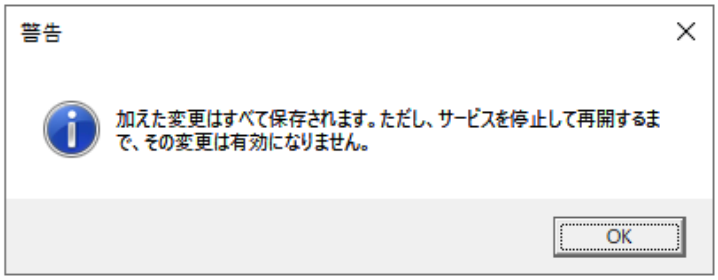
使用している SQL Server のバージョンに応じた「SQL Server 構成マネージャー」にて設定を行ってください。
ここでは、例として SQL Server 2019 における設定手順を紹介します。
(SQL Server 2019/2017/2016 の構成マネージャーの画面に大きな差はありません)

(1)「スタート」→「アプリ」→「Microsoft SQL Server 2019」→「SQL Server 2019 構成マネージャー」を起動します。

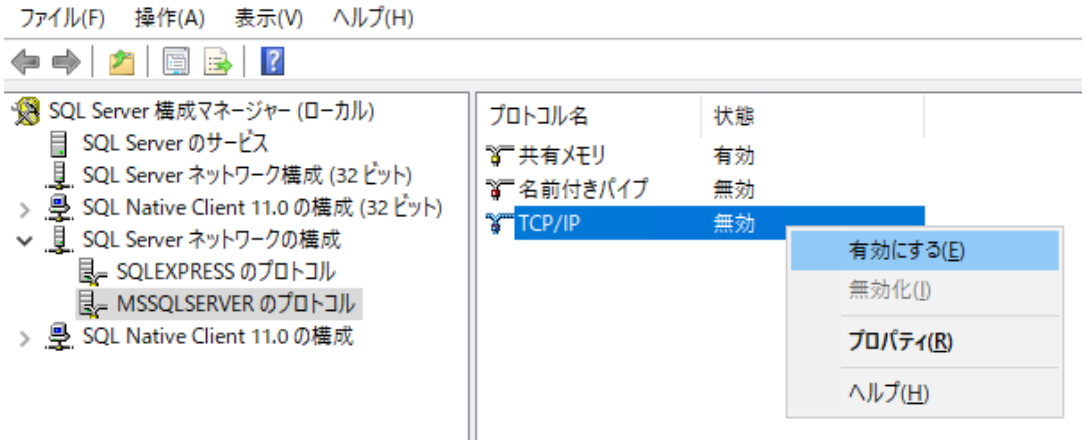
(2)下図のように「SQL Server ネットワークの構成」→「＜インスタンス名＞のプロトコル」→「Named Pipes」または「名前付きパイプ」→右クリック→「有効にする(E)」を選択します。



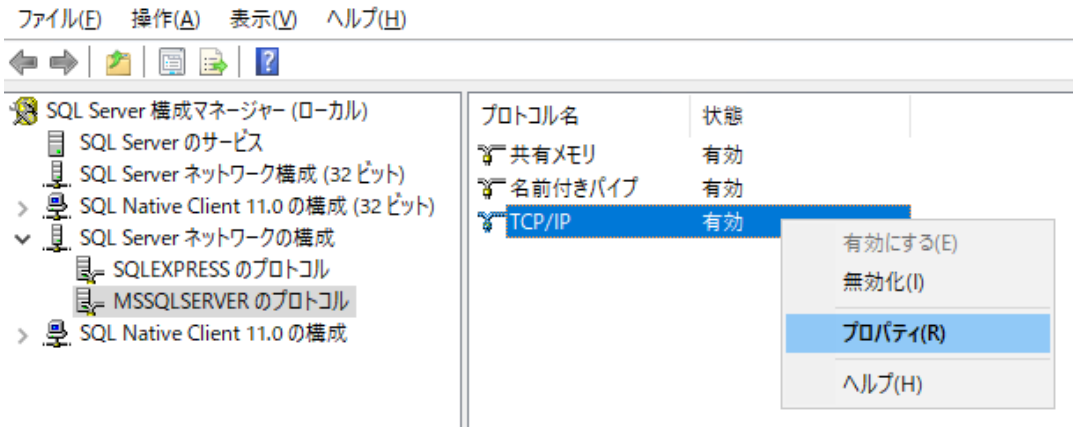
(3)以下のメッセージボックスが表示されますので、［OK］をクリックします。



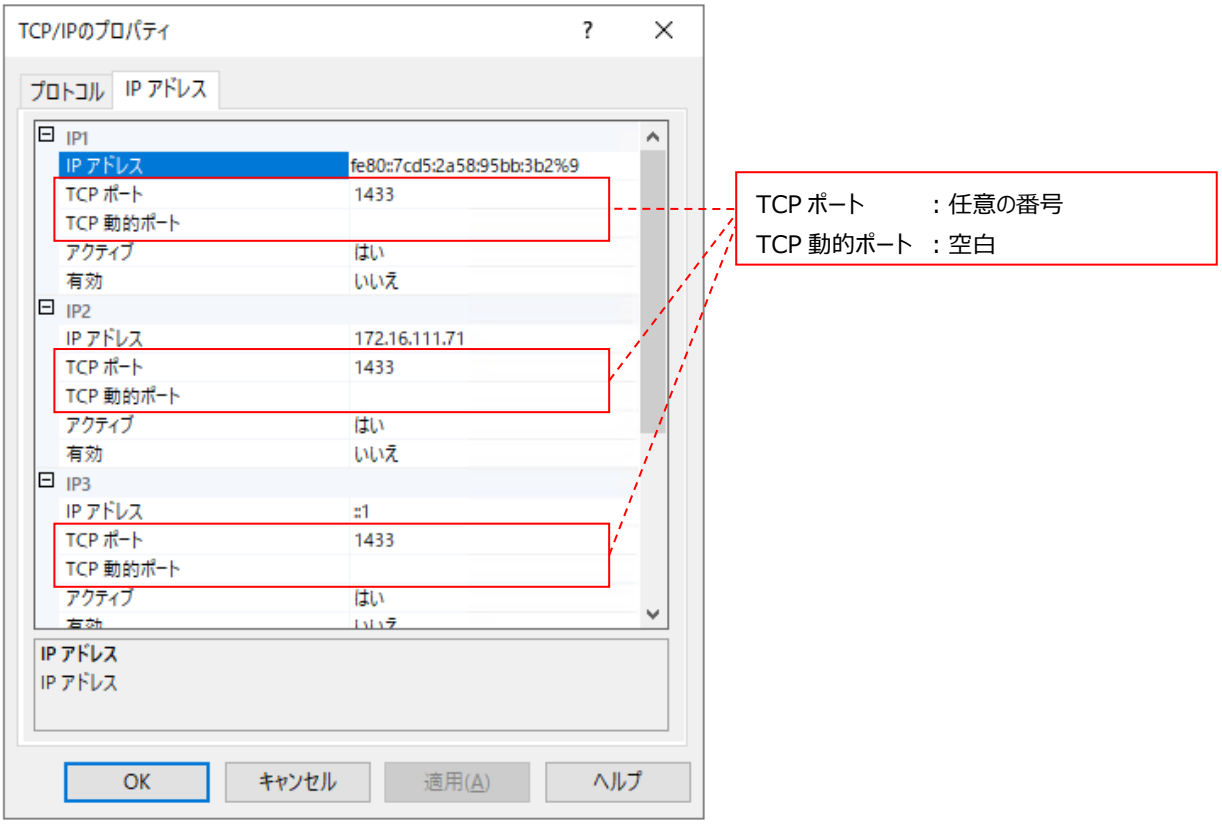
(4)もし、TCP/IP プロトコルが無効状態になっているならば、下図のように「SQL Server ネットワークの構成」→「＜インスタンス名＞のプロトコル」→「TCP/IP」→右クリック→「有効にする(E)」を選択します。



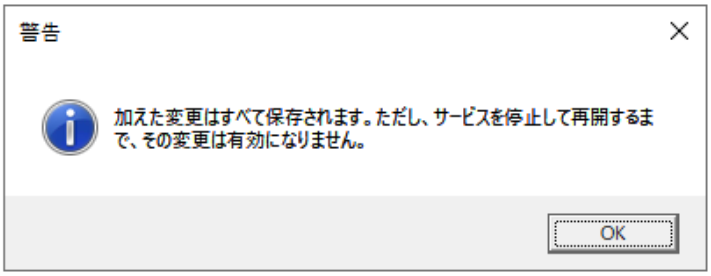
(5)次に「SQL Server ネットワークの構成」→「＜インスタンス名＞のプロトコル」→「TCP/IP」→右クリック→「プロパティ(R)」を選択します。



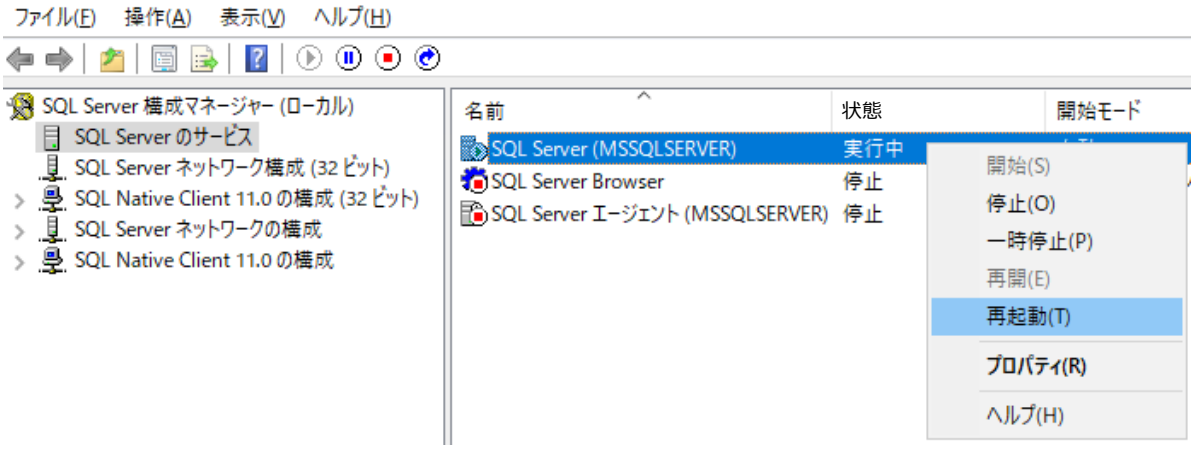
(6)「TCP/IP のプロパティ」画面→「IP アドレス」タブを選択した後、すべての IP 設定欄において、下図のように「TCP Port」または「TCP ポート」には任意のポート番号（標準では 1433）を指定し、「TCP Dynamics Ports」または「TCP 動的ポート」は空白の状態に設定します。
設定が終了したら[OK]ボタンをクリックします。



(7)以下のメッセージボックスが表示されますので、［OK］ボタンをクリックします。



(8)下図のように「SQL Server のサービス」→「SQL Server (インスタンス名)」→右クリック→「再起動(T)」を選択します。

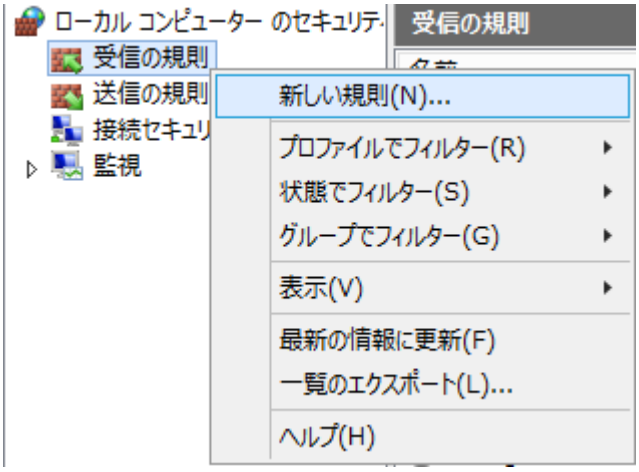


2.4.7. SQL Server に関する Windows ファイアウォールの規則登録

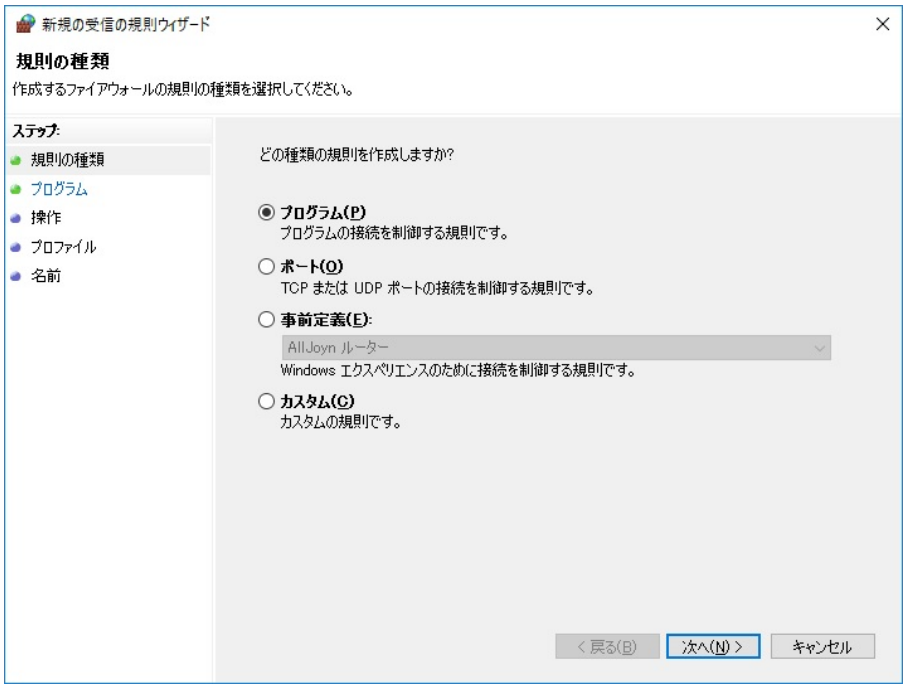
Control Center はデータベースソフトウェアとして使用する SQL Server と通信するため、管理用マシン上で SQL Server へのアクセスが許可されている必要があります。
管理用マシンの Windows ファイアウォールが有効になっている環境では、ファイアウォールによって SQL Server との通信がブロックされる場合があります。
ここでは、Windows ファイアウォールの規則に SQL Server を登録する手順を説明します。

(1)「コントロールパネル」→「セキュリティが強化された Windows ファイアウォール」を起動します。

(2)画面左側の「受信の規則」を右クリックし、[新しい規則(N)...]をクリックします。

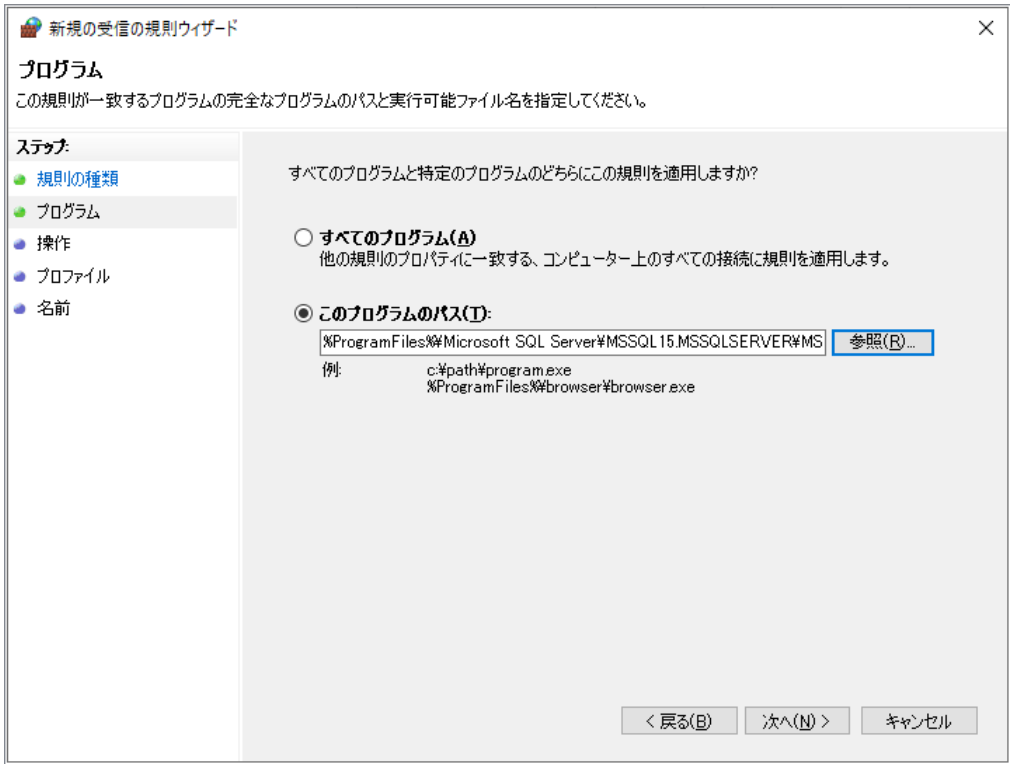


(3)「規則の種類」メニューで「プログラム(P)」を選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。

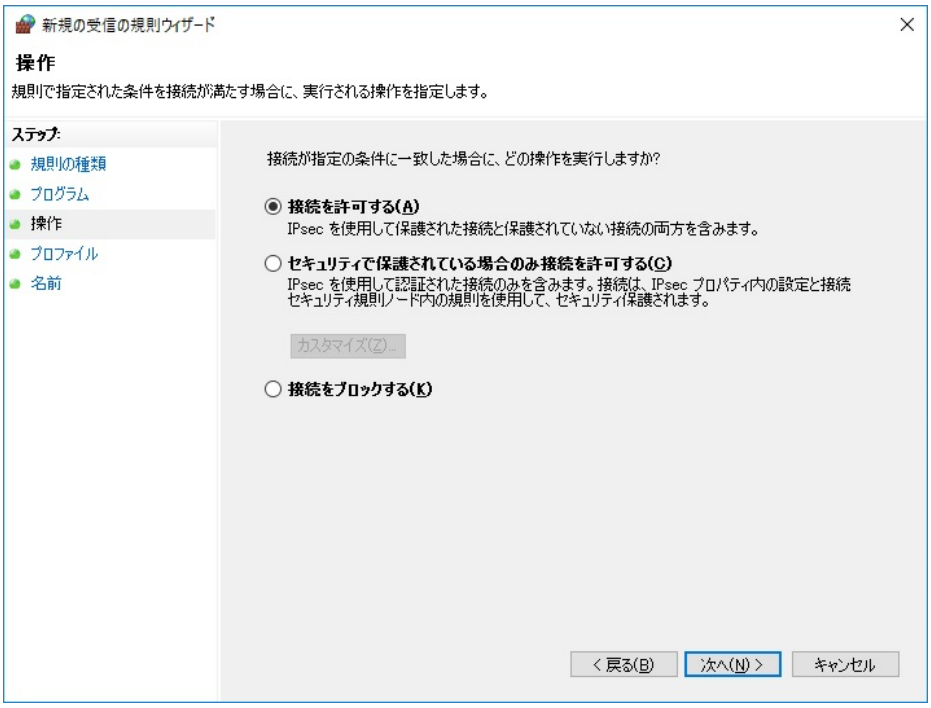


(4)「プログラム」メニューの「このプログラムのパス(T):」にて[参照(R)...]をクリックし、管理用マシンにインストールされている SQL Server のバージョンに応じた「sqlservr.exe」のパスを選択した後、[次へ(N)]ボタンをクリックします。

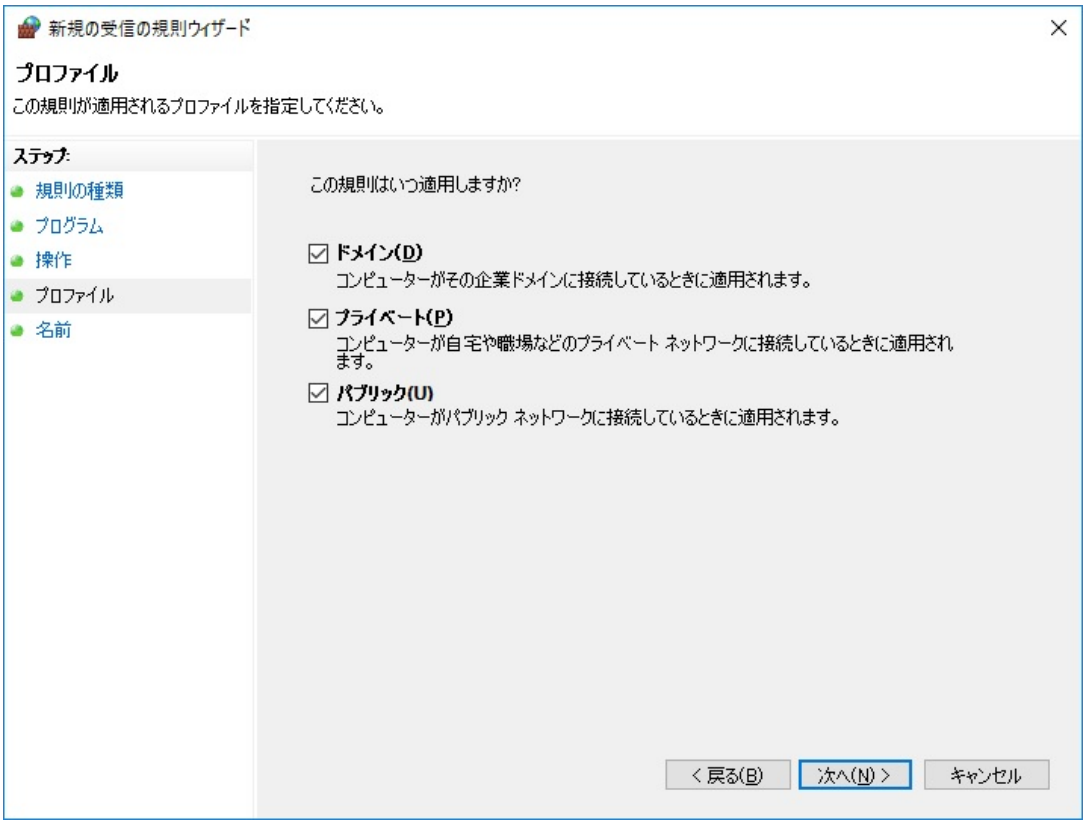
(例)C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL15.MSSQLSERVER¥MSSQL¥Binn¥sqlservr.exe



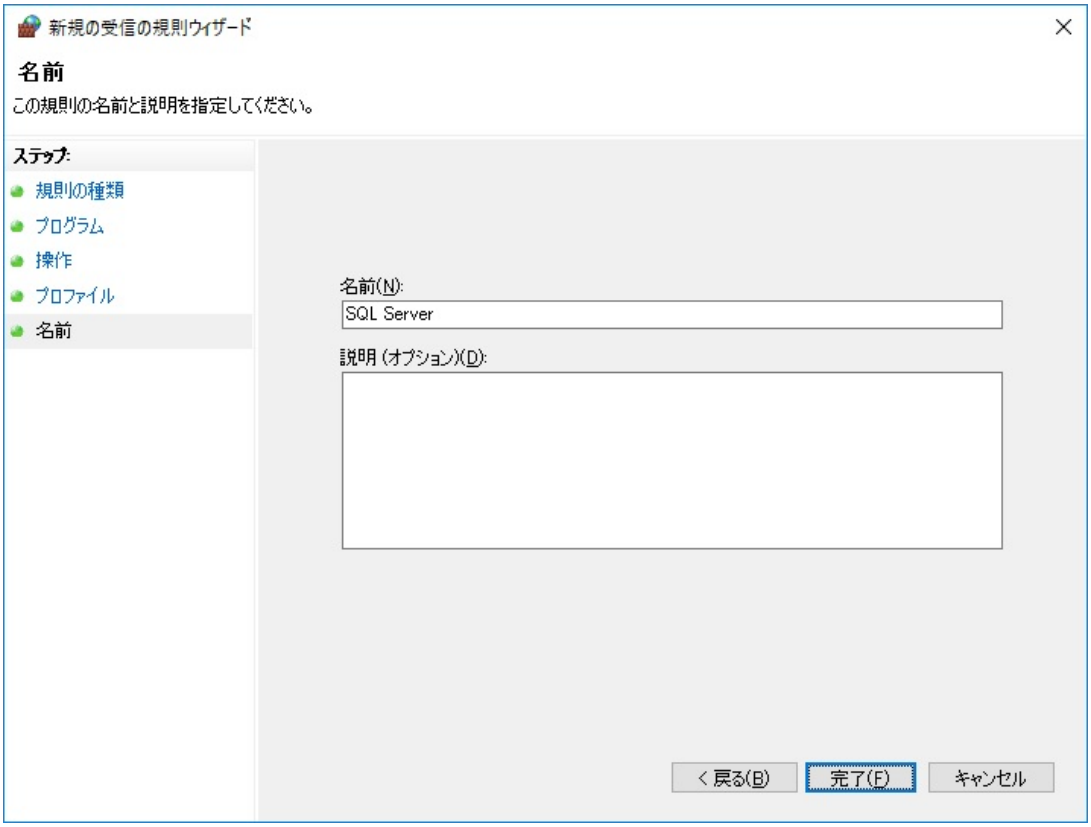
(5)「操作」メニューで「接続を許可する(A)」を選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。



(6)「プロファイル」メニューですべてを選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。



(7)「名前」メニューで規則の名前(例:SQL Server)を指定し、[完了(F)]ボタンをクリックします。



2.4.8. SQL Server データベース配置フォルダの指定

SQL Server のデータベースファイルは、デフォルトで以下のフォルダに配置されるようになっています。

【SQL Server 2019】
C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL15.MSSQLSERVER¥MSSQL¥DATA

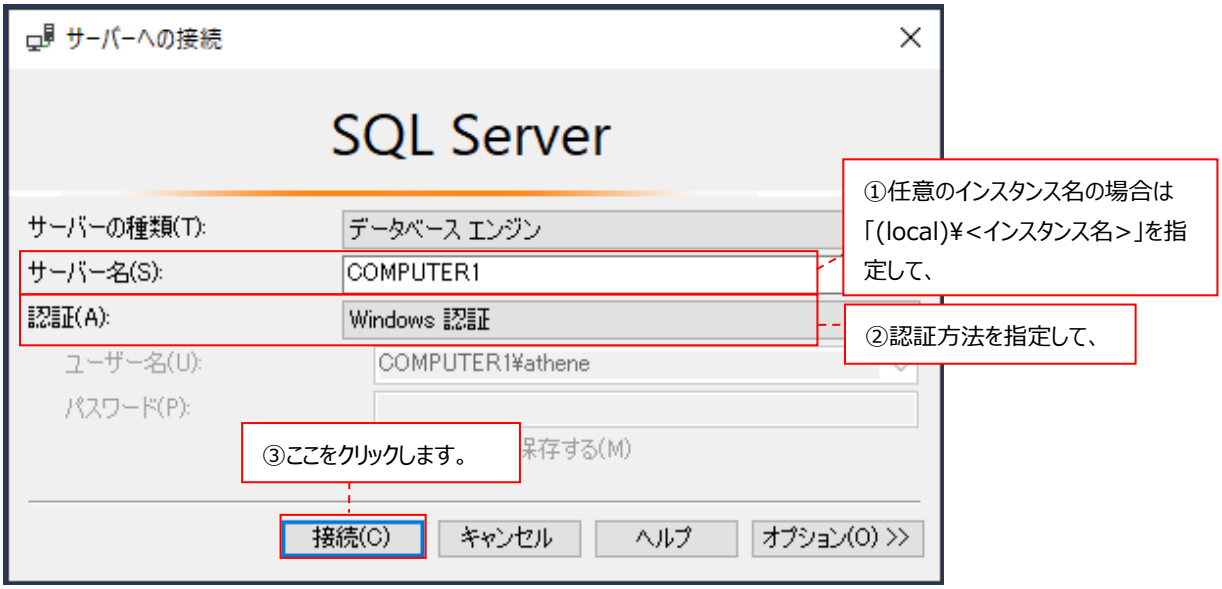
【SQL Server 2017】
C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL14.MSSQLSERVER¥MSSQL¥DATA

【SQL Server 2016】
C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL13.MSSQLSERVER¥MSSQL¥DATA

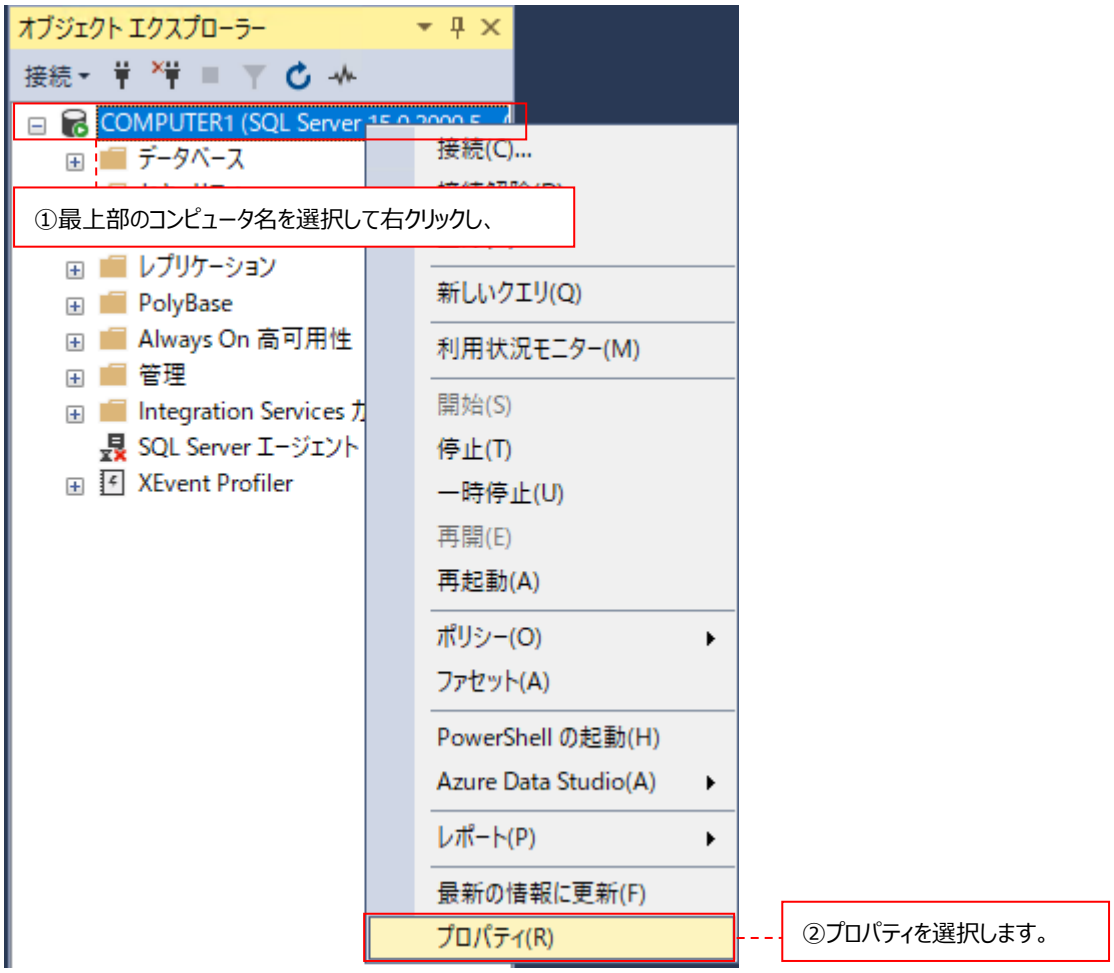
デフォルトでは、Control Center が使用するパフォーマンスデータベース（PDB）も上記フォルダに配置されます。
事前に用意したデータ格納用領域にデータベースファイルを配置するためには、SQL Server の管理ツールにてデータベースの設定を変更します。
使用している SQL Server のバージョンに応じた管理ツールにて設定を行ってください。

ここでは、例として SQL Server 2019 における設定手順を紹介します。
下記のデータベース設定変更手順は、管理ツール「SQL Server Management Studio」が使用可能であることを前提としています。(SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません)

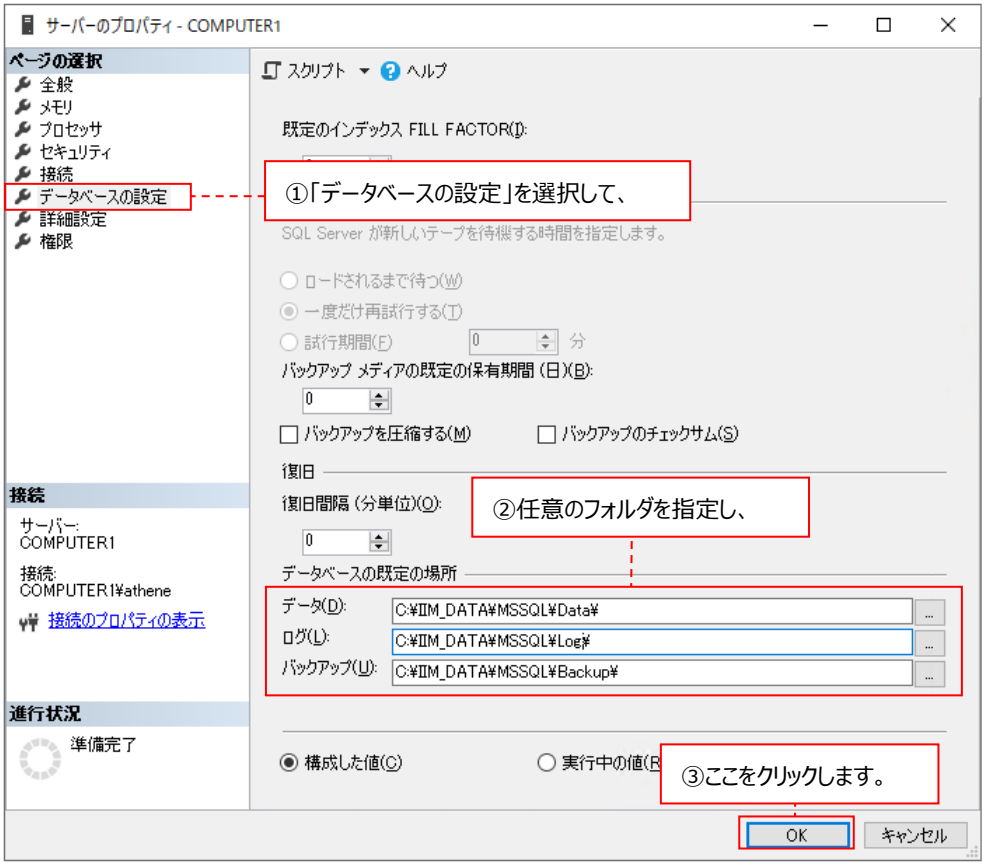
(1)「スタート」→「アプリ」→「Microsoft SQL Server Tools 18」→「Microsoft SQL Server Management Studio 18」を起動します。
サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、
・SQL Server インストール時に任意のインスタンス名を設定している場合→「(local)¥<インスタンス名>」
・既定のインスタンスの場合→管理用マシンのコンピュータ名を指定します①。
また、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して②、[接続(C)]をクリックします③。



(2)「SQL Server Management Studio メイン」画面の左側に表示されるツリーの中から、最上部のコンピュータ名を選択して右クリックし①、「プロパティ(R)」を選択します②。

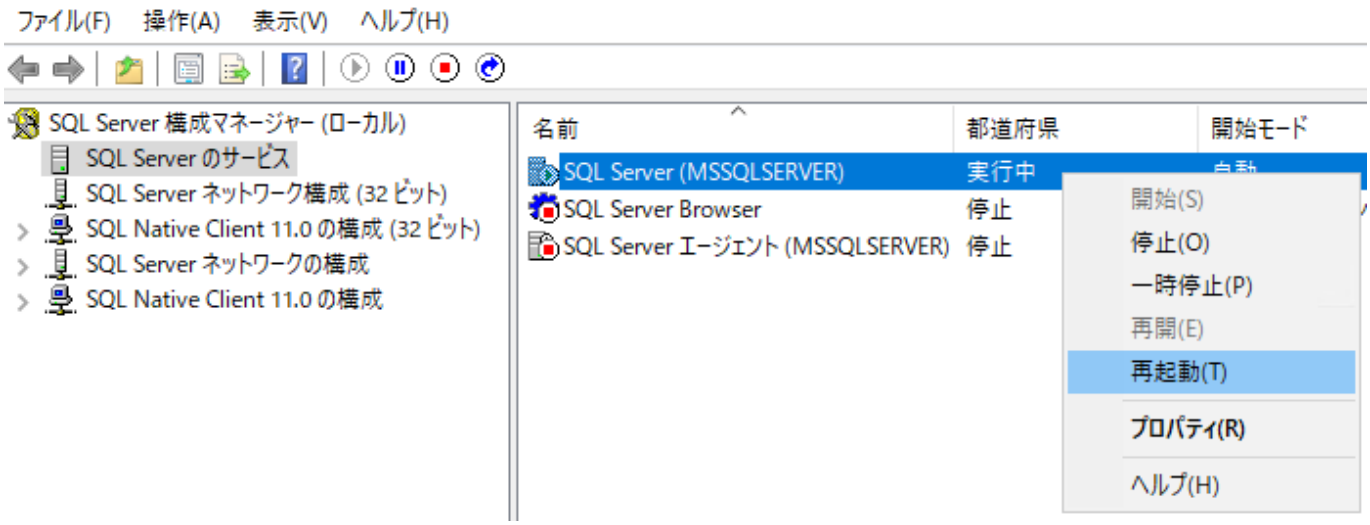


(3)画面左側の「ページの選択」メニューの「データベースの設定」を選択して①、「データベースの規定の場所」に任意のフォルダを指定します②。[OK]ボタンをクリックした後、SQL Server Management Studio を終了します③。



(4)設定を有効にするために SQL Server サービスの再起動が必要になります。
「スタート」→「アプリ」→「Microsoft SQL Server 2019」→「SQL Server 2019 構成マネージャー」メニューを起動します。

(5)下図のように、「SQL Server のサービス」→「SQL Server(インスタンス名)」→右クリック→「再起動(T)」を選択します。

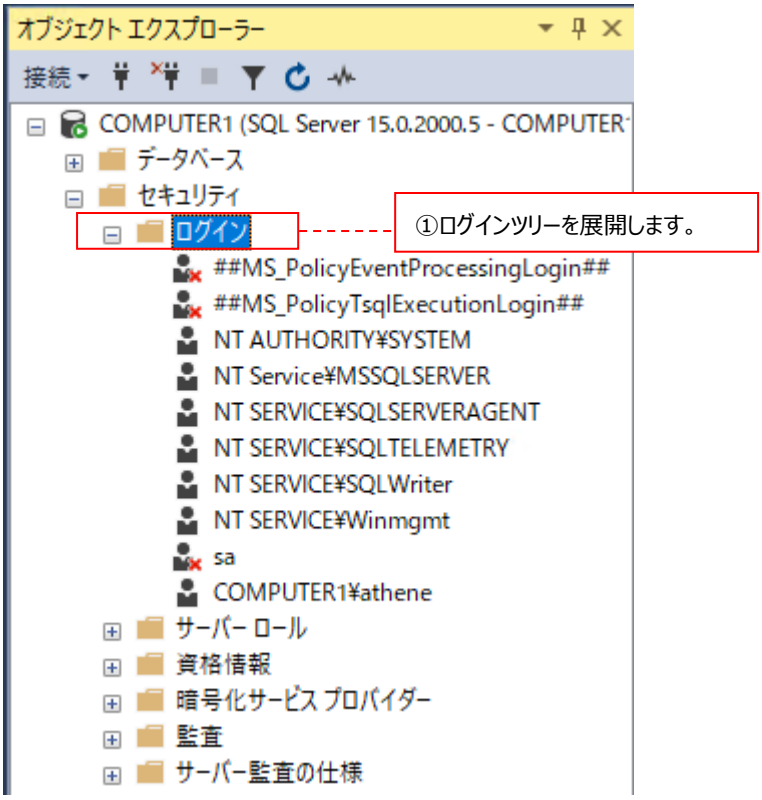


2.4.9. SQL Server 権限設定の変更

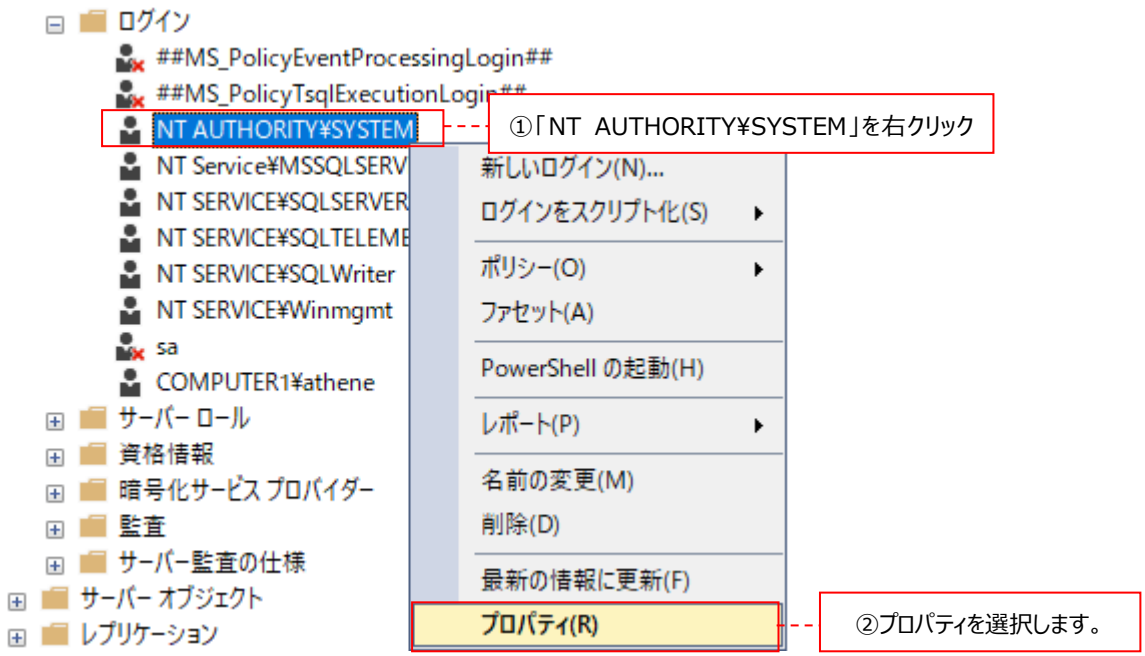
以下の手順で権限設定を変更してください。
すでに「2.4.5. SQL Server のインストール」の「(3) SQL Server 権限設定の変更」を行っている場合は、作業は不要です。
ここでは、例として SQL Server 2019 における設定手順を紹介します。(SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません)

(1)「スタート」→「アプリ→Microsoft SQL Server Tools 18」→「Microsoft SQL Server Management Studio 18」を起動します。
サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して、[接続(C)]をクリックします。

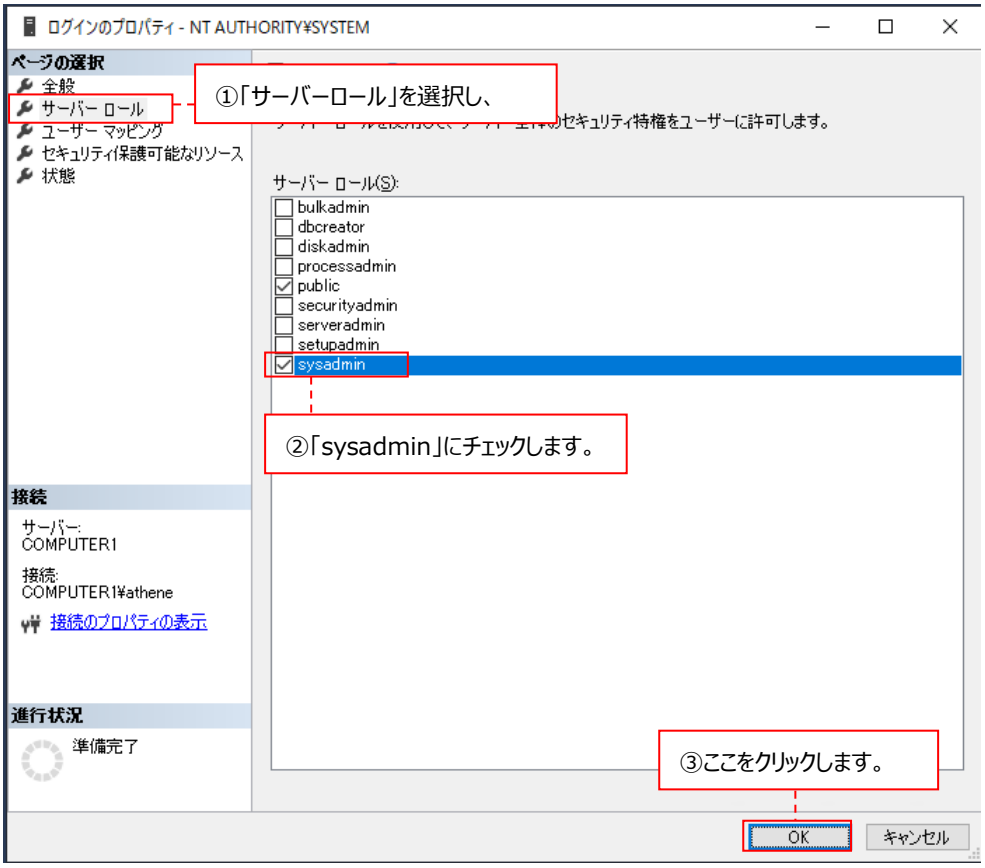
(2)「SQL Server Management Studio メイン」画面の左側に表示されるツリーの中から、「セキュリティ－ログイン」ツリーを展開します①。



(3)「NT AUTHORITY¥SYSTEM」を右クリックし①、プロパティ(R)を選択します②。



(4)画面左側の「ページの選択－サーバーロール」を選択して①、「sysadmin」をチェックします②。[OK]ボタンをクリックした後、SQL Server Management Studio を終了します③。



2.5. ウィルスチェックソフトの対象外フォルダ設定

ウィルスチェックソフトが導入されている場合、Control Center を正常に稼働させるため下記のフォルダをウィルスチェックソフトの対象外にしてください。

Windows Acquire 12.20

ウィルスチェック対象外フォルダ	デフォルトパス例
Windows Acquire 収集データ出力フォルダ	C:¥ProgramData¥Metron¥Acquire¥APMOut

Control Center 12.20

ウィルスチェック対象外フォルダ	デフォルトパス例
SQL Server 導入フォルダ	C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server
	C:¥Program Files (x86)¥Microsoft SQL Server
Syncsort Capacity Management PDB 格納フォルダ	C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL15.MSSQLSERVER¥MSSQL
	C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL14.MSSQLSERVER¥MSSQL
	C:¥Program Files¥Microsoft SQL Server¥MSSQL13.MSSQLSERVER¥MSSQL
Control Center 導入フォルダ	C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Core
Control Center ワークフォルダ	C:¥ProgramData¥Metron

第3章　インストール

ここでは、Control Center およびパフォーマンスデータベース(PDB)のインストール手順を、以下のケースに分けて説明します。

(1)新規インストール
(2)同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード

お客様のインストール・ケースに応じた項番を参照してください。

・3.1. Control Center の提供媒体
・3.2. 新規インストール手順
・3.3. 同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード手順
・3.4. Portal を使用する場合の権限設定
・3.5. インストールログ
・3.6. アンインストール手順

3.1. Control Center の提供媒体

セットアップメディアの「Syncsort Capacity Management」フォルダにインストールモジュールが入っています。

(1)新規に Control Center をインストールする場合は、「3.2. 新規インストール手順」に進んでください。

(2)同一マシン上で Control Center をバージョン 11.20 から 12.20 にアップグレードする場合は、「3.3. 同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード手順」に進んでください。

3.2. 新規インストール手順

ここでは、新規に Control Center をインストールする場合の手順を説明します。
以下の順番にてインストール作業を進めていきます。

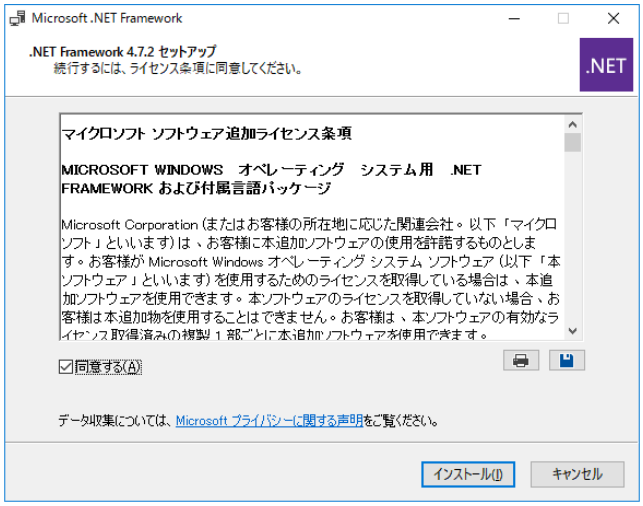
3.2.1. Microsoft .NET Framework 4.7.2 の事前インストール確認
↓
3.2.2. Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール
↓
3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成
↓
3.2.4. パフォーマンスデータベース（PDB）の復旧モデルの変更
↓
3.2.5. Control Center の開始
↓
3.2.6. Windows ファイアウォールの規則登録

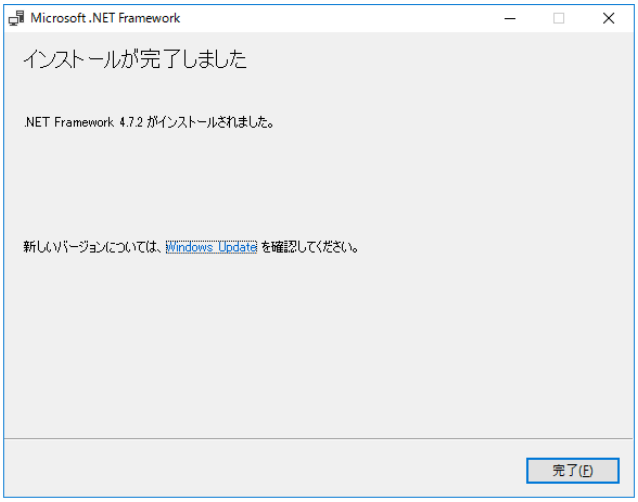
3.2.1. Microsoft .NET Framework 4.7.2 の事前インストール確認

Control Center を使用するには、Microsoft .NET Framework 4.7.2 を事前にインストールしておく必要があります。Control Center のインストールの前に、Microsoft .NET Framework 4.7.2 がインストールされていることを確認してください。

セットアップメディアの「x:¥12.20CC01¥Microsoft .NET Framework 4.7.2」フォルダに格納されているセットアッププログラムを使用してインストールすることも可能です。
　NDP472-KB4054530-x86-x64-AllOS-ENU.exe

Microsoft .NET Framework 4.7.2 のインストーラが起動しますので、画面の指示に従ってインストールを進めてください。





注意！
管理用マシンの OS 環境によっては、Microsoft .NET Framework 4.7.2 のインストール後に OS の再起動を要求される場合があります。

＜Windows Server 2016 の場合＞
[コントロール パネル]の[インストールされた更新プログラム]の項目の下に[Microsoft Windows 用の更新プログラム(KB4054590)]が表示されていることを確認します。

＜Windows Server 2019 の場合＞
OS と共に.NET Framework 4.7.2 が既にインストールされていますので、インストールは不要です。

＜Windows Server 2022 の場合＞
OS と共に.NET Framework 4.8 が既にインストールされていますので、インストールは不要です。

「3.2.2. Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール」に進んでください。

3.2.2. Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール

(1)管理用マシンへのログオン

Control Center をインストールする管理用マシンに、「2.4.1. Control Center 専用ユーザの作成」で事前に用意した Administrators グループに所属する Control Center 専用ユーザまたは Administrator ユーザでログオンします。

(2)セットアップ

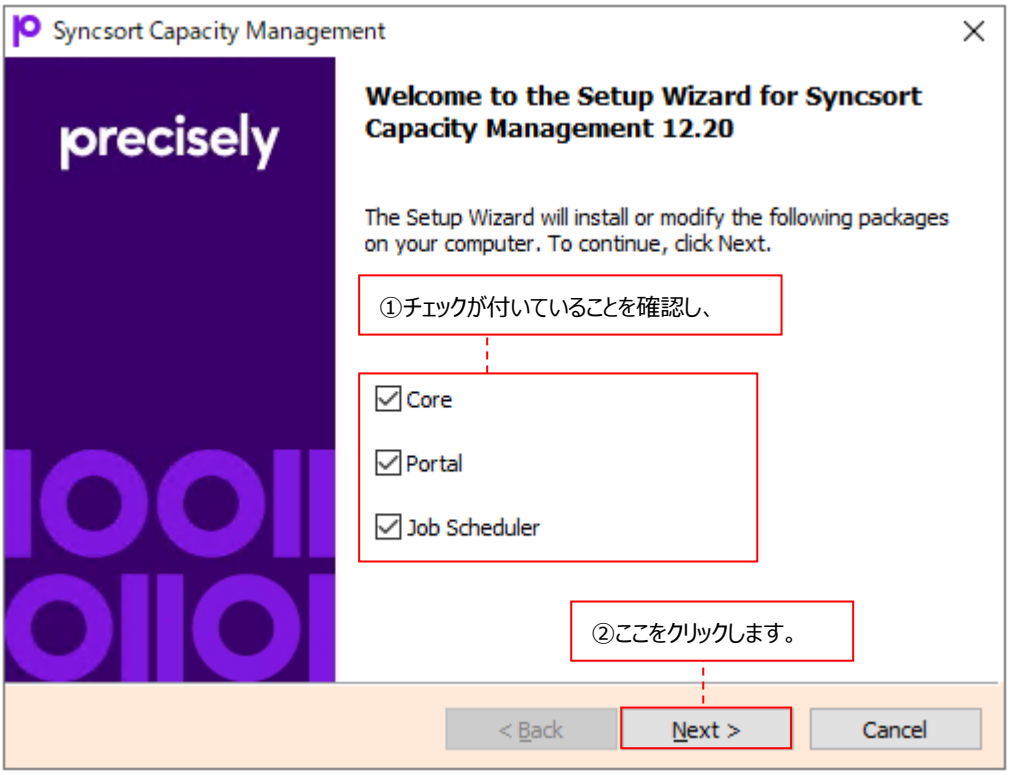
セットアップメディアをドライブにセットします。

(3)セットアッププログラムの起動

「x:¥12.20CC01¥Athene¥Setup.exe」を右クリックし[管理者として実行(A)]オプションを選択して起動すると、以下の画面が表示されます。

Control Center をインストールする場合は、「Core」にチェックが付いていること、

Portal をインストールする場合は、「Portal」と「Job Scheduler」にチェックが付いていることを確認し①、[Next >]をクリックします②。

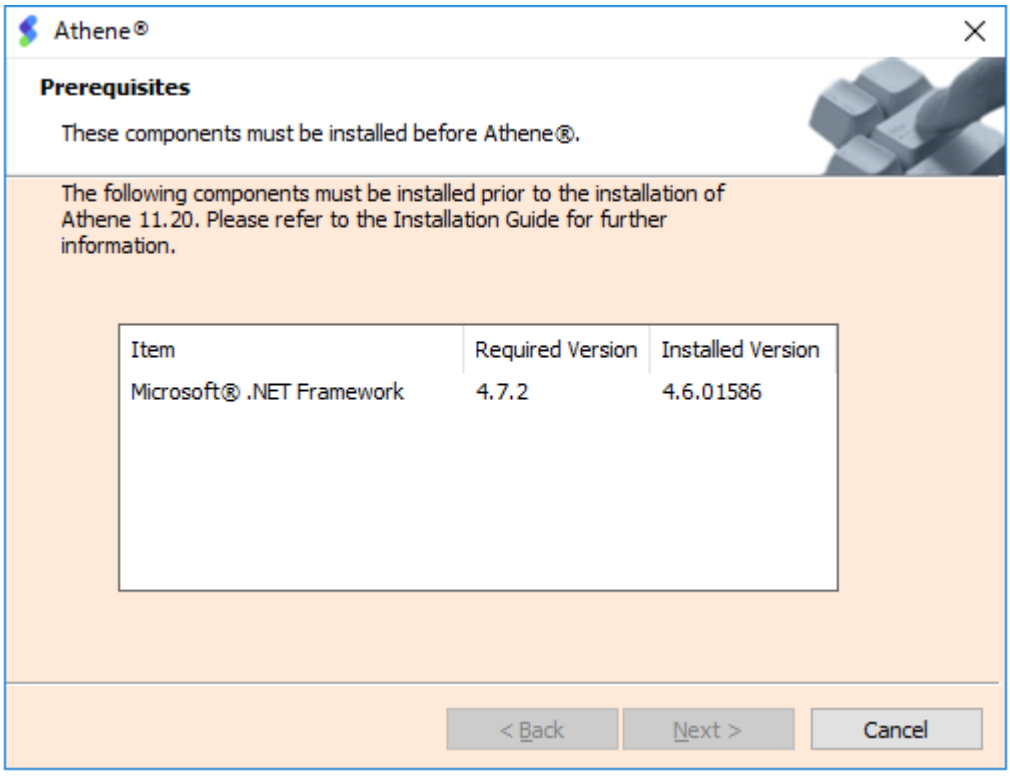


3.2.2.1. Control Center のインストール

(1)管理用マシンの環境チェック

セットアッププログラムが管理用マシンの環境をチェックし、以下のコンポーネントがインストールされていない場合、各コンポーネントのインストールを促すダイアログが表示されます。

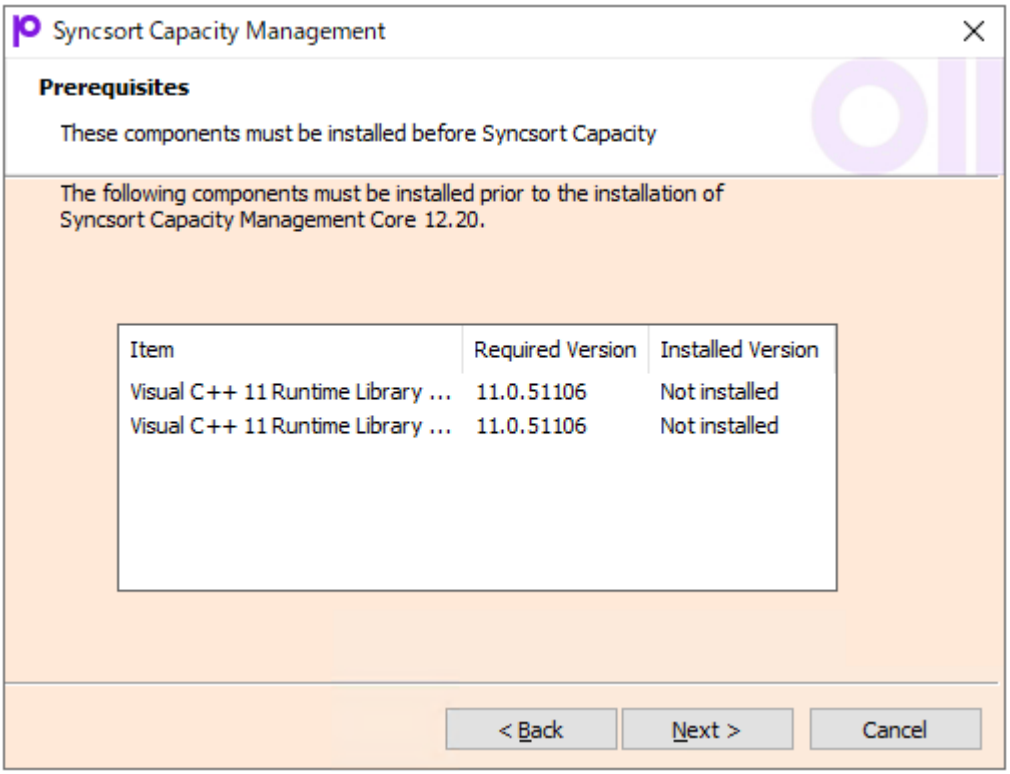
・Microsoft .NET Framework 4.7.2 がインストールされていない場合



[Cancel]ボタンをクリックしてセットアップ画面を閉じてください。
「3.2.1. Microsoft .NET Framework 4.7.2 の事前インストール確認」を参照して、.NET Framework 4.7.2 をインストールしてください。

Microsoft .NET Framework 4.7.2 のインストールが完了した後、再度「x:¥12.20CC01¥Athene¥Setup.exe」を右クリックし[管理者として実行(A)]オプションを選択して起動してください。

・Visual C++ Runtime Library がインストールされていない場合

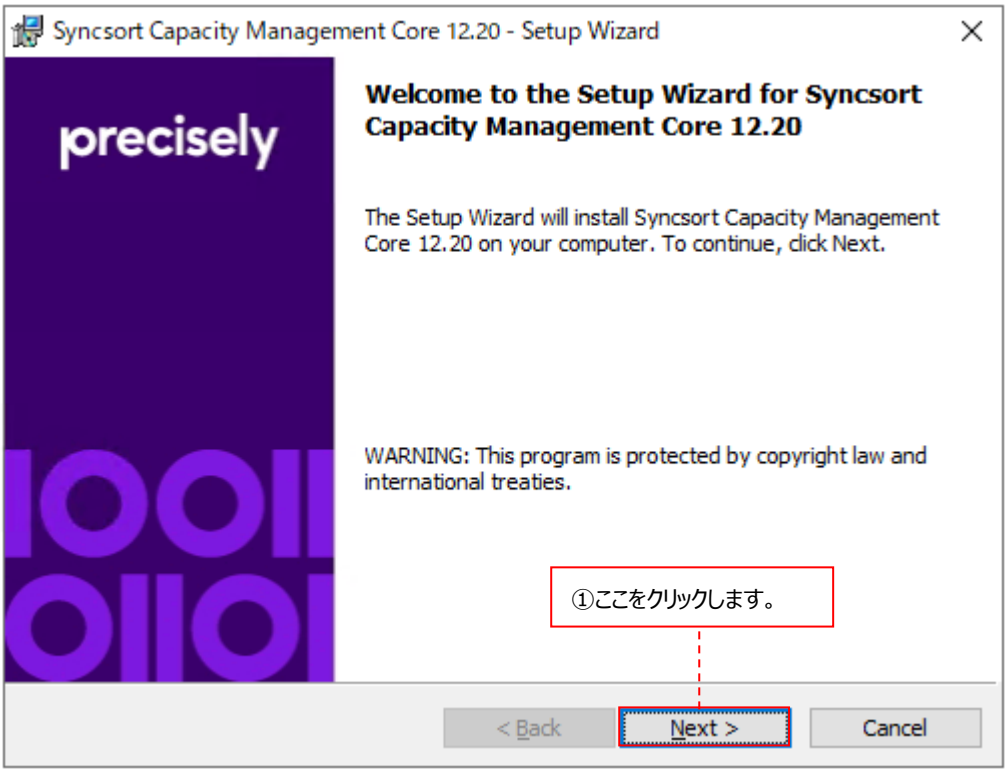


[Next >]をクリックすると、Visual C++ Runtime Library コンポーネントのインストールが行われます。

注意！
管理用マシンの OS 環境によっては、Visual C++ Runtime Library のインストール後に OS の再起動を要求される場合があります。

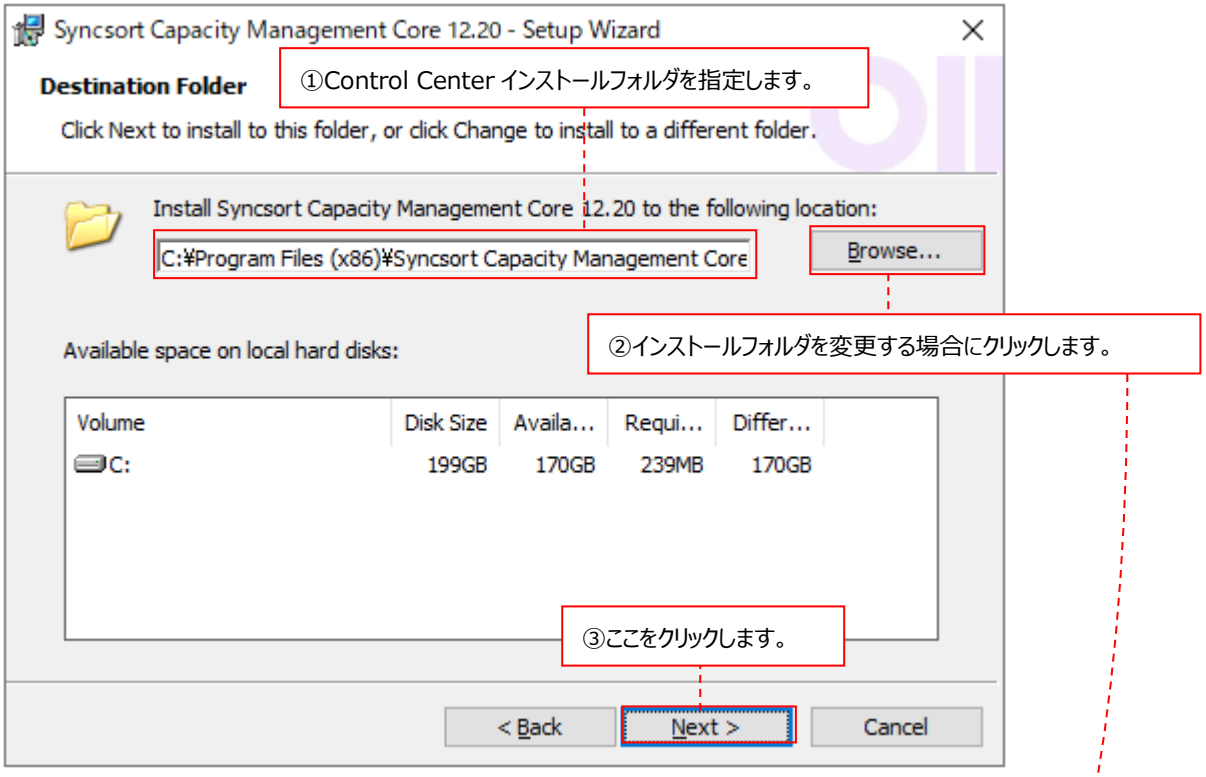
(2)Welcome 画面

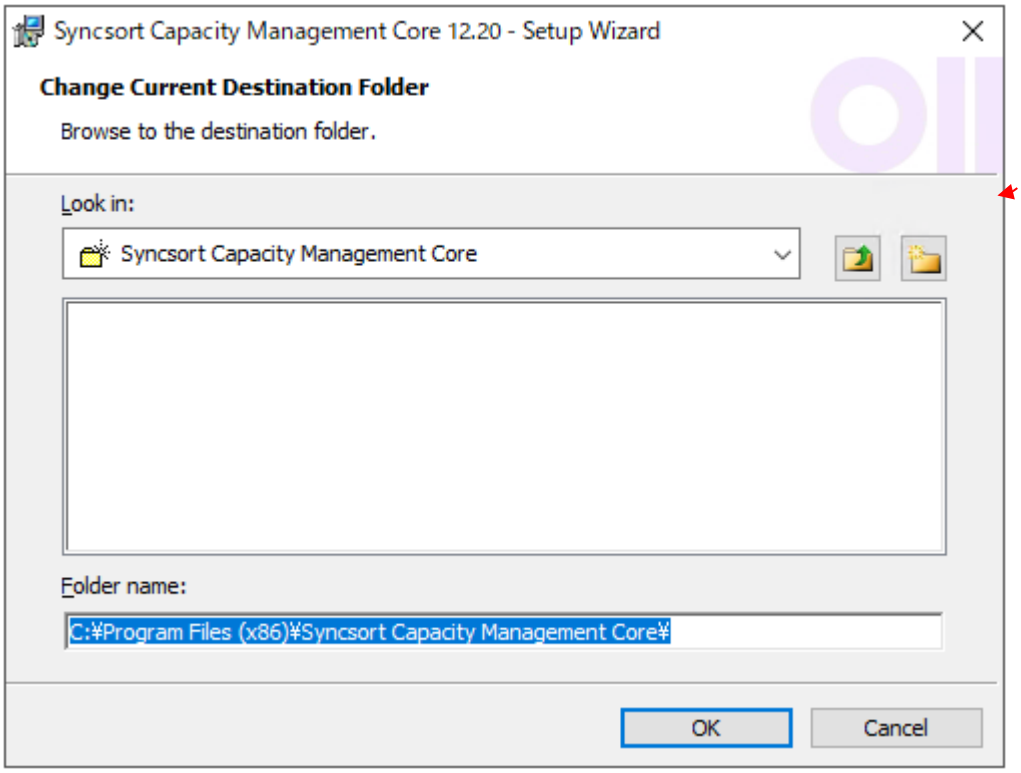
以下の画面が表示されますので、[Next >]をクリックします①。



(3)Control Center インストールフォルダの指定

Destination Folder ダイアログでは、Control Center のインストールフォルダを指定します①。
デフォルトは「C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Core」です。変更する場合は[Browse...]をクリックして設定します②。

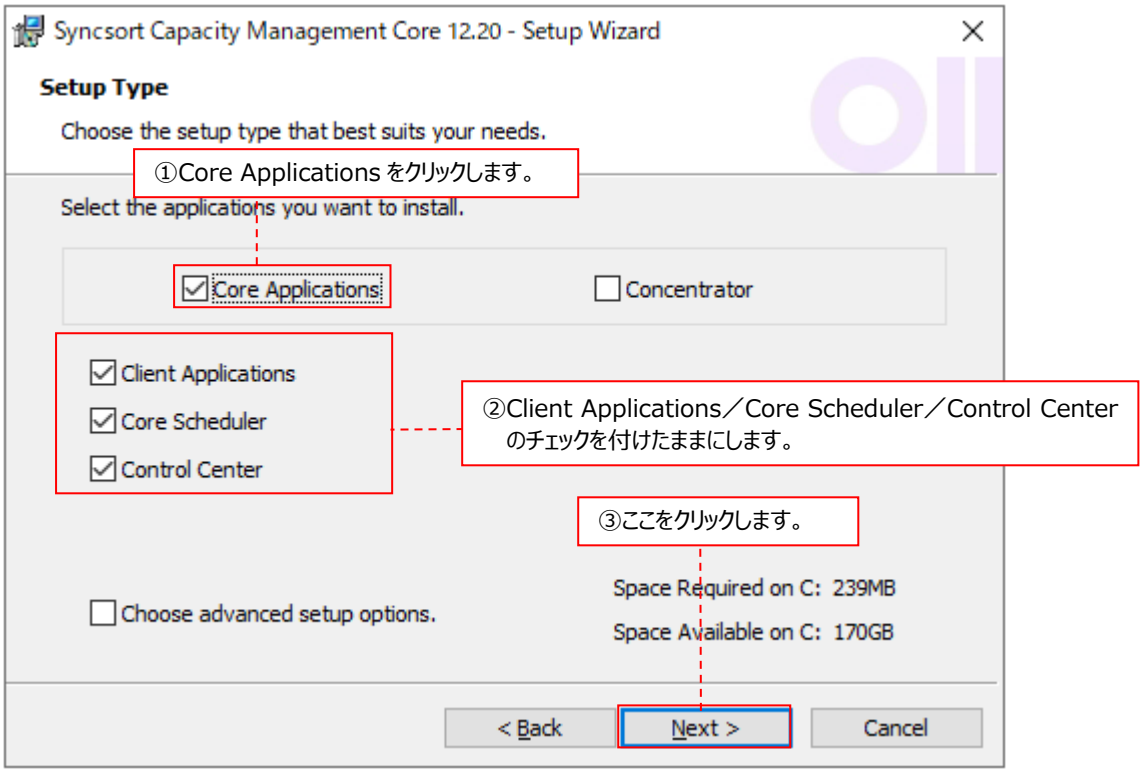




フォルダを指定したら[Next >]をクリックします③。

(4)インストールするアプリケーション選択画面

Setup Type ダイアログでは、インストールするアプリケーションを指定します。

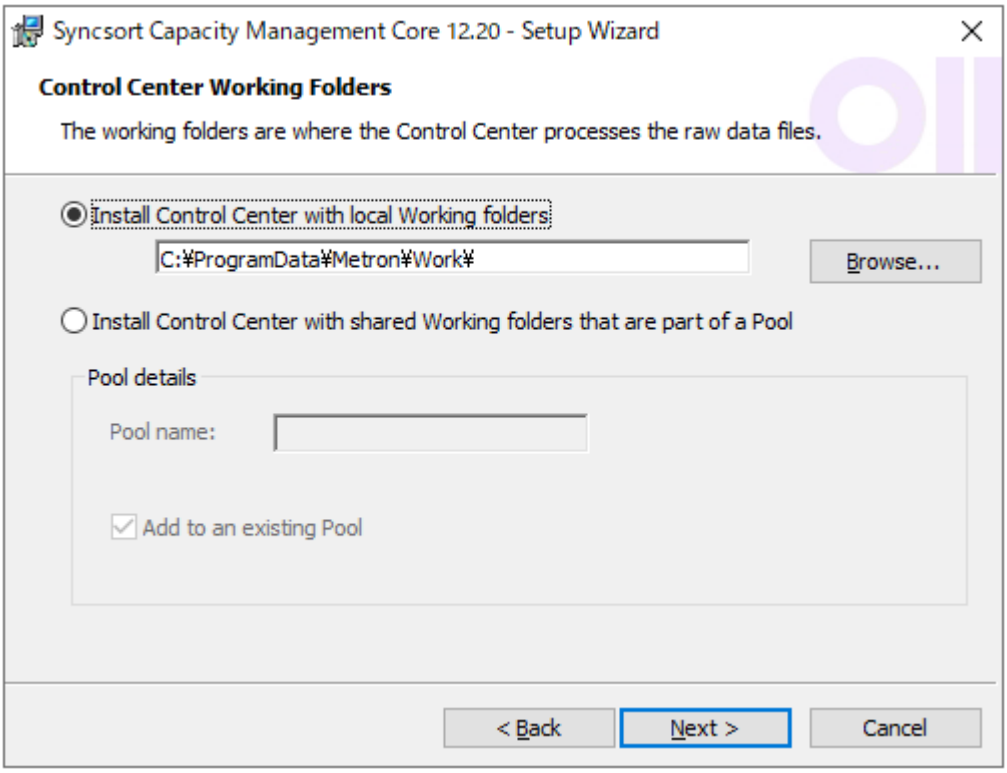


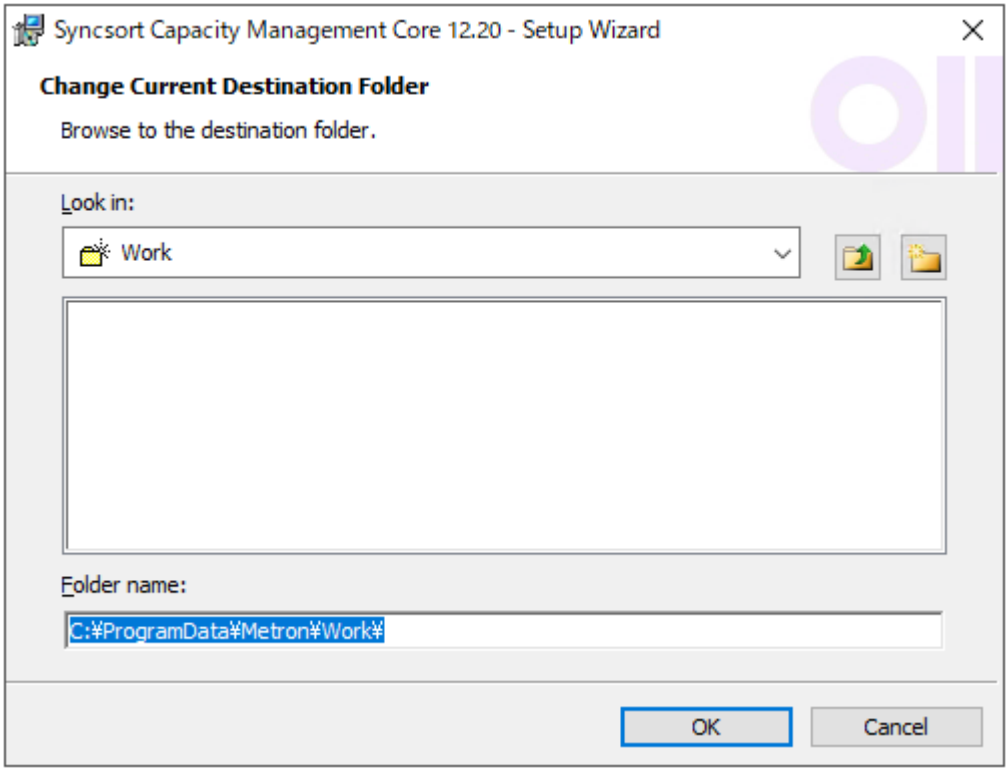
Core Applications のチェックを付けたままにします①。Concentraror はチェックしません。
Client Applications／Core Scheduler／Control Center のチェックを付けたままにします②。
[Next >]をクリックします③。

注意！
Concentraror は使用できませんので、必ずチェックを外してください。

(5)Control Center 作業フォルダの指定

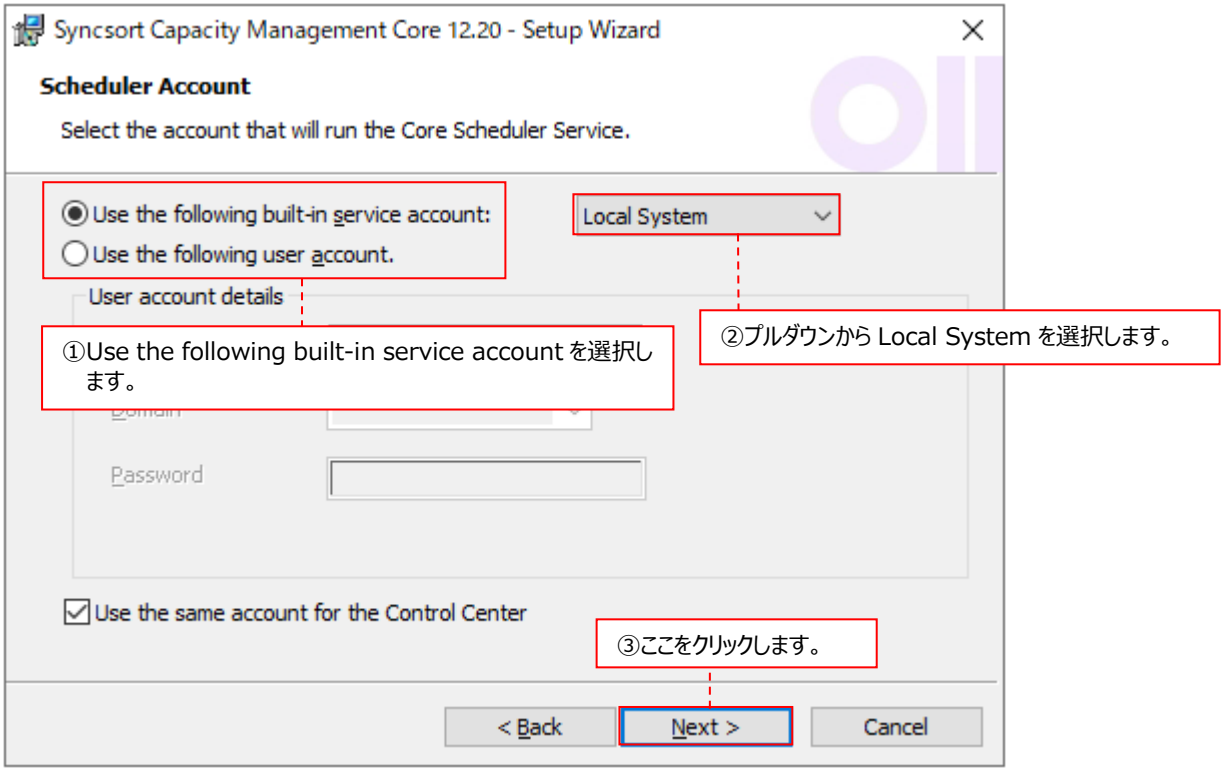
Control Center Working Folders ダイアログでは、Control Center の作業フォルダを指定します。
デフォルトは「C:¥ProgramData¥Metron¥Work¥」です。変更する場合は[Browse...]をクリックして設定します。





(6)Control Center サービス用ログオンアカウントの指定

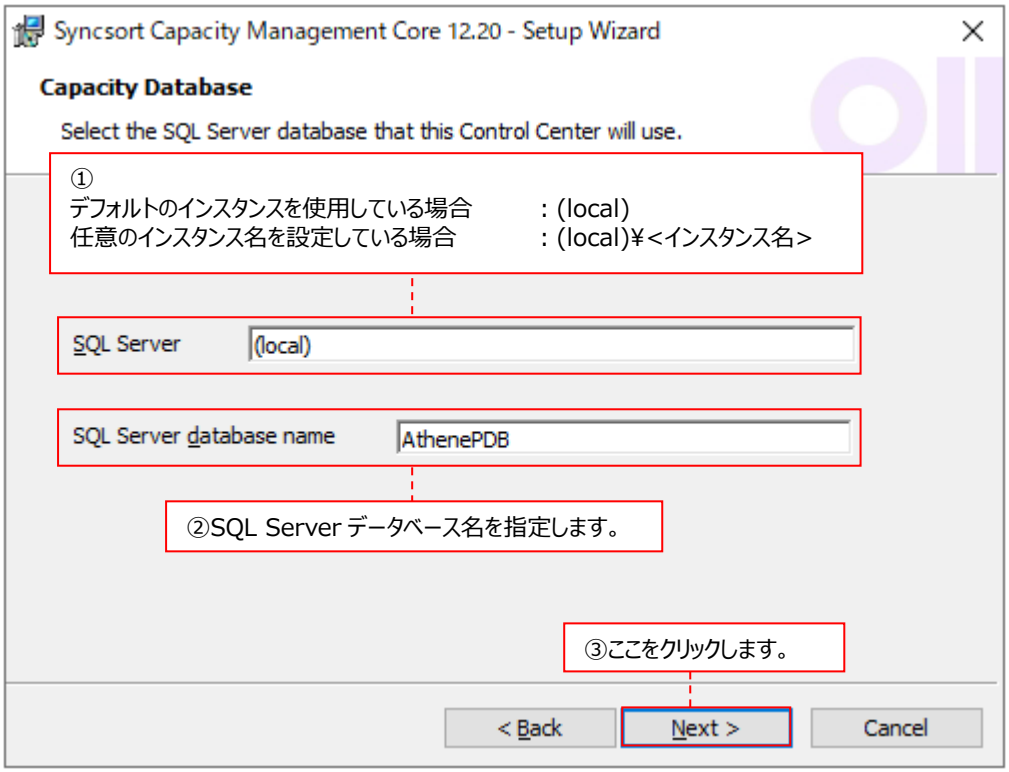
Scheduler Account ダイアログでは、Control Center サービスを動かすログオンアカウントを指定します。
Control Center サービスとは、Acquire をインストールした対象システムとの間の通信を司り、パフォーマンスデータベース(PDB)の更新などを行う Control Center 製品群の中心となるサービスです。



「Use the following built-in service account」を選択し①、プルダウンから「Local System」を選択します②。
選択したら[Next >]ボタンをクリックします③。

(7)Control Center が使用する SQL Server データベースの指定

Capacity Database ダイアログでは、Control Center が使用する SQL Server インスタンス/データベースを指定します。



①SQL Server : SQL Server インスタンスを指定します。
デフォルトのインスタンスを使用する場合は、「(local)」と入力します。
任意のインスタンス名を設定する場合は、「(local)¥<インスタンス名>」と入力します。

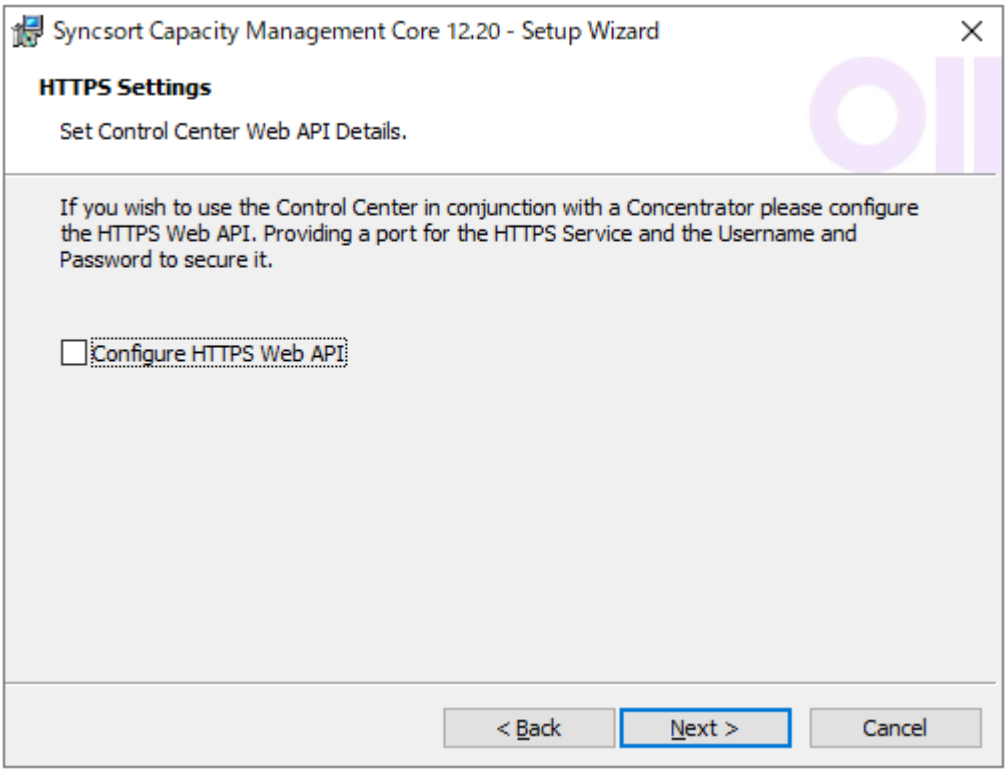
②SQL Server database name : SQL Server データベース名を指定します。

ここで指定できるデータベース名には以下の制限があります。
(a)頭文字は、「a-z」、「A-Z」、「@」、「_」、または「#」でなくてはなりません。
(b)後続する文字は(a)の文字の他に「$」、「0-9」を使用できます。名前の途中に空白は使用できません。
(c)名前は最長 123 文字まで入力できます。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(8)HTTPS の設定

Configure HTTPS Web API をチェックしないで、[Next >]ボタンをクリックします。



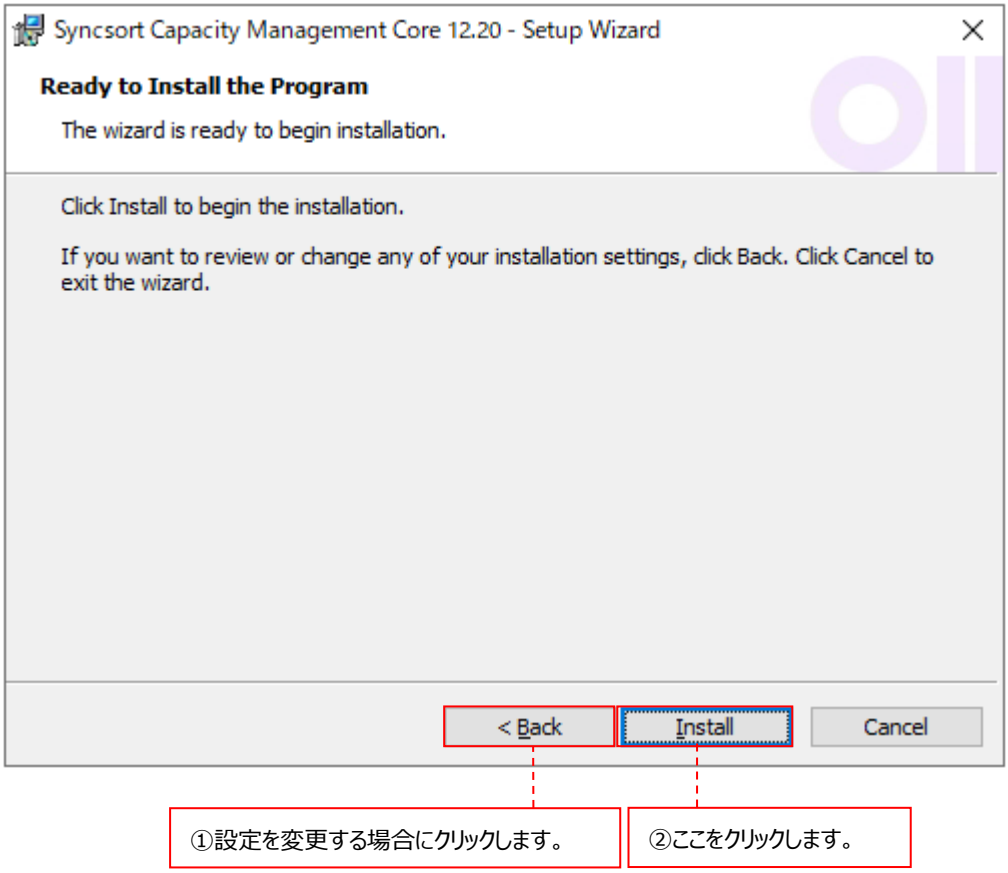
注意！
Concentraror は使用できませんので、Configure HTTPS Web API は必ずチェックを外してください。

(9)インストール開始前の確認

Ready to Install the Program ダイアログでは、これまでの設定で実際にインストールを開始するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

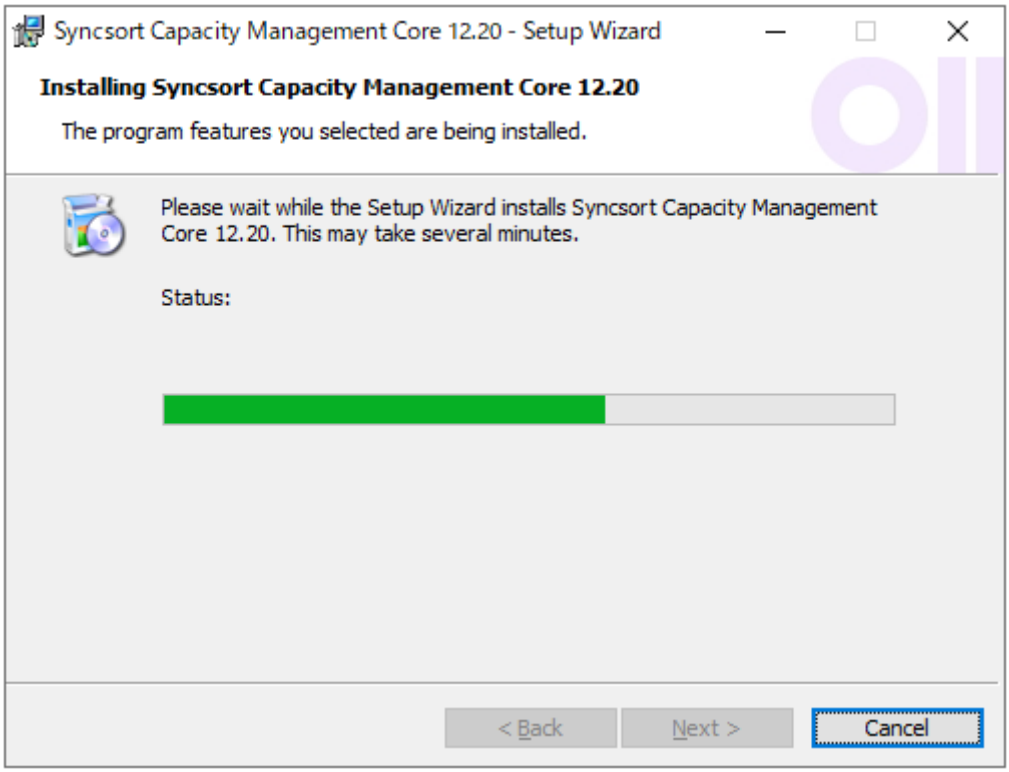
設定を変更する場合は、[<Back]ボタンをクリックして前画面に戻ります①。

インストールを開始する場合は、[Install]ボタンをクリックします②。

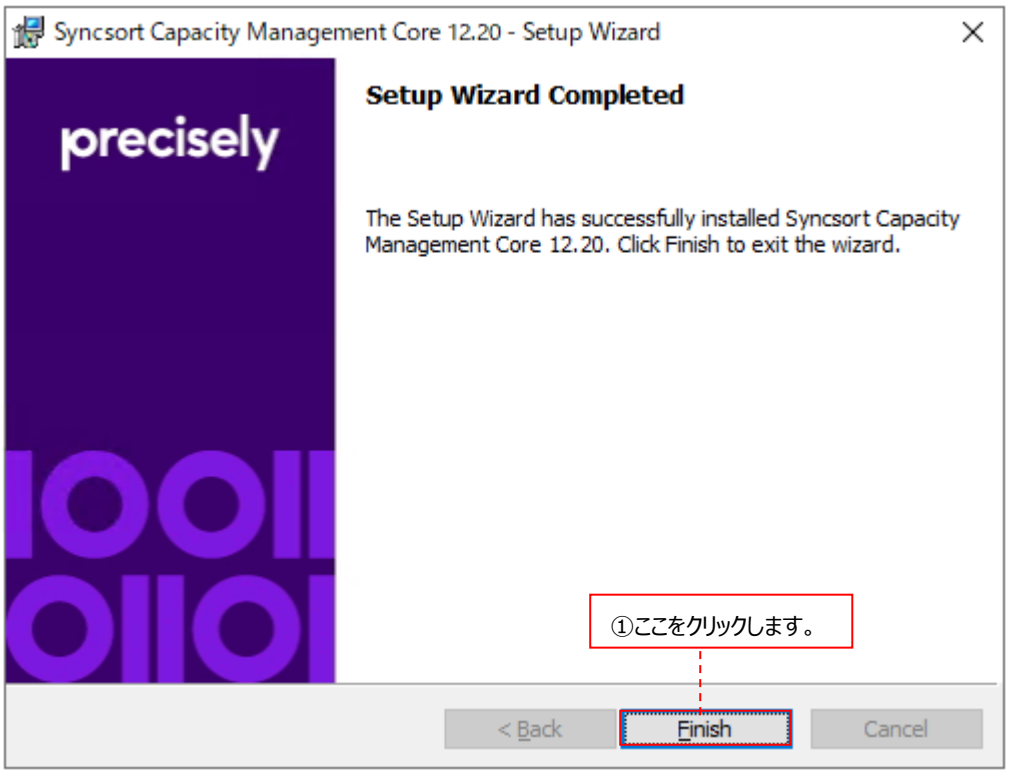


(10)インストールの開始

実際にインストールを開始します。この処理は数分かかりますので、しばらくお待ちください。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします①。

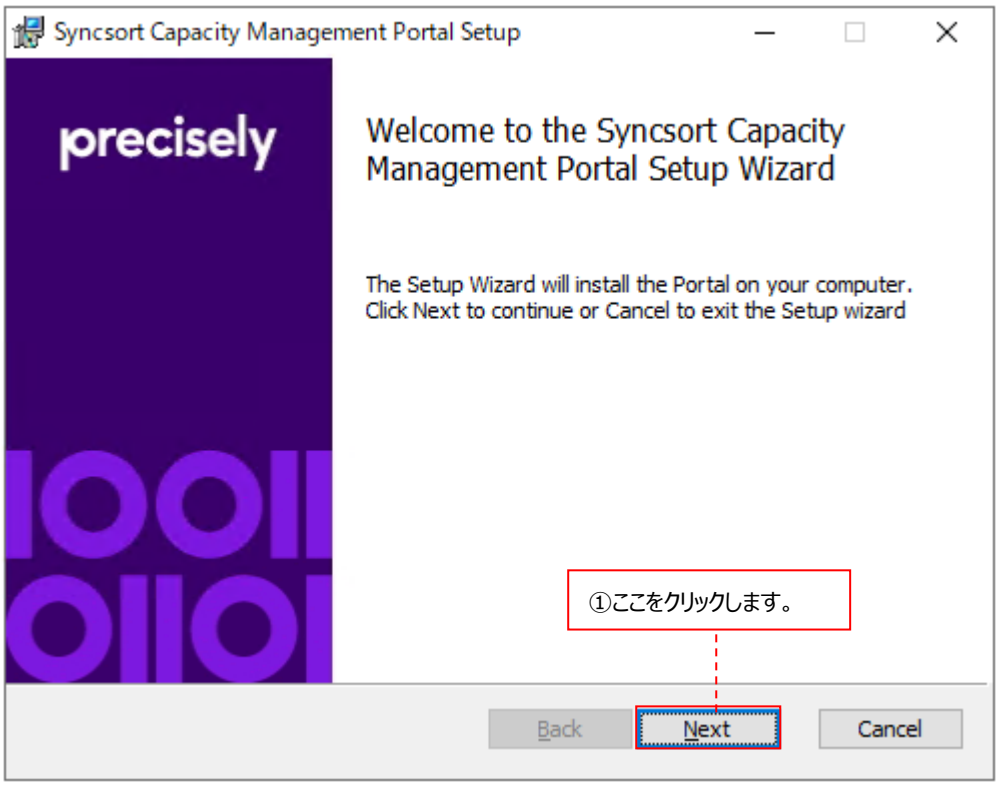


「Portal」にチェックした場合は、「3.2.2.2. Portal のインストール」に進んでください。
「Job Scheduler」にチェックした場合は、「3.2.2.3. Job Scheduler のインストール」に進んでください。
どちらもチェックしてない場合は、「3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成」へ進んでください。

3.2.2.2. Portal のインストール

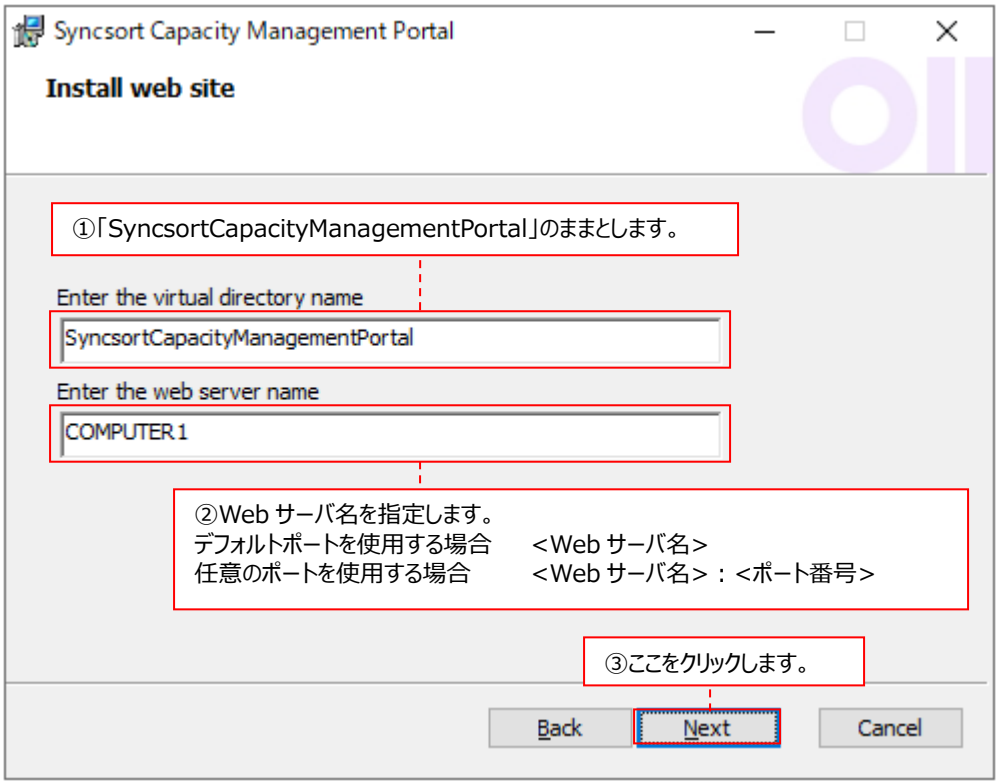
(1)Welcome 画面

以下の画面が表示されますので、[Next >]ボタンをクリックします①。



(2)Portal 導入先の指定

Install web site ダイアログでは、仮想ディレクトリ名と Web サーバ名を指定します。



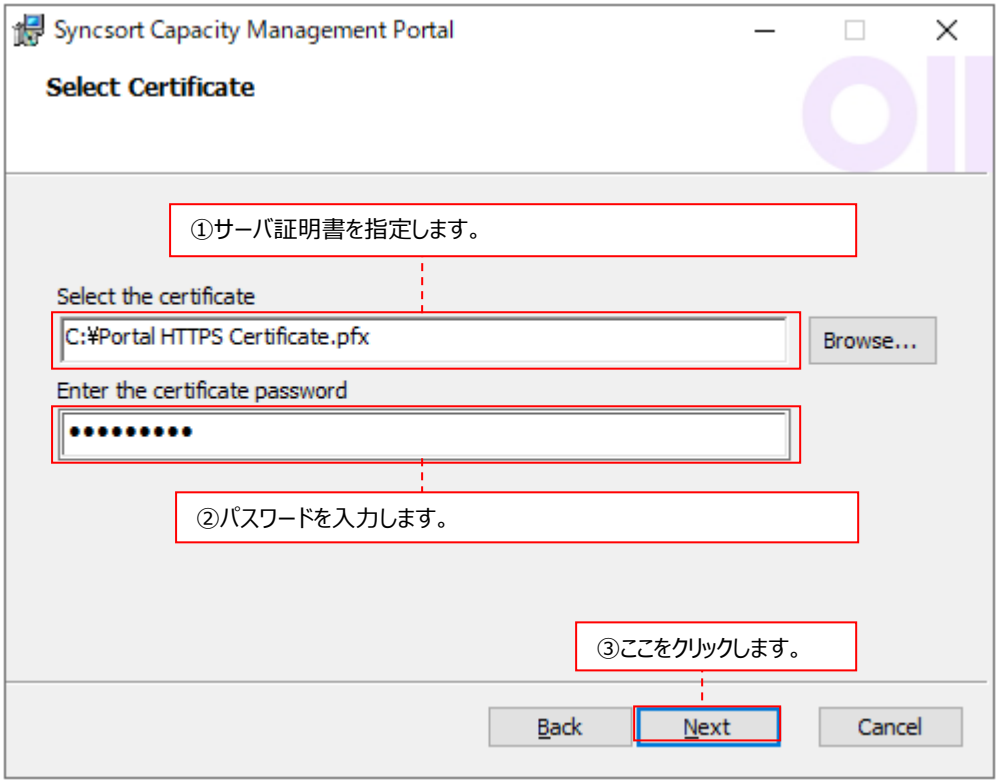
①Enter the virtual directory name：Syncsort Capacity Management Portal Web サイトが保持される物理ディレクトリの別名を指定します。デフォルトの「SyncsortCapacityManagementPortal」のままとします。

②Enter the web server name：Web サーバ名を指定します。
Portal はデフォルトポート 443（デフォルトのセキュアポート）を使用します。
別のポート番号を使用する場合は、「<Web サーバ名>：<ポート番号>」と入力します。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(3)SSL サーバ証明書の指定

Select Certificate ダイアログでは、サーバ証明書を指定します。



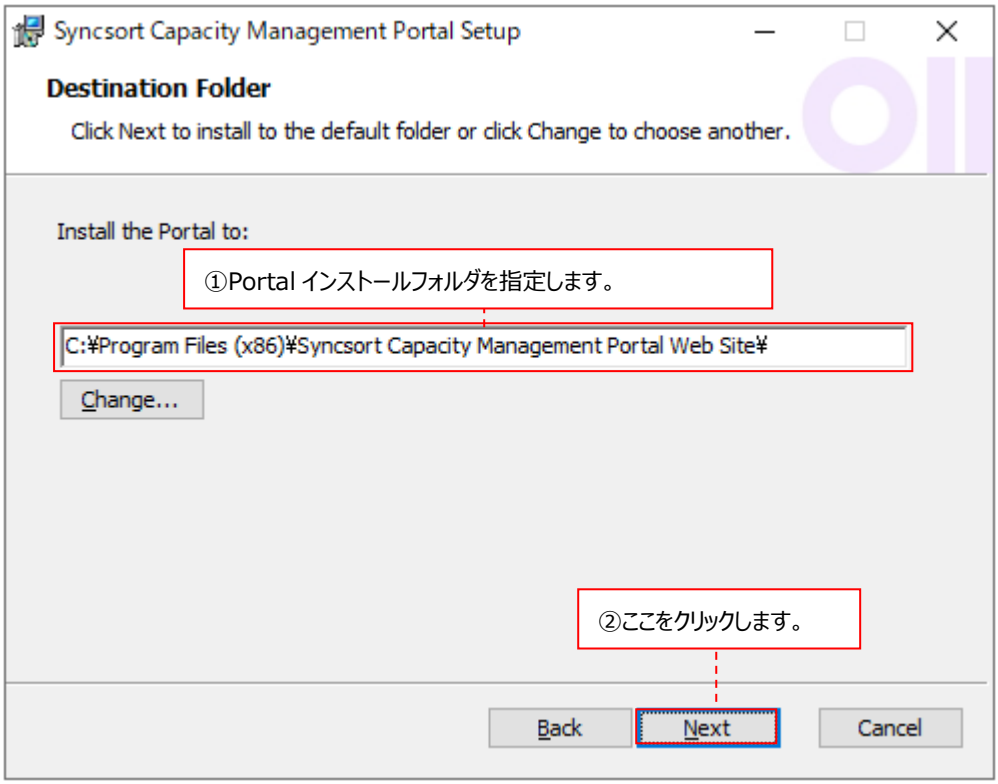
①Select the certificate　：SSL サーバ証明書を指定します。「2.4.4. Portal を使用する場合の事前準備 (2)自己署名入り証明書の作成」で証明書を作成した場合は、その証明書を指定します。

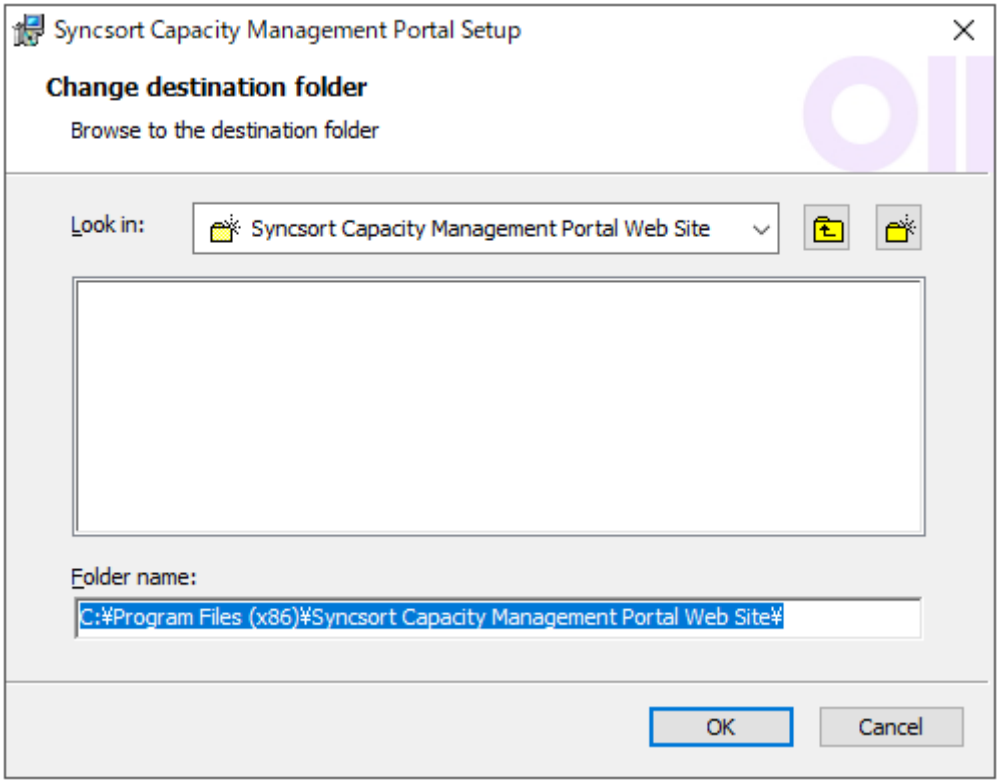
②Enter the certificate password　：証明書のパスワードを入力します。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(4)Portal インストールフォルダの指定

Destination Folder ダイアログでは、Portal のインストールフォルダを指定します①。
デフォルトは「C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Portal Web Site¥」です。変更する場合は[Change...]をクリックして設定します。

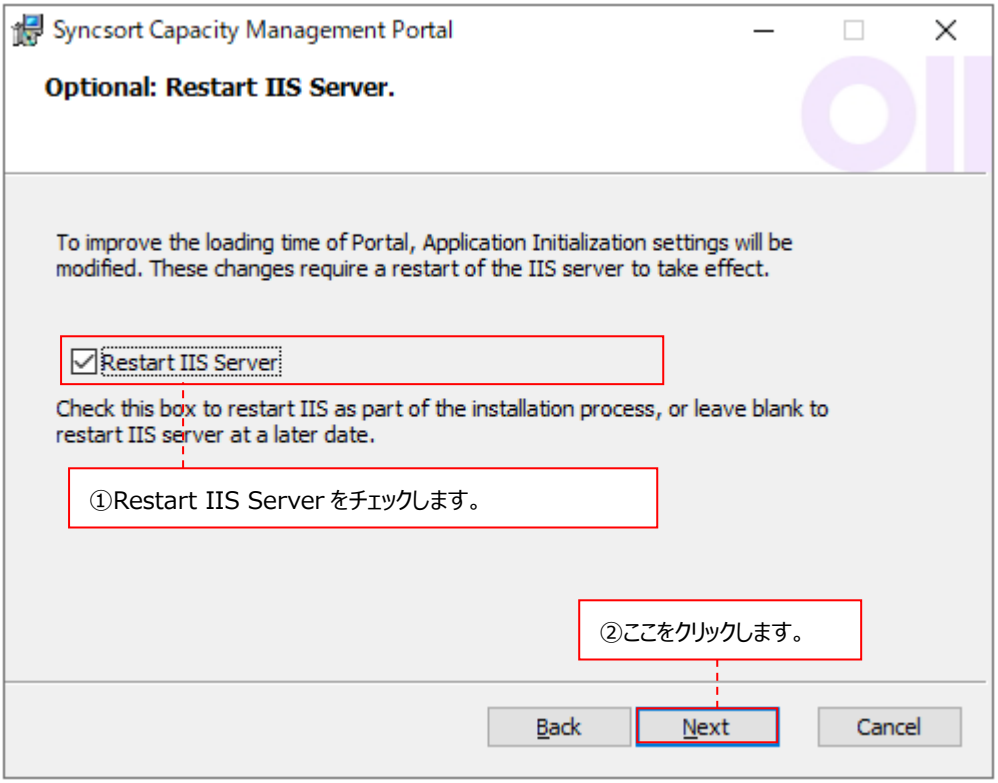




指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします②。

(5)IIS Server 再起動の指定

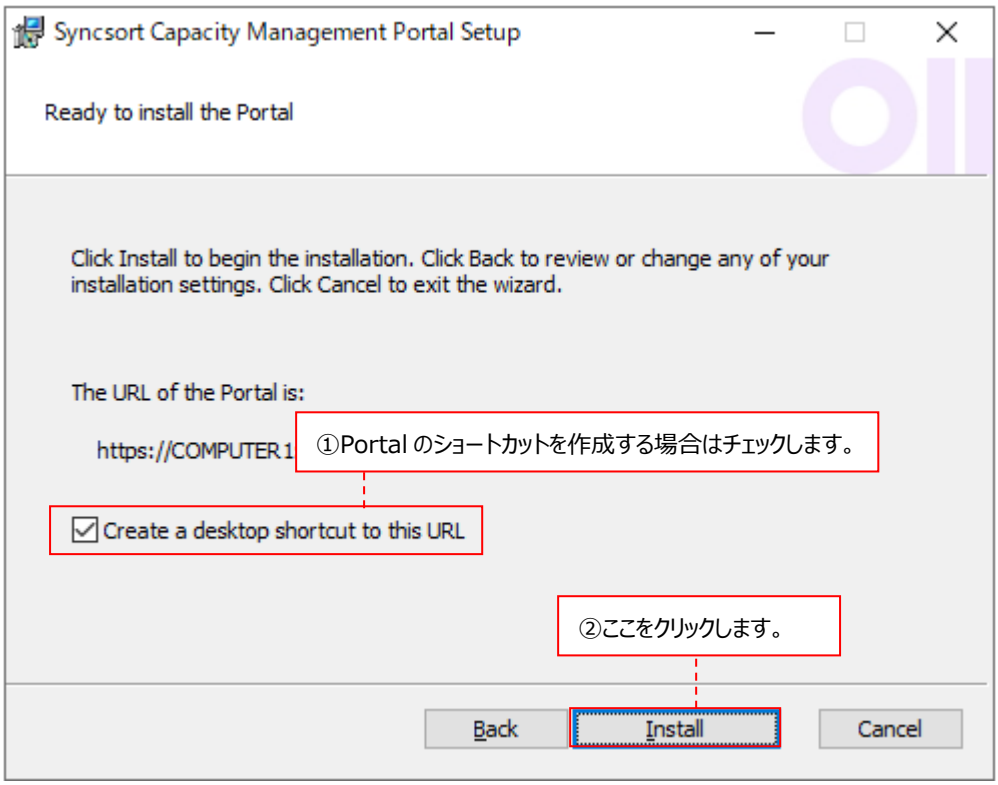
Optional: Restart IIS Server.ダイアログでは、IIS Server を再起動するかを指定します①。
Portal を利用するために、IIS を再起動する必要があります。IIS を再起動するには、管理者権限が必要です。
IIS を後で再起動する場合は、チェックボックスをオフのままにしてしてください。



指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします②。

(6)Portal ショートカットの作成

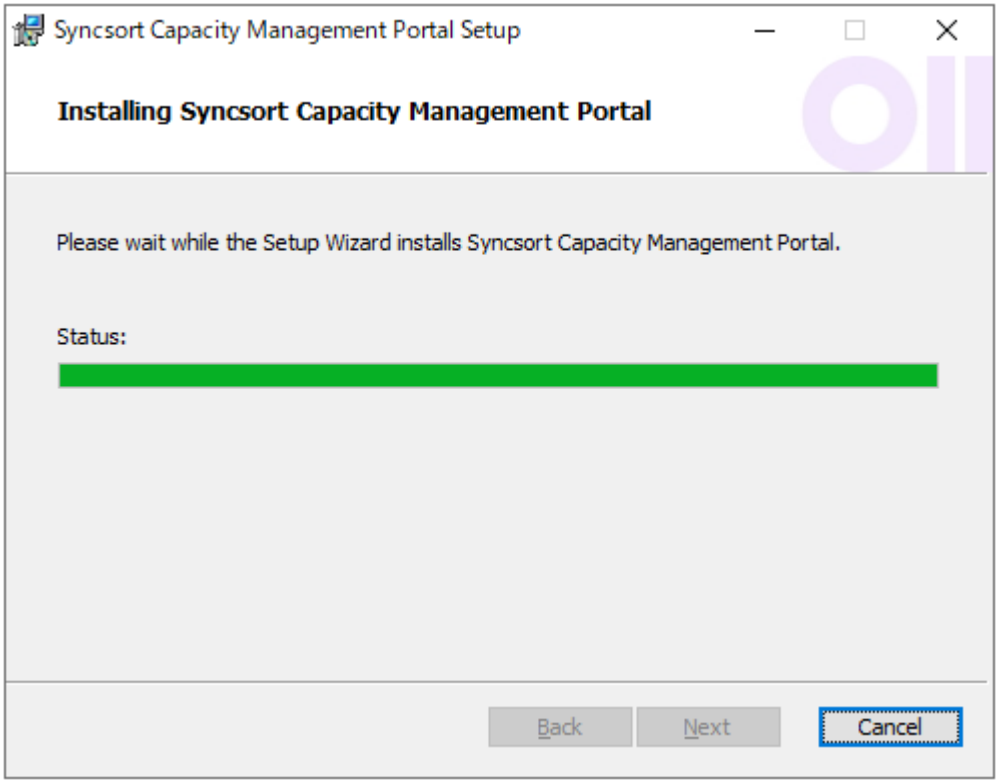
Ready to install the Portal ダイアログでは、デスクトップに Portal のショートカットを作成する場合はチェックします①。



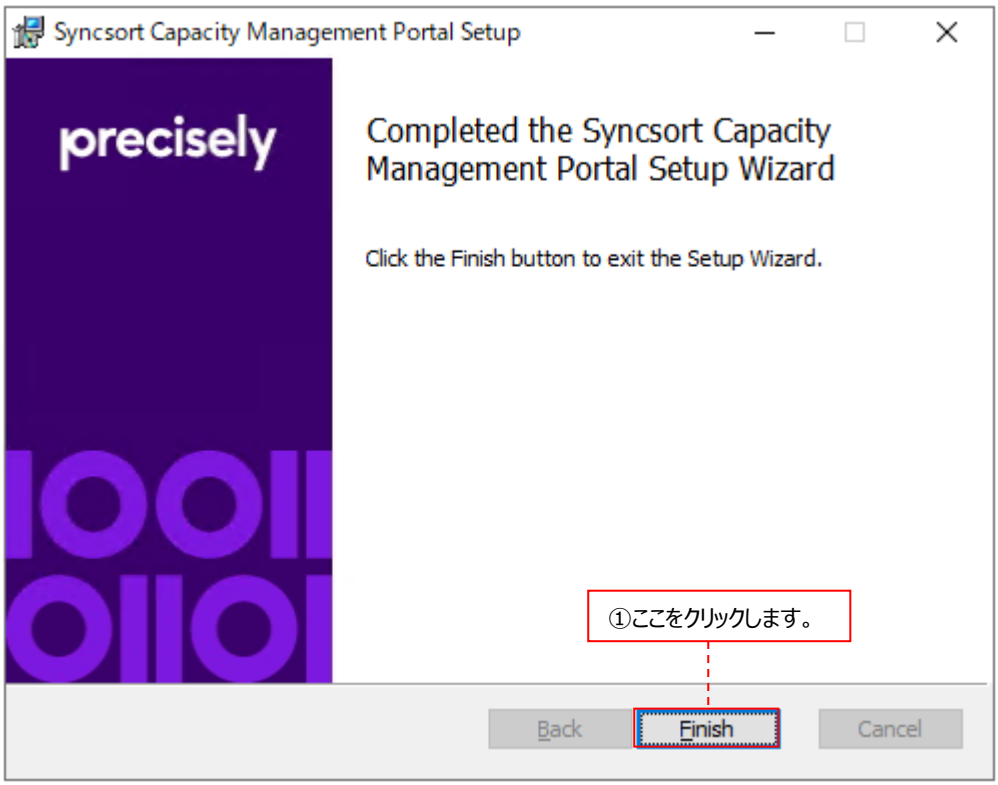
指定が終了したら、[Install]ボタンをクリックします②。

(7)インストールの開始

実際にインストールを開始します。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします。①

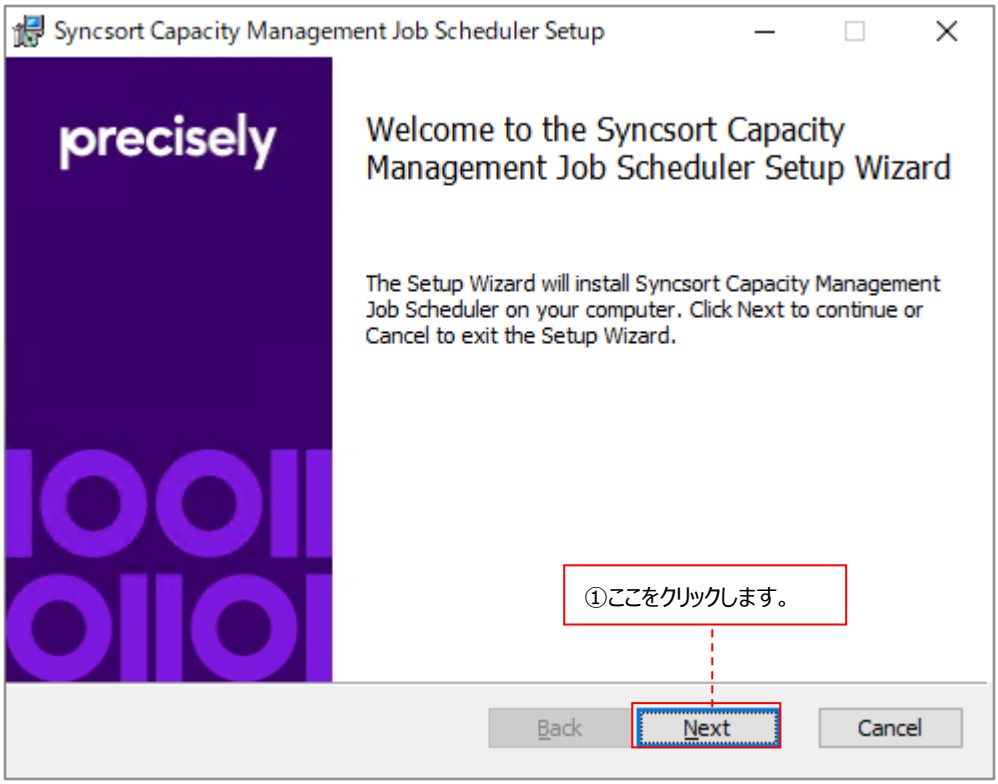


「Job Scheduler」にチェックした場合は、「3.2.2.3. Job Scheduler のインストール」に進んでください。チェックしてない場合は、「3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成」へ進んでください。

3.2.2.3. Job Scheduler のインストール

(1)Welcome 画面

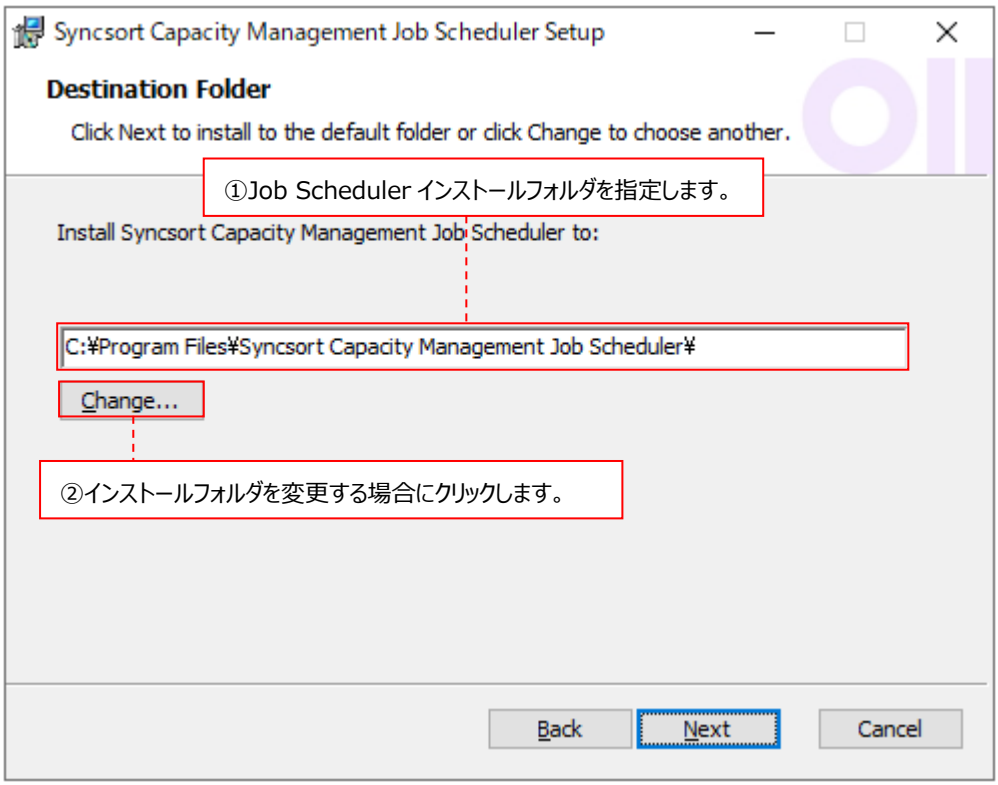
以下の画面が表示されますので、[Next >]ボタンをクリックします①。



(2)Job Scheduler インストールフォルダの指定

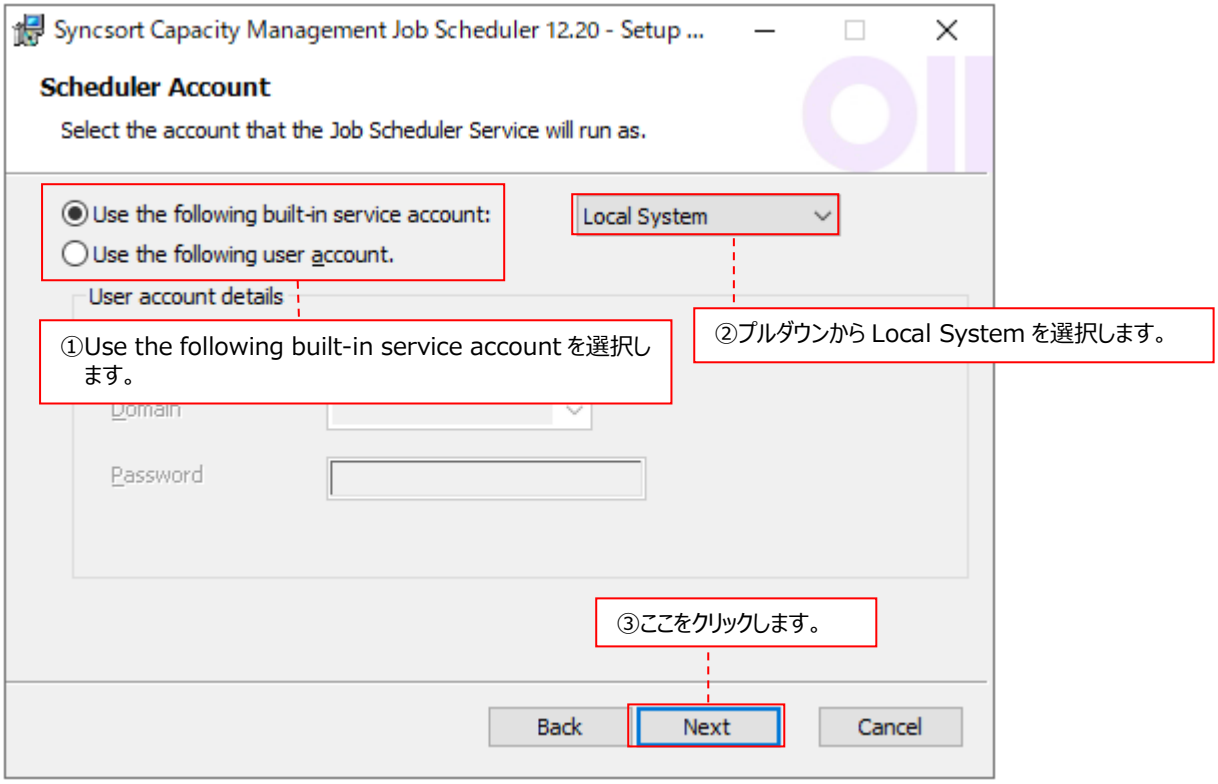
Destination Folder ダイアログでは、Job Scheduler のインストールフォルダを指定します①。

デフォルトは「C:¥Program Files¥Syncsort Capacity Management Job Scheduler¥」です。変更する場合は[Change...]をクリックして設定します②。



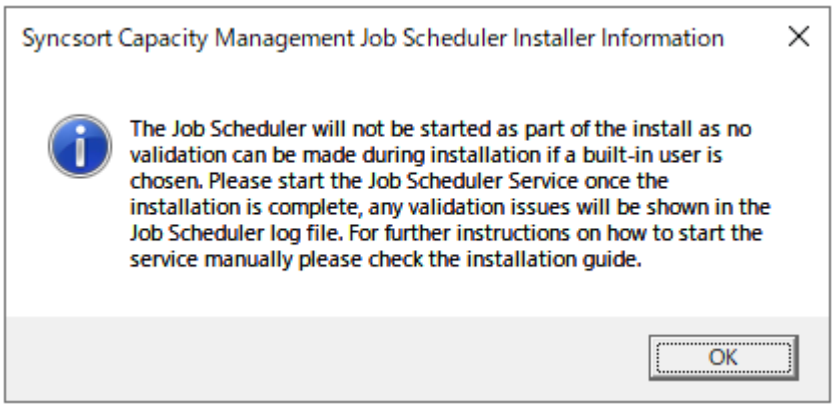
(3)Job Scheduler サービス用ログオンアカウントの指定

Scheduler Account ダイアログでは、Job Scheduler サービスを動かすログオンアカウントを指定します。
Job Scheduler サービスとは、サービスビュー機能で司るサービスです。



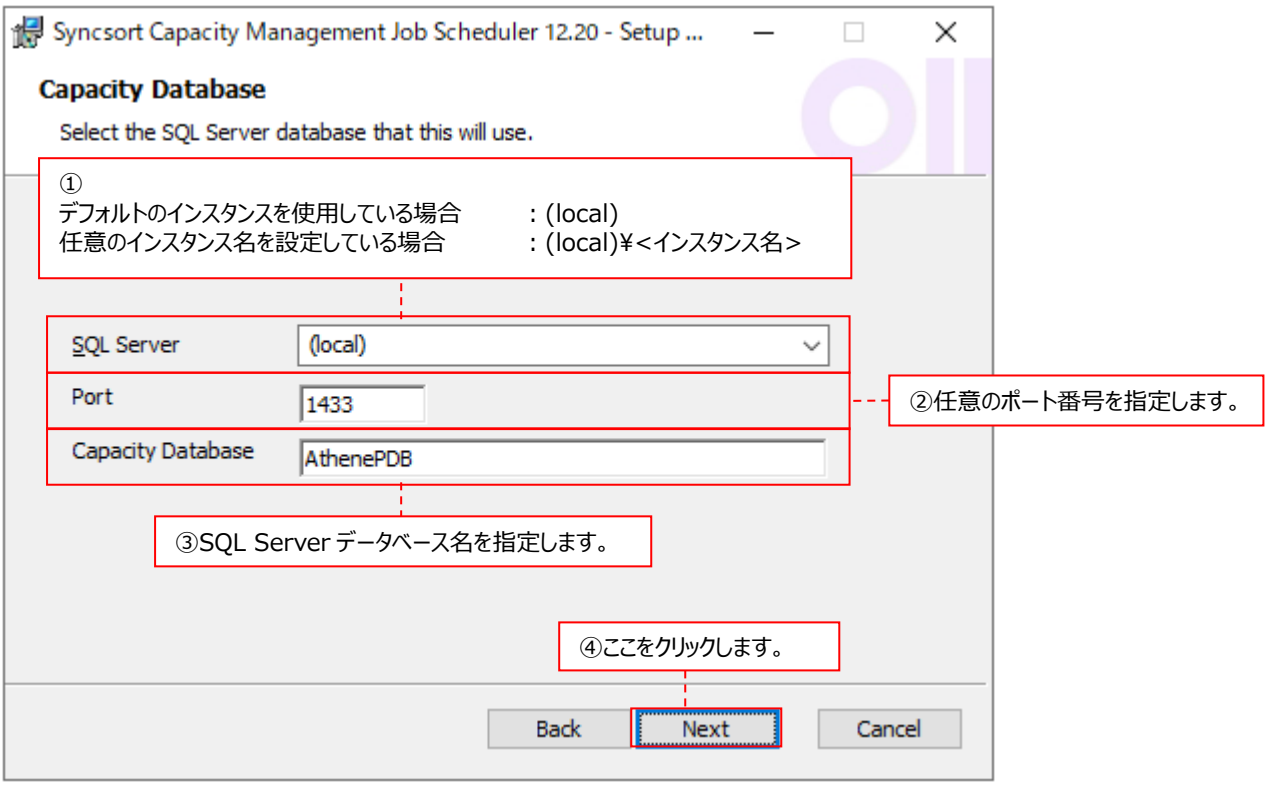
「Use the following built-in service account」を選択し①、プルダウンから「Local System」を選択します②。
選択したら[Next >]ボタンをクリックします③。

(4)以下のメッセージボックスが表示されますので、［OK］ボタンをクリックします。



(5)Job Scheduler が使用する SQL Server データベースの指定

Capacity Database ダイアログでは、Job Scheduler が使用する SQL Server インスタンス/ポート番号/データベースを指定します。



①SQL Server : SQL Server インスタンスを指定します。
デフォルトのインスタンスを使用する場合は、「(local)」と入力します。
任意のインスタンス名を設定する場合は、「(local)¥<インスタンス名>」と入力します。

②Port : 任意のポート番号（標準では 1433）を指定します。

③Capacity Database : SQL Server データベース名を指定します。

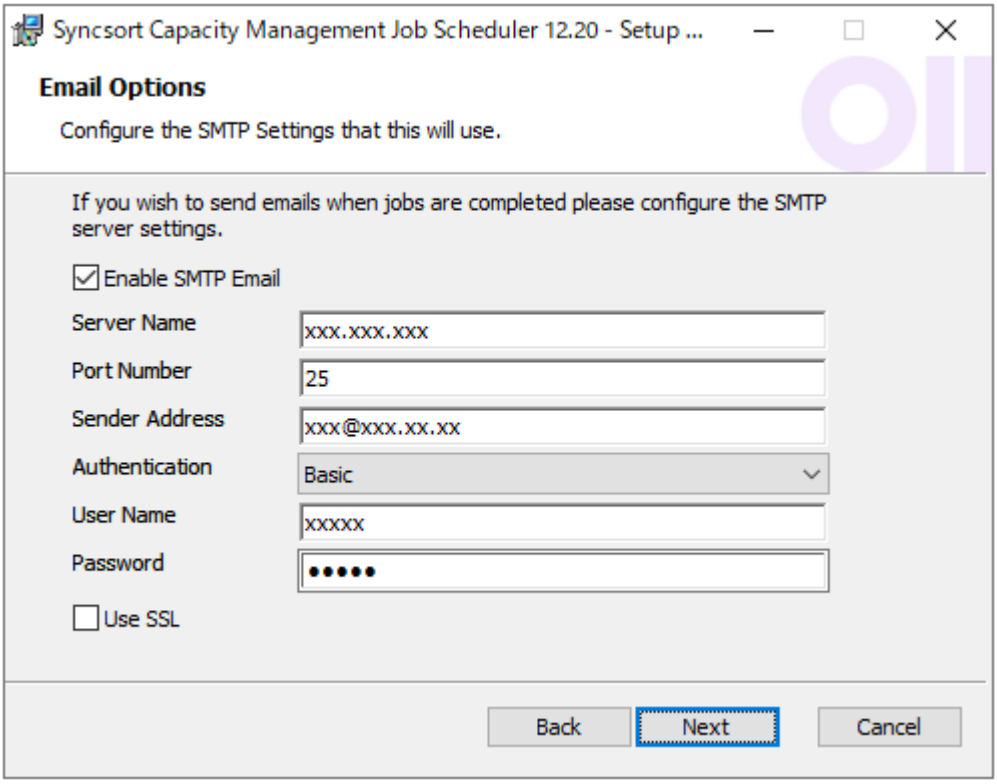
ここで指定できるデータベース名には以下の制限があります。
(a)頭文字は、「a-z」、「A-Z」、「@」、「_」、または「#」でなくてはなりません。
(b)後続する文字は(a)の文字の他に「$」、「0-9」を使用できます。名前の途中に空白は使用できません。
(c)名前は最長 123 文字まで入力できます。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(6)電子メールを送信するための設定

サービスビュー機能で、特定のイベントの結果を電子メールで通知する場合、Email Options ダイアログにて、「Enable SMTP Email」チェックボックスをオンにして、SMTP メールの設定をします。

電子メールで通知しない場合は、チェックボックスをオフのままにして[Next]ボタンをクリックします。



①Enable SMTP Email　：電子メールで通知する場合はチェックします。
②Server Name　：SMTP サーバ名
③Port Number　：電子メール送信で使用するポート番号
④Server Address　：送信元電子メールアドレス
⑤Authentication　：認証の種類を選択します。
⑥User Name　：SMTP サーバにアクセスするアカウント
⑦Password　：SMTP サーバにアクセスするアカウントのパスワード
⑧Use SSL　：SSL を使用する場合はチェックします。

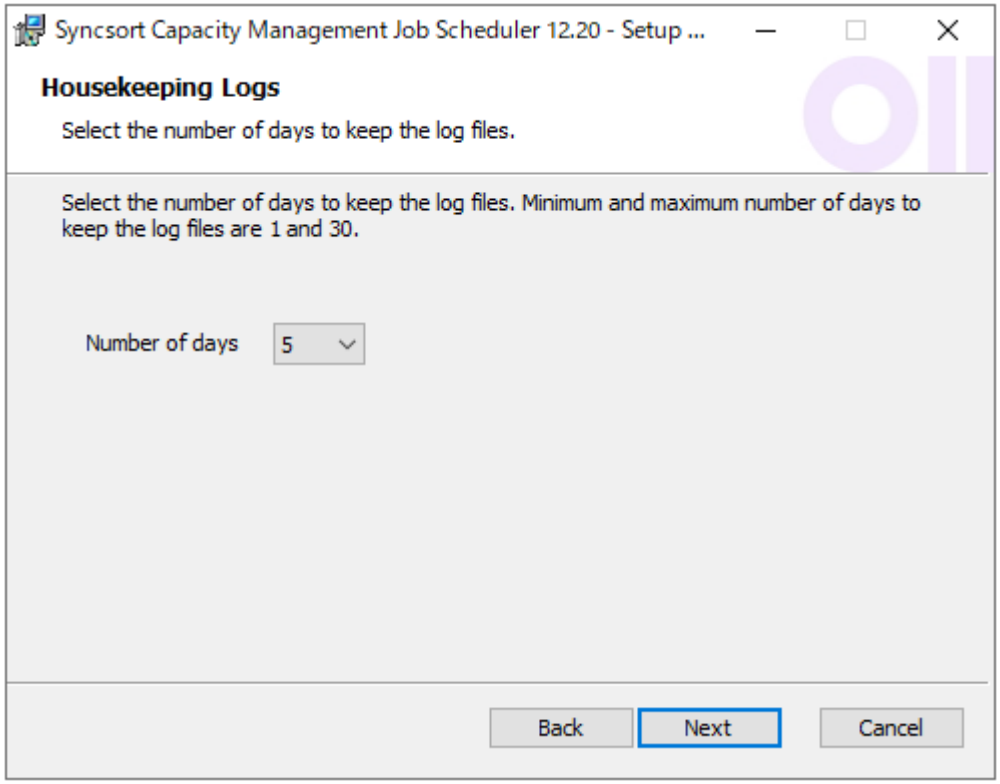
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします。

(7)ログファイルの保存期間の指定

Housekeeping Logs ダイアログでは、ログファイルの保存期間を指定します。デフォルトは 5 日間保存します。

ログファイルは、以下のフォルダに格納されます。

C:¥ProgramData¥Metron¥Logs¥Syncsort Capacity ManagementJS-<コンピュータ名>-YYYY-MM-DD-HH.log



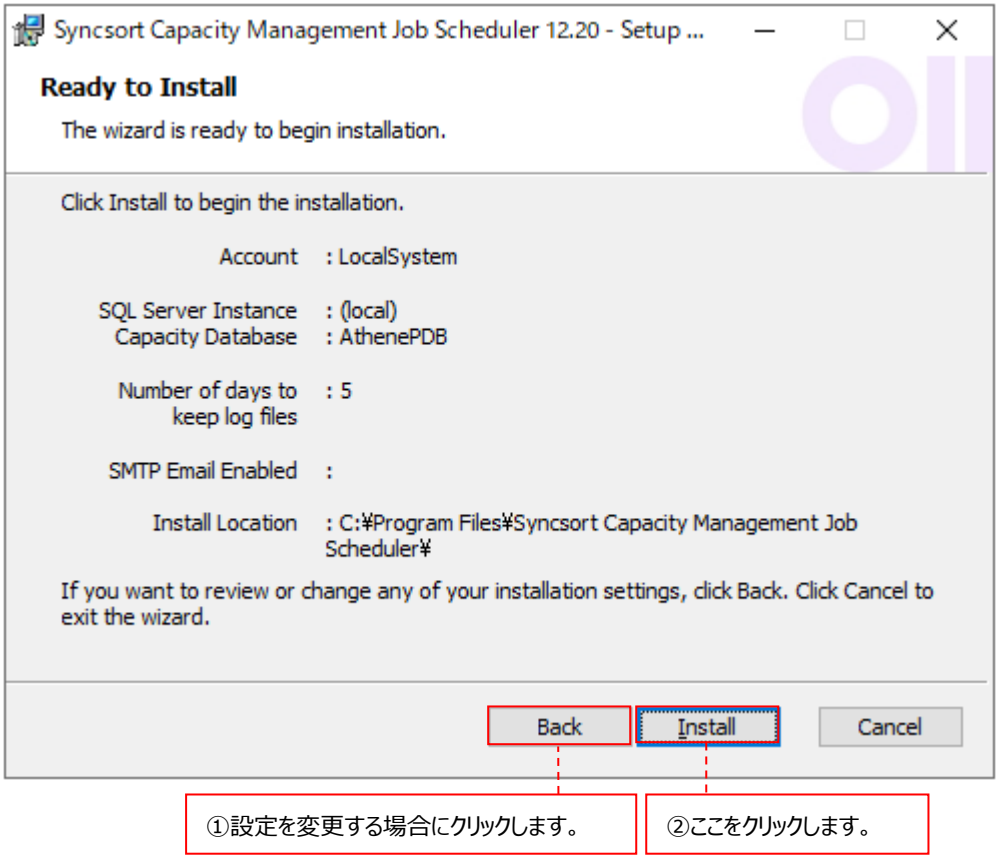
[Next >]ボタンをクリックします。

(8)インストール開始前の確認

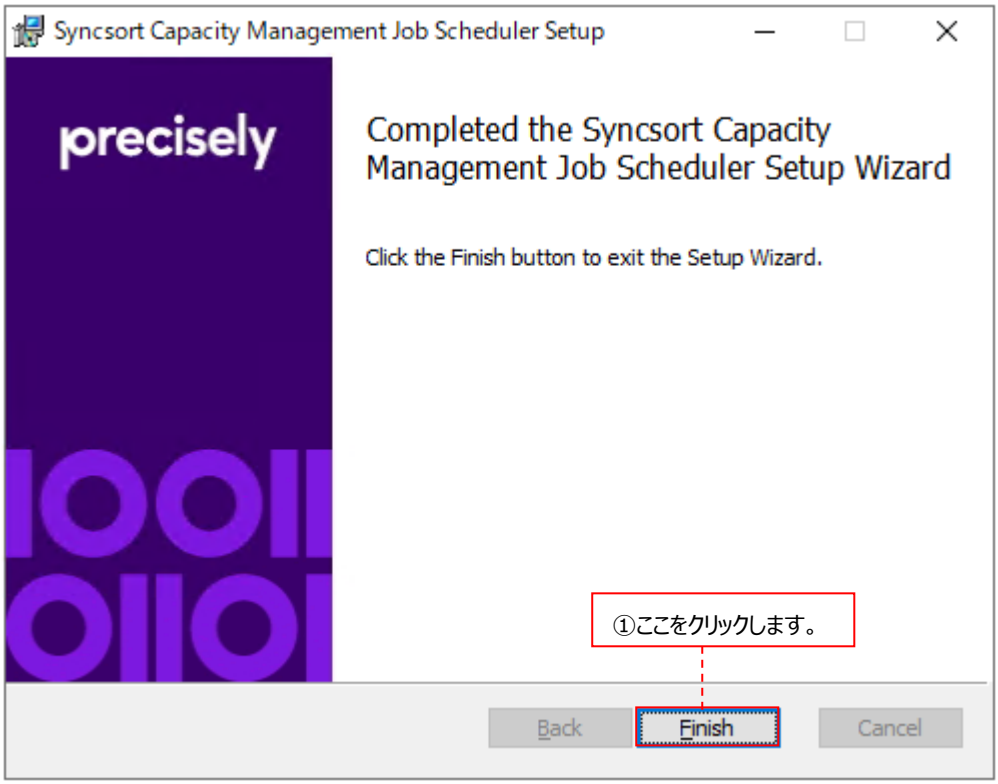
Ready to install ダイアログでは、これまでの設定で実際にインストールを開始するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

設定を変更する場合は、[Back]ボタンをクリックして前画面に戻ります①。

インストールを開始する場合は、[Install]ボタンをクリックします②。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします①。

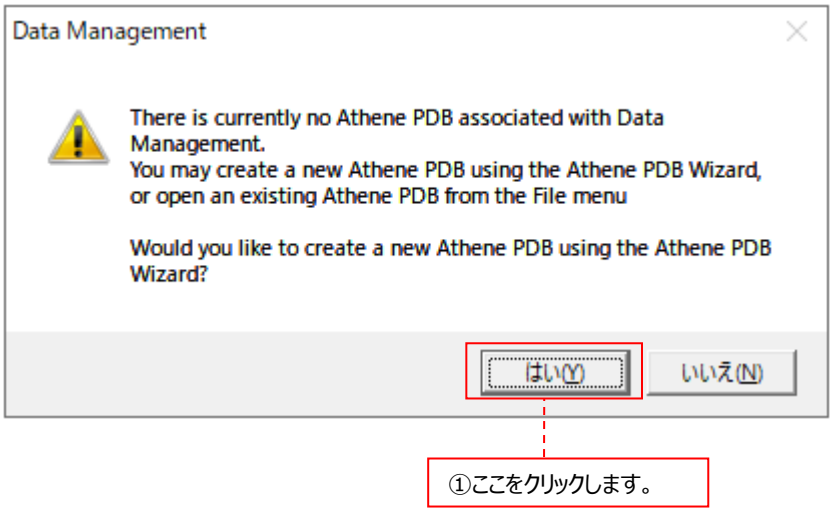


「3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成」へ進んでください。

3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース（PDB）の新規作成

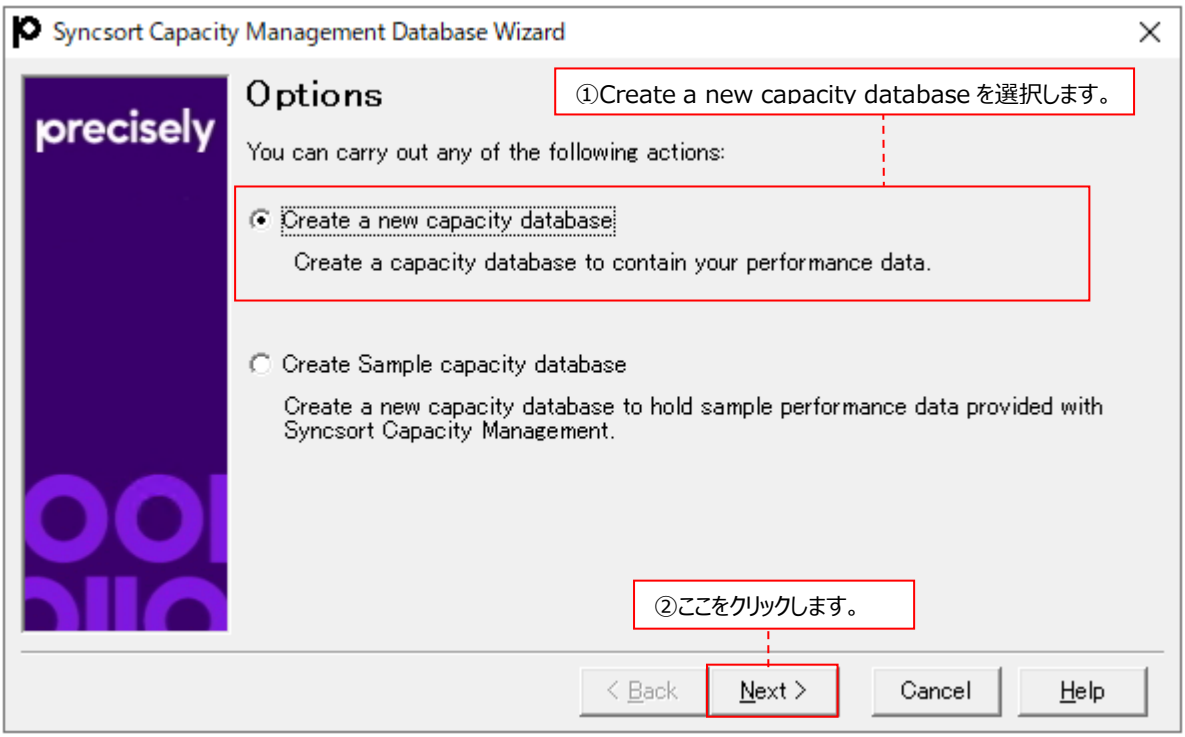
(1)Data Management の起動

「スタート」→「アプリ」→「Syncsort Capacity Management Core」→「Data Management」を起動します。
以下のメッセージボックスが表示されますので、[はい(Y)]ボタンをクリックします①。



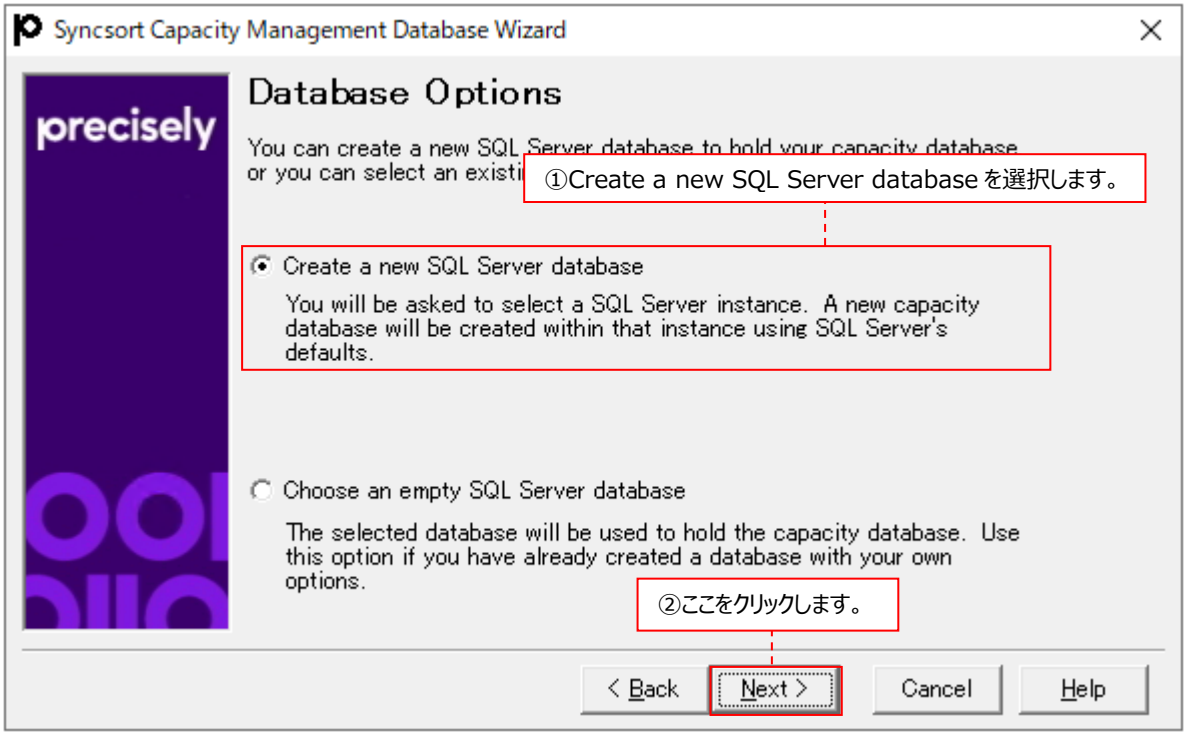
(2)Syncsort Capacity Management Database Wizard の起動

Syncsort Capacity Management Database Wizard が起動します。Options ダイアログでは、Create a new capacity database を選択し①、[Next >]ボタンをクリックします②。



(3)データベース作成オプションの選択

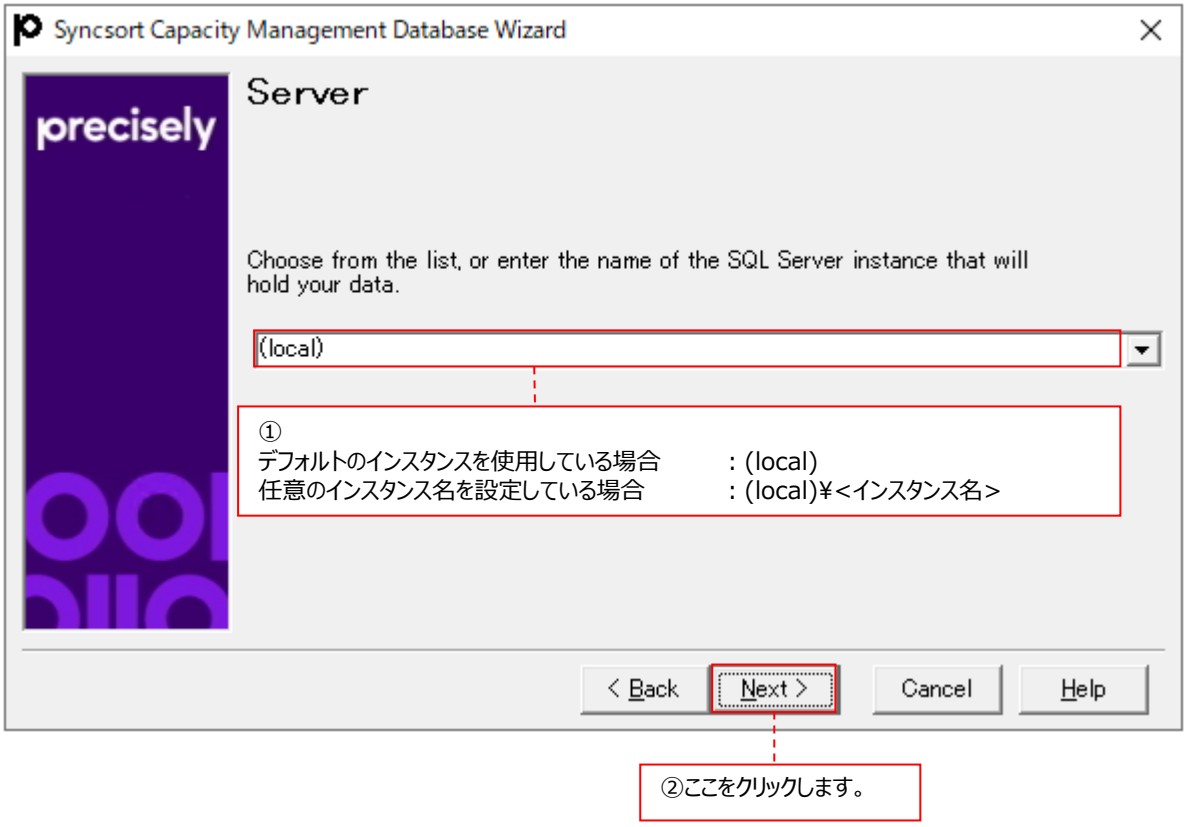
Database Options ダイアログでは、Create a new SQL Server database を選択し①、[Next >]ボタンをクリックします②。



(4)SQL Server データベースを格納する SQL Server インスタンスの指定

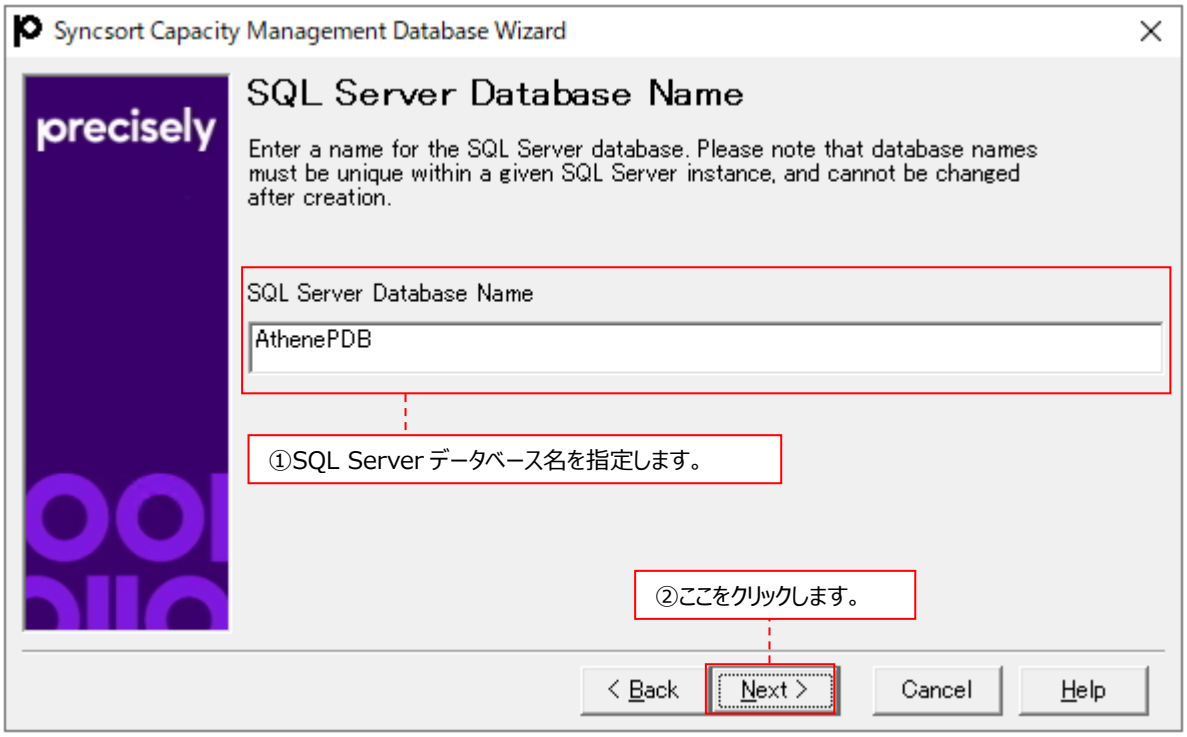
Server ダイアログでは、SQL Server データベースを格納する SQL Server インスタンス名を指定します。
「3.2.2.1. Control Center のインストール」の「(6)Control Center が使用する SQL Server データベースの指定」で指定したインスタンス名を指定してください。

デフォルトのインスタンスを使用している場合は、「(local)」として①、
[Next >]ボタンをクリックします②。
任意のインスタンス名を設定している場合は、「(local)¥<インスタンス名>」として①、
[Next >]ボタンをクリックします②。



(5)SQL Server データベース名の指定

SQL Server Database Name ダイアログでは、SQL Server データベースに対する名前を指定します。
「3.2.2.1. Control Center のインストール」の「(6)Control Center が使用する SQL Server データベースの指定」で指定したデータベース名を指定してください。



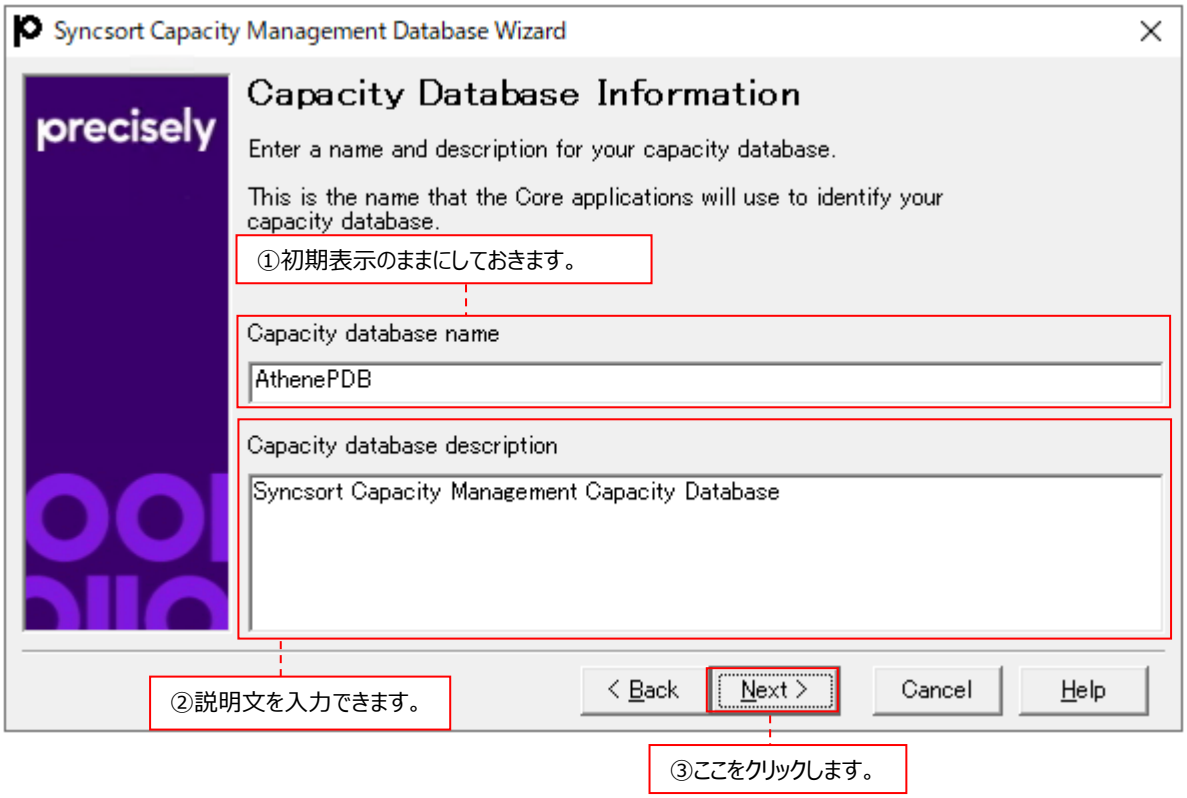
ここで指定できるデータベース名には以下の制限があります。

(a)頭文字は、「a-z」、「A-Z」、「@」、「_」、または「#」でなくてはなりません。
(b)後続する文字は(a)の文字の他に「$」、「0-9」を使用できます。名前の途中に空白は使用できません。
(c)名前は最長 123 文字まで入力できます。

SQL Server Database Name に名前を指定し①、[Next >]ボタンをクリックします②。

(6)パフォーマンスデータベース(PDB)名の指定

Control Center が使用するパフォーマンスデータベース(PDB)の名前を指定する Capacity Database Information ダイアログが表示されますが、「(5)SQL Server データベース名の指定」の SQL Server データベース名と同じ名前を指定します。



①Capacity database name

「(5)SQL Server データベース名の指定」で指定した名前が初期表示されていますので、そのままにしておきます。

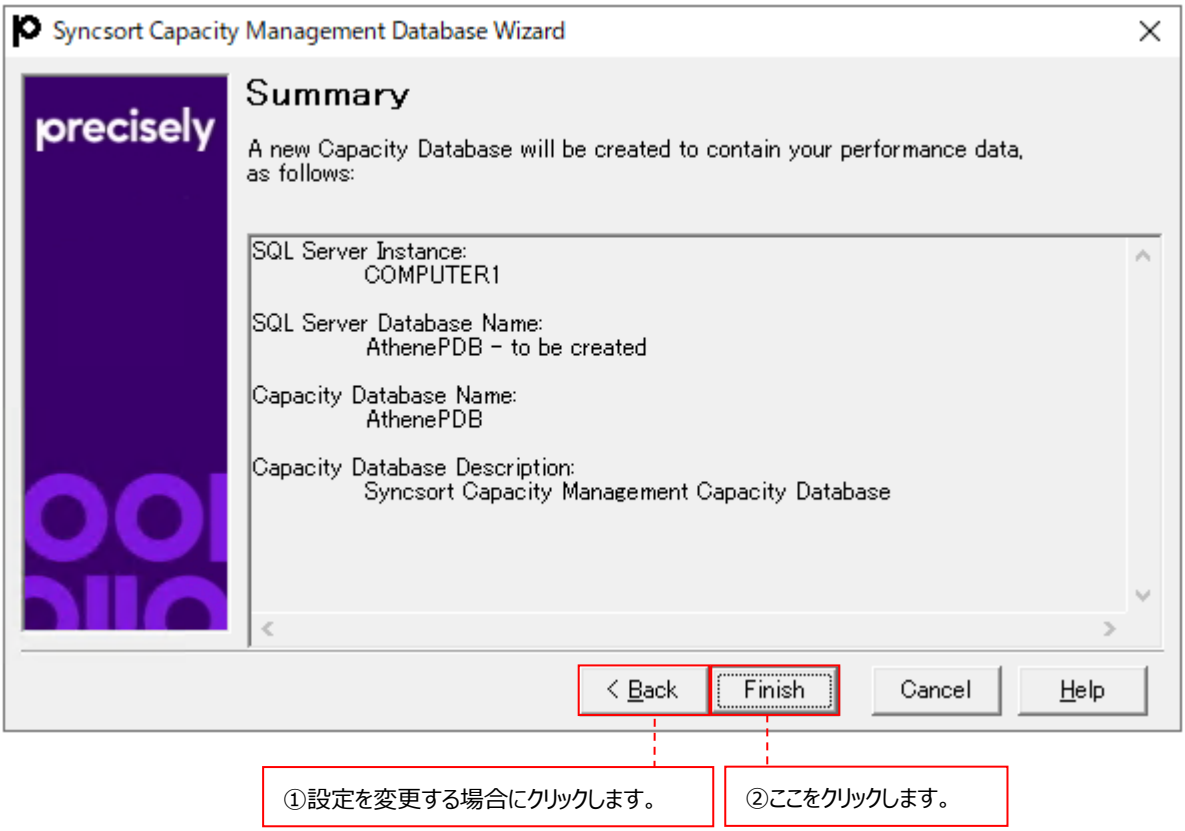
②Capacity database description

パフォーマンスデータベース(PDB)に対する説明文を入力できます。必須の入力項目ではありません。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

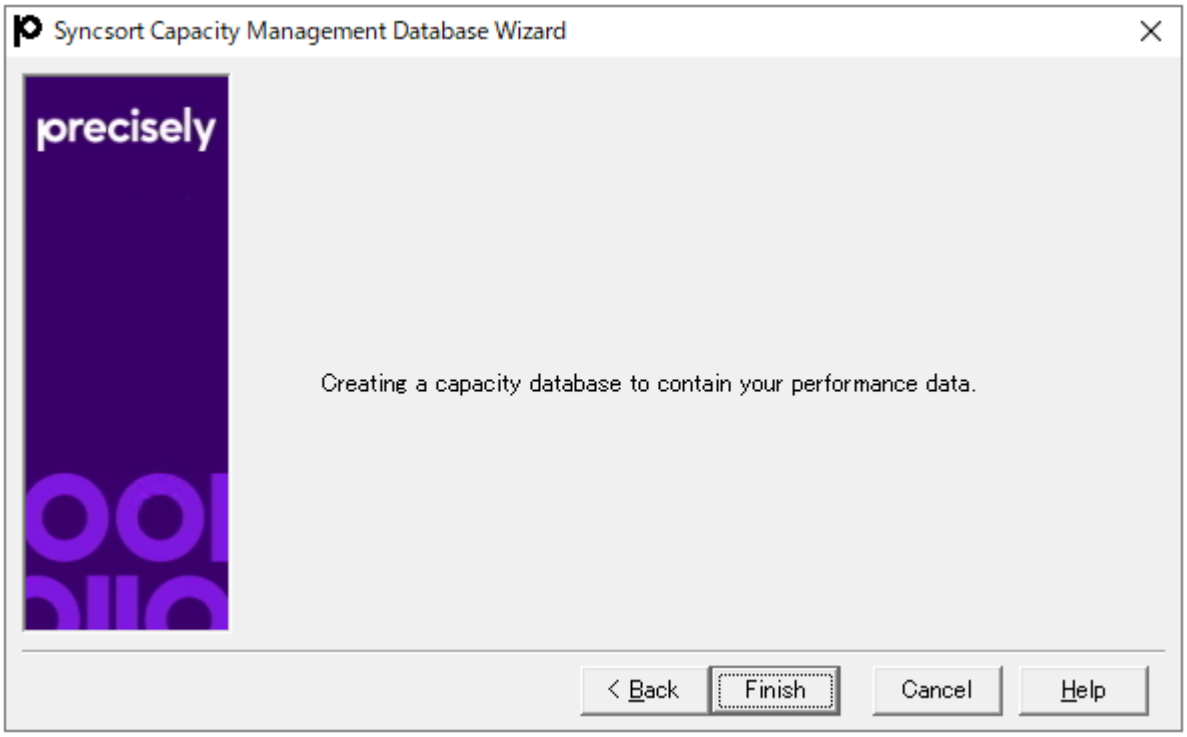
(7)データベース作成情報の確認

Summary ダイアログでは、これまで設定したデータベース作成情報が表示されます。
設定を変更する場合は[<Back]ボタンをクリックして前画面に戻ります①。
設定に問題が無ければ[Finish]ボタンをクリックします②。

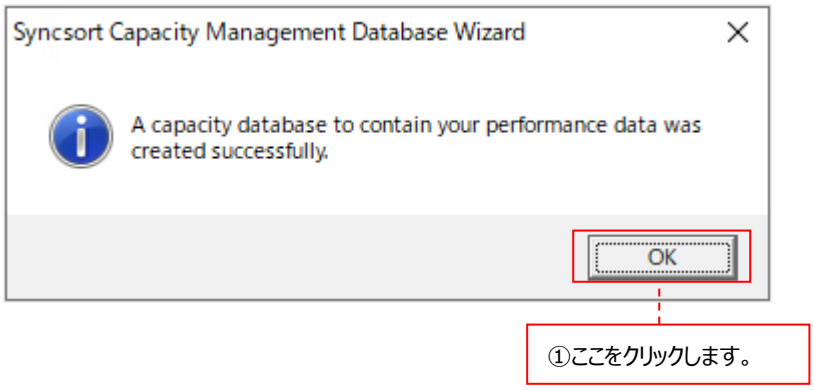


(8)パフォーマンスデータベース(PDB)の作成

パフォーマンスデータベース(PDB)の作成を開始します。
この処理は数分かかりますので、しばらくお待ちください。

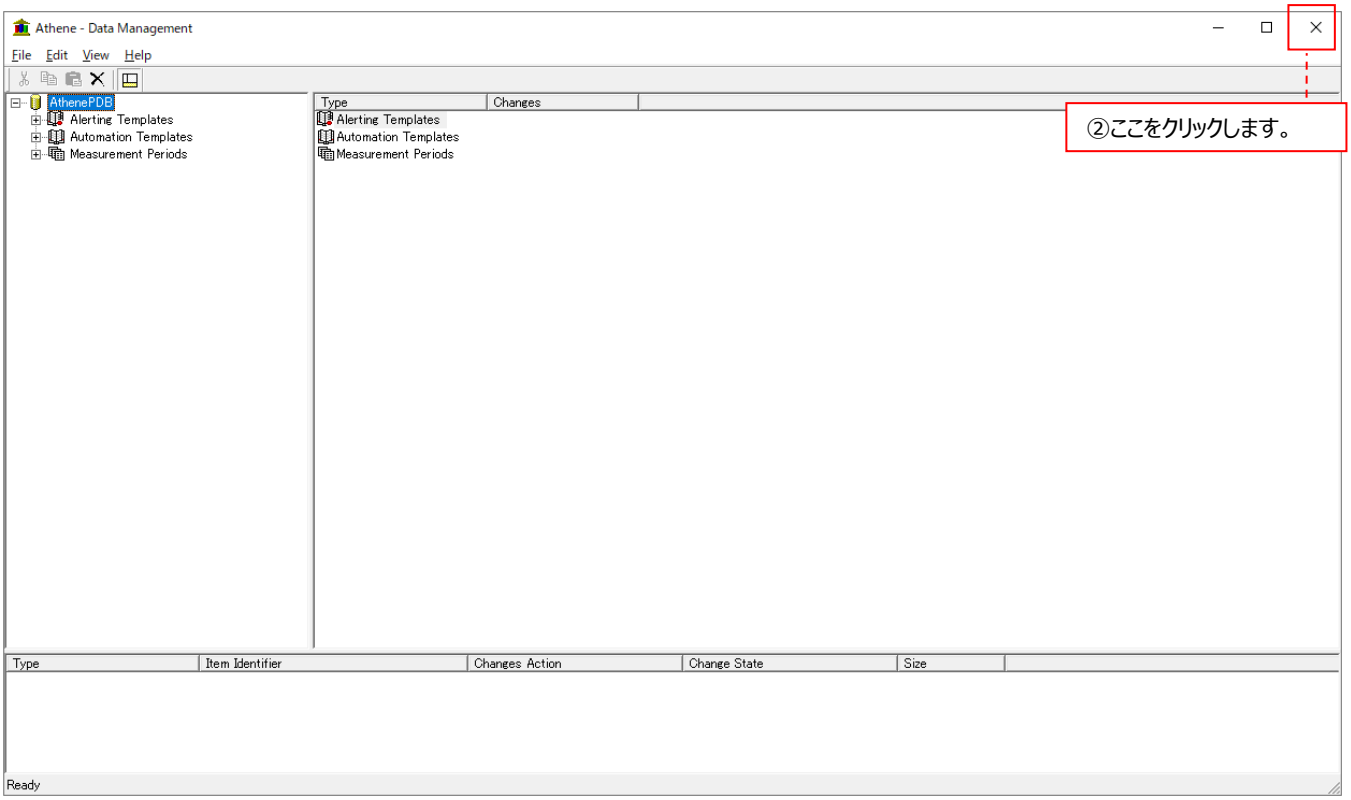


パフォーマンスデータベース(PDB)の作成が終了すると、以下のメッセージボックスが表示されますので、



[OK]ボタンをクリックします①。

以下のウィンドウが立ち上がっている状態になっていますので、右上の「×」をクリックして閉じてください②。

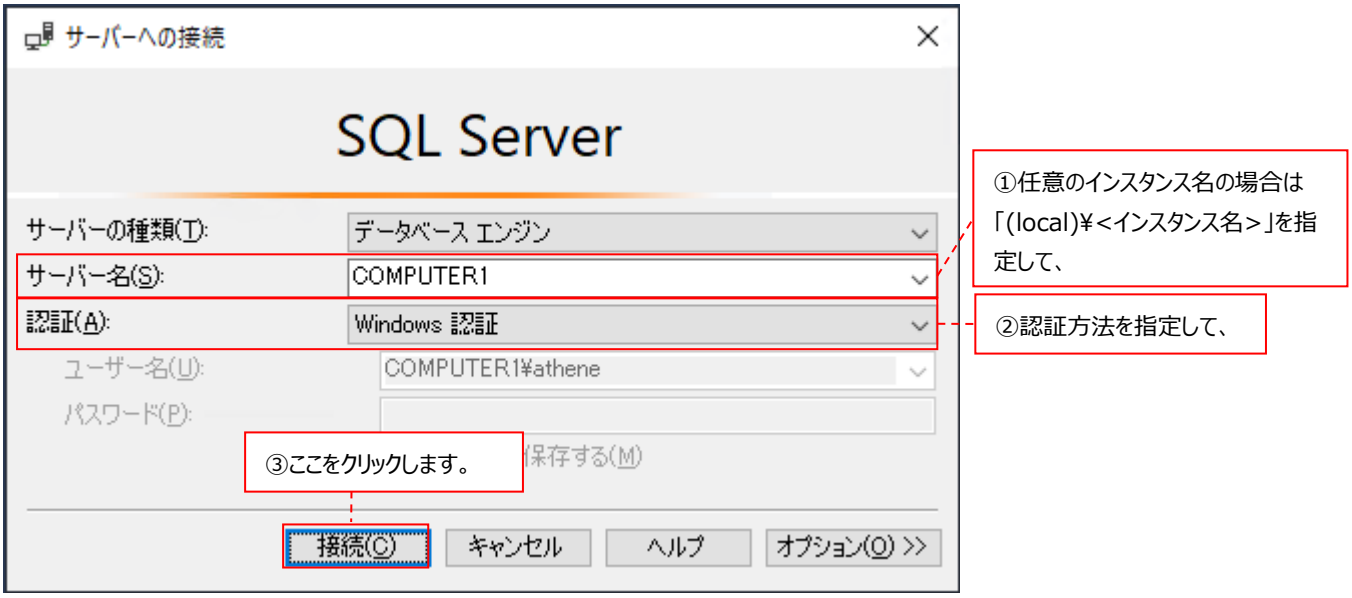


「3.2.4. パフォーマンスデータベース（PDB）の復旧モデルの変更」へ進んでください。

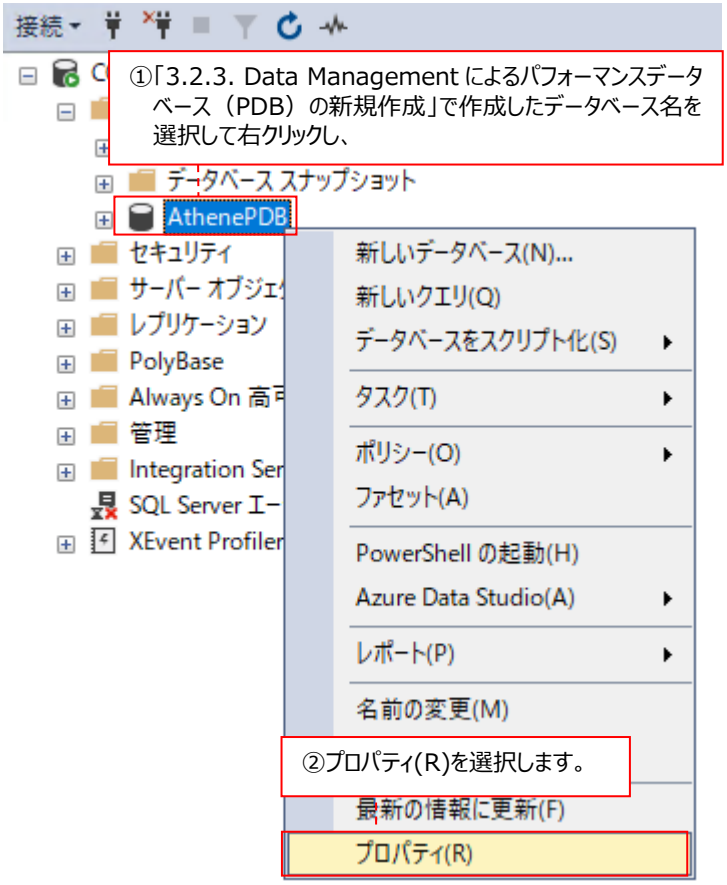
3.2.4. パフォーマンスデータベース（PDB）の復旧モデルの変更

パフォーマンスデータベース(PDB)は一つの SQL Server データベースですので、稼働状況に応じてトランザクションログのサイズが増大します。トランザクションログのサイズをなるべく抑えるため、パフォーマンスデータベース(PDB)の復旧モデルを変更します。
ここでは、例として SQL Server 2019 における設定手順を紹介します。
下記の復旧モデル変更手順は、管理ツール「SQL Server Management Studio」が使用可能であることを前提としています。
(SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません)

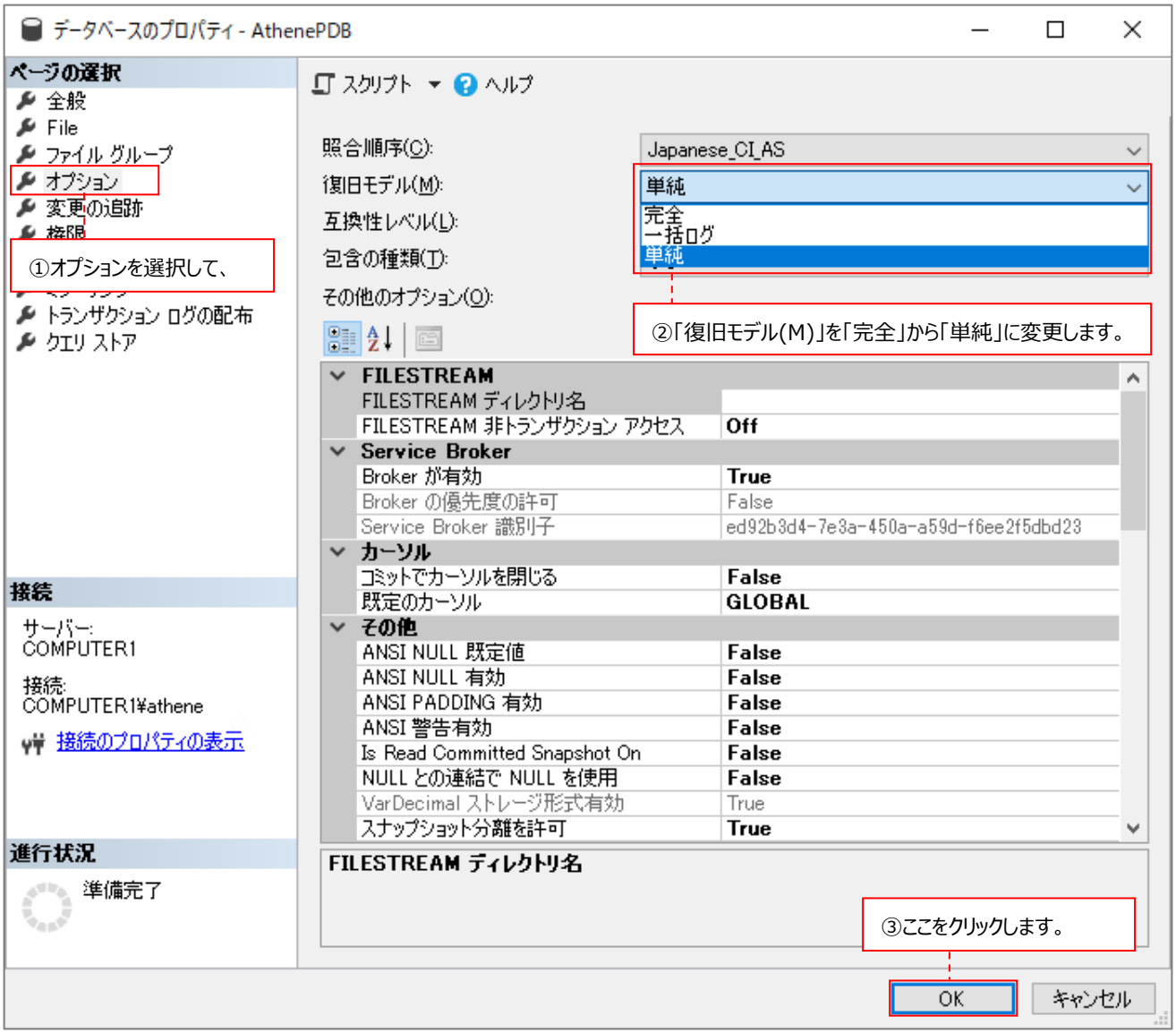
(1)「スタート」→「アプリ」→「Microsoft SQL Server Tools 18」→「Microsoft SQL Server Management Studio 18」を起動します。サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、
SQL Server インストール時に任意のインスタンス名を設定している場合は、「(local)¥<インスタンス名>」、
既定のインスタンスの場合は、「管理用マシンのコンピュータ名」を指定します①。
また、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して②、[接続(C)]ボタンをクリックします③。



(2)SQL Server Management Studio メイン画面の左側に表示されるツリーの中から、「3.2.3. Data Management によるパフォーマンスデータベース(PDB)の新規作成」で作成したデータベース名を選択して右クリックし①、「プロパティ(R)」を選択します②。

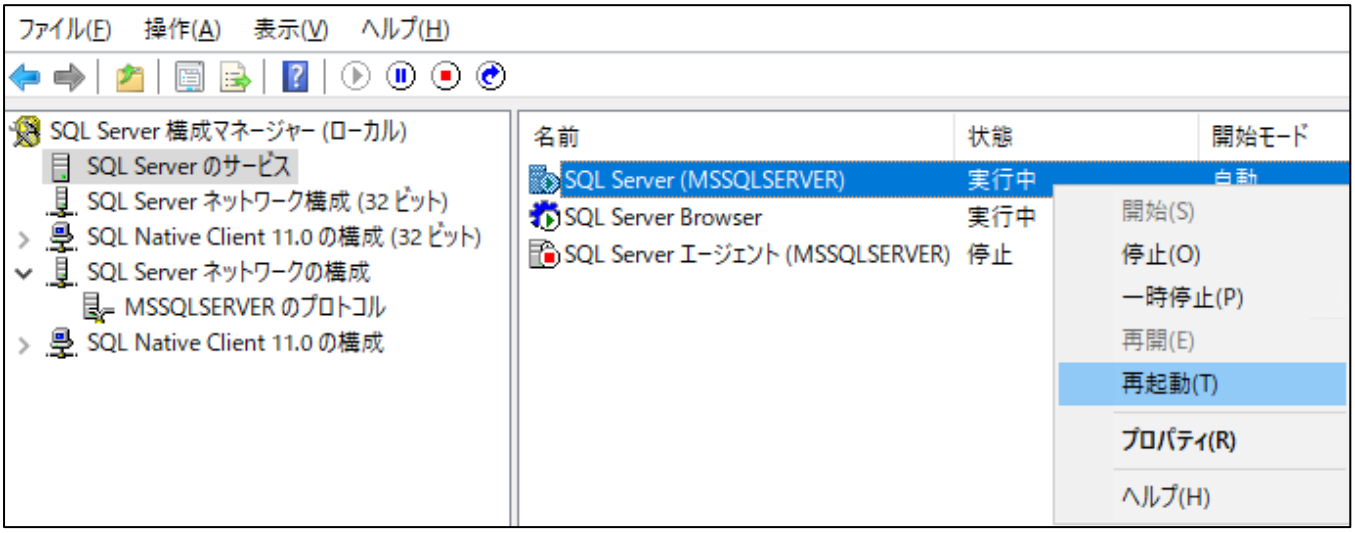


(3)画面左側の「ページの選択－オプション」を選択して①、「復旧モデル(M)」を「完全」から「単純」に変更します②。
[OK]ボタンをクリックした後、SQL Server Management Studio を終了します③。



(4)設定を有効にするために SQL Server サービスの再起動が必要になります。
「スタート」→「アプリ」→「Microsoft SQLServer 2019」→「SQL Server 2019 構成マネージャー」を起動します。

(5)下図のように「SQL Server のサービス」→「SQL Server(インスタンス名)」→右クリック→「再起動(T)」を選択します。



「3.2.5. Control Center の開始」へ進んでください。

3.2.5. Control Center の開始

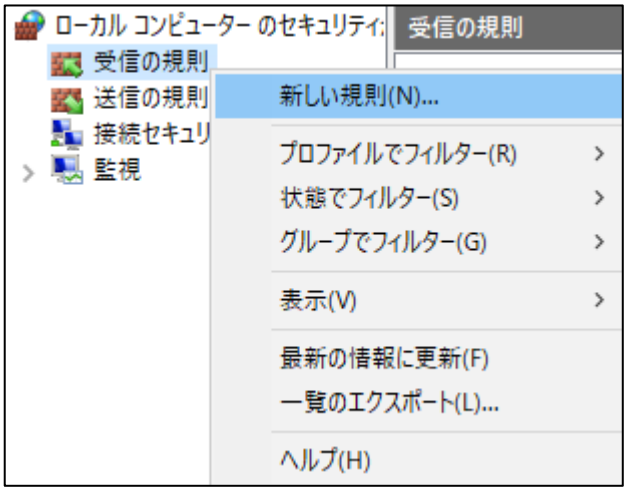
スタートメニューより「Windows 管理ツール」→「サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center サービスを開始します。
「3.2.6. Windows ファイアウォールの規則登録」へ進んでください。

3.2.6. Windows ファイアウォールの規則登録

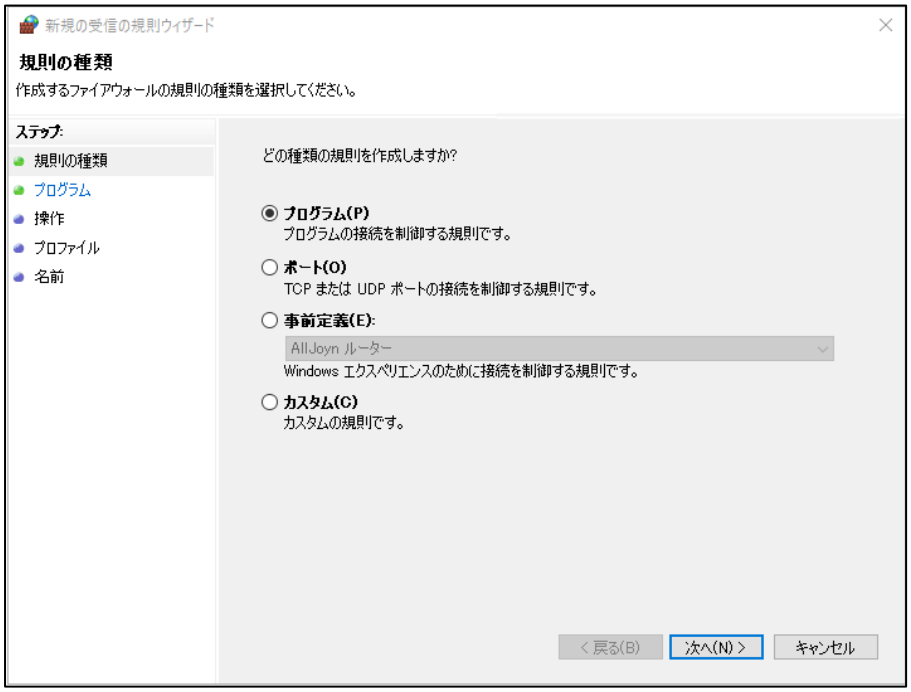
Control Center は、対象サーバとの通信手段(ファイル転送方法)として、基本的に Unix/Linux 系システムの場合は FTP、Windows システムの場合はフォルダ共有を使用します。管理用マシンの Windows ファイアウォールが有効になっている環境では、ファイアウォールによって対象サーバとの通信がブロックされる場合があります。
ここでは、Windows ファイアウォールの規則に Control Center を登録する手順を説明します。

(1)「コントロールパネル」→「セキュリティが強化された Windows Defender ファイアウォール」を起動します。

(2)画面左側の「受信の規則」を右クリックし、[新しい規則を(N)...]ボタンをクリックします。

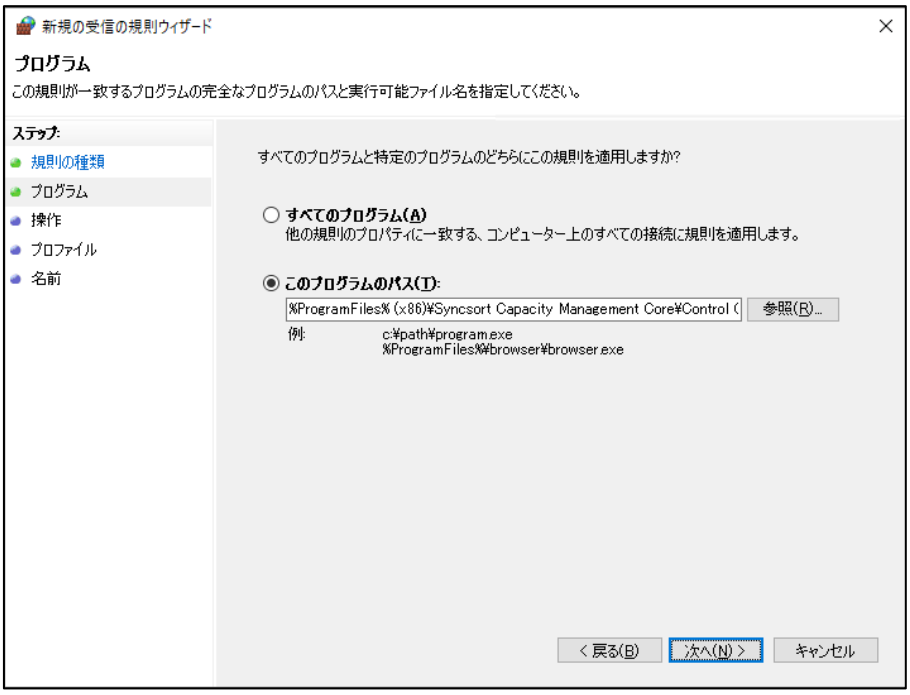


(3)「規則の種類」画面で「プログラム(P)」を選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。

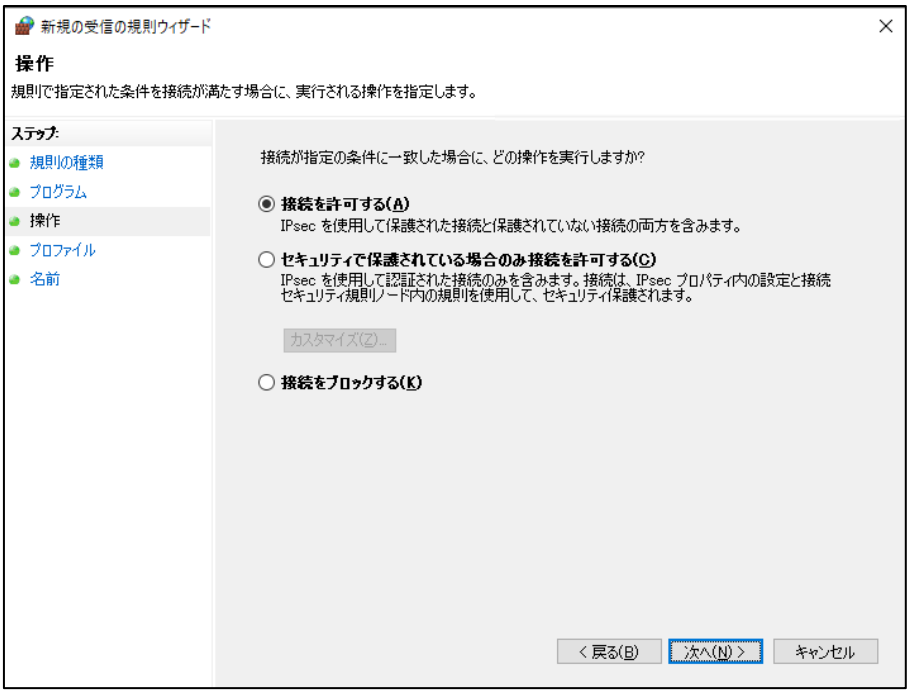


(4)「プログラム」画面の「このプログラムのパス(T)」にて[参照(R)...]をクリックし、「¥<Control Center インストールフォルダ>¥Control Centre¥Syncsort Capacity ManagementCC.exe」を選択した後、[次へ(N)]ボタンをクリックします。

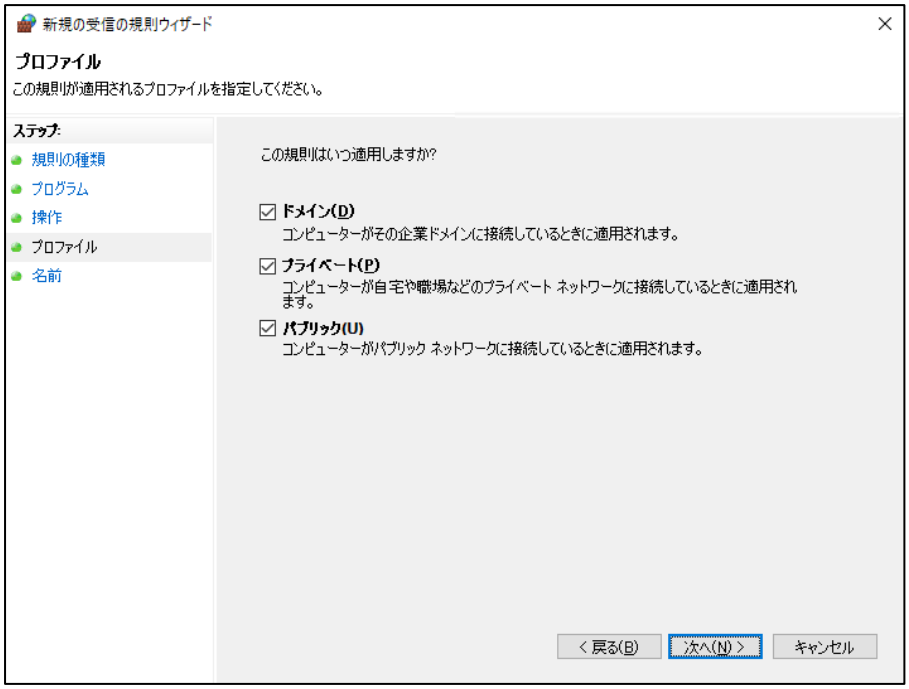
(例)C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Core¥Control Center¥AtheneCC.exe



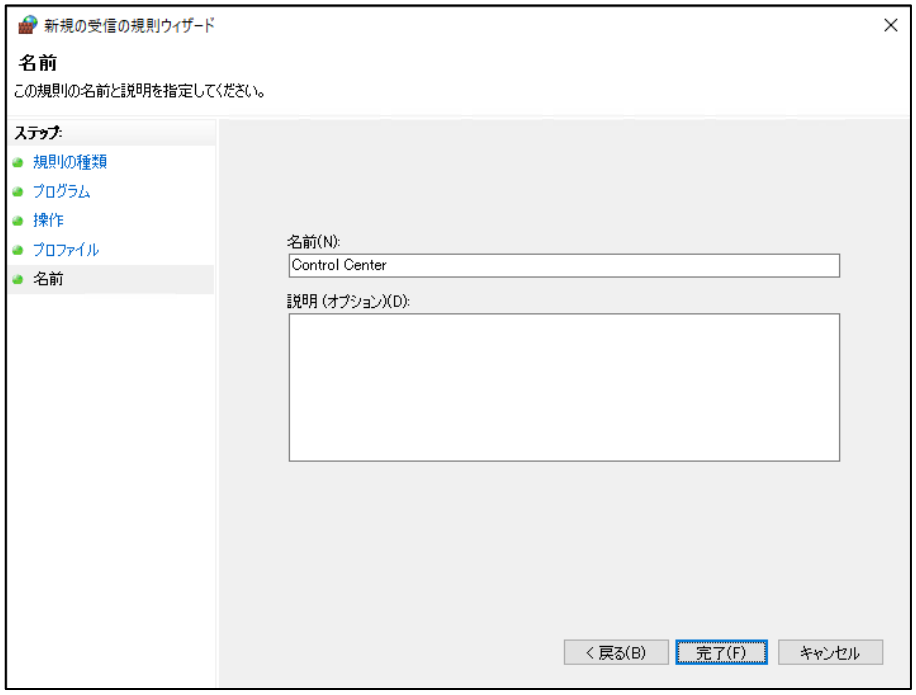
(5)「操作」画面で「接続を許可する(A)」を選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。



(6)「プロファイル」画面ですべてを選択し、[次へ(N)]ボタンをクリックします。



(7)「名前」画面で規則の名前(例:Control Center)を指定し、[完了(F)]ボタンをクリックします。



「3.4. Portal を使用する場合の権限設定」へ進んでください。

3.3. 同一マシン上でのバージョン 11.20 からのアップグレード手順

ここでは、同一マシン上で Control Center のバージョン 11.20 から 12.20 にアップグレードする場合の手順を説明します。
以下の順番にてインストール作業を進めていきます。

3.3.1. Control Center の停止／既存のパフォーマンスデータベース（PDB）のバックアップ
↓
3.3.2. Athene 11.20 のアンインストール
↓
3.3.3. Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール
↓
3.3.4. パフォーマンスデータベース（PDB）のアップグレード
↓
3.3.5. Control Center の再開

3.3.1. Control Center の停止／既存のパフォーマンスデータベース(PDB)のバックアップ

Control Center のアップグレードに備えて、既存のパフォーマンスデータベース(PDB)をバックアップします。

(1)Control Center をインストールする管理用マシンに、Administrators グループに所属する Control Center 専用ユーザまたは Administrator ユーザでログオンします。

(2)スタートメニューより「Windows 管理ツール」→「サービス」にて、下記の順番で Control Center 関連サービスを停止します。

1. Athene Control Center
2. Athene Scheduler
3. Athene Job Scheduler（Job Scheduler がインストールされている場合）

(3)「第 5 章 パフォーマンスデータベース(PDB)の運用」～「5.1.2.パフォーマンスデータベースのバックアップ設定」を参照していただき、既存のパフォーマンスデータベース(PDB)のバックアップを取得してください。
または、SQL Server Management Studio などの管理ツールを使用してバックアップを取得してください。

バックアップの取得後、「3.3.2. Athene 11.20 のアンインストール」へ進んでください。

3.3.2. Athene 11.20 のアンインストール

アーキテクチャの変更により、Athene 11.20 をアンインストールしてから、Syncsort Capacity Management 12.20 にアップグレードする必要があります。そのため、以下の手順に従って削除を行ってください。

(1)現行の設定内容を確認

Syncsort Capacity Management 12.20 にアップグレードする前に以下の設定を確認しておいてください。Syncsort Capacity Management 12.20 をインストールする際に指定する必要があります。

・Administrators グループに所属する Control Center 専用ユーザ
・Control Center の作業フォルダのパス
C:¥Program Data¥Metron¥Work（デフォルトパス）

(2)INI Files フォルダ（デフォルトパス）を退避

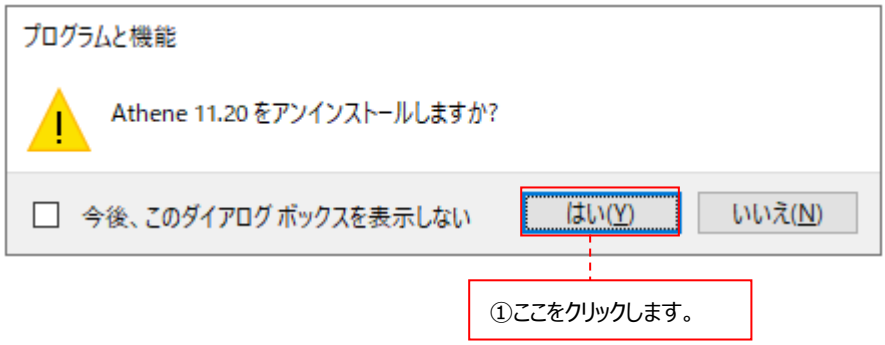
C:¥Program Data¥Metron¥INI Files フォルダ（デフォルトパス）を退避してください。

(3)プログラムと機能

「コントロールパネル→プログラムと機能」でアンインストールを行います。

・Athene 11.20

「Athene 11.20」を選択し、[アンインストール]をクリックします。続いて表示されるメッセージボックスにて[はい(Y)]ボタンをクリックしてアンインストールを行います①。



・Athene Portal

「Athene Portal」を選択し、[アンインストール]をクリックします。続いて表示されるメッセージボックスにて[はい(Y)]ボタンをクリックしてアンインストールを行います。

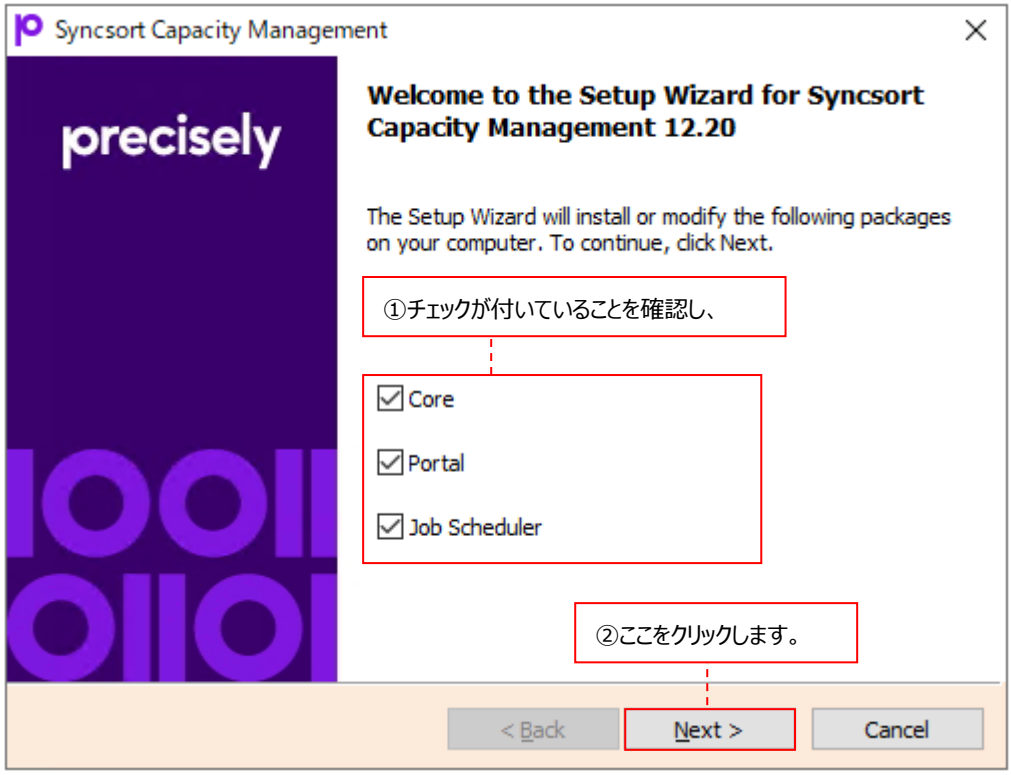
・Athene Job Scheduler

「Athene Job Scheduler」を選択し、[アンインストール]をクリックします。続いて表示されるメッセージボックスにて[はい(Y)]ボタンをクリックしてアンインストールを行います。

3.3.3. Syncsort Capacity Management 12.20 のインストール

(1)セットアップ
セットアップメディアをドライブにセットします。

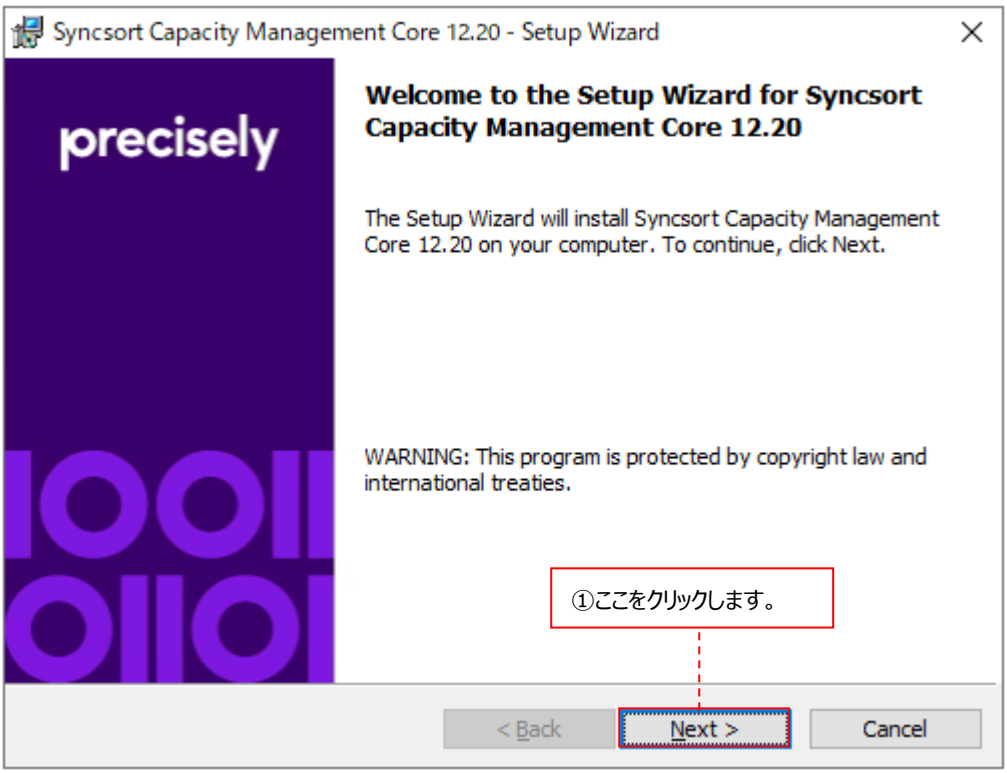
(2)セットアッププログラムの起動
「x:¥12.20CC01¥Athene¥Setup.exe」を右クリックし[管理者として実行(A)]オプションを選択して起動すると、以下の画面が表示されます。
Control Center をインストールする場合は、「Core」にチェックが付いていること、
Portal をインストールする場合は、「Portal」と「Job Scheduler」にチェックが付いていることを確認し①、[Next >]をクリックします②。



3.3.3.1. Control Center のインストール

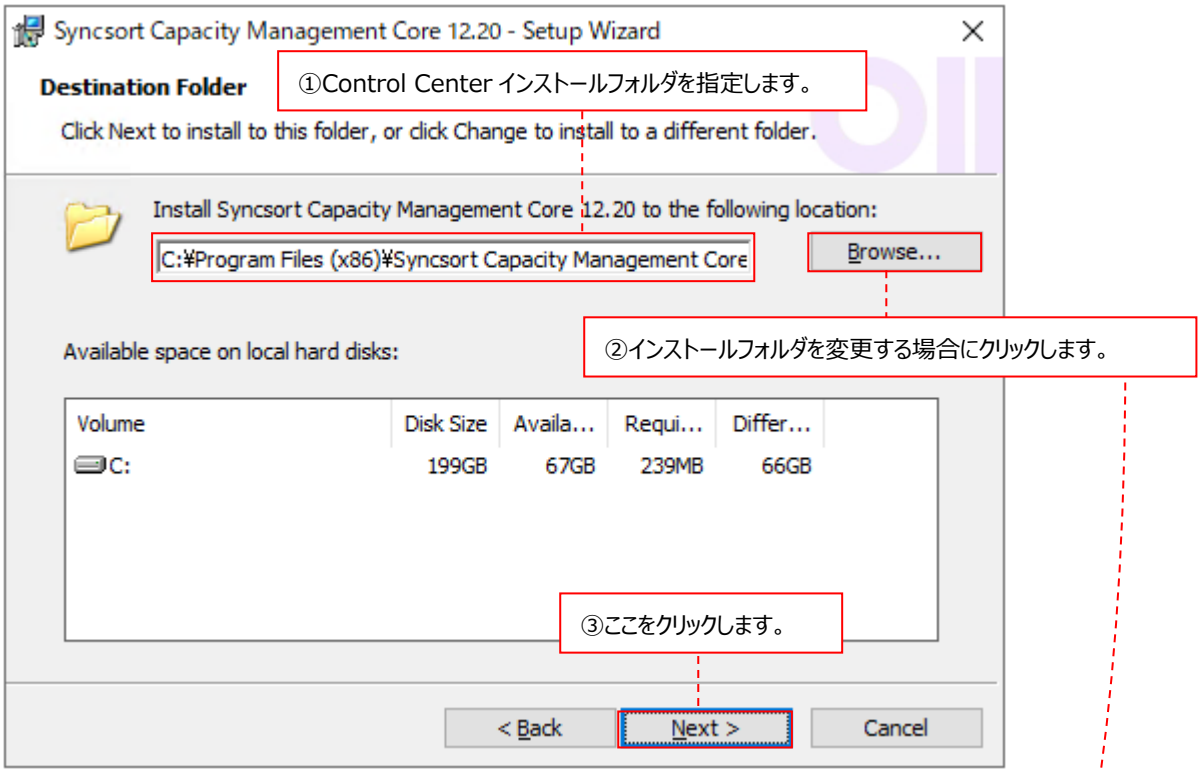
(1)Welcome 画面

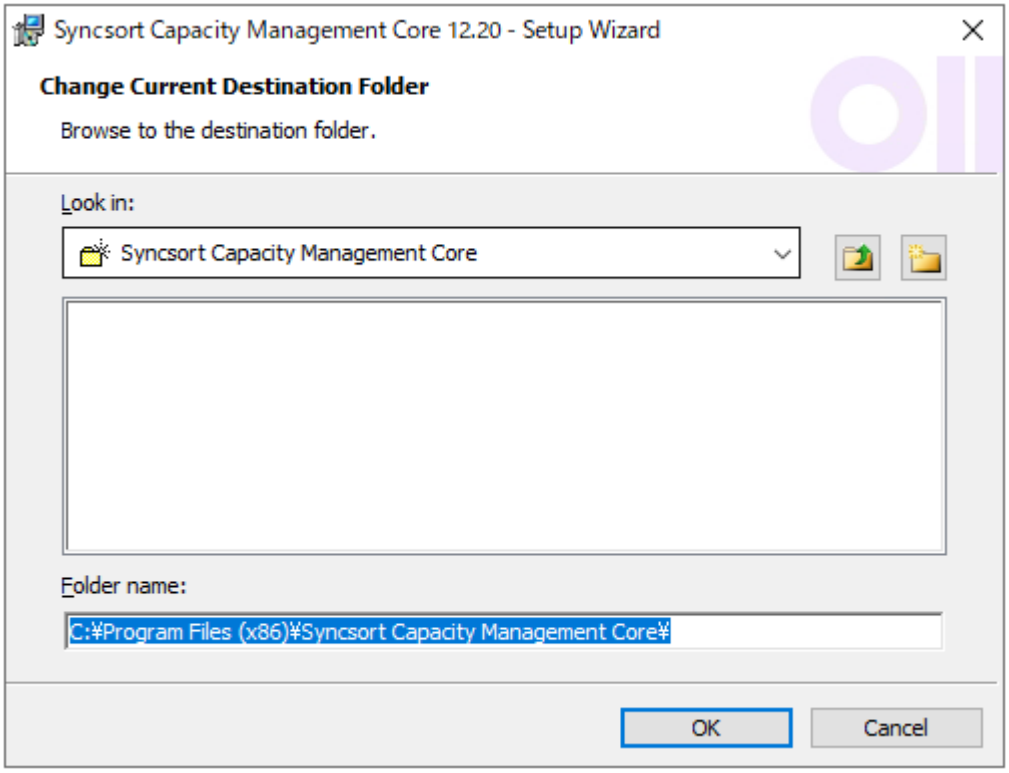
以下の画面が表示されますので、[Next >]ボタンをクリックします①。



(2)Control Center インストールフォルダの指定

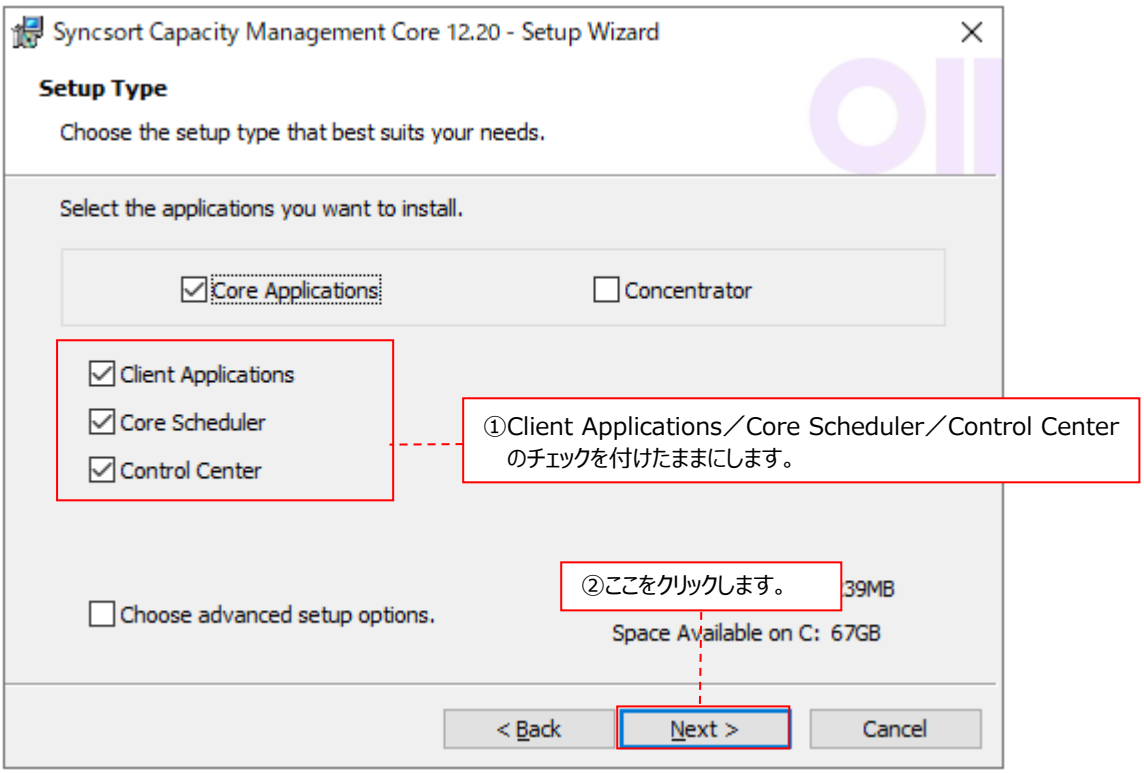
Destination Folder ダイアログでは、Control Center のインストールフォルダを指定します①。
デフォルトは「C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Core¥」です。変更する場合は[Browse...]をクリックして設定します②。
フォルダを指定したら[Next >]をクリックします③。



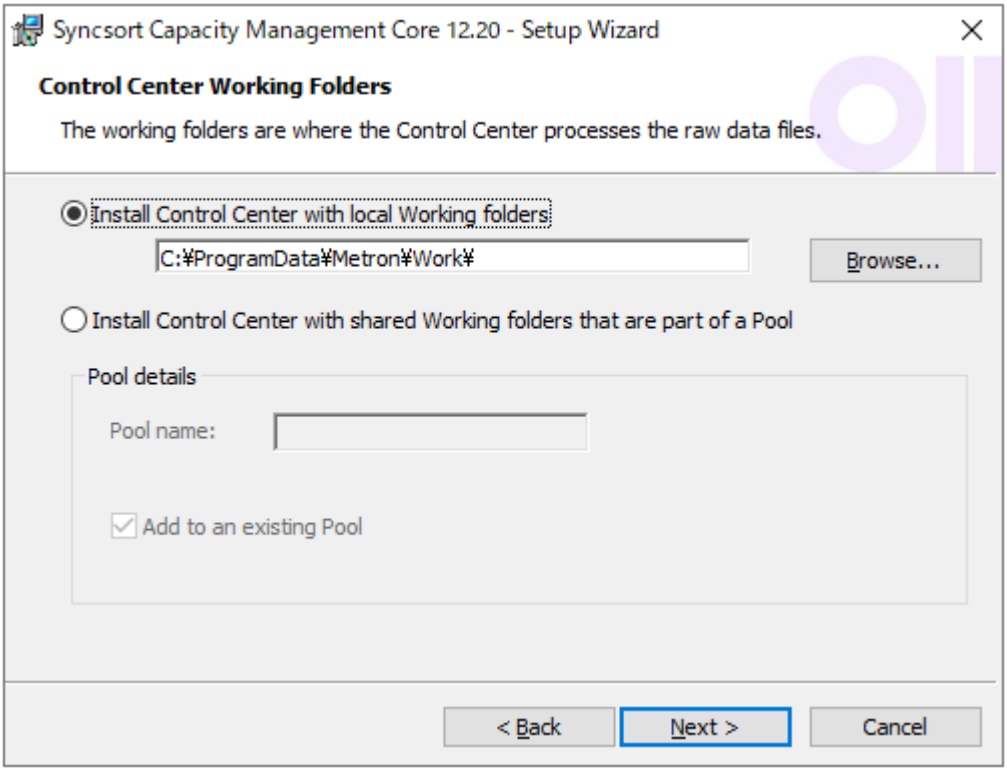


(3)インストールするアプリケーション選択画面

Setup Type ダイアログでは、インストールするアプリケーションを指定します。



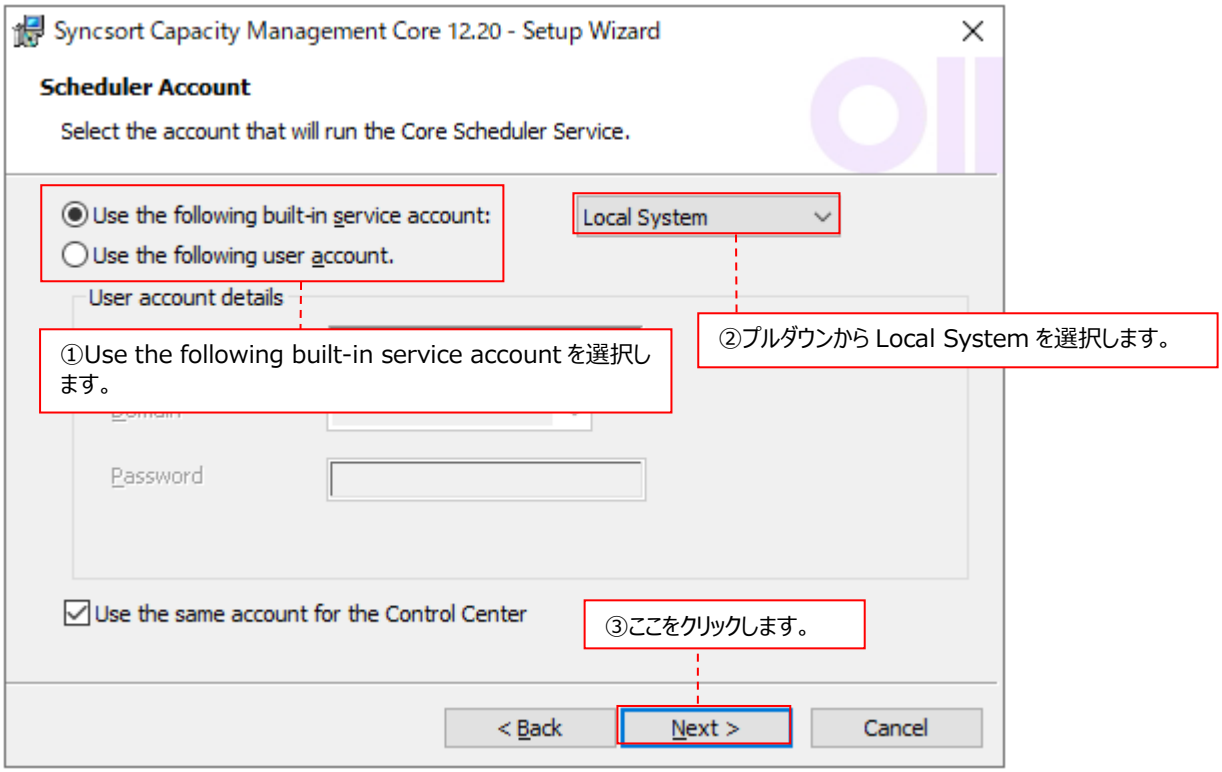
Client Applications／Core Scheduler／Control Center のチェックを付けたままにします①。
[Next >]をクリックします②。



そのまま、[Next >]をクリックします。

(4)Control Center サービス用ログオンアカウントの指定

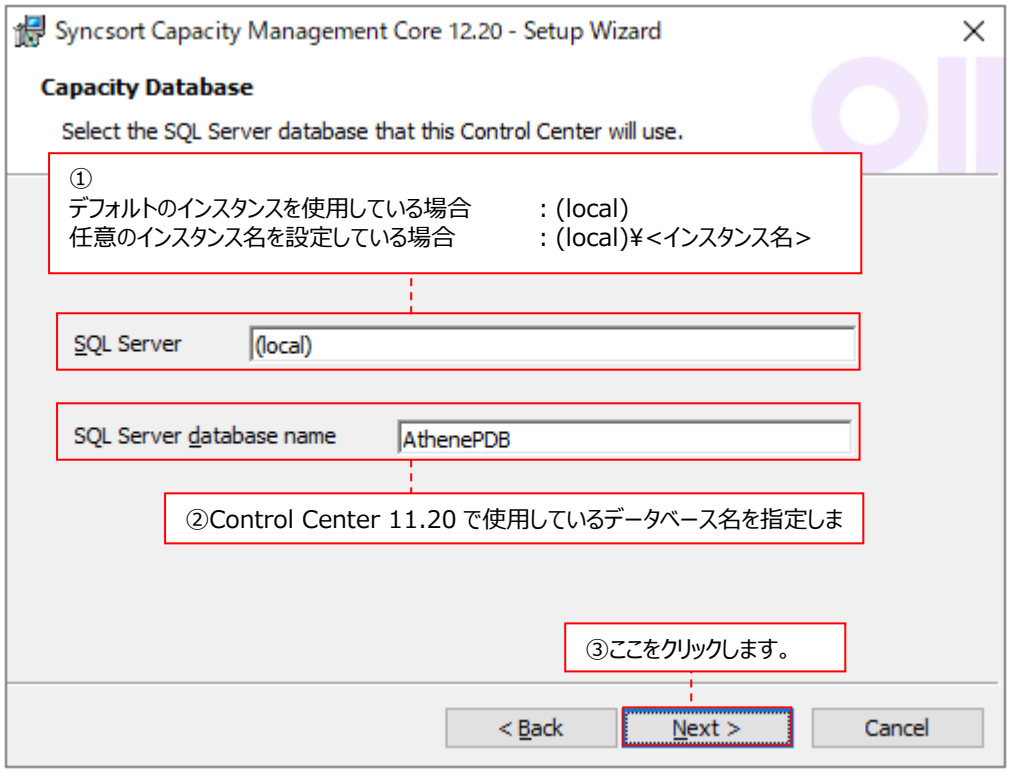
Scheduler Account ダイアログでは、Control Center サービスを動かすログオンアカウントを指定します。
Control Center サービスとは、Acquire をインストールした対象システムとの間の通信を司り、パフォーマンスデータベース(PDB)の更新などを行う Control Center 製品群の中心となるサービスです。



「Use the following built-in service account」を選択し①、プルダウンから「Local System」を選択します②。
選択したら[Next >]ボタンをクリックします③。

(5)Control Center が使用する SQL Server データベースの指定

Capacity Database ダイアログでは、Control Center が使用する SQL Server インスタンス/データベースを指定します。Control Center 11.20 で使用しているデータベースを指定してください②。



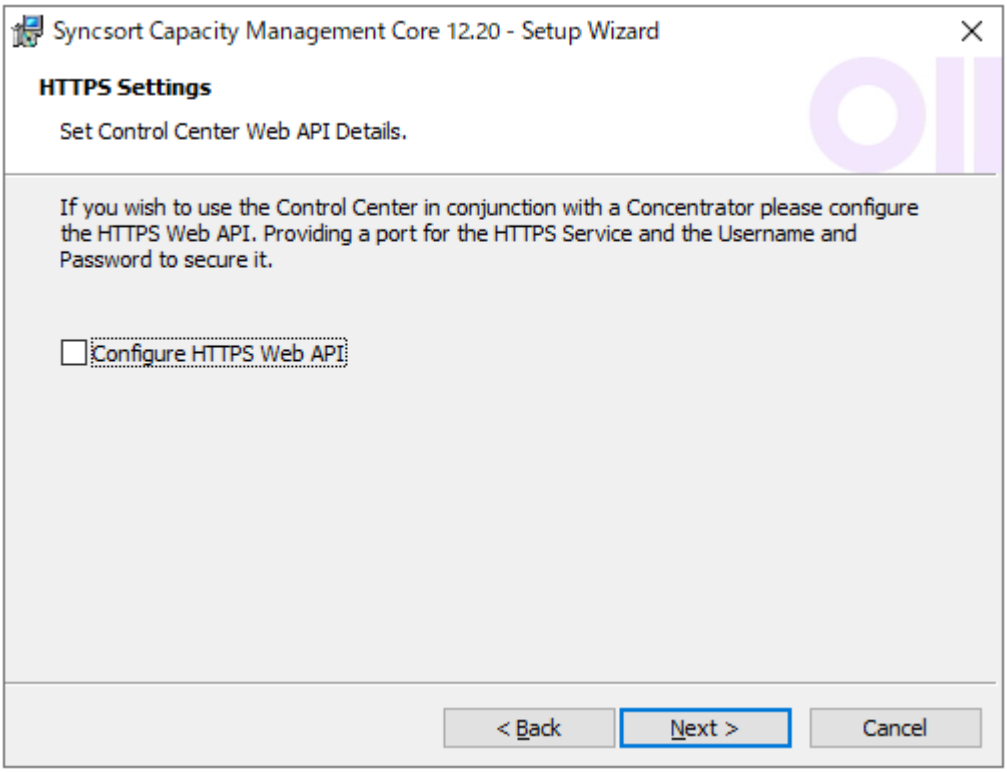
①SQL Server : SQL Server インスタンスを指定します。
デフォルトのインスタンスを使用している場合は、「(local)」と入力します。
任意のインスタンス名を設定している場合は、「(local)¥<インスタンス名>」と入力します。

②SQL Server database name : Control Center 11.20 で使用している SQL Server データベースを指定します。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(6)HTTPS の設定

Configure HTTPS Web API をチェックしないで、[Next >]ボタンをクリックします。



注意！

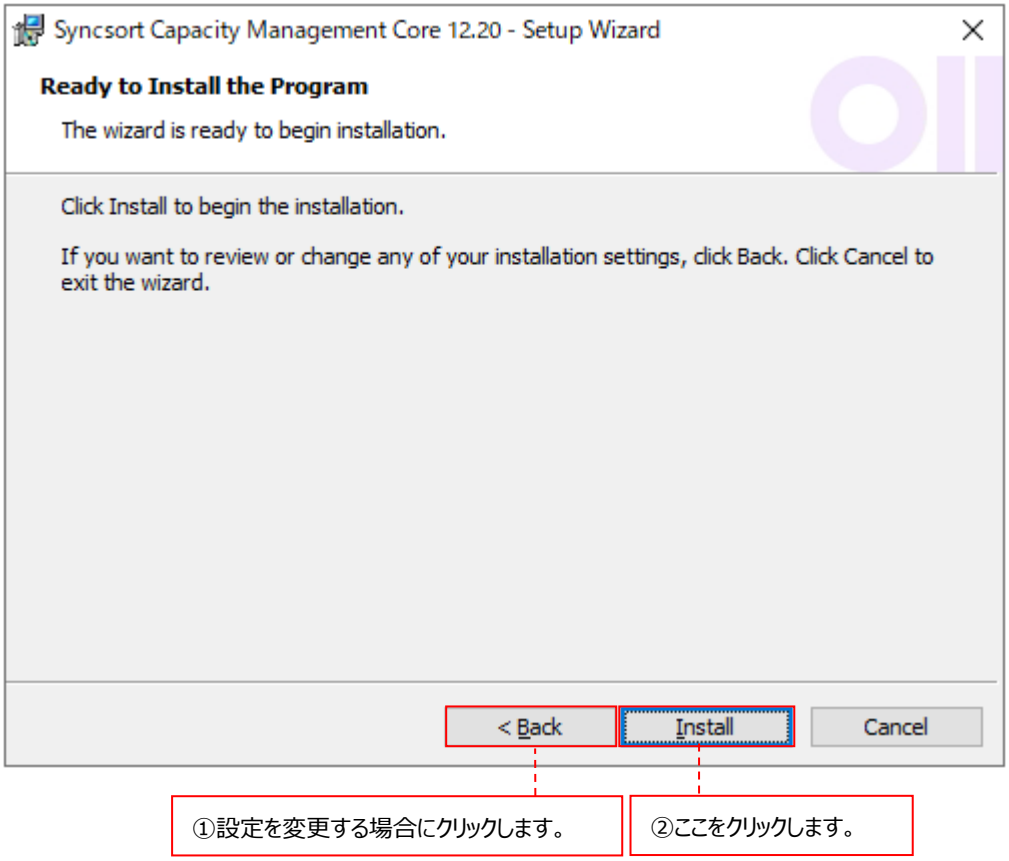
Concentraror は使用できませんので、Configure HTTPS Web API は必ずチェックを外してください。

(7)インストール開始前の確認

Ready to Install the Program ダイアログでは、これまでの設定で実際にインストールを開始するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

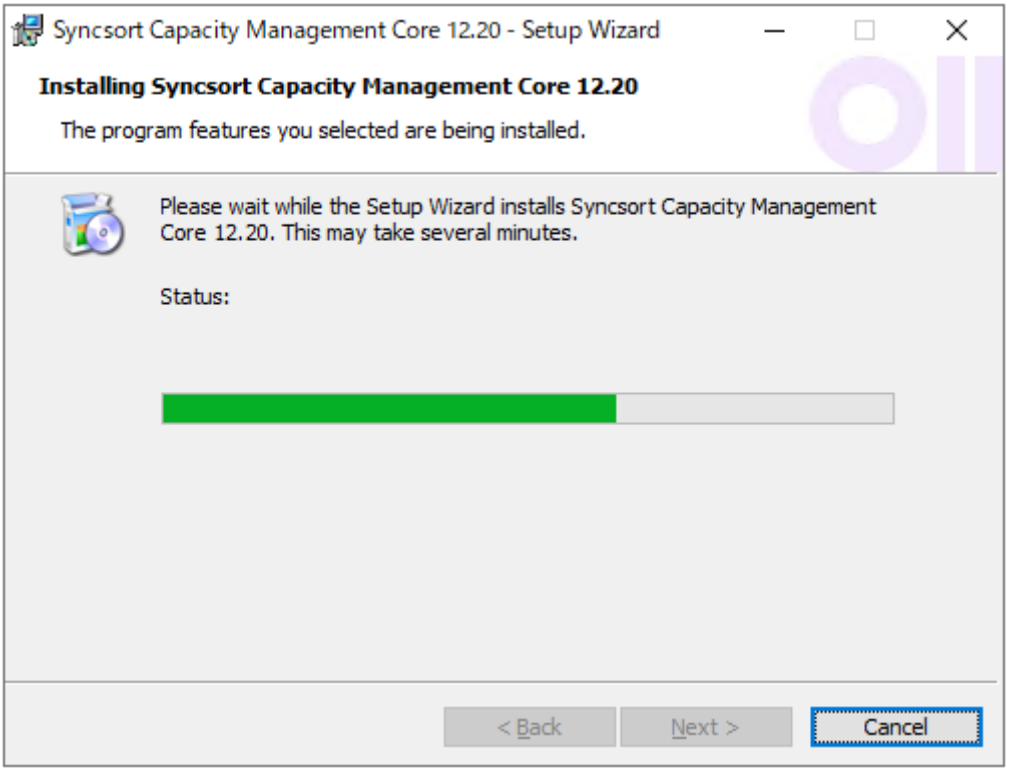
設定を変更する場合は、[<Back]ボタンをクリックして前画面に戻ります①。

インストールを開始する場合は、[Install]ボタンをクリックします②。

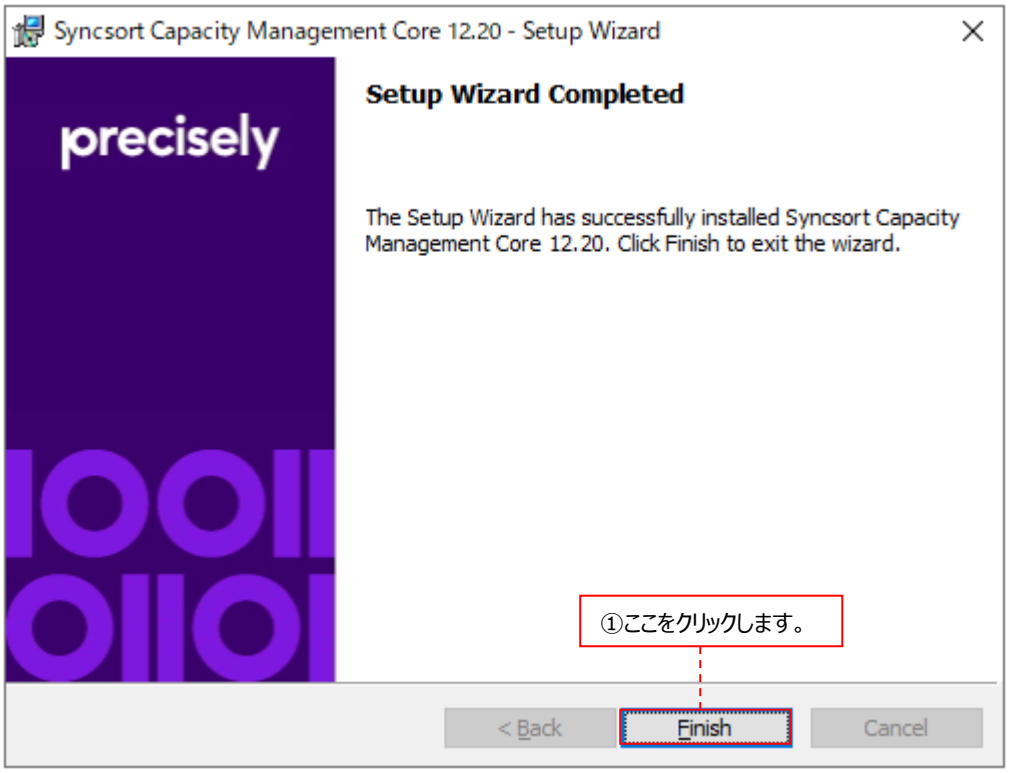


(8)インストールの開始

実際にインストールを開始します。この処理は数分かかりますので、しばらくお待ちください。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします。①

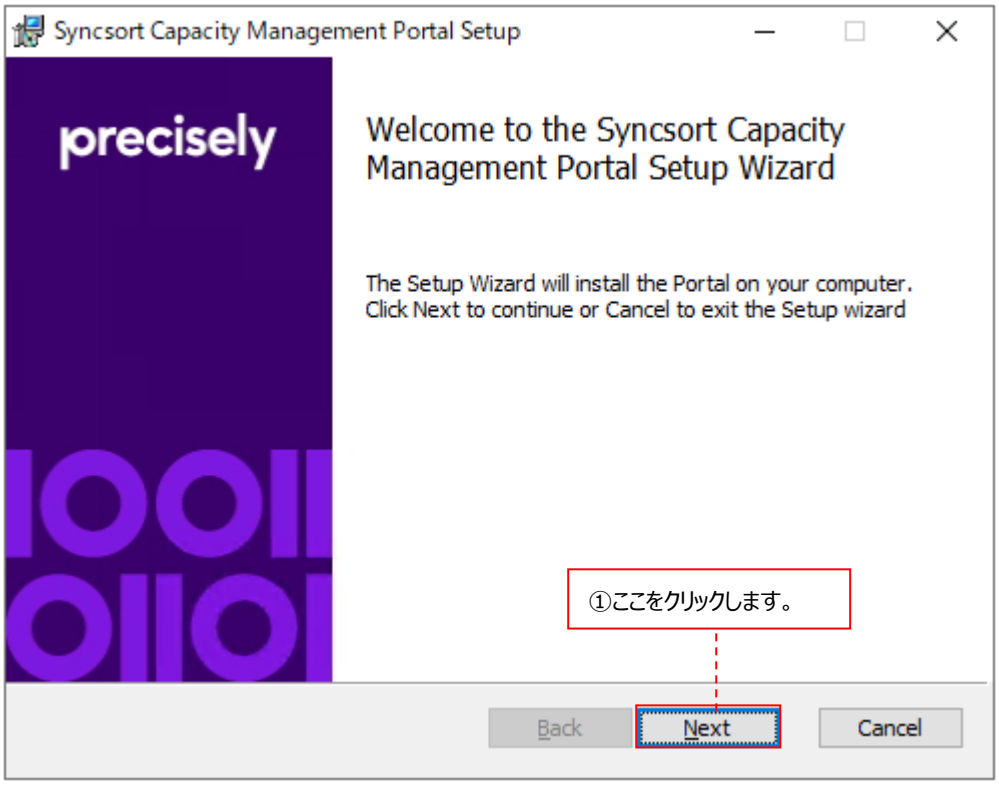


「Portal」にチェックした場合は、「3.3.3.2. Portal のインストール」に進んでください。
「Job Scheduler」にチェックした場合は、「3.3.3.3. Job Scheduler のインストール」に進んでください。
どちらもチェックしてない場合は、「3.3.4. パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレード」へ進んでください。

3.3.3.2. Portal のインストール

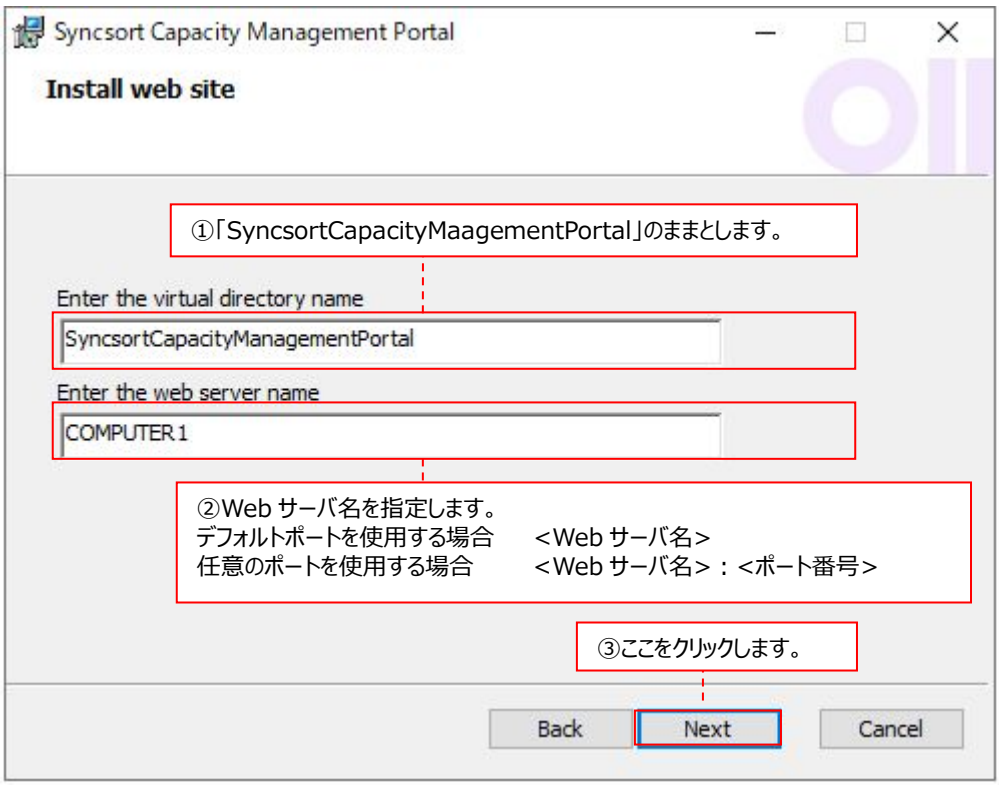
(1)Welcome 画面

以下の画面が表示されますので、[Next >]ボタンをクリックします①。



(2)Portal 導入先の指定

Install web site ダイアログでは、仮想ディレクトリ名と Web サーバ名を指定します。



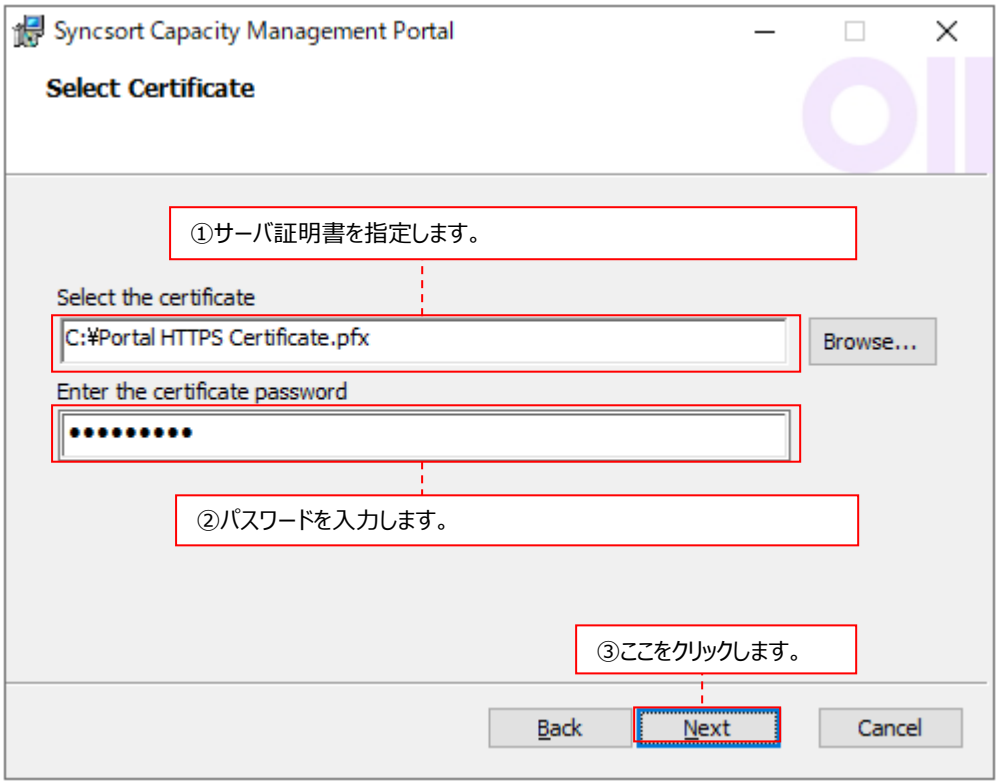
①Enter the virtual directory name：Syncsort Capacity Management Portal Web サイトが保持される物理ディレクトリの別名を指定します。デフォルトの「SyncsortCapacityMaagementPortal」のままとします。

②Enter the web server name　　：Web サーバ名を指定します。
Portal はデフォルトポート 443（デフォルトのセキュアポート）を使用します。
別のポート番号を使用する場合は、「<Web サーバ名>：<ポート番号>」と入力します。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(3)SSL サーバ証明書の指定

Select Certificate ダイアログでは、サーバ証明書を指定します。



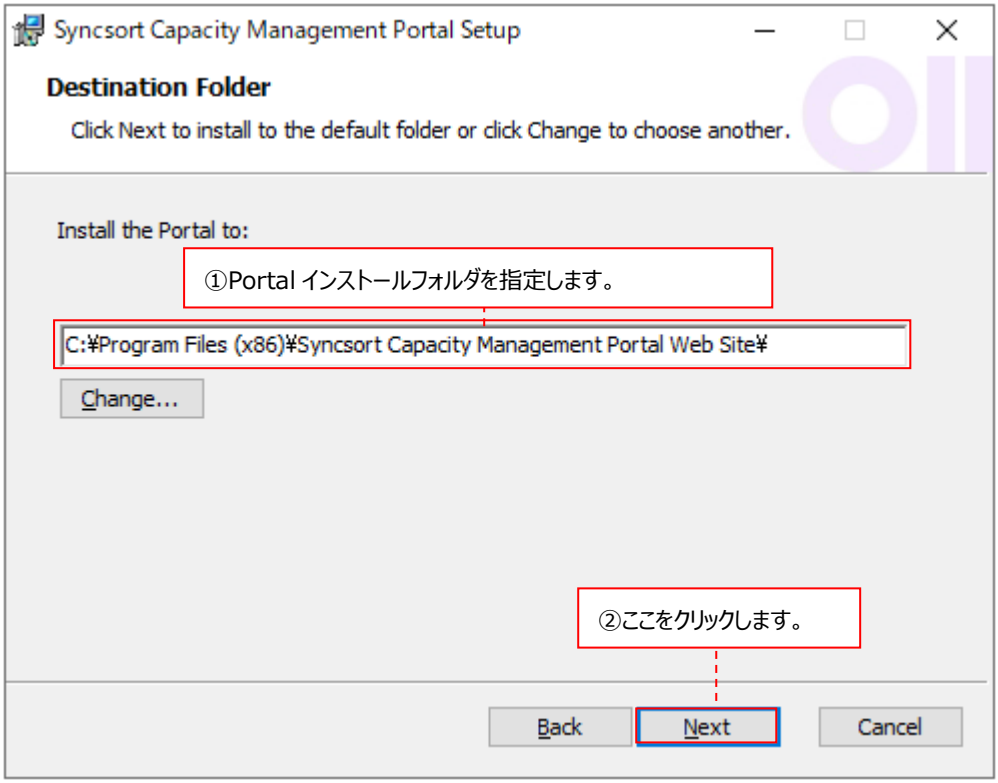
①Select the certificate　：SSL サーバ証明書を指定します。「2.4.4. Portal を使用する場合の事前準備 (2)自己署名入り証明書の作成」で証明書を作成した場合は、その証明書を指定します。

②Enter the certificate password　：証明書のパスワードを入力します。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします③。

(4)Portal インストールフォルダの指定

Destination Folder ダイアログでは、Portal のインストールフォルダを指定します①。
デフォルトは「C:¥Program Files (x86)¥Syncsort Capacity Management Portal Web Site¥」です。変更する場合は[Change...]をクリックして設定します。



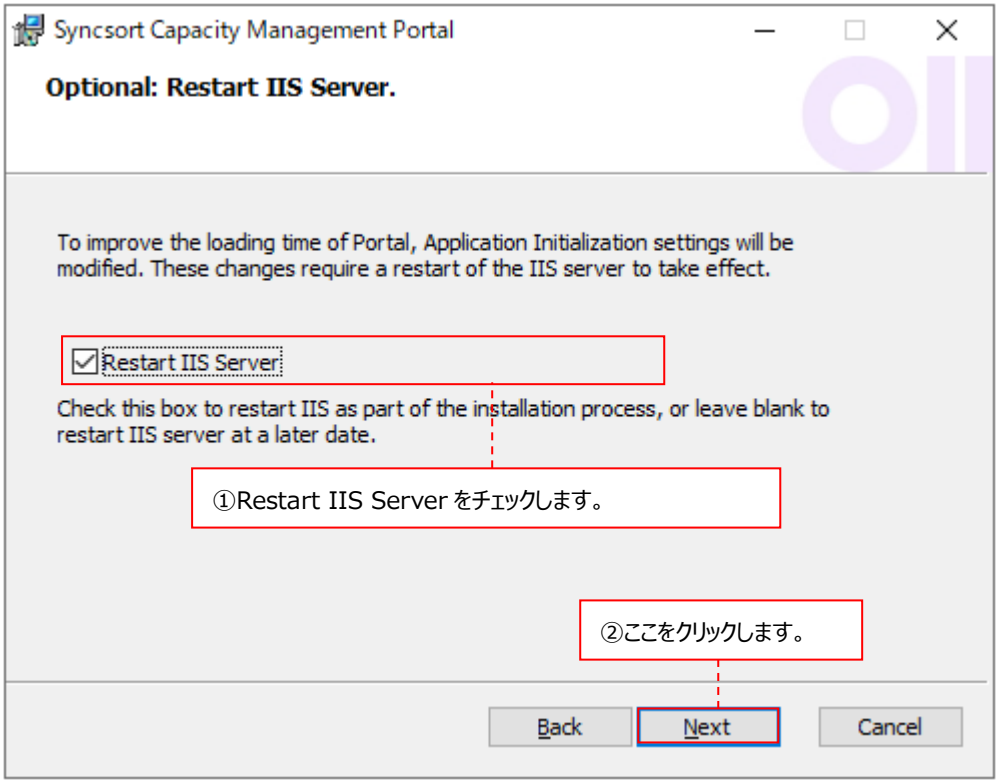
指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします②。

(5)IIS Server 再起動の指定

Optional: Restart IIS Server.ダイアログでは、IIS Server を再起動するかを指定します①。

Syncsort Capacity Management Portal を利用するために、IIS を再起動する必要があります。IIS を再起動するには、管理者権限が必要です。

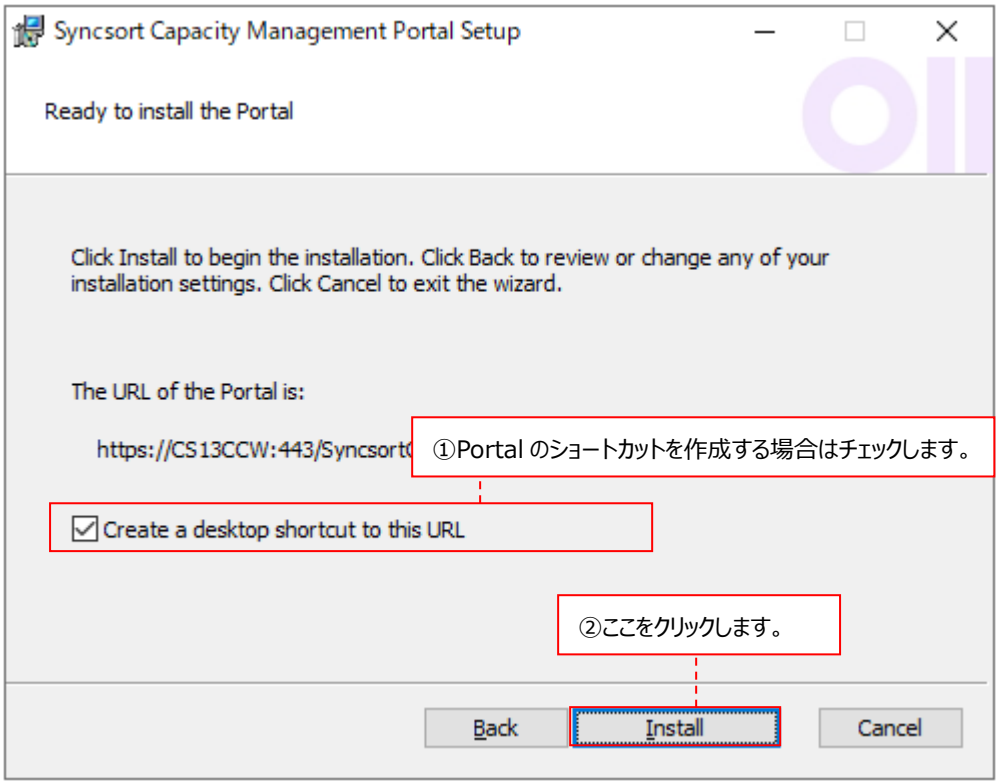
IIS を後で再起動する場合は、チェックボックスをオフのままにしてしてください。



指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします②。

(6)Portal ショートカットの作成

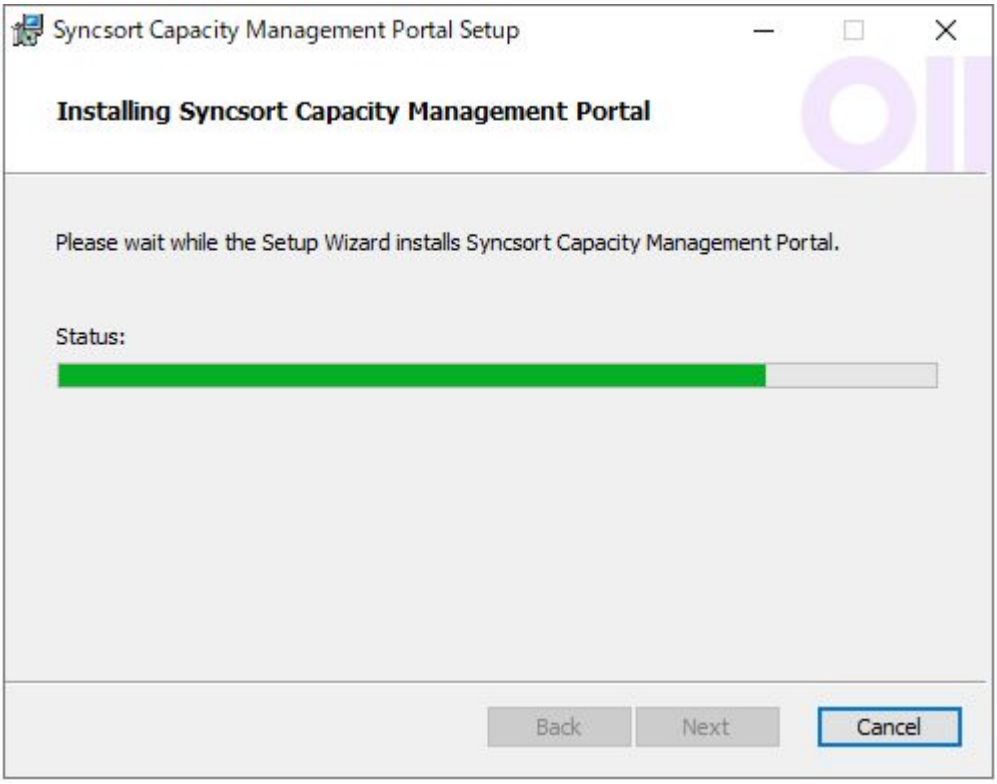
Ready to install the Portal ダイアログでは、デスクトップに Portal のショートカットを作成する場合はチェックします①。



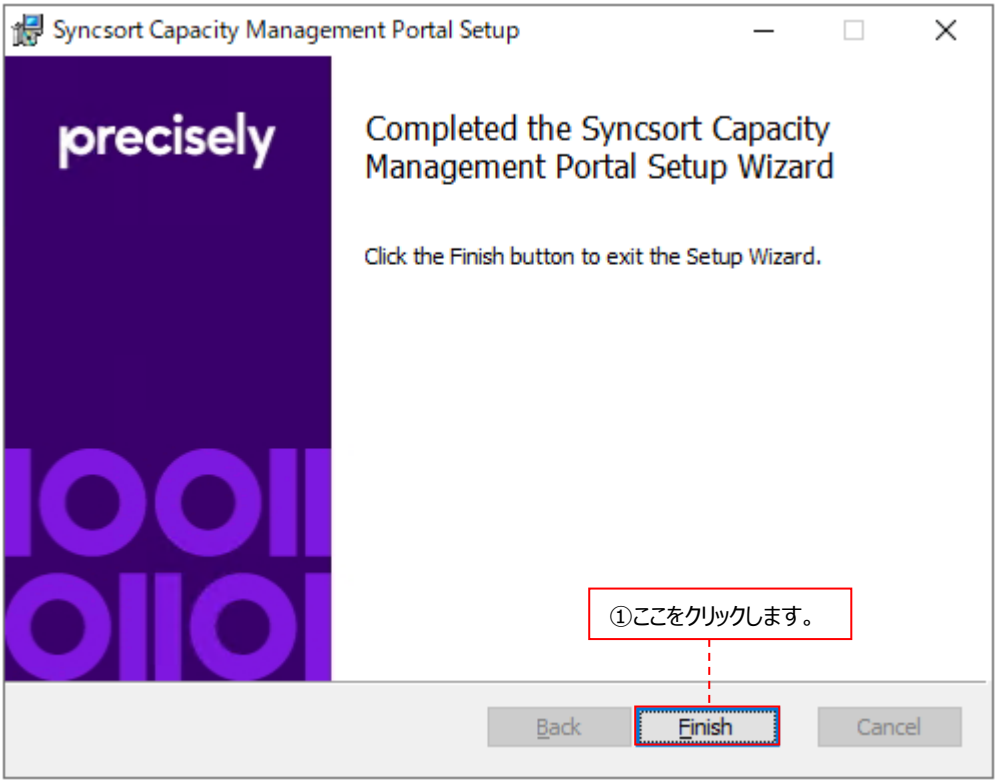
指定が終了したら、[Install]ボタンをクリックします②。

(7)インストールの開始

実際にインストールを開始します。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします。①

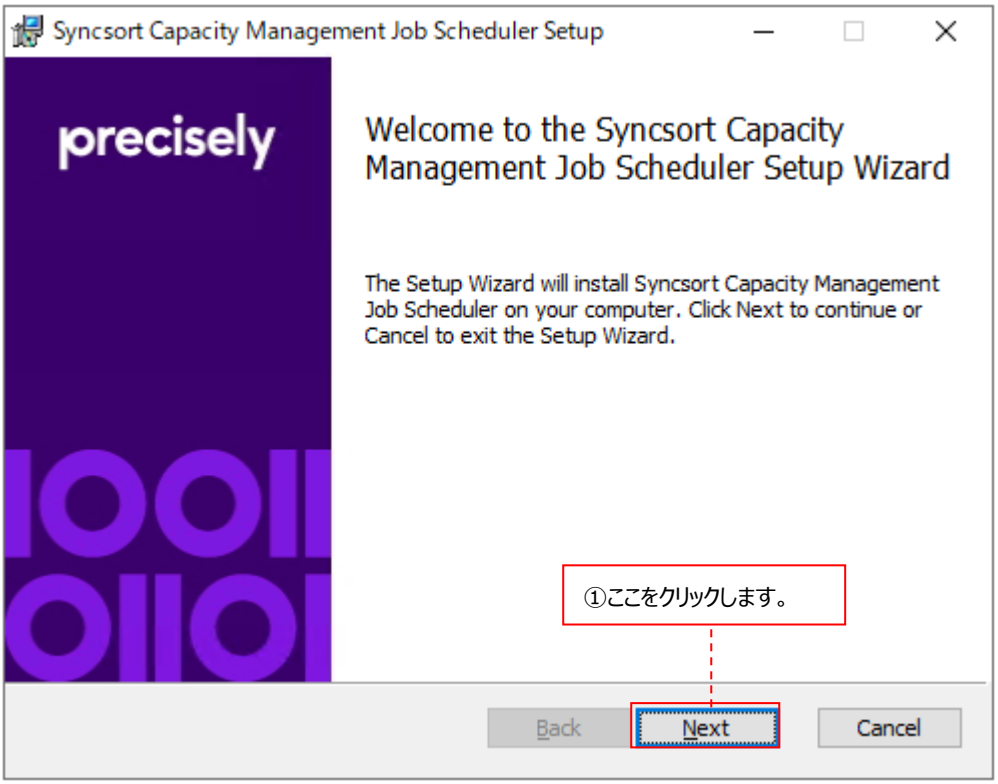


「Job Scheduler」にチェックした場合は、「3.3.3.3. Job Scheduler のインストール」に進んでください。チェックしてない場合は、「3.3.4 パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレード」へ進んでください。

3.3.3.3. Job Scheduler のインストール

(1)Welcome 画面

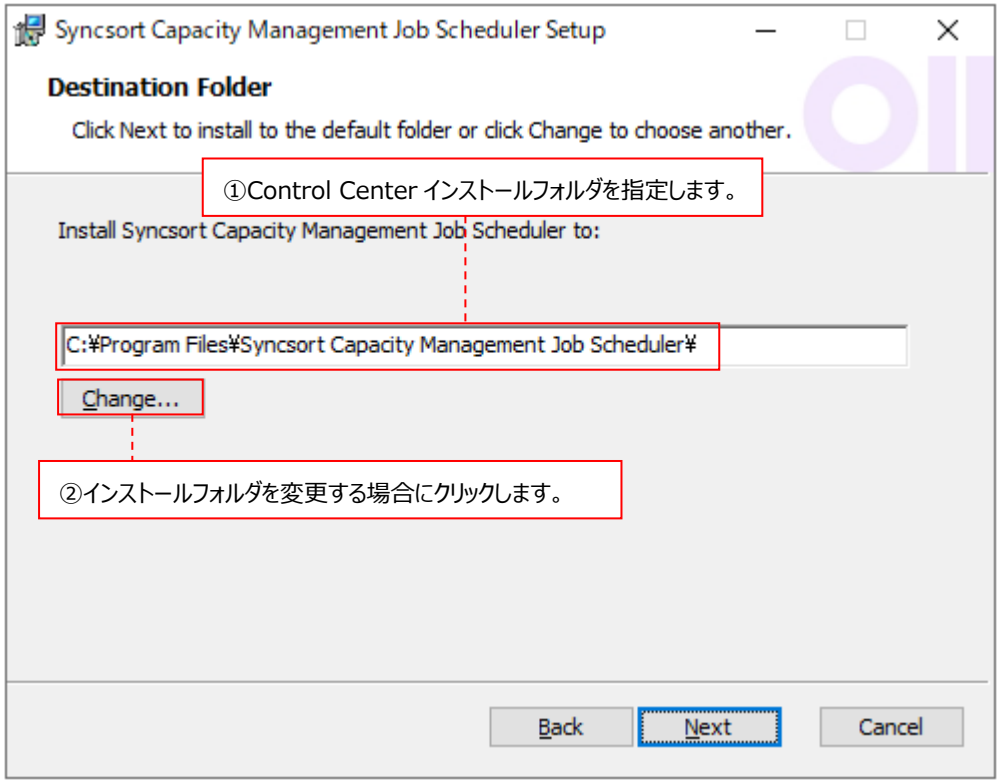
以下の画面が表示されますので、[Next >]ボタンをクリックします①。



(2)Job Scheduler インストールフォルダの指定

Destination Folder ダイアログでは、Job Scheduler のインストールフォルダを指定します①。

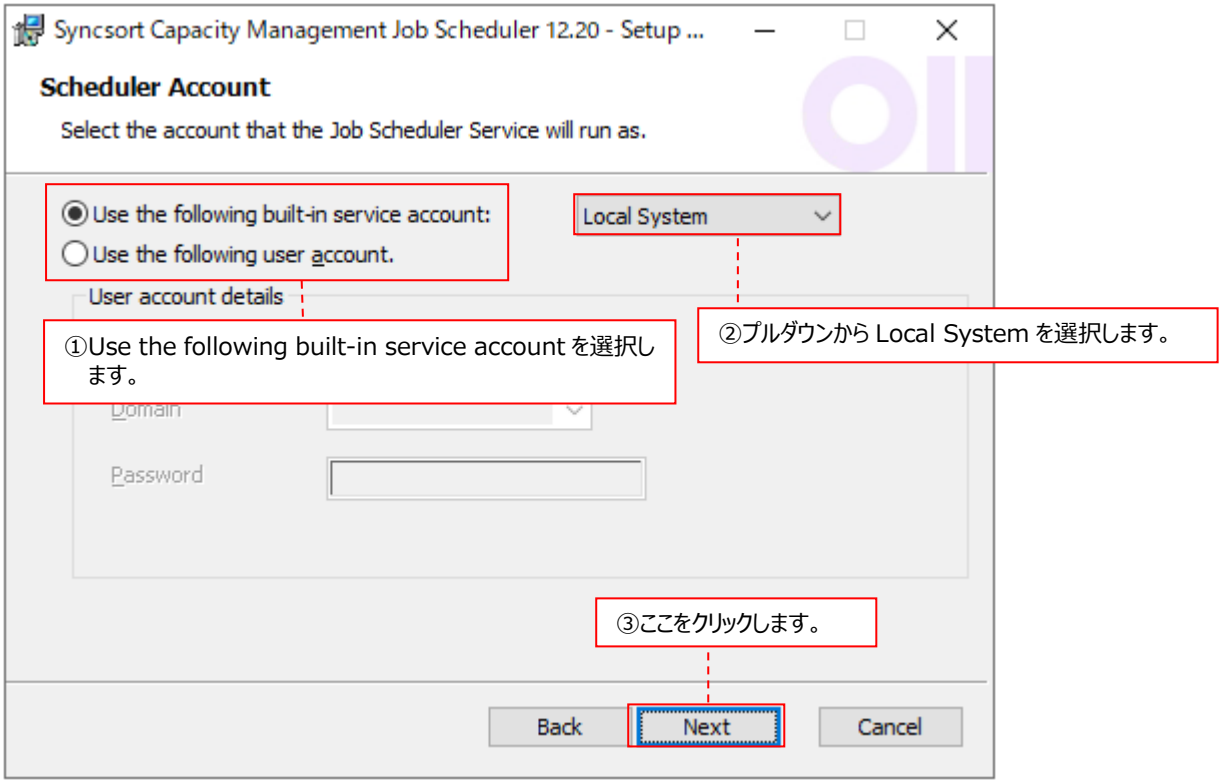
デフォルトは「C:¥Program Files¥Syncsort Capacity Management Job Scheduler¥」です。変更する場合は



[Change...]をクリックして設定します②。

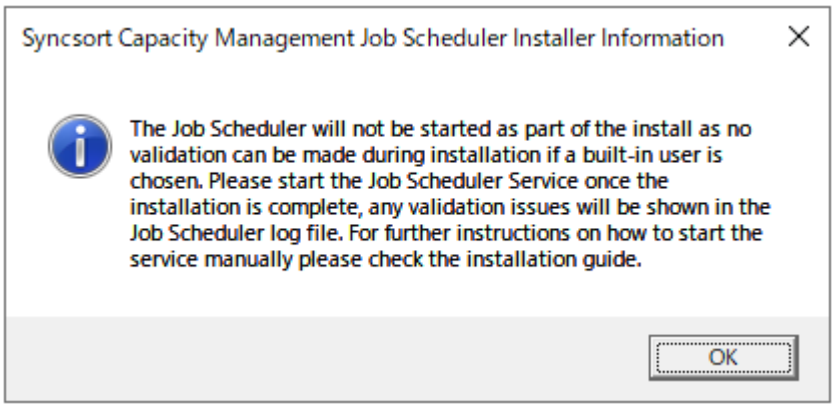
(3)Job Scheduler サービス用ログオンアカウントの指定

Scheduler Account ダイアログでは、Job Scheduler サービスを動かすログオンアカウントを指定します。
Job Scheduler サービスとは、サービスビュー機能で司るサービスです。



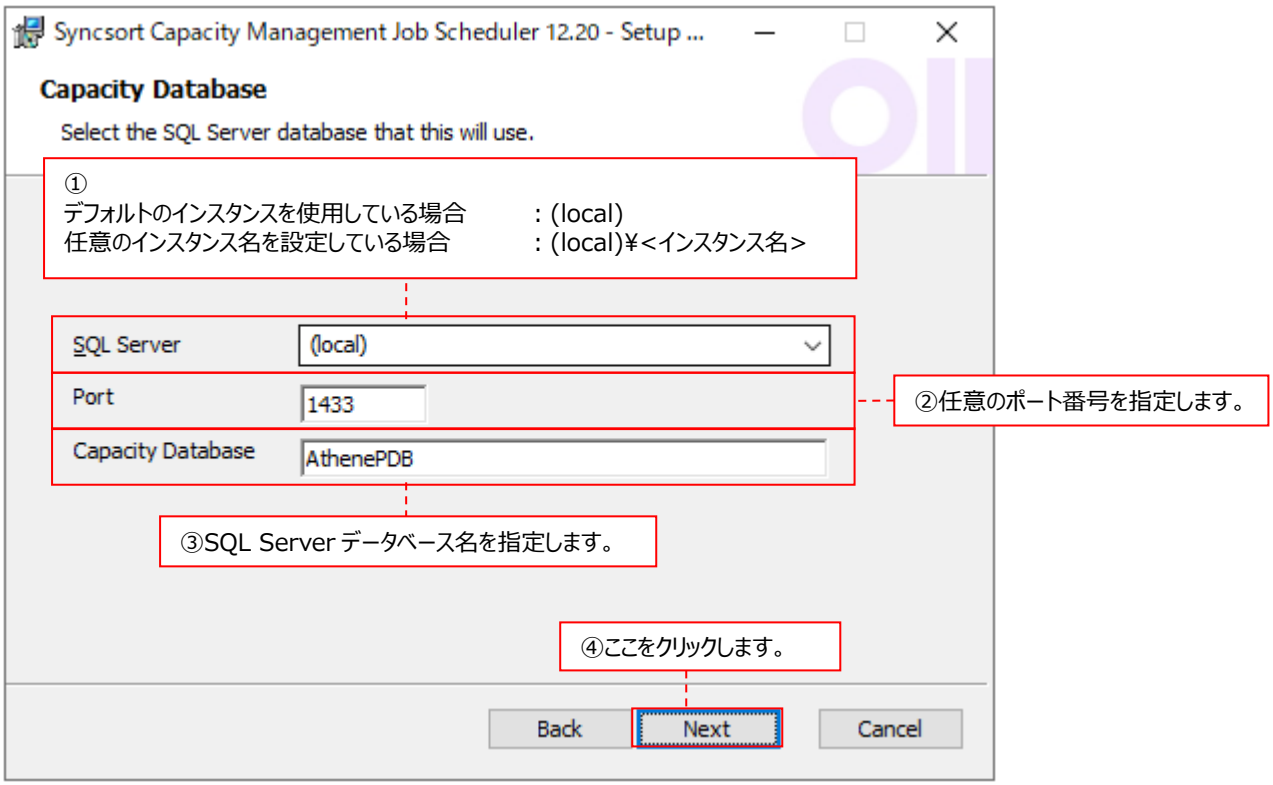
「Use the following built-in service account」を選択し①、プルダウンから「Local System」を選択します②。
選択したら[Next >]ボタンをクリックします③。

(4)以下のメッセージボックスが表示されますので、［OK］ボタンをクリックします。



(5)Job Scheduler が使用する SQL Server データベースの指定

Capacity Database ダイアログでは、Job Scheduler が使用する SQL Server インスタンス/ポート番号/データベースを指定します。



①SQL Server : SQL Server インスタンスを指定します。
デフォルトのインスタンスを使用する場合は、「(local)」と入力します。
任意のインスタンス名を設定する場合は、「(local)¥<インスタンス名>」と入力します。

②Port : 任意のポート番号（標準では 1433）を指定します。

③Syncsort Capacity Management CMIS : SQL Server データベース名を指定します。

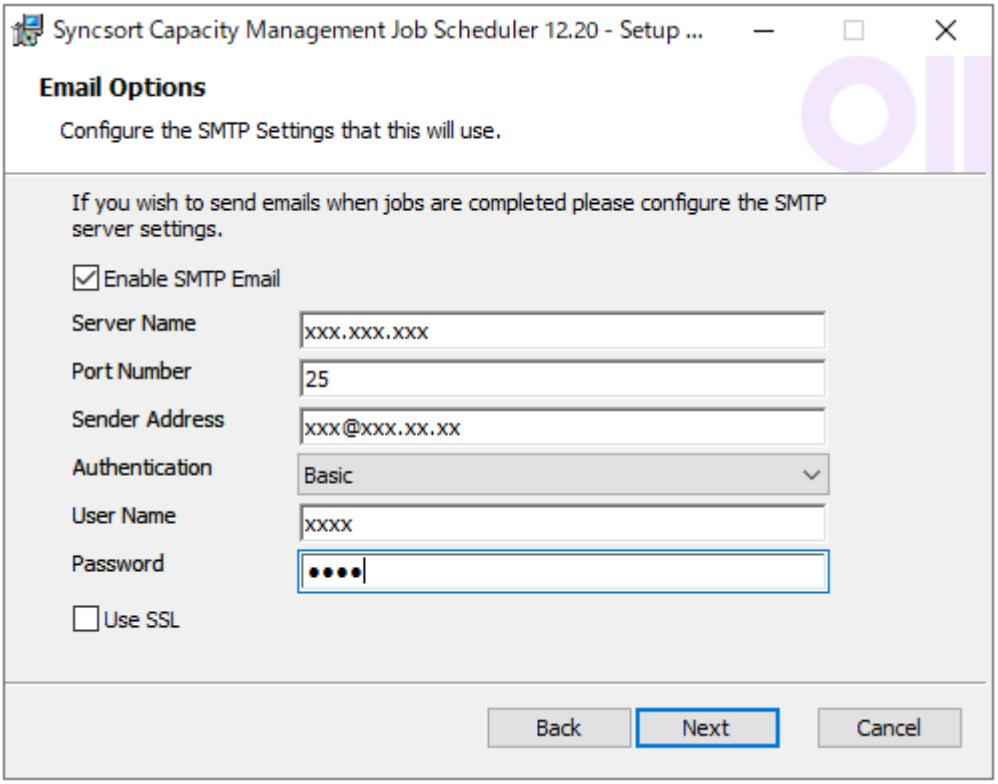
ここで指定できるデータベース名には以下の制限があります。
(a)頭文字は、「a-z」、「A-Z」、「@」、「_」、または「#」でなくてはなりません。
(b)後続する文字は(a)の文字の他に「$」、「0-9」を使用できます。名前の途中に空白は使用できません。
(c)名前は最長 123 文字まで入力できます。

指定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(6)電子メールを送信するための設定

サービスビュー機能で、特定のイベントの結果を電子メールで通知する場合、Email Options ダイアログにて、「Enable SMTP Email」チェックボックスをオンにして、SMTP メールの設定をします。

電子メールで通知しない場合は、チェックボックスをオフのままにして[Next]ボタンをクリックします。



①Enable SMTP Email　：電子メールで通知する場合はチェックします。
②Server Name　：SMTP サーバ名
③Port Number　：電子メール送信で使用するポート番号
④Server Address　：送信元電子メールアドレス
⑤Authentication　：認証の種類を選択します。
⑥User Name　：SMTP サーバにアクセスするアカウント
⑦Password　：SMTP サーバにアクセスするアカウントのパスワード
⑧Use SSL　：SSL を使用する場合はチェックします。

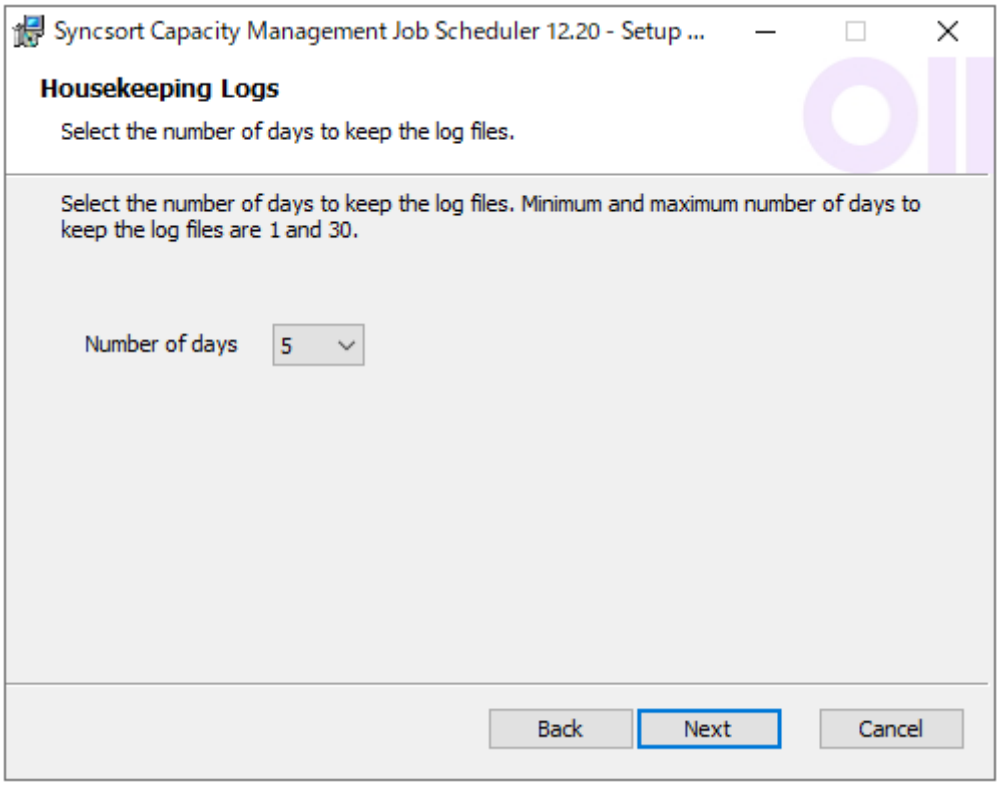
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします。

(7)ログファイルの保存期間の指定

Housekeeping Logs ダイアログでは、ログファイルの保存期間を指定します。デフォルトは 5 日間保存します。

ログファイルは、以下のフォルダに格納されます。

C:¥ProgramData¥Metron¥Logs¥Syncsort Capacity ManagementJS-<コンピュータ名>-YYYY-MM-DD-HH.log



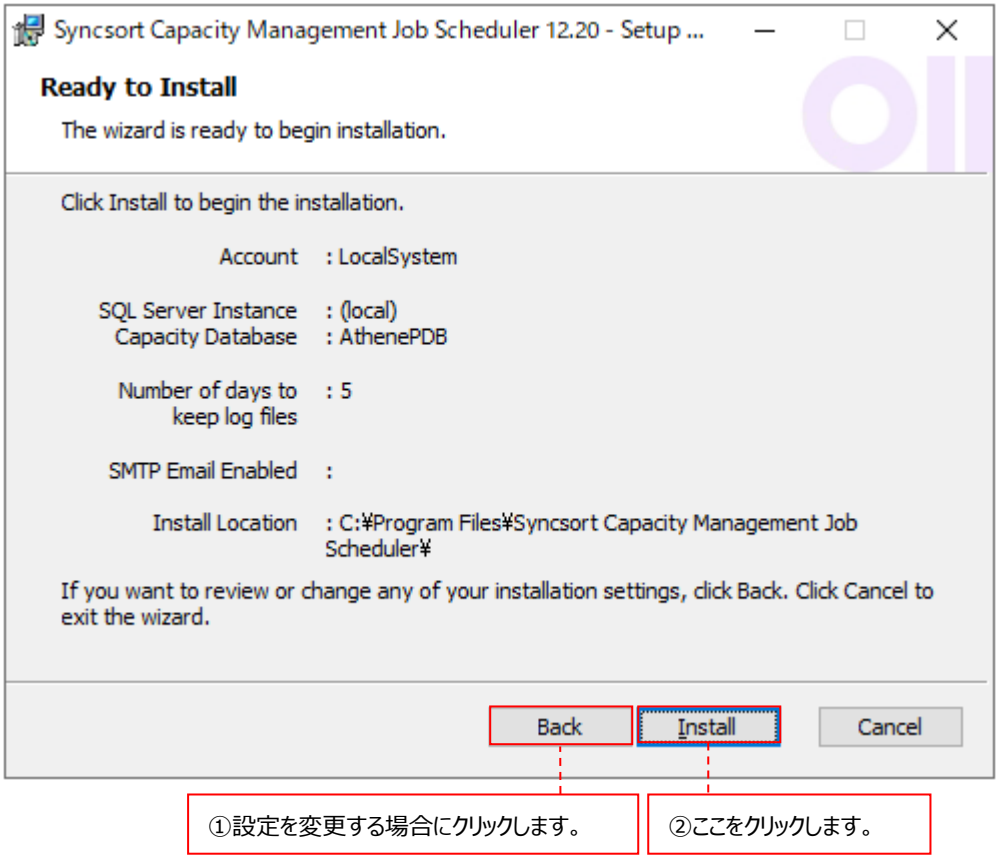
[Next >]ボタンをクリックします。

(8)インストール開始前の確認

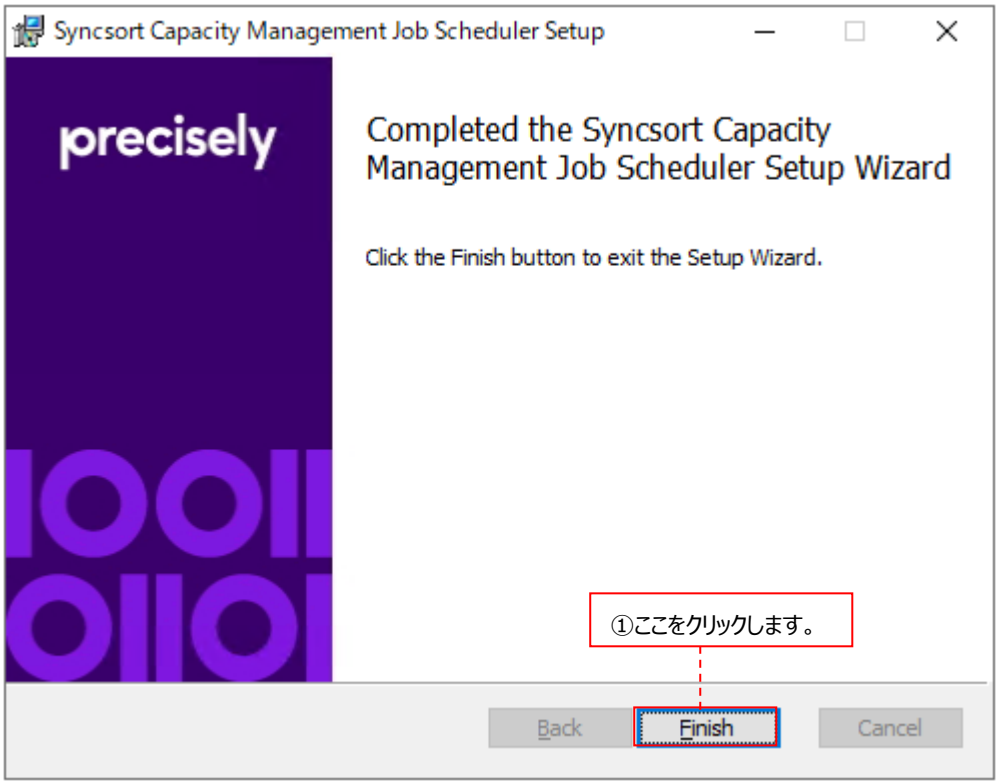
Ready to install ダイアログでは、これまでの設定で実際にインストールを開始するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

設定を変更する場合は、[Back]ボタンをクリックして前画面に戻ります①。

インストールを開始する場合は、[Install]ボタンをクリックします②。



インストールが終了すると、以下の画面が表示されますので、[Finish]ボタンをクリックします①。



「3.3.4.パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレード」へ進んでください。

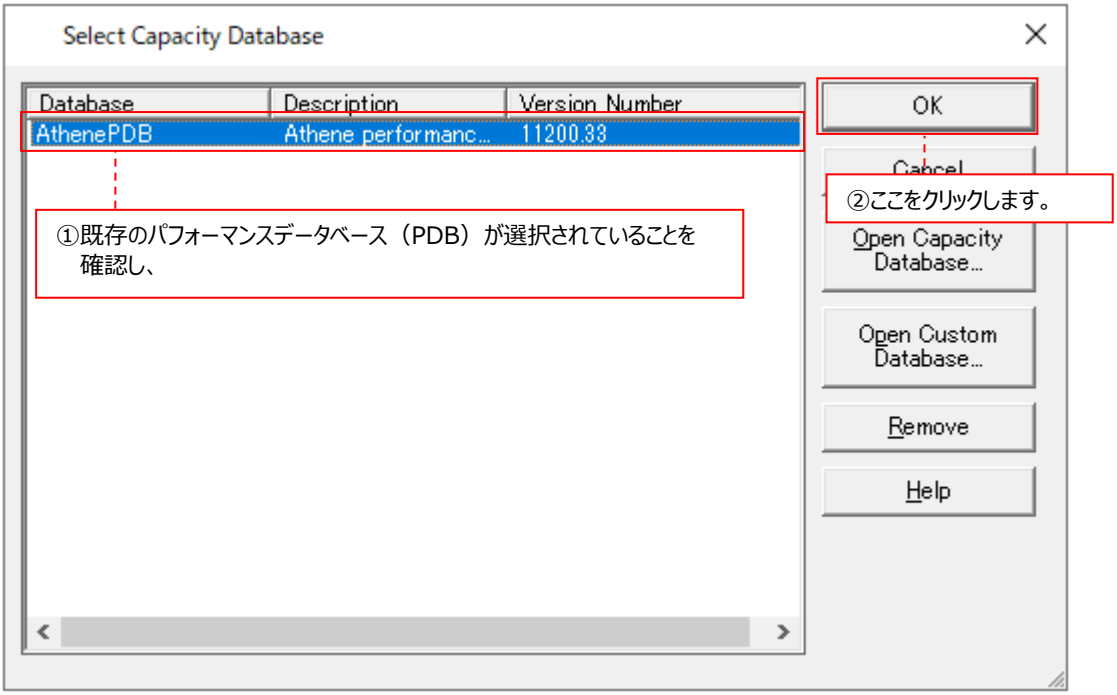
3.3.4. パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレード

バージョン 11.20 で使用していたパフォーマンスデータベース(PDB)を最新の形式にアップグレードします。

(1)Upgrade Database の起動

「スタート」→「プログラム」→「Syncsort Capacity Management Core」→「Upgrade Database」を起動します。
以下の「Select Capacity Database」ダイアログが表示されますので、既存のパフォーマンスデータベース(PDB)が選択されていることを確認し①、[OK]ボタンをクリックします②。

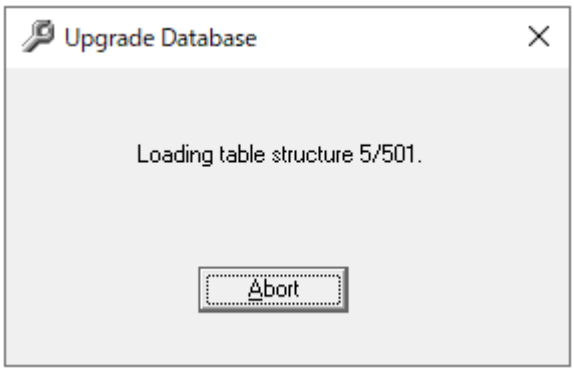
注意！
Select Capacity Database ダイアログで「Version Number」が「Unknown」と表示された場合は、下記の手順でパフォーマンスデータベース（PDB）を選択してください。
(1)Upgrade Database の初期画面で「Open PDB」を選択します。
(2)「Active Servers」に「(local)」と入力します。
(3)一覧に既存のパフォーマンスデータベース（PDB）が選択されていることを確認して「OK」をクリックします。



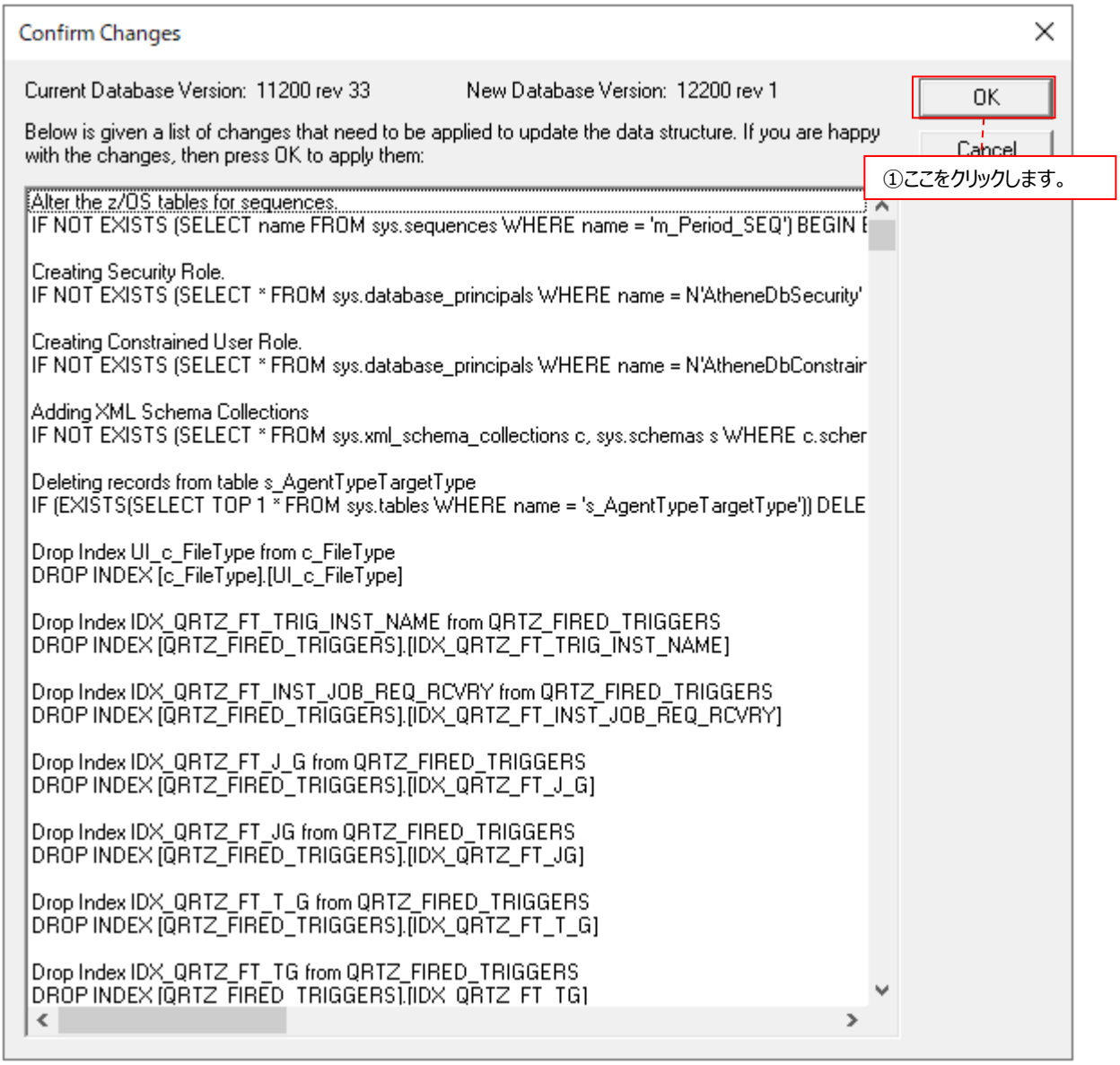
以下のメッセージボックスが表示されますので、[はい(Y)]をボタンクリックします③。

(2)アップグレードの開始

実際にパフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレードを開始します。この処理は数分かかりますので、しばらくお待ちください。

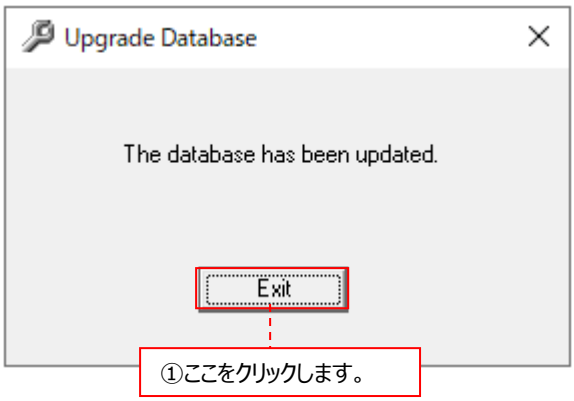


途中で以下の確認ダイアログが表示されますので、[OK]ボタンをクリックします①。



(3)アップグレードの完了

パフォーマンスデータベース(PDB)のアップグレードが完了すると、以下のメッセージボックスが表示されますので、[Exit]ボタンをクリックします①。



「3.3.5. Control Center の再開」へ進んでください。

3.3.5. Control Center の再開

スタートメニューより「Windows 管理ツール」→「サービス」にて、下記の順番で Control Center 関連サービスを開始します。

1. Syncsort Capacity Management Control Center
2. Syncsort Capacity Management Core Scheduler
3. Syncsort Capacity Management Job Scheduler

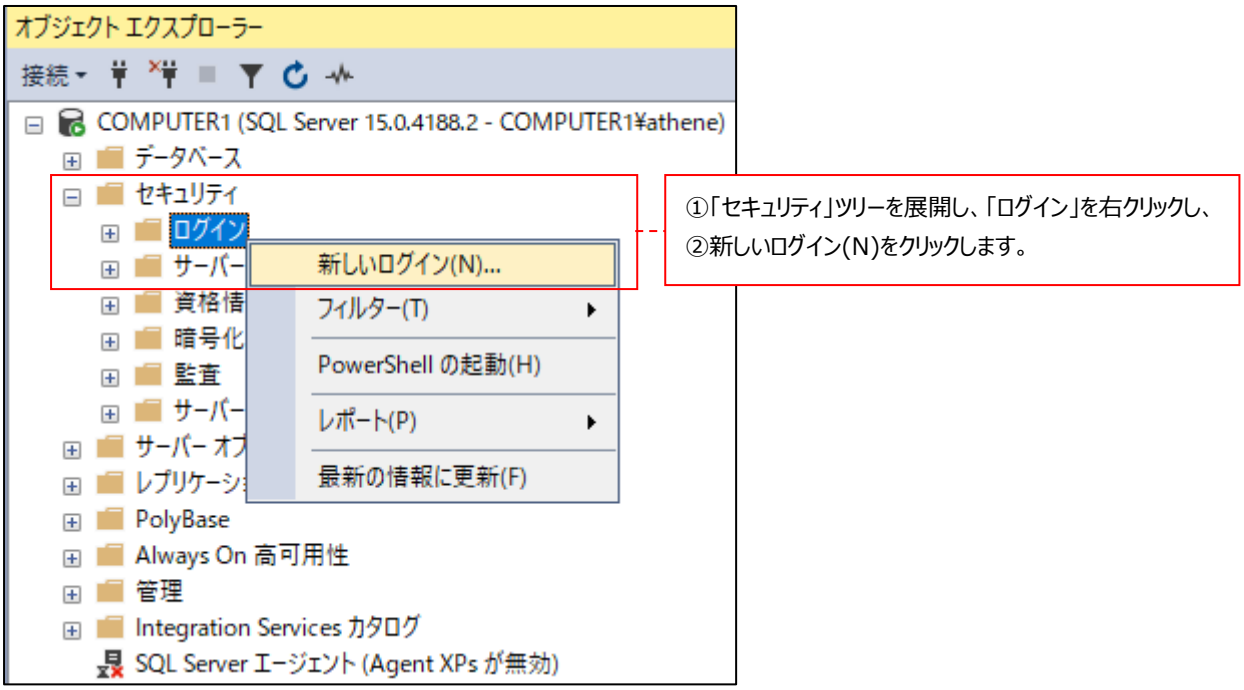
「3.4. Portal を使用する場合の権限設定」へ進んでください。

3.4. Portal を使用する場合の権限設定

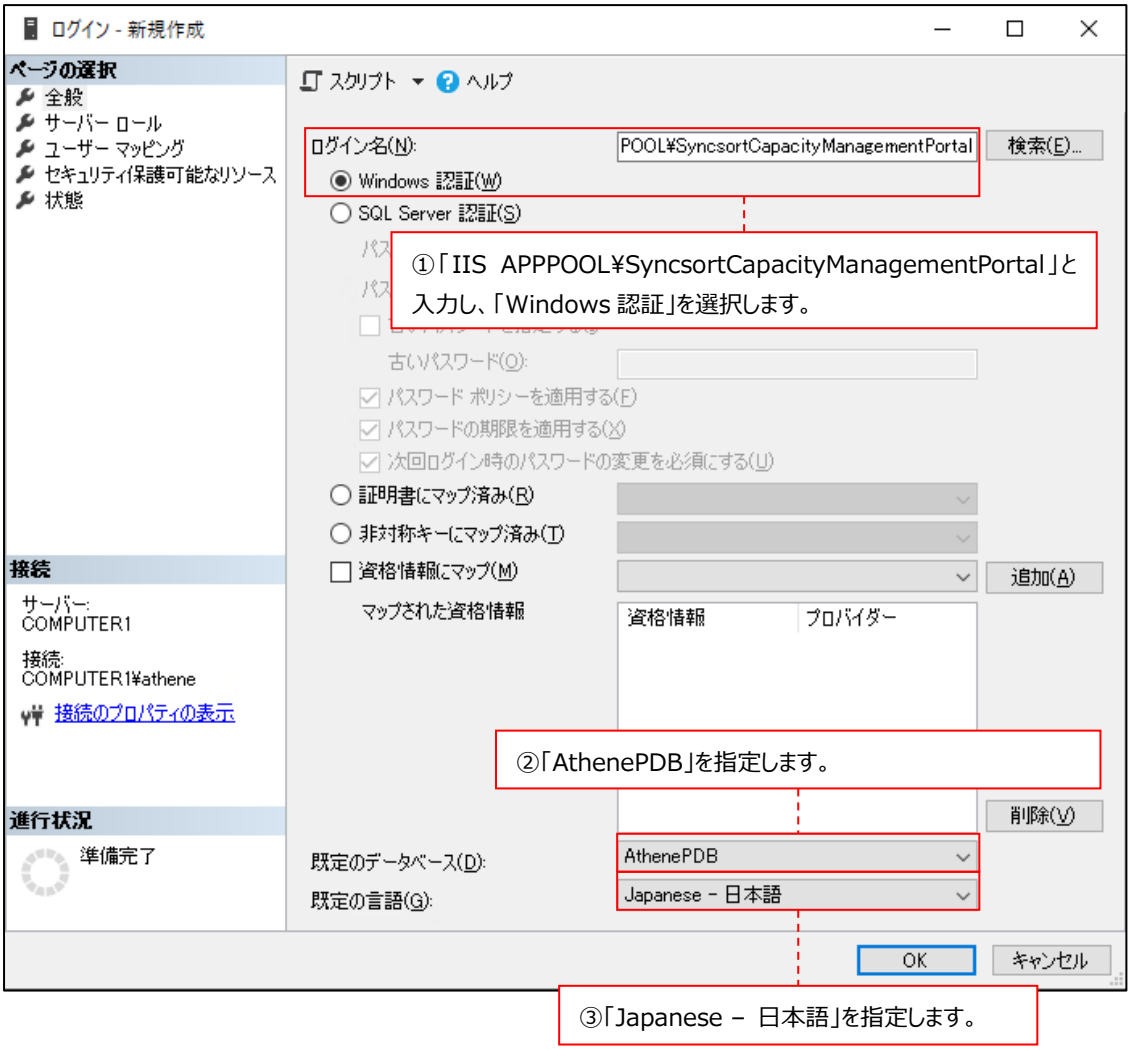
Portal を使用する場合、SQL Server の権限を設定してください。
ここでは、例として SQL Server 2019 における設定手順を紹介します。(SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません)

(1)「スタート」→「アプリ→Microsoft SQL Server Tools 18」→「SQL Server Management Studio 18」を起動します。
サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して、[接続(C)]をクリックします。

(2)「SQL Server Management Studio メイン」画面の左側に表示されるツリーの中から、「セキュリティ」ツリーを展開し、「ログイン」を右クリックし①、新しいログイン(N)をクリックします②。



(3)「ログイン － 新規作成」ダイアログで、新規にログインを作成します。

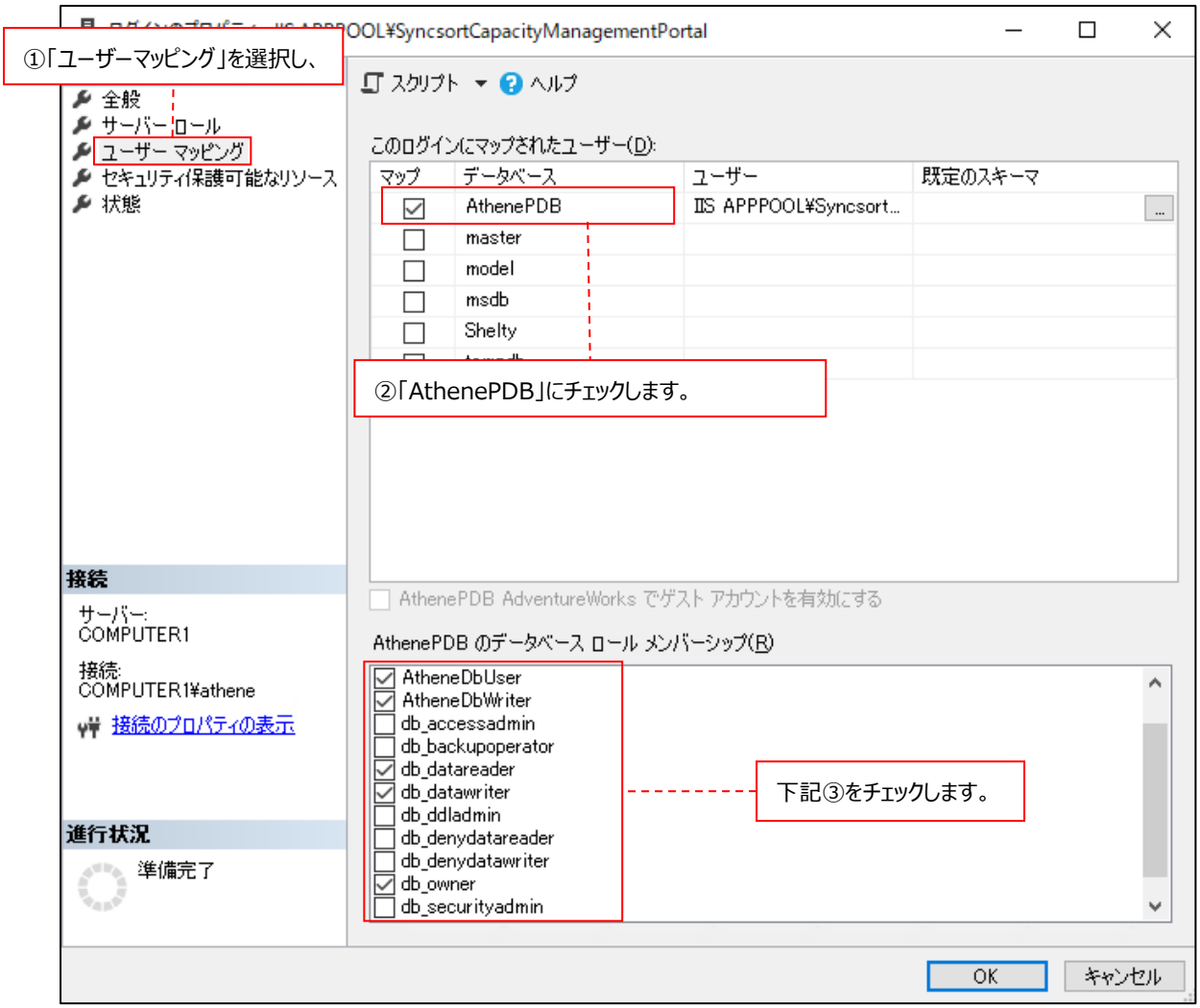


①ログイン名　　：「IIS APPPOOL¥SyncsortCapacityManagementPortal」と入力し、「Windows 認証」を選択します。

②既定のデータベース　　：「AthenePDB」を指定します。

③既定の言語　　：「Japanese － 日本語」を指定します。

(4)画面左側の「ページの選択－ユーザーマッピング」をクリックします①。



②このログインにマップされたユーザー　　：「AthenePDB」にチェックします。

③AthenePDB のデータベース ロール メンバーシップ　：以下にチェックします。
AtheneDbUser
AtheneDbWriter
db_datareader
db_datawriter
db_owner
public

指定が終了したら、[OK]ボタンをクリックします。

3.5. インストールログ

Control Center のインストールが終了すると、処理のログが「%TEMP%」に出力されます。
ログに下記が記録されていることを確認します。
Syncsort Capacity ManagementCore.Install-yyyymmdd-hhmmss.log
Syncsort Capacity ManagementPortal.Install-yyyymmdd-hhmmss.log
Syncsort Capacity ManagementJS.Install-yyyymmdd-hhmmss.log

```
MSI (c) (F0:40) [15:54:22:199]: Product: Syncsort Capacity Management Core 12.20 --
Installation completed successfully.

MSI (c) (F0:40) [15:54:22:221]: Windows Installer installed the product. Product Name:
Syncsort Capacity Management Core 12.20. Product Version: 12.20.0.0. Product Language:
1033. Manufacturer: Precisely. Installation success or error status: 0.
```

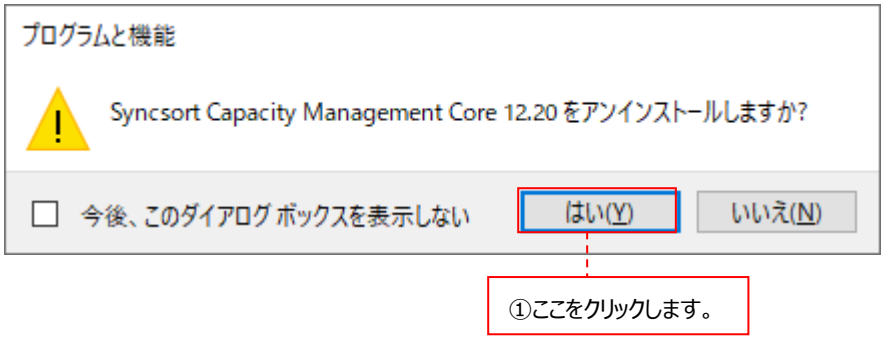
3.6. アンインストール手順

ここでは、Control Center のアンインストール手順を説明します。以下の手順に従って削除を行ってください。

(1)対象システムへのログオン
対象システムに Administrators グループに所属する Control Center 専用ユーザまたは Administrator ユーザでログオンします。

(2)プログラムと機能
「コントロールパネル→プログラムと機能」でアンインストールするプログラムを選択し、[アンインストール]をクリックします。
・Syncsort Capacity Management Core 12.20
・Syncsort Capacity Management Job Scheduler
・Syncsort Capacity Management Portal

続いて表示されるメッセージボックスにて[はい(Y)]ボタンをクリックしてアンインストールを行います①。



(3)SQL Server のアンインストール
不要であれば管理用マシンにインストールした SQL Server をアンインストールしてください。

第4章　System Manager の使用方法

ここでは、Control Center のメイン機能となる System Manager の使用方法について説明します。
まず、System Manager の概要を説明している「4.1.～4.3.」を参照してください。

・4.1. ターゲットについて
・4.2. System Manager の機能
・4.3. System Manager のメイン画面と基本操作

その後、パフォーマンスデータを収集するための実際の設定手順を説明している「4.4. 基本設定順序」以降に進んでください。

・4.4. 基本設定順序
・4.5. Capture Profile の設定
・4.6. Collection Profile の設定
・4.7. Threshold Profile の設定
・4.8. 新規ターゲットの定義
・4.9. データ収集/転送/変換処理の開始

以下の 2 つの節は、System Manager が備えているユーティリティ機能を説明しています。必要に応じて参照してください。

・4.10. 複数ターゲットのグルーピング機能(Groups Editor)
・4.11. 複数ターゲットの同時編集機能(Edit Multiple Targets)

4.1. ターゲットについて

Control Center では、Acquire をインストールしてパフォーマンスデータを収集する対象の Unix/Linux/Windows システムのことを「ターゲットシステム」または単に「ターゲット」と呼びます。
また、Oracle/SQL Server/Symfoware データベースのパフォーマンスデータを収集する場合、Unix/Linux/Windows システムとは別に、各データベースを 1 つの「ターゲット」として扱います。
Control Center では、この「ターゲット」が基本の処理単位となります。

例えば、ある Unix OS 上で Oracle データベースが稼働していて、その OS のパフォーマンスデータと Oracle のパフォーマンスデータを収集するならば、Unix OS に対して 1 つのターゲット、Oracle データベースに対して 1 つのターゲットを定義することになります。

・Unix OS　→ターゲット 1
・Oracle データベース　→ターゲット 2

4.2. System Manager の機能

Control Center の System Manager はパフォーマンスデータを収集する対象システムを定義し、データの収集と転送を制御するメインアプリケーションです。
System Manager は、次のような機能を備えています。

(1)新規ターゲットの作成と編集
対象システムの名前、OS の種類、接続情報などを指定し、新規ターゲットを作成または編集します。

(2)Capture Profiles
ターゲットシステム上で Acquire が収集するパフォーマンスデータの種類や収集間隔、収集期間を指定します。

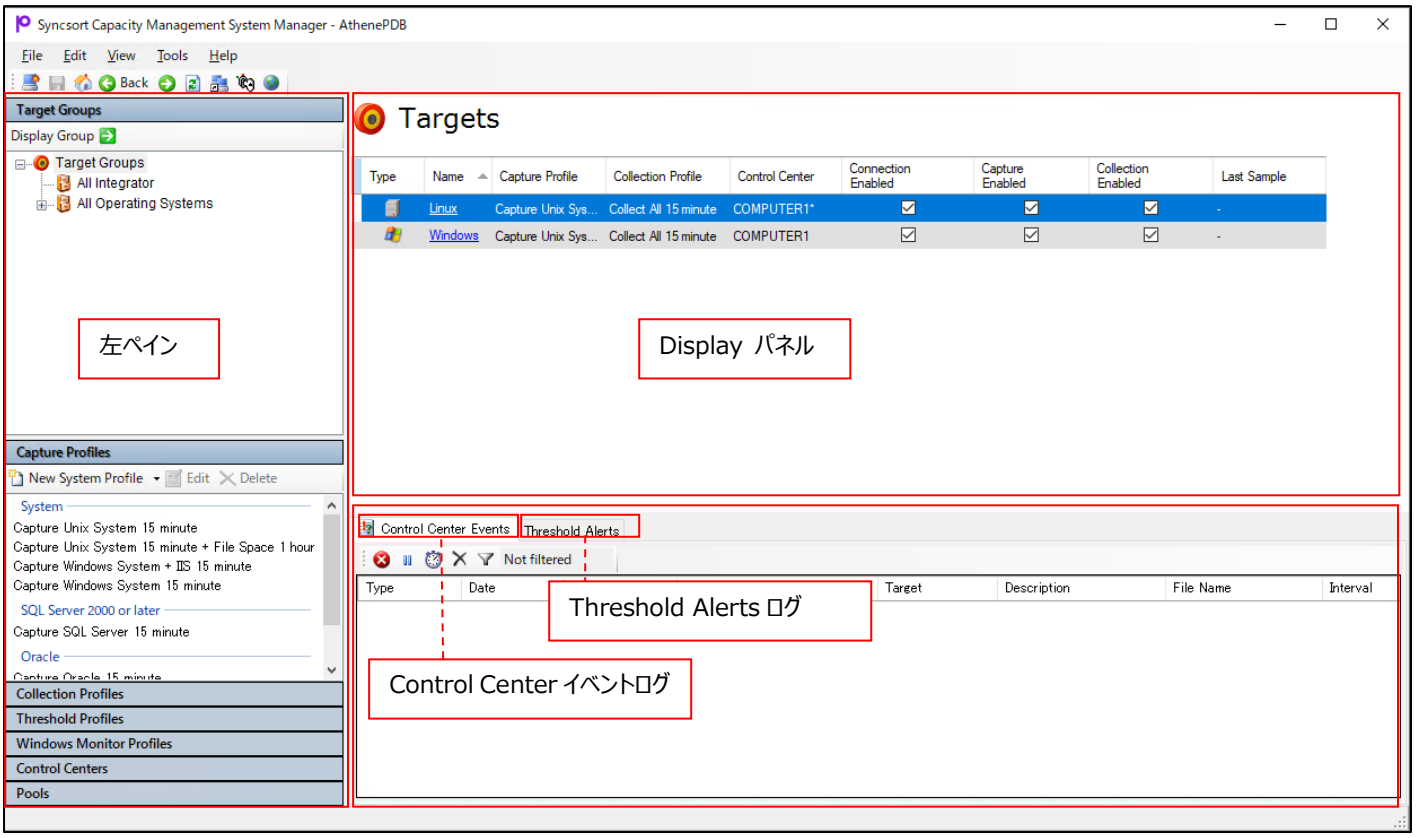
(3)Collection Profiles
ターゲットシステム上で Acquire が収集したパフォーマンスデータを管理用マシンに転送する間隔や期間を指定します。

(4)Control Center 自体の管理
Control Center はデータ収集とパフォーマンスデータベース(PDB)の更新をすべて扱うプロダクトの「エンジン」として機能します。Control Center はターゲットシステムからデータを転送し、PDB を更新します。
Control Center は Windows サービスとして稼働するため、システムのブート時に自動的に起動し、ユーザがログオンする必要はありません。

4.3. System Manager のメイン画面と基本操作

ここでは、System Manager のメイン画面に表示される内容と、頻繁に使用する操作について説明します。

【System Manager のメイン画面】



4.3.1. System Manager の概要

System Manager はターゲットの作成と保守、データの収集と転送にかかわるすべてを管理しています。
System Manager は次の作業時に使用します。

・ターゲットシステムの新規定義
・ターゲット毎に Capture と Collection のプロファイルを指定する
・ターゲット毎にデータの収集を開始／停止する
・Control Center イベントログを表示する

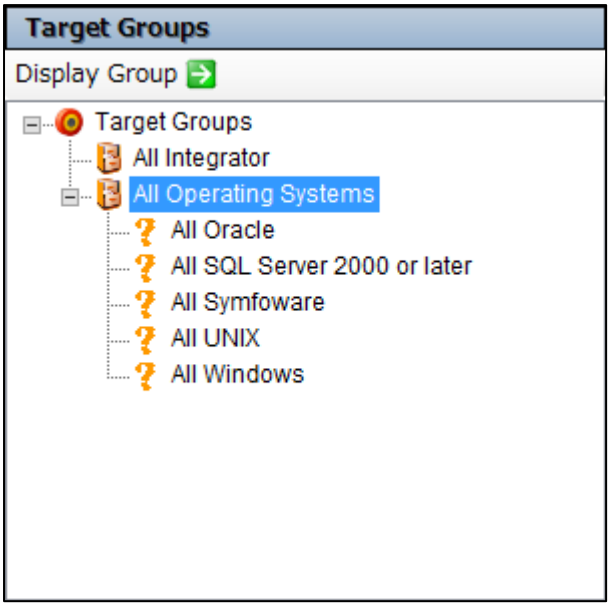
4.3.2. Display パネルの説明

Display パネルは System Manager 画面の右上に位置する大きなエリアです。表示したいオブジェクトは、通常、左ペインで選択してここに表示します。Display パネルに表示できる項目は次の通りです。

・パフォーマンスデータベース内の全ターゲットの一覧リスト
・特定グループに所属するターゲット
・特定ターゲットの詳細
・Capture Profile
・Collection Profile

4.3.3. Target Groups の説明

Control Center には、ターゲットが所属するいくつかのグループが用意されています。
System Manager 画面の左上に「Target Groups」が表示されます。



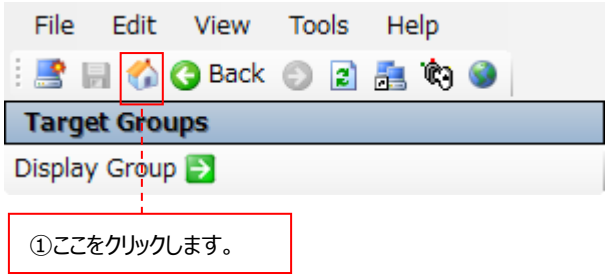
All Operating Systems の下にはターゲットが所属するすべてのカテゴリー(グループ)が一覧表示されます。以下のグループがデフォルトで用意されており、ターゲットを新規に定義する度に、OS またはデータベースの種類に応じてどれかひとつのグループに自動的に割り当てられます。

All UNIX	: Unix または Linux システムのターゲットが所属します。
All Windows	: Windows システムのターゲットが所属します。
All Oracle	: Oracle データベースのターゲットが所属します。
All SQL Server 2000 or later	: SQL Server 2000 以降のデータベースのターゲットが所属します。
All Symfoware	: Symfoware データベースのターゲットが所属します。

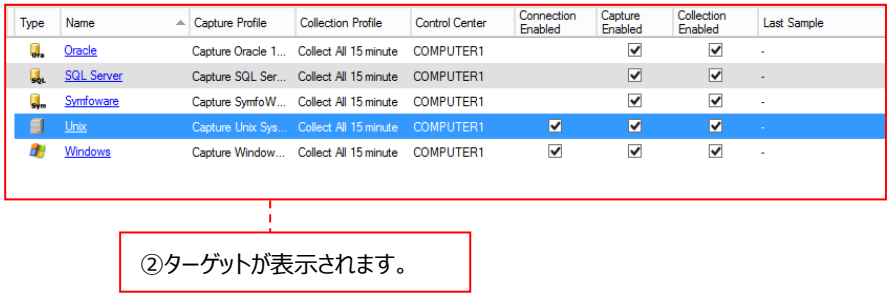
また、「Groups Editor」機能を使用することにより、任意のグループを作成することが可能です。
Groups Editor については、「4.10. 複数ターゲットのグルーピング機能(Groups Editor)」を参照してください。

4.3.4. 全ターゲットの表示方法

定義されているすべてのターゲットを表示させたい場合は、「System Manager メイン」画面左上のツールバーにある[Home]ボタンをクリックします①。



Display パネルにすべてのターゲットが表示されます②。

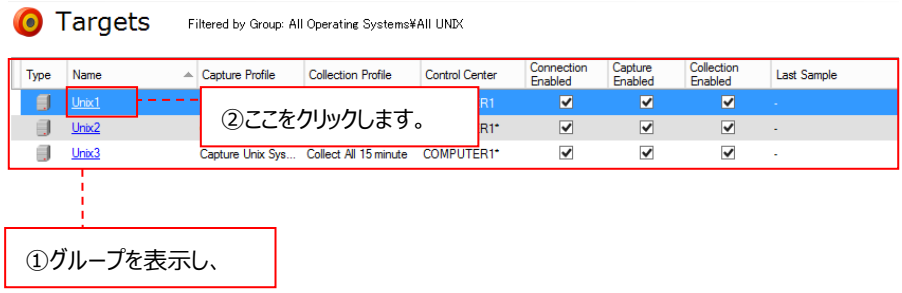


4.3.5. 特定グループに所属するターゲットの表示方法

例えば、「All UNIX」などの特定グループに所属するシステムを表示するには、左側のグループ名を選択し①、[Display Group]ボタンをクリックします②。
グループ名をダブルクリックしても同じ結果が得られます。

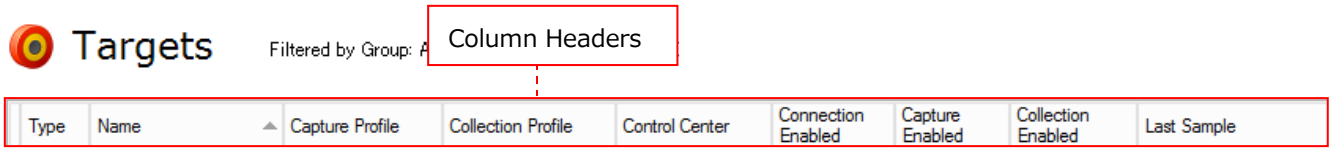
4.3.6. 特定ターゲットの詳細の表示方法

特定ターゲットの詳細情報を表示するには、表示したいターゲットが含まれているグループ(または全ターゲット)を Display パネルに表示し①、下線付きのターゲット名をクリックします②。



4.3.7. Column Headers の操作

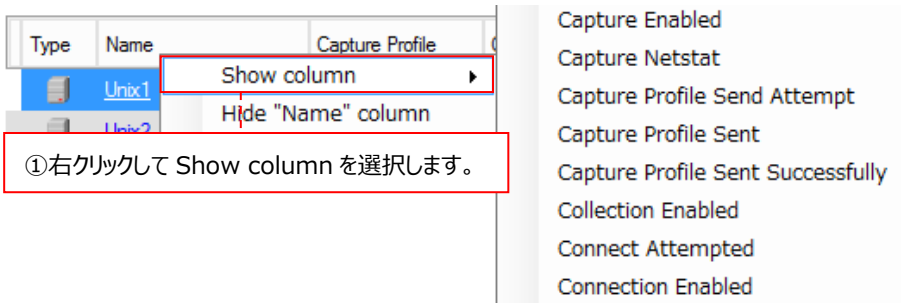
Display パネルに表示される「Column Headers」には、ターゲットシステム毎の属性を表示できます。各属性はカラムヘッダの下に表示されます。



Column Headers では、以下の操作を行えます。

(1)表示する属性の追加

表示させたい属性を追加するには、任意のカラムヘッダを右クリックして Show column を選択します①。
例えば、Last Sample を追加することで各ターゲットの処理状況を一画面で確認できます。

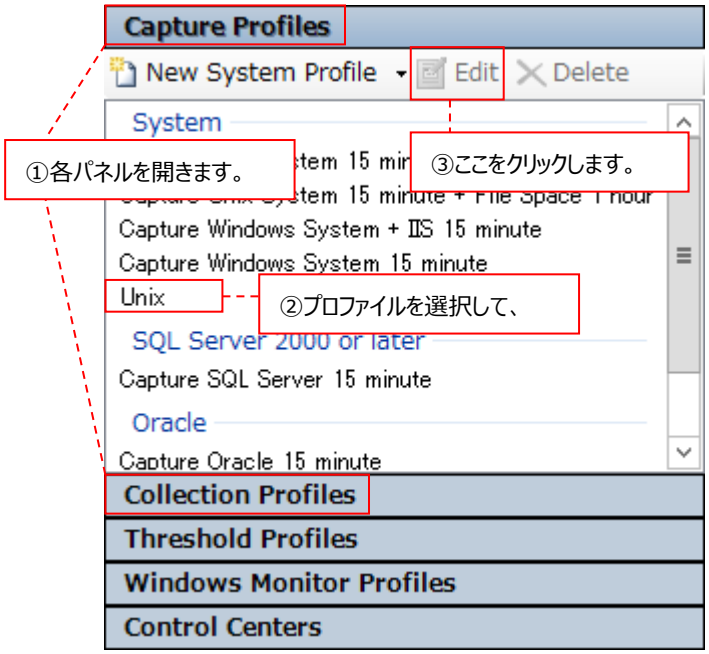


(2)属性による表示順のソート

各カラムヘッダをクリックすることより①、ターゲットシステムの表示順（昇順/降順）を切り替えることができます。

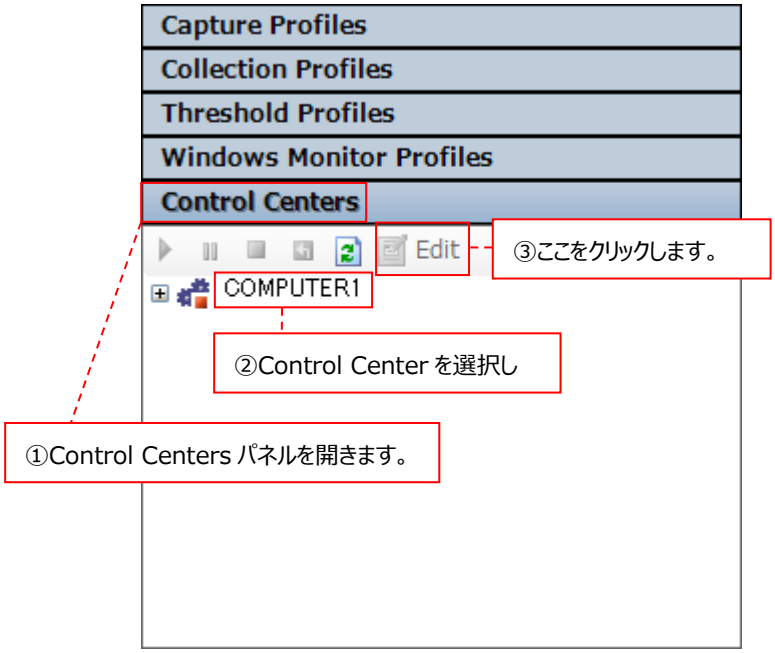
4.3.8. Capture Profile／Collection Profile の表示方法

Capture Profile/Collection Profile を表示するには、System Manager メイン画面の左下側で各パネルを開きます①。プロファイルを選択して②、[Edit]ボタンをクリックするか③、プロファイル名をダブルクリックします。
そのプロファイルが Display パネル内に表示され、編集/保存することができます。



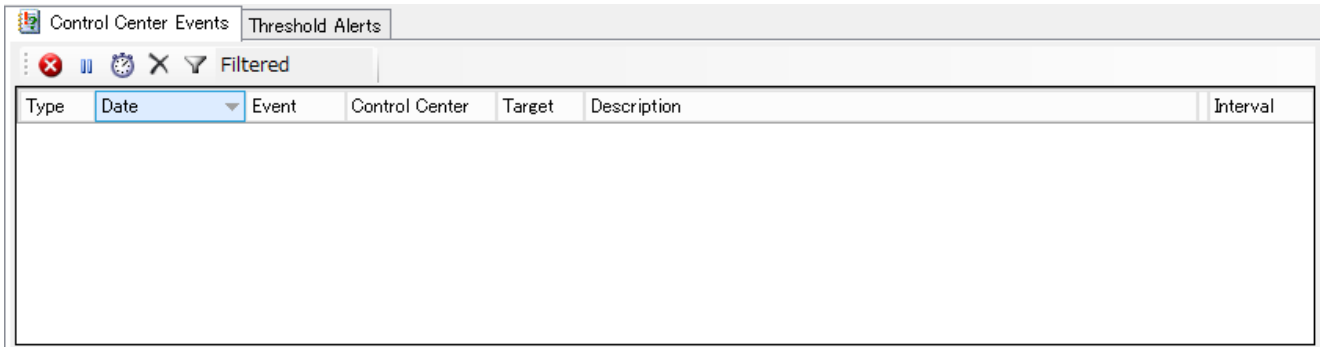
4.3.9. Control Center の詳細情報の表示方法

System Manager メイン画面の左下側で Control Centers パネルを開きます①。対象の Control Center を選択して②、[Edit]ボタンをクリックします③。
Display パネル内に Control Center 詳細情報が表示され、ここで必要な変更が行えます。



4.3.10. Control Center イベントログの説明

System Manager 画面の右下にある「Control Center Events」タブには、Control Center の処理に関する様々な事象を報告するイベントログが表示されます。

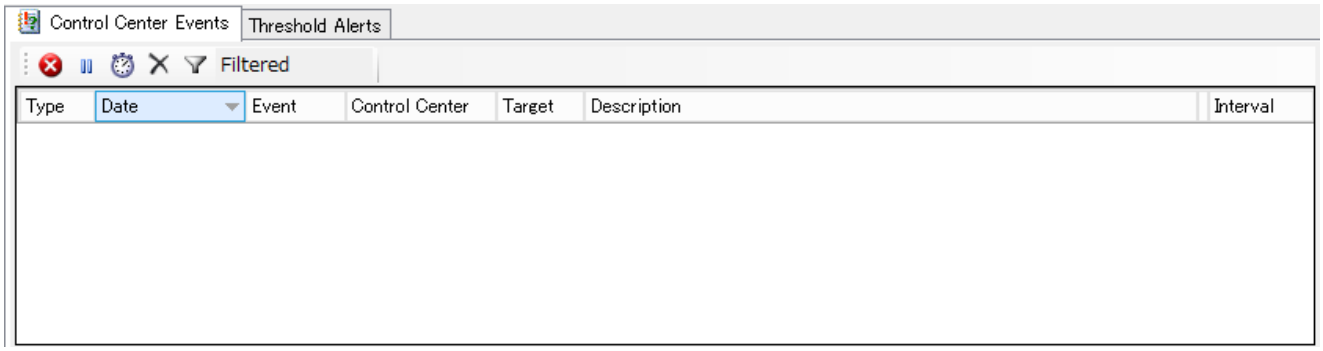


Control Center のイベントログはパフォーマンスデータベース(PDB)の中に格納されており、5 日以上経過したイベントログは、Control Center サービスの起動時刻から 10 分後に削除されます。そのサービス起動から 10 分後の時刻が削除タイミングとして設定され、以降は毎日設定時刻に削除処理が行われます。

(例)
05:00 に Control Center サービスを起動した場合、05:10 にイベントログが削除され、以降毎日 05:10 に削除処理が行われる。

4.3.11. Threshold Alerts ログの説明

System Manager 画面の右下にある「Threshold Alerts」タブには、Threshold Alerting 機能でしきい値検査の検知結果が表示されます。



4.4. 基本設定順序

対象システムのパフォーマンスデータ収集を行えるようにするまでの基本的な設定順序は、以下の通りです。

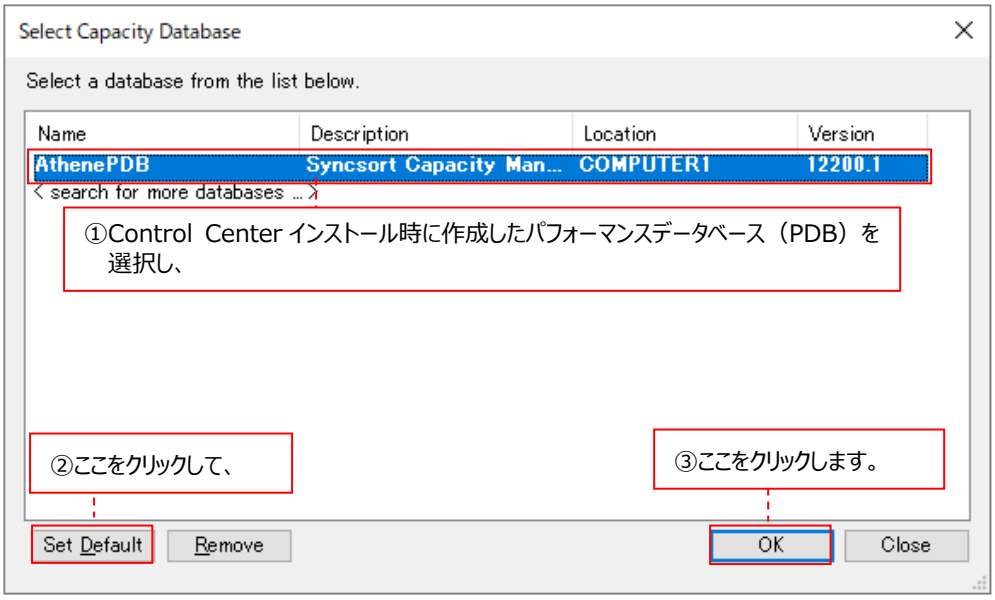
4.4.1. Control Center サービスの一時停止
↓
4.5. Capture Profile の設定
↓
4.6. Collection Profile の設定
↓
4.7. Threshold Profile の設定（任意）
↓
4.8. 新規ターゲットの定義
↓
4.9. データ収集/転送/変換処理の開始

4.4.1. Control Center サービスの一時停止

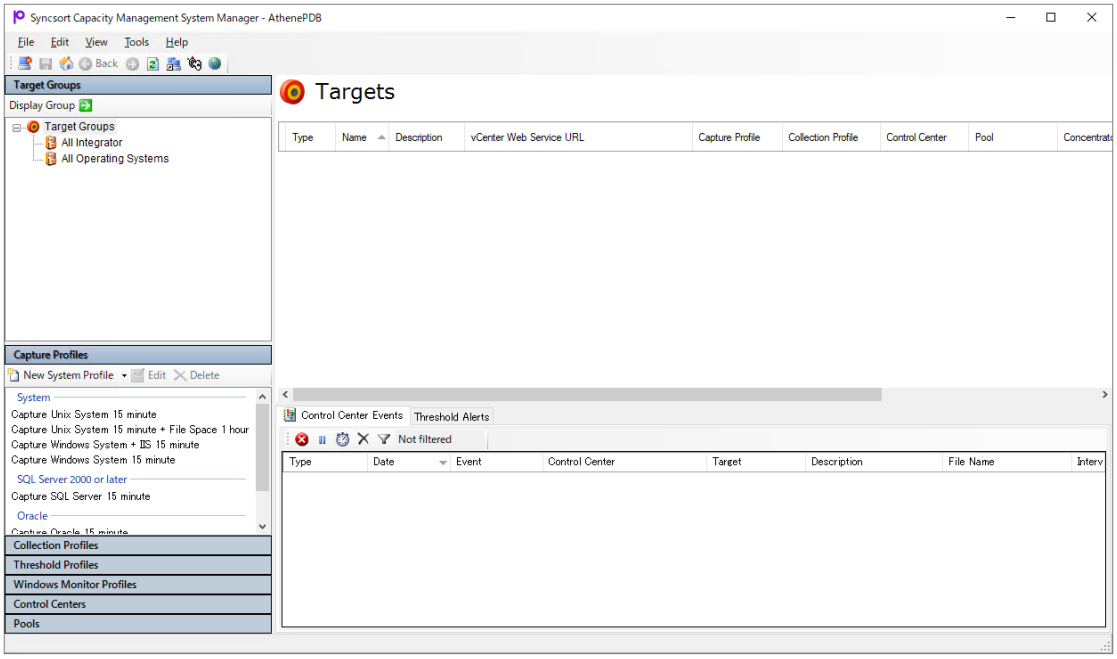
Control Center のインストール直後は、まだターゲットが 1 つも存在しませんので、Control Center サービスを一時停止してその後の設定作業を行います。

(1)System Manager の起動

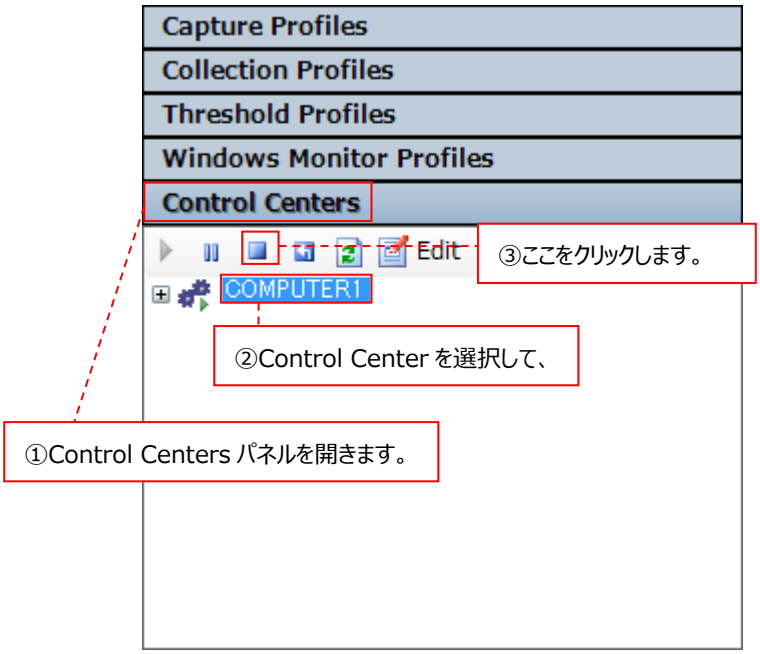
「スタート」→「アプリ」→「Syncsort Capacity Management Core」→「System Manager」を起動します。
下図「Select Capacity Database 画面が表示された場合は、Control Center インストール時に作成したパフォーマンスデータベース(PDB)を選択し①、左下の[Set Default]ボタンをクリック後②、[OK]ボタンをクリックします③。



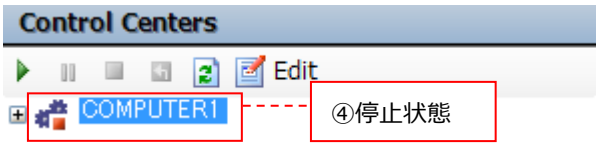
「System Manager メイン」画面が表示されます。



(2)Control Center サービスの停止
「System Manager メイン」画面の左下側で Control Centers パネルを開きます①。
対象の Control Center を選択して②、[Stop Service]ボタンをクリックします③。



下図のように、赤い四角が表示されていると、Control Center サービスは停止しています④。



この後、「4.5. Capture Profile の設定」に進んでください。

4.5. Capture Profile の設定

ここでは、対象システム上での Acquire によるデータ収集設定(Capture Profile)の作成手順について説明します。

4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定

Control Center を新規にインストールした場合は、推奨のデータ収集設定が既に定義されている以下の Capture Profile がデフォルトで用意されています。通常は、デフォルトの Capture Profile を使用してください。

Capture Profile 名	収集対象 OS	収集対象データ	収集間隔	収集期間
Capture Unix System 15 minute	Unix/Linux	システム	15 分	24 時間連続収集
		ユーザ	15 分	24 時間連続収集
Capture Unix System 15 minute + File Space 1 hour	Unix/Linux	システム	15 分	24 時間連続収集
		ユーザ	15 分	24 時間連続収集
		ファイルシステム	1 時間	24 時間連続収集
Capture Windows System 15 minute	Windows	システム	15 分	24 時間連続収集
		プロセス	15 分	24 時間連続収集
Capture Windows System + IIS 15 minute	Windows	システム	15 分	24 時間連続収集
		プロセス	15 分	24 時間連続収集
		IIS	15 分	24 時間連続収集
Capture Oracle 15 minute	Unix/Linux Windows	Oracle システム Oracle セッション Oracle データファイル	15 分	24 時間連続収集
Capture SQL Server 15 minute	Windows	SQL Server	15 分	24 時間連続収集
Capture SymfoWARE 15 minute	Unix/Linux Windows	Symfoware	15 分	24 時間連続収集

収集対象データと System Manager 設定値の対応

システム（CPU、メモリ、IO 等）	: System
ユーザ	: Capture user data(UNIX only)
プロセス	: Capture process data(Windows only)
ファイルシステム	: File Space
Oracle システム	: Oracle
Oracle セッション	: Capture session data
Oracle データファイル	: Capture file data
IIS	: IIS
SQL Server	: SQL Server 2000 or later
Symfoware	: SymfoWARE

デフォルトの Capture Profile を使用する場合は新たな設定の必要が無いため、「4.6. Collection Profile の設定」に進んでください。
任意の Capture Profile を作成する場合は、「4.5.2. データ収集設定の作成順序」以降を参照してください。

4.5.2. データ収集設定の作成順序

以下の順序で Capture Profile の設定を行っていきます。

(1)基本データ用の Capture Profile を設定する。
Unix/Linux ：システムデータ/ユーザデータ/ファイルシステムデータ
Windows ：システムデータ/プロセスデータ/IIS データ

(2)データベースのパフォーマンスデータを取得する場合は、それぞれの Capture Profile を設定する。
・Oracle
・SQL Server
・Symfoware

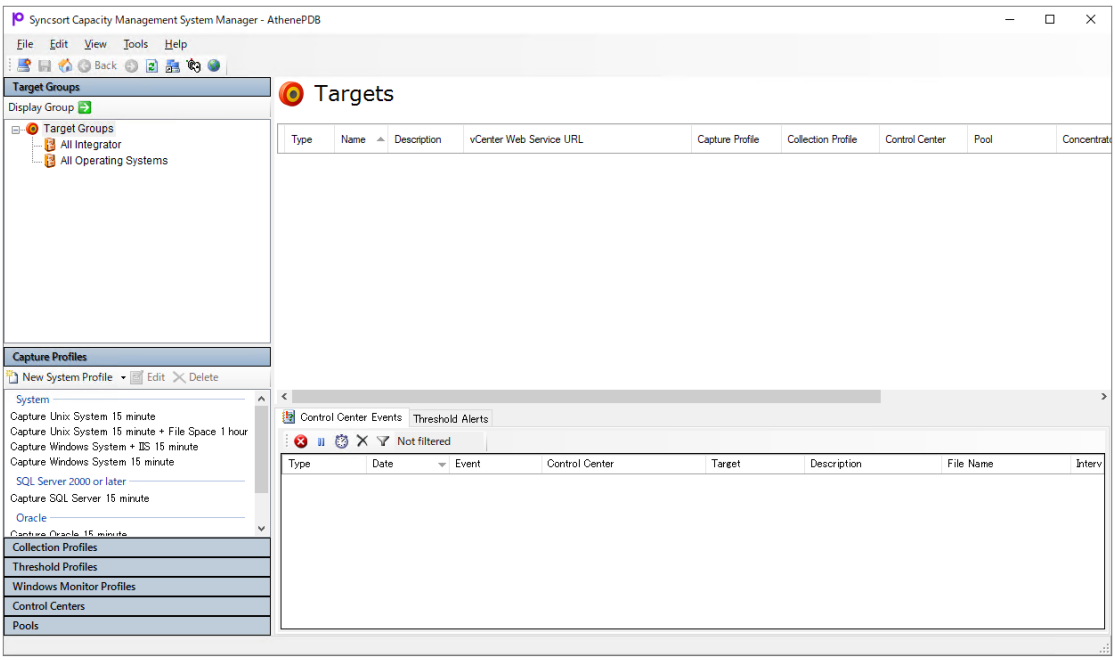
4.5.3. 基本データ用 Capture Profile の設定

ここでは、基本データ用の Capture Profile の設定手順について説明します。

(1)System Manager の起動

「スタート」→「アプリ」→「Syncsort Capacity Management」→「System Manager」を起動します。

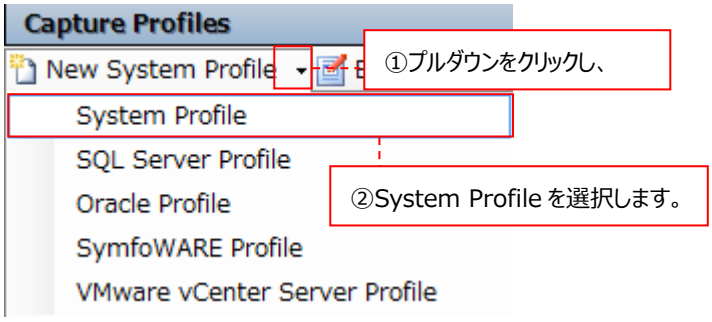
「System Manager メイン画面」が表示されます。



(2)基本データ用 Profile の選択

「System Manager メイン」画面左下の「Capture Profiles パネル」を開きます。

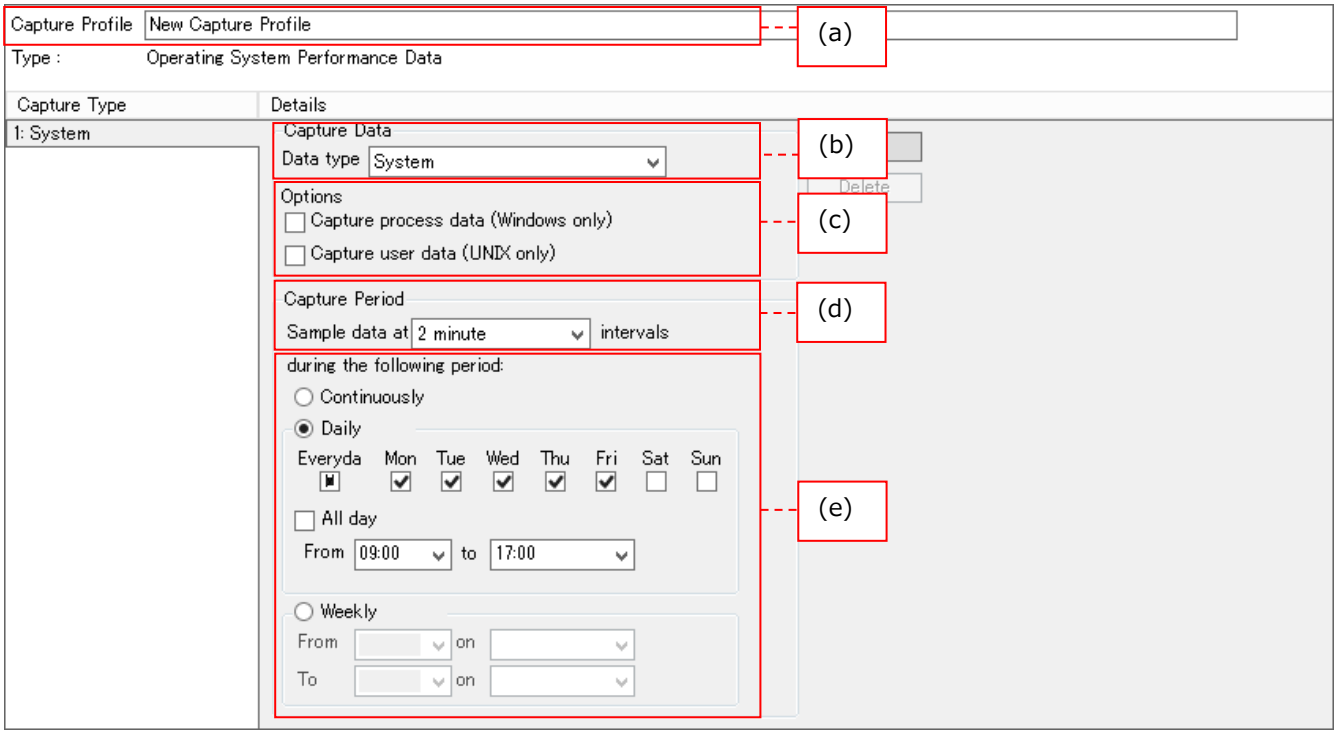
「New System Profile」の右にあるプルダウンをクリックし①、「System Profile」を選択します②。



注意！
Capture Profiles パネルのプルダウンに表示される「VMware vCenter Server Profile」は使用できません。

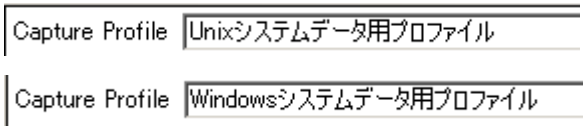
(3)基本データ用 Profile の詳細定義

Display パネルに Capture Profile の詳細を定義する画面が表示されます。
まず、システムデータに関して、図中の(a)～(e)までの各設定を行います。



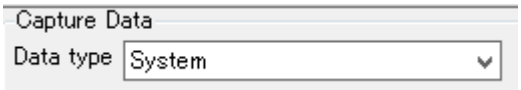
(a)Capture Profile

基本データ用 Profile に対する任意の名前を入力します。Unix/Linux システムと Windows システムでは Profile を分けてください。



(b)Data type

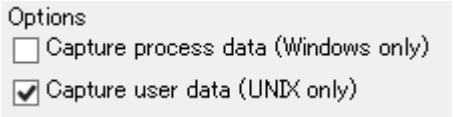
収集するデータの種類を指定します。「System」と表示されていることを確認します。



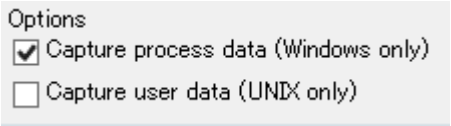
注意！
Data type のプルダウンに表示される以下の選択肢は使用できません。
・Exchange
・SQL Server 6.5 / 7
・Riposte
・Pathway Agent Application

(c)Options

Unix のユーザデータまたは Windows のプロセスデータを収集するかどうかを選択します。
Unix のユーザデータを収集する場合は、Capture user data (UNIX only)をチェックします。

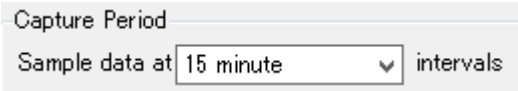


Windows のプロセスデータを収集する場合は、Capture process data (Windows only)をチェックします。



(d)Capture Period　: Sample data at intervals

データを収集する間隔(インターバル)をプルダウンから選択します。2,3,5,10,15,20,30 分および 1 時間から選択可能です。通常は 15minute にします。



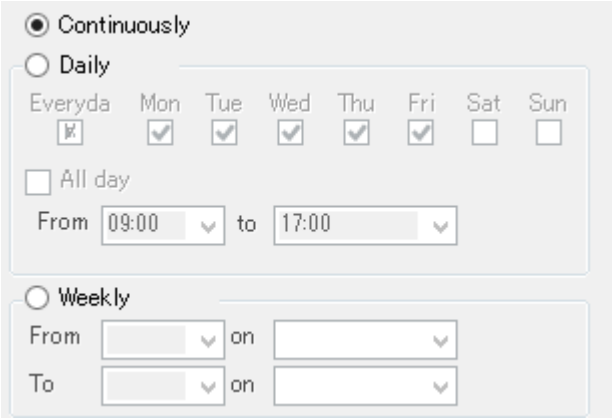
注意！
Capture Period のプルダウンに表示される「1 minute」は使用できません。

(e)Capture Period　: during the following period

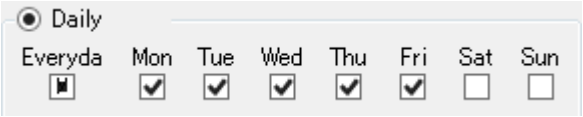
1 週間を 1 つの単位とし、データを収集する期間/時間帯を指定します。以下の 3 つの指定方法があります。

【Continuously】

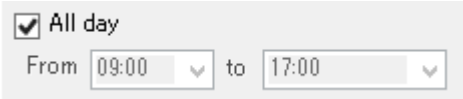
1 週間を 24 時間連続して収集する場合に使用します。Continuously を指定すると、Daily と Weekly がマスクされます。



【Daily】
1 週間の中で特定曜日を除外したい場合、または、1 日の中で収集時間帯を限る場合に使用します。
例えば、土、日曜日を除外する場合は、Sat と Sun のチェックを外します。



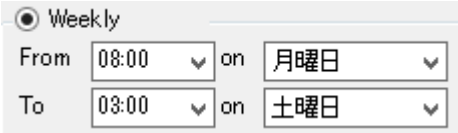
All day にチェックを付けると 24 時間収集になります。



1 日の中で収集時間帯を限る場合は、From と to のプルダウンから時間を選択します。
以下の例では 9 時から 17 時までの収集になります。

Daily では、曜日の指定と時間帯の指定が組み合わせられて有効になります。

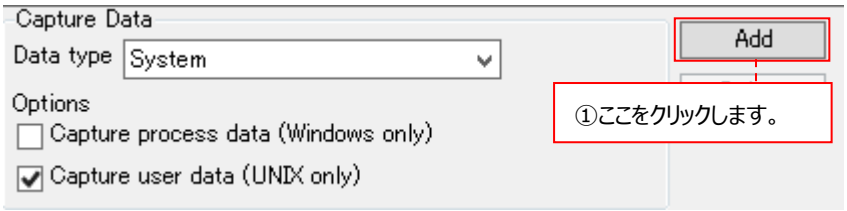
【Weekly】
1 週間の中で特定曜日(on)の特定時間(From)から特定曜日(on)の特定時間(To)までを連続して収集する場合に使用します。以下の例では月曜日の 8 時から土曜日の 3 時までの収集になります。



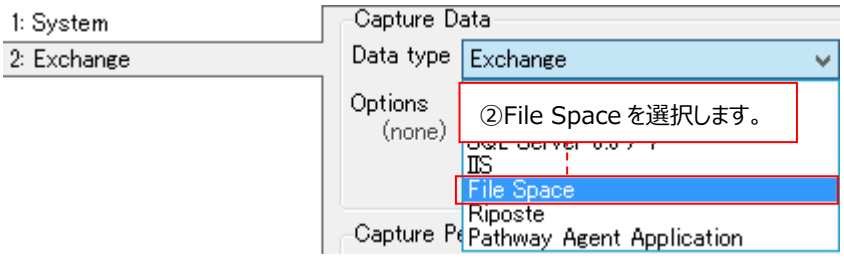
この後、Unix のファイルシステムデータを収集する場合は、
「(4) Unix／Linux ファイルシステムデータ用 Profile の詳細定義」に、
Windows の IIS データを収集する場合は、「(5) Windows IIS データ用 Profile の詳細定義」に進んでください。
どちらも収集しない場合は、「(6) 基本データ用 Profile の保存」に進んでください。

(4)Unix／Linux ファイルシステムデータ用 Profile の詳細定義

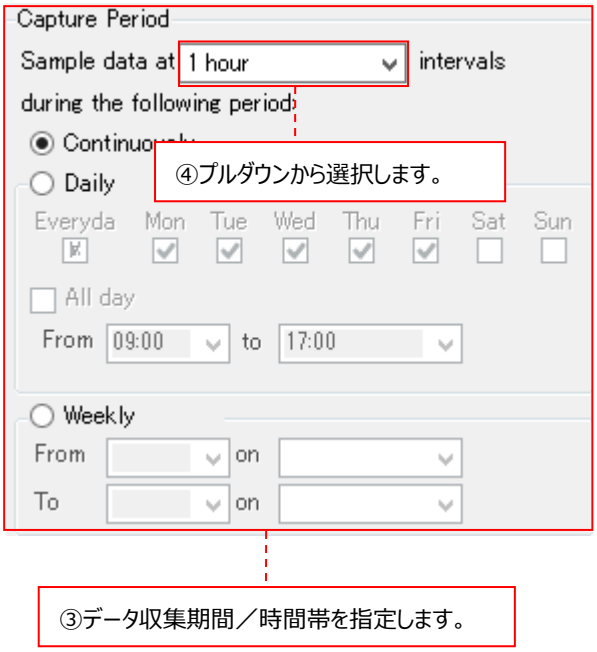
パネルの右側にある[Add]ボタンをクリックします①。



「Data Type」のプルダウンから「File Space」を選択します②。



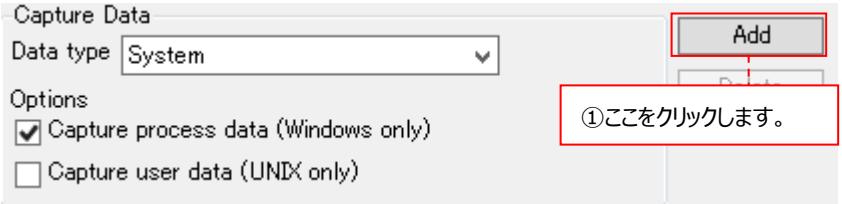
ファイルシステムデータを収集する期間/時間帯を指定します。
指定方法はシステムデータと同じです③。
なお、ファイルシステムデータの場合、プルダウンから選択できる収集インターバルが 2,3,5,10,15,20,30 分と 1,2,4,8,12,24 時間に変わります④。
システムデータと同じインターバルを選択することも可能ですが、通常、ファイルスペースデータは変動が少ないため、1 時間以上のインターバルを選択することをお勧めします。



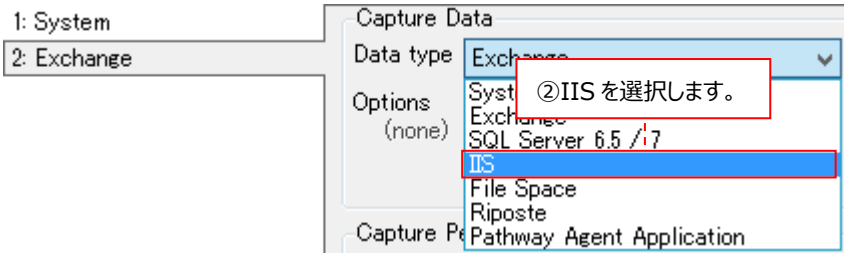
この後、「(6) 基本データ用 Profile の保存」に進んでください。

(5)Windows IIS データ用 Profile の詳細定義

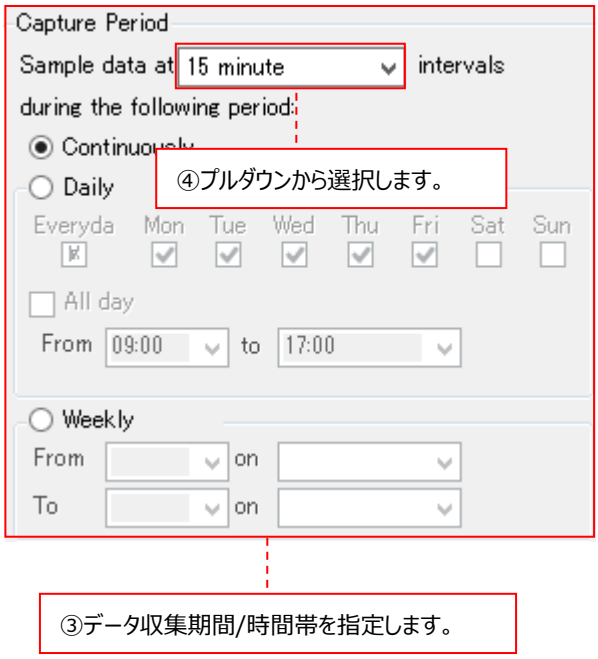
パネルの右側にある[Add]ボタンをクリックします①。



Data type のプルダウンから IIS を選択します②。



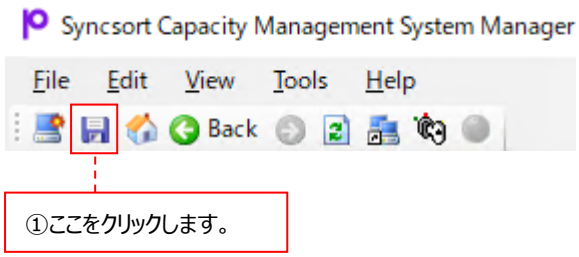
IIS データを収集する期間/時間帯を指定します。指定方法はシステムデータと同じです③。
なお、ここではシステムデータと同じインターバルをプルダウンから選択してください。
システムデータが 15 分インターバル収集ならば、IIS データも 15 分インターバルで収集してください④。



この後、「(6)基本データ用 Profile の保存」に進んでください。

(6)基本データ用 Profile の保存

System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した基本データ用 Profile を保存します。



この後、データベースのパフォーマンスデータを収集する場合は、各データベース用 Capture Profile の設定を行います。

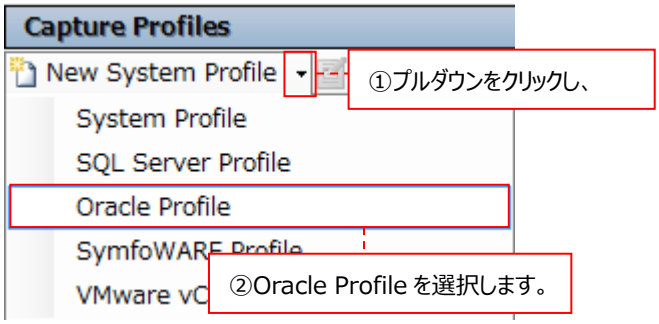
・Oracle データ　　：「4.5.4. Oracle データ用 Capture Profile の設定」に進んでください。
・SQL Server データ　　：「4.5.5. SQL Server データ用 Capture Profile の設定」に進んでください。
・Symfoware データ　　：「4.5.6. Symfoware データ用 Capture Profile の設定」に進んでください。

4.5.4. Oracle データ用 Capture Profile の設定

ここでは、Oracle データ用の Capture Profile の設定手順について説明します。

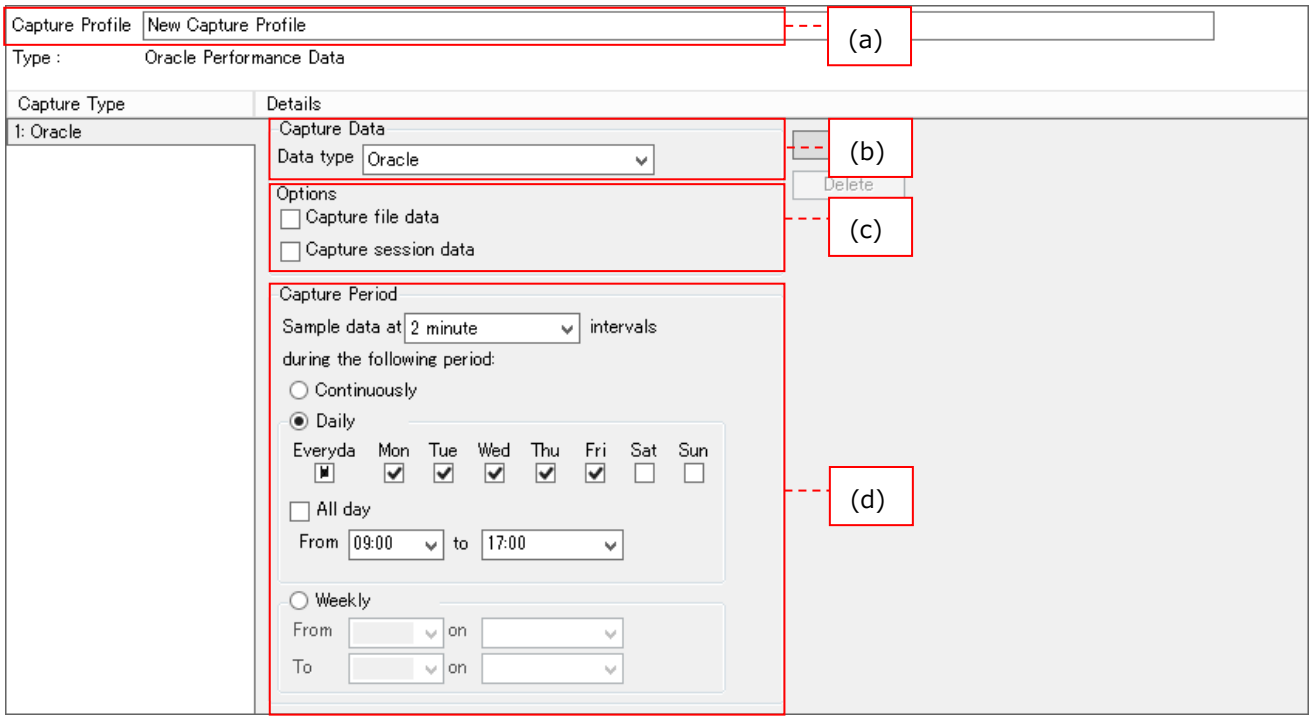
(1)Oracle データ用 Profile の選択

System Manager メイン画面左下の Capture Profiles パネルを開きます。
New System Profile の右にあるプルダウンをクリックし①、Oracle Profile を選択します②。



(2)Oracle データ用 Profile の詳細定義

Display パネルに Capture Profile の詳細を定義する画面が表示されます。
システムデータと同様に、図中の(a)～(d)までの各設定を行います。



(a)Capture Profile

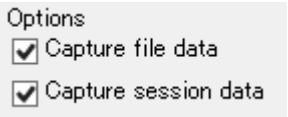
Oracle データ用 Profile に対する任意の名前を入力します。

(b)Data type

収集するデータの種類を指定します。「Oracle」と表示されていることを確認します。

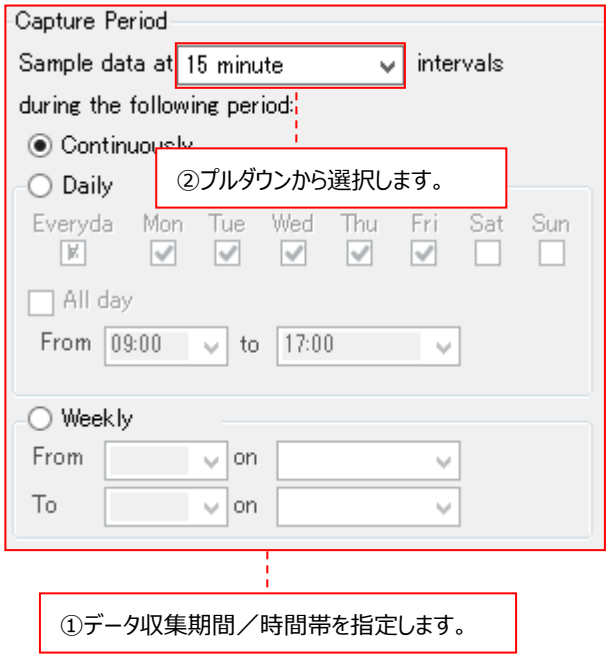
(c)Options

Oracle データファイル／Oracle セッションに関するデータを収集するかどうかを選択します。
Oracle データファイルのデータを収集する場合は、Capture file data をチェックします。
Oracle セッションのデータを収集する場合は、Capture session data をチェックします。
基本的に両方のデータを収集することをお勧めします。



(d)Capture Period

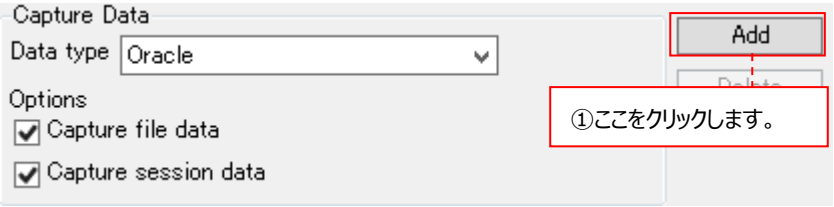
Oracle データを収集する期間／時間帯を指定します。指定方法はシステムデータと同じです①。
なお、ここではシステムデータと同じインターバルをプルダウンから選択してください。システムデータが 15 分インターバル収集ならば、Oracle データも 15 分インターバルで収集してください②。



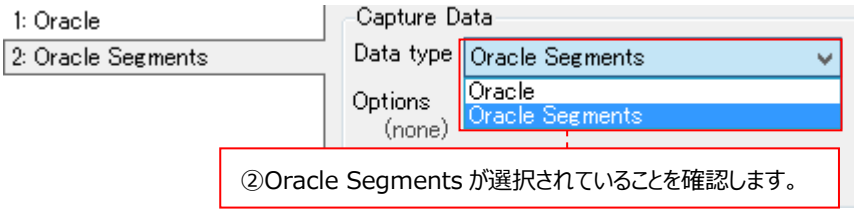
この後、Oracle テーブルスペースデータを収集する場合は、「(3) Oracle テーブルスペースデータ用 Profile の詳細定義」に進んでください。
Oracle テーブルスペースデータを収集しない場合は、「(4) Oracle データ用 Profile の保存」に進んでください。

(3)Oracle テーブルスペースデータ用 Profile の詳細定義

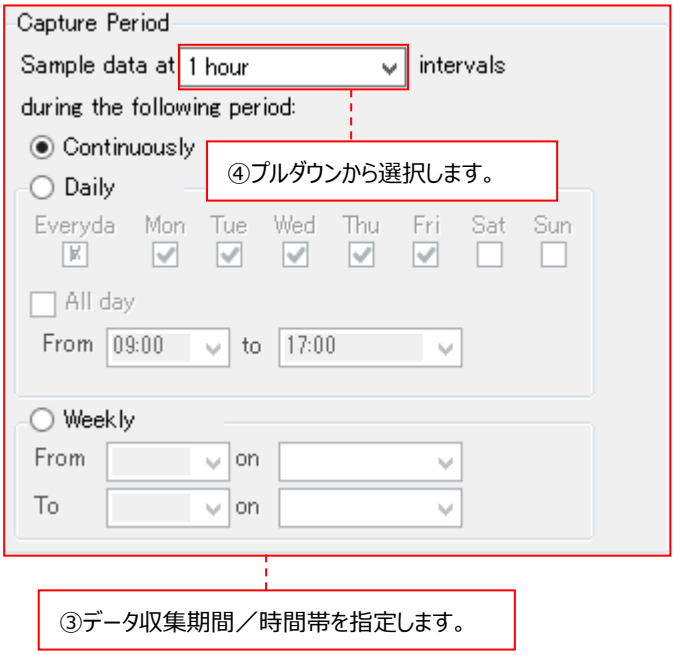
パネルの右側にある[Add]ボタンをクリックします①。



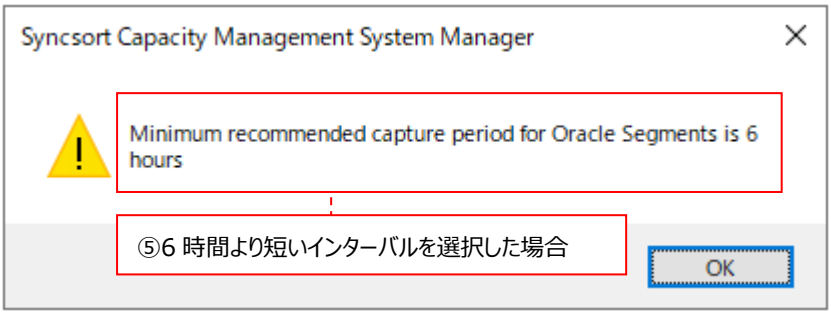
Data Type に Oracle Segments が選択されていることを確認します②。



Oracle テーブルスペースデータを収集する期間/時間帯を指定します。指定方法はシステムデータと同じです③。
なお、Oracle テーブルスペースデータは通常変動が少ないため、プルダウンから選択できる収集インターバルが 1,2,4,6,8,12,24 時間に変わります④。



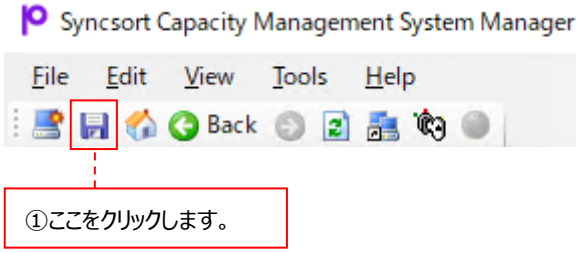
6 時間より短い収集インターバルを選択した場合、メッセージが出力されますので⑤、[OK]ボタンをクリックします。



この後、「(4) Oracle データ用 Profile の保存」に進んでください。

(4)Oracle データ用 Profile の保存

「System Manager メイン」画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した基本データ用 Profile を保存します。



この後、「4.6. Collection Profile の設定」に進んでください。

注意！
Oracle データのみの収集は行えません。
Oracle データを収集する際には、必ずシステムデータの収集も行うようにしてください。

4.5.5. SQL Server データ用 Capture Profile の設定

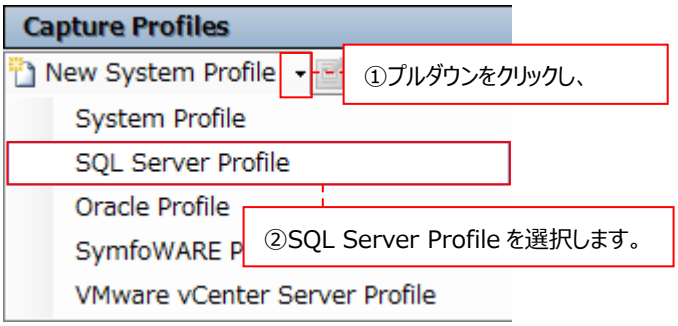
ここでは、SQL Server データ用の Capture Profile の設定手順について説明します。

(1)SQL Server データ用 Profile の選択

「System Manager メイン画面」

左下の Capture Profiles パネルを開きます。

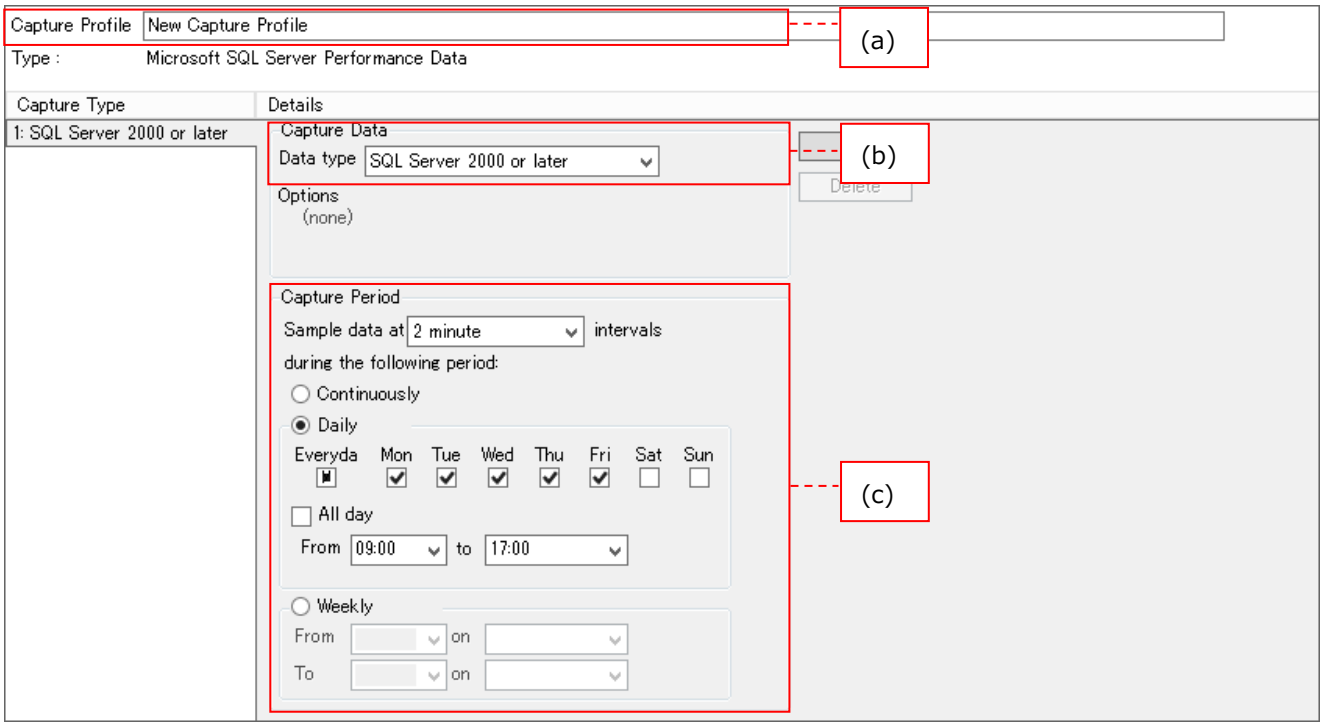
New System Profile の右にあるプルダウンをクリックし①、SQL Server Profile を選択します②。



(2)SQL Server データ用 Profile の詳細定義

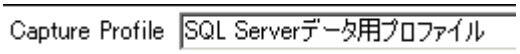
Display パネルに Capture Profile の詳細を定義する画面が表示されます。

システムデータと同様に、図中の(a)～(c)までの各設定を行います。



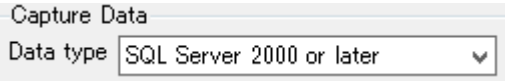
(a)Capture Profile

SQL Server データ用 Profile に対する任意の名前を入力します。



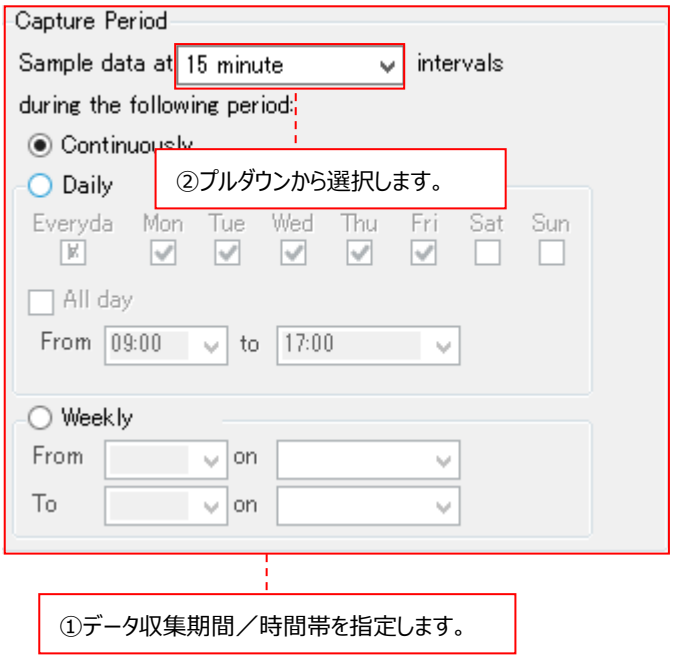
(b)Data type

収集するデータの種類を指定します。「SQL Server 2000 or later」と表示されていることを確認します。



(c)Capture Period

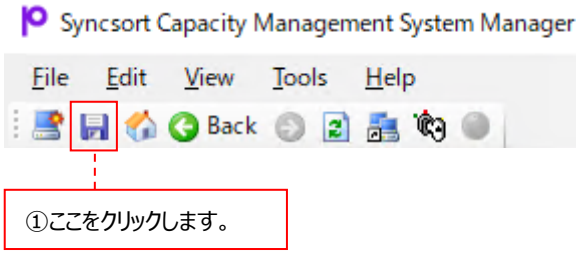
SQL Server データを収集する期間／時間帯を指定します。指定方法はシステムデータと同じです①。
なお、ここではシステムデータと同じインターバルをプルダウンから選択してください。システムデータが 15 分インターバル収集ならば、SQL Server データも 15 分インターバルで収集してください②。



(3)SQL Server データ用 Profile の保存

「System Manager メイン画面」

左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した SQL Server データ用 Profile を保存します。



この後、「4.6. Collection Profile の設定」に進んでください。

4.5.6. Symfoware データ用 Capture Profile の設定

ここでは、Symfoware データ用の Capture Profile の設定手順について説明します。

(1)Symfoware データ用 Profile の選択

「System Manager メイン」画面

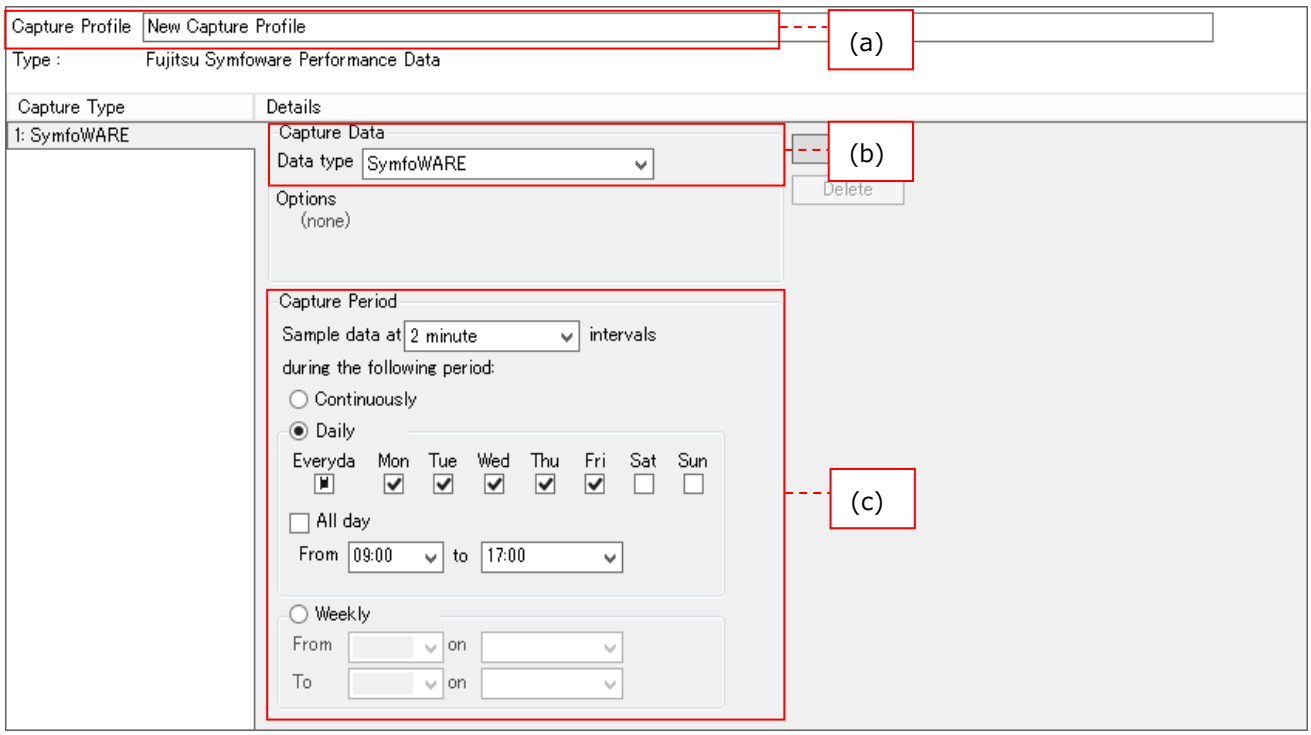
左下の Capture Profiles パネルを開きます。

「New System Profile」の右にあるプルダウンをクリックし①、SymfoWARE Profile を選択します②。

(2)Symfoware データ用 Profile の詳細定義

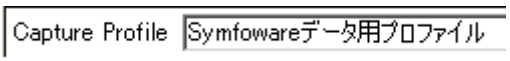
Display パネルに Capture Profile の詳細を定義する画面が表示されます。

システムデータと同様に、図中の(a)～(c)までの各設定を行います。



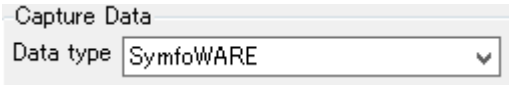
(a)Capture Profile

Symfoware データ用 Profile に対する任意の名前を入力します。



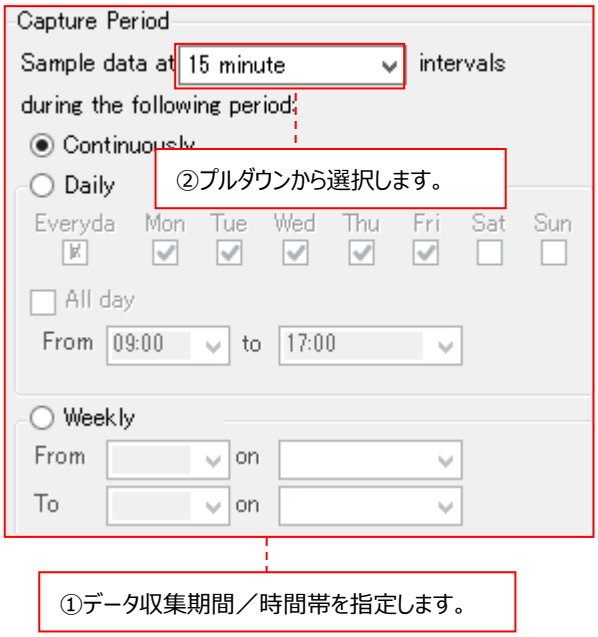
(b)Data type

収集するデータの種類を指定します。「SymfoWARE」と表示されていることを確認します。



(c)Capture Period

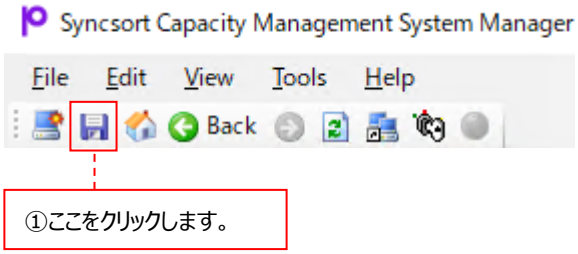
Symfoware データを収集する期間／時間帯を指定します。指定方法はシステムデータと同じです①。
なお、ここではシステムデータと同じインターバルをプルダウンから選択してください。システムデータが 15 分インターバル収集ならば、Symfoware データも 15 分インターバルで収集してください②。



(3)Symfoware データ用 Profile の保存

「System Manager メイン」画面

左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した Symfoware データ用 Profile を保存します。



この後、「4.6. Collection Profile の設定」に進んでください。

4.6. Collection Profile の設定

ここでは、対象システム上で収集されたパフォーマンスデータを管理用マシンに転送する設定(Collection Profile)の作成手順について説明します。

4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定

Control Center を新規にインストールした場合は、全種類のデータを転送対象とする下記設定の Collection Profile がデフォルトで用意されています。

Collection Profile 名	転送対象 OS	転送対象データ	転送間隔	転送期間
Collect All 15 minute	Unix/Linux	システム	15 分	24 時間連続転送
		ユーザ		
		ファイルシステム		
	Windows	システム		
		IIS		
		SQL Server		
	Unix/Linux Windows	Oracle Oracle テーブルスペース Symfoware		
	Integrator	ユーザ任意		

転送対象データと System Manager 設定値の対応

システム（CPU、メモリ、IO 等）	: System or Integrator Data
ユーザ	: User Data
ファイルシステム	: File Space
Oracle	: Oracle
Oracle テーブルスペース	: Oracle Segments
IIS	: IIS
SQL Server	: SQL Server
Symfoware	: SymfoWARE
ユーザ任意	: System or Integrator Data

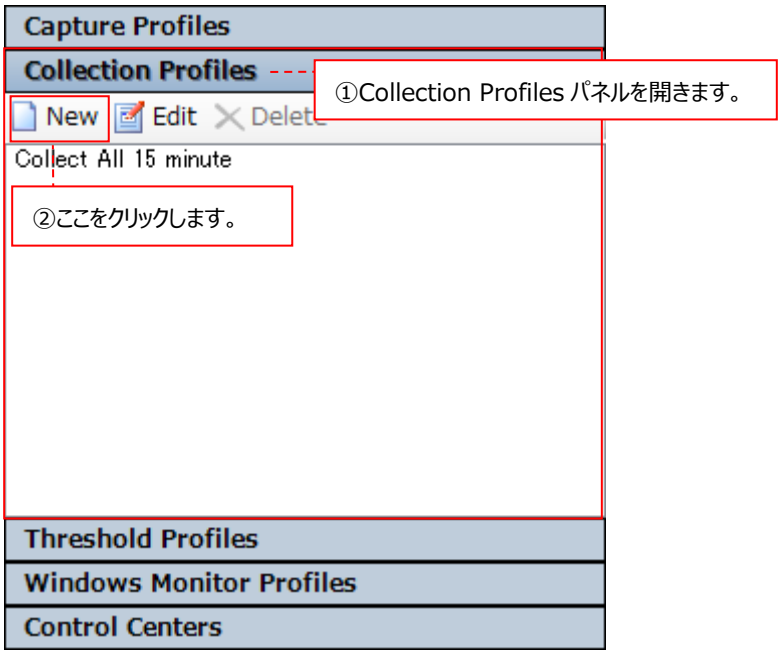
「Collect All 15 minute」の Collection Profile は、Unix/Linux/Windows/Integrator システムに対して共通で使用できます。通常は、デフォルトの Collection Profile を使用してください。
デフォルトの Collection Profile を使用する場合は新たな設定の必要が無いため、「4.8. 新規ターゲットの定義」に進んでください。
任意の Collection Profile を作成する場合は、「4.6.2. データ転送設定の作成」を参照してください。

4.6.2. データ転送設定の作成

(1)Collection Profile の新規作成

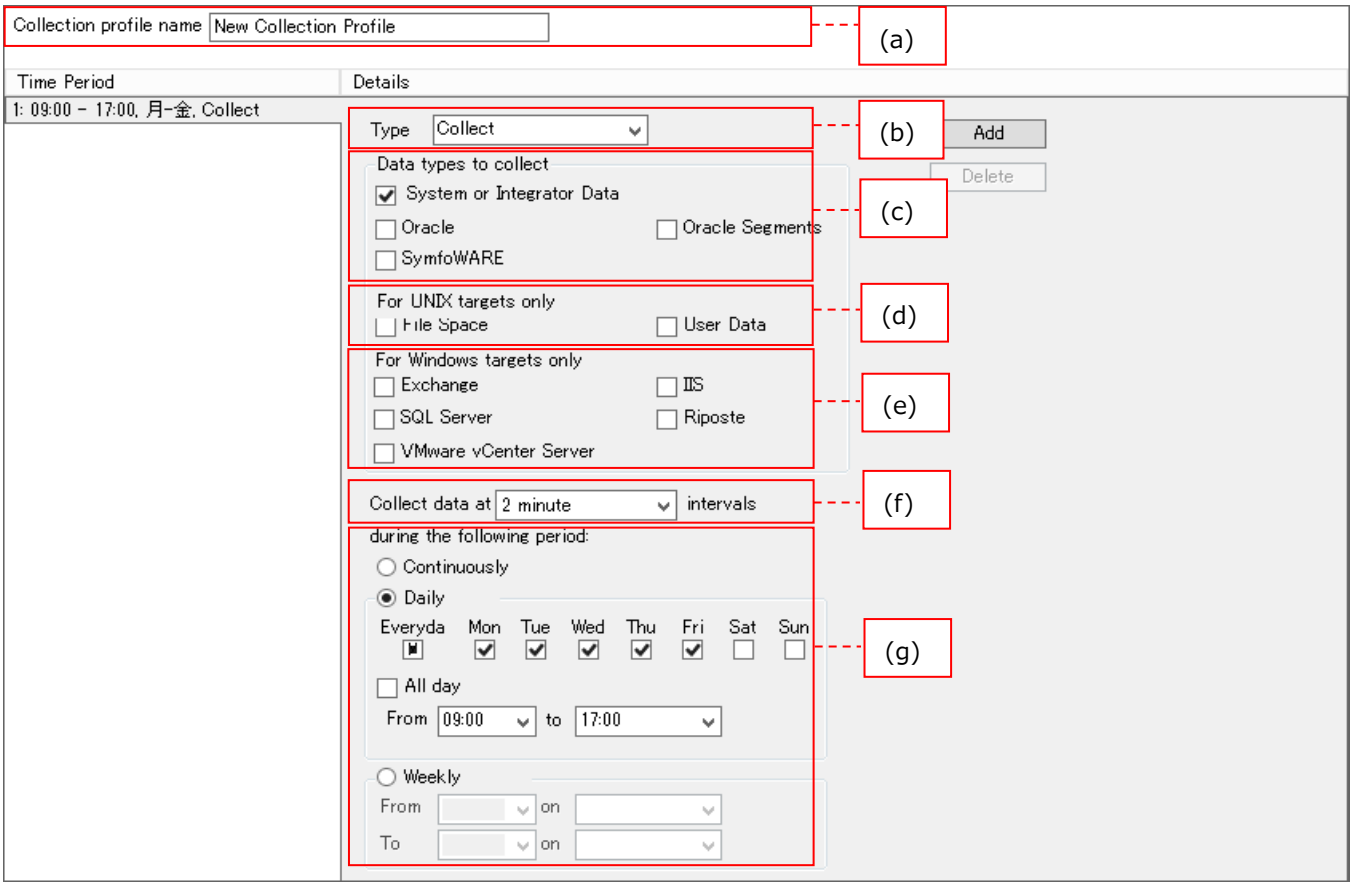
「System Manager メイン画面」

左下の Collection Profiles パネルを開きます①。[New]ボタンをクリックします②。



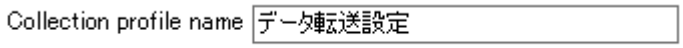
(2)Collection Profile の詳細定義

Display パネルに Collection Profile の詳細を定義する画面が表示されます。
図中の(a)～(g)までの各設定を行います。



(a)Collection profile name

Collection Profile に対する任意の名前を入力します。



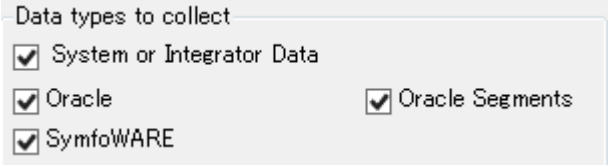
(b)Type

転送方法の種類を指定します。「Collect」と表示されていることを確認します。

注意！
Type のプルダウンに表示される以下の選択肢は使用できません。
・Push
・Retrieve

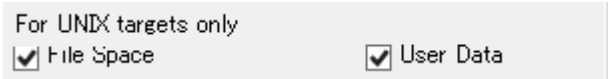
(c)Data types to collect

Unix/Linux/Windows/Integrator に共通するデータを転送するかどうかを選択します。
System or Integrator Data には必ずチェックします。
Oracle データを転送する場合は、Oracle をチェックします。
Symfoware データを転送する場合は、SymfoWARE をチェックします。
Oracle テーブルスペースデータを転送する場合は、Oracle Segments をチェックします。



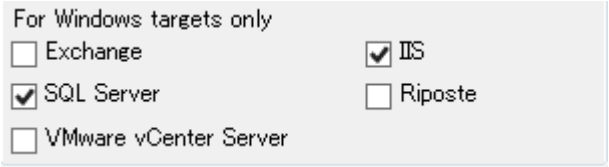
(d)For UNIX targets only

Unix のユーザデータまたはファイルスペースデータを転送するかどうかを選択します。
Unix のユーザデータを転送する場合は、User Data をチェックします。
Unix のファイルスペースデータを転送する場合は、File Space をチェックします。



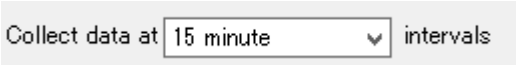
(e)For Windows targets only

Windows の SQL Server データまたは IIS データを転送するかどうかを選択します。
Windows の SQL Server データを転送する場合は、SQL Server をチェックします。
Windows の IIS データを転送する場合は、IIS をチェックします。
※Exchange/VMware vCenter Server/Riposte はチェックを付けても無効です。



(f)Collect data at intervals

データを転送する間隔(インターバル)をプルダウンから選択します。2,3,5,10,15,20,30 分および 1 時間から選択可能です。通常は、Capture Profile のインターバルと同じにします。(Capture が 15minute なら Collection も 15minute)
なお、サーバ上でのデータ収集と管理用マシンへのデータ転送は非同期に行うことができます。よって、サーバ上では継続してデータを収集しておき、データ転送は夜間にまとめて行うといった設定も可能です。

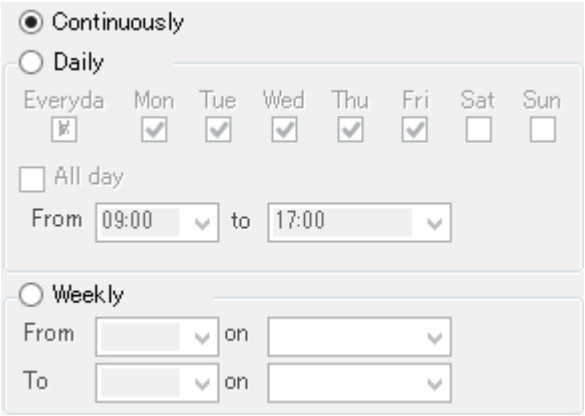


(g)during the following period

1 週間を 1 つの単位とし、データを転送する期間／時間帯を指定します。以下の 3 つの指定方法があります。

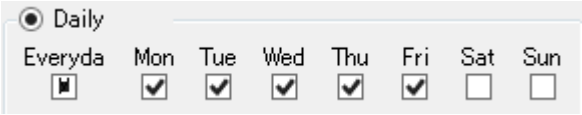
【Continuously】

1 週間を 24 時間連続して転送する場合に使用します。Continuously を指定すると、Daily と Weekly がマスクされます。

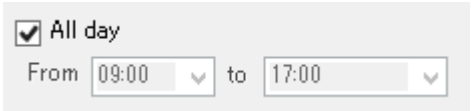


【Daily】

1 週間の中で特定曜日を除外したい場合、または、1 日の中で転送時間帯を限る場合に使用します。
例えば、土、日曜日を除外する場合は、Sat と Sun のチェックを外します。



All day にチェックを付けると 24 時間転送になります。

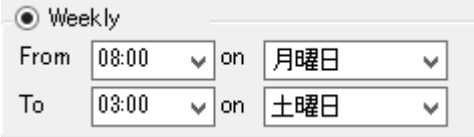


1 日の中で転送時間帯を限る場合は、From と to のプルダウンから時間を選択します。以下の例では 9 時から 17 時までの転送になります。

Daily では、曜日の指定と時間帯の指定が組み合わせられて有効になります。

【Weekly】

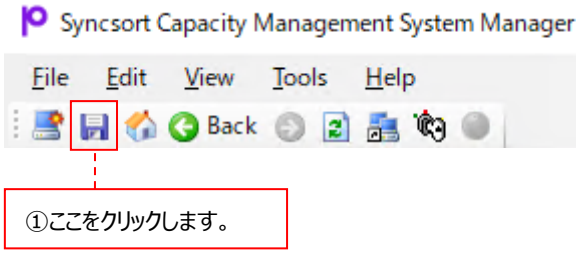
1 週間の中で特定曜日(on)の特定時間(From)から特定曜日(on)の特定時間(To)までを連続して転送する場合に使用します。以下の例では月曜日の 8 時から土曜日の 3 時までの転送になります。



(3)Collection Profile の保存

「System Manager メイン」画面

左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した Collection Profile を保存します。



しきい値検知機能 Threshold を設定する場合は、「4.7. Threshold Profile の設定」に進んでください。

しきい値検知機能 Threshold を設定しない場合は、「4.8. 新規ターゲットの定義」に進んでください。

4.7. Threshold Profile の設定

ここでは、対象システム上で収集されたパフォーマンスデータを管理用マシンでしきい値検査を検知する設定(Threshold Profile)の作成手順について説明します。

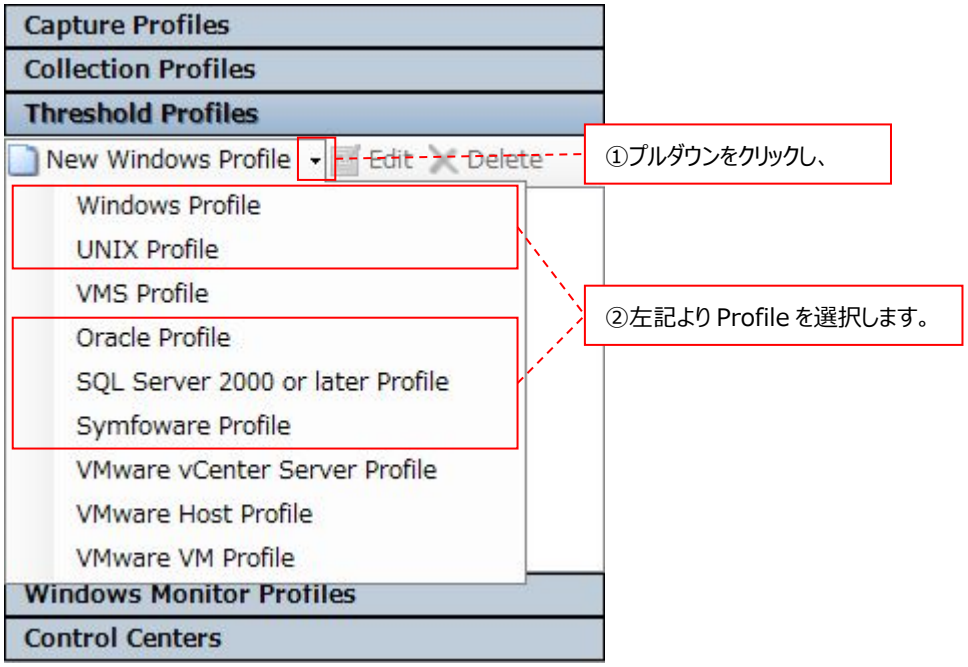
4.7.1. しきい値設定の作成

(1)Threshold Profile の新規作成

「System Manager メイン画面」左下の Threshold Profiles パネルを開きます。

「New Windows Profile」の右にあるプルダウンをクリックし①、下記より選択します②。

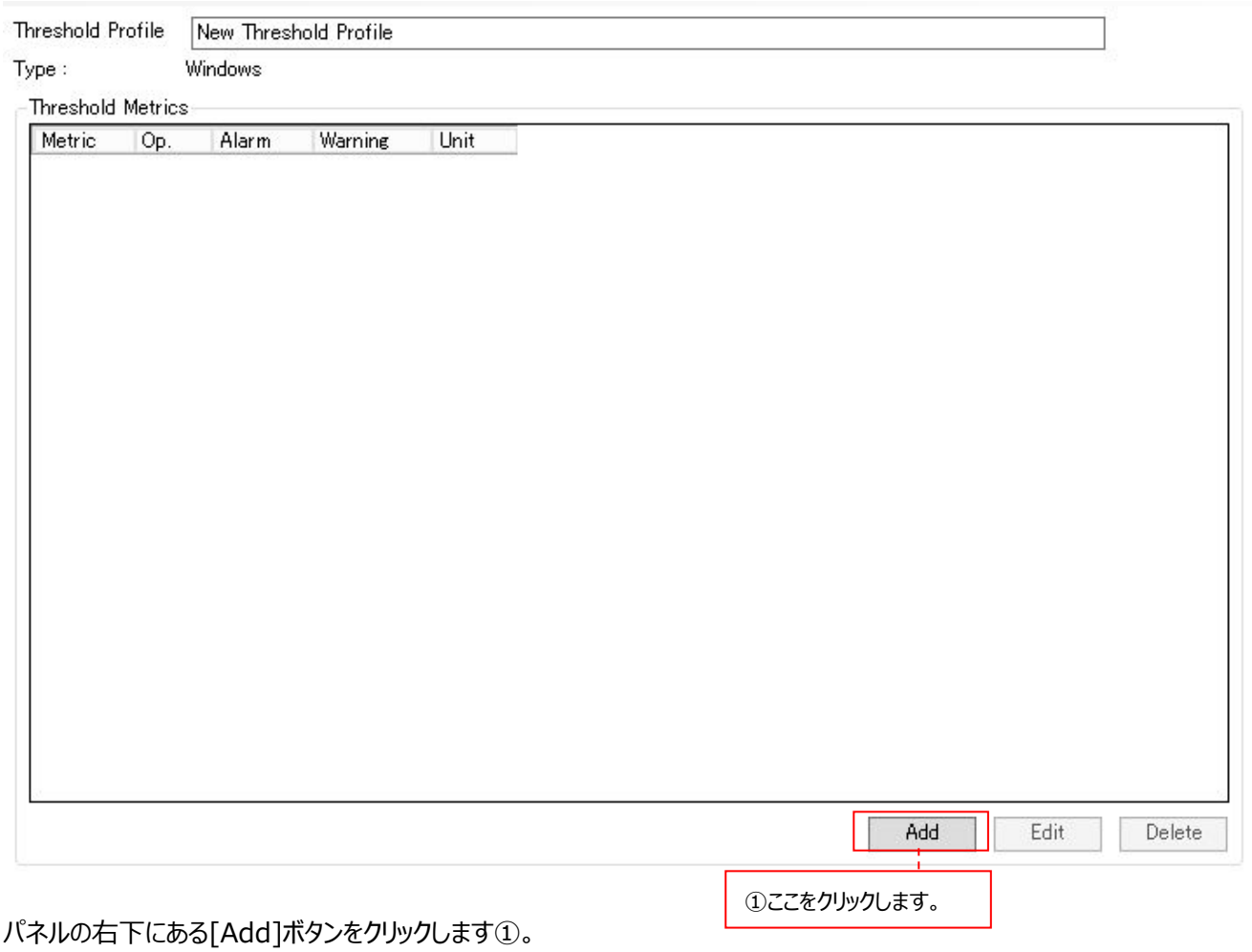
Windows Profile ：システムデータ/プロセスデータ/IIS データ
UNIX Profile ：システムデータ/ユーザデータ/ファイルシステムデータ
Oracle Profile
SQL Server 2000 or later Profile
Symfoware Profile



注意！
Threshold Profiles パネルのプルダウンに表示される下記の Profile は使用できません。
VMS Profile
VMware vCenter Server Profile
VMware Host Profile
VMware VM Profile

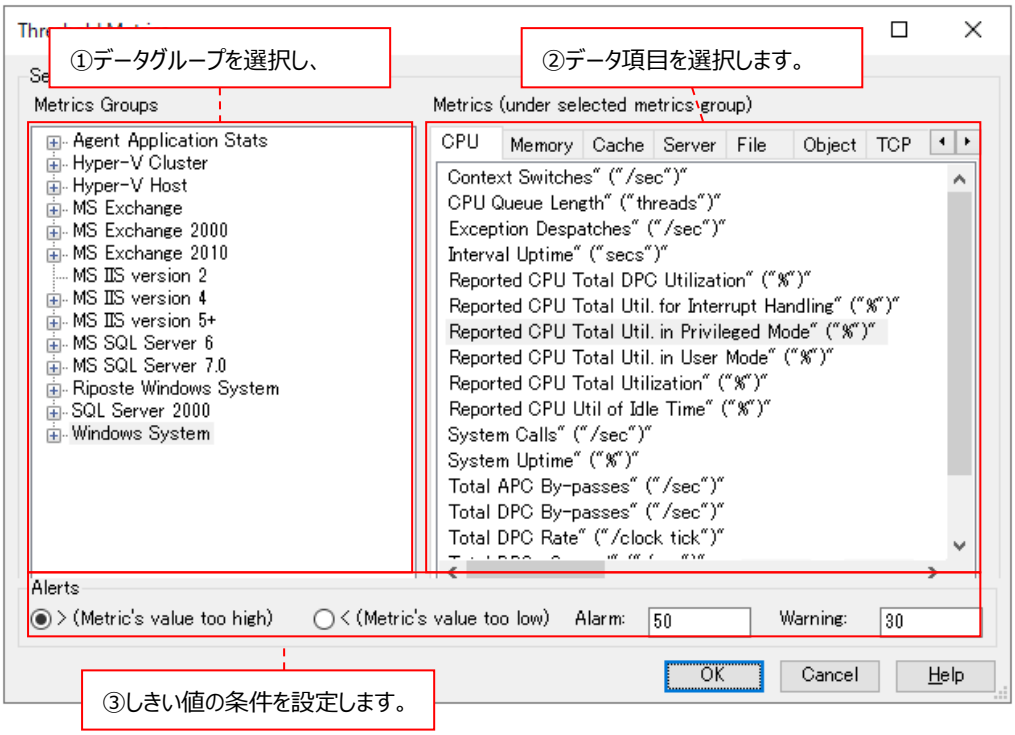
(2)Threshold Profile の詳細定義

Display パネルに Threshold Profile の設定一覧画面が表示されます。



パネルの右下にある[Add]ボタンをクリックします①。

Threshold Profile の詳細を定義する画面が表示されます。



左側の「Metrics Groups」より、データグループを選択し①、右側の「Metrics (under selected metrics group)」よりしきい値を設定するデータ項目を選択します②。

下側の「Alerts」より、しきい値の条件を設定します③。

・条件

>(Metric's value too high)	しきい値より高い
<(Metric's value too low)	しきい値より低い

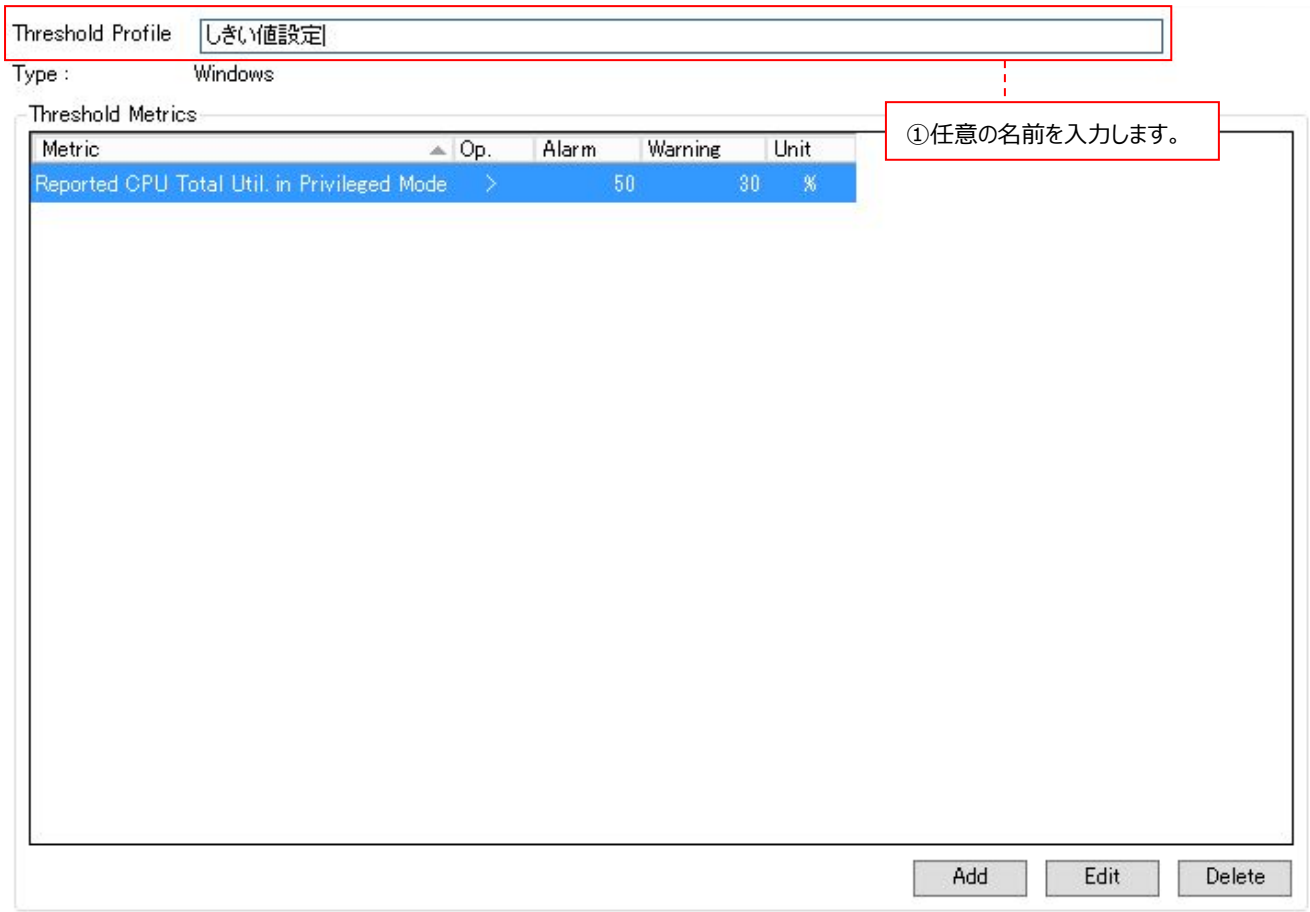
・しきい値

Alerm:	アラーム値
Warning:	ワーニング値

設定が終了したら、[OK]ボタンをクリックします。

注意！
Acquire で取得しているデータ項目のみ、しきい値を設定できます。

Display パネルに設定した Threshold Profile の一覧が表示されます。



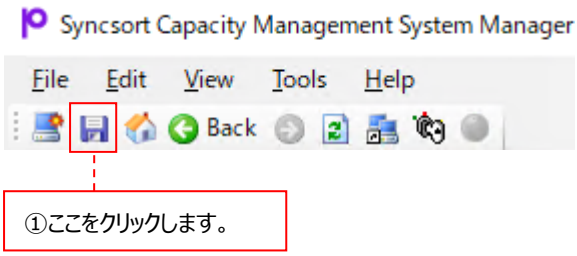
Threshold Profile に対する任意の名前を入力します①。

パネルの右下にある[Add]ボタンをクリックします①。

(3)Threshold Profile の保存

「System Manager メイン」画面

左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、設定した Threshold Profile を保存します。



この後、「4.8. 新規ターゲットの定義」に進んでください。

4.8. 新規ターゲットの定義

ここでは、Acquire をインストールしたパフォーマンスデータを収集する対象システム(ターゲット)を新規に定義する手順について説明します。

【対象システムのローカルに Acquire をインストールしてデータ収集を行う場合】
以下の(1)～(4)の順序でターゲットの定義を行っていきます。
(「4.8.1 基本データ用ターゲットの作成」に進んでください。)

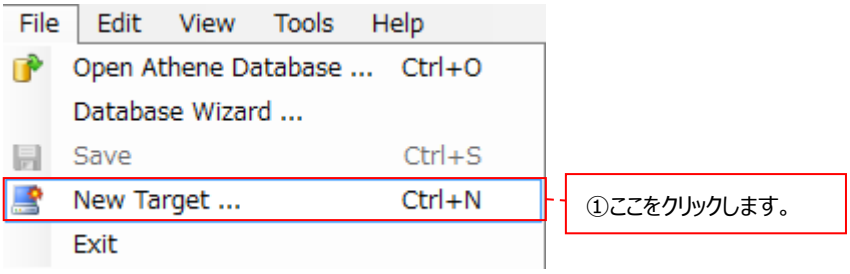
(1)基本データ用のターゲットを作成する。
Unix/Linux/Windows
(2)基本データ用のターゲットの詳細を設定する。
(3)データベースのパフォーマンスデータを取得する場合は、それぞれのターゲットを作成する。
Oracle/SQL Server/Symfoware
(4)データベース用のターゲットの詳細を設定する。

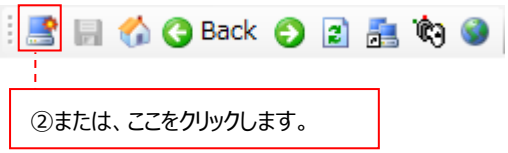
4.8.1. 基本データ用ターゲットの作成

まずは、基本となるシステムデータ収集用ターゲットを作成します。

4.8.1.1. ターゲット作成ウィザードの起動

「System Manager メイン」画面
左上のメニュー「File」→「New Target...」をクリックします①。または、[Add Target]ボタンをクリックします②。

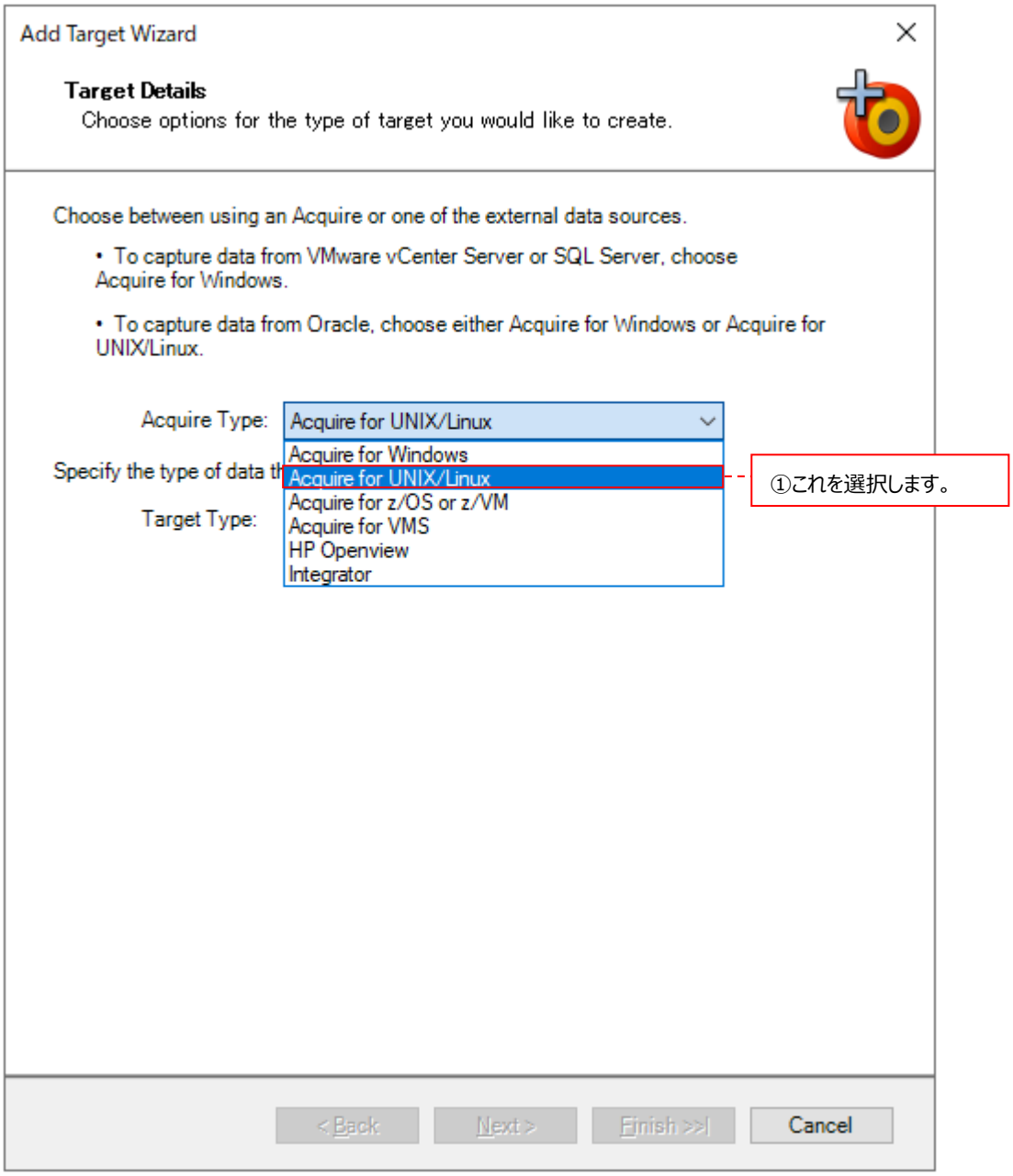




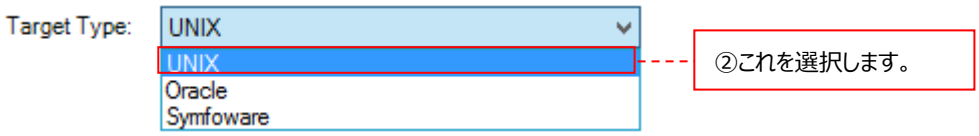
4.8.1.2. Acquire タイプの選択

Target Details ダイアログでは、ターゲットが Unix/Linux システムか、Windows システムかを選択します。

【Unix/Linux システムの場合】
Acquire Type のプルダウンから Acquire for UNIX/Linux を選択します①。



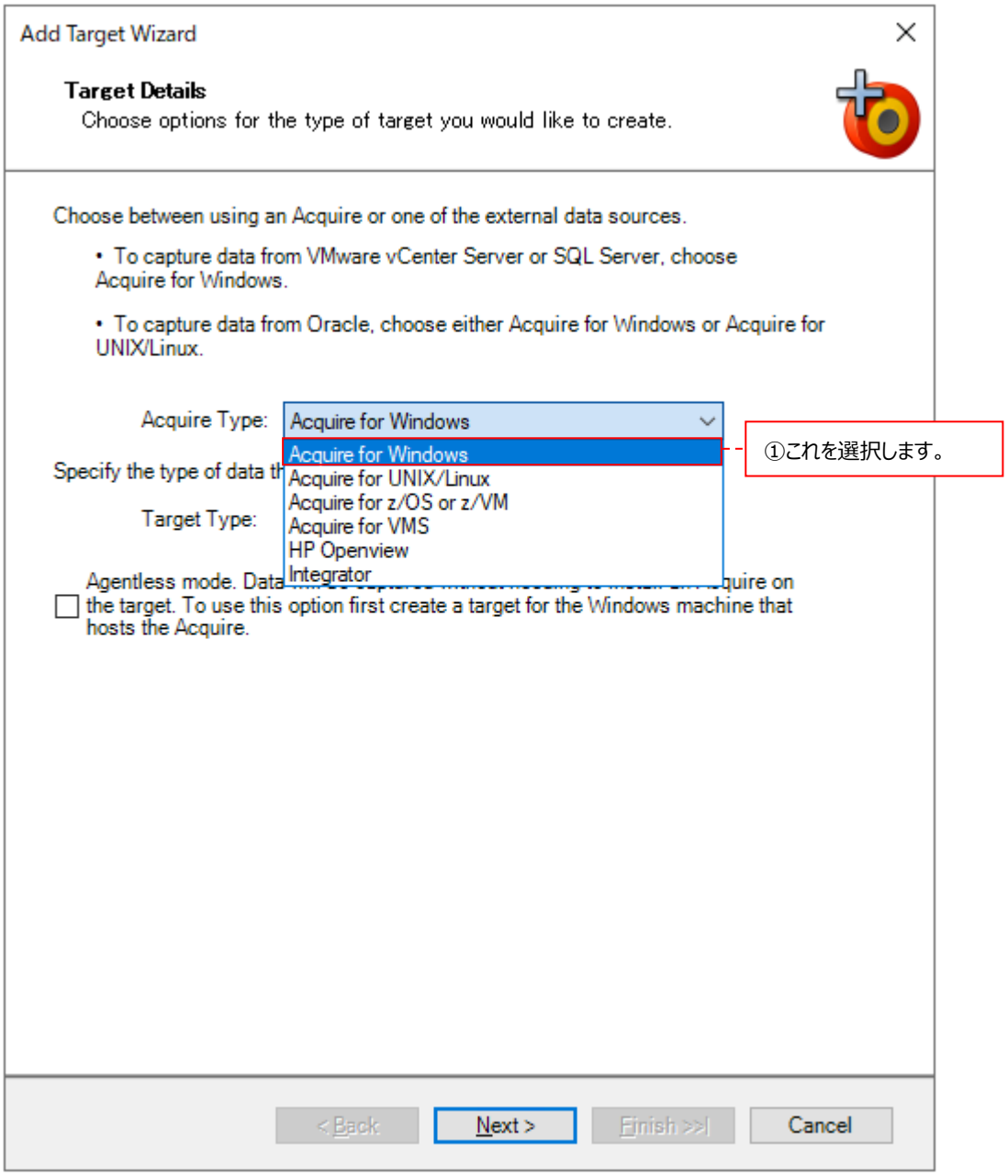
Target Type のプルダウンから UNIX を選択します②。



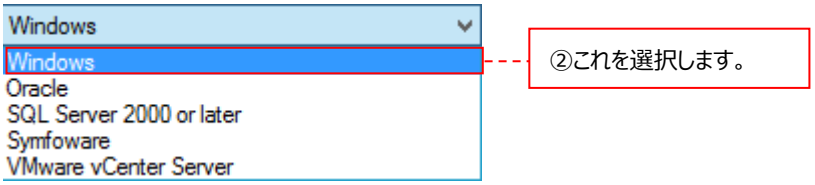
設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

注意！
Acquire Type のプルダウンに表示される以下の選択肢は使用できません。
・Acquire for z/OS or z/VM
・Acquire for VMS
・IBM Tivoli Monitoring

【Windows システムの場合】
Acquire Type のプルダウンから Acquire for Windows を選択します①。



Target Type のプルダウンから Windows を選択します②。

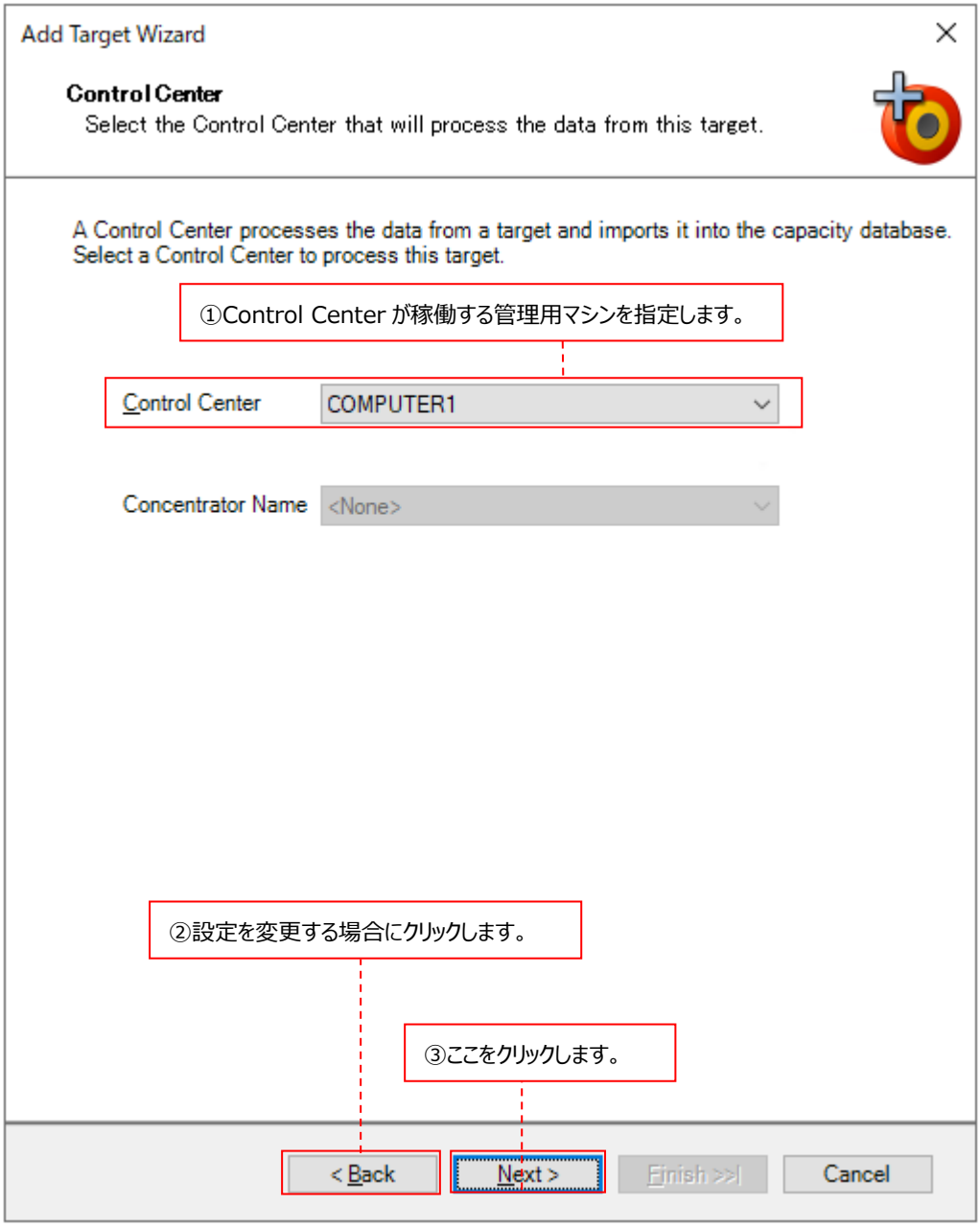


設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

注意！
Target Type のプルダウンに表示される VMware vCenter Server の選択肢は使用できません。

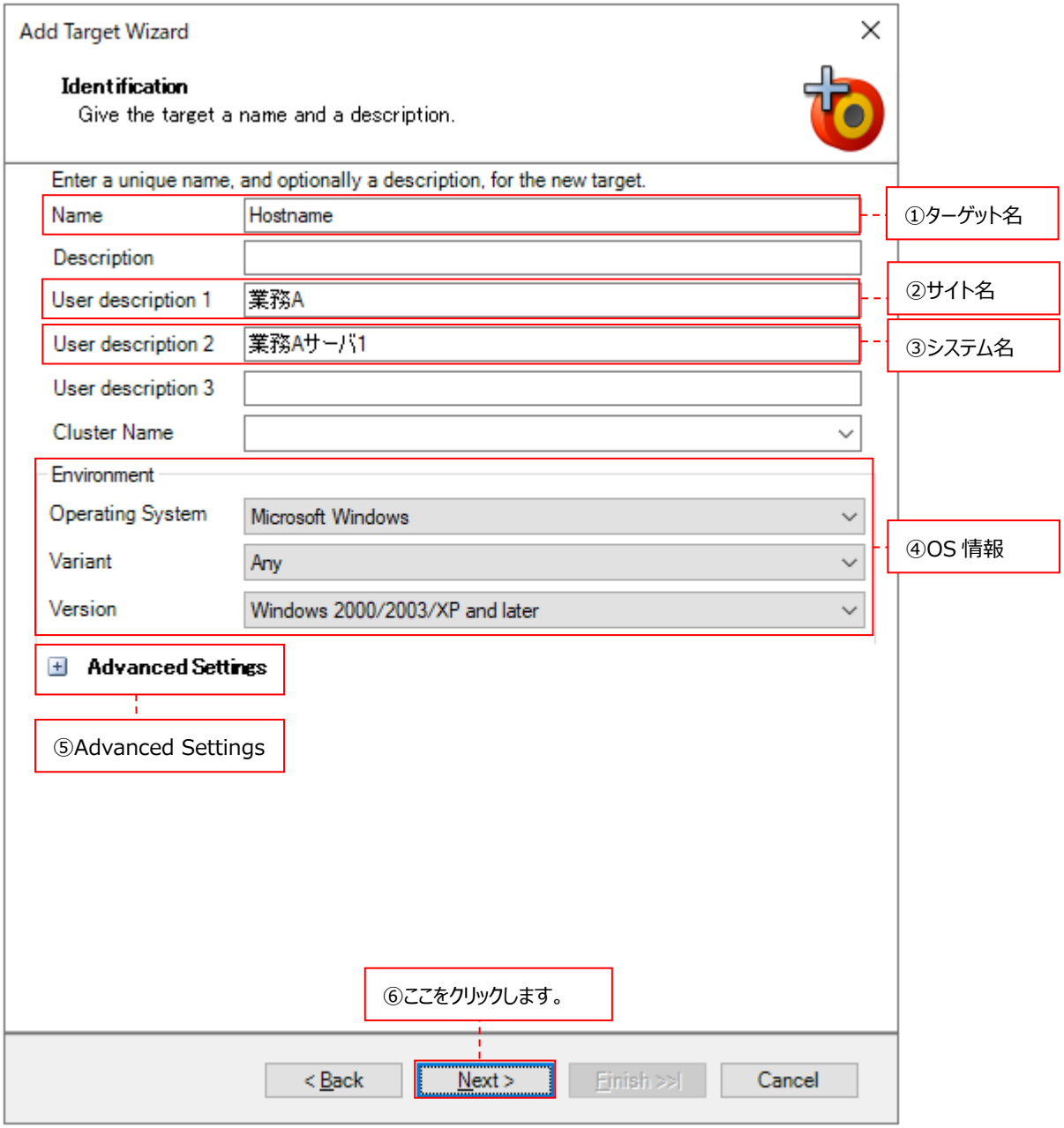
4.8.1.3. Control Center の指定

Control Center ダイアログでは、Control Center が稼働する管理用マシンを指定します①。
設定を変更する場合は[<Back]をクリックして前画面に戻ります②。
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします③。



4.8.1.4. ターゲット名と OS 種類の指定

Identification ダイアログでは、ターゲットの名前と OS 種類を指定します。



①Name　　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
②User description 1　：CS シリーズにて使用するサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
③User description 2　：CS シリーズにて使用するシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

Name/User description 1/User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。
CS シリーズにて使用するサイト名/システム名については、別紙マニュアル「スタートガイド 4.2. サイト／システム」を参照してください。
Description と User description 3、Cluster Name（Windows システムターゲット作成時のみ表示）は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③…, ⅠⅡⅢ…, ㈱ﾄﾞﾙﾊﾟｰｾﾝﾄ…等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

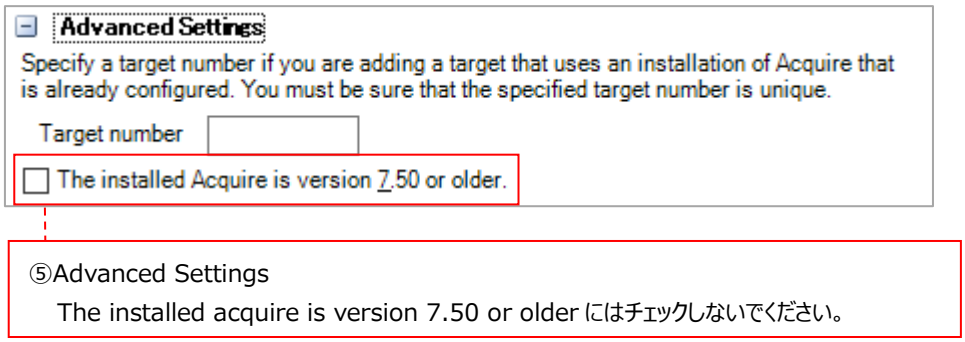
サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

④Environment　：ターゲットの OS 種類を指定します。ターゲットに導入している Acquire のバージョンに合わせて、Operating System/Variant/Version のプルダウンから適切なものを選択してください。代表的な OS についての選択肢は以下の通りです。

OS 種類	Acquire の バージョン	Operating System	Variant	Version
AIX 7.1、7.2	12.20 11.20	IBM AIX	Any	6.1+
HP-UX 11i v3	12.20 11.20	HP-UX	no Fair Share	11i v3
Solaris 11（SPARC）	12.20 11.20	Solaris	SPARC	2.8
Solaris 11（x64）	12.20 11.20	Solaris	Intel	2.8
Red Hat Enterprise Linux 8 (x64)	12.20	Linux	RedHat x64	2.6
Red Hat Enterprise Linux 6、7 (x64)	12.20 11.20	Linux	RedHat x64	2.6
Oracle Linux 7 (x64)	12.20 11.20	Linux	RedHat x64	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 15 (x64)	12.20	Linux	SUSE	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 11、12(x64)	12.20 11.20	Linux	SUSE	2.6
Red Hat Enterprise Linux 8 (System z)	12.20	Linux	zLinux	2.6
Red Hat Enterprise Linux 6、7 (System z)	12.20 11.20	Linux	zLinux	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 15 (System z)	12.20	Linux	zLinux	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 11、12 (System z)	12.20 11.20	Linux	zLinux	2.6
Windows Server 2019	12.20	Microsoft Windows	Any	Windows Server 2008 R2/Vista x64 and later
Windows Server 2016 Windows Server 2012 R2 / 2012	12.20 11.20	Microsoft Windows	Any	Windows Server 2008 R2/Vista x64 and later

⑤Advanced Settings ：「＋」をクリックすると、Advanced Settings の設定欄が開きます。
通常 Advanced Settings を設定する必要はありません。Advanced Settings を展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号である Target number を入力する欄が表示されますが、入力しなくても System Manager が 00010000 からの整数を自動採番します。もし、入力する場合は 00000001 から 99999999 までの整数 8 桁の番号を指定してください。
また、The installed acquire is version 7.50 or older にはチェックしないでください。

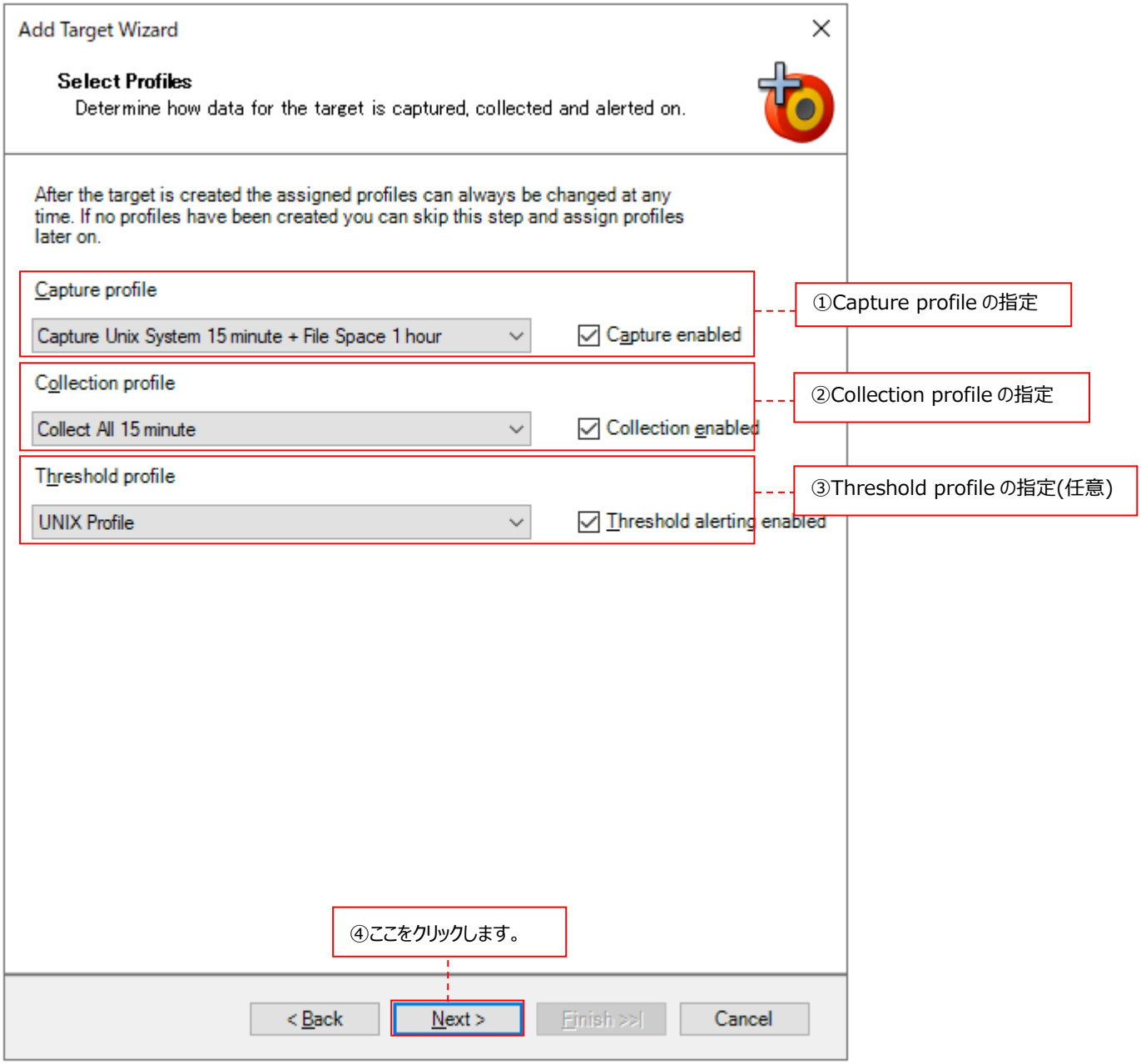


設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします⑥。

4.8.1.5. プロファイルの指定

Select Profiles ダイアログでは、デフォルトまたは事前に設定したデータ収集設定(Capture profile)とデータ転送設定(Collection profile)を指定します。通常は、デフォルト設定のプロファイルを指定します。

【Unix/Linux システムの場合】



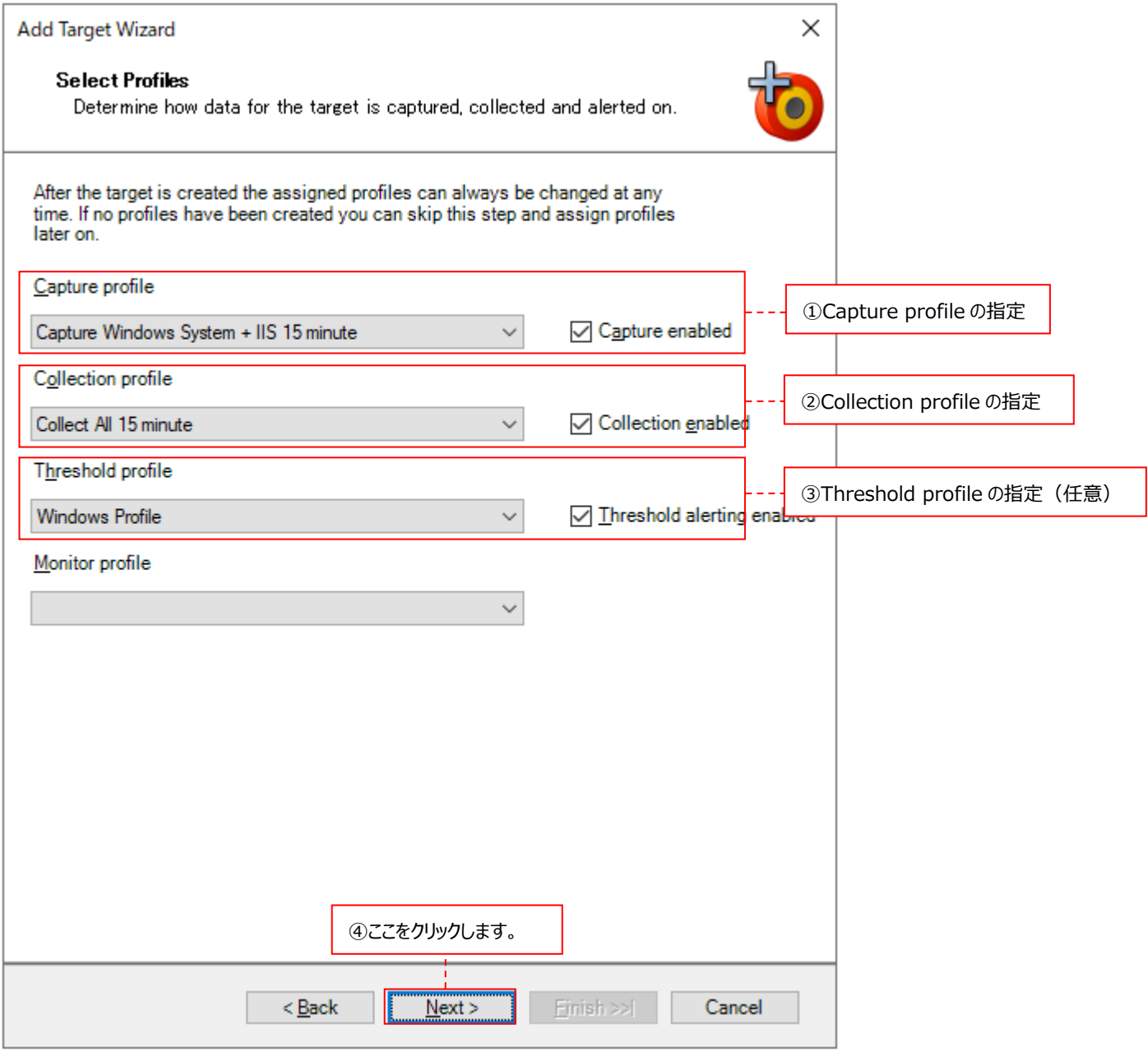
①Capture profile　　：「4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定」にあるデフォルトの Capture profile または、「4.5.2. 基本データ用 Capture Profile の設定」で設定した Capture profile プルダウンから選択します。
Capture enabled にチェックを付けていると、実際にデータ収集を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ収集を行いません。

②Collection profile　：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

③Threshold profile　：しきい値検知機能 Threshold を設定する場合は、「4.7.1. しきい値設定の作成」で設定した Threshold profile をプルダウンから選択します。
Threshold alerting enabled にチェックを付けていると、実際に Threshold alerting を行うターゲットになります。チェックを外すと Threshold alerting を行いません。

指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします④。

【Windows システムの場合】



①Capture profile　：「4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定」にあるデフォルトの Capture profile、または、「4.5.3. 基本データ用 Capture Profile の設定」で設定した Capture profile をプルダウンから選択します。
Capture enabled にチェックを付けていると、実際にデータ収集を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ収集を行いません。

②Collection profile　：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

③Threshold profile　：しきい値検知機能 Threshold を設定する場合は、「4.7.1. しきい値設定の作成」で設定した Threshold profile をプルダウンから選択します。
Threshold alerting enabled にチェックを付けていると、実際に Threshold alerting を行うターゲットになります。チェックを外すと Threshold alerting を行いません。

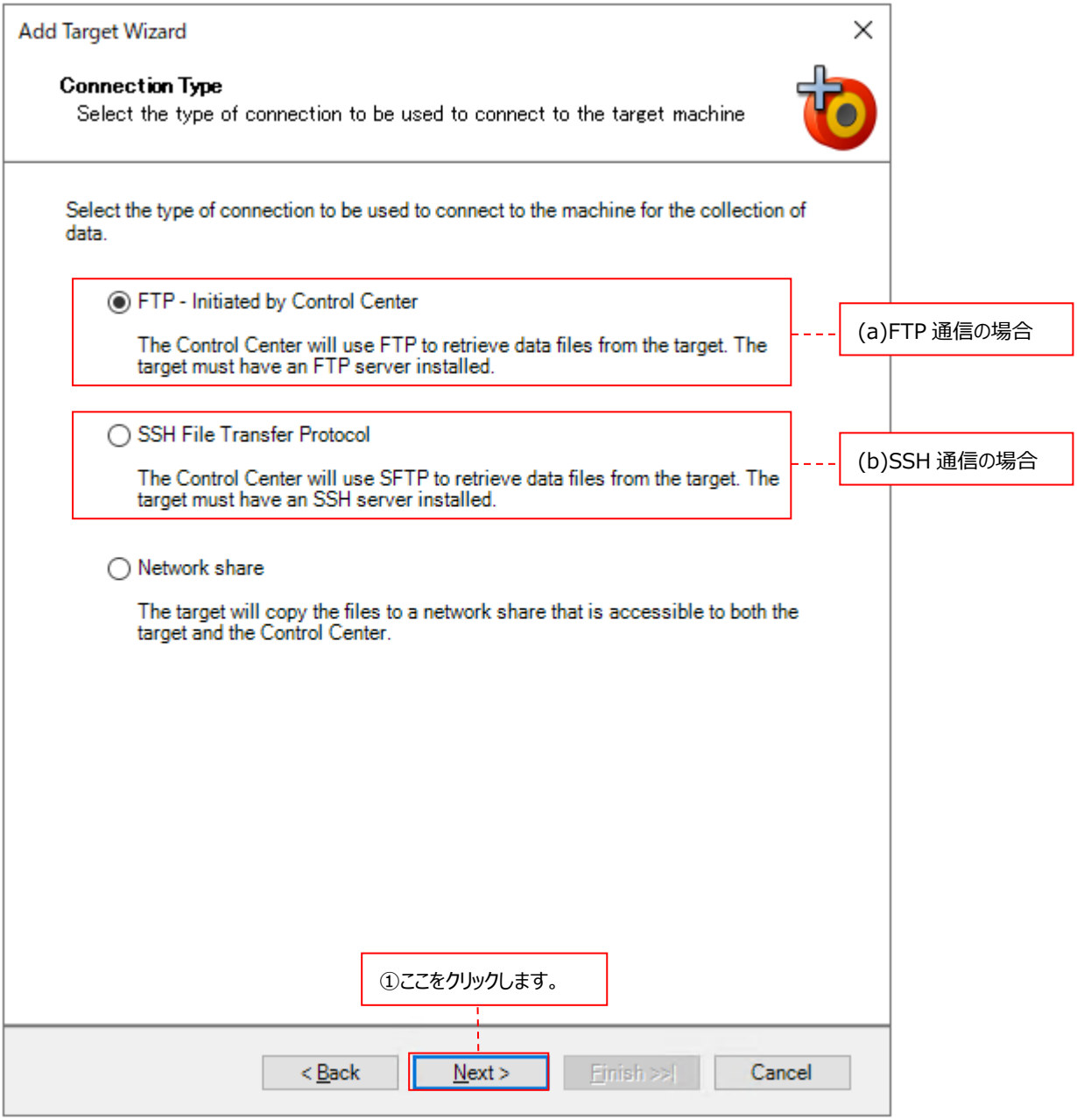
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします④。

注意！
Monitor profile は使用できません。

4.8.1.6. 接続方法の指定

Connection Type ダイアログでは、ターゲットとの通信方法を指定します。ターゲットが Unix／Linux システムか、Windows システムかによって、遷移するウィザードのダイアログが変化します。
適切な通信方法を選択して設定を進めてください。

●Unix／Linux システムの場合
基本は FTP 通信を使用します。

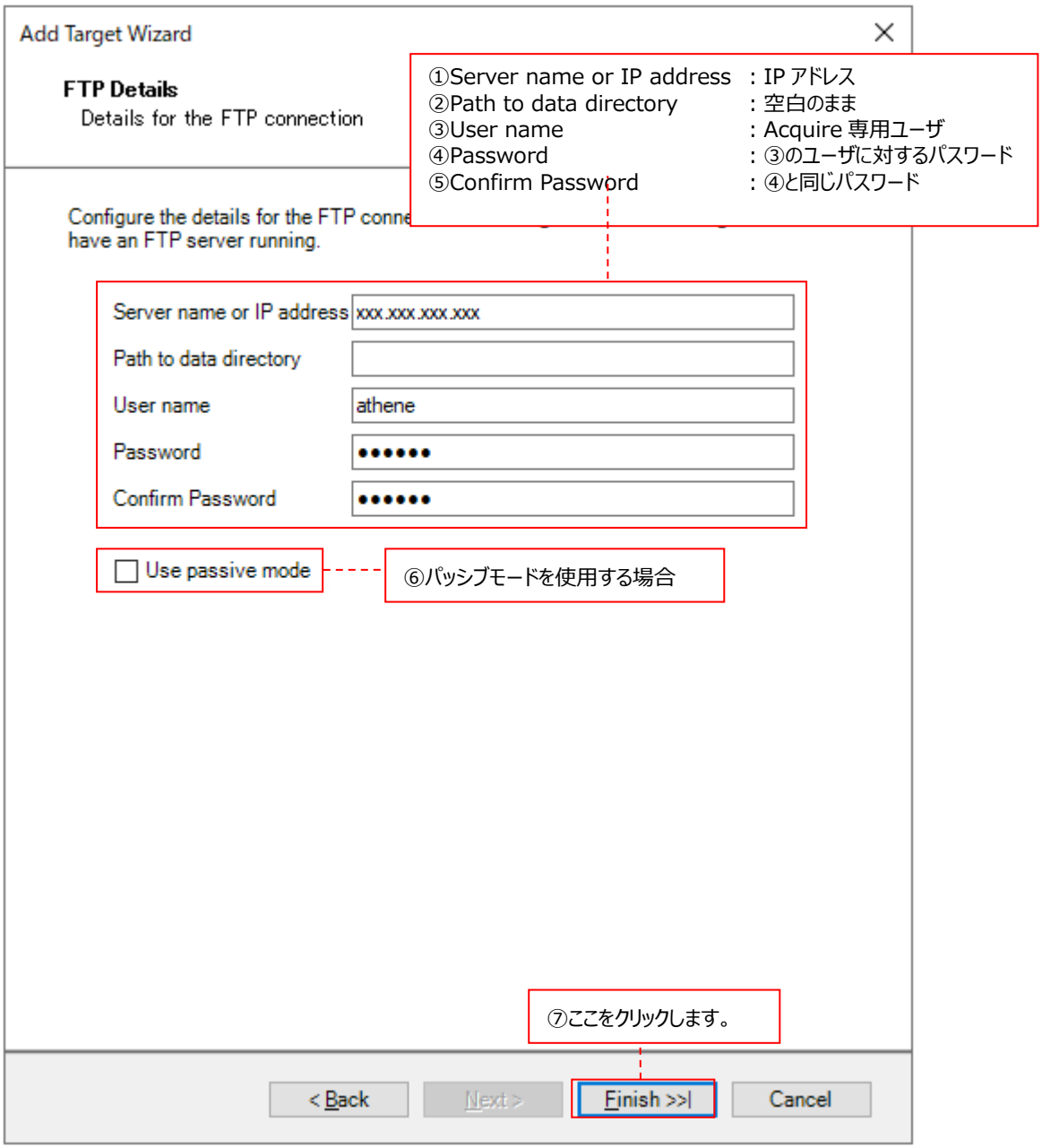


(a)FTP - Initiated by Control Center：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(b)SSH File Transfer Protocol　　：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします①。
指定した(a)(b)いずれかのダイアログに進んでください。

注意！
Network share は使用できません。

(a)FTP 通信

FTP 通信を使用する場合、FTP Details ダイアログに IP アドレスと Acquire 専用ユーザ／パスワードを入力します。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
(例)172.16.14.233:5555

②Path to data directory : 空白のままにしておきます。

③User name : Acquire 専用ユーザを入力します。

④Password : ③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。
パスワードには、ダブルクォーテーションは使用できません。

⑤Confirm Password : ④と同じパスワードを入力します。

⑥Use passive mode : パッシブモードを使用する場合にチェックします。

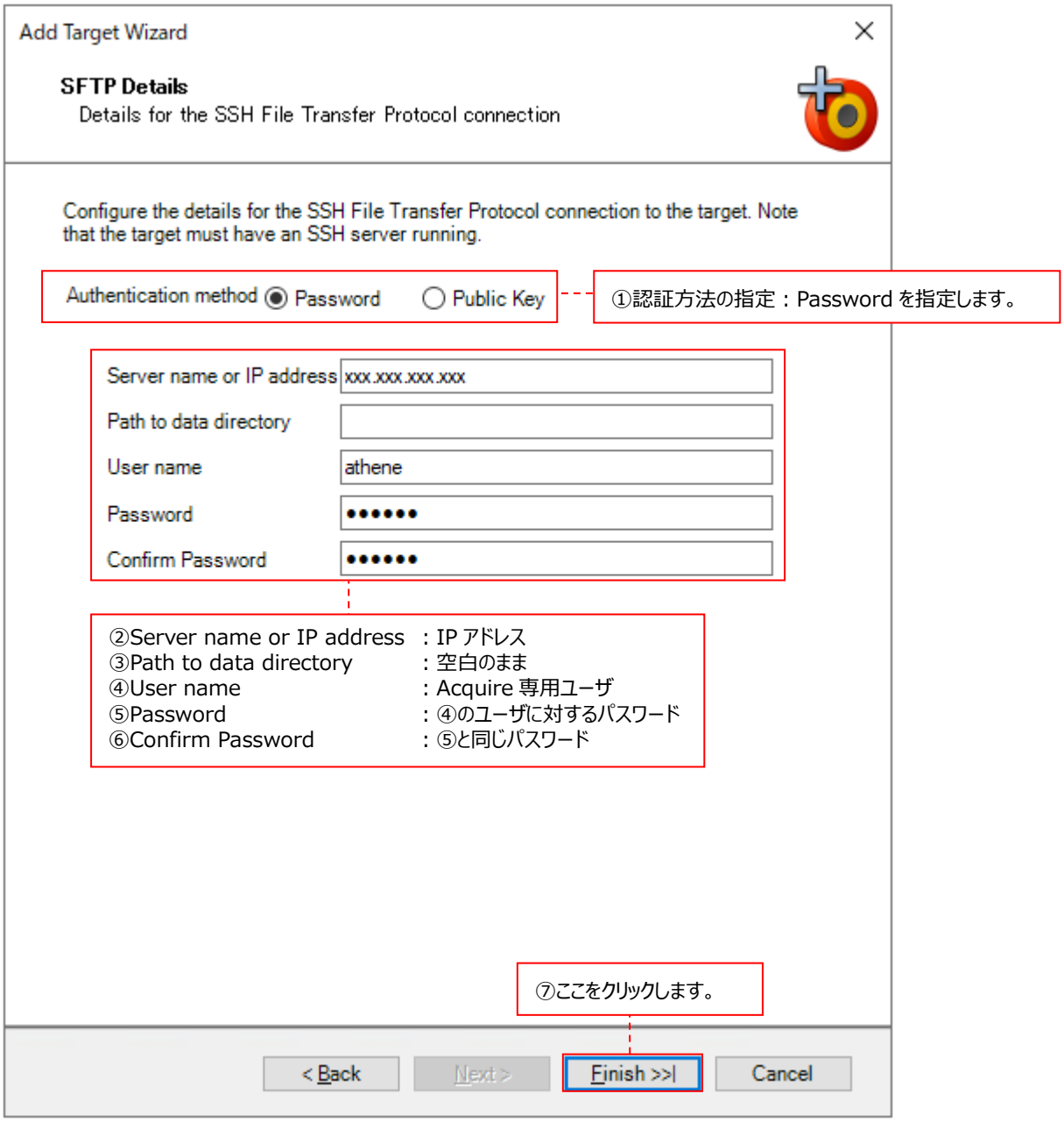
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。

「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

(b)SFTP 通信

SFTP 通信を使用する場合、SFTP Details ダイアログにて認証方法（パスワード／公開鍵）を指定します。また、IP アドレスと Acquire 専用ユーザおよび認証方法に対応したパスワード／パスフレーズを入力します。

<パスワード認証の場合>

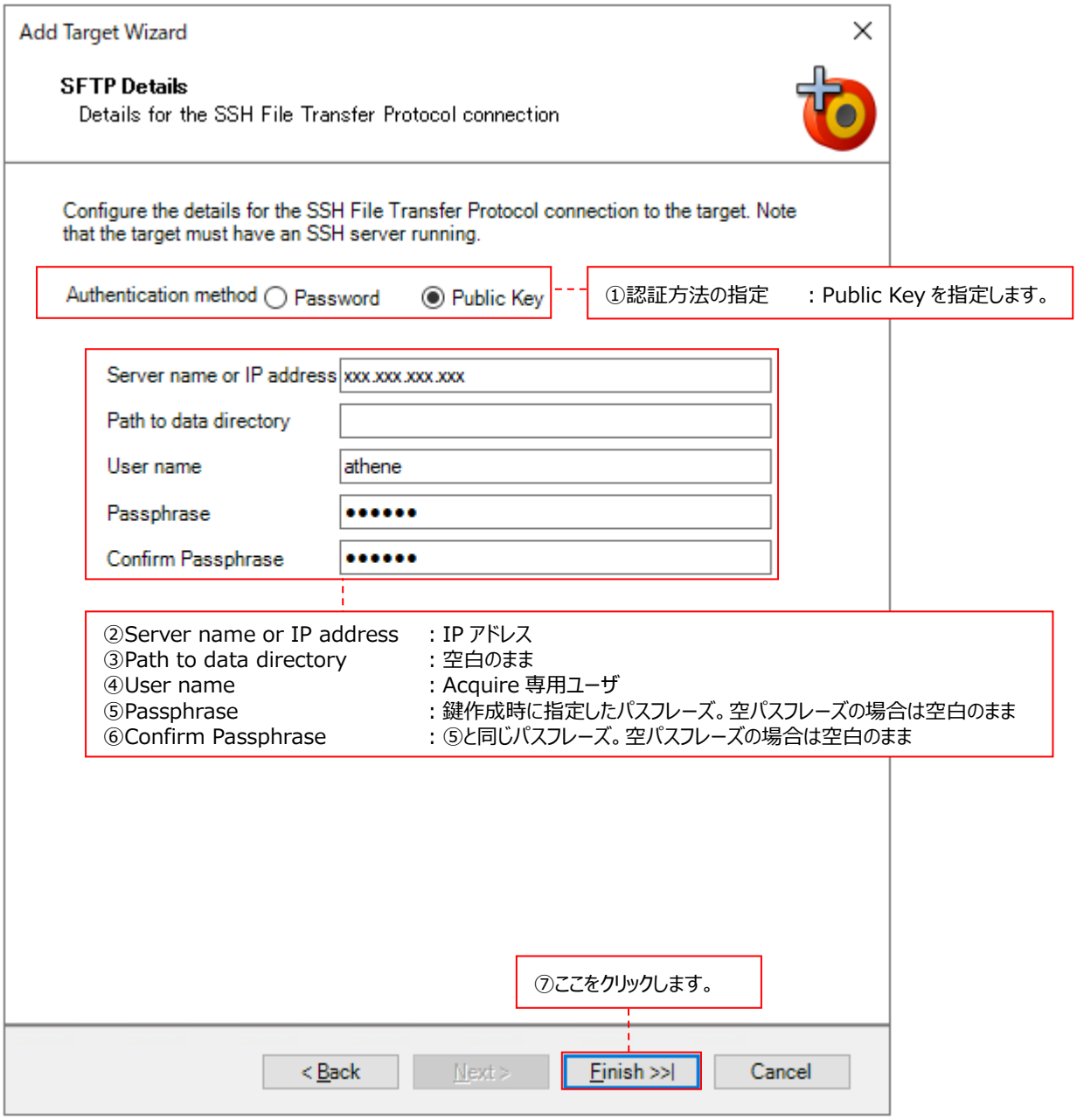


①Authentication method ：認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します。
③Path to data directory ：空白のままにしておきます。
④User name ：Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Password ：④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm Password ：⑤と同じパスワードを入力します。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。

「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

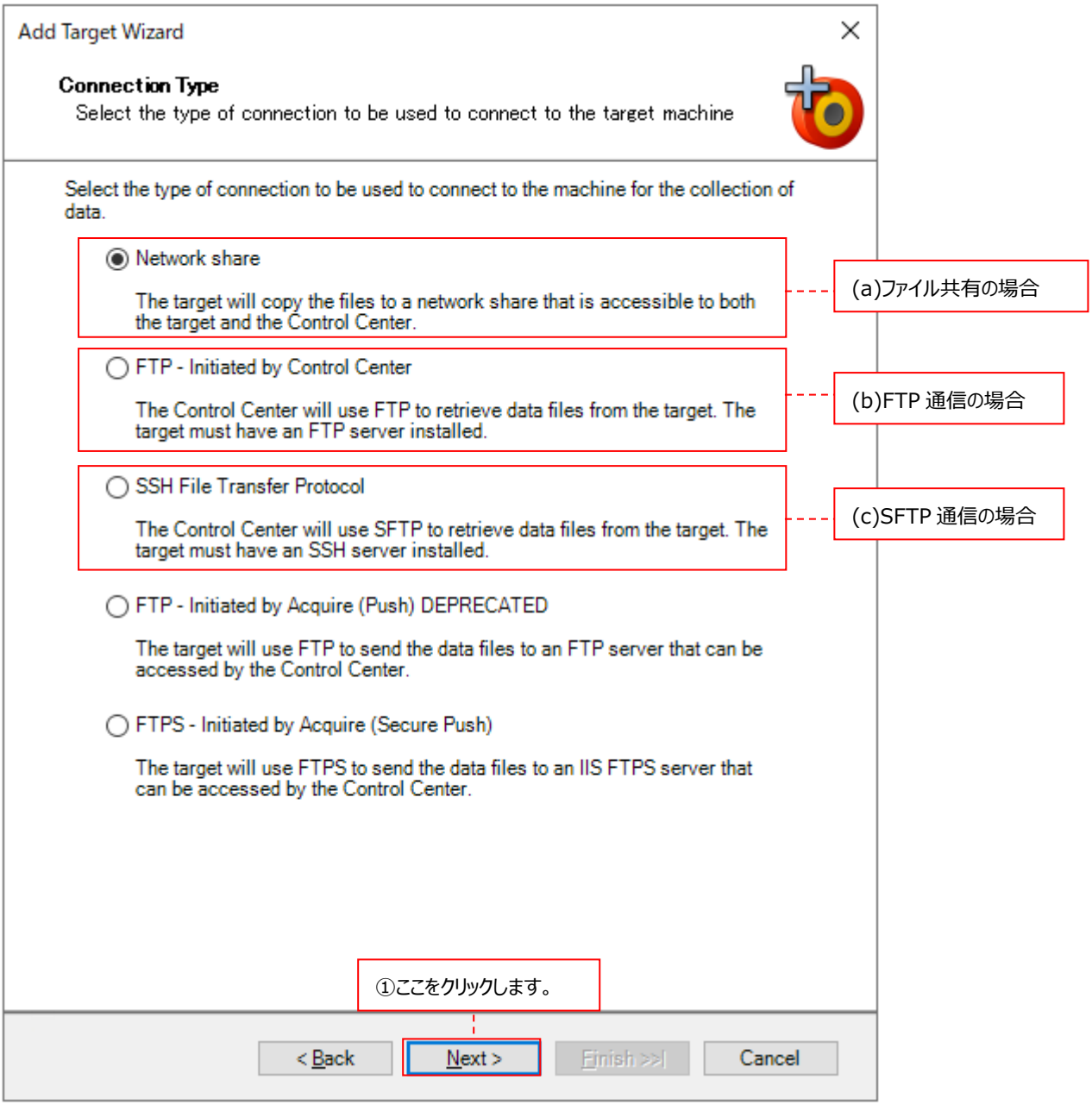
＜公開鍵認証の場合＞



①Authentication method ：認証方法として Public Key を指定します。
②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。
③Path to data directory ：空白のままにしておきます。
④User name ：Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Passphrase ：鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。
⑥Confirm Passphrase ：⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

【Windows システムの場合】
基本はファイル共有を使用します。



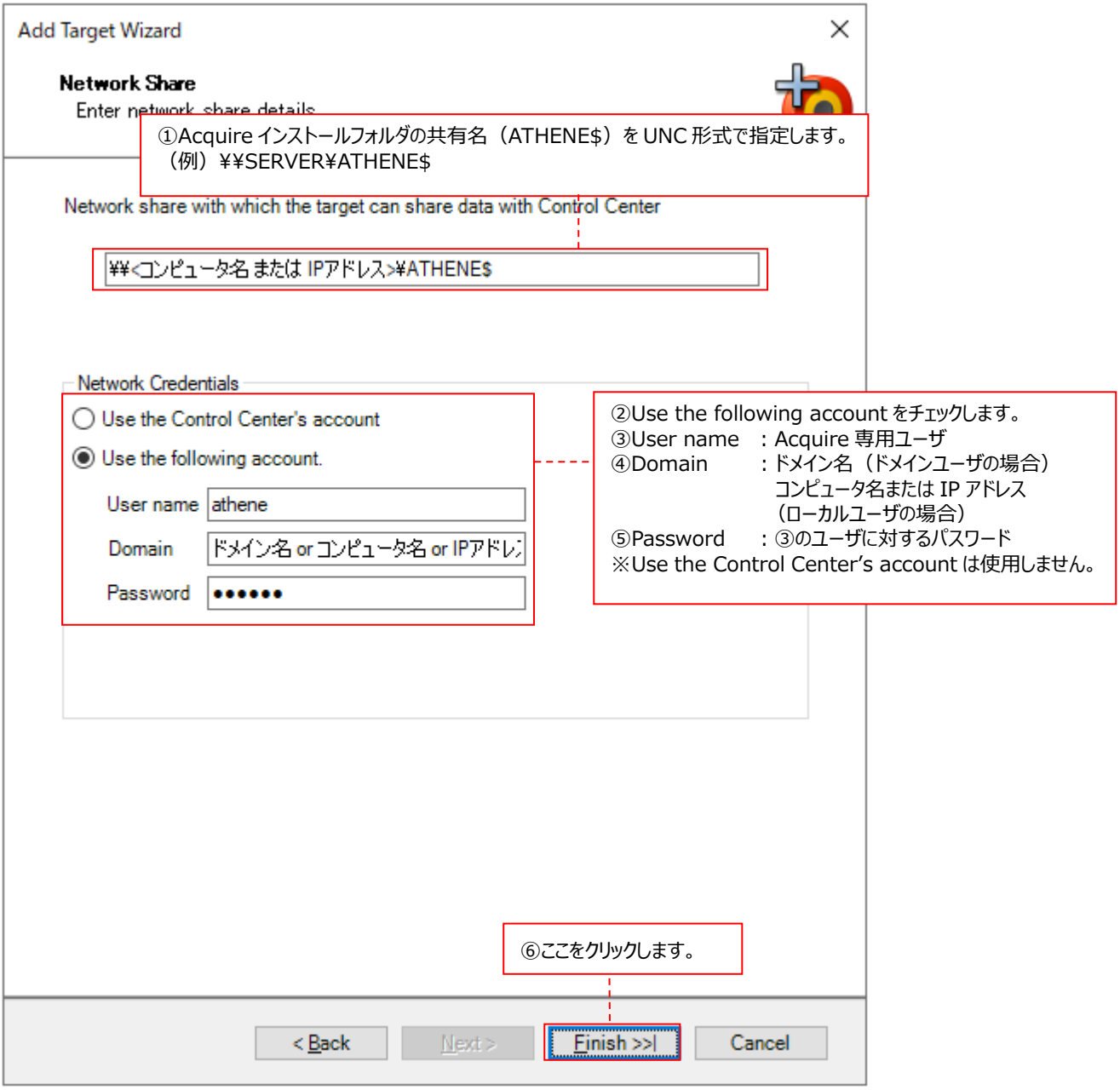
(a)Network share　　：ファイル共有を使用する場合にチェックします。
(b)FTP - Initiated by Control Center：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(c)SSH File Transfer Protocol　　：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。

指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします①。
指定した(a)(b)(c)いずれかのダイアログに進んでください。

注意！
Connection Type の以下の選択肢は使用できません。
・FTP - Initiated by Acquire(Push) DEPRECATED
・FTPS - Initiated by Acquire(Secure Push)

(a)ファイル共有

ファイル共有を使用する場合、Network Share ダイアログに Acquire インストールフォルダの共有名と Acquire 専用ユーザ／パスワードを入力します。



①対象システムの Acquire インストールフォルダに対する共有名を UNC 形式で指定します。通常は ATHENE$のままにしておきます。もし、ATHENE$から共有名を変更している場合は、その名前を指定します。
（例）¥¥SERVER¥ATHENE$

②Use the following account をチェックします。

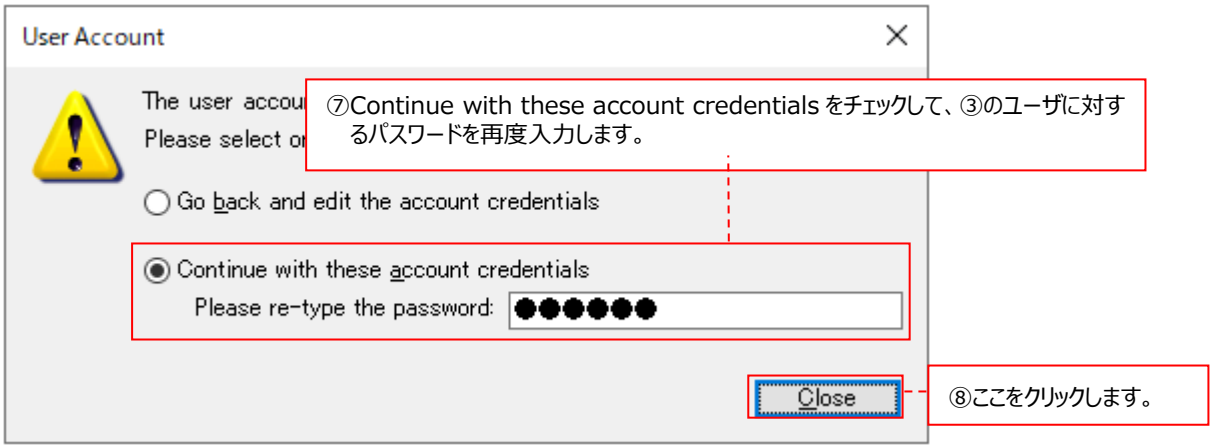
③User name ：Acquire 専用ユーザを入力します。

④Domain ：ターゲットの Windows システムに Acquire をインストールする際に、ドメインユーザを使用した場合は、ドメイン名を入力します。
ターゲットの Windows システムに Acquire をインストールする際に、ローカルユーザを使用した場合は、コンピュータ名または IP アドレスを入力します。

⑤Password ：③のユーザに対するパスワードを入力します。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑥。

注意！
Use the Control Center's account は使用できません。

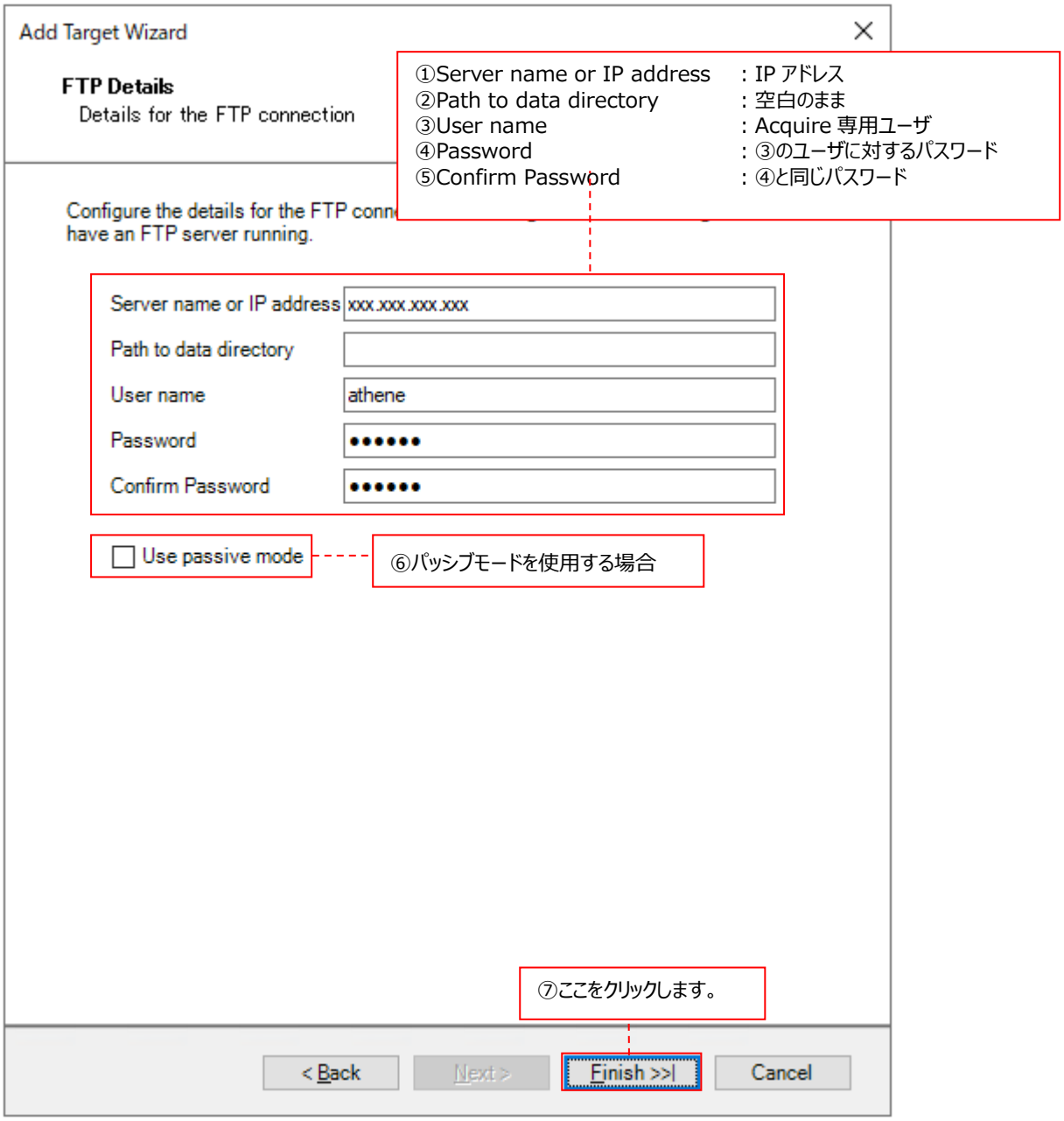


⑦Continue with these account credentials をチェックして、③のユーザに対するパスワードを再度入力します。

入力が終了したら、[Close]ボタンをクリックします⑧。
「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

(b)FTP 通信

FTP 通信を使用する場合、FTP Details ダイアログに IP アドレスと Acquire 専用ユーザ／パスワードを入力します。なお、Windows システムで FTP 通信を使用する場合は、サーバ側に IIS などの FTP 通信をサポートする機能が必要です。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
（例）172.16.14.233:5555

②Path to data directory : 空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで FTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
（例）「C:¥Metron¥Acquire」が FTP ログインした際のホームディレクトリ

③User name : Acquire 専用ユーザを入力します。

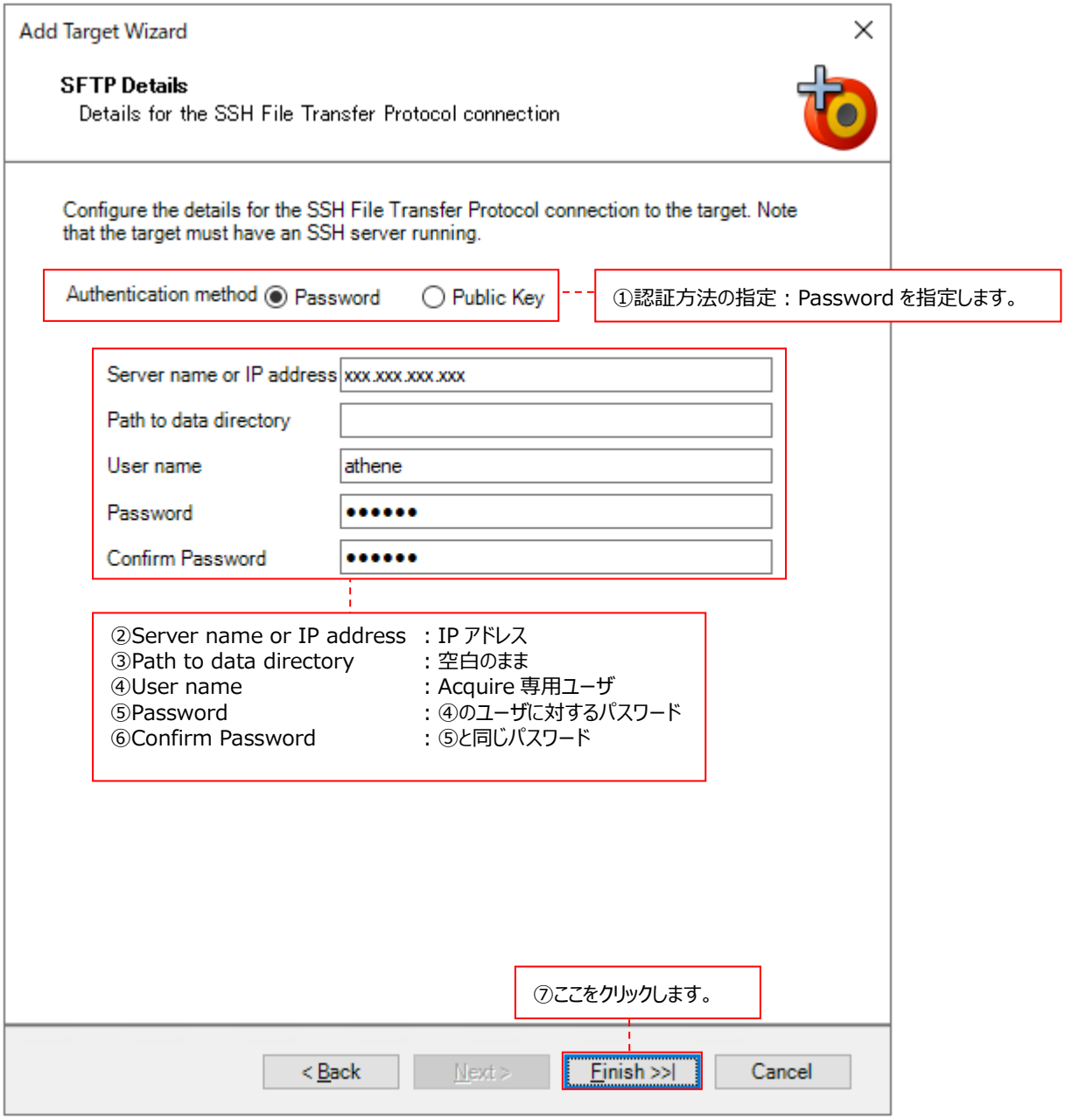
④Password　　：③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。
パスワードには、ダブルクォーテーションは使用できません。
⑤Confirm Password　　：④と同じパスワードを入力します。
⑥Use passive mode　　：パッシブモードを使用する場合にチェックします。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

(c)SFTP 通信

SFTP 通信を使用する場合、SFTP Details ダイアログにて認証方法（パスワード／公開鍵）を指定します。また、IP アドレスと Acquire 専用ユーザおよび認証方法に対応したパスワード／パスフレーズを入力します。

<パスワード認証の場合>

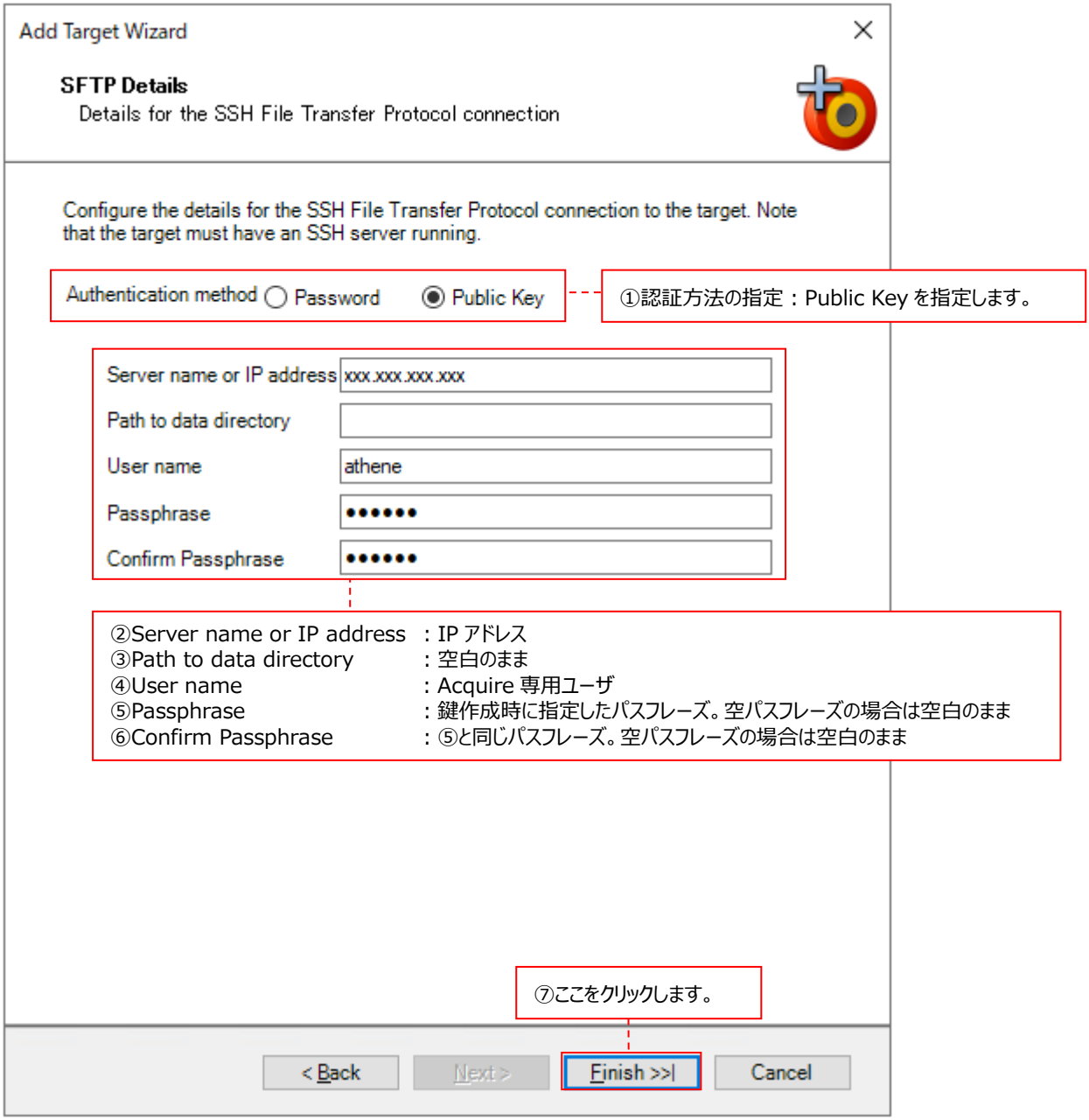


①Authentication method ：認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します。

③Path to data directory　：空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで SFTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
(例)「C:¥Metron¥Acquire」が SFTP ログインした際のホームディレクトリ設定されていない場合は、Acquire のインストールパスを指定してください。
(例)「E:¥Metron¥Acquire¥」
④User name　：Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Password　：④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm Password　：⑤と同じパスワードを入力します。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

＜公開鍵認証の場合＞



①Authentication method ：認証方法として Public Key を指定します。

②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。

③Path to data directory ：空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで SFTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
(例)「C:¥Metron¥Acquire」が SFTP ログインした際のホームディレクトリ設定されていない場合は、Acquire のインストールパスを指定してください。
(例)「E:¥Metron¥Acquire¥」

④User name ：Acquire 専用ユーザを入力します。

⑤Passphrase ：鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

⑥Confirm Passphrase　　：⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

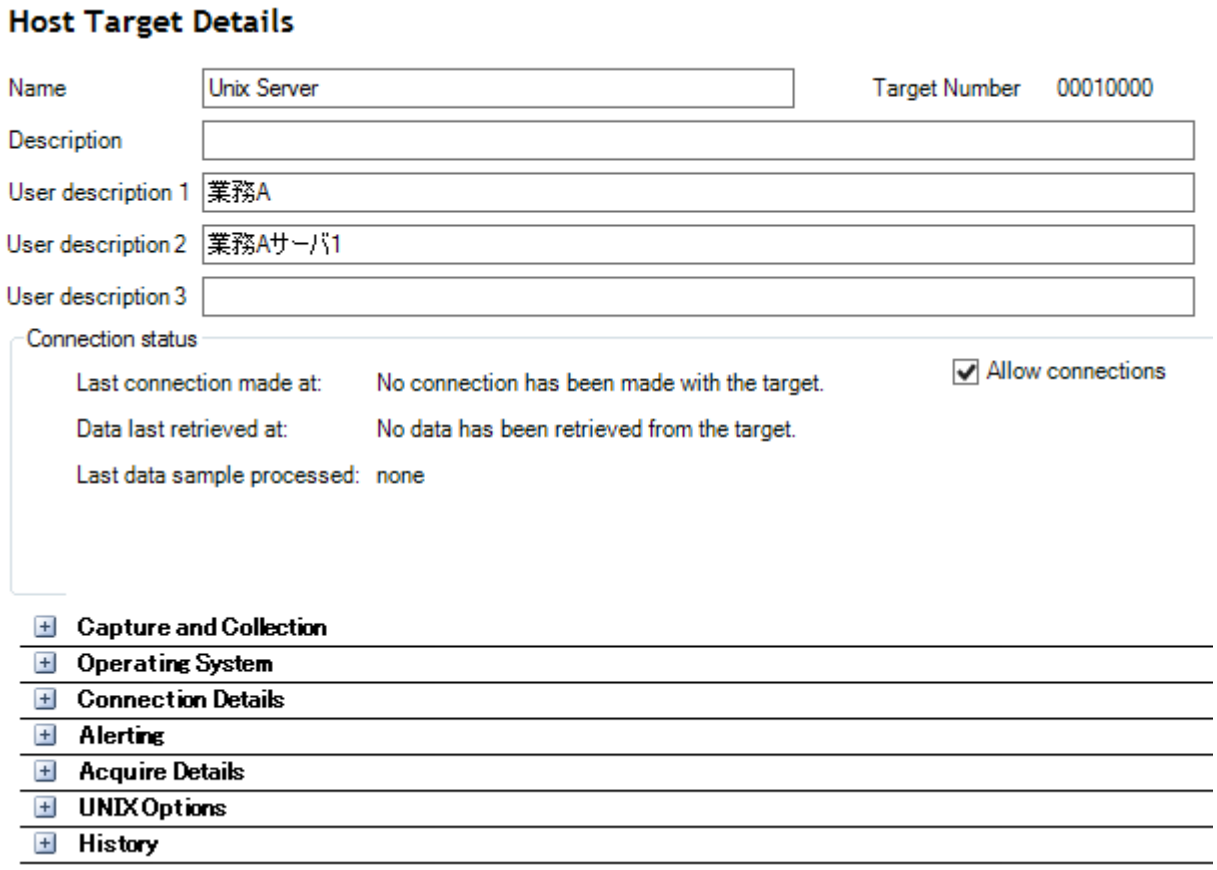
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

4.8.2. 基本データ用ターゲットの詳細設定

ここでは、「4.8.1. 基本データ用ターゲットの作成」で作成したターゲットに関して、より詳細な設定を行います。
System Manager メイン画面右上の Display パネルに、ターゲットの詳細情報パネルが表示されます。
以下の順序で各パネルの内容を確認し、必要ならば設定を変更します。

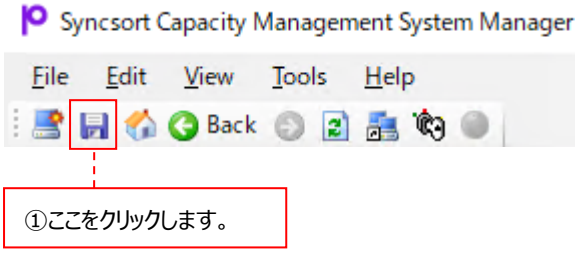
(1)Host Target Details
(2)Capture and Collection
(3)Operating System
(4)Connection Details
(5)Aerting
(6)Acquire Details
(7)UNIX Options （Unix／Linux システムの場合）

●詳細情報パネル

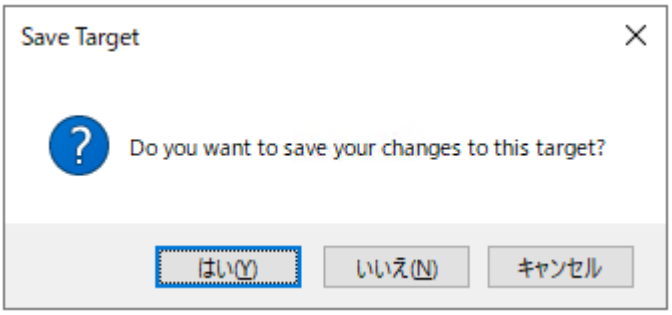


注意！
以下のパネルの内容を変更する必要はありません。
・History

なお、詳細情報パネルで何かしらの変更を行った場合、System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、変更を保存してください。

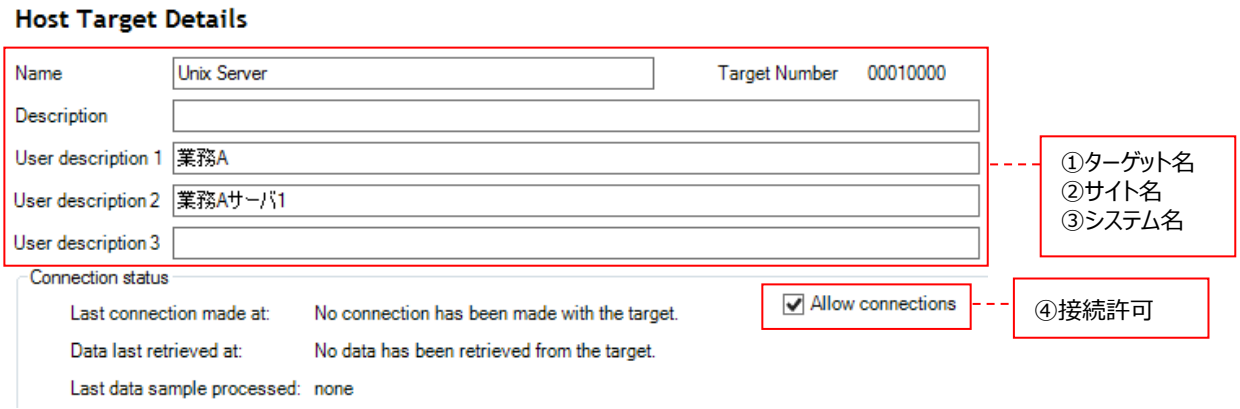


または、詳細情報パネルで何かしらの変更を行って別の操作に進む時に、以下のウィンドウが表示される場合があります。変更内容を保存するならば、[はい(Y)]ボタンをクリックしてください。



(1)Host Target Details

ターゲット名／サイト名／システム名に誤りが無いかどうかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①Name　　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
②User description 1　：CS シリーズにて使用するサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
③User description 2　：CS シリーズにて使用するシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
④Allow connections　：チェックが付いていると実際にターゲットと通信します。通信しない場合は、チェックを外します。

Name／User description 1／User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。
Description と User description 3 は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③…, ⅠⅡⅢ…, ㈱ﾄﾞﾙﾊﾟｰｾﾝﾄ…等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

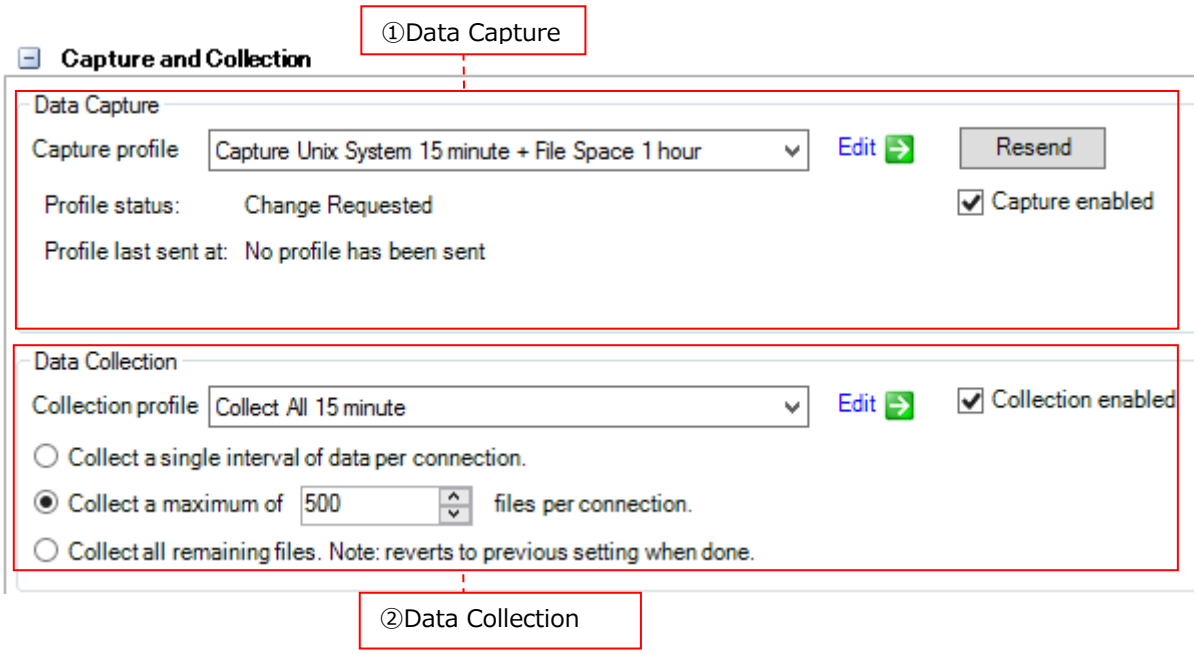
サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

(2)Capture and Collection

Capture Profile／Collection Profile に誤りが無いかを確認します。また、1 回のデータ転送でどれだけファイルを転送するのかを指定します。必要ならば各項目を変更してください。



①Data Capture

Capture profile	：正しい Capture profile が割り当てられていることを確認します。
Capture enabled	：チェックが付いていると実際にサーバ上でデータ収集を行います。
Resend	：Capture profile の設定内容を対象サーバに送信します。対象サーバ上で Acquire は、送信されてきた Capture profile の設定内容を基にデータを収集します。

②Data Collection

Collection profile	：正しい Collection profile が割り当てられていることを確認します。
Collection enabled	：チェックが付いていると実際にサーバ上の Acquire が収集したデータファイルの転送を行います。
Collect a maximum of xxx	：ここにチェックが付いていることを確認し、1 回の転送動作で転送する最大のファイル数を指定します。デフォルトは 50 ですが、入力欄に「500」を指定してください。

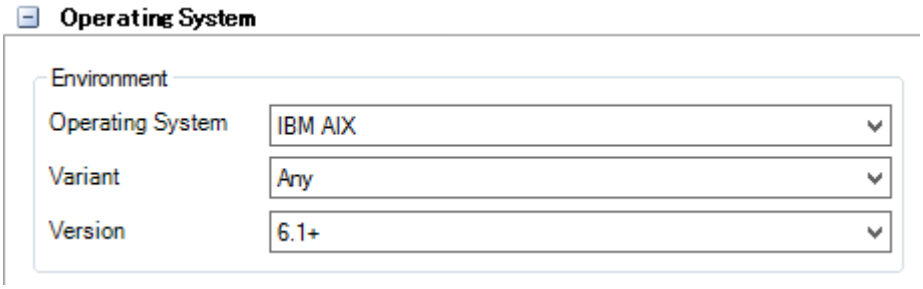
注意！

(1)「Collect a single interval of data per connection.」は使用できませんので、チェックしないでください。

(2)「Collect all remaining files. Note: reverts to previous setting when done.」にチェックを付けると、次回の転送動作時に対象システム上に残っているすべてのファイルを転送します。その転送動作が終了すると、チェックを付ける前の設定状態に戻ります。このオプションは通常使用しません。

(3)Operating System

ターゲットの OS 情報に誤りが無いかどうかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



代表的な OS についての選択肢は以下の通りです。

OS 種類	Acquire のバージョン	Operating System	Variant	Version
AIX 7.1、7.2	12.20 11.20	IBM AIX	Any	6.1+
HP-UX 11i v3	12.20 11.20	HP-UX	no Fair Share	11i v3
Solaris 11（SPARC）	12.20 11.20	Solaris	SPARC	2.8
Solaris 11（x64）	12.20 11.20	Solaris	Intel	2.8
Red Hat Enterprise Linux 8 (x64)	12.20	Linux	RedHat x64	2.6
Red Hat Enterprise Linux 6、7 (x64)	12.20 11.20	Linux	RedHat x64	2.6
Oracle Linux 7 (x64)	12.20 11.20	Linux	RedHat x64	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 15 (x64)	12.20	Linux	SUSE	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 11、12 (x64)	12.20 11.20	Linux	SUSE	2.6
Red Hat Enterprise Linux 8 (System z)	12.20	Linux	zLinux	2.6
Red Hat Enterprise Linux 6、7 (System z)	12.20 11.20	Linux	zLinux	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 15 (System z)	12.20	Linux	zLinux	2.6
SUSE LINUX Enterprise Server 11、12 (System z)	12.20 11.20	Linux	zLinux	2.6

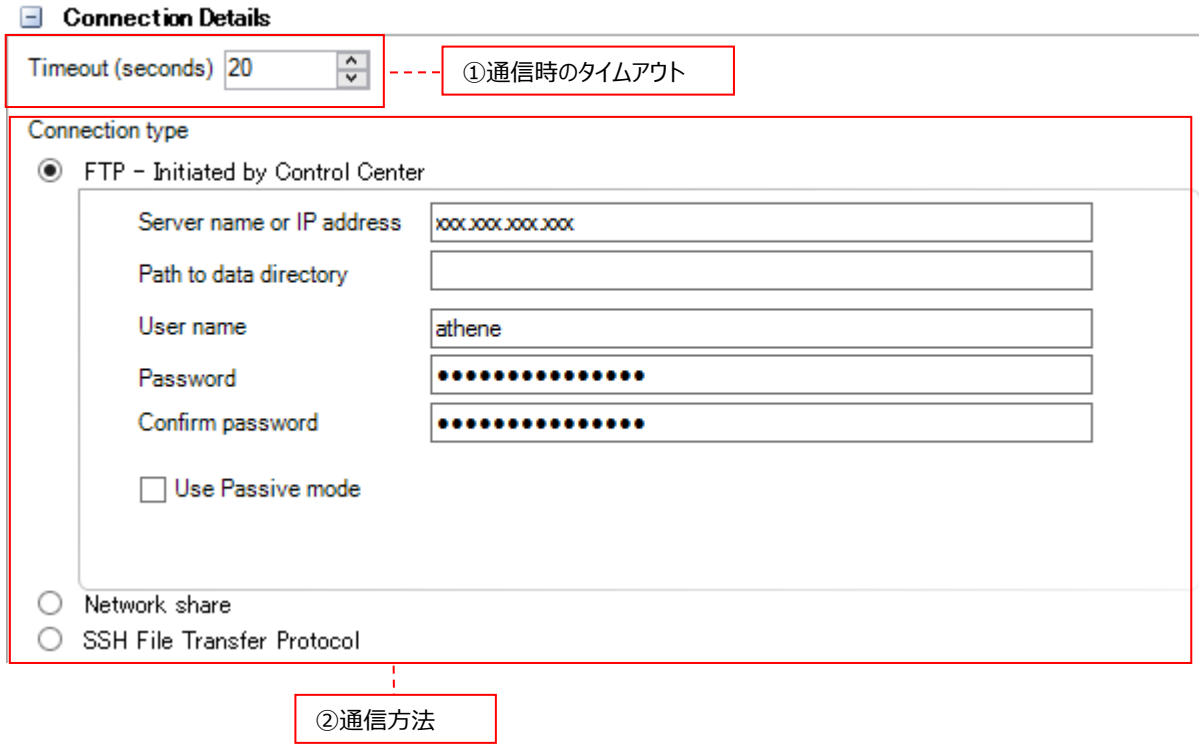
OS 種類	Acquire の バージョン	Operating System	Variant	Version
Windows Server 2019	12.20	Microsoft Windows	Any	Windows Server 2008 R2/Vista x64 and later
Windows Server 2016 Windows Server 2012 R2 / 2012	12.20 11.20	Microsoft Windows	Any	Windows Server 2008 R2/Vista x64 and later

(4)Connection Details

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。ターゲットが Unix／Linux システムか、Windows システムかによって、GUI が一部異なります。必要ならば各項目を変更してください。

●Unix／Linux システムの場合

基本は FTP 通信を使用します。



①Timeout (seconds)　：ターゲットと通信を行う時のタイムアウト（秒）を指定します。デフォルトは 20 秒です。特に問題が無い限り、変更する必要はありません。
0 から 86400 秒まで指定可能ですが、極端に短いあるいは長い時間を指定しないでください。

②通信方法

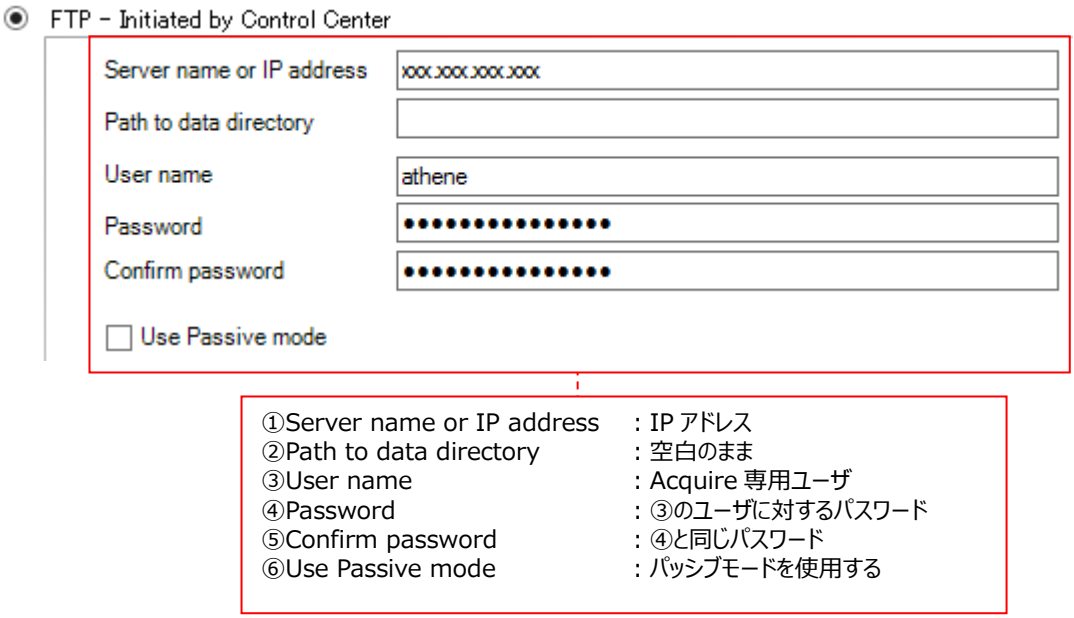
(a)FTP - Initiated by Control Center ：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(b)SSH File Transfer Protocol ：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。

指定した(a)(b)いずれかの GUI に進んでください。

注意！
Network share は使用できません。

(a)FTP 通信

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
(例)172.16.14.233:5555

②Path to data directory : 空白のままにしておきます。

③User name : Acquire 専用ユーザを入力します。

④Password : ③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。
パスワードには、ダブルクォーテーションは使用できません。

⑤Confirm password : ④と同じパスワードを入力します。

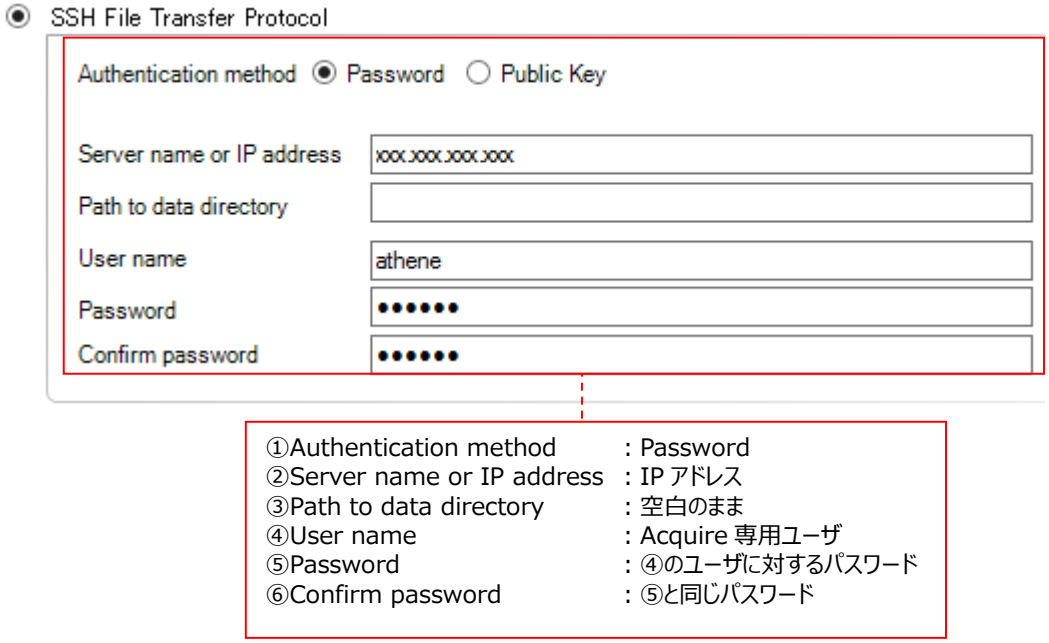
⑥Use passive mode : パッシブモードを使用する場合にチェックします。

「(5) Alerting」に進んでください。

(b)SFTP 通信

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

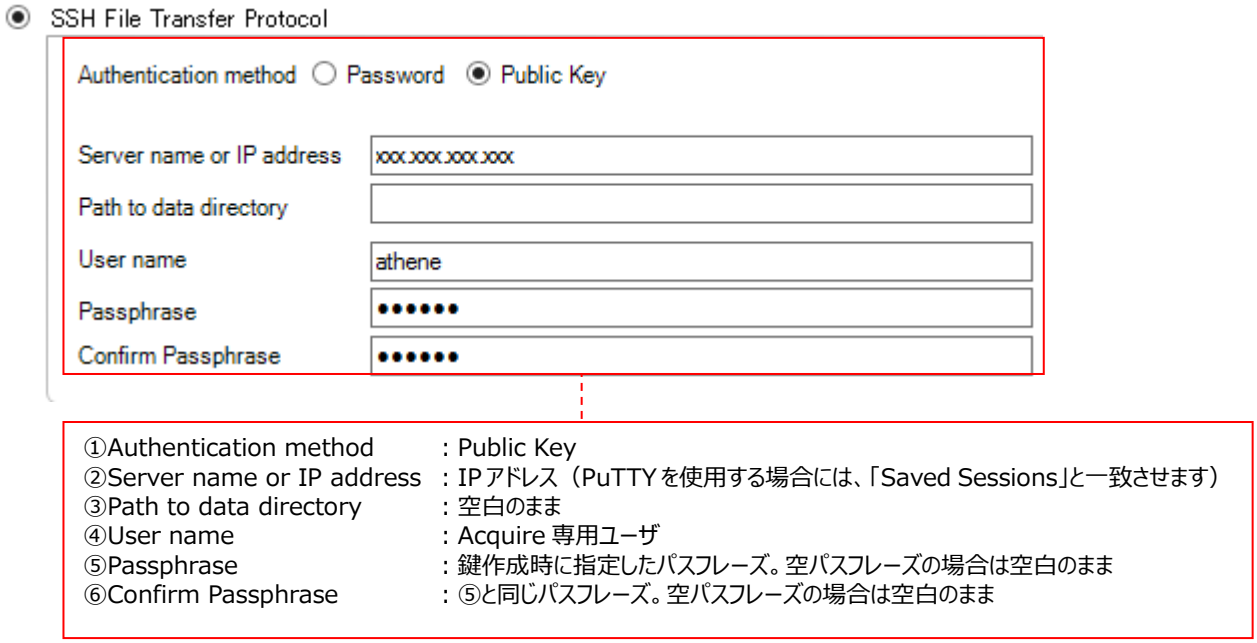
<パスワード認証の場合>



①Authentication method : 認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address : IP アドレスを入力します。
③Path to data directory : 空白のままにしておきます。
④User name : Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Password : ④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm password : ⑤と同じパスワードを入力します。

「(5) Alerting」に進んでください。

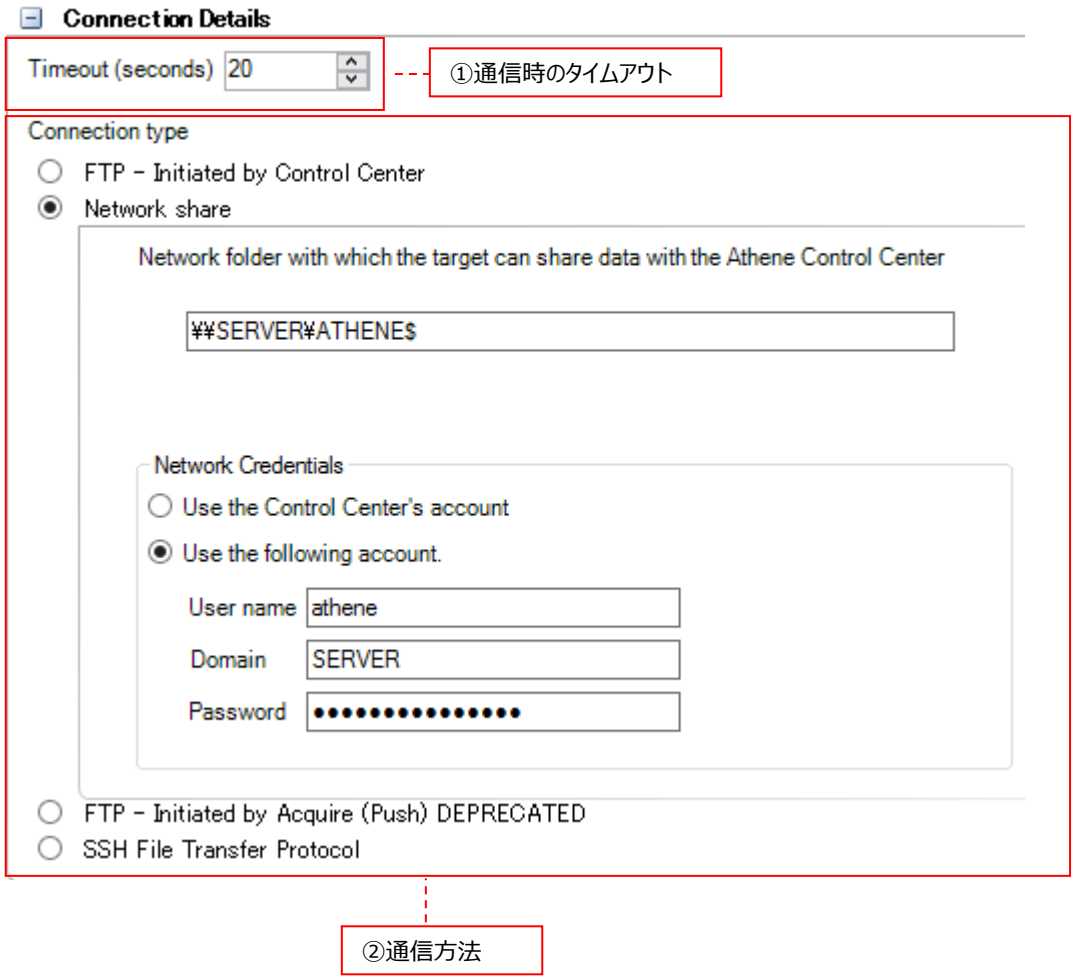
＜公開鍵認証の場合＞



①Authentication method : 認証方法として Public Key を指定します。
②Server name or IP address : IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。
③Path to data directory : 空白のままにしておきます。
④User name : Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Passphrase : 鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。
⑥Confirm Passphrase : ⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

「(5) Alerting」に進んでください。

●Windows システムの場合
基本はファイル共有を使用します。



①Timeout (seconds) ：ターゲットと通信を行う時のタイムアウト（秒）を指定します。デフォルトは 20 秒です。特に問題が無い限り、変更する必要はありません。
0 から 86400 秒まで指定可能ですが、極端に短いあるいは長い時間を指定しないでください。

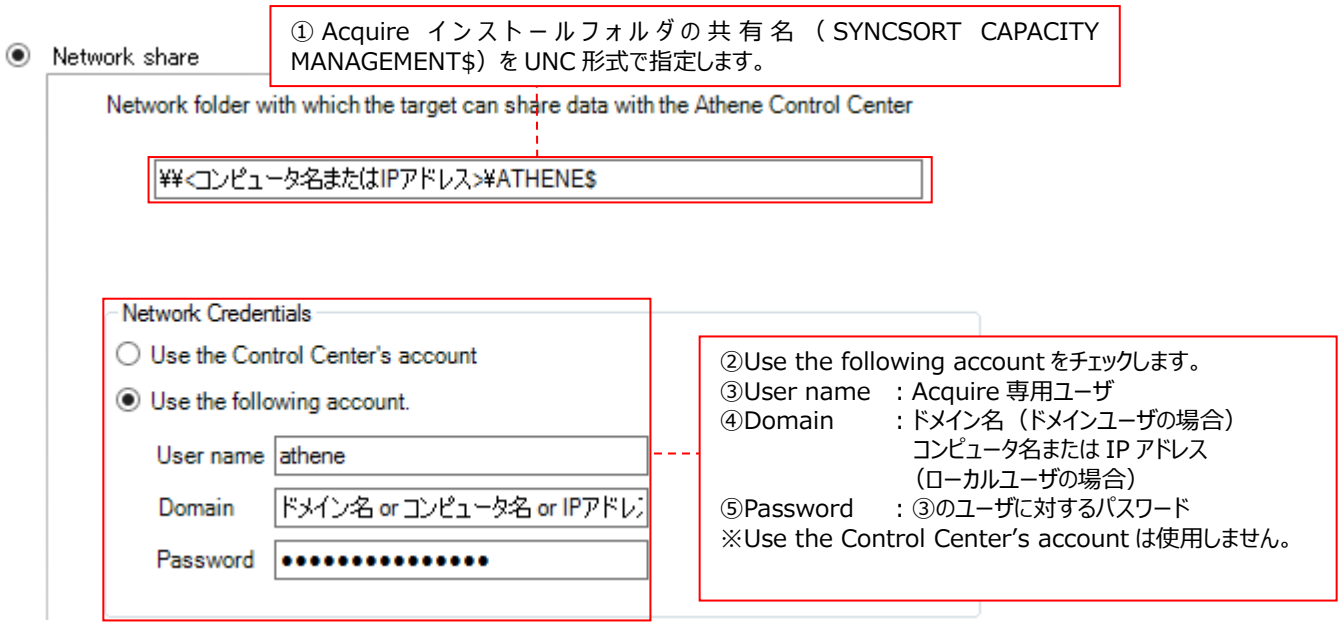
②通信方法
(a)Network share ：ファイル共有を使用する場合にチェックします。
(b)FTP - Initiated by Control Center ：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(c)SSH File Transfer Protocol ：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。

指定した(a)(b)(c)いずれかの GUI に進んでください。

注意！
FTP - Initiated by Acquire(Push) DEPRECATED は使用できません。

(a)ファイル共有

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①対象システムの Acquire インストールフォルダに対する共有名を UNC 形式で指定します。通常は SYNCSORT CAPACITY MANAGEMENT$のままにしておきます。もし、SYNCSORT CAPACITY MANAGEMENT$から共有名を変更している場合は、その名前を指定します。

（例）¥¥SERVER¥SYNCSORT CAPACITY MANAGEMENT$

②Use the following account をチェックします。

③User name ：Acquire 専用ユーザを入力します。

④Domain ：ターゲットの Windows システムに Acquire をインストールする際に、ドメインユーザを使用した場合は、ドメイン名を入力します。
ターゲットの Windows システムに Acquire をインストールする際に、ローカルユーザを使用した場合は、コンピュータ名または IP アドレスを入力します。

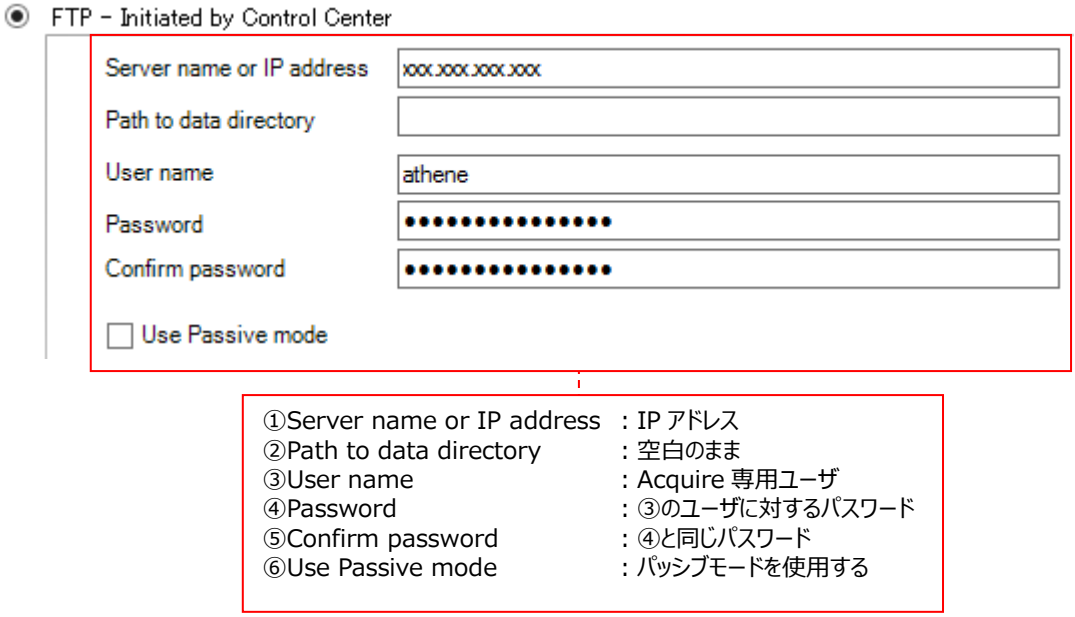
⑤Password ：③のユーザに対するパスワードを入力します。

「(5) Alerting」に進んでください。

注意！
Use the Control Center's account は使用できません。

(b)FTP 通信

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
(例)172.16.14.233:5555

②Path to data directory : 空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで FTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
(例)「C:¥Metron¥Acquire」が FTP ログインした際のホームディレクトリ

③User name : Acquire 専用ユーザを入力します。

④Password : ③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。
パスワードには、ダブルクォーテーションは使用できません。

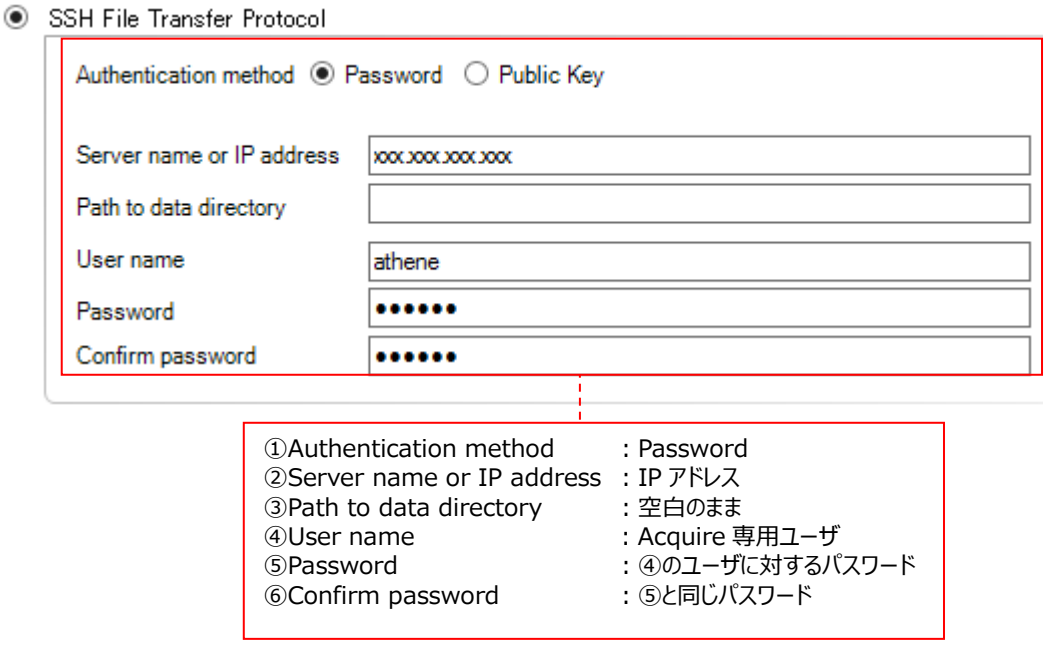
⑤Confirm password : ④と同じパスワードを入力します。

⑥Use passive mode : パッシブモードを使用する場合にチェックします。

「(5) Alerting」に進んでください。

(c)SFTP 通信
ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

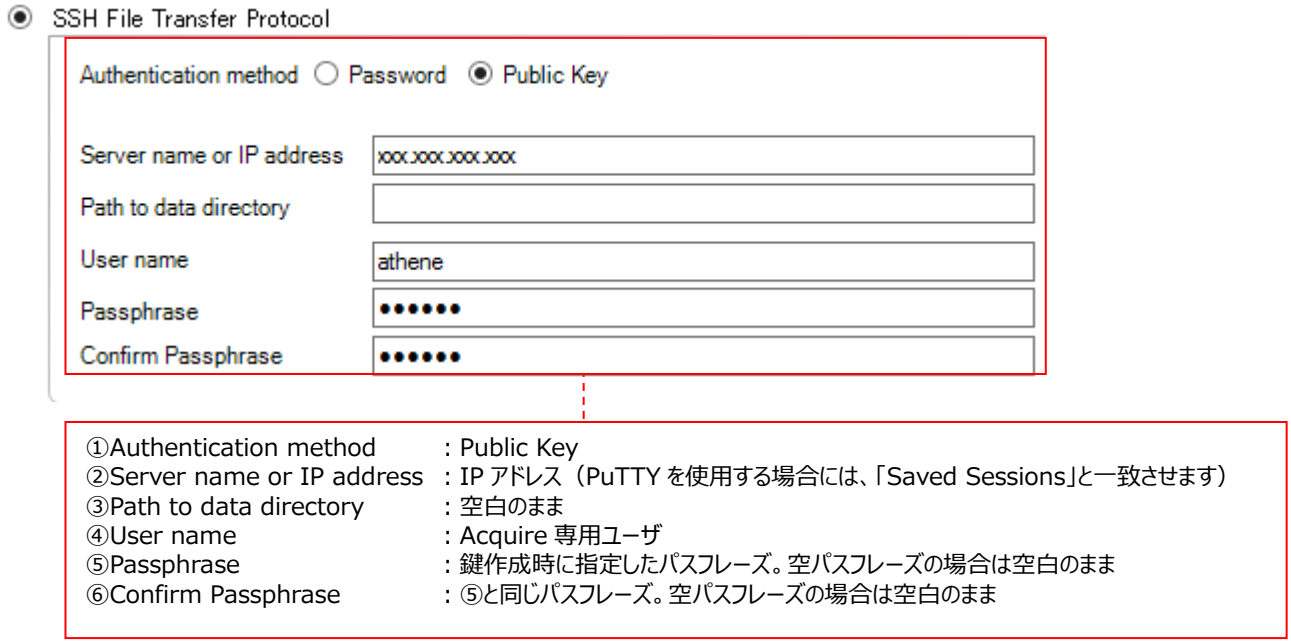
＜パスワード認証の場合＞



①Authentication method : 認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address : IP アドレスを入力します。
③Path to data directory : 空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで SFTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
(例)「C:¥Metron¥Acquire」が SFTP ログインした際のホームディレクトリ設定されていない場合は、Acquire のインストールパスを指定してください。
(例)「E:¥Metron¥Acquire¥」
④User name : Acquire 専用ユーザを入力します。
⑤Password : ④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm password : ⑤と同じパスワードを入力します。

「(5) Alerting」に進んでください。

＜公開鍵認証の場合＞



①Authentication method　：認証方法として Public Key を指定します。

②Server name or IP address　：IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。

③Path to data directory　：空白のままにしておきます。
対象サーバの Acquire インストールフォルダが、Acquire 専用ユーザで SFTP ログインした際のホームディレクトリとして設定されていることが前提です。
(例)「C:¥Metron¥Acquire」が SFTP ログインした際のホームディレクトリ設定されていない場合は、Acquire のインストールパスを指定してください。
(例)「E:¥Metron¥Acquire¥」

④User name　：Acquire 専用ユーザを入力します。

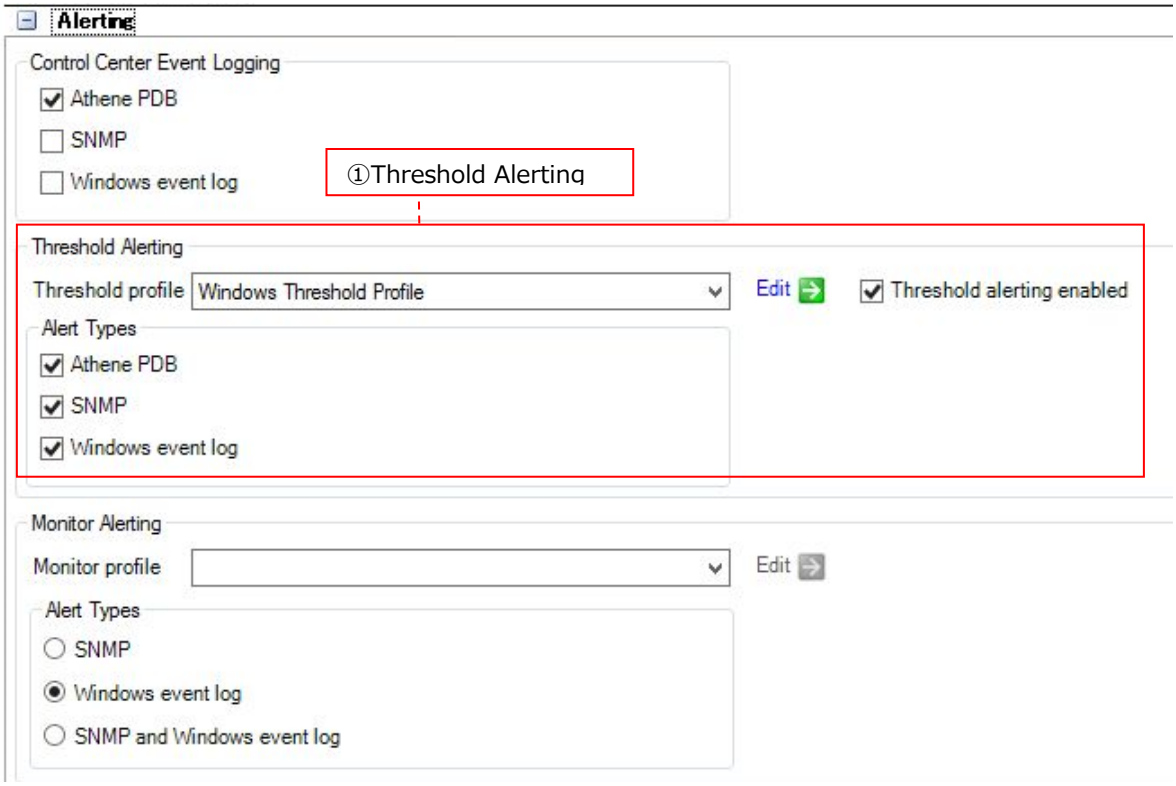
⑤Passphrase　：鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

⑥Confirm Passphrase　：⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

「(5) Alerting」に進んでください。

(5)Alerting

しきい値検知機能 Threshold alerting を使用する場合、Threshold Profile に誤りが無いかを確認します。
また、必要ならばしきい値検知の通知方法を変更してください。



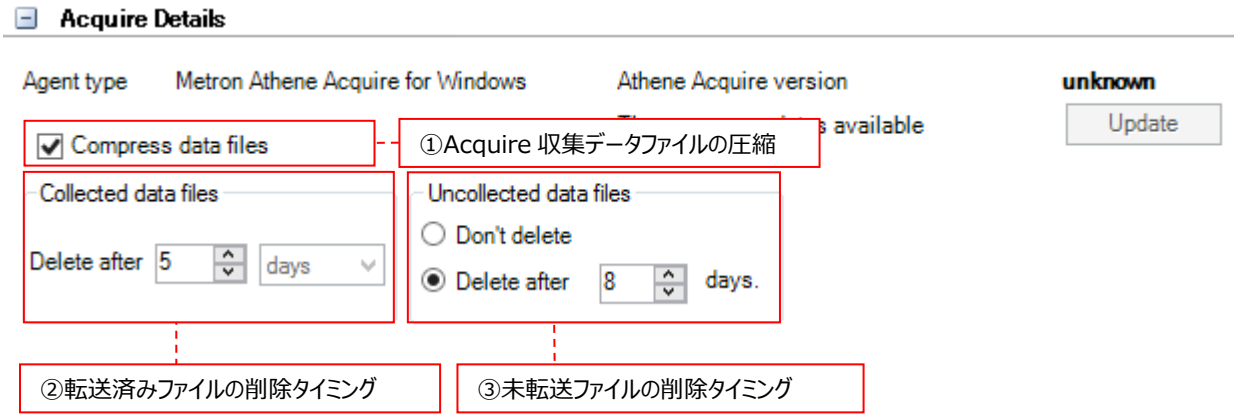
①Threshold Alerting

Threshold profile　　：正しい Capture profile が割り当てられていることを確認します。
Alert Types　　：しきい値検査結果の通知方法を指定してください。
　Syncsort Capacity Management PDB　　：PDB に出力します。
　SNMP　　：SNMP メッセージを送信します。
　Windows event log　　：イベントログに出力します。

注意！
Control Center Event Logging／Monitor Alerting は使用できません。

(6)Acquire Details

対象サーバから管理用マシンに転送されたファイルをサーバ上で削除するタイミングを指定します。必要ならば各項目を変更してください。



①Compress data files　：サーバのディスクスペース節約のために、対象サーバ上で Acquire が収集したデータファイルを圧縮するかどうかを指定します。デフォルトではチェックが付いています。
Unix／Linux システムの場合は、チェックを付けたままにしておきます。
Windows システムの場合は、本項目は表示されず非圧縮となります。

②Collected data files

対象サーバ上で Acquire が収集したデータファイルは、管理用マシンへ転送されてデータ変換処理が終わった後、自動的にサーバ上から削除されます。転送済みファイルを削除するタイミングを指定します。

Delete after days　：サーバ上での保存日数を 1 から 30 日までの間で指定します。通常はこれを選択します。デフォルトの保存日数は 5 日間です。
1 日に 1 回転送済みファイルを削除する処理が実行されます。

Delete after hours　：指定した時間（hours）毎に、転送済みファイルを削除する処理が実行されます。
サーバ上には、削除処理を実行する時刻から直近の指定時間分のファイルが残ります。
このオプションは Unix／Linux システムのみ使用できます。

注意！
「Delete after　hours」の削除対象となるファイルは、Acquire が保持しているファイルのタイムスタンプが基準となっております。このため、Acquire のホームディレクトリ配下のファイルが、バックアップやウィルスチェックソフトなどの対象になっている場合、削除されずに残るファイルが指定時間分より少なくなる可能性があります。

③Uncollected data files

サーバのディスクスペース節約のため、管理用マシンへ転送されていない収集データファイルは、一定時間経過後に自動的にサーバ上から削除されます。未転送ファイルを削除するタイミングを指定します。

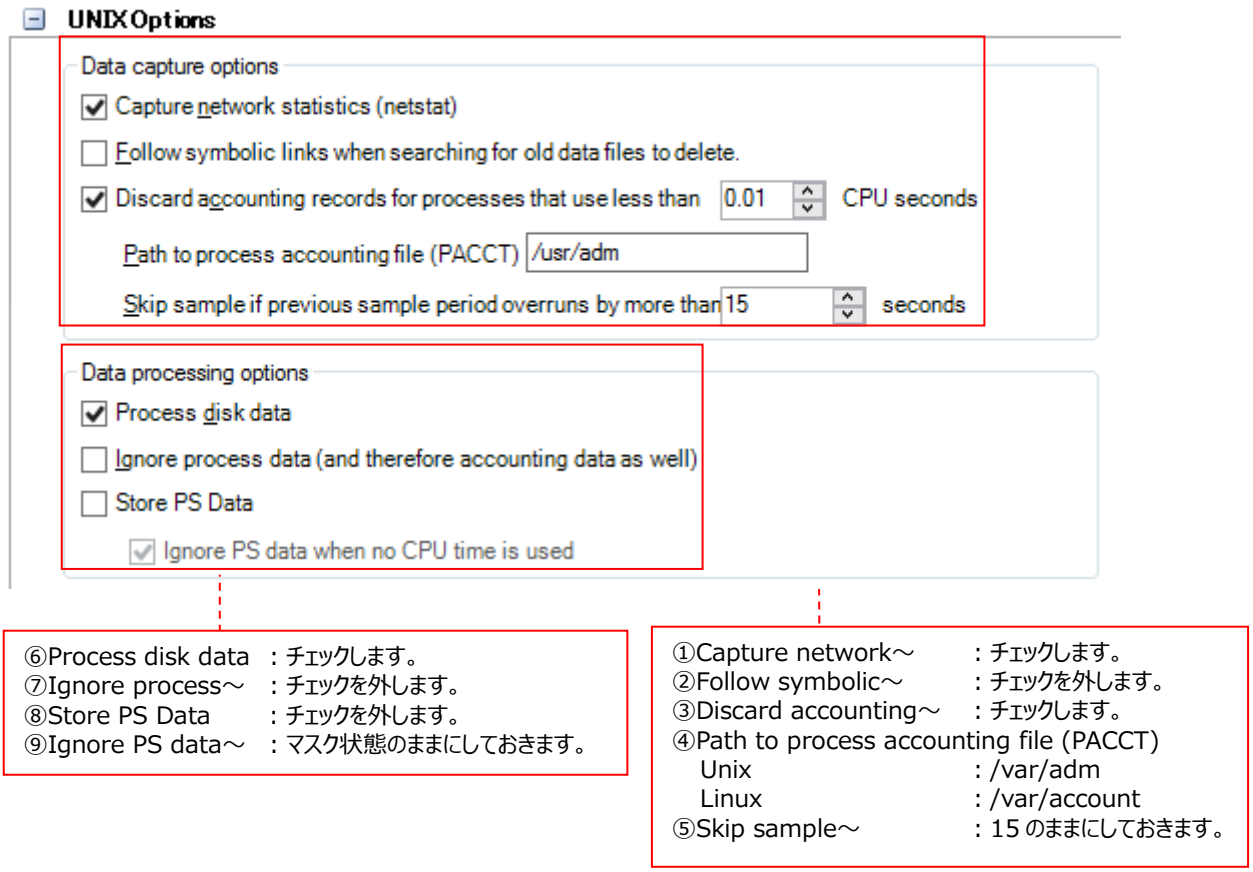
Don't delete　：未転送ファイルを削除しません。

Delete after　days　：サーバ上での保存日数を 1 から 100 日までの間で指定します。デフォルトの保存日数は 8 日間です。1 日に 1 回未転送ファイルを削除する処理が実行され ます。

注意！
Windows システムの場合、②Collected data files／③Uncollected data files のいずれにおいても、Acquire の収集データファイルはファイルの最終アクセス日から n 日後に削除されます。Acquire の収集データファイルが、バックアップや、ウィルスチェックソフトなどの対象になっている場合には n 日経過しても削除されない場合があります

この後、Unix／Linux システムの場合は、「(6) UNIX Options （Unix／Linux システムの場合）」に進んでください。
Windows システムでデータベースのターゲットを設定する場合は、「4.8.3. データベース用ターゲットの作成」に進んでください。
Windows システムでデータベースのターゲットを設定しない場合は、「4.9. データ収集／転送／変換処理の開始」に進んでください。

(7)UNIX Options （Unix／Linux システムの場合）
Unix／Linux システムのデータ処理に関するオプションを指定します。下図の状態がもっとも標準的な指定になります。



●Data capture options
①Capture network statistics (netstat)
チェックします。
なお、ターゲットが Linux システムの場合は、マスクされた状態になります。

②Follow symbolic links when searching for old data files to delete
チェックを外します。

注意！
Unix／Linux システム用の Acquire は、Control Center に転送されたサーバ上のファイルを自動削除するスクリプトの中で「find -follow」を使用しています。このオプションは、「-follow」を使用するかどうかを指定するものですが、OS の種類によっては、find コマンドの「-follow」オプションが存在しないため、チェックを付けているとサーバ上からファイルが削除されません。

③Discard accounting records for processes that use less than　CPU seconds
チェックします。数値は 0.01 のままにしておきます。

④Path to process accounting file (PACCT)
Unix／Linux システム上で OS の課金情報ファイル（pacct）が存在するディレクトリを指定します。ほとんどの Unix および Linux では、それぞれ以下のディレクトリになります。
Unix　　: /var/adm
Linux　　: /var/account

⑤Skip sample if previous sample period overruns by more than　seconds
15 のままにしておきます。

●Data processing options
⑥Process disk data
チェックします。
チェックを外した場合、ディスク情報がパフォーマンスデータベース（PDB）に蓄積されませんので、ディスクに関するグラフの作成や評価が行えなくなります。

⑦Ignore process data (and therefore accounting data as well)
チェックを外します。

⑧Store PS Data
チェックを外します。

⑨Ignore PS data when no CPU time is used
マスク状態のままにしておきます。

この後、Unix／Linux システムでデータベースのターゲットを設定する場合は、「4.8.3. データベース用ターゲットの作成」に進んでください。
Unix／Linux システムでデータベースのターゲットを設定しない場合は、「4.9. データ収集／転送／変換処理の開始」に進んでください。

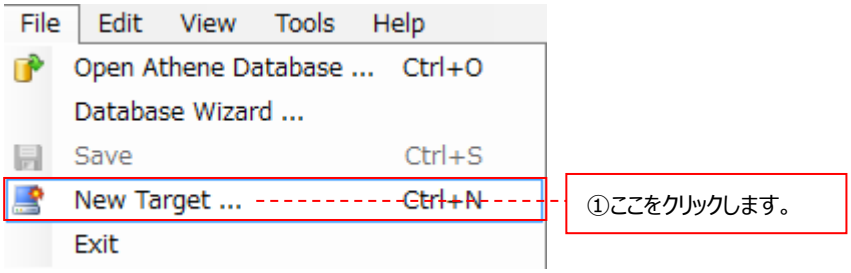
4.8.3. データベース用ターゲットの作成

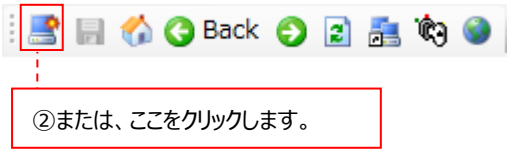
Oracle／SQL Server／Symfoware のデータベース用ターゲットを作成します。対象データベースに応じた手順を参照してください。

Oracle　　：4.8.3.1. Oracle データベース用ターゲット作成手順
SQL Server　：4.8.3.2. SQL Server データベース用ターゲット作成手順
Symfoware　：4.8.3.3. Symfoware データベース用ターゲット作成手順

4.8.3.1. Oracle データベース用ターゲット作成手順

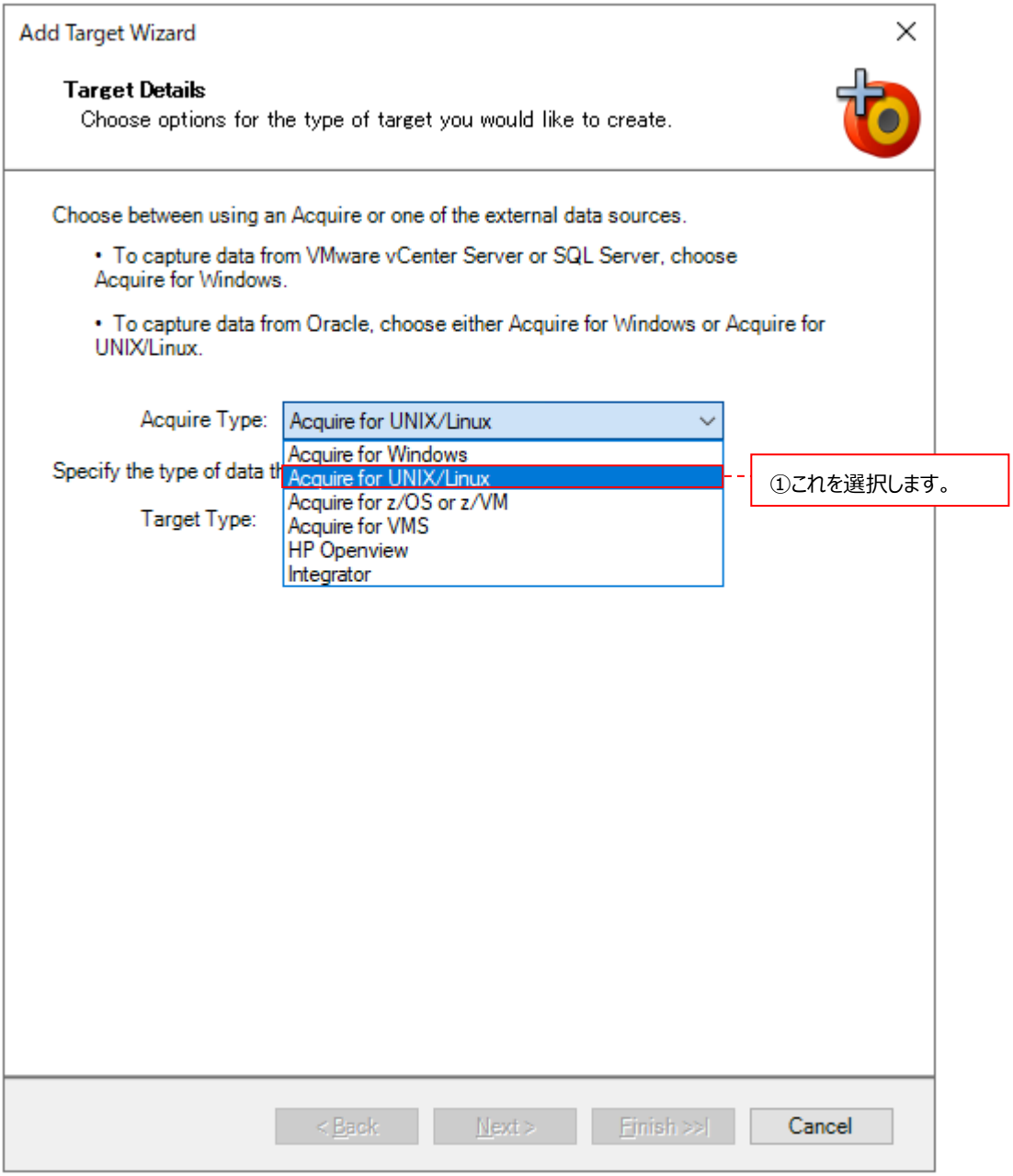
(1)ターゲット作成ウィザードの起動
System Manager メイン画面左上のメニュー「File→New Target...」をクリックします①。
または、[Add Target]ボタンをクリックします②。





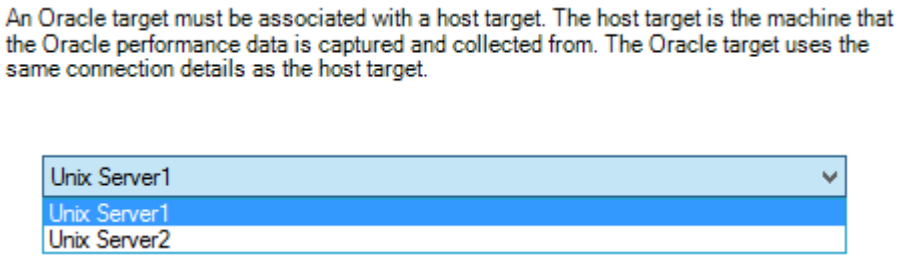
(2)Acquire タイプの選択
Target Details ダイアログでは、ターゲットが Unix／Linux システムか、Windows システムかを選択します。

●Unix／Linux システムの場合
Acquire Type のプルダウンから Acquire for UNIX/Linux を選択します①。



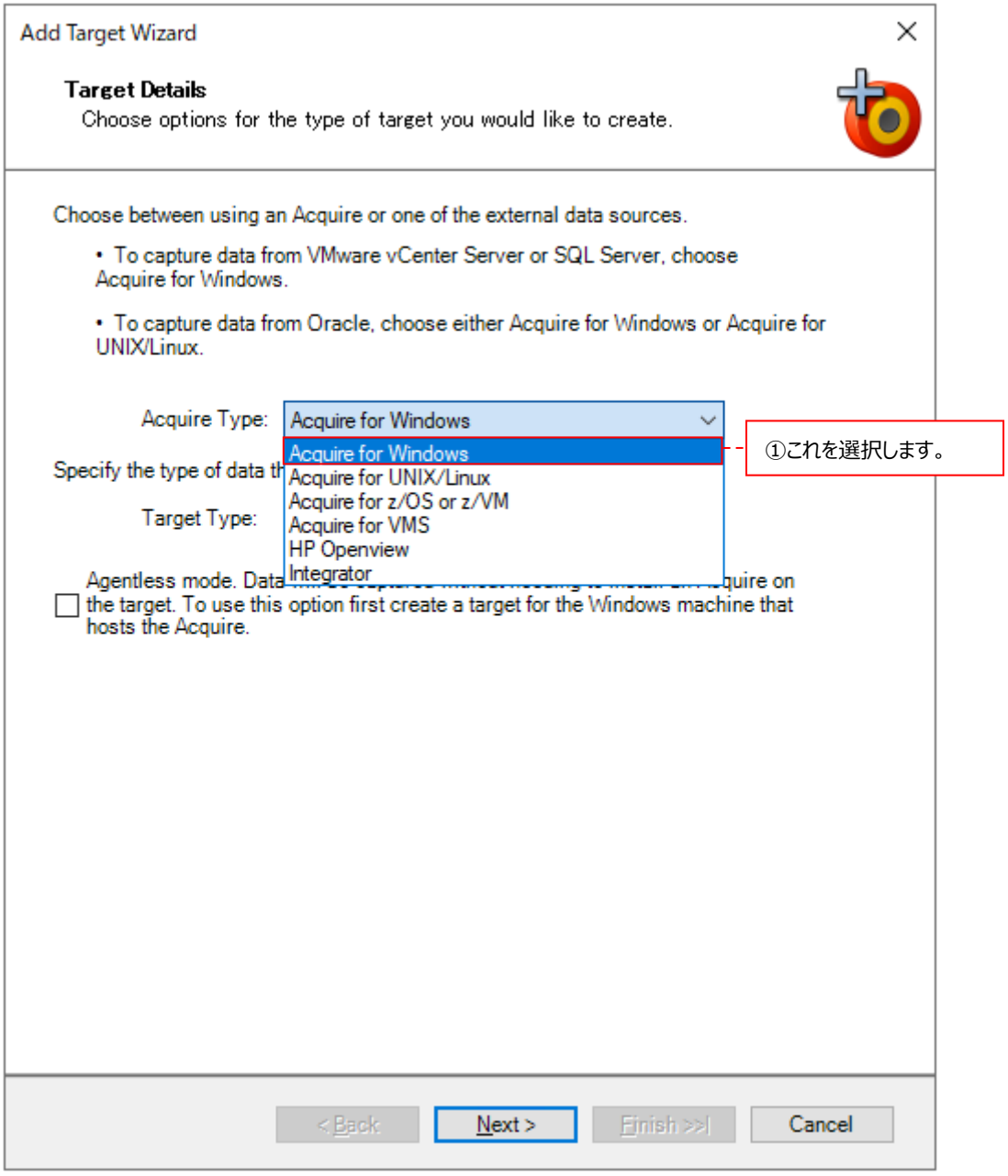
Target Type のプルダウンから Oracle を選択します②。

Oracle を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する Oracle ターゲットが稼働している Unix／Linux システムのターゲットを選択する（関連付ける）プルダウンが表示されます。

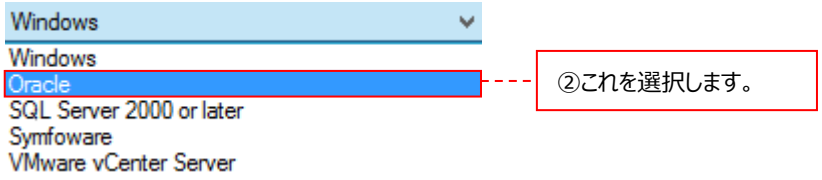


適切な Unix／Linux システムのターゲットを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

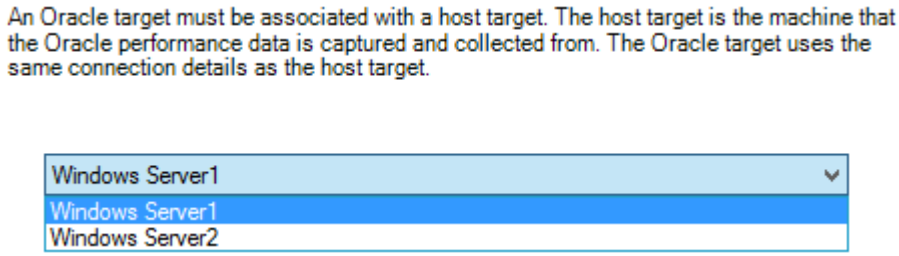
●Windows システムの場合
Acquire Type のプルダウンから Acquire for Windows を選択します①。



Target Type のプルダウンから Oracle を選択します②。



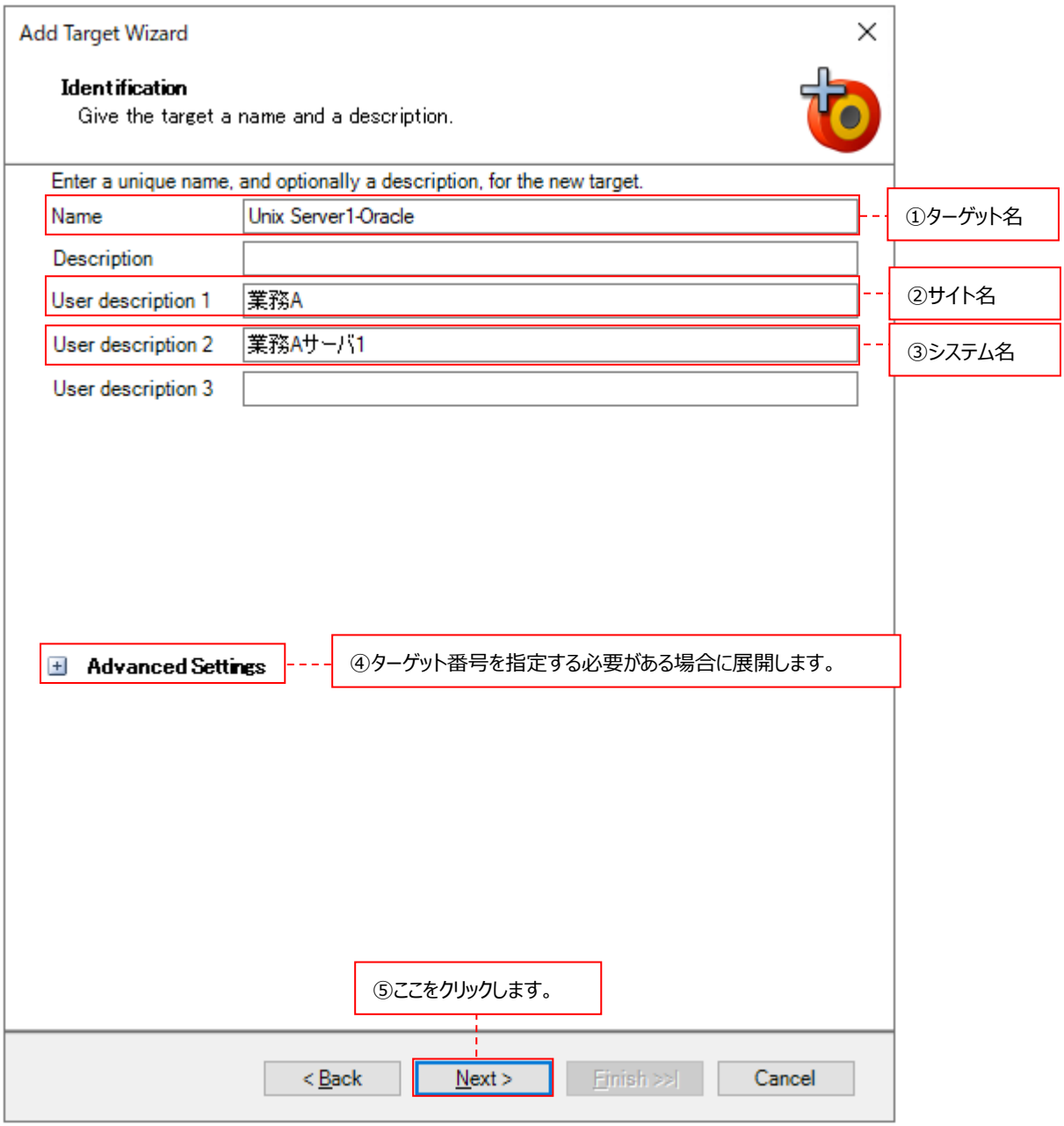
Oracle を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する Oracle ターゲットが稼働している Windows システムのターゲットを選択する（関連付ける）プルダウンが表示されます。



適切な Windows システムのターゲットを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

(3)ターゲット名の指定

Identification ダイアログでは、ターゲットの名前を指定します。



①Name　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。どのシステムターゲットに所属する Oracle ターゲットなのかが分かり易い名前を指定することをお勧めします。

②User description 1　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

③User description 2　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

④Advanced Settings　：Windows システム上の Acquire プログラムを使用して、既に Oracle ターゲットに対するターゲット番号を指定している場合は、Advanced Settings を展開してそのターゲット番号を入力します。

Name／User description 1／User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。
CS シリーズにて使用するサイト名／システム名については、別紙マニュアル「スタートガイド 4.2. サイト／システム」を参照してください。
Description と User description 3 は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③..., ⅠⅡⅢ..., ㈱ﾄﾞﾙﾊﾟｰｾﾝﾄ...等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

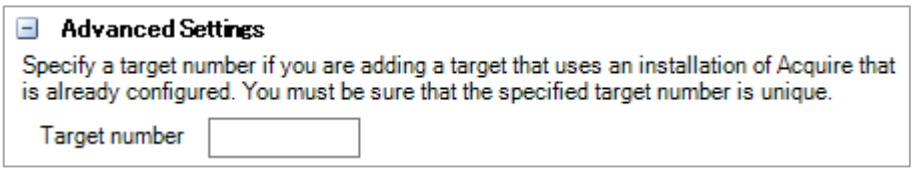
サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

注意！
通常 Identification ダイアログ下部にある Advanced Settings を設定する必要はありません。
Advanced Settings を展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号である Target number（ターゲット番号）を入力する欄が表示されますが、入力しなくても System Manager が自動採番します。

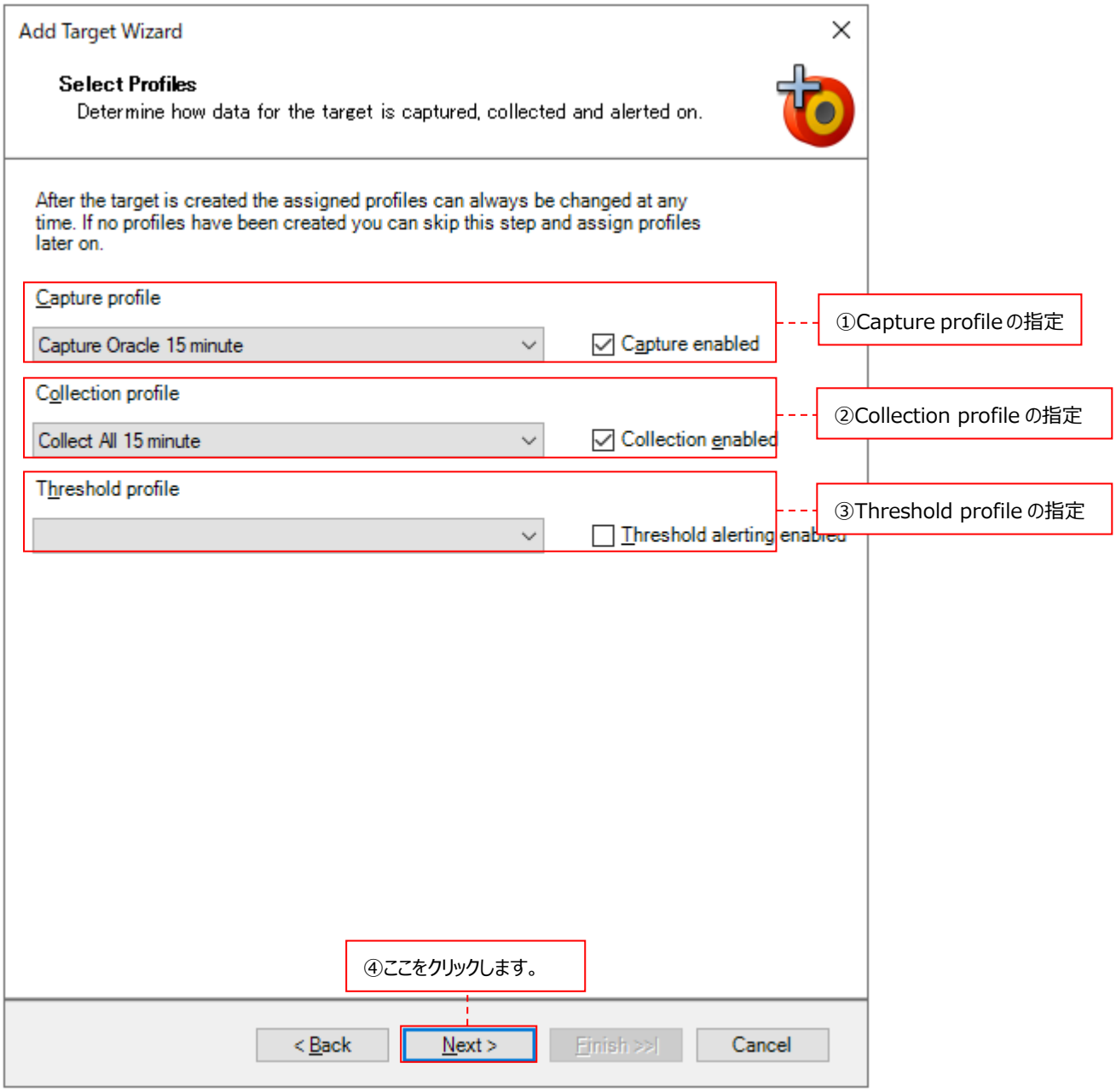
(1)Windows システム上の Oracle ターゲットの場合、自動採番されたターゲット番号を用いて、Acquire プログラムの設定を行う必要があります。詳細は別紙マニュアル「Acquire 使用者の手引き ～Windows 編～ 12.20 2.4. Oracle データ収集やエージェントレスデータ収集に関する情報の設定」を参照してください。
(2)Windows システム上の Acquire プログラムを使用して、既に Oracle ターゲットに対するターゲット番号を指定している場合は、Advanced Settings を展開してそのターゲット番号を入力します。



設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします⑤。

(4)プロファイルの指定

Select Profiles ダイアログでは、事前に設定したデータ収集設定（Capture profile）とデータ転送設定（Collection profile）を指定します。



①Capture profile　：「4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定」にあるデフォルトの Capture profile、または、「4.5.4. Oracle データ用 Capture Profile の設定」で設定した Capture profile をプルダウンから選択します。
Capture enabled にチェックを付けていると、実際にデータ収集を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ収集を行いません。

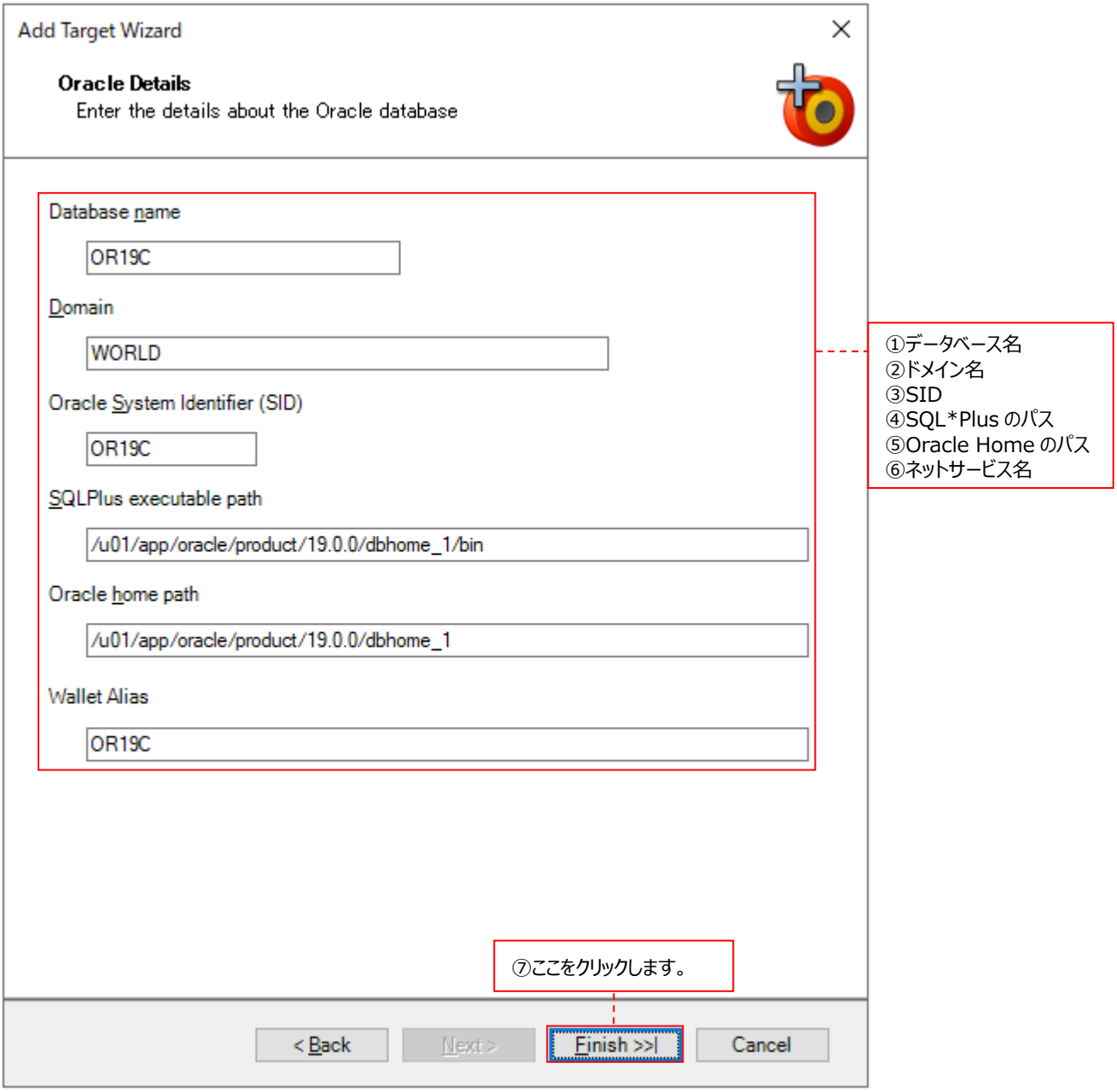
②Collection profile ：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile、または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

③Threshold profile ：「4.7.1. しきい値設定の作成」で設定した Threshold profile をプルダウンから選択します。Threshold alerting enabled にチェックを付けていると、実際に Threshold alerting を行うターゲットになります。チェックを外すと Threshold alerting を行いません。

指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします④。

(5)Oracle 詳細情報の指定
Oracle Details ダイアログでは、Oracle ドメイン名／データベース名／SID などの詳細情報を入力します。

●Unix／Linux システムの場合



①Database name　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降　非 CDB 構成>
Oracle データベース名
<Oracle12c 以降　CDB 構成-CDB>
CDB 名
<Oracle12c 以降　CDB 構成-PDB>
PDB 名

②Domain　：Oracle ドメイン名を指定します。

③Oracle System Identifier (SID)　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
＜Oracle12c 以降 非 CDB 構成＞
Oracle_SID
＜Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB＞
CDB 名（Oracle_SID）
＜Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB＞
PDB 名

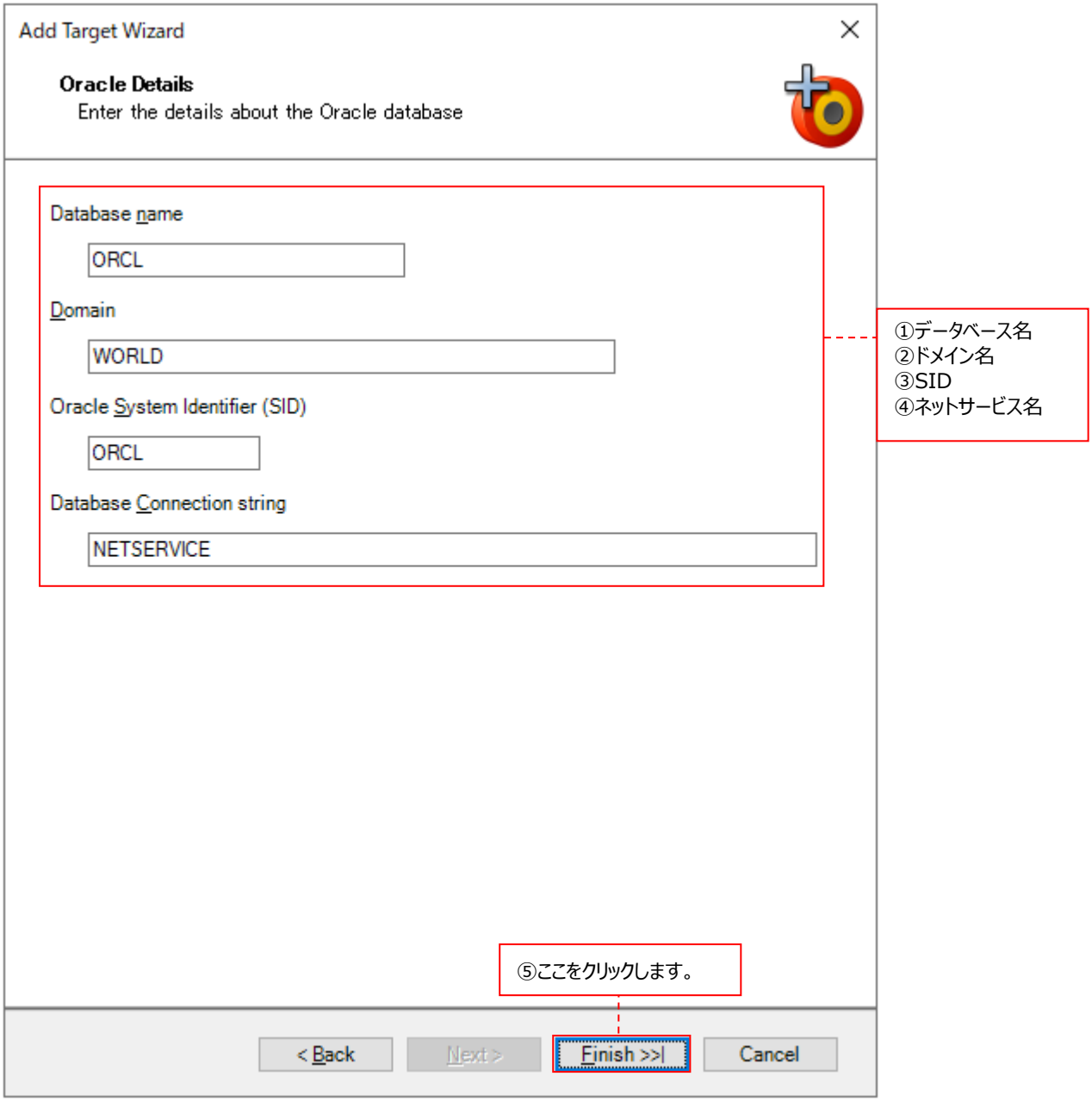
④SQLPlus executable path　：SQL*Plus プログラムのあるパスを指定します。

⑤Oracle home path　：Oracle Home のパスを指定します。

⑥Wallet Alias　：対象サーバに導入した Acquire のバージョンに応じて適切な情報を登録してください。
＜Acquire10.30 以降の場合＞
Acquire 導入時に設定したネットサービス名
＜Acquire9.30 以前の場合＞
空のままにしておきます。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
この後、「4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

●Windows システムの場合



①Database name　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降 非 CDB 構成>
Oracle データベース名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB>
CDB 名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB>
PDB 名

②Domain　：Oracle ドメイン名を指定します。

③Oracle System Identifier (SID)　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
＜Oracle12c 以降 非 CDB 構成＞
Oracle_SID
＜Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB＞
CDB 名（Oracle_SID）
＜Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB＞
PDB 名

④Database Connection string　：対象データベースに接続可能なネットサービス名を指定します。

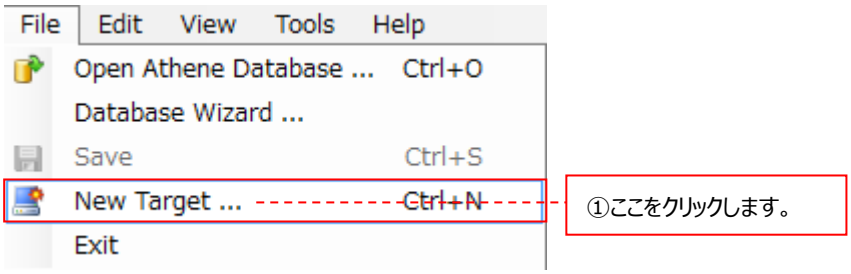
注意！
Acquire 導入サーバで稼働している対象 Oracle データベースのみに接続できるネットサービス名を使用してください。RAC 環境等で利用されている、複数の接続先データベースが定義されていて、動的に接続先のデータベースが変わってしまうタイプのネットサービス名は使用できません。

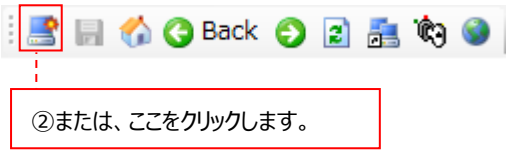
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑤。
この後、「4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

4.8.3.2. SQL Server データベース用ターゲット作成手順

(1)ターゲット作成ウィザードの起動

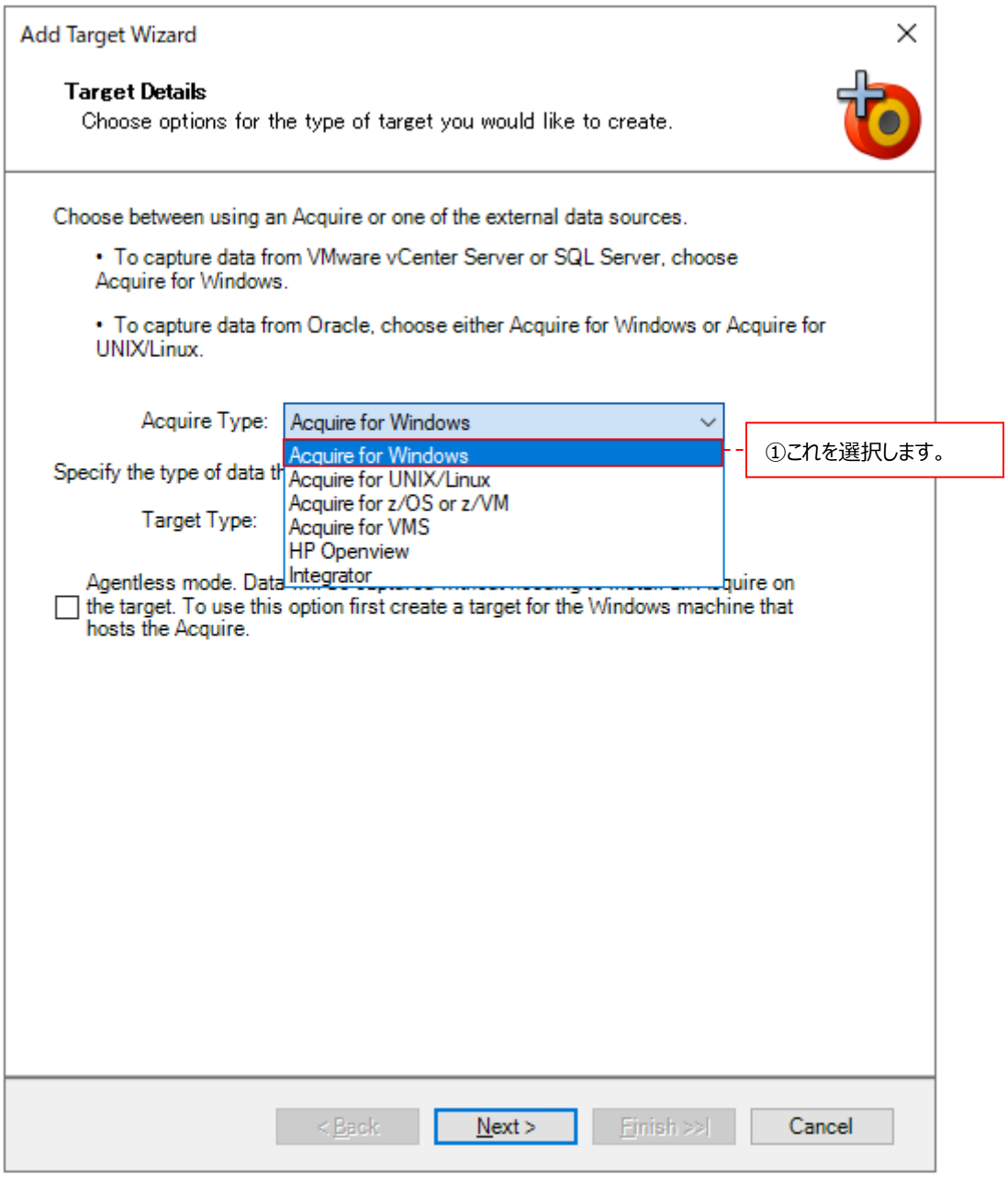
System Manager メイン画面左上のメニュー「File→New Target...」をクリックします①。
または、[Add Target]ボタンをクリックします②。



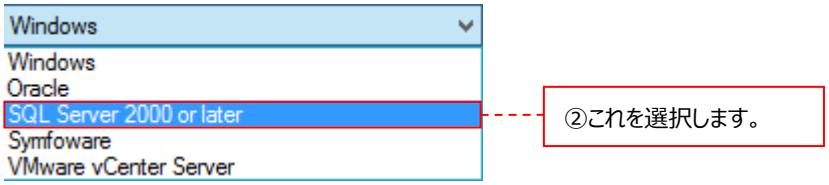


(2)Acquire タイプの選択

Acquire Type のプルダウンから Metron Syncsort Capacity Management Acquire for Windows を選択します①。

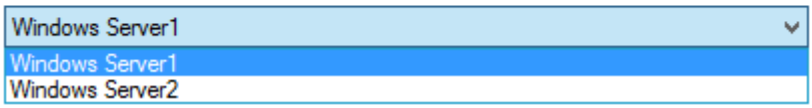


Target Type のプルダウンから SQL Server 2000 or later を選択します②。



SQL Server 2000 or later を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する SQL Server ターゲットが稼働している Windows システムのターゲットを選択する（関連付ける）プルダウンが表示されます。

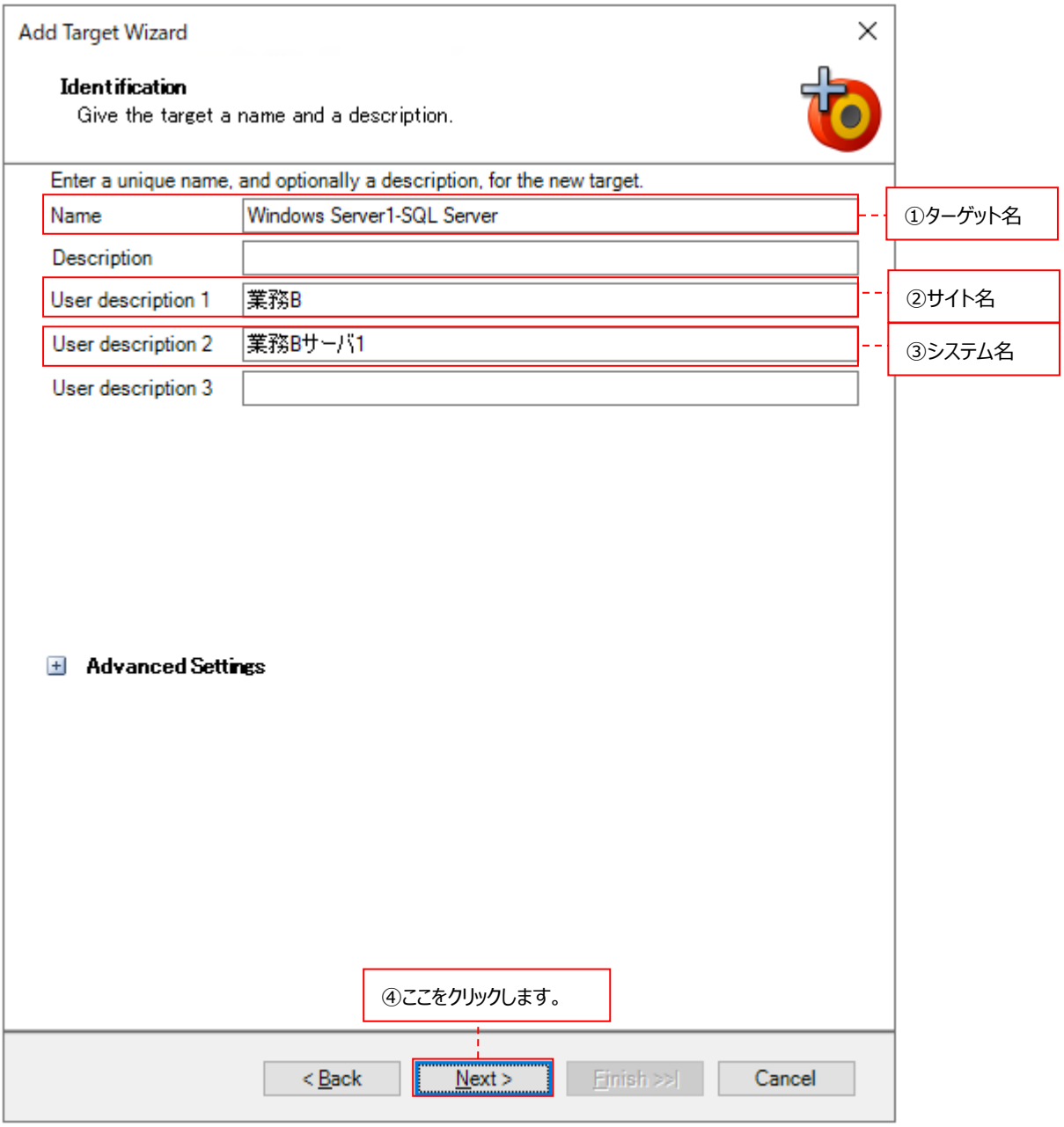
A SQL Server target must be associated with a Windows target. This must be the Windows target on which the SQL Server is running. This can be either a Windows machine on which Acquire is running (an Acquire host target), or an agentless target. The SQL Server target uses the same connection details as the Windows target.



適切な Windows システムのターゲットを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

(3)ターゲット名の指定

Identification ダイアログでは、ターゲットの名前を指定します。



①Name　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。どのシステムターゲットに所属する SQL Server ターゲットなのかが分かり易い名前を指定することをお勧めします。

②User description 1　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

③User description 2　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

Name／User description 1／User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。

CS シリーズにて使用するサイト名／システム名については、別紙マニュアル「スタートガイド 4.2. サイト／システム」を参照してください。

Description と User description 3 は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③…, ⅠⅡⅢ…, ㈱ﾄﾞﾙﾊﾟｾﾝﾄ…等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

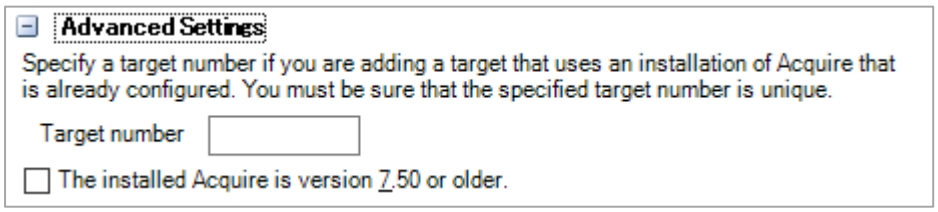
・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

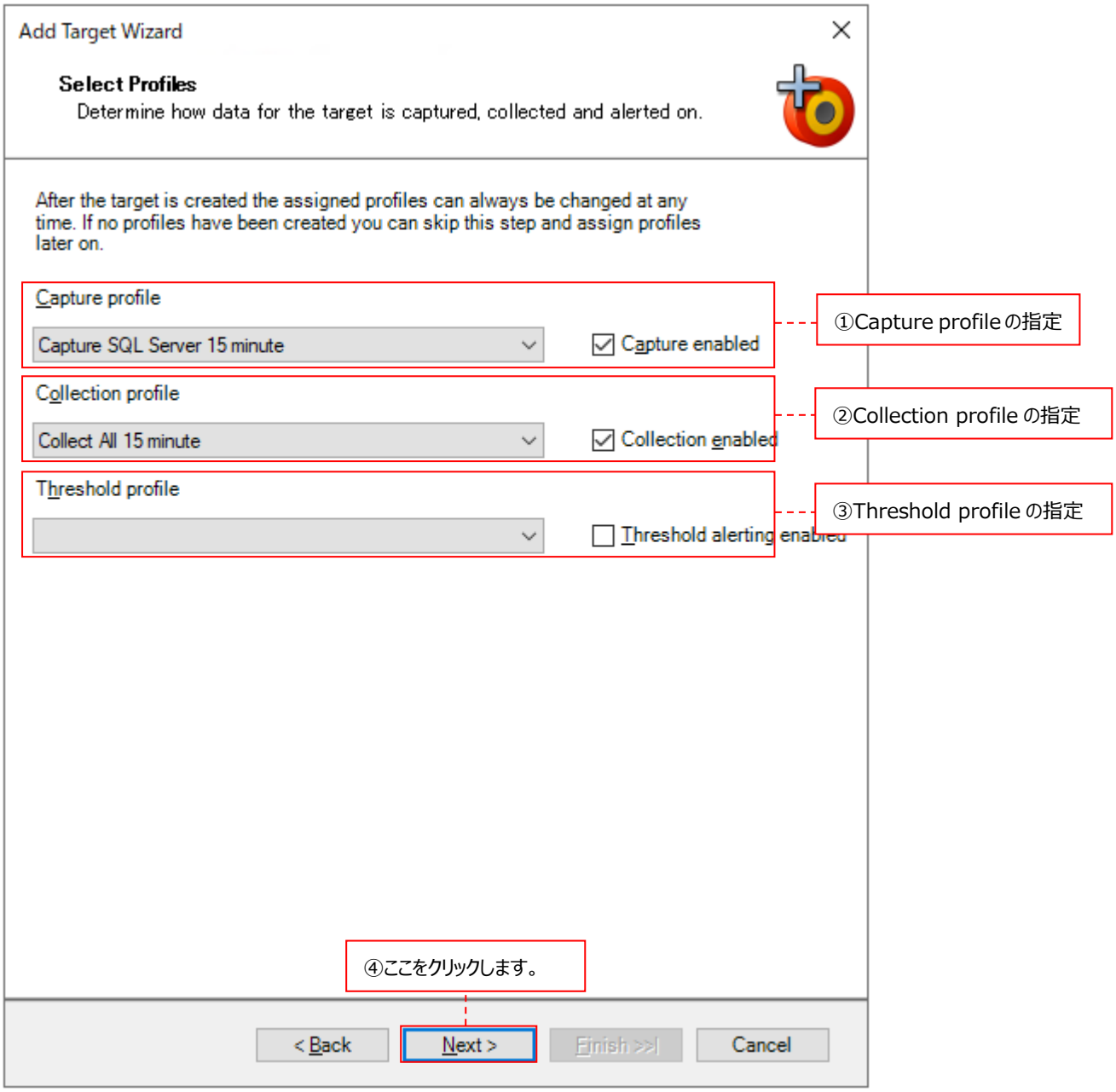
注意！
通常 Identification ダイアログ下部にある Advanced Settings を設定する必要はありません。
Advanced Settings を展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号である Target number を入力する欄が表示されますが、入力しなくても System Manager が自動採番します。もし、入力する場合は整数 8 桁までの番号を指定してください。



設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(4)プロファイルの指定

Select Profiles ダイアログでは、事前に設定したデータ収集設定（Capture profile）とデータ転送設定（Collection profile）を指定します。



①Capture profile　：「4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定」にあるデフォルトの Capture profile、または、「4.5.5. SQL Server データ用 Capture Profile の設定」で設定した Capture profile をプルダウンから選択します。
Capture enabled にチェックを付けていると、実際にデータ収集を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ収集を行いません。

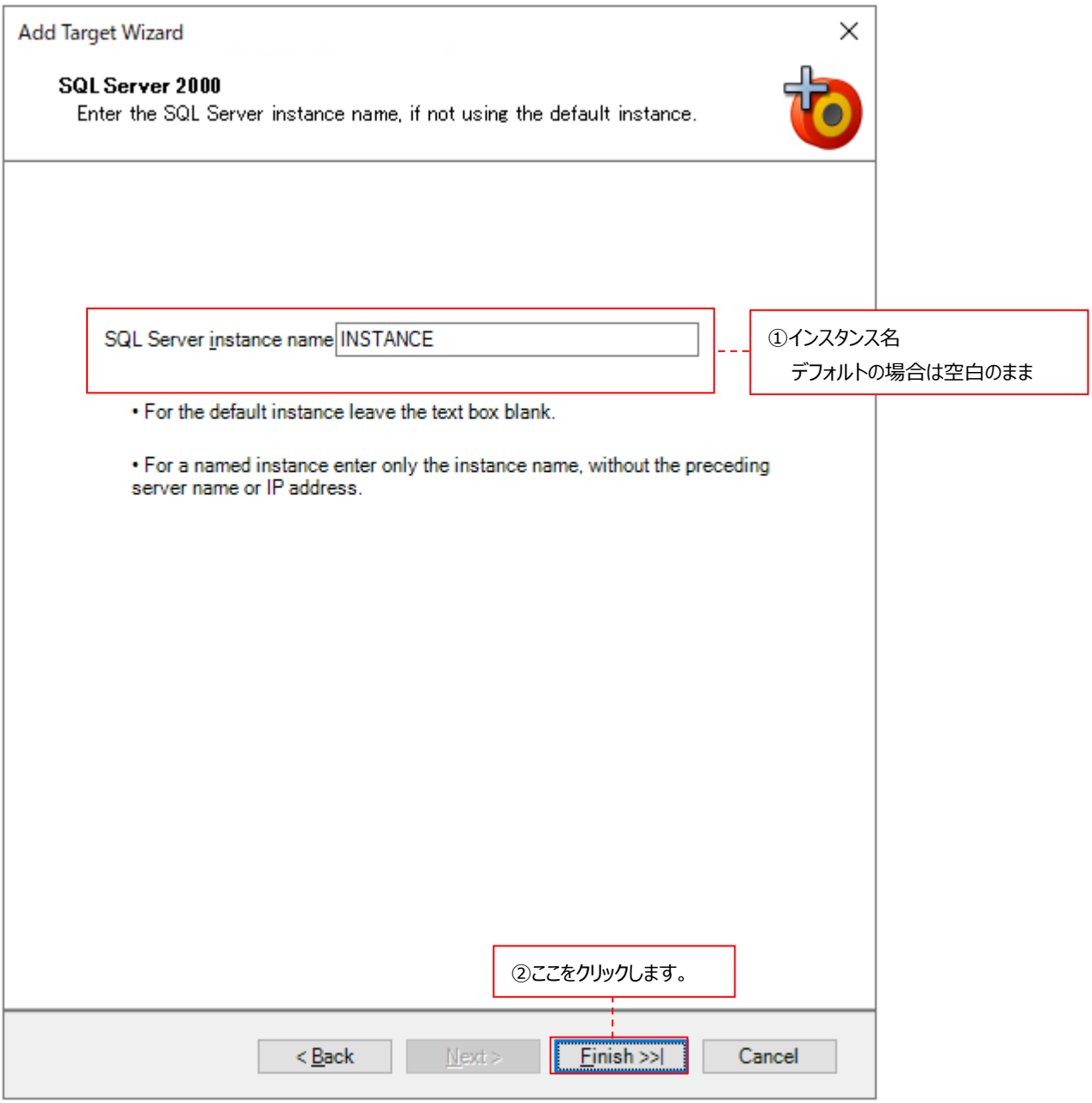
②Collection profile　：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile、または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

③Threshold profile ：「4.7.1.しきい値設定の作成」で設定した Threshold profile をプルダウンから選択します。Threshold alerting enabled にチェックを付けていると、実際に Threshold alerting を行うターゲットになります。チェックを外すと Threshold alerting を行いません。

指定が終了したら、[Next>]ボタンをクリックします④。

(5)SQL Server インスタンス情報の指定

SQL Server 2000 ダイアログでは、SQL Server のインスタンス名を入力します。



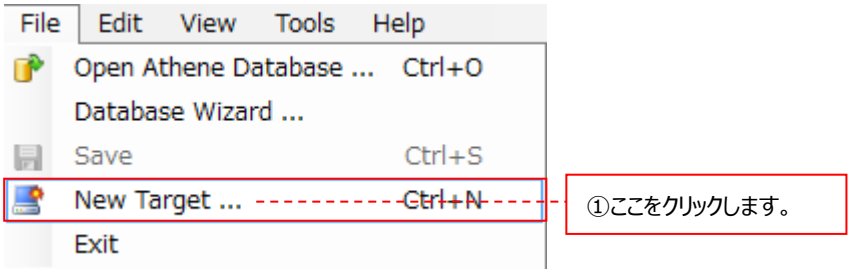
①SQL Server instance name　：SQL Server インスタンス名を指定します。デフォルトの場合は空白のままにしておきます。

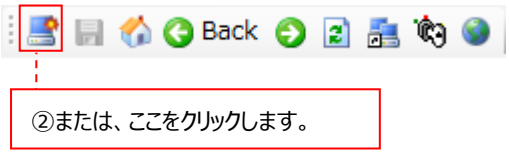
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします②。
この後、「4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

4.8.3.3. Symfoware データベース用ターゲット作成手順

(1)ターゲット作成ウィザードの起動

System Manager メイン画面左上のメニュー「File→New Target...」をクリックします①。
または、[Add Target]ボタンをクリックします②。

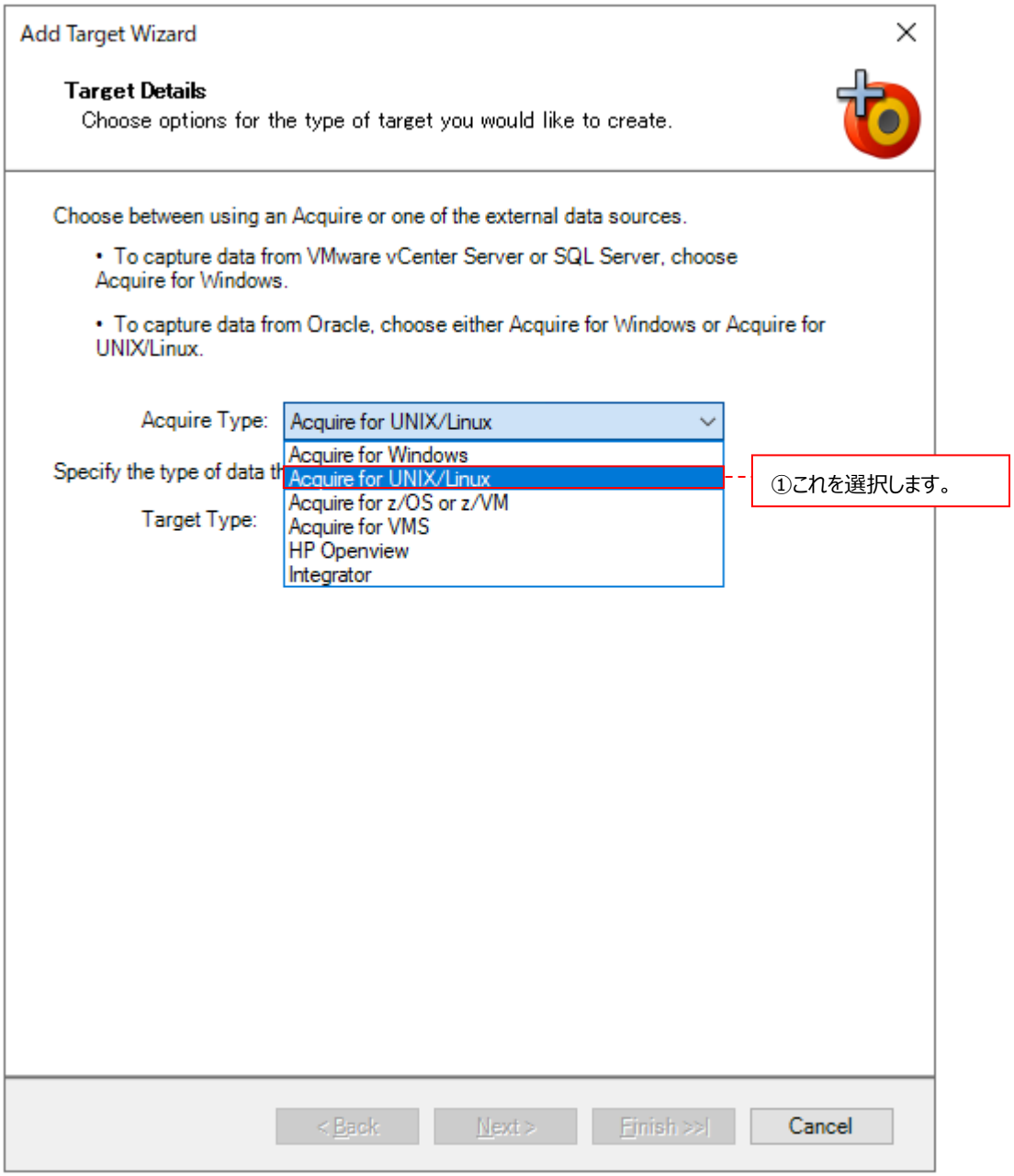




(2)Acquire タイプの選択

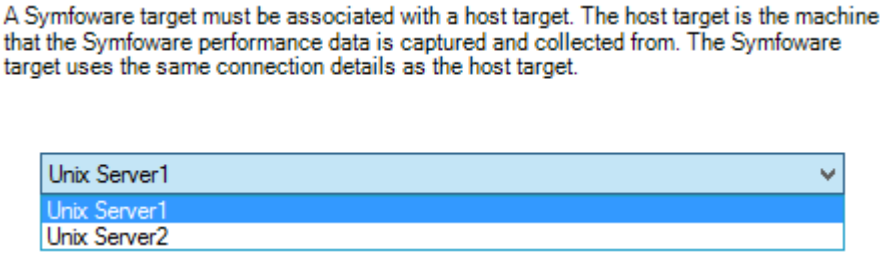
Target Details ダイアログでは、ターゲットが Unix／Linux システムか、Windows システムかを選択します。

●Unix／Linux システムの場合
Acquire Type のプルダウンから Acquire for UNIX/Linux を選択します①。



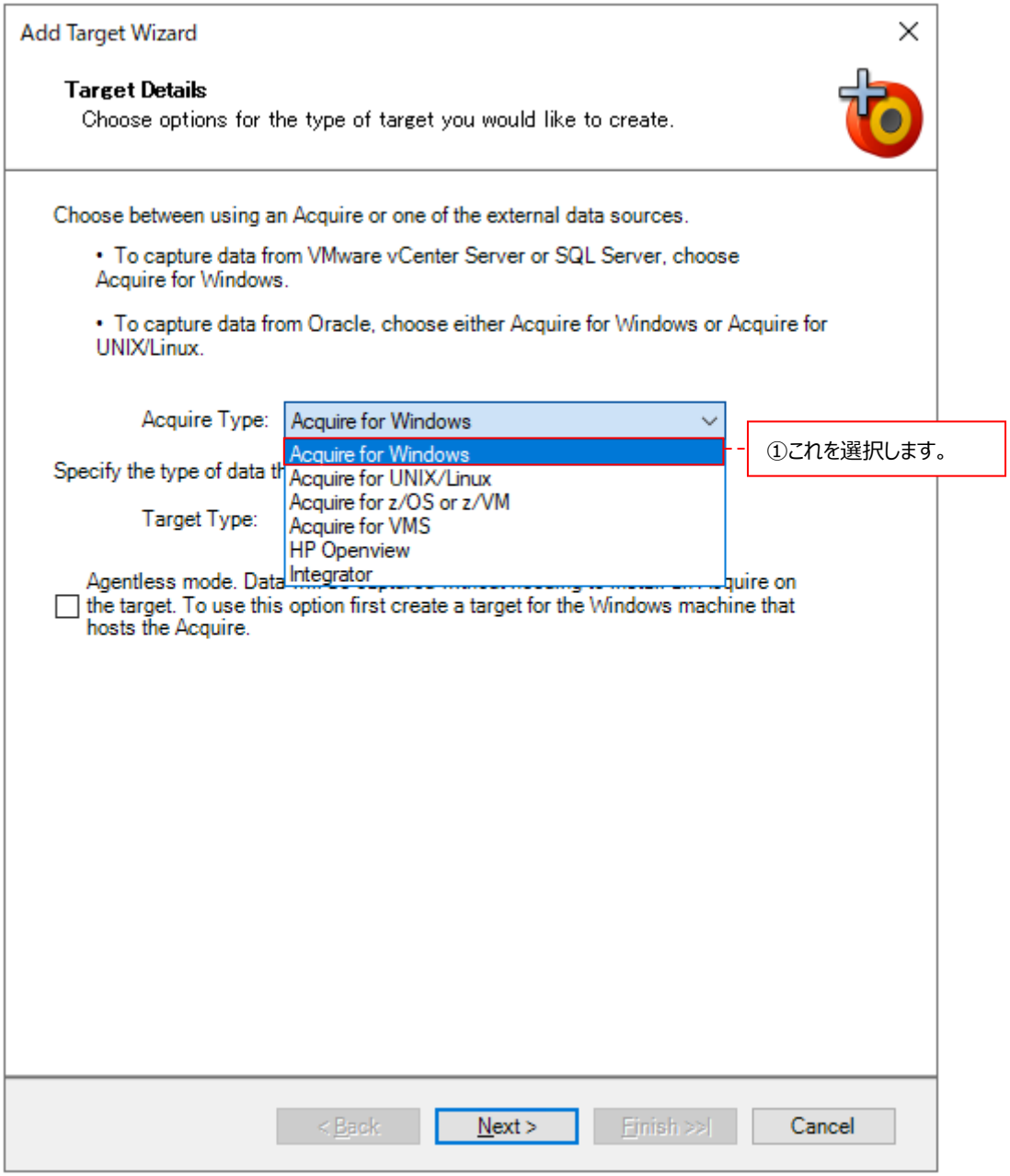
Target Type のプルダウンから Symfoware を選択します②。

Symfoware を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する Symfoware ターゲットが稼働している Unix／Linux システムのターゲットを選択する（関連付ける）プルダウンが表示されます。

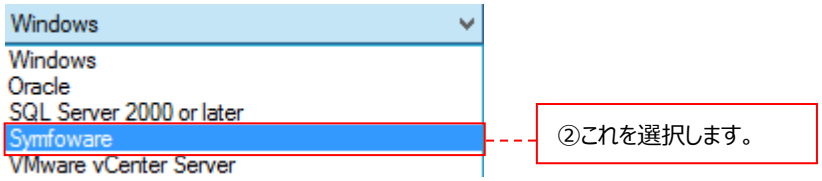


適切な Unix／Linux システムのターゲットを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

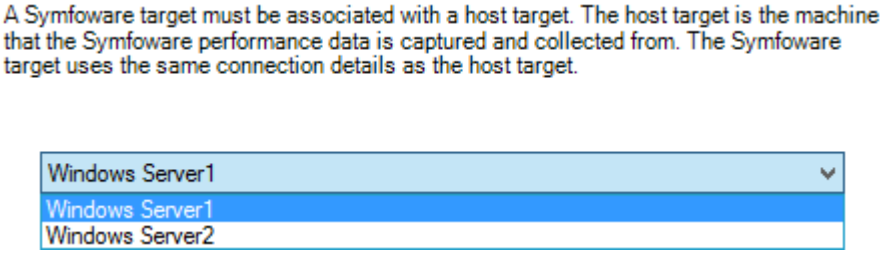
●Windows システムの場合
Acquire Type のプルダウンから Acquire for Windows を選択します①。



Target Type のプルダウンから Symfoware を選択します②。



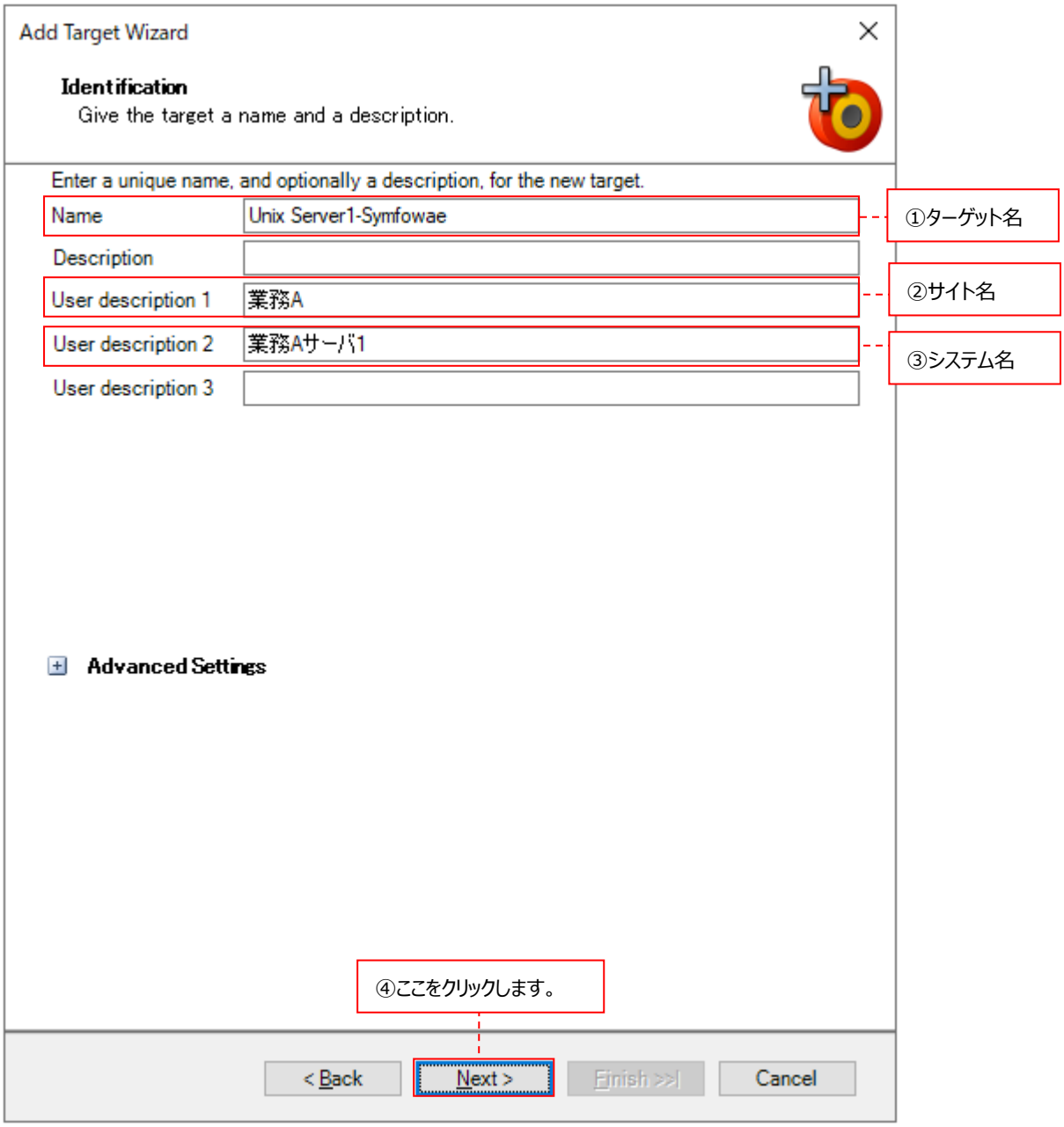
Symfoware を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する Symfoware ターゲットが稼働している Windows システムのターゲットを選択する（関連付ける）プルダウンが表示されます。



適切な Windows システムのターゲットを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

(3)ターゲット名の指定

Identification ダイアログでは、ターゲットの名前を指定します。



①Name　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
どのシステムターゲットに所属する Symfoware ターゲットなのかが分かり易い名前を指定することをお勧めします。

②User description 1　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

③User description 2　：「(2) Acquire タイプの選択」で関連付けたシステムターゲットと同じシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

Name／User description 1／User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。
CS シリーズにて使用するサイト名／システム名については、別紙マニュアル「スタートガイド 4.2. サイト／システム」を参照してください。

DescriptionとUser description 3は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角31文字以内、半角63文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③…, ⅠⅡⅢ…, ㈱ﾄﾞﾙﾊﾟｰｾﾝﾄ…等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windowsのファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

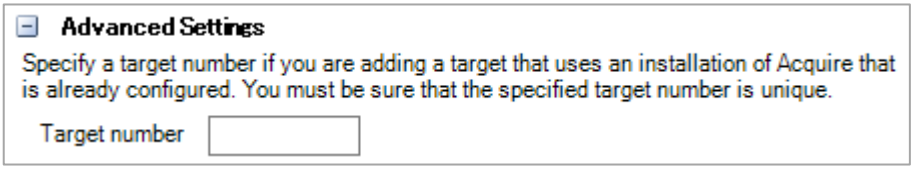
・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CSシリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CSシリーズの出力結果ファイル名の一部
・CSシリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CSシリーズの出力結果をWebコンテンツ化してWebブラウザで閲覧する際のパス名
・CSシリーズの出力結果をWebコンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

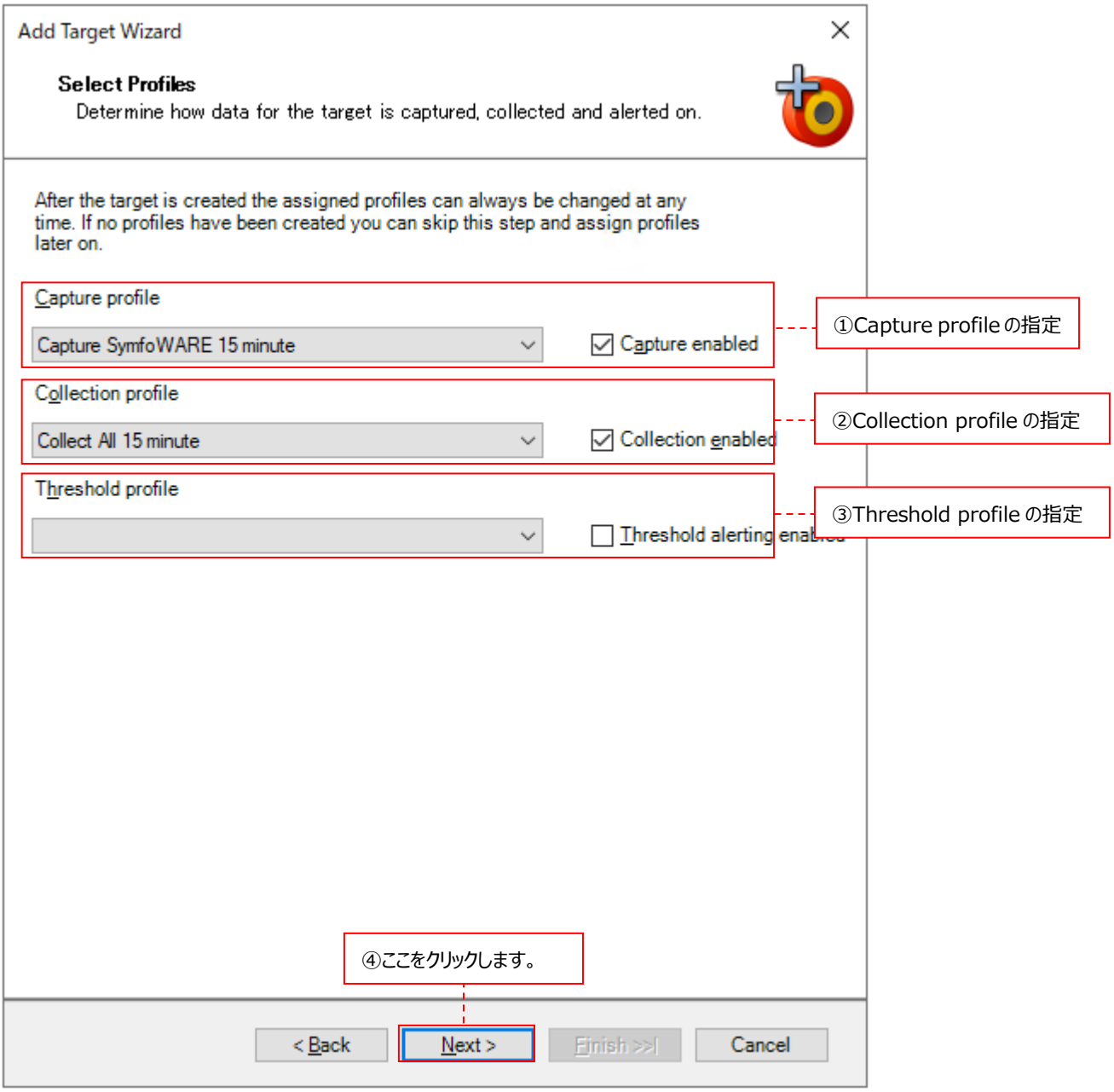
注意！
通常Identificationダイアログ下部にあるAdvanced Settingsを設定する必要はありません。
Advanced Settingsを展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号であるTarget numberを入力する欄が表示されますが、入力しなくてもSystem Managerが自動採番します。もし、入力する場合は整数8桁までの番号を指定してください。



設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(4)プロファイルの指定

Select Profiles ダイアログでは、事前に設定したデータ収集設定（Capture profile）とデータ転送設定（Collection profile）を指定します。



①Capture profile　：「4.5.1. デフォルトで用意されているデータ収集設定」にあるデフォルトの Capture profile、または、「4.5.6. Symfoware データ用 Capture Profile の設定」で設定した Capture profile をプルダウンから選択します。
Capture enabled にチェックを付けていると、実際にデータ収集を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ収集を行いません。

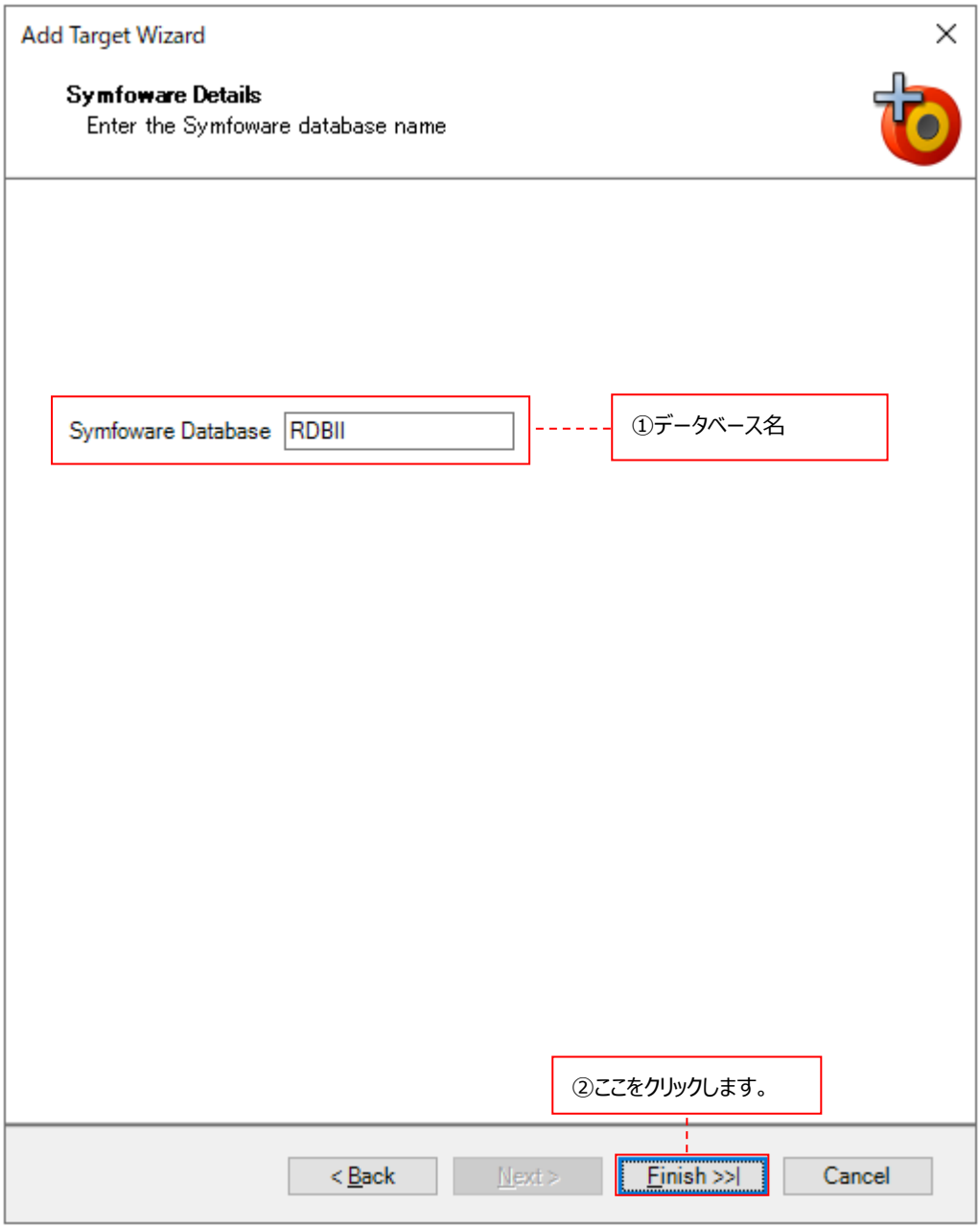
②Collection profile　：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile、または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

③Threshold profile　　：「4.7.1.しきい値設定の作成」で設定した Threshold profile をプルダウンから選択します。
Threshold alerting enabled にチェックを付けていると、実際に Threshold alerting を行うターゲットになります。チェックを外すと Threshold alerting を行いません。

指定が終了したら、[Next>]ボタンをクリックします④。

(5)Symfoware データベース情報の指定

Symfoware Details ダイアログでは、Symfoware データベース名を入力します。



①Symfoware Database　　：Symfoware データベース名を指定します。

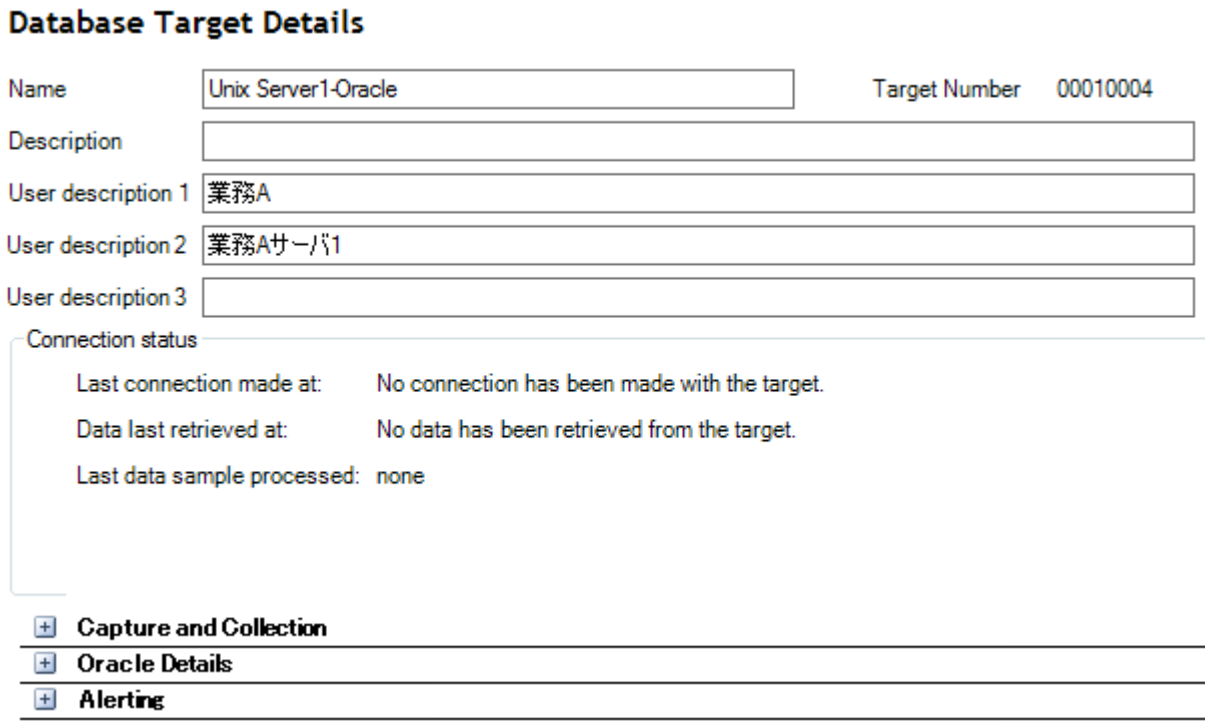
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします②。
この後、「4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

4.8.4. データベース用ターゲットの詳細設定

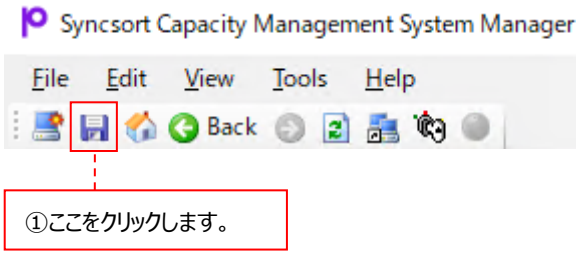
ここでは、「4.8.3. データベース用ターゲットの作成」で作成したターゲットに関して、より詳細な設定を行います。
System Manager メイン画面右上の Display パネルに、ターゲットの詳細情報パネルが表示されます。
以下の順序で各パネルの内容を確認し、必要ならば設定を変更します。

(1)Database Target Details
(2)Capture and Collection
(3)Oracle Details／SQL Server Details／Symfoware Details
(4)Aerting

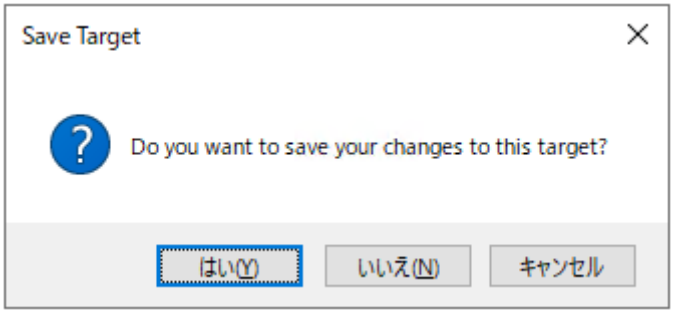
●詳細情報パネル



なお、詳細情報パネルで何かしらの変更を行った場合、System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、変更を保存してください。

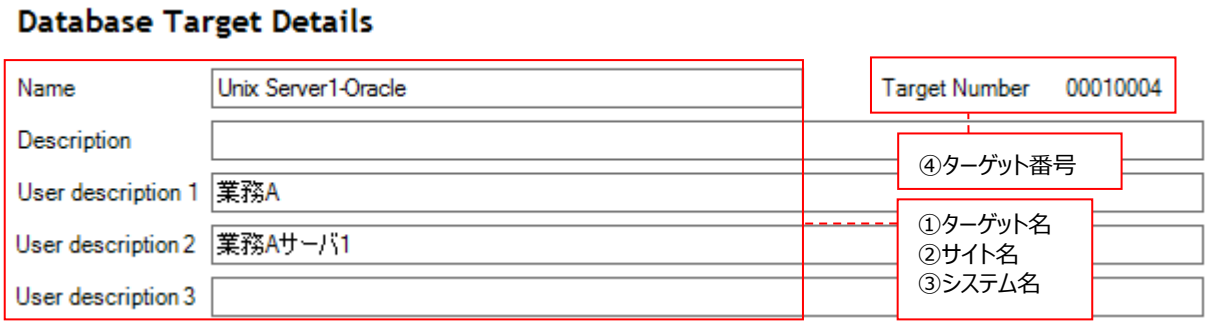


または、詳細情報パネルで何かしらの変更を行って別の操作に進む時に、以下のウィンドウが表示される場合があります。変更内容を保存するならば、[はい(Y)]ボタンをクリックしてください。



(1)Database Target Details

ターゲット名／サイト名／システム名に誤りが無いかどうかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①Name　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。どのシステムターゲットに所属するデータベースターゲットなのかが分かり易い名前を指定することをお勧めします。

②User description 1　：関連付けたシステムターゲットと同じサイト名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

③User description 2　：関連付けたシステムターゲットと同じシステム名を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

④Target Number　：Windows システム上の Oracle ターゲットで、かつ、自動採番された Target Number（ターゲット番号）であるならば、Acquire プログラムの設定を行う必要があります。詳細は別紙マニュアル「Acquire 使用者の手引き ～Windows 編～ 12.20 2.4. Oracle データ収集やエージェントレスデータ収集に関する情報の設定」を参照してください。

Name／User description 1／User description 2 に使用できない文字がありますので、下記の注意を参照してください。

Description と User description 3 は使用しません。

注意！
サイト／システム名は全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で指定してください。また、下記の文字は使用できません。

・半角片仮名
・¥ / : , ; * ? " <> | .
・#
・機種依存文字（①②③…, ⅠⅡⅢ…, ㈱ﾄﾞﾙ ﾊﾟｰｾﾝﾄ…等）
・JIS X 0201、JIS X 0208（Shift_JIS、CP932、Windows-31J）に含まれない文字、および、外字

また、Windows のファイル名、ディレクトリ名として使用できない予約名についてもサイト／システム名として使用できません。

・CON、PRN、AUX、CLOCK$、NUL、COM0～COM9、LPT0～LPT9

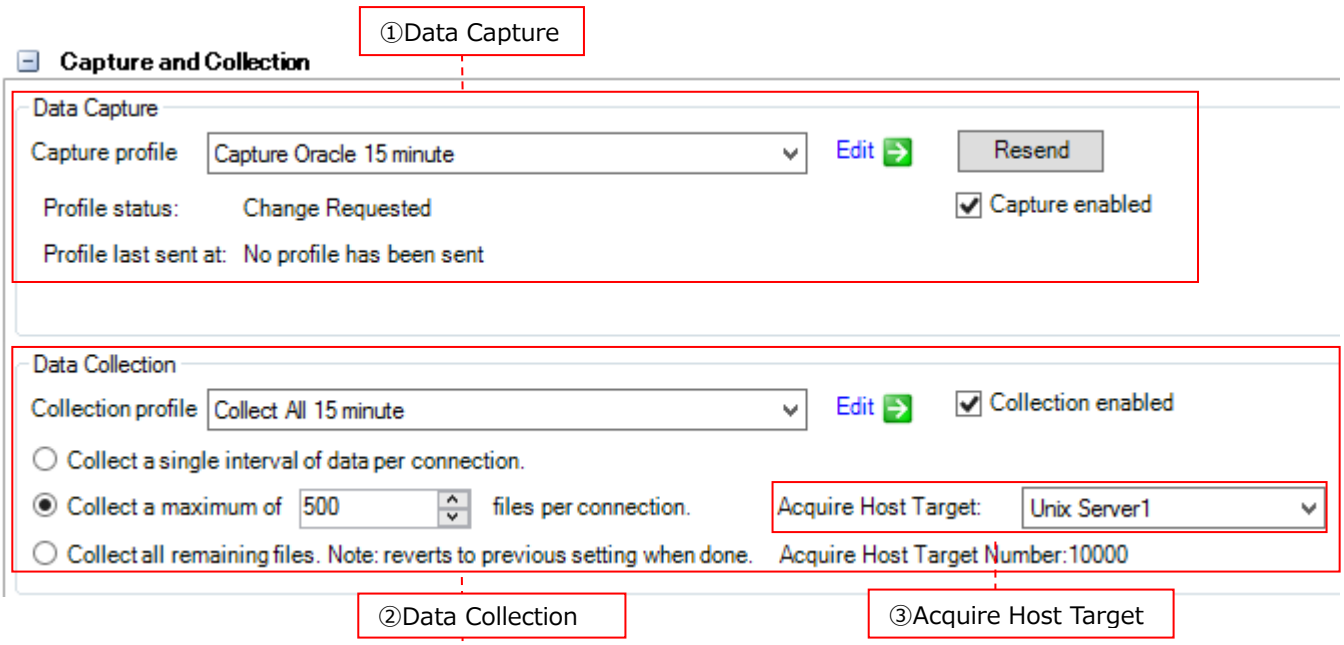
サイト／システム名は製品間の内部キーやデータの保存フォルダ名等に使用します。
容易に変更できませんので、将来的に変更する可能性が発生する名前は避けてください。

サイト／システム名として、推奨できない例
・次期システム
・本番システム
・テスト期間中システム

サイト／システム名が反映される箇所
・CS シリーズの入力データファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果ファイル名の一部
・CS シリーズの出力結果ファイルを格納するフォルダ名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して Web ブラウザで閲覧する際のパス名
・CS シリーズの出力結果を Web コンテンツ化して専用データベースに登録する際の識別名

(2)Capture and Collection

Capture Profile／Collection Profile に誤りが無いかを確認します。また、1 回のデータ転送でどれだけファイルを転送するのかを指定します。必要ならば各項目を変更してください。



①Data Capture

Capture profile　：正しい Capture profile が割り当てられていることを確認します。

Capture enabled　：チェックが付いていると実際にサーバ上でデータ収集を行います。

Resend　：Capture profile の設定内容を対象サーバに送信します。対象サーバ上で Acquire は、送信されてきた Capture profile の設定内容を基にデータを収集します。

②Data Collection

Collection profile　：正しい Collection profile が割り当てられていることを確認します。

Collection enabled　：チェックが付いていると実際にサーバ上の Acquire が収集したデータファイルの転送を行います。

Collect a maximum of xxx　：ここにチェックが付いていることを確認し、1 回の転送動作で転送する最大のファイル数を指定します。デフォルトは 50 ですが、入力欄に「500」を指定してください。

注意！

(1)「Collect a single interval of data per conection」は使用できませんので、チェックしないでください。

(2)「Collect all remaining files. Note: reverts to previous setting when done.」にチェックを付けると、次回の転送動作時に対象システム上に残っているすべてのファイルを転送します。その転送動作が終了すると、チェックを付ける前の設定状態に戻ります。このオプションは通常使用しません。

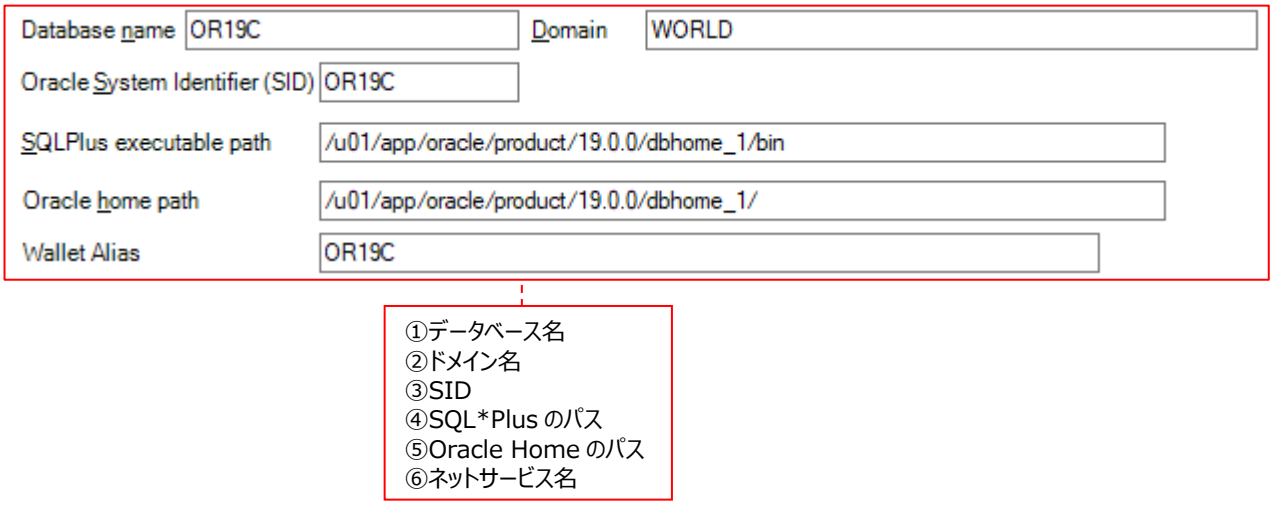
③Acquire Host Target　：関連付けたシステムターゲットが表示されていることを確認します。

(3)Oracle Details／SQL Server Details／Symfoware Details

各データベースの設定情報に誤りが無いかどうかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

【Oracle Details】

●Unix／Linux システムの場合



①Database name　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降 非 CDB 構成>
Oracle データベース名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB>
CDB 名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB>
PDB 名

②Domain　：Oracle ドメイン名を指定します。

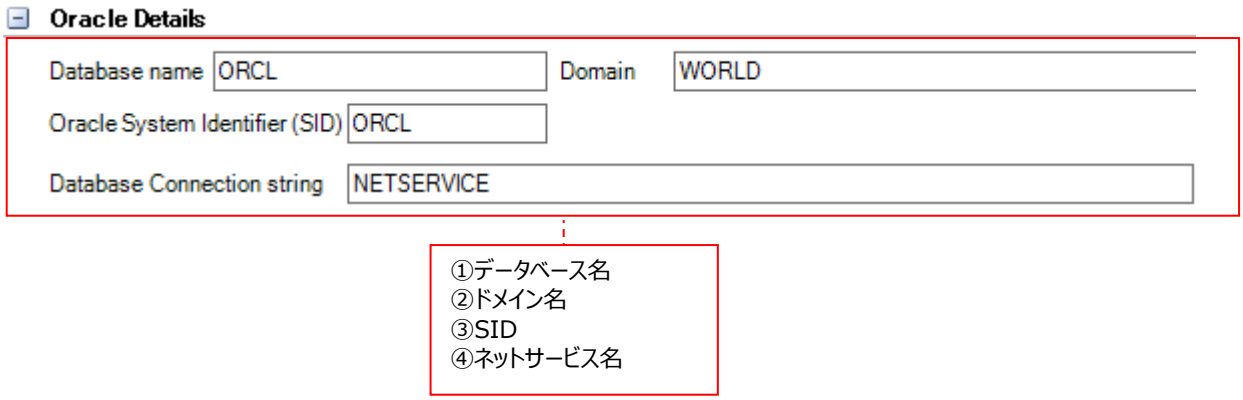
③Oracle System Identifier (SID)　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降 非 CDB 構成>
Oracle_SID
<Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB>
CDB 名（Oracle_SID）
<Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB>
PDB 名

④SQLPlus executable path　：SQL*Plus プログラムのあるパスを指定します。

⑤Oracle home path　：Oracle Home のパスを指定します。

⑥Wallet Alias　：対象サーバに導入した Acquire のバージョンに応じて適切な情報を登録してください。
<Acquire10.30 以降の場合>
Acquire 導入時に設定したネットサービス名
<Acquire9.30 以前の場合>
空のままにしておきます。

●Windows システムの場合



①Database name　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降 非 CDB 構成>
Oracle データベース名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB>
CDB 名
<Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB>
PDB 名

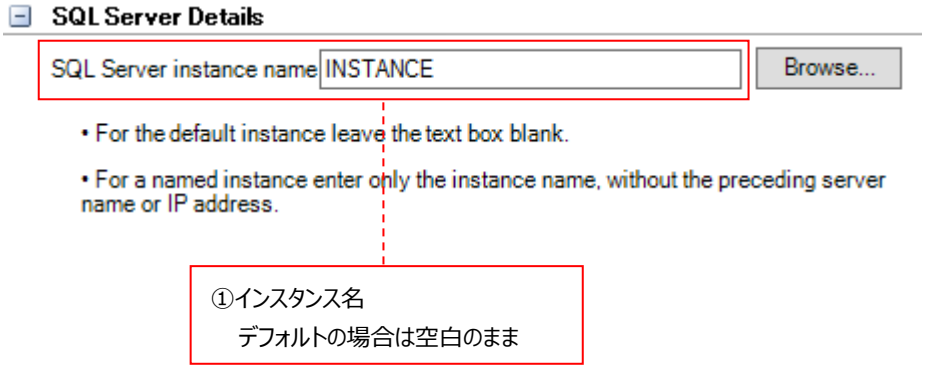
②Domain　：Oracle ドメイン名を指定します。

③Oracle System Identifier (SID)　：対象 Oracle のバージョン/構成に応じて適切な情報を登録してください。
<Oracle12c 以降 非 CDB 構成>
Oracle_SID
<Oracle12c 以降 CDB 構成-CDB>
CDB 名（Oracle_SID）
<Oracle12c 以降 CDB 構成-PDB>
PDB 名

④Database Connection string　：対象データベースに接続可能なネットサービス名を指定します。

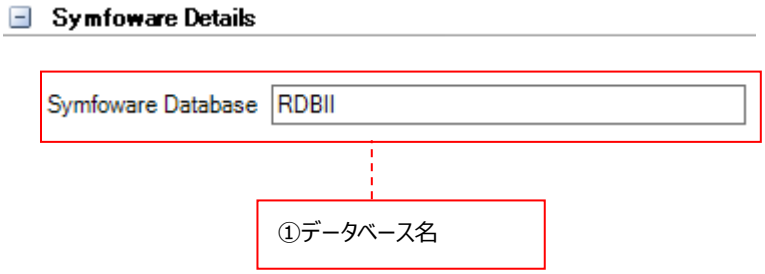
注意！
Acquire 導入サーバで稼働している対象 Oracle データベースのみに接続できるネットサービス名を使用してください。RAC 環境等で利用されている、複数の接続先データベースが定義されていて、動的に接続先のデータベースが変わってしまうタイプのネットサービス名は使用できません。

【SQL Server Details】



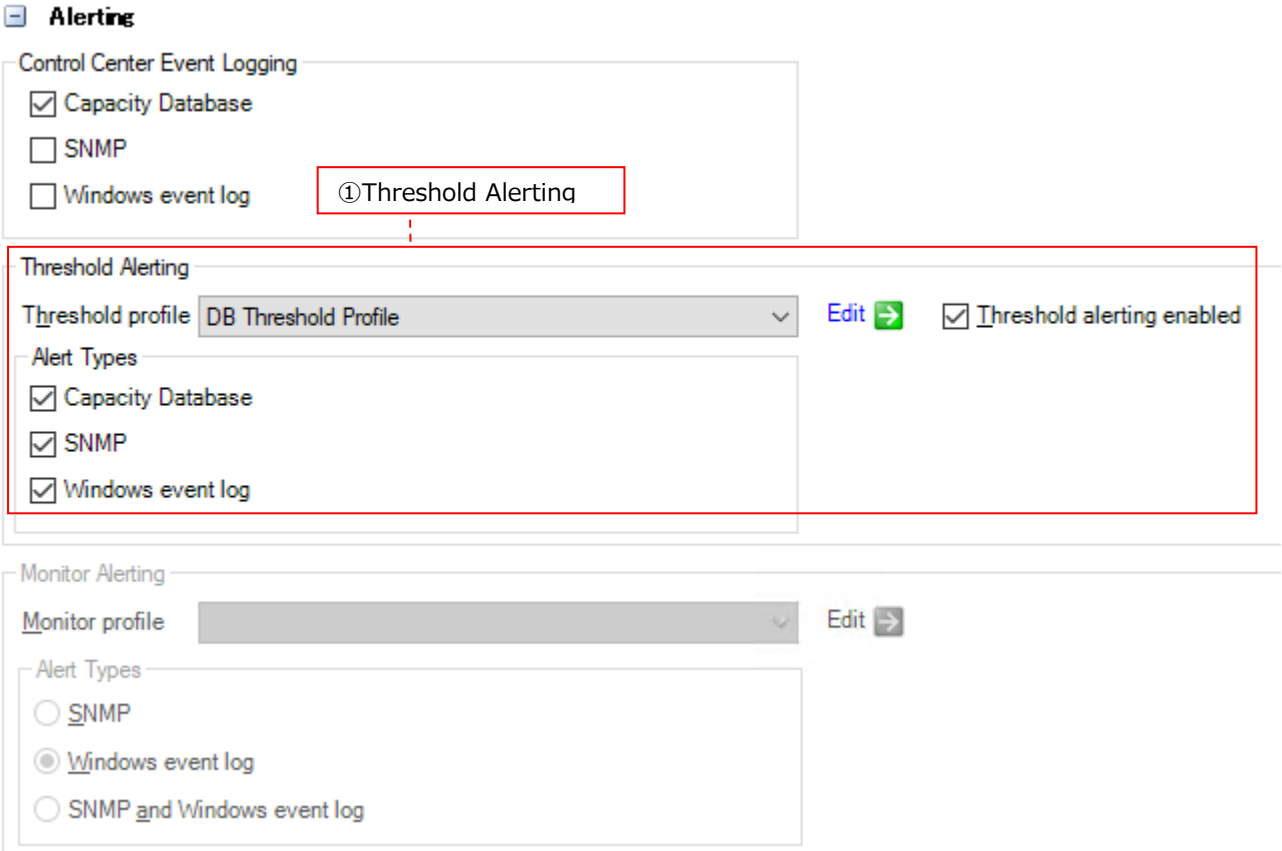
①SQL Server instance name　：SQL Server インスタンス名を指定します。デフォルトの場合は空白のままにしておきます。

【Symfoware Details】



①　Symfoware Database　：Symfoware データベース名を指定します。

(4)Alerting



しきい値検知機能 Threshold alerting を使用する場合、Threshold Profile に誤りが無いかを確認します。
また、必要ならばしきい値検知の通知方法を変更してください。

①Threshold Alerting

Threshold profile	：正しい Capture profile が割り当てられていることを確認します。
Alert Types	：しきい値検知の通知方法を指定してください。
Capacity Database	：PDB に出力します。
SNMP	：SNMP メッセージを送信します。
Windows event log	：イベントログに出力します。

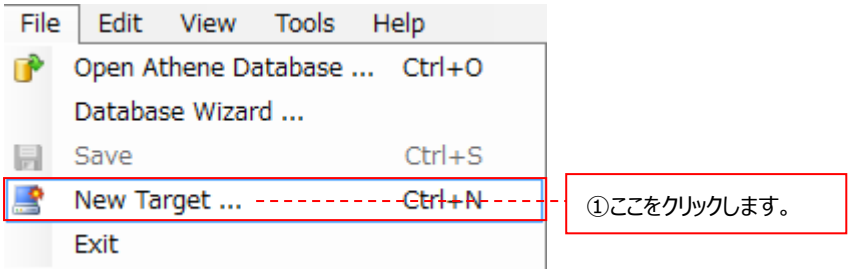
注意！
Control Center Event Logging／Monitor Alerting は使用できません。

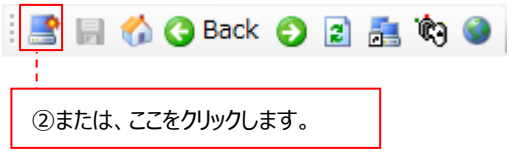
この後、「4.9. データ収集／転送／変換処理の開始」に進んでください。

4.8.5. Integrator データ用ターゲット作成手順

(1)ターゲット作成ウィザードの起動

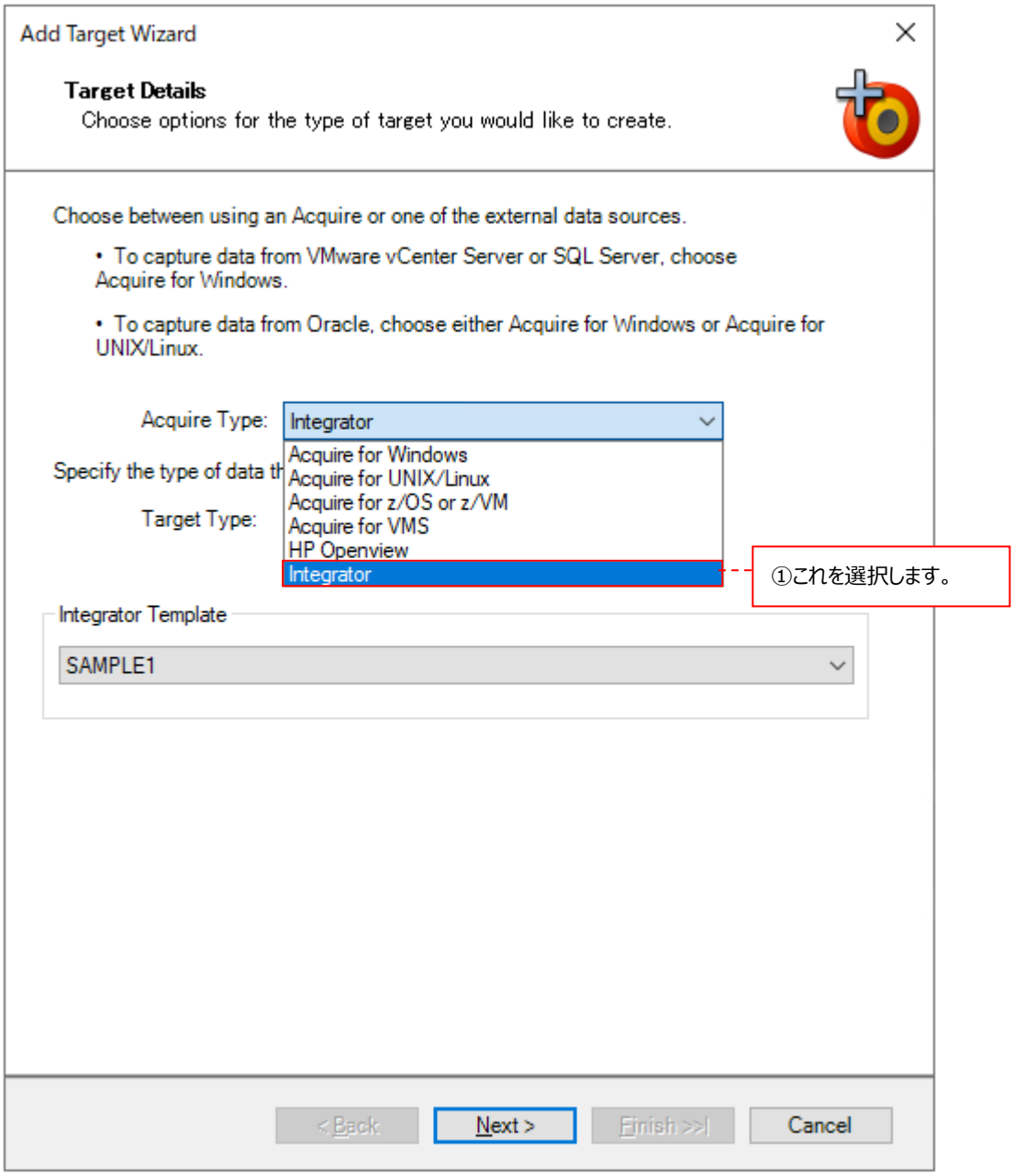
System Manager メイン画面左上のメニュー「File→New Target...」をクリックします①。
または、[Add Target]ボタンをクリックします②。



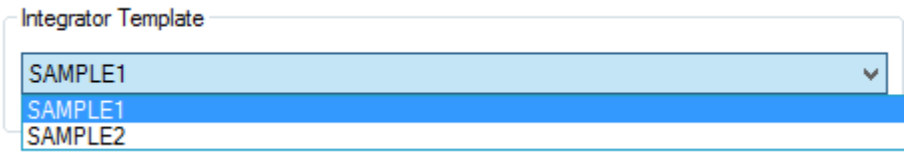


(2)Acquire タイプの選択

Acquire Type のプルダウンから Integrator を選択します①。



Integrator を選択すると、ダイアログの下部に、これから定義する Integrator ターゲットに割り当てる Integrator テンプレートを選択するプルダウンが表示されます。

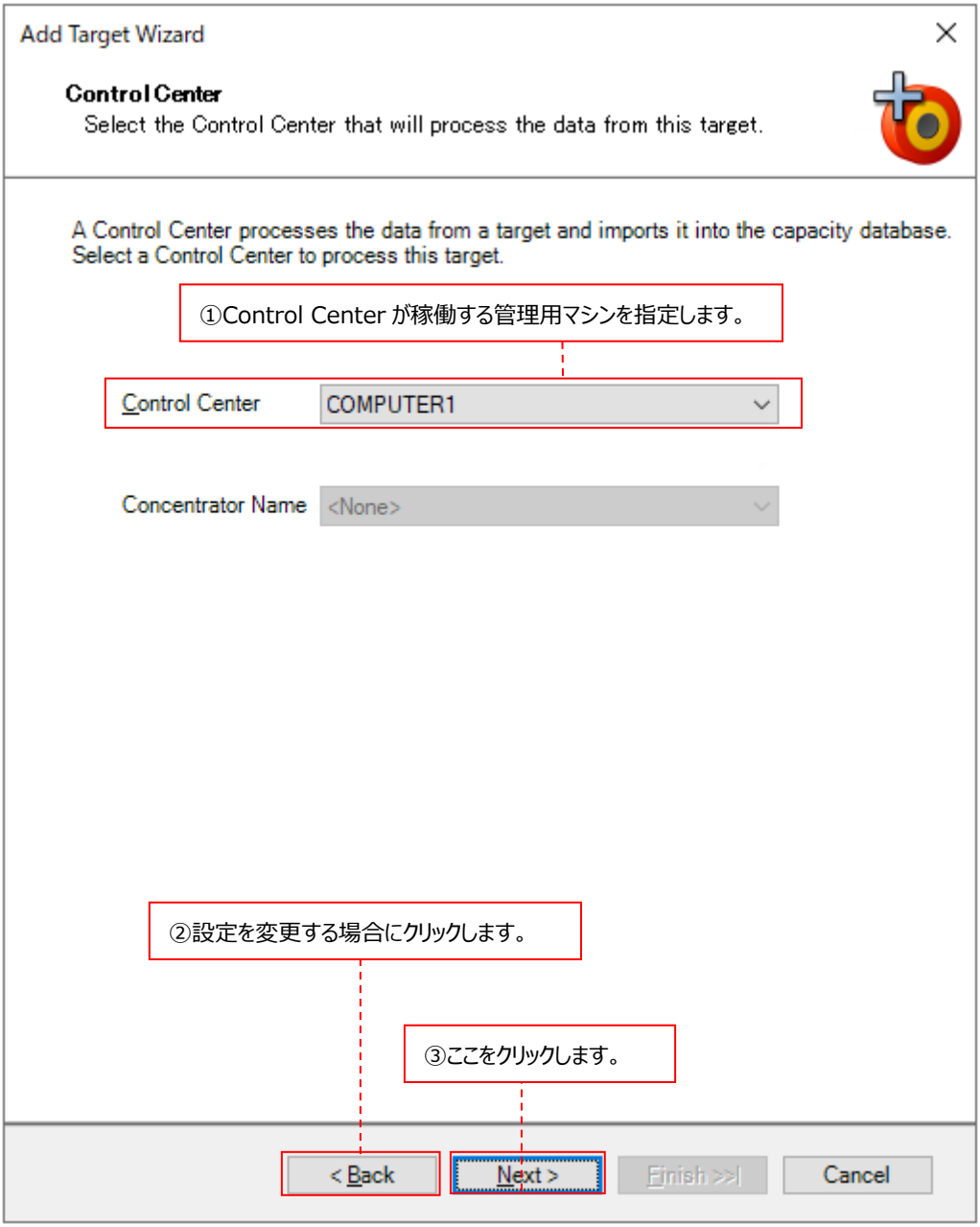


注意！
Integrator テンプレートを後から変更することはできません。

適切な Integrator テンプレートを選択します。設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします。

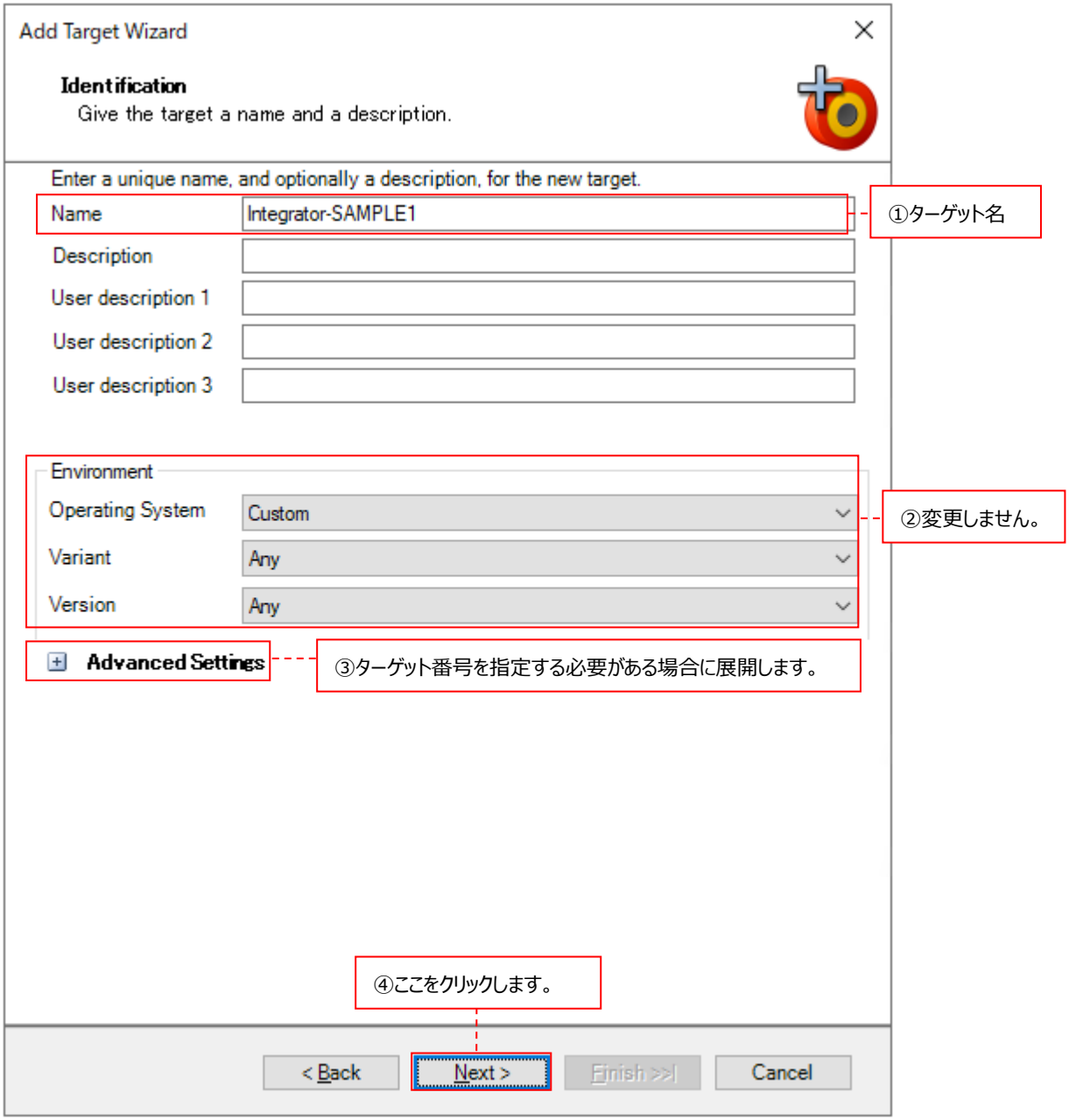
(3)Control Center の指定

Control Center ダイアログでは、Control Center が稼働する管理用マシンを指定します①。
設定を変更する場合は[<Back]をクリックして前画面に戻ります②。
指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします③。



(4)ターゲット名の指定

Identification ダイアログでは、ターゲットの名前を指定します。

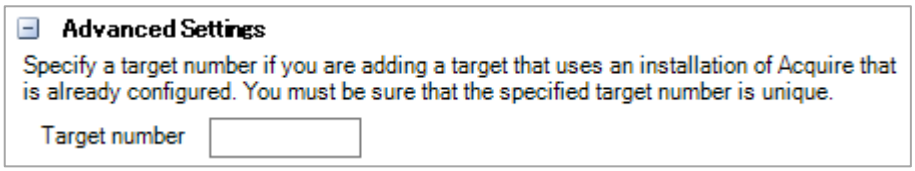


①Name　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。

②Environment　：変更しません。

③Advanced Settings　：「＋」をクリックすると、Advanced Settings の設定欄が開きます。
通常 Advanced Settings を設定する必要はありません。Advanced Settings を展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号である Target number を入力する欄が表示されますが、入力しなくても System Manager が 00010000 からの整数を自動採番します。もし、入力する場合は 00000001 から 99999999 までの整数 8 桁の番号を指定してください。

注意！
通常 Identification ダイアログ下部にある Advanced Settings を設定する必要はありません。
Advanced Settings を展開すると、ターゲットを識別するための一意な番号である Target number（ターゲット番号）を入力する欄が表示されますが、入力しなくても System Manager が自動採番します。

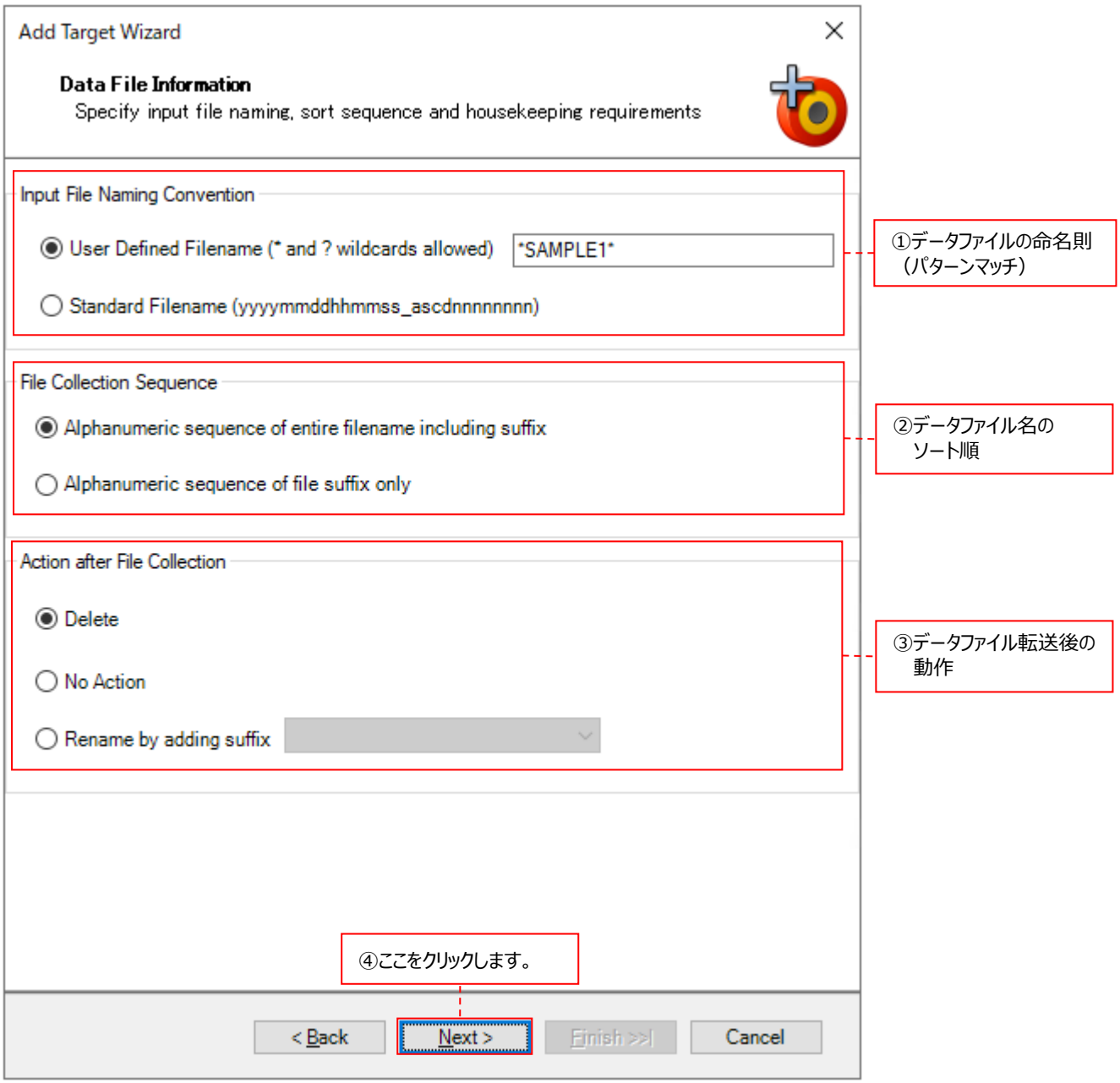


Description／User description 1／User description 2／User description 3 は使用しません。

設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(5)データファイル関連情報の指定

Data File Information ダイアログでは、Integrator ターゲットの処理対象となるデータファイルの命名則／データファイル名のソート順／データファイル転送後の動作について指定します。



①Input File Naming Convention　：User Defined Filename を選択し、Integrator ターゲットの入力となるデータファイルの命名則（パターンマッチ）を指定します。*と?のワイルドカードが使用可能です。
Standard Filename は使用できません。

②File Collection Sequence　：データファイル名のソート順を指定します。
・Alphanumeric sequence of entire filename including suffix
拡張子も含めてファイル名が完全なアルファベット数字順
・Alphanumeric sequence of file suffix only
拡張子のみアルファベット数字順

③Action after File Collection　：Control Center がデータファイルを転送した後の動作を指定します。

・Delete
転送元のデータファイルを削除します。

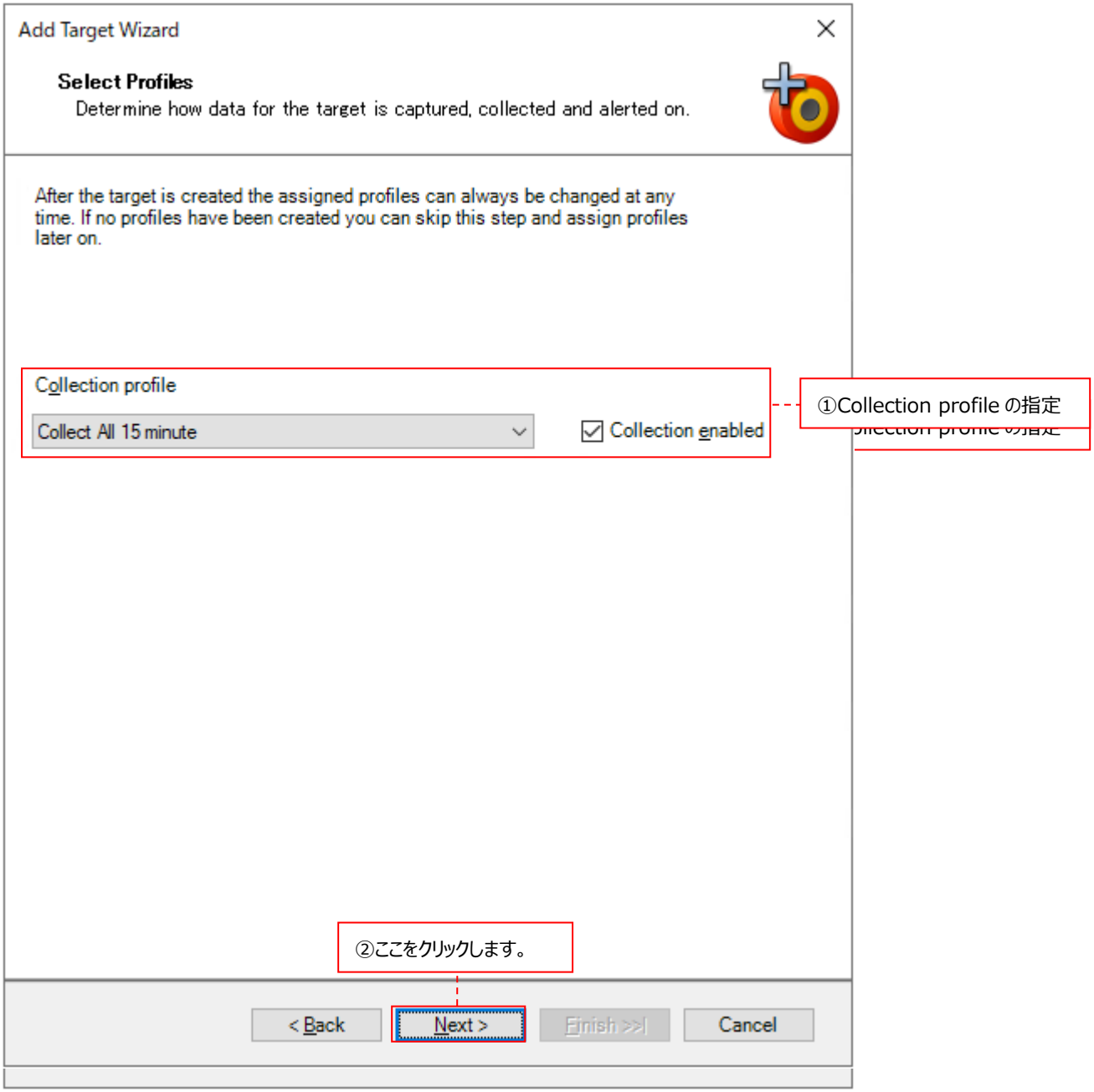
・No Action
何もしません。

・Rename by adding suffix
転送元のデータファイルの拡張子に、プルダウンから選択した文字列を付加してリネームします。
- .Collected
- .$
- .@

設定が終了したら、[Next >]ボタンをクリックします④。

(6)プロファイルの指定

Select Profiles ダイアログでは、事前に設定したデータ転送設定（Collection profile）を指定します。



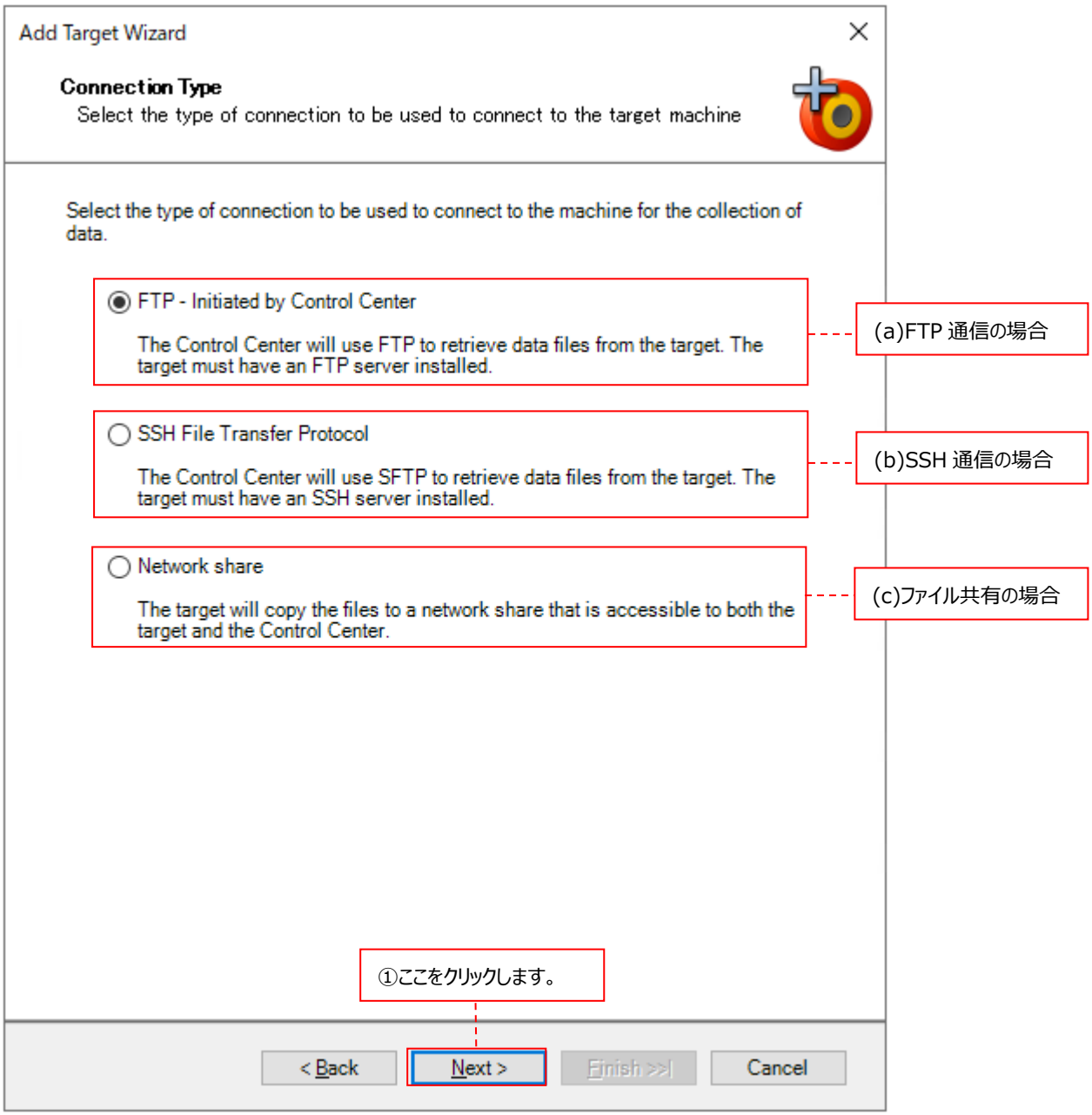
①Collection profile ：「4.6.1. デフォルトで用意されているデータ転送設定」にあるデフォルトの Collection profile、または、「4.6.2. データ転送設定の作成」で設定した Collection profile をプルダウンから選択します。
Collection enabled にチェックを付けていると、実際にデータ転送を行うターゲットになります。チェックを外すとデータ転送を行いません。

指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします②。

(7)接続方法の指定

Connection Type ダイアログでは、ターゲットとの通信方法を指定します。ターゲットの OS 種類に応じて適切な通信方法を選択して設定を進めてください。

Unix／Linux システム　：FTP 通信または SFTP 通信
Windows システム　：FTP 通信または SFTP 通信またはファイル共有

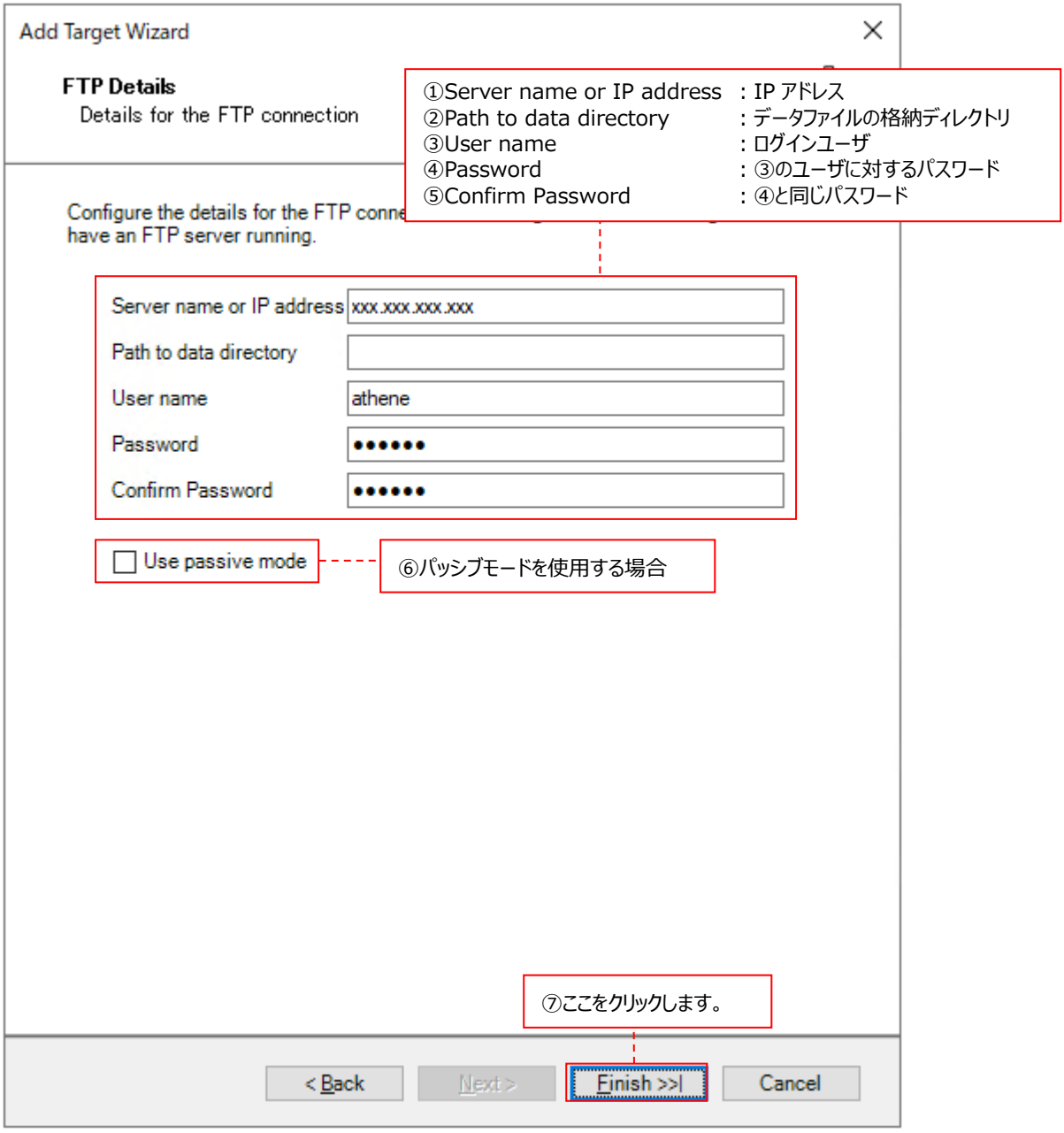


(a)FTP - Initiated by Control Center　：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(b)SSH File Transfer Protocol　：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。
(c)Network share　：ファイル共有を使用する場合にチェックします。

指定が終了したら、[Next]ボタンをクリックします①。
指定した(a)(b)(c)いずれかのダイアログに進んでください。

(a)FTP 通信

FTP 通信を使用する場合、FTP Details ダイアログに IP アドレスと Integrator ターゲットにログインするためのユーザ／パスワードを入力します。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
(例)172.16.14.233:5555

②Path to data directory : データファイルの格納ディレクトリを指定します（FTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス）。

③User name : ログインユーザを入力します。

④Password : ③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。

⑤Confirm Password : ④と同じパスワードを入力します。

⑥Use passive mode : パッシブモードを使用する場合にチェックします。

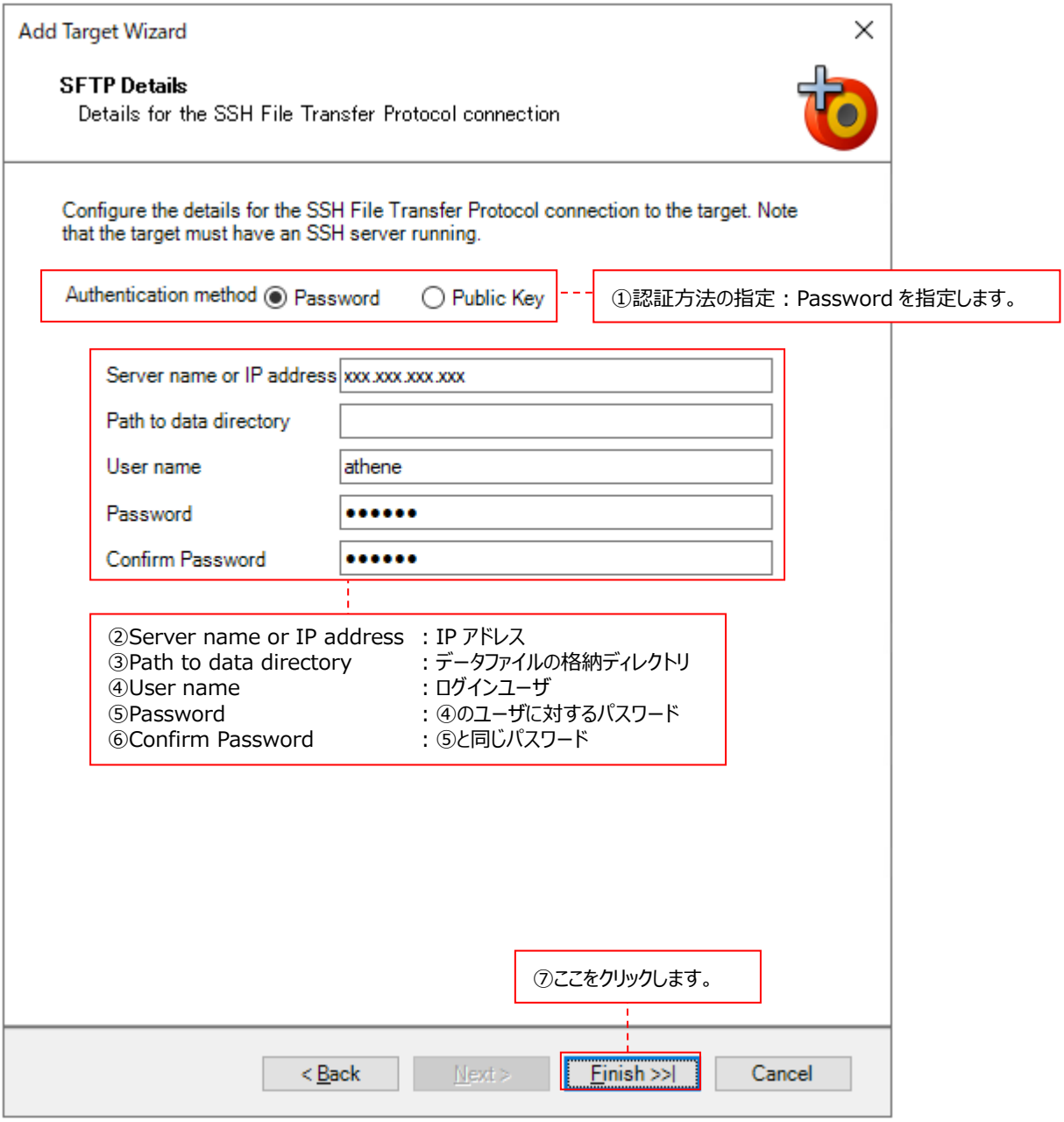
設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。

「4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

(b)SFTP 通信

SFTP 通信を使用する場合、SFTP Details ダイアログにて認証方法（パスワード／公開鍵）を指定します。また、IP アドレスと Integrator ターゲットにログインするためのユーザおよび認証方法に対応したパスワード／パスフレーズを入力します。

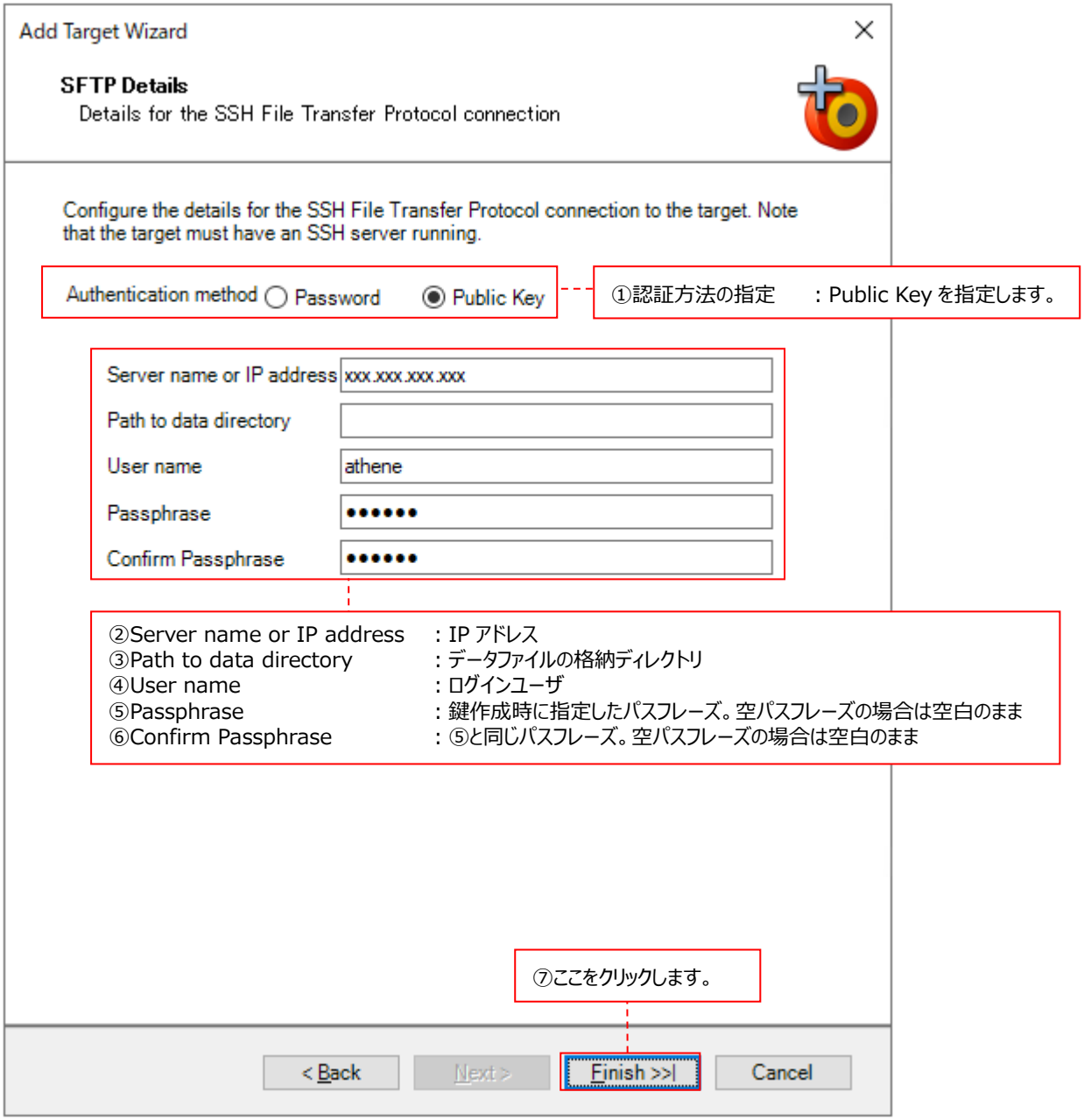
<パスワード認証の場合>



①Authentication method ：認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します。
③Path to data directory ：データファイルの格納ディレクトリを指定します（SFTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス。ホームディレクトリにデータファイルが存在する場合は空白）。
④User name ：ログインユーザを入力します。
⑤Password ：④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm Password ：⑤と同じパスワードを入力します。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

＜公開鍵認証の場合＞

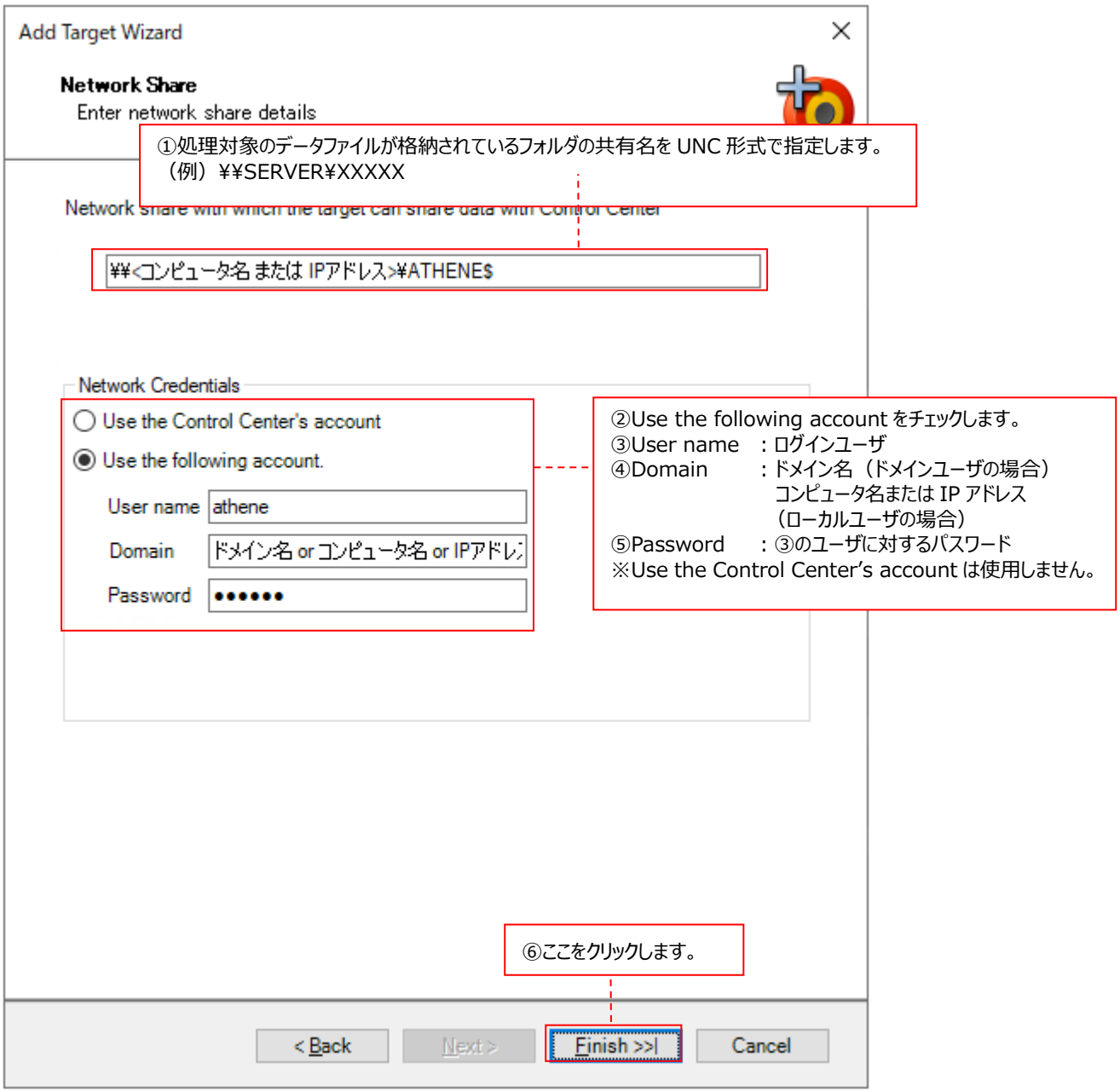


①Authentication method ：認証方法として Public Key を指定します。
②Server name or IP address ：IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。
③Path to data directory ：データファイルの格納ディレクトリを指定します（SFTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス。ホームディレクトリにデータファイルが存在する場合は空白）。
④User name ：ログインユーザを入力します。
⑤Passphrase ：鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。
⑥Confirm Passphrase ：⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑦。
「4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

(c)ファイル共有

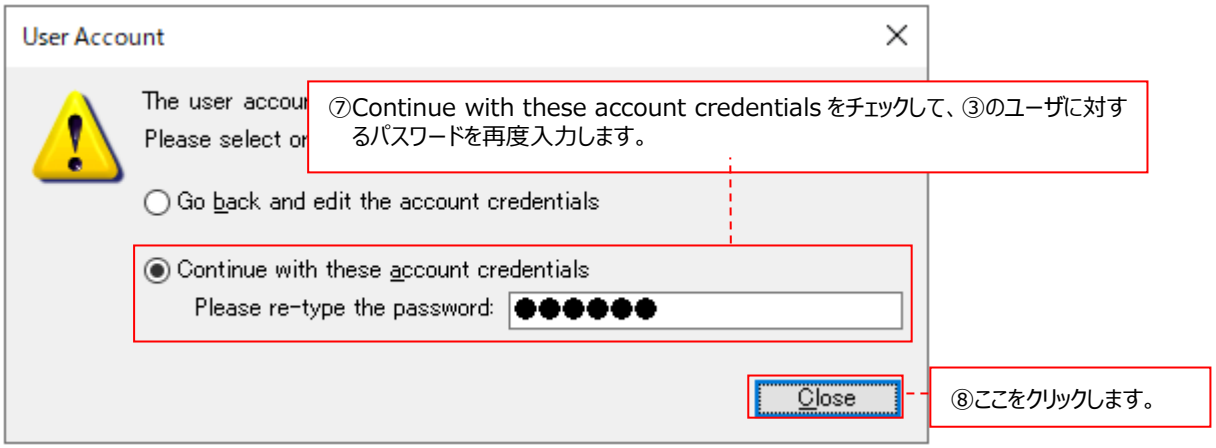
ファイル共有を使用する場合、Network Share ダイアログに処理対象のデータファイルが格納されているフォルダの共有名と、Integrator ターゲットにログインするためのユーザ／パスワードを入力します。



①処理対象のデータファイルが格納されているフォルダに対する共有名を UNC 形式で指定します。
（例）¥¥SERVER¥XXXXX
②Use the following account をチェックします。
③User name ：ログインユーザを入力します。
④Domain ：ターゲットの Windows システムにドメインユーザでログインする場合は、ドメイン名を入力します。
ターゲットの Windows システムにローカルユーザでログインする場合は、コンピュータ名または IP アドレスを入力します。
⑤Password ：③のユーザに対するパスワードを入力します。

設定が終了したら、[Finish >>|]ボタンをクリックします⑥。

注意！
Use the Control Center's account は使用できません。



⑦Continue with these account credentials をチェックして、③のユーザに対するパスワードを再度入力します。
入力が終了したら、[Close]ボタンをクリックします⑧。

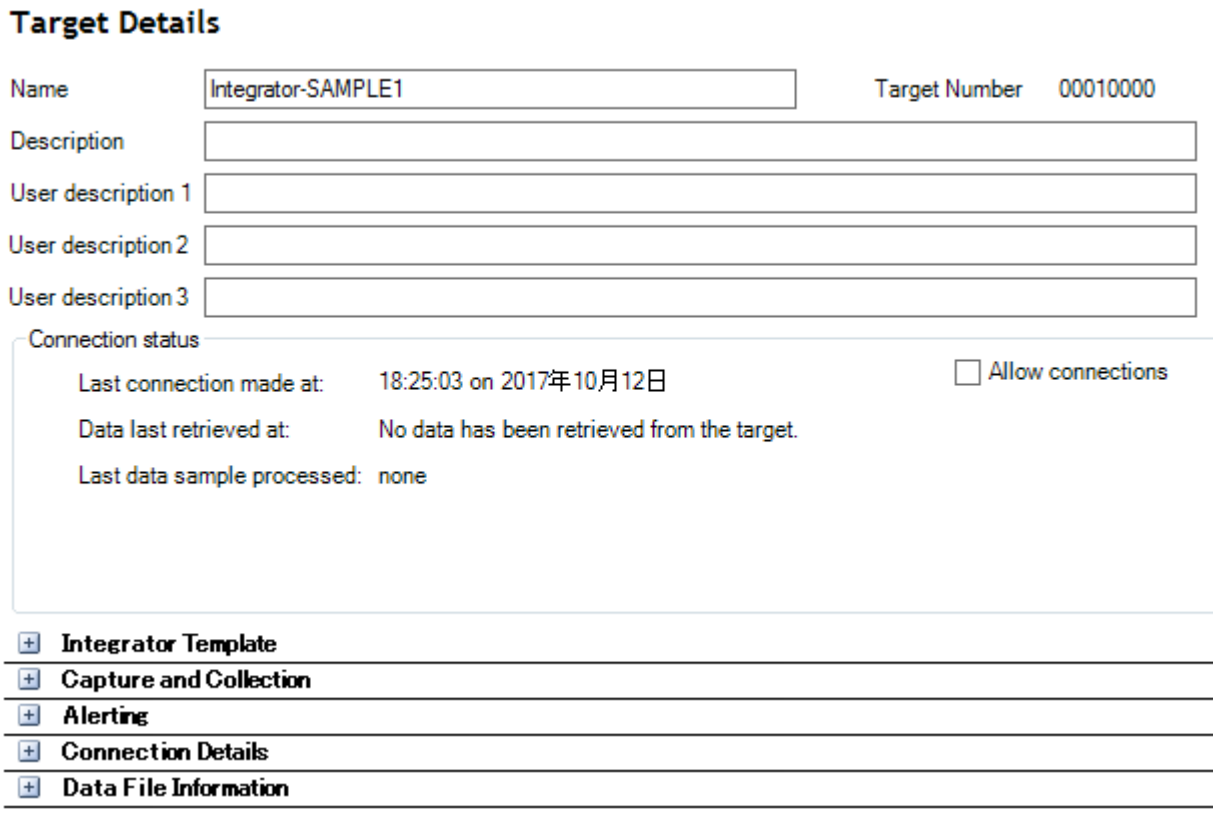
「4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定」に進んでください。

4.8.6. Integrator データ用ターゲットの詳細設定

ここでは、「4.8.7. Integrator データ用ターゲットの作成」で作成したターゲットに関して、より詳細な設定を行います。
System Manager メイン画面右上の Display パネルに、ターゲットの詳細情報パネルが表示されます。
以下の順序で各パネルの内容を確認し、必要ならば設定を変更します。

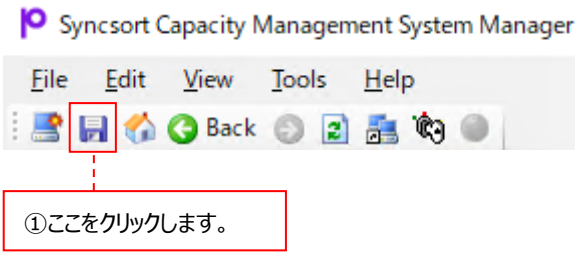
(1)Target Details
(2)Integrator Template
(3)Capture and Collection
(4)Connection Details
(5)Data File Information

●詳細情報パネル

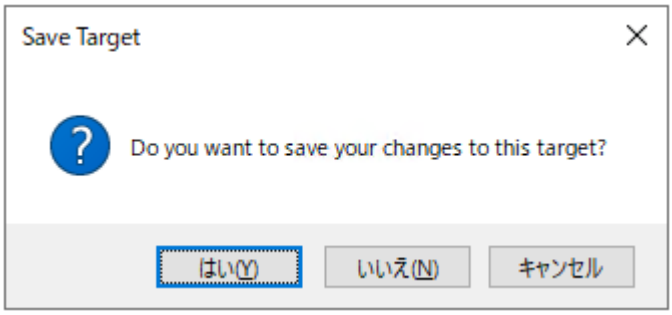


注意！
以下のパネルの内容を変更する必要はありません。
・Alerting

なお、詳細情報パネルで何かしらの変更を行った場合、System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、変更を保存してください。

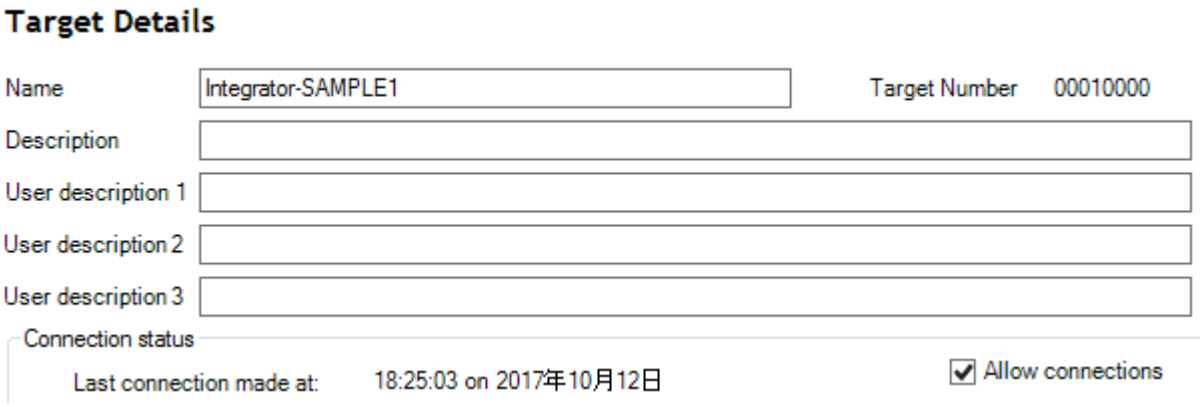


または、詳細情報パネルで何かしらの変更を行って別の操作に進む時に、以下のウィンドウが表示される場合があります。変更内容を保存するならば、[はい(Y)]ボタンをクリックしてください。



(1)Target Details

ターゲット名に誤りが無いかどうかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

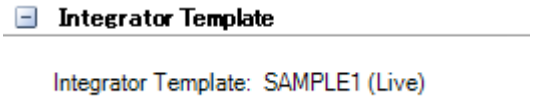


①Name　　：ターゲットを識別する一意の名前を全角 31 文字以内、半角 63 文字以内で記述します。
②Allow connections　：チェックが付いていると実際にターゲットと通信します。通信しない場合は、チェックを外します。

Description／User description 1／User description 2／User description 3 は使用しません。

(2)Integrator Template

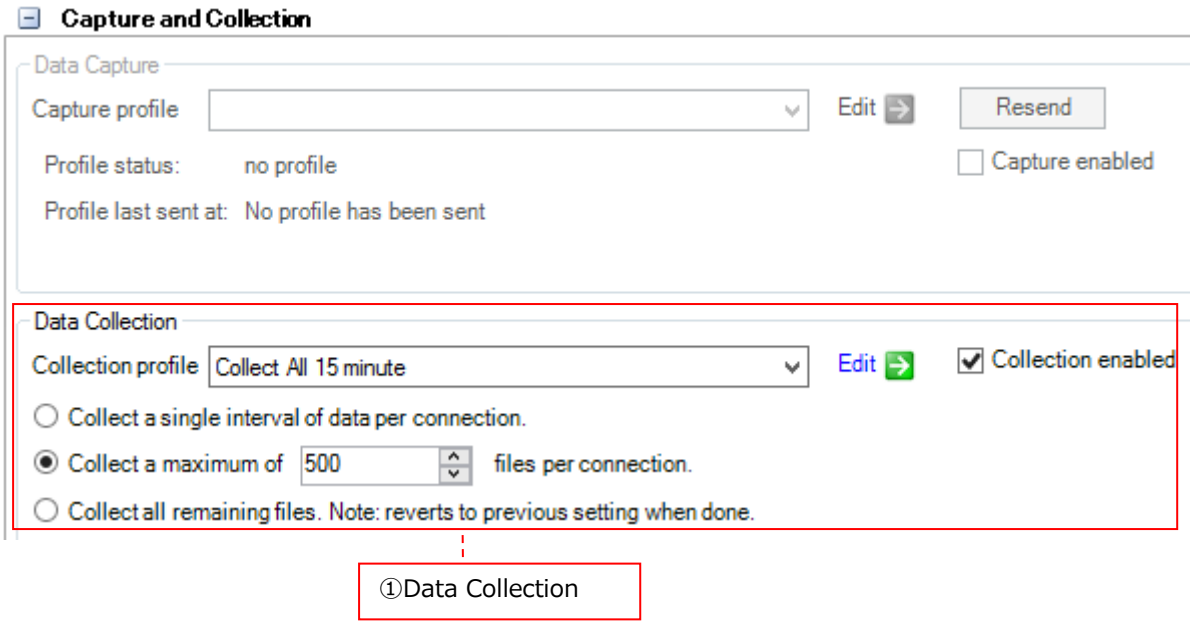
ターゲットに割り当てられている Integrator テンプレートを確認します。



注意！
Integrator テンプレートを後から変更することはできません。

(3)Capture and Collection

Collection Profile に誤りが無いかを確認します。また、1 回のデータ転送でどれだけファイルを転送するのかを指定します。必要ならば各項目を変更してください。



①Data Collection

Collection profile	：正しい Collection profile が割り当てられていることを確認します。
Collection enabled	：チェックが付いていると実際にサーバ上の Integrator ターゲット用のデータファイルの転送を行います。
Collect a maximum of xxx	：ここにチェックが付いていることを確認し、1 回の転送動作で転送する最大のファイル数を指定します。デフォルトは 50 ですが、入力欄に「500」を指定してください。

注意！

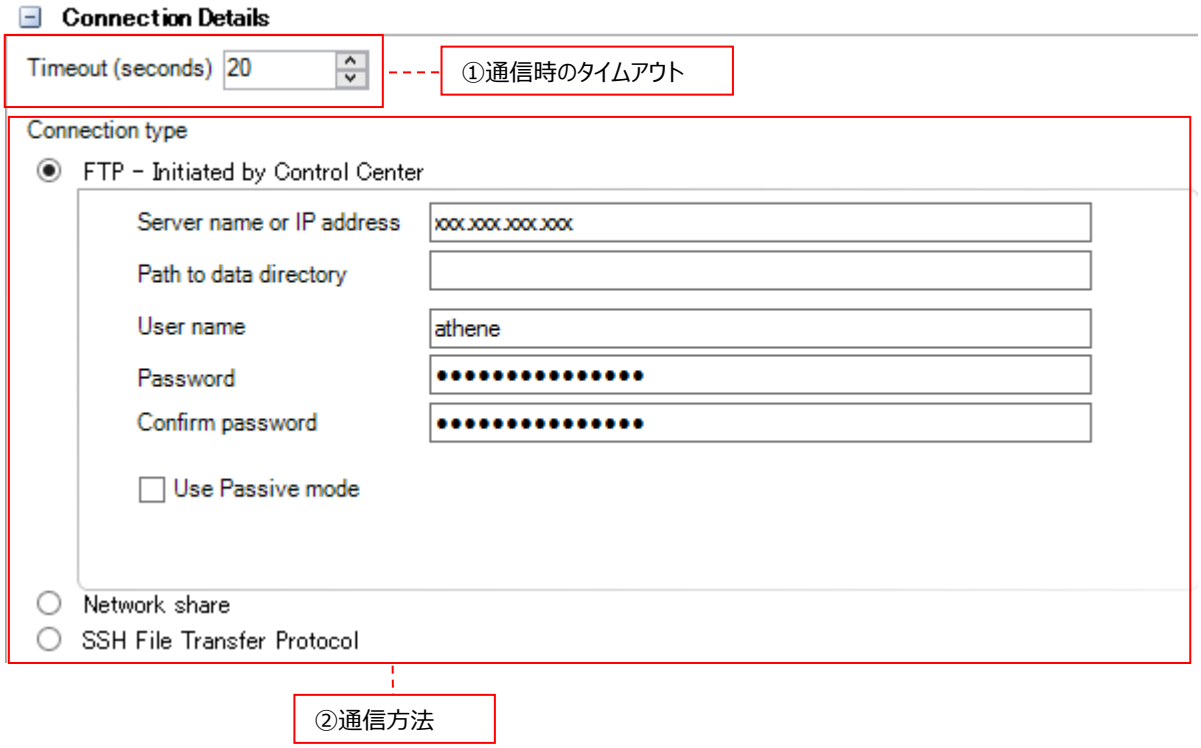
(1)「Collect a single interval of data per connection.」は使用できませんので、チェックしないでください。

(2)「Collect all remaining files. Note: reverts to previous setting when done.」にチェックを付けると、次回の転送動作時に対象システム上に残っているすべてのファイルを転送します。その転送動作が終了すると、チェックを付ける前の設定状態に戻ります。このオプションは通常使用しません。

(4)Connection Details

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。通信方法によって、GUI が一部異なります。
ターゲットの OS 種類に応じて適切な通信方法が選択されていることを確認し、必要ならば各項目を変更してください。

Unix／Linux システム　：FTP 通信または SFTP 通信
Windows システム　：FTP 通信または SFTP 通信またはファイル共有



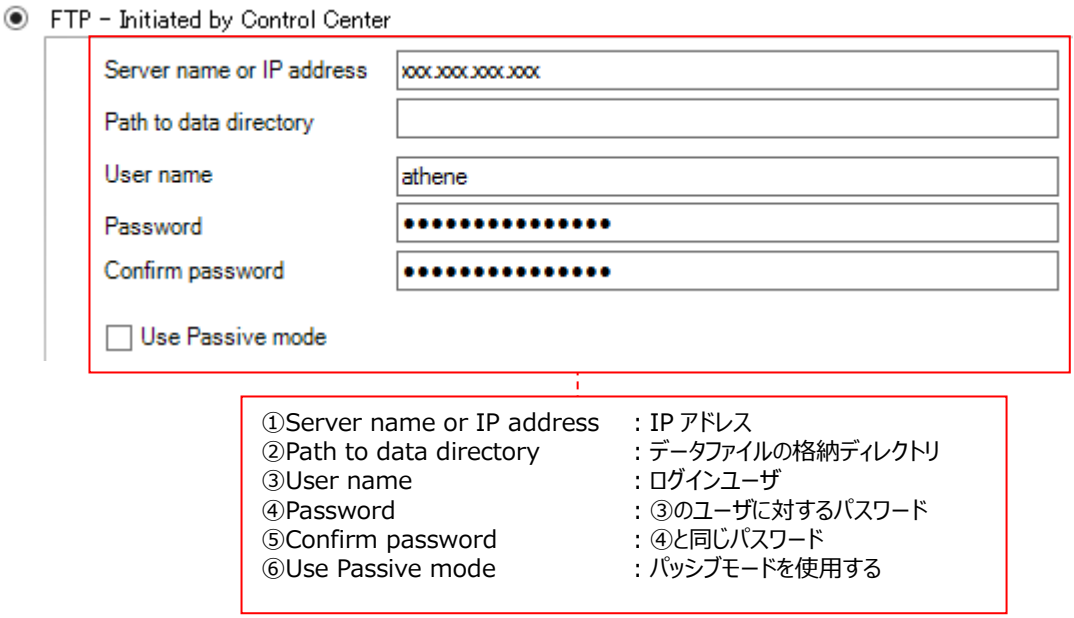
①Timeout (seconds)　：ターゲットと通信を行う時のタイムアウト（秒）を指定します。デフォルトは 20 秒です。特に問題が無い限り、変更する必要はありません。
0 から 86400 秒まで指定可能ですが、極端に短いあるいは長い時間を指定しないでください。

②通信方法
(a)FTP - Initiated by Control Center：FTP 通信を使用する場合にチェックします。
(b)SSH File Transfer Protocol　：SFTP 通信を使用する場合にチェックします。
(c)Network share　：ファイル共有を使用する場合にチェックします。

指定した(a)(b)(c)いずれかの GUI に進んでください。

(a)FTP 通信

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。



①Server name or IP address : IP アドレスを入力します。Control Center はターゲットとの通信にデフォルトのポート 21 を使用します。使用するポート番号を変更したい場合は、以下のように IP アドレスの後ろに「:」でポート番号をつなげます。
(例)172.16.14.233:5555

②Path to data directory : データファイルの格納ディレクトリを指定します（FTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス。ホームディレクトリにデータファイルが存在する場合は空白）。

③User name : ログインユーザを入力します。

④Password : ③のユーザに対するパスワードを入力します。
半角 15 文字以内で記述します。

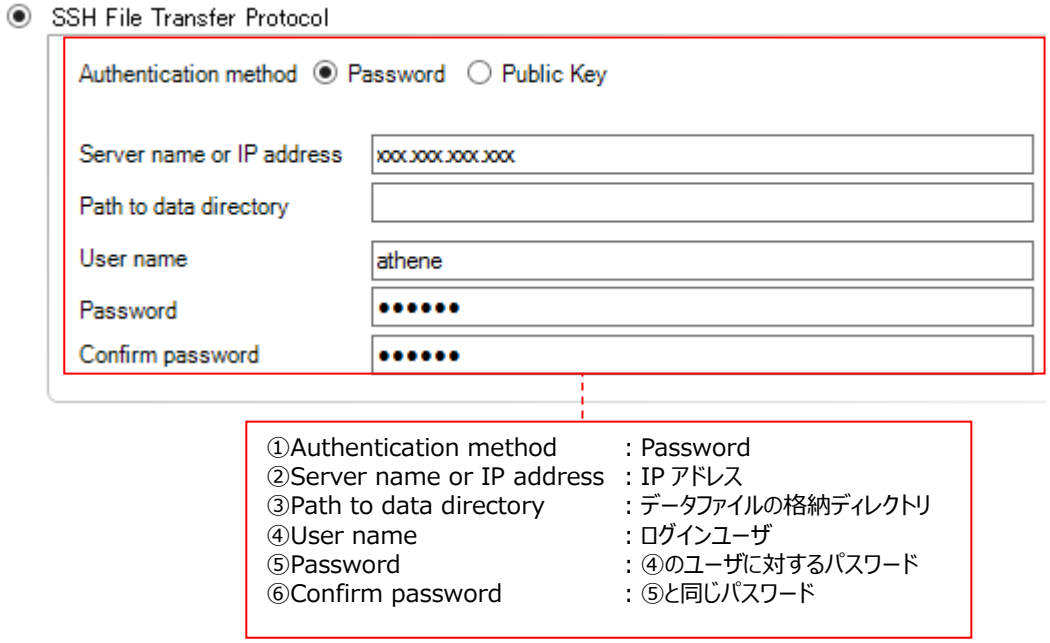
⑤Confirm password : ④と同じパスワードを入力します。

⑥Use passive mode : パッシブモードを使用する場合にチェックします。

(b)SFTP 通信

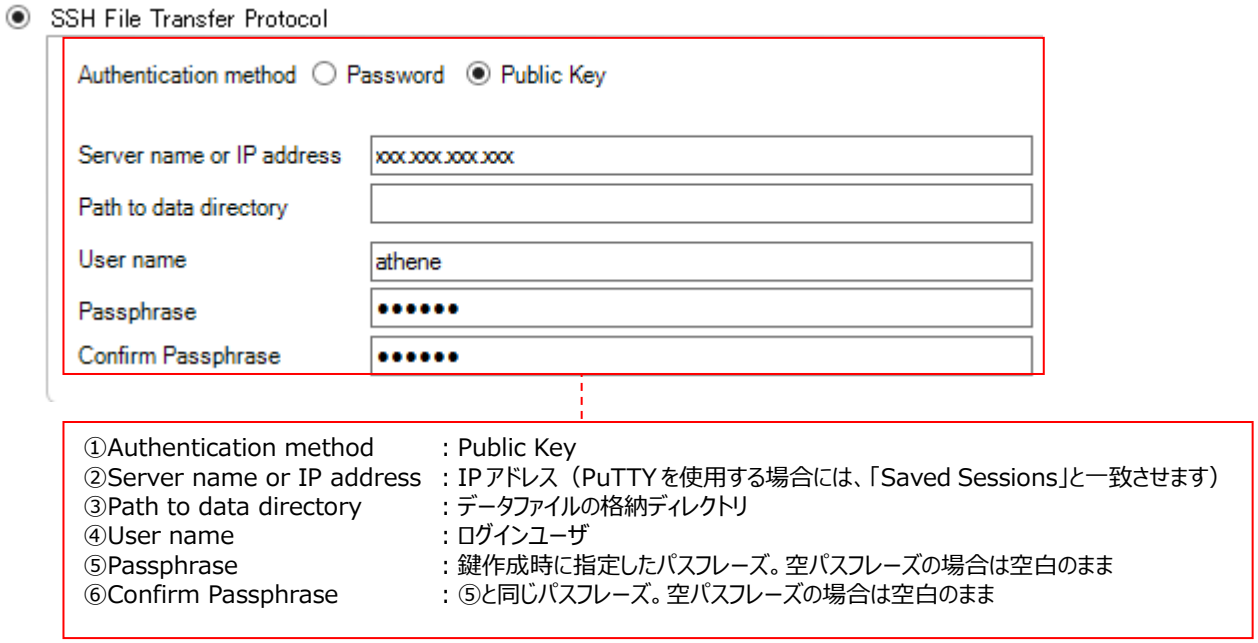
ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

<パスワード認証の場合>



①Authentication method : 認証方法として Password を指定します。
②Server name or IP address : IP アドレスを入力します。
③Path to data directory : データファイルの格納ディレクトリを指定します（SFTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス。ホームディレクトリにデータファイルが存在する場合は空白）。
④User name : ログインユーザを入力します。
⑤Password : ④のユーザに対するパスワードを入力します。
⑥Confirm password : ⑤と同じパスワードを入力します。

＜公開鍵認証の場合＞



①Authentication method : 認証方法として Public Key を指定します。

②Server name or IP address : IP アドレスを入力します（PuTTY を使用する場合には、「Saved Sessions」と一致させます）。

③Path to data directory : データファイルの格納ディレクトリを指定します（SFTP でログインしたユーザのホームディレクトリからの相対パス。ホームディレクトリにデータファイルが存在する場合は空白）。

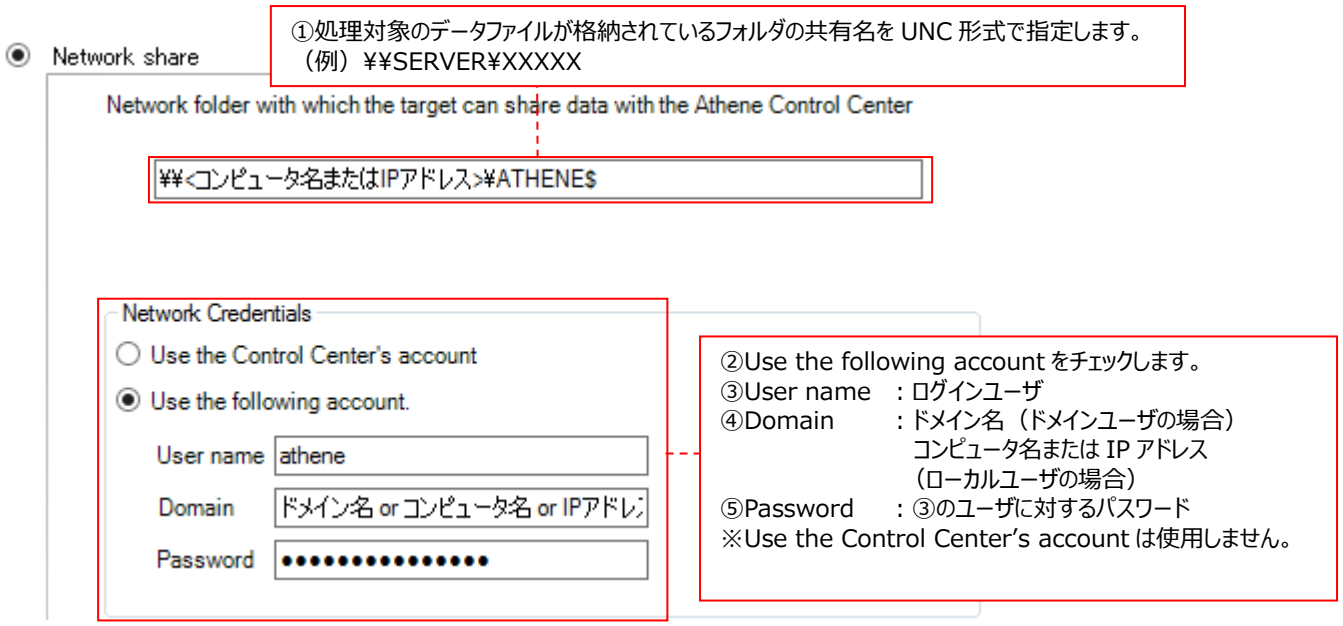
④User name : ログインユーザを入力します。

⑤Passphrase : 鍵作成時に指定したパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

⑥Confirm Passphrase : ⑤と同じパスフレーズを入力します。
空パスフレーズの場合は空白のままにします。

(c)ファイル共有

ターゲットとの通信設定に誤りが無いかを確認します。必要ならば各項目を変更してください。

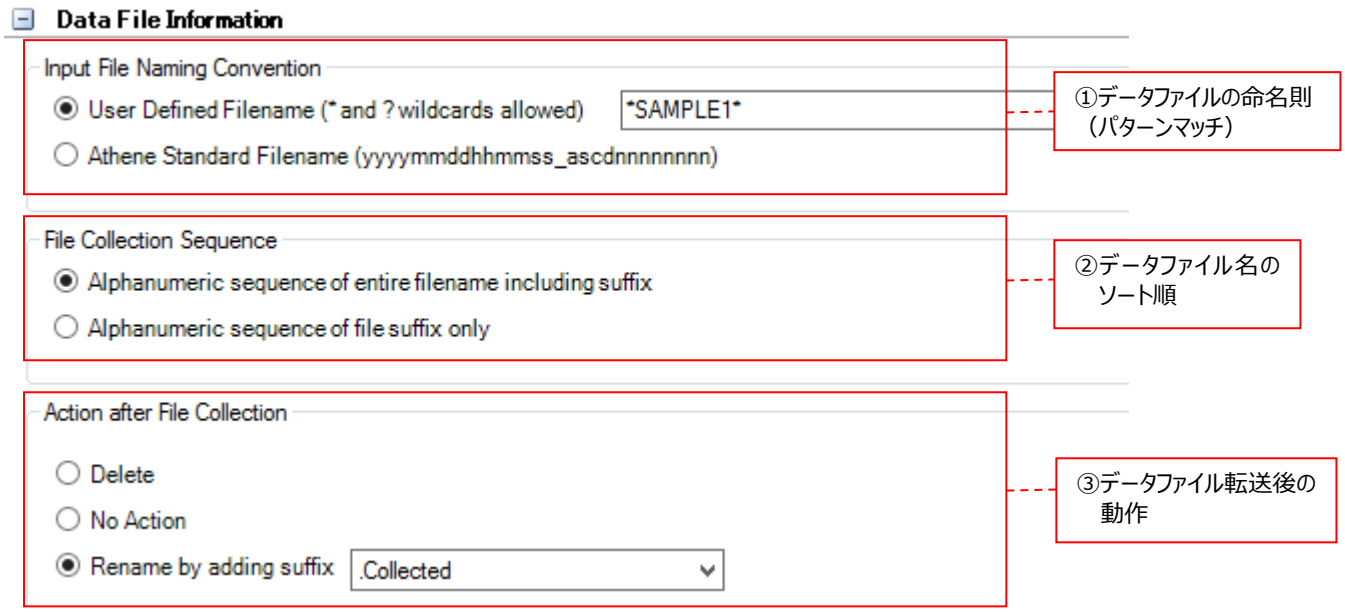


①処理対象のデータファイルが格納されているフォルダに対する共有名を UNC 形式で指定します。
（例）¥¥SERVER¥XXXXX
②Use the following account をチェックします。
③User name ：ログインユーザを入力します。
④Domain ：ターゲットの Windows システムにドメインユーザでログインする場合は、ドメイン名を入力します。
ターゲットの Windows システムにローカルユーザでログインする場合は、コンピュータ名または IP アドレスを入力します。
⑤Password ：③のユーザに対するパスワードを入力します。

注意！
Use the Control Center's account は使用できません。

(5)Data File Information

Integrator ターゲットの処理対象となるデータファイルの命名則／データファイル名のソート順／データファイル転送後の動作について指定します。必要ならば各項目を変更してください。



①Input File Naming Convention　：User Defined Filename を選択し、Integrator ターゲットの入力となるデータファイルの命名則（パターンマッチ）を指定します。*と?のワイルドカードが使用可能です。
Syncsort Capacity Management Standard Filename は使用できません。

②File Collection Sequence　：データファイル名のソート順を指定します。
・Alphanumeric sequence of entire filename including suffix
拡張子も含めてファイル名が完全なアルファベット数字順
・Alphanumeric sequence of file suffix only
拡張子のみアルファベット数字順

③Action after File Collection　：Control Center がデータファイルを転送した後の動作を指定します。
・Delete
転送元のデータファイルを削除します。
・No Action
何もしません。
・Rename by adding suffix
転送元のデータファイルの拡張子に、プルダウンから選択した文字列を付加してリネームします。
- .Collected
- .$
- .@

この後、「4.9. データ収集／転送／変換処理の開始」に進んでください。

4.9. データ収集／転送／変換処理の開始

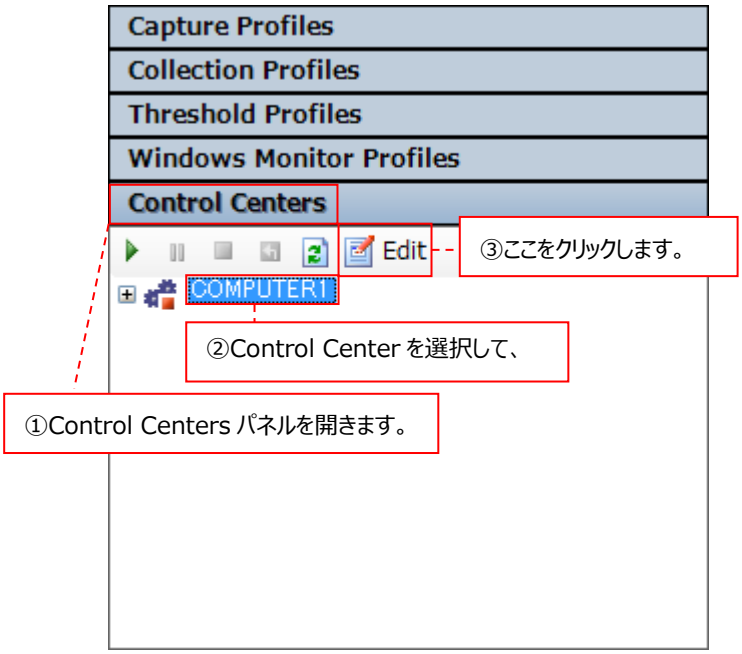
ここでは、Control Center サービスを開始して、実際にサーバ上でのデータ収集／収集データの転送／パフォーマンスデータベース（PDB）への変換処理を行う手順について説明します。

4.9.1. Control Center の動作環境設定

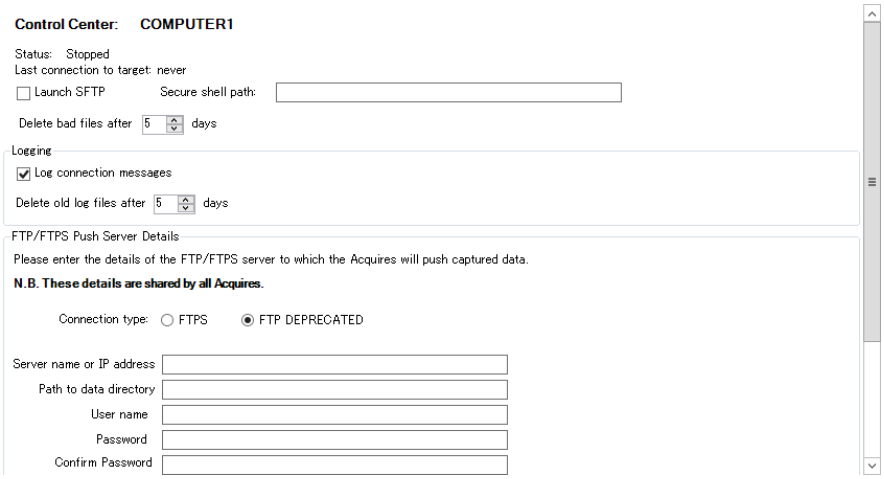
ここでは、Control Center サービス自体の動作環境設定を行います。

(1)Control Center 詳細パネルの起動

System Manager メイン画面の左下側で Control Centers パネルを開きます①。
対象の Control Center を選択して②、[Edit]ボタンをクリックします③。



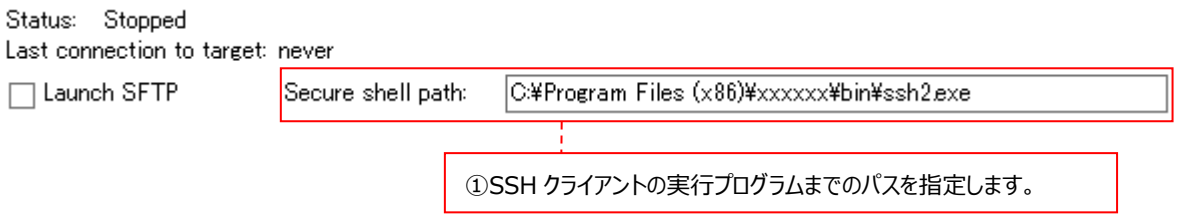
System Manager メイン画面の右上に詳細パネルが開きます。



注意！
詳細パネル内の FTP/FTPS Push Server Details は使用できません。

(2)SSH 接続を使用する場合の設定

①Control Center サービスでの SSH クライアントの設定



SSH 機能（SFTP）にてターゲットと通信する場合は、Secure shell path に使用可能な SSH クライアントの実行プログラムまでのパスを指定します①。

（例）
C:¥Program Files (x86)¥xxxxxx¥bin¥ssh2.exe
C:¥Program Files (x86)¥PuTTY¥plink.exe

注意！
詳細パネル内の Launch SFTP は使用できません。

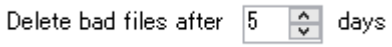
②Syncsort Capacity Management Control Center サービスのログオン設定

SSH クライアントが「PuTTY」の場合のみ必要な作業です。
PuTTY にて公開鍵認証を使用する場合、Syncsort Capacity Management Control Center サービスのログオンに運用アカウント（ControlCenter 専用ユーザ）を設定します。

・スタートメニューより「Windows 管理ツール→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center を選択し、右クリックでプロパティ画面を開きます。
・「ログオン」タブで「アカウント」に運用アカウント（Control Center 専用ユーザ）のユーザ名とパスワードを入力します。
・入力後、「OK」をクリックします。
・Syncsort Capacity Management Control Center サービスを再起動して、設定を反映させます。

注意！
SSH クライアントに PuTTY を使用する場合は、「第 7 章.添付資料 B. PuTTY の使用方法」も参照してください。
PuTTY にて公開鍵認証を使用する場合、「ローカルシステムアカウント」では動作しません。

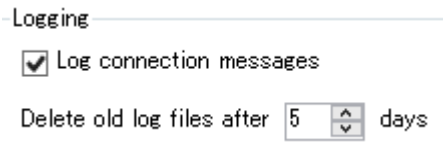
(3)異常収集データファイルの保存期間



何らかの理由により、対象システム上で Acquire が収集したデータファイルに異常（ファイルが破損している、フォーマットが不正など）があった場合、Control Center は一時フォルダにそれらのファイルを退避させます。その一時フォルダの保存期間を Delete bad files after days にて指定します（1 から 99 日まで指定可能）。デフォルトは 5 日間保存します。異常ファイルは、以下のフォルダに格納されます。

C:¥ProgramData¥Metron¥Work¥BadFiles¥YYYYMMDD

(4)Control Center の動作ロギング



Logging では、Control Center の動作ログに関する設定を行います。

Log connection messages　　：チェックを付けると、ターゲットとの通信ログを出力します。
Delete old log files after days　　：過去のログの保存期間を指定します（1 から 99 日まで指定可能）。

動作ログは、以下のフォルダに格納されます。

C:¥ProgramData¥Metron¥Logs

Control Center の動作ログによってディスクスペースを圧迫することを避けるため、動作ログは下記のように自動でメンテナンスされます。

(a)1 時間毎に動作ログをメンテナンスする処理が実行され、直近の 1 時間分のみテキストファイルの状態で存在します。1 時間毎にメンテナンスされた過去のログは、zip 形式で圧縮されます。

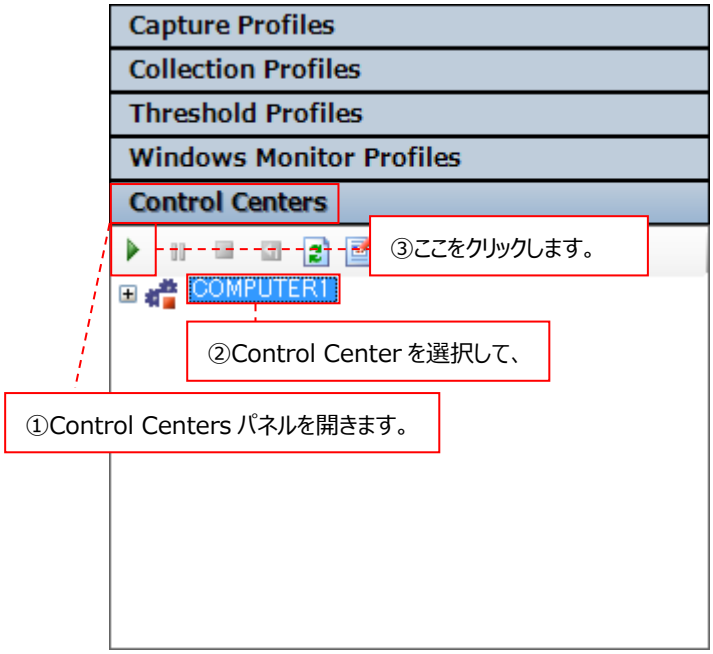
(b)Delete old log files after　days で指定した保存期間を経過した zip 形式のログファイルは、Control Center サービスの起動時刻から 10 分後に削除されます。そのサービス起動から 10 分後の時刻が削除タイミングとして設定され、以降は毎日設定時刻に削除処理が行われます。
例：05:00 に Control Center サービスを起動した場合、05:10 にログファイルが削除され、以降毎日 05:10 に削除処理が行われる。

4.9.2. Control Center サービスの開始

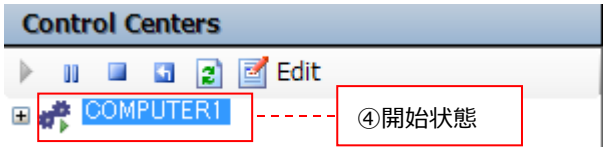
ここでは、Control Center サービスの開始手順を説明します。以下の動作を行うには、Control Center サービスが開始状態になっていることが必要です。

・Capture Profile の設定内容をターゲットに送信する。
・Acquire によるデータ収集の開始または停止指示をターゲットに送信する。
・ターゲット上で Acquire が収集したデータファイルを管理用マシンに転送する。
・転送されたデータをパフォーマンスデータベース（PDB）に変換する。
・Control Center の過去の動作ログを自動削除する。

System Manager メイン画面の左下側で Control Centers パネルを開きます①。
対象の Control Center を選択して②、[Start Service]ボタンをクリックします③。



上図のように、緑の三角が表示されていると、Control Center サービスは開始しています④。



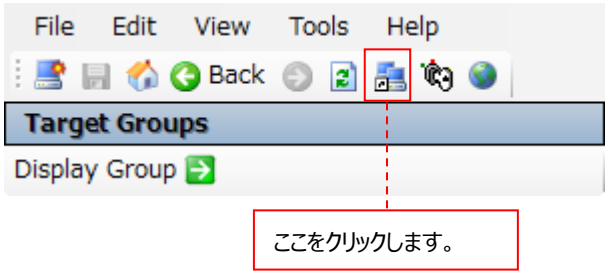
Control Center サービスを開始した後は、System Manager の GUI を閉じて Windows をログオフしても構いません。

4.10. 複数ターゲットのグルーピング機能（Groups Editor）

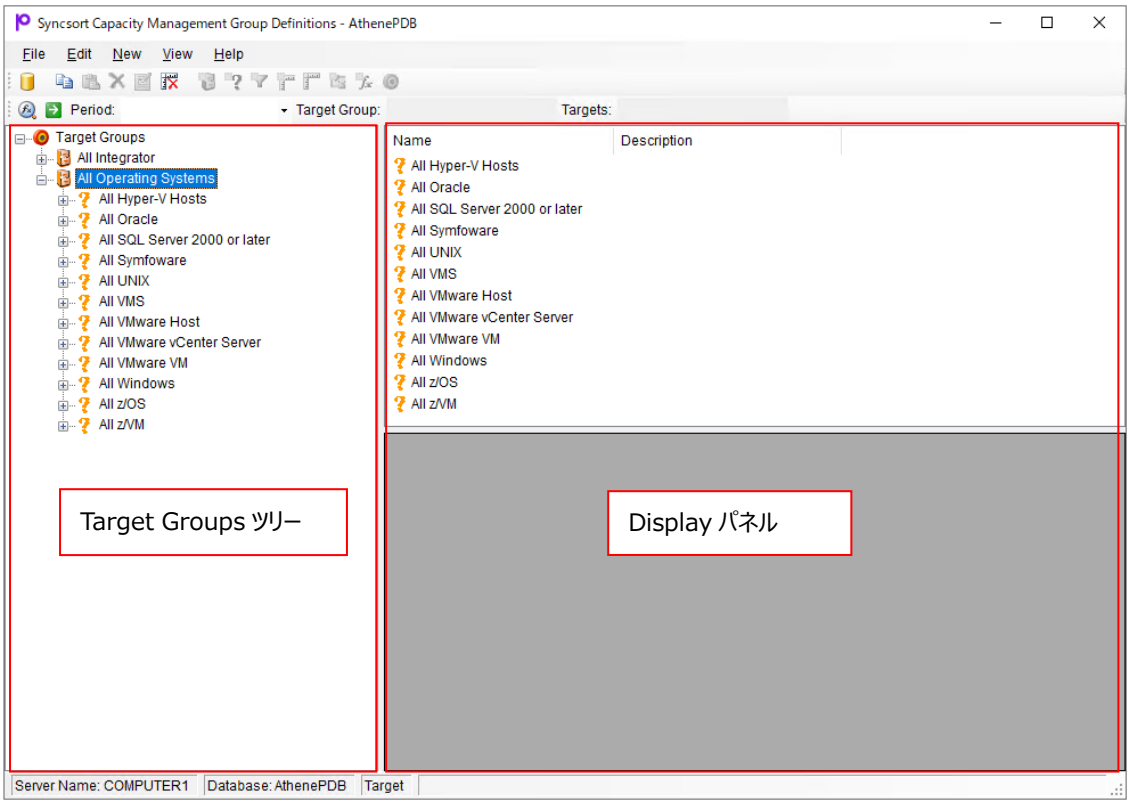
ここでは、作成されたターゲットのグルーピング機能（Groups Editor）について説明します。パフォーマンスデータを収集するための必須の機能ではありませんが、ターゲットが多数存在する場合に効率よく設定を変更することができます。

4.10.1. Groups Editor の起動とメイン画面

System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Groups Editor]ボタンをクリックすると、別ウィンドウで Groups Editor メイン画面が表示されます。



●Groups Editor メイン画面



・Target Groups ツリー
作成されたグループがツリー形式で表示されます。デフォルトで All Operating Systems グループが用意されています。デフォルトのグループはオレンジ色のアイコンで表示され、編集することはできません。

・Display パネル
Target Groups で選択されたグループの内容が表示されます。

4.10.2. グループの構成要素

Target Groups ツリー上で右クリックを行い、新規にグループを作成します。グループを構成する要素として、以下の 5 つの項目があります。これらの項目を組み合わせて任意のグループを作成し、それぞれのグループに対して所属させるターゲットを決めるための条件式を設定します。

(1)グループ構成要素

①Container

Target Groups、Container 配下に作成できます。
Container 配下には、Container、Query、Filter 要素を作成できます。

②Query

Target Groups、Container 配下に作成できます。
Query 配下には、Filter、Ruleset、Rule 要素を作成できます。

③Filter

Container、Query、Filter 配下に作成できます。
Filter 配下には、Filter、Ruleset、Rule 要素を作成できます。

④Ruleset

Query、Filter 配下に作成できます。
Ruleset 配下には、Rule 要素を作成できます。
一度作成した Ruleset は一覧から選択して再利用できるようになります。

⑤Rule

Query、Filter、Ruleset 配下に作成できます。
Rule 配下には条件式を作成できます。

(2)条件式

①Dynamic Expression

System Manager の各種設定項目に対して、グループマッチングの条件式を設定します。

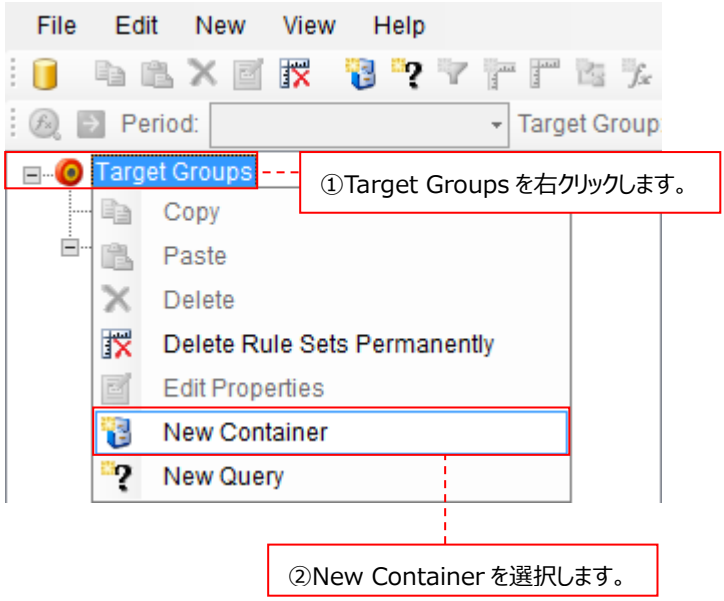
②Static Expression

既存のターゲットの中からグループに所属させるターゲットを選択します。

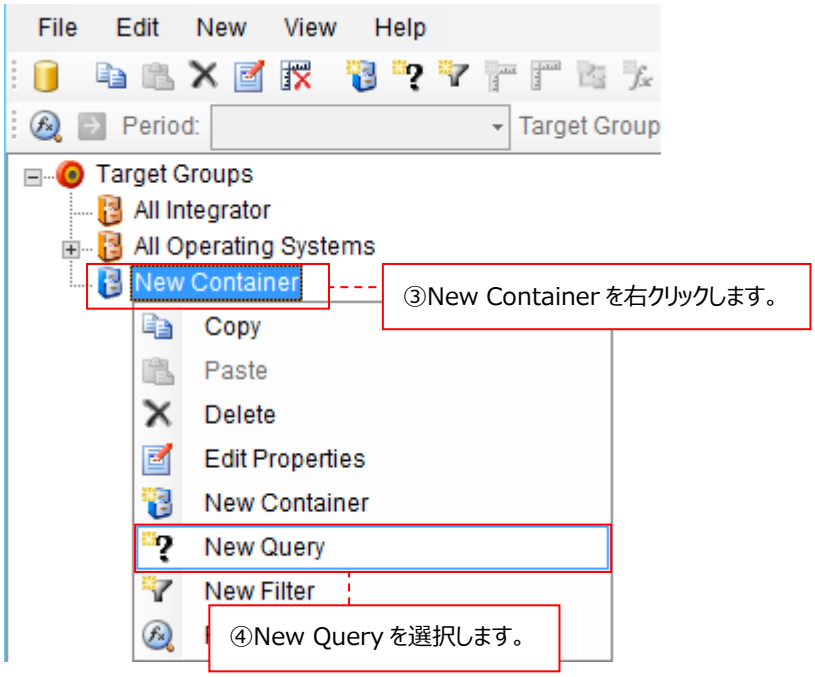
4.10.3. グループの新規作成

CS シリーズで使用するサイト名に対してグループを新規に設定する場合の例を以下に示します。

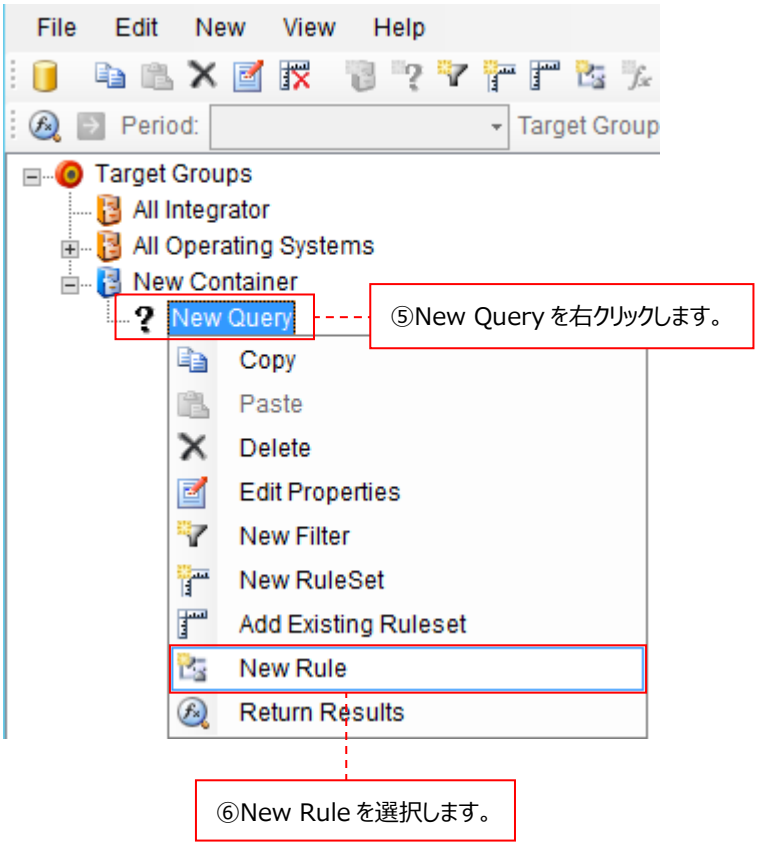
Target Groups の上で右クリックし①、New Container を選択します②。



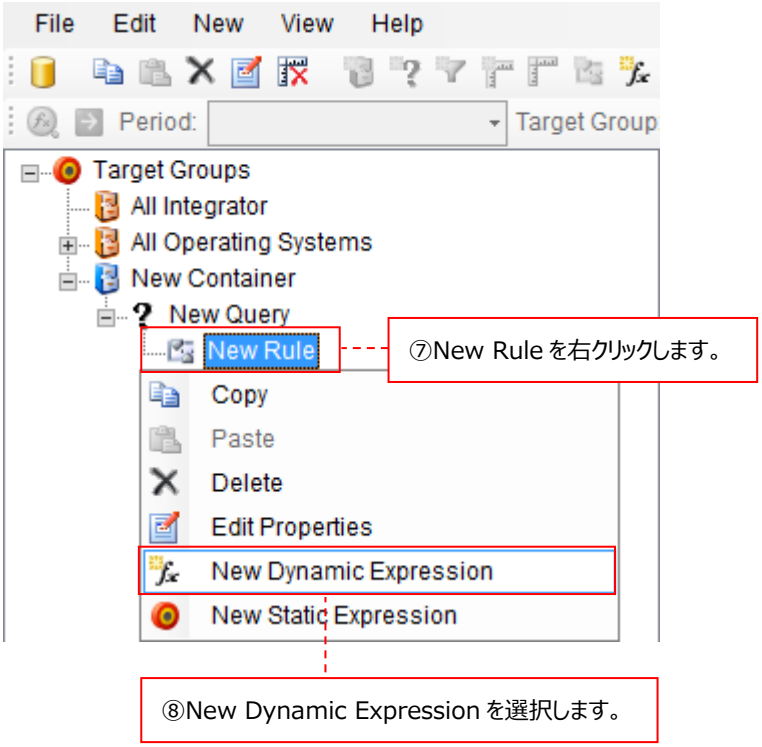
New Container の上で右クリックし③、New Query を選択します④。



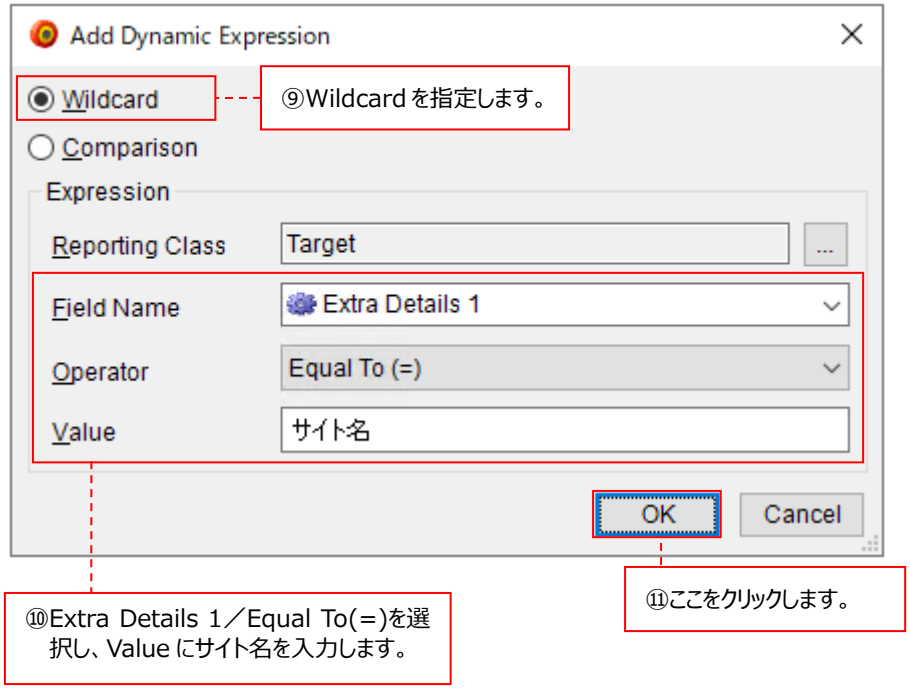
New Query の上で右クリックし⑤、New Rule を選択します⑥。



New Rule の上で右クリックし⑦、New Dynamic Expression を選択します⑧。



Wildcard を指定した後⑨、Extra Details 1／Equal To(=)を選択し、Value にサイト名を入力します⑩。
[OK]ボタンをクリックします⑪。

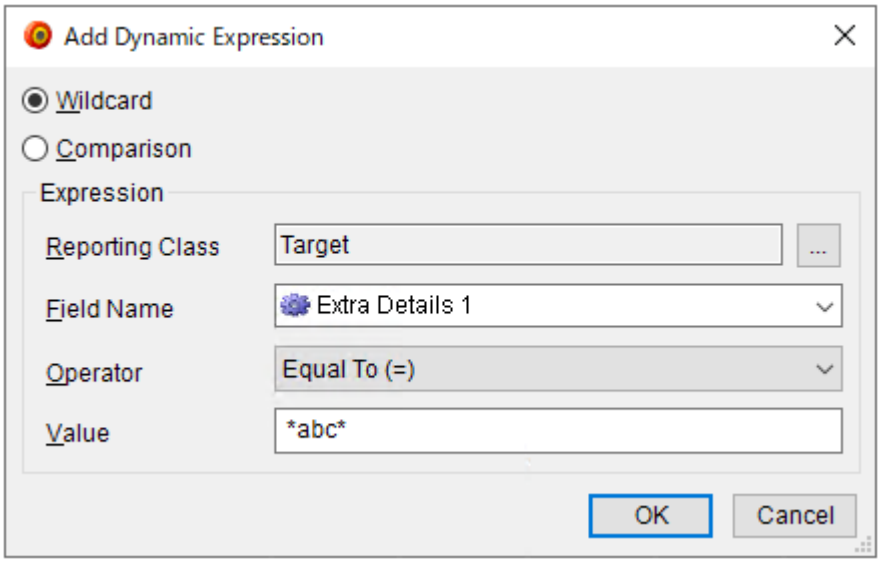


Value に入力する文字列には以下の 2 つのワイルドカードが使用できます。

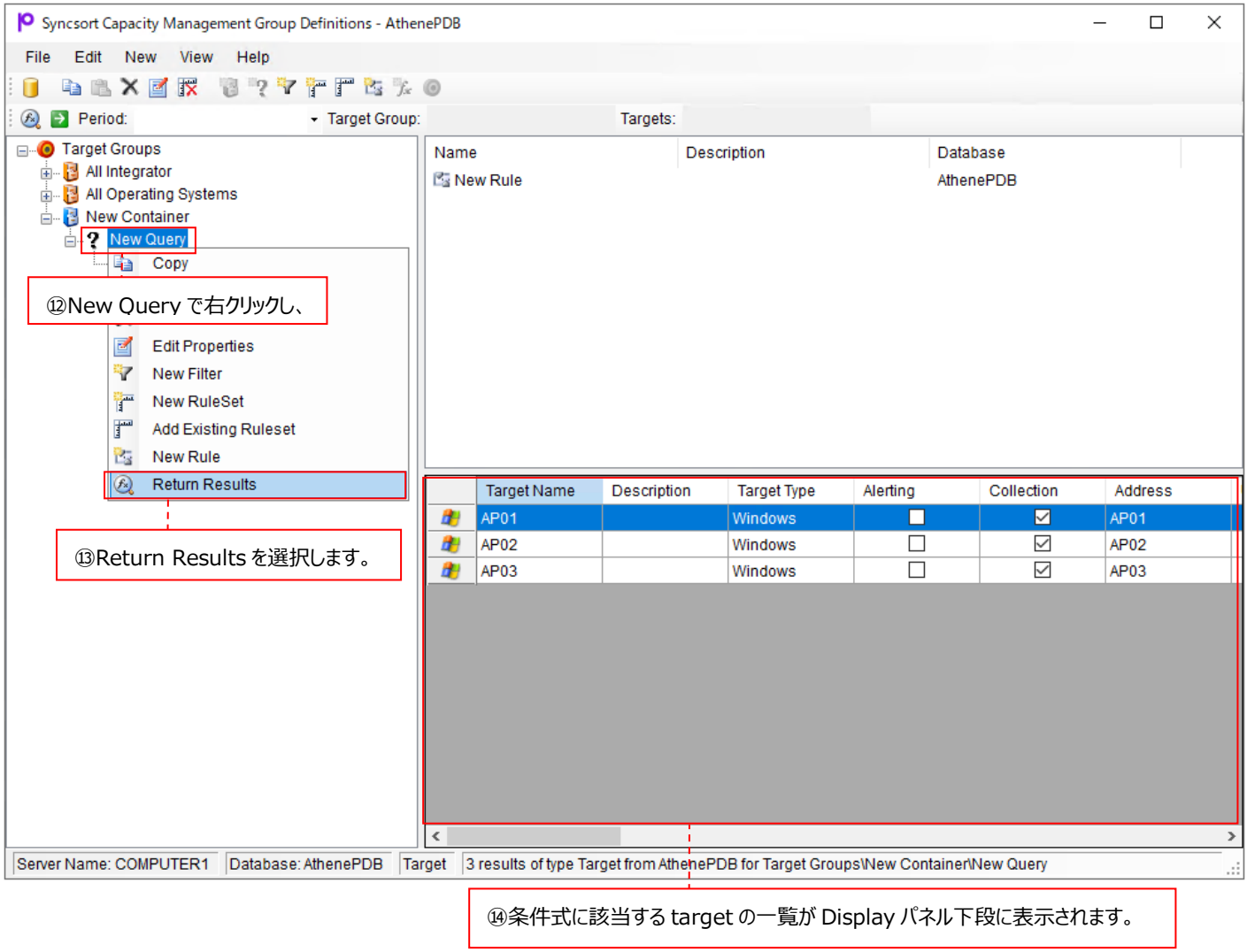
・アスタリスク（*）
　任意の文字列

・クエスチョンマーク（?）
　任意の 1 文字

下例の場合は、サイト名に「abc」を含むターゲットが該当する条件式となります。



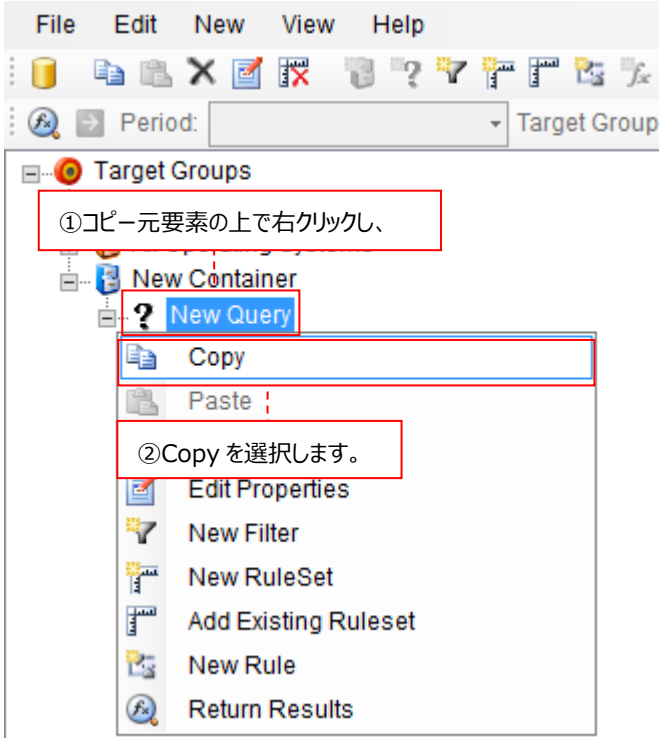
以下の手順にて、作成したグループに意図したターゲットが含まれていることを確認します。
New Query の上で右クリックし⑫、Return Results を選択します⑬。
条件式に該当するターゲットの一覧が Display パネル下段に表示されます⑭。



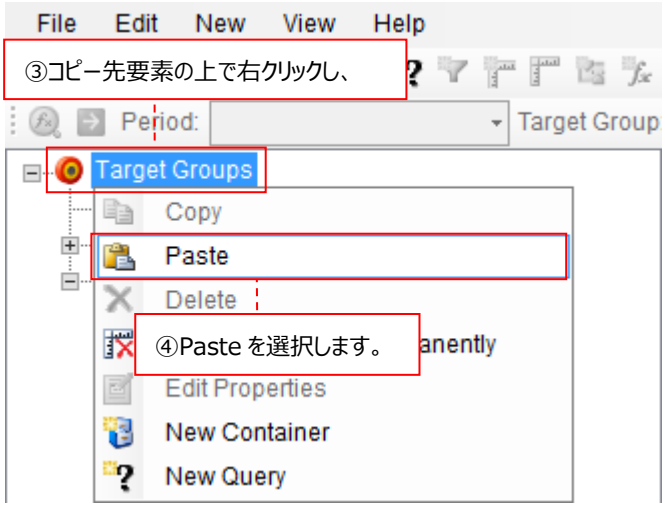
4.10.4. グループのコピーとペースト

既存グループのコピーを作成することができます。コピーとペーストの操作はグループの各構成要素の単位で行います。ペースト先にコピー元と同じ名前の要素が存在する場合は、ペーストできません。

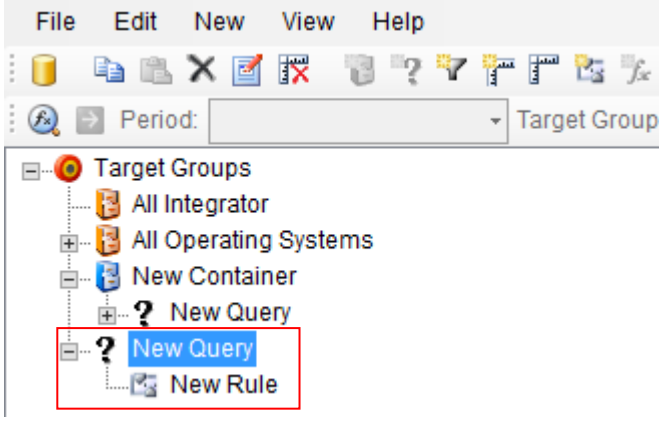
コピー元要素の上で右クリックし①、Copy を選択します②。



コピー先要素の上で右クリックし③、Paste を選択します④。



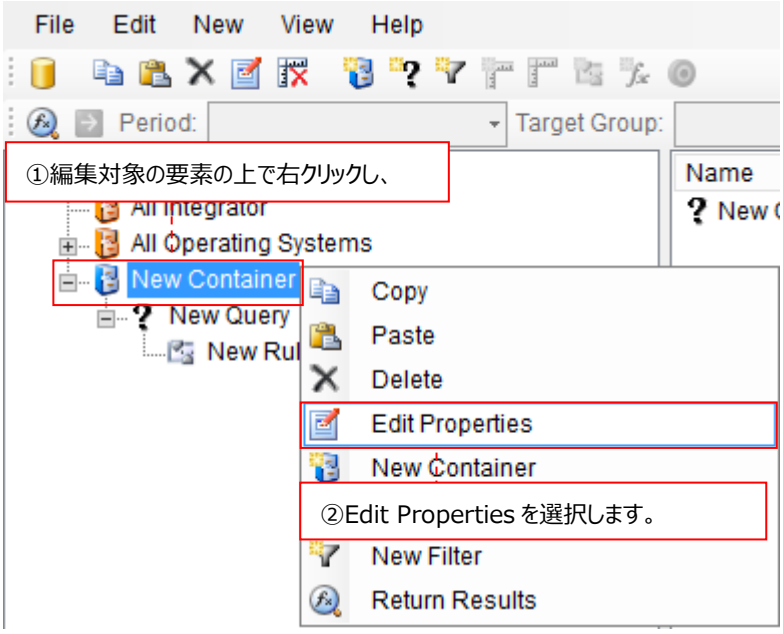
ペースト先にコピー元と同じ要素が作成されます。



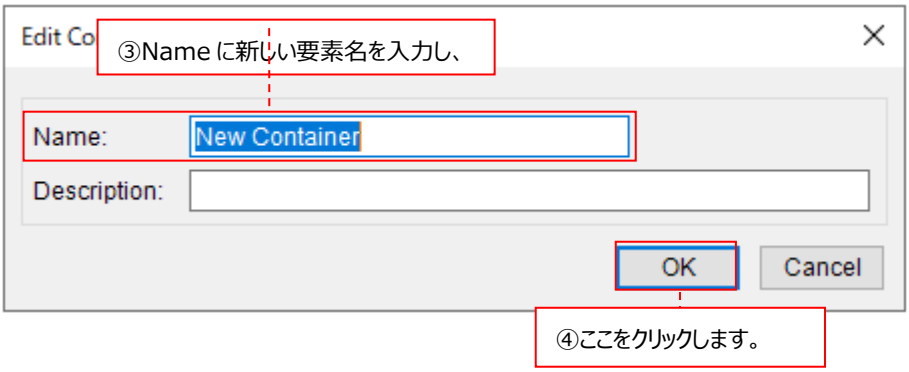
4.10.5. グループの編集

グループを構成する各要素の名前や条件式の編集を行うことができます。

●グループ構成要素の名前変更
編集対象の要素の上で右クリックし①、Edit Properties を選択します②。

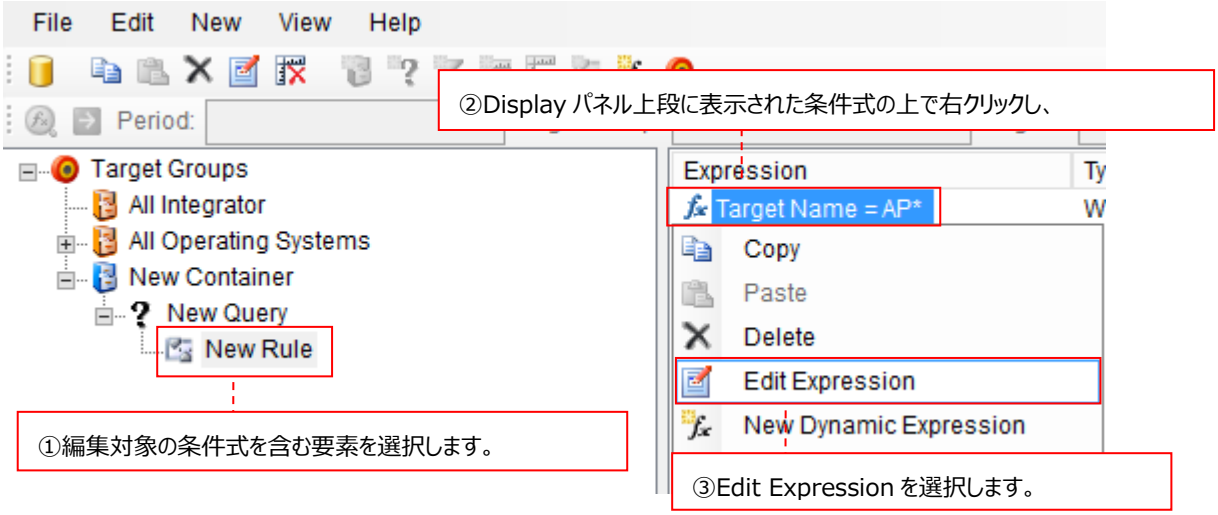


Name に新しい要素名を入力し③、[OK]ボタンをクリックします④。

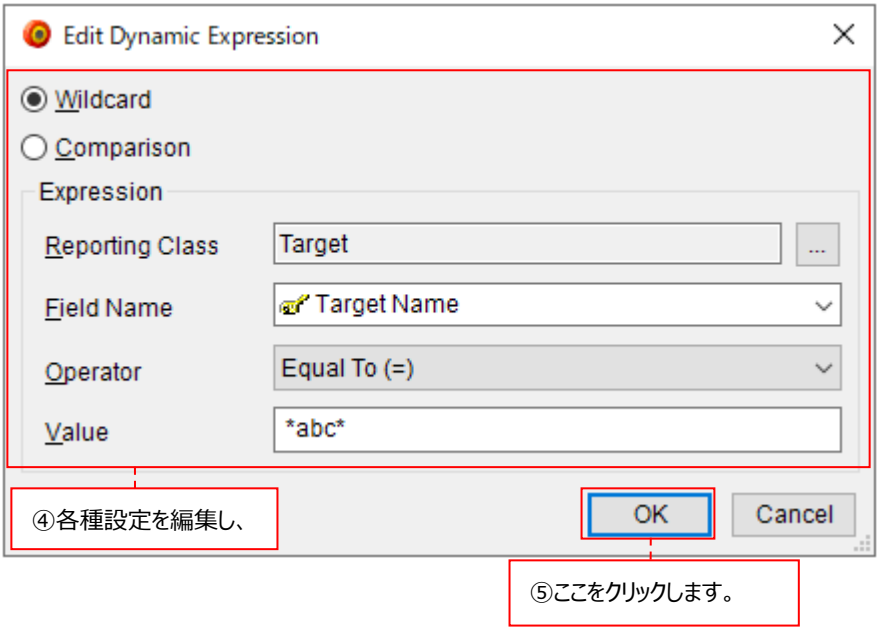


●条件式の編集

編集対象の条件式を含む要素を選択します①。Display パネル上段に表示された条件式の上で右クリックし②、Edit Expression を選択します③。



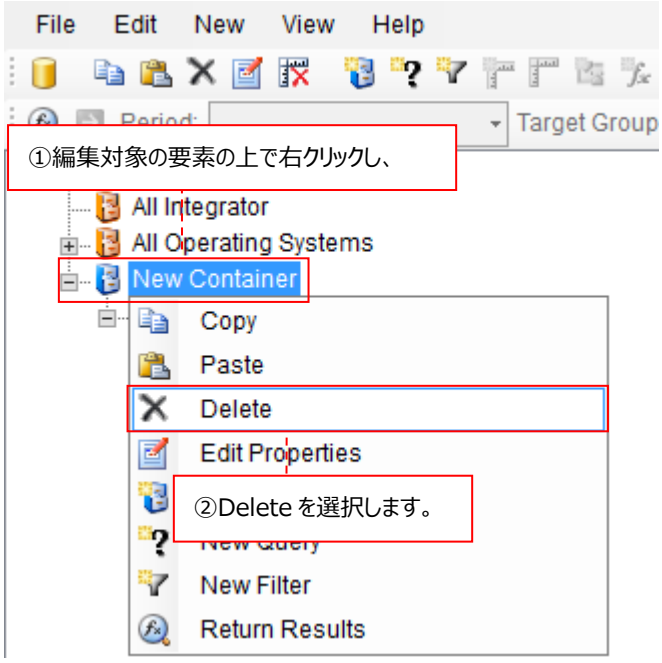
各種設定を編集し④、[OK]ボタンをクリックします⑤。



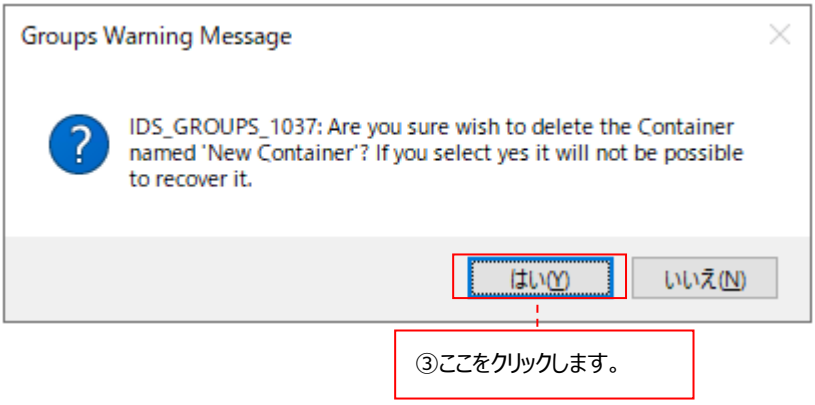
4.10.6. グループの削除

グループを構成する各要素や条件式の削除を行うことができます。

●グループ構成要素の削除
編集対象の要素の上で右クリックし①、Delete を選択します②。

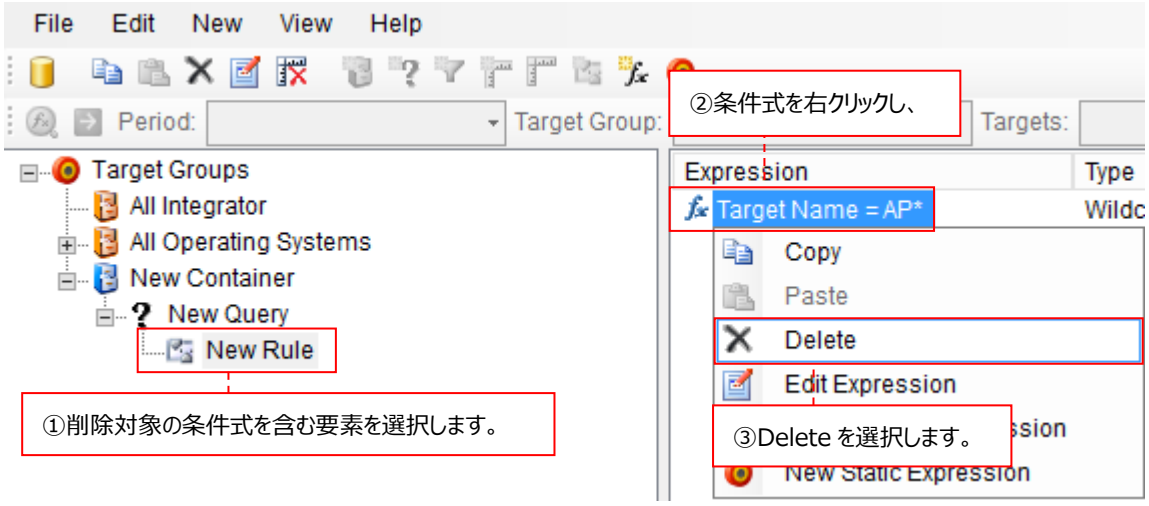


以下のウィンドウが表示されますので、[はい(Y)]ボタンをクリックしてください③。

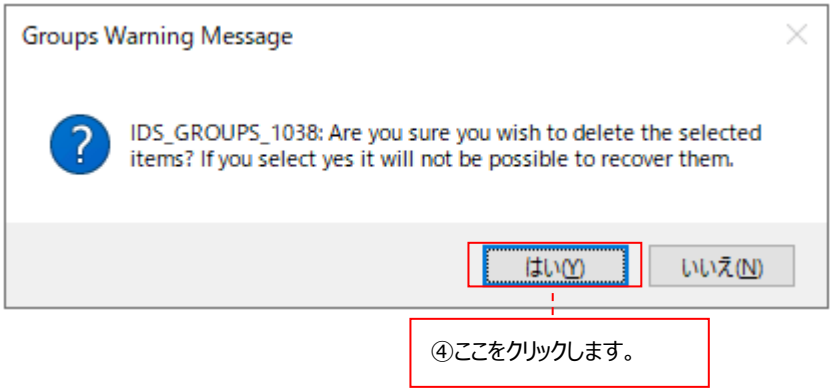


●条件式の削除

削除対象の条件式を含む要素を選択します①。Display パネル上段に表示された条件式の上で右クリックし②、Delete を選択します③。



以下のウィンドウが表示されますので、[はい(Y)]ボタンをクリックしてください④。



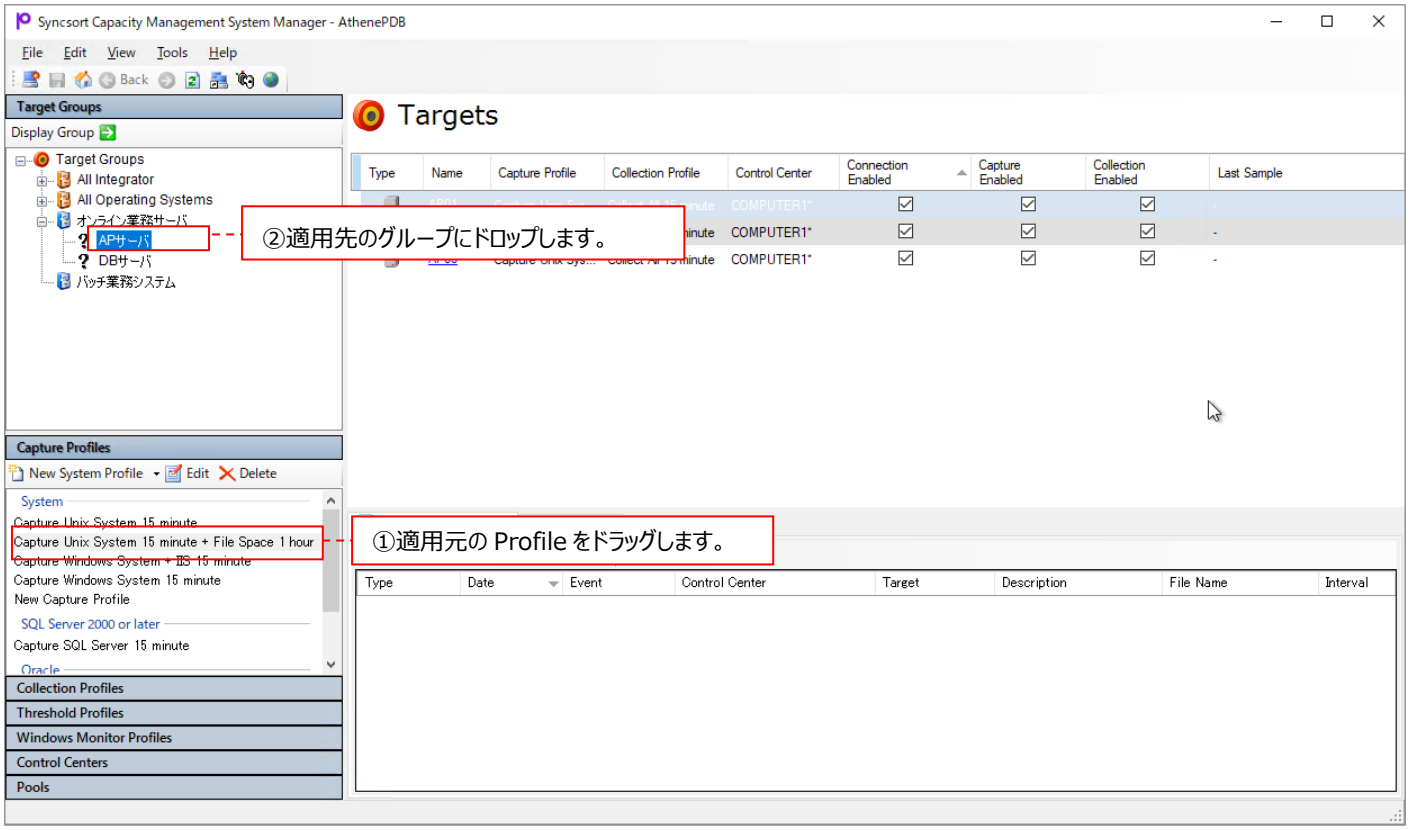
4.10.7. グループ単位での一括設定

作成したグループに対して、以下の設定を行うことができます。

・Capture Profile （System Manager）
・Collection Profile （System Manager）
・Automation Templates （Data Management）
・Measurement Periods のターゲットツリー表示変更 （Data Management）

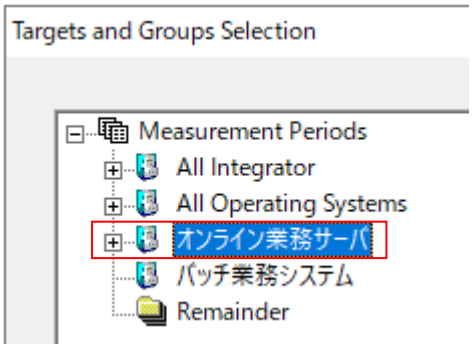
●Capture Profile／Collection Profile の適用方法

System Manager のメイン画面にて、適用元の Profile をドラッグします①。選択した Profile を適用先のグループにドロップします②。グループ配下のすべてのターゲットにここで選択した Profile が適用されます。



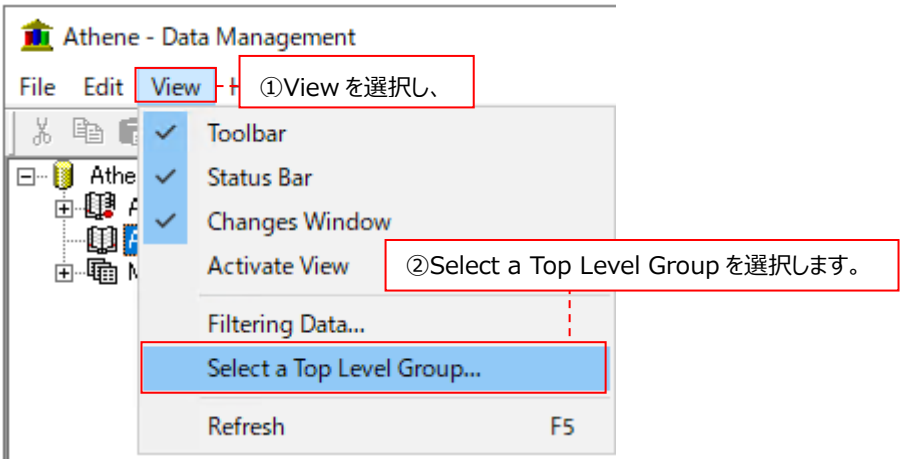
●Automation Templates 設定時のグループ選択

Data Management で AutomationTemplates を作成する際のターゲット選択画面にて、作成したグループを選択することができます。

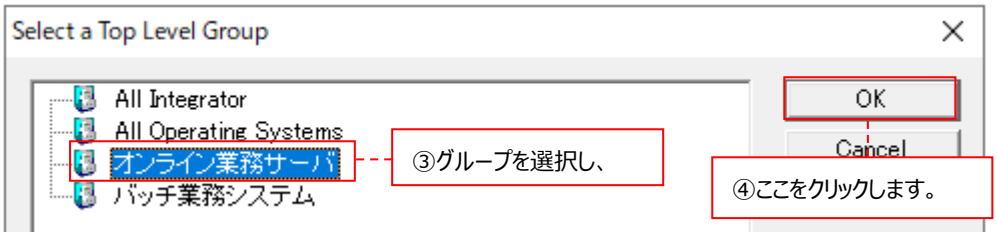


●Measurement Periods の target ツリー表示変更
Data Management の Measurement Periods にあるターゲットツリーの表示を、デフォルトの All Operating Systems から作成したグループへ変更することができます。

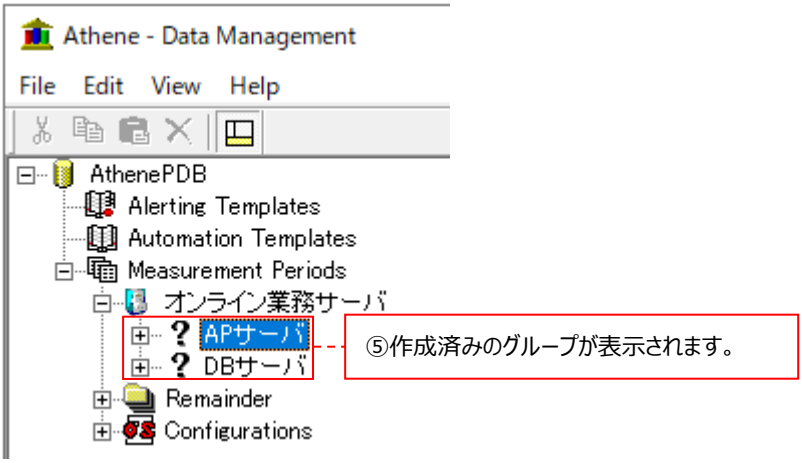
メニューバーから View を選択し①、Select a Top Level Group を選択します②。



グループを選択し③、[OK]ボタンをクリックします④。



作成済みのグループが表示されます⑤。



4.11. 複数ターゲットの同時編集機能（Edit Multiple Targets）

ここでは、複数ターゲットの設定項目をまとめて同時に編集する Edit Multiple Targets 機能について説明します。
Edit Multiple Targets は System Manager が備えるユーティリティ機能の 1 つであり、編集する頻度の多い設定項目に関して、複数のターゲットを対象として一度に変更することができます。必要に応じて下記を参照してください。

4.11.1. Edit Multiple Targets で編集可能な設定項目

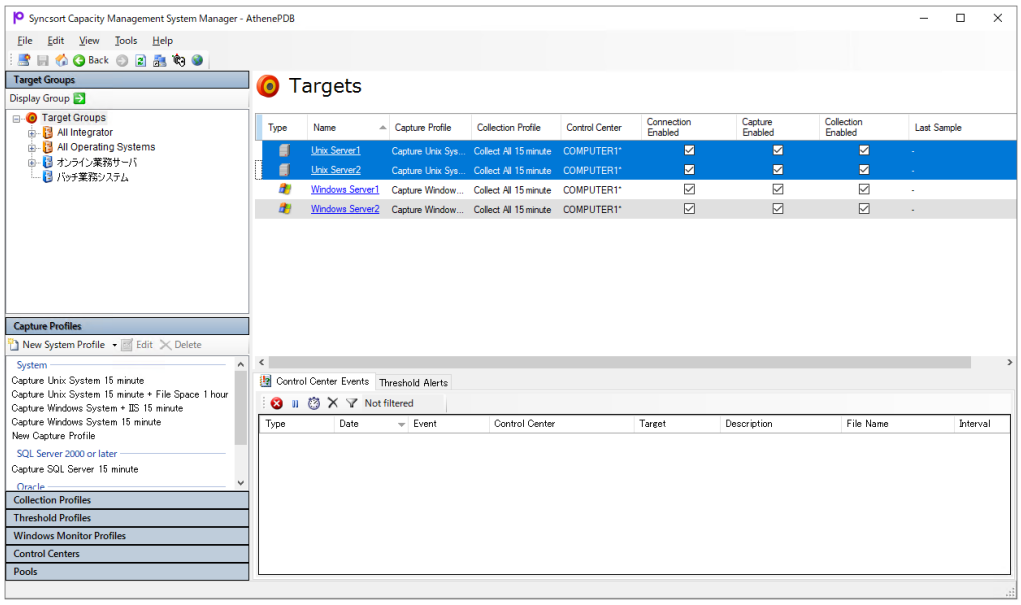
Edit Multiple Targets で編集可能な設定項目は、以下の通りです。

- ・Allow connections　：ターゲットとの通信を行うかどうかを指定します。
- ・Capture enabled　：ターゲット上で Acquire によるデータ収集を行うかどうかを指定します。
- ・Collection enabled　：ターゲット上の Acquire が収集したデータファイルの転送を行うかどうかを指定します。
- ・Edit Data Collection　：1 回の転送動作で転送する最大のファイル数を指定します。
- ・Edit Password　：ターゲットと通信する際に使用する Acquire 専用ユーザのパスワードを指定します。

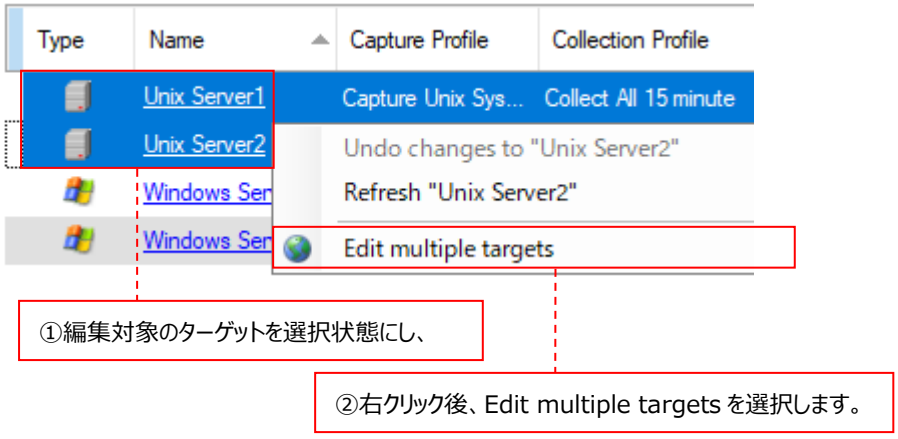
4.11.2. Edit Multiple Targets の使用方法

(1)Edit Multiple Targets の起動

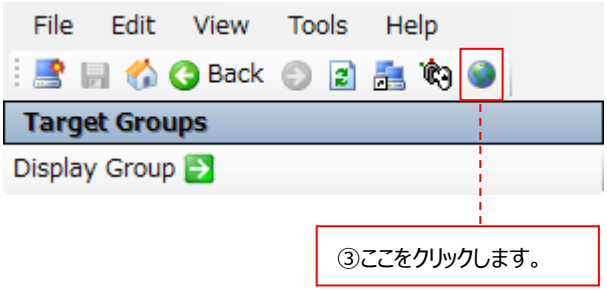
「スタート→アプリ→Syncsort Capacity Management Core→System Manager」を起動します。



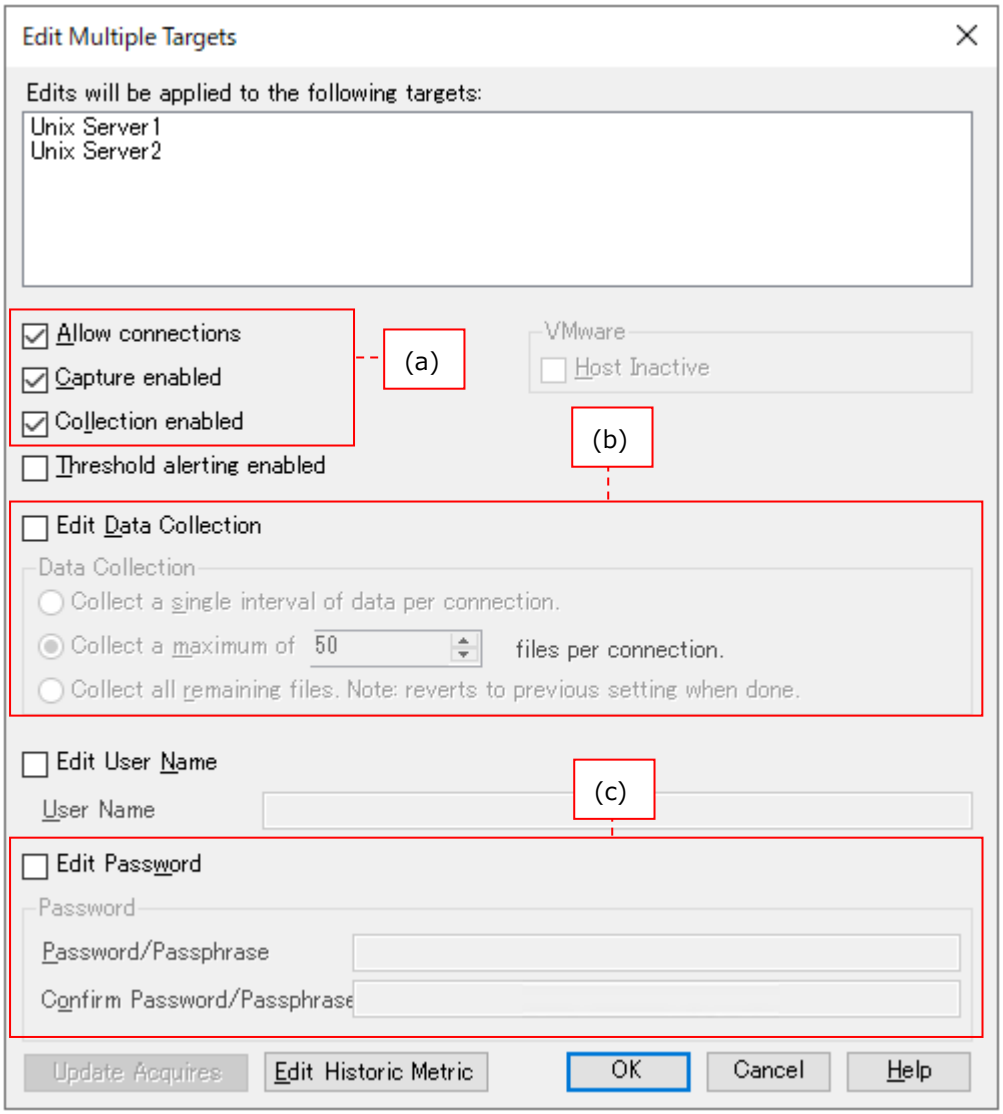
System Manager メイン画面右上の Display パネルから編集対象のターゲットを選択状態にし①、右クリック後、Edit multiple targets を選択します②。



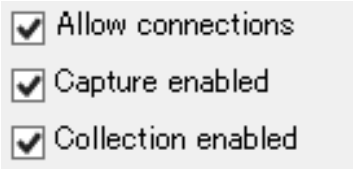
または、編集対象のターゲットを選択状態にした後、System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Edit Multiple Targets]ボタンをクリックします③。
「(2) 設定項目の編集」に進んでください。



(2)設定項目の編集
下図の画面が表示されますので、(a)(b)(c)の中で必要な項目の編集を行います。

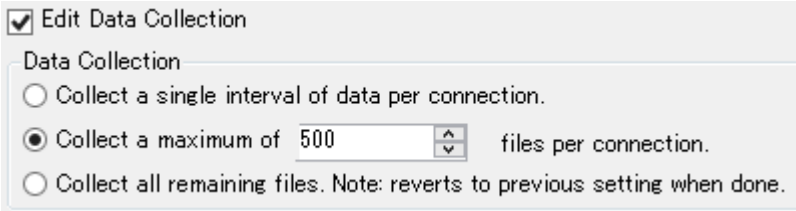


(a)通信／データ収集／データ転送動作のオンオフ指定



Allow connections　：ターゲットとの通信を行うかどうかを指定します。チェックを外すと、通信を行いません。
Capture enabled　：ターゲット上で Acquire によるデータ収集を行うかどうかを指定します。チェックを外すと、ターゲット上で Acquire はデータ収集を行いません。
Collection enabled　：ターゲット上の Acquire が収集したデータファイルの Control Center への転送を行うかどうかを指定します。チェックを外すと、Control Center へのデータ転送を行いません。

(b)転送ファイル数の指定

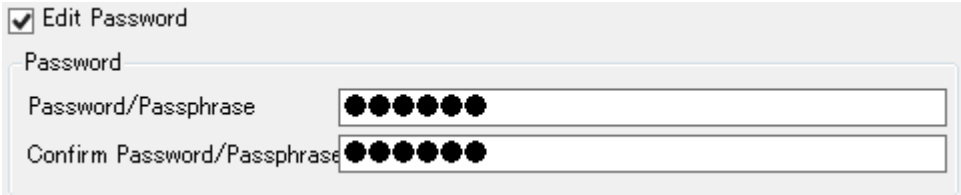


Edit Data Collection にチェックを付けると、Data Collection 欄が有効になります。

Collect a maximum of xxx　：ここにチェックが付いていることを確認し、1 回の転送動作で転送する最大のファイル数を指定します。

注意！
(1)「Collect a single interval of data per connection.」は使用できませんので、チェックしないでください。
(2)「Collect all remaining files. Note: reverts to previous setting when done.」にチェックを付けると、次回の転送動作時に対象システム上に残っているすべてのファイルを転送します。その転送動作が終了すると、チェックを付ける前の設定状態に戻ります。このオプションは通常使用しません。

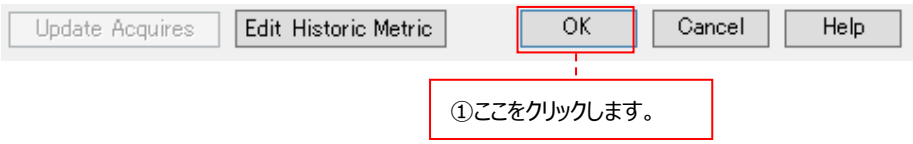
(c)ターゲットとの通信に使用するユーザに対するパスワードの指定



Edit Password にチェックを付けると、Password 欄が有効になります。

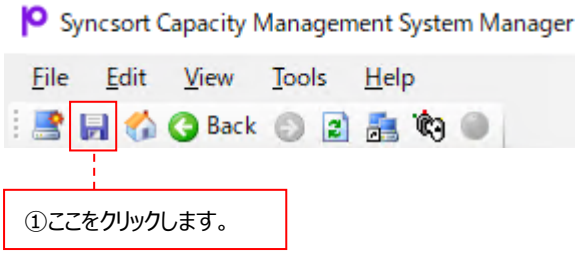
Password/Passphrase　：ターゲットとの通信に使用するユーザに対する変更後のパスワード／パスフレーズを入力します。
Confirm Password/Passphrase　：再度、変更後のパスワード／パスフレーズを入力します。

設定が終了したら、画面下部の[OK]ボタンをクリックします①。
この時点ではまだ編集内容は保存されていないため、必ず「(3)編集内容の保存」に進んでください。



注意！
Edit Multiple Targets の画面中にある以下の機能は使用できません。
・VMware Host Inactive
・Edit User Name
・Edit Historic Metrics
・Update Acquires

(3)編集内容の保存
System Manager メイン画面左上のツールバーにある[Save]ボタンをクリックして①、Edit Multiple Targets で行った編集内容を保存します。

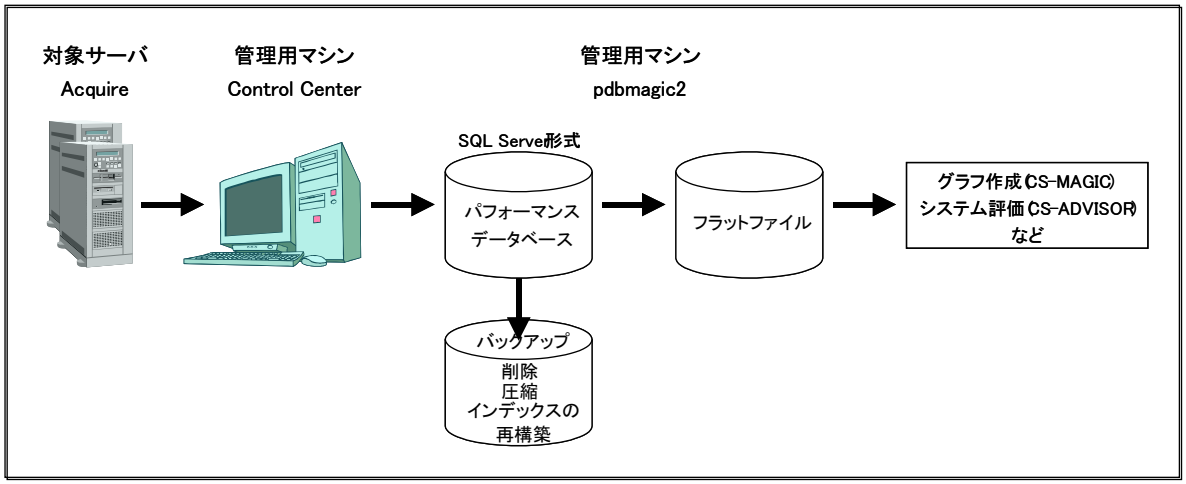


第5章　パフォーマンスデータベース（PDB）の運用

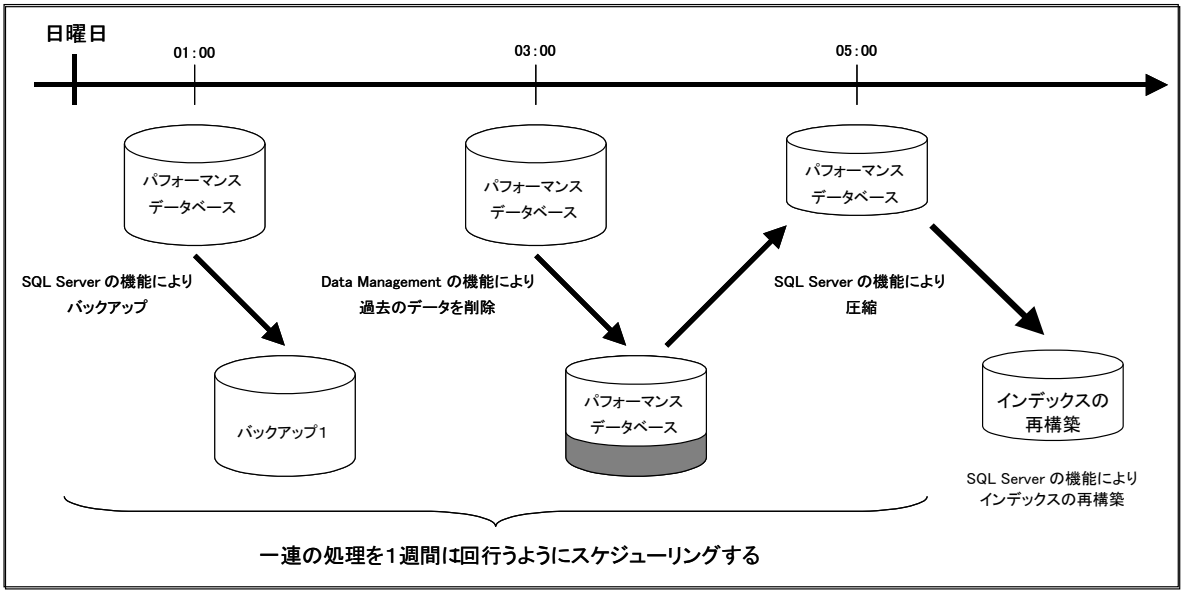
5.1.　パフォーマンスデータベースの定期メンテナンス

ES/1 NEO CS シリーズでは、対象サーバ上で Acquire がパフォーマンスデータを自動的に収集します。サーバ上で収集されたデータは、Control Center によって管理用マシンに転送され、パフォーマンスデータベース（PDB）と呼ばれる SQL Server のデータベースに蓄積されます。蓄積されたパフォーマンスデータベースの中から pdbmagic2 によって、パフォーマンス管理に必要なデータをフラットファイルとして抽出します。この pdbmagic2 が抽出したフラットファイルを入力データとして、システム評価やグラフ作成を行います。

pdbmagic2 による抽出処理が終了すれば、基本的に Control Center が蓄積するパフォーマンスデータベースは必要無くなります。しかし、突発的なアクシデントなどにより、パフォーマンスデータベースからフラットファイルを再作成しなくてはならない場合や、データベース自体が破損してしまった場合などのために、データベースのバックアップやメンテナンスを行う方法について説明します。



本マニュアルでは、「バックアップ→過去のデータの削除→データベースの圧縮」という流れで週に 1 回、「インデックスの再作成」を月に 1 回、パフォーマンスデータベースのメンテナンスを行う運用方法を説明します。



パフォーマンスデータベースのメンテナンスを行えるようにするまでの設定順序は、以下の通りです。

5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル
↓
5.1.2. パフォーマンスデータベースのバックアップ設定
↓
5.1.3. パフォーマンスデータベースの削除設定
↓
5.1.4. パフォーマンスデータベースの圧縮設定
↓
5.1.5. パフォーマンスデータベースのインデックスの再構築を設定

注意！

(1)パフォーマンスデータベースのバックアップ／削除／圧縮／インデックスの再構築、Control Center によるパフォーマンスデータベース変換、pdbmagic2 によるフラットファイルの抽出の各処理を同時に実行することはできません。各処理が同時刻に競合しないように予め運用スケジュールについて検討してください。

(2)パフォーマンスデータベースのバックアップ／削除を行う際には、管理用マシンの対象ドライブに十分な空き領域が存在している必要があります。対象ドライブに十分な空き領域があることを事前に確認してください。

5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル

パフォーマンスデータベースは一つの SQL Server データベースですので、他の SQL Server データベースと同様にバックアップ／圧縮の運用を構築することが可能です。
お客様環境におけるパフォーマンスデータベースの運用構築の支援を目的として、弊社からデータベースのバックアップ／削除／圧縮を行うための Windows バッチファイル／SQL Server 用 SQL ファイルをご提供します。

(1)Control Center のインストールメディアの下記フォルダ内に格納されている、パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル一式を、Control Center 導入マシンの適当なフォルダにコピーしてください。

「x:¥12.20CC01¥Sample¥CS 運用バッチ¥Syncsort Capacity Management¥PDB 運用¥bat」フォルダ
・Backup.bat　：パフォーマンスデータベースのバックアップ用バッチファイル
・Backup.sql　：パフォーマンスデータベースのバックアップ用 SQL ファイル
・RunSchedule.bat　：パフォーマンスデータベースの削除用バッチファイル
・RunScheduleScript.vbs　：パフォーマンスデータベースの削除用 vbs ファイル
・Archive.bat　：パフォーマンスデータベースの圧縮用バッチファイル
・ArchiveDB.sql　：パフォーマンスデータベースの圧縮用 SQL ファイル
・ArchiveLOG.sql　：トランザクションログの圧縮用 SQL ファイル
・CCStart.bat　：Control Center サービスの開始用バッチファイル
・CCStop.bat　：Control Center サービスの停止用バッチファイル

「x:¥12.20CC01¥Sample¥CS 運用バッチ¥Syncsort Capacity Management¥PDB 運用¥MSSQL」フォルダ
・BackupError.txt　：バックアップ処理のエラーメッセージ出力ファイル
・BackupOut.txt　：バックアップ処理の実行結果出力ファイル
・ArchiveDBError.txt　：データベースの圧縮処理のエラーメッセージ出力ファイル
・ArchiveDBOut.txt　：データベースの圧縮処理の実行結果出力ファイル
・ArchiveLOGError.txt　：トランザクションログの圧縮処理のエラーメッセージ出力ファイル
・ArchiveLOGOut.txt　：トランザクションログの圧縮処理の実行結果出力ファイル

(2)インストールメディアからコピーしたサンプルファイルは読み取り専用属性になっていますので、ファイルのプロパティにて読み取り専用属性を解除してください。

サンプルファイルのコピーと読み取り専用属性の解除が終了したら、「5.1.2. パフォーマンスデータベースのバックアップ設定」に進んでください。

5.1.2. パフォーマンスデータベースのバックアップ設定

「5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル」にてコピーした、パフォーマンスデータベースのバックアップ用サンプルファイルを、お客様の環境に合わせて編集します。

(1)「Backup.sql」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。

```
:error ①<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥BackupError.txt
:out ②<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥BackupOut.txt
BACKUP DATABASE [③AthenePDB] TO  DISK = N'④<論理ドライブ
>:¥IIM_DATA¥MSSQL¥DATA¥AthenePDB.bak' WITH NOFORMAT, INIT,  NAME =
N'AthenePDB-完全 データベース バックアップ', SKIP, NOREWIND, NOUNLOAD,  STATS = 10
GO
EXIT
```

①サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
②サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
③パフォーマンスデータベース名
④パフォーマンスデータベースのバックアップファイル名※
※パフォーマンスデータベースのバックアップファイルを格納するフォルダを事前に作成してください（サンプルでは「<論理ドライブ>:¥IIM_DATA¥MSSQL¥DATA」）。フォルダが存在していないとバックアップ処理がエラーします。

(2)「Backup.bat」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。
既定のインスタンスの場合

```
SQLCMD -i ①C:¥PDB 運用¥Backup.sql
```

任意のインスタンスの場合

```
SQLCMD -S コンピュータ名¥インスタンス名 -i ①C:¥PDB 運用¥Backup.sql
```

①サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ

(3)Windows のタスクスケジューラを使用して、「Backup.bat」を毎週 1 回（例：日曜日の 1:00）実行するように、スケジュール登録してください。

この後、「5.1.3. パフォーマンスデータベースの削除設定」に進んでください。

5.1.3. パフォーマンスデータベースの削除設定

日々Control Center によって各ターゲットのパフォーマンスデータが変換／蓄積され、パフォーマンスデータベースのサイズが増大していきます。CS シリーズの pdbmagic2 によってフラットファイルを抽出した後は、基本的にパフォーマンスデータベースのデータは不要となります。
ここでは、蓄積された過去のパフォーマンスデータを定期的に削除する設定について説明します。パフォーマンスデータの削除には、Control Center アプリケーションの Data Management と Schedule Editor を使用します。

過去のパフォーマンスデータの削除を行うための設定順序は、以下の通りです。

(1)Data Management によるテンプレートの設定
↓
(2)Schedule Editor による削除処理の設定
↓
(3)vbs ファイルを使用したバッチ実行設定

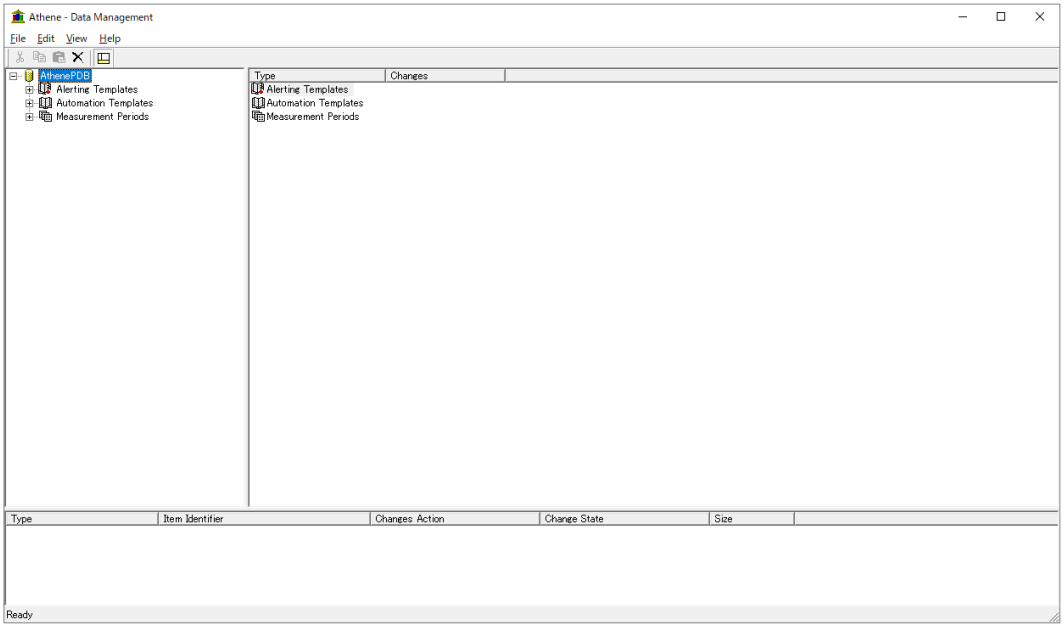
(1)Data Management によるテンプレートの設定

ここでは、パフォーマンスデータベースを自動削除するための Data Management の設定について説明します。Data Management では、「Template」という削除のための設定を作成します。作成した Template をスケジュール機能で定期的に実行することにより、パフォーマンスデータベースの自動削除が可能になります。

メモ！
パフォーマンスデータベース内の収集データが連続している期間を「Period」と呼び、Control Center は Period 単位でパフォーマンスデータベースの蓄積や管理を行います。Data Management によるパフォーマンスデータベースの削除も、この Period 単位で行われます

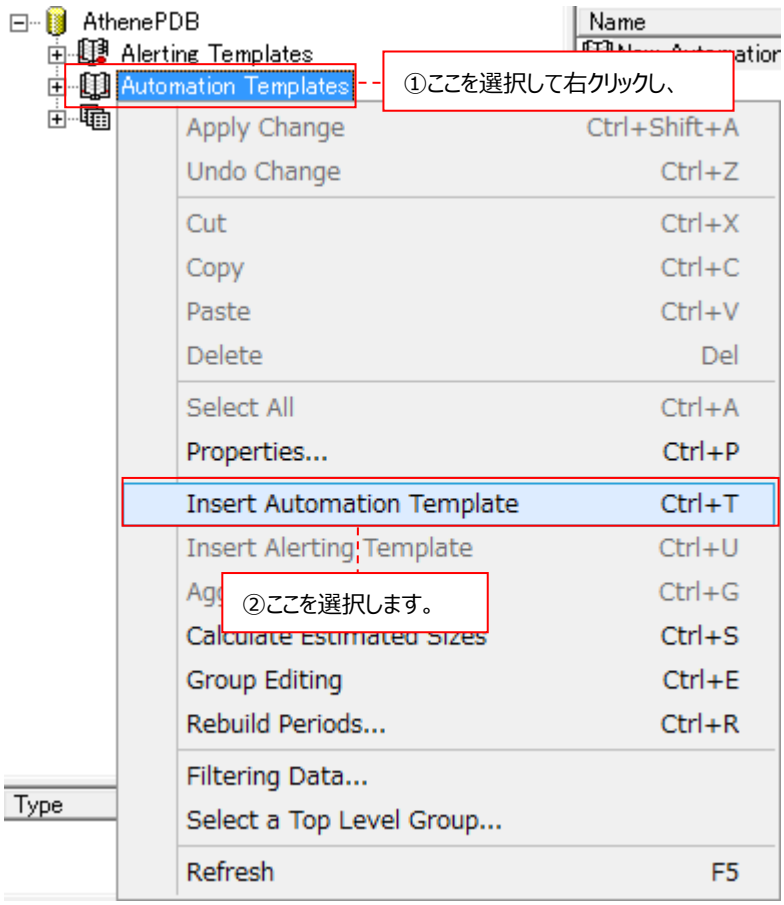
(1-1)Data Management の起動

「スタート→アプリ→Syncsort Capacity Management Core→Data Management」を起動します。

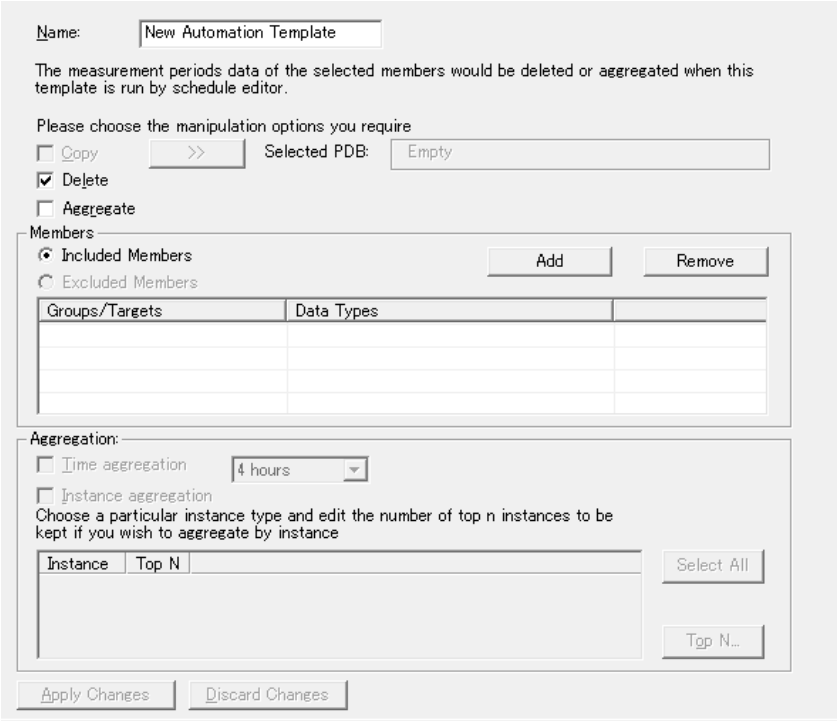


(1-2)Template の新規作成

画面左側のツリー表示から「Automation Templates」を選択して右クリックし①、「Insert Automation Template」を選択します②。

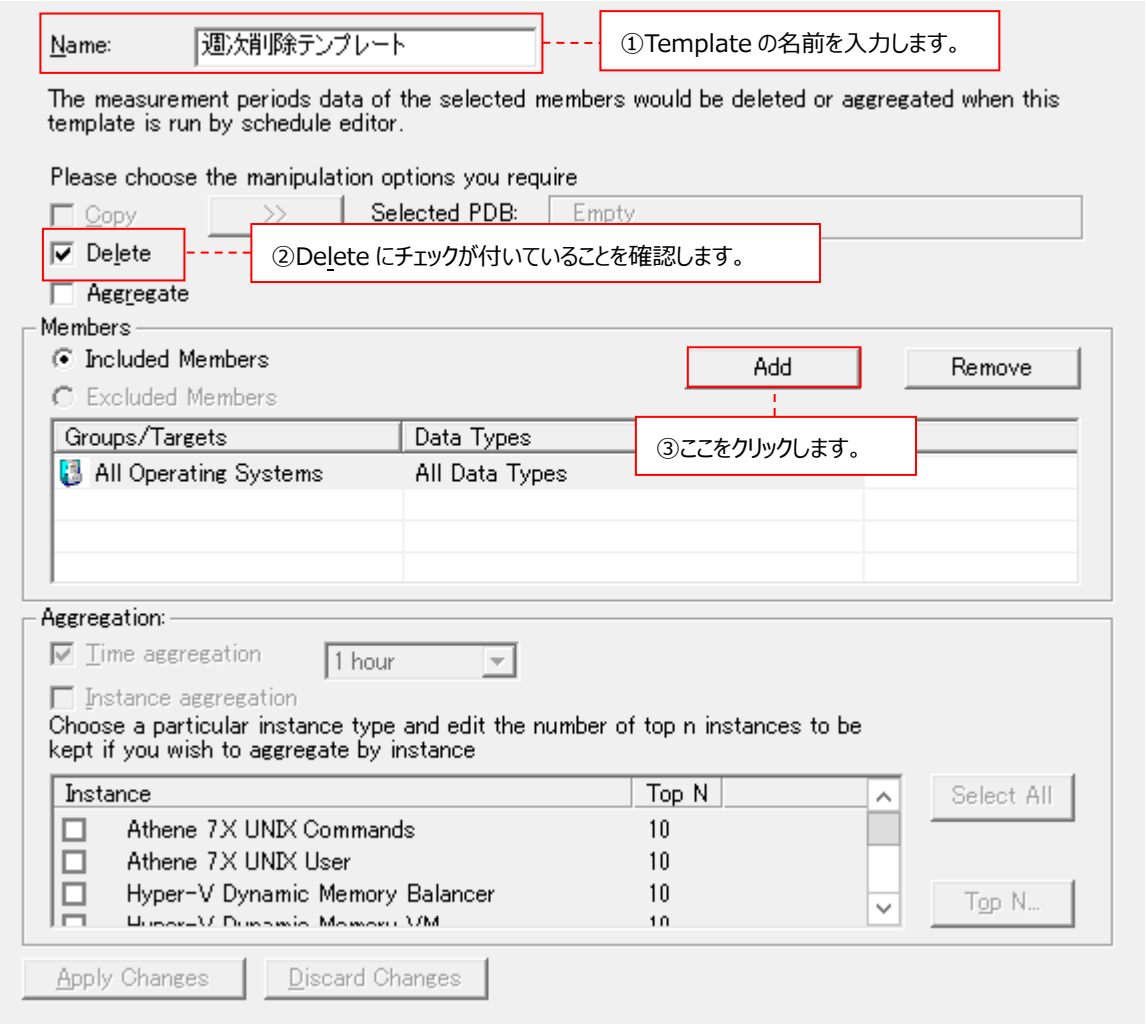


画面右側に Template の設定ウィンドウが表示されます。



(1-3)Template の設定

Template に対する名前と過去のデータを削除するターゲットを指定します。

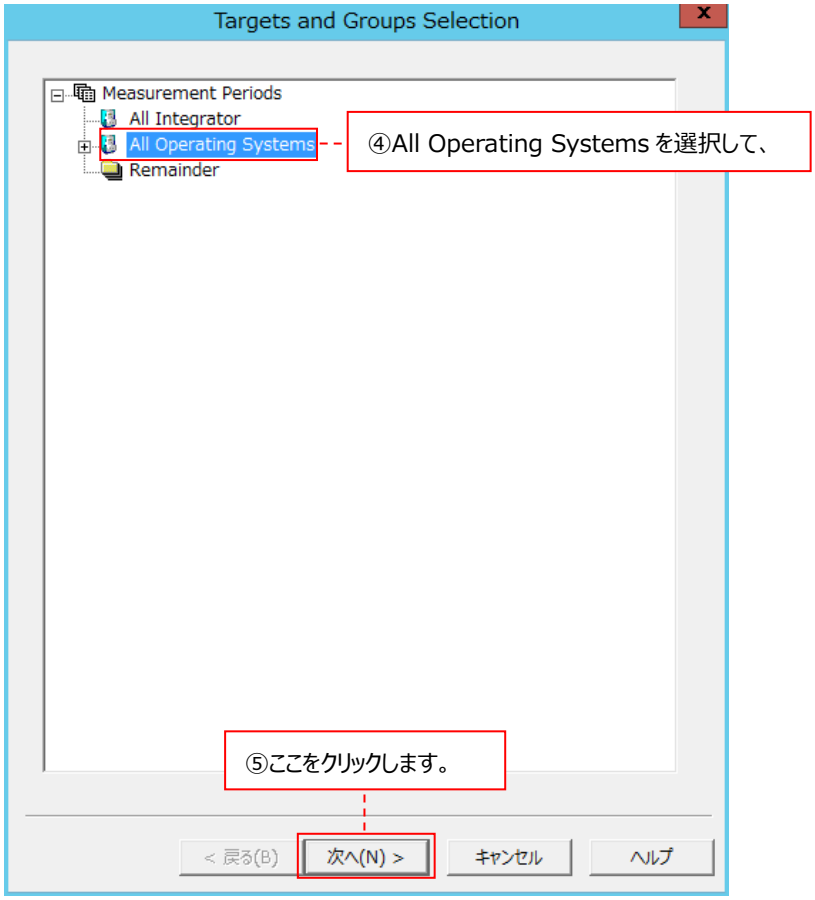


①Name　　：Template に対する名前を指定します。

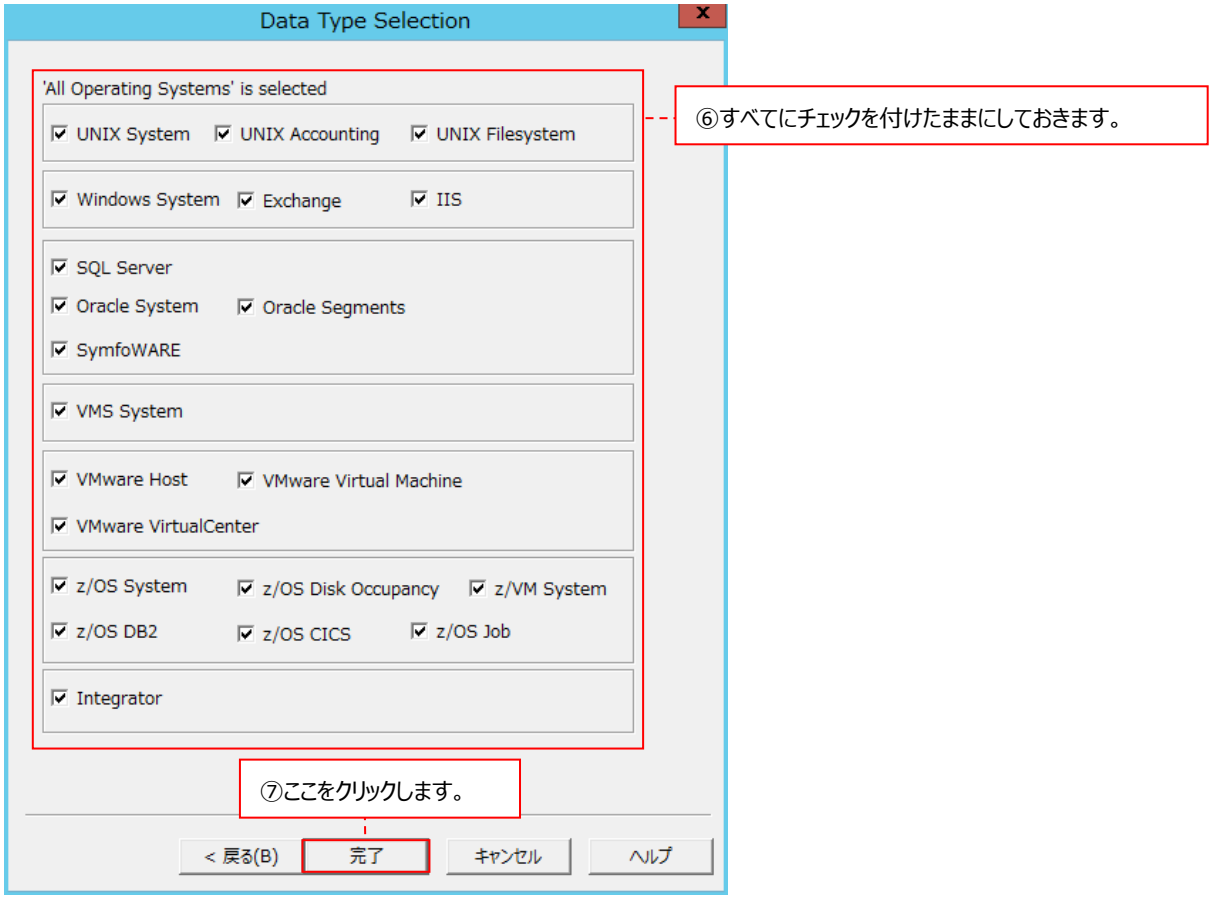
②処理の種類　　：Delete にチェックが付いていることを確認します。Aggregate は使用できませんので、チェックしないでください。

①と②を指定したら、画面中段の Members において過去のデータを削除するターゲットを指定します。
[Add]ボタンをクリックします③。

下の画面が表示されます。ツリー表示の中からターゲットを個別に選択することもできますが、ここでは All Operating Systems を選択した後④、[次へ(N) >]ボタンをクリックし⑤、全ターゲットを対象とします。

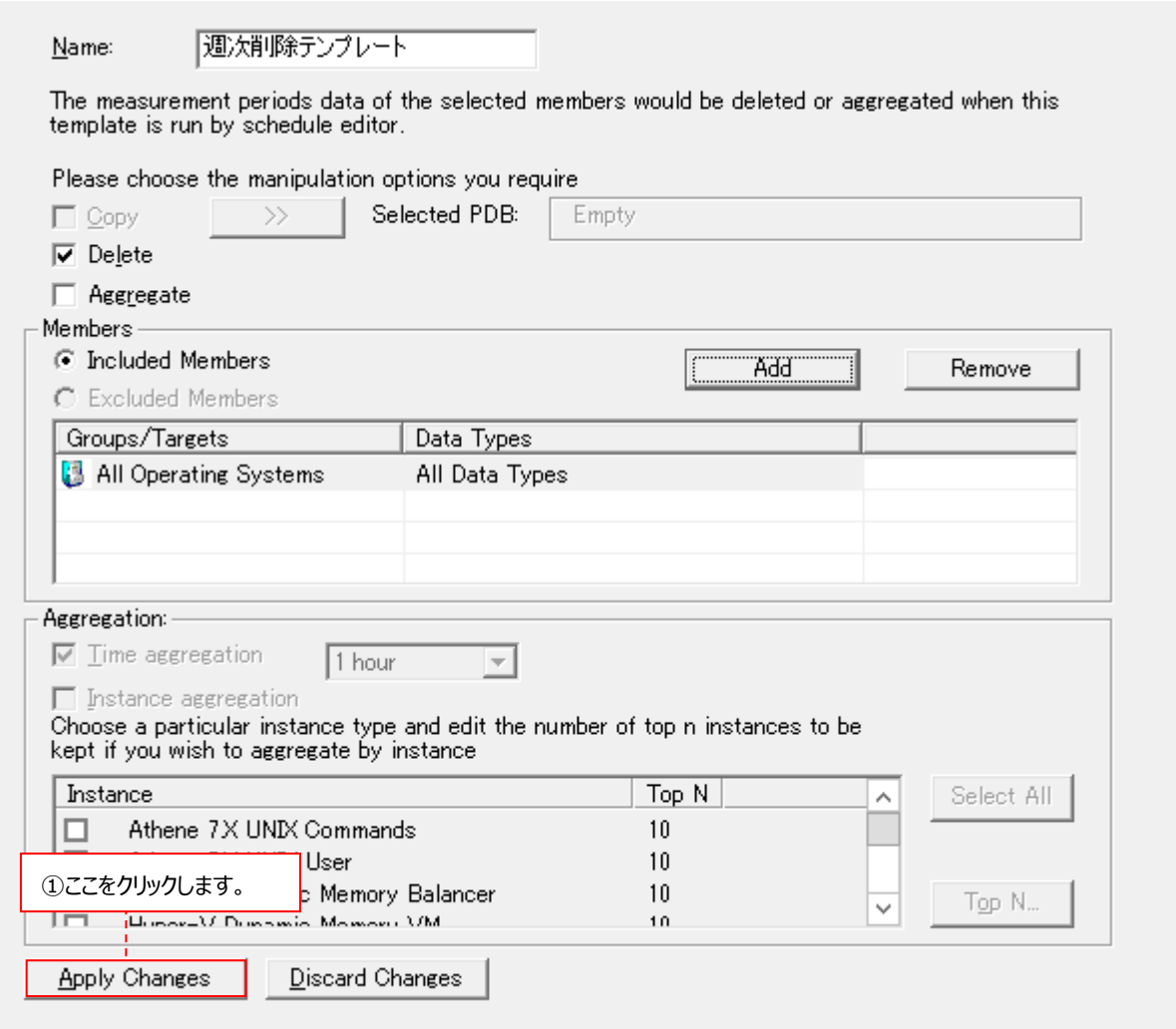


下の画面が表示されます。削除するデータの種類を選択することもできますが、ここではすべてにチェックが付いた状態のままで⑥、[完了]ボタンをクリックします⑦。



(1-4)Template の保存

Template の設定を保存します。画面下部にある[Apply Changes]ボタンをクリックします①。



設定が完了したら画面右上の「×」ボタンをクリックして、Data Management を終了します。
「(2) Schedule Editor による削除処理設定」に進んでください。

メモ！
データを削除する対象ターゲットとして「All Operating Systems」を選択している場合、一度 Template を設定した後に定義した新たなターゲットも、Data Management による削除処理の対象になります。

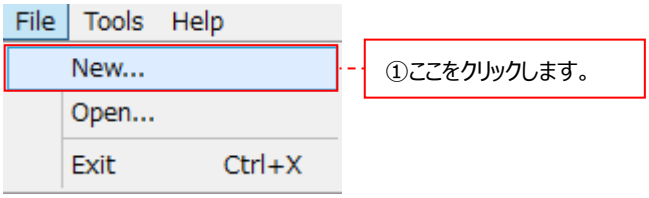
(2)Schedule Editor による削除処理設定

ここでは、「(1) Data Management によるテンプレートの設定」で作成した削除処理の Template を定期的に実行させる Schedule Editor について説明します。本マニュアルでは、毎週 1 回、削除処理を実行する設定を記載します。

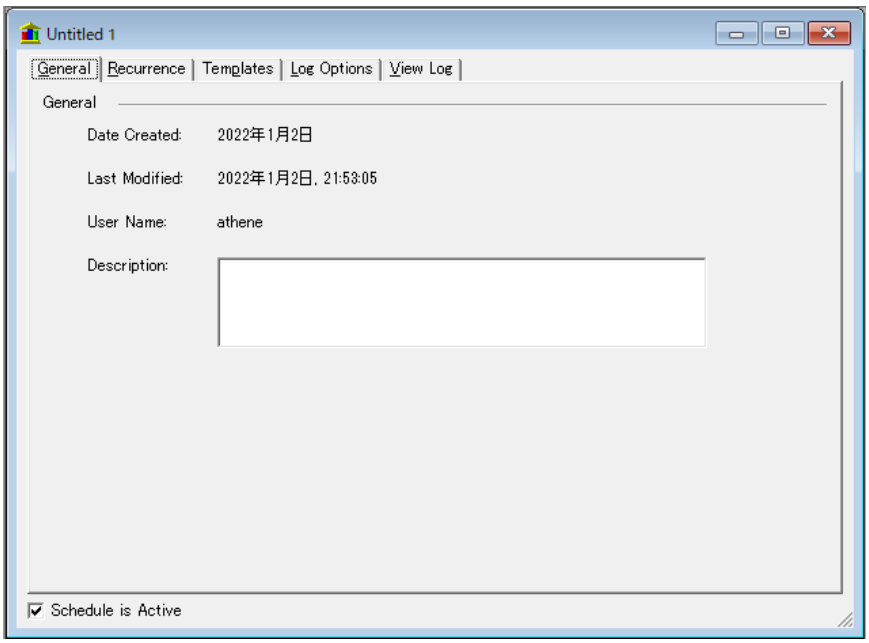
(2-1) Schedule Editor の起動

「スタート→アプリ→Syncsort Capacity Management Core→Schedule Editor for Data Management」を起動します。

画面上部のメニュー「File→New…」を選択します①。

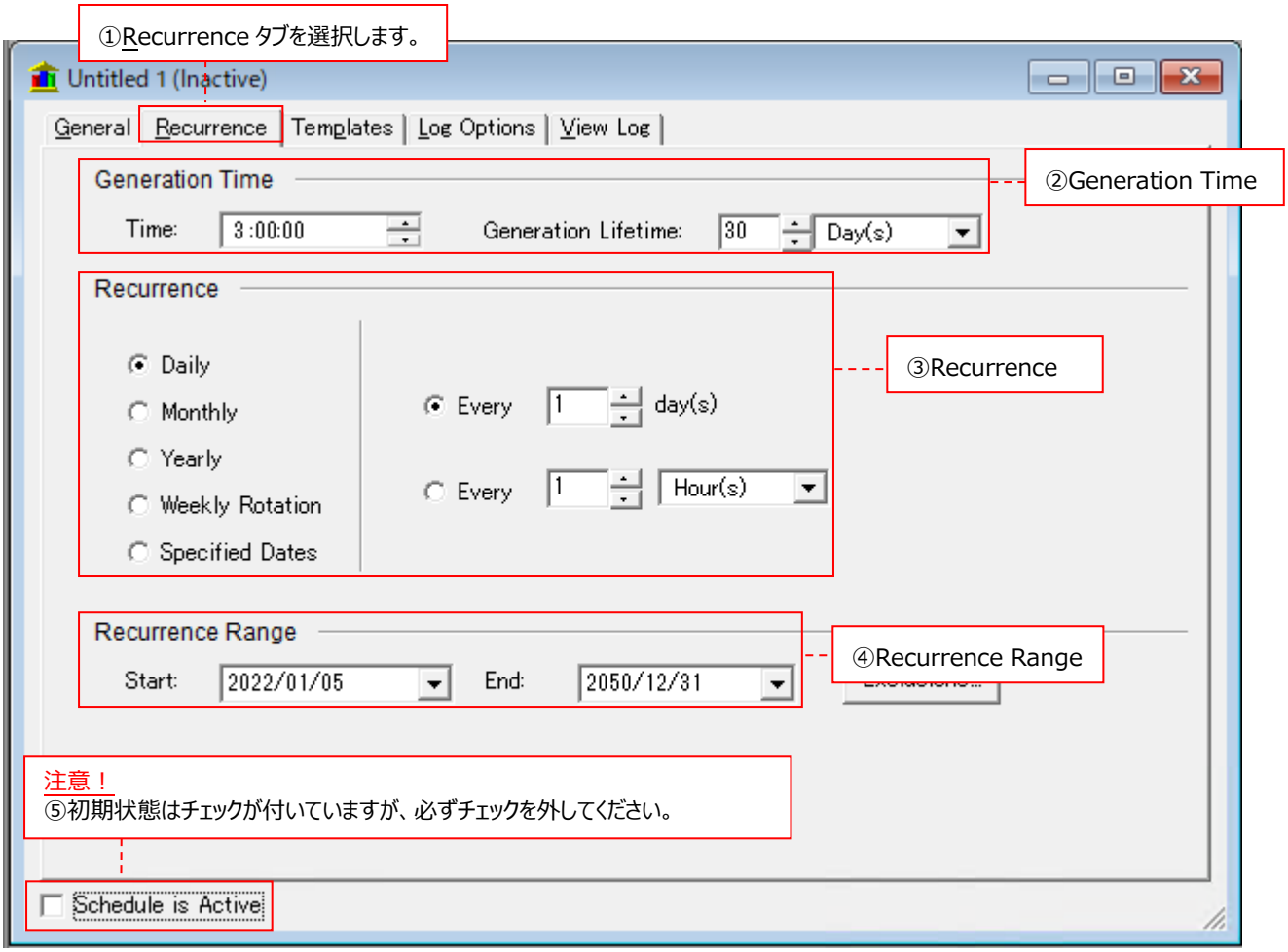


下図の画面が表示されます。



(2-2)Template 実行タイミングの設定

削除処理を実行するタイミングを設定します。Recurrence タブを選択します①。



②Generation Time

Time　　：削除処理を起動する時刻を指定します。ここでは、3:00 を指定します。

Generation Lifetime　　：管理用マシンの電源が切られていた時などスケジュール起動ができない場合に、再度起動を試みる期間を指定します。デフォルトの 30Days のままにしておきます。

③Recurrence

削除処理を実行する周期を指定します。ここでは、毎週実行するために、以下のように指定します。

・Daily にチェックします。

・Every　7 days と指定します。

④Recurrence Range

設定したスケジュール自体の有効期間を指定します。

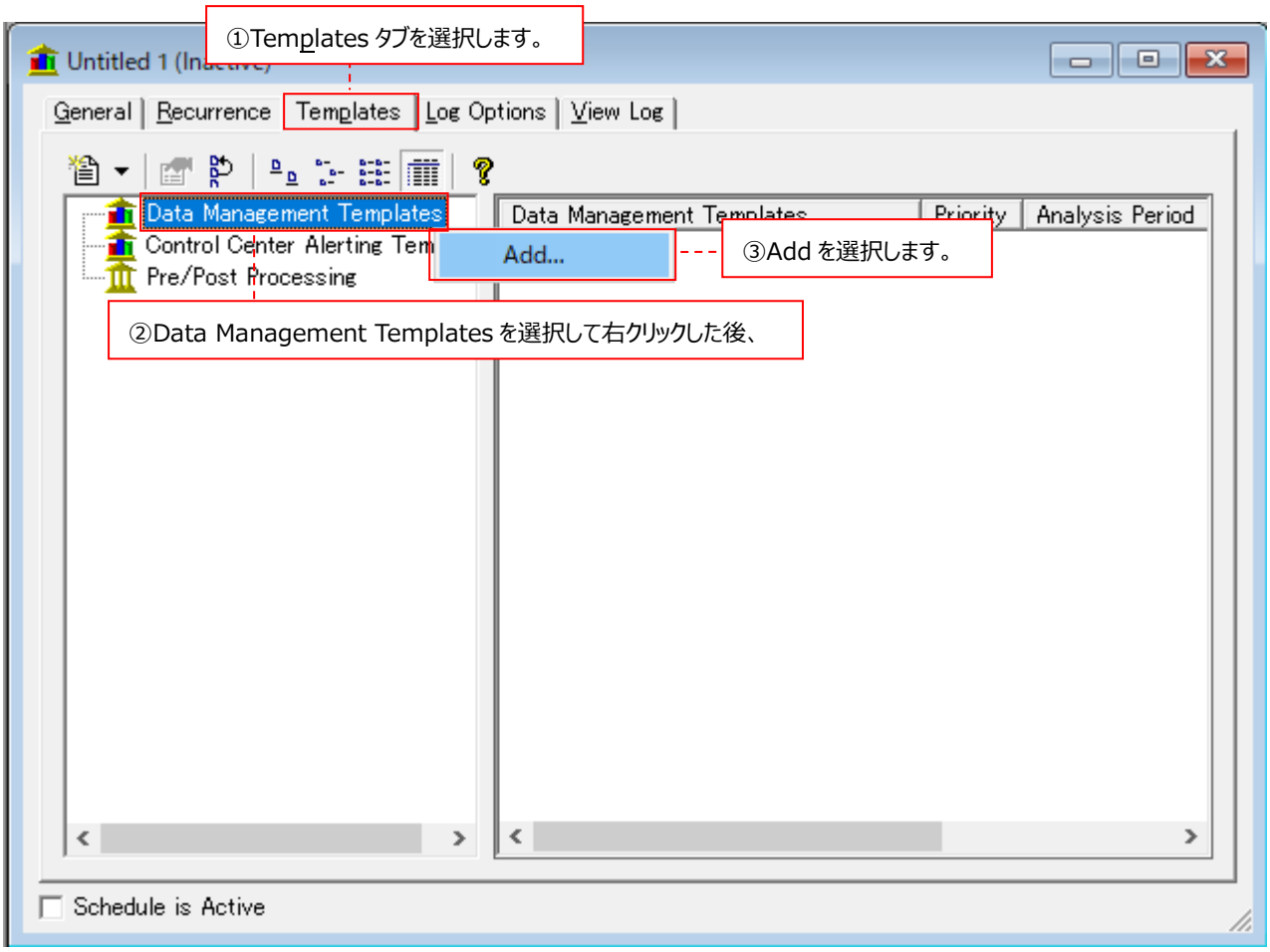
Start　　：削除処理を実行する曜日の日付を指定します。例えば、2022 年 1 月 2 日（日曜日）を指定すると、その日から 7 日毎（Every 7days）、すなわち毎週日曜日に削除処理を実行します。

End　　：設定したスケジュール自体の有効期限を指定します。

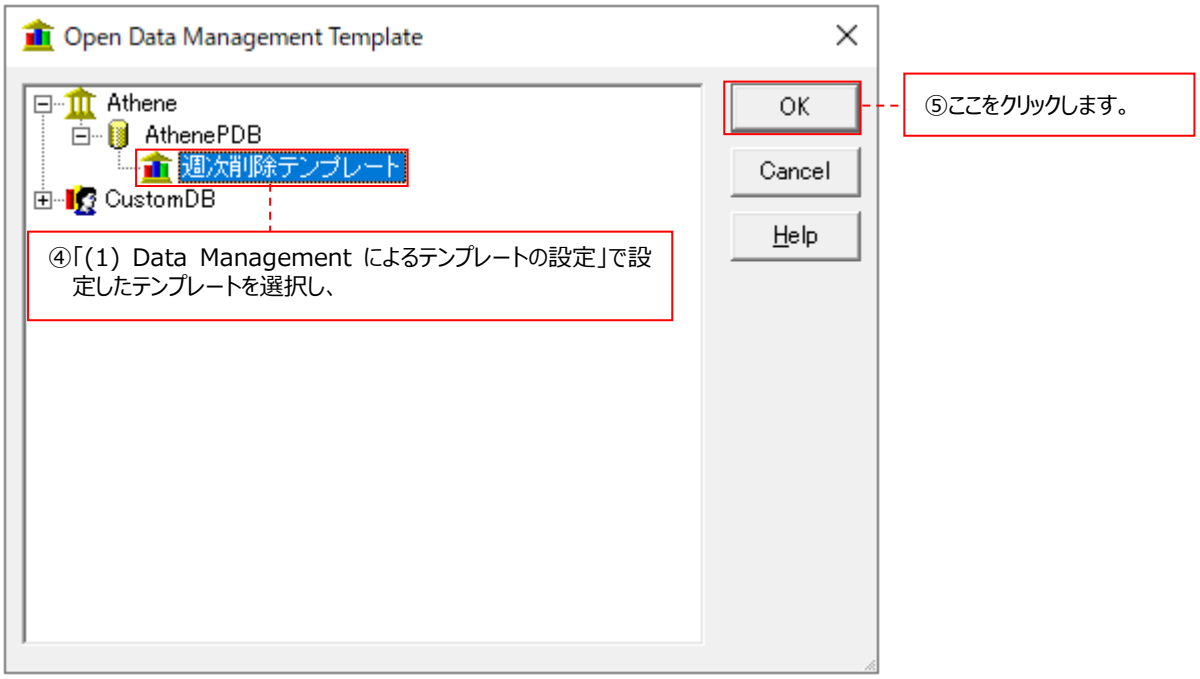
⑤Schedule is Active　　：必ずチェックを外します。

(2-3)Template の選択および削除するデータ期間の設定

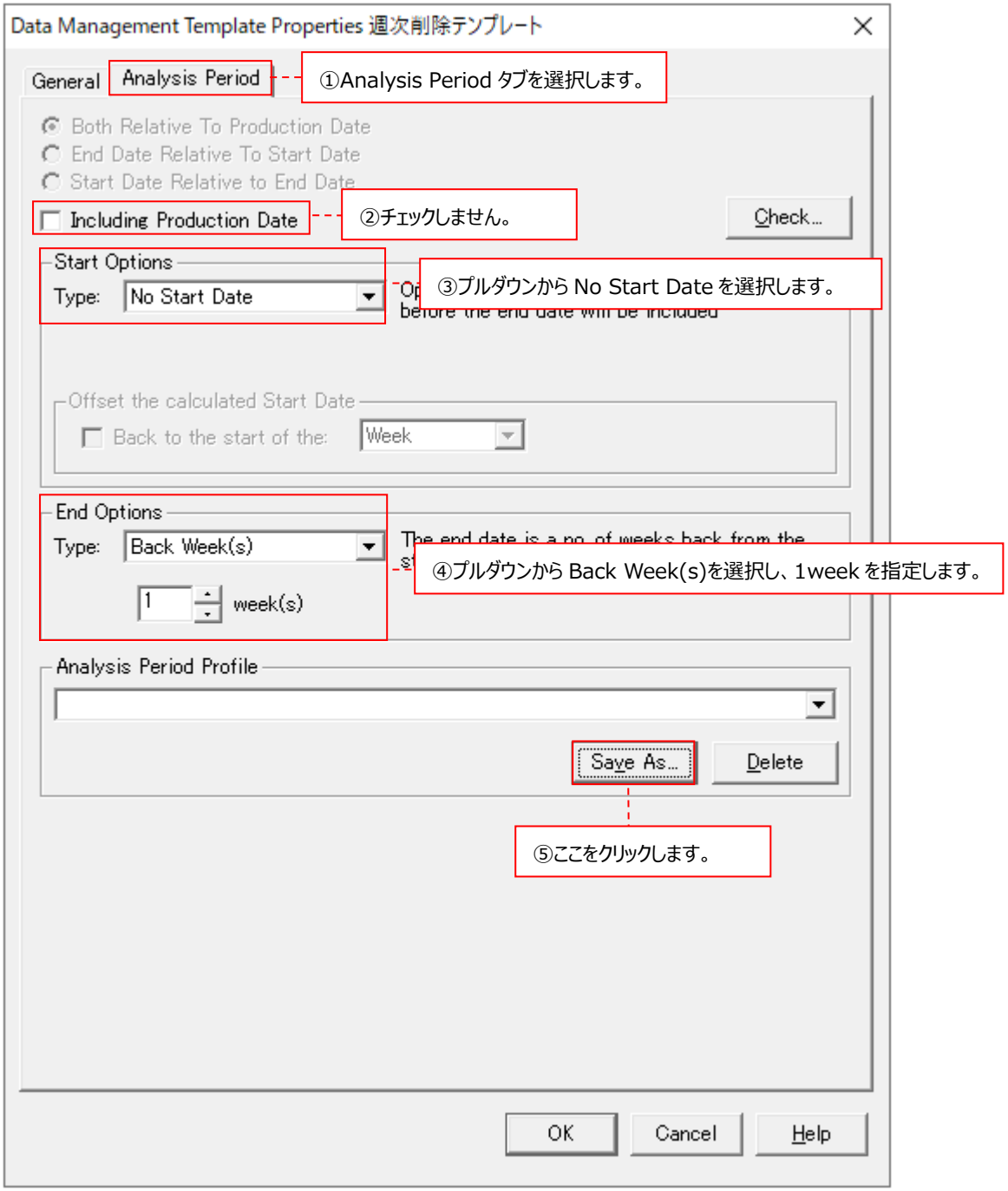
使用する Template を選択し、削除するデータ期間を設定します。Templates タブを選択します①。
画面内の「Data Management Templates」を選択して右クリックした後②、「Add...」を選択します③。



以下の画面が表示されます。ツリー表示の「Athene」を展開し、「(1) Data Management によるテンプレートの設定」で設定したテンプレートを選択した後④、[OK]ボタンをクリックします⑤。



以下の画面が表示されます。General タブでは何も変更せずに、Analysis Period タブを選択します①。



②Including Production Date　　：チェックしません。

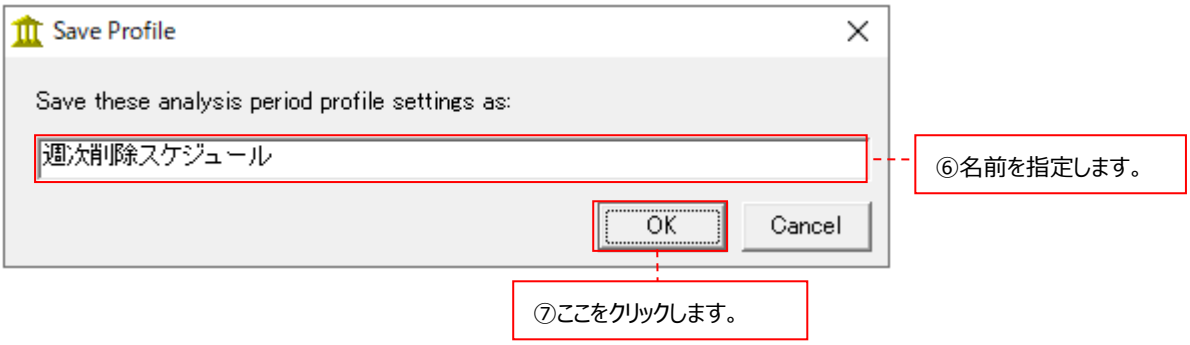
③Start Options
　Type　　：No Start Date を選択します。

④End Options
　Type　　：Back Week(s)を選択します。
　week(s)　　：1week を指定します。

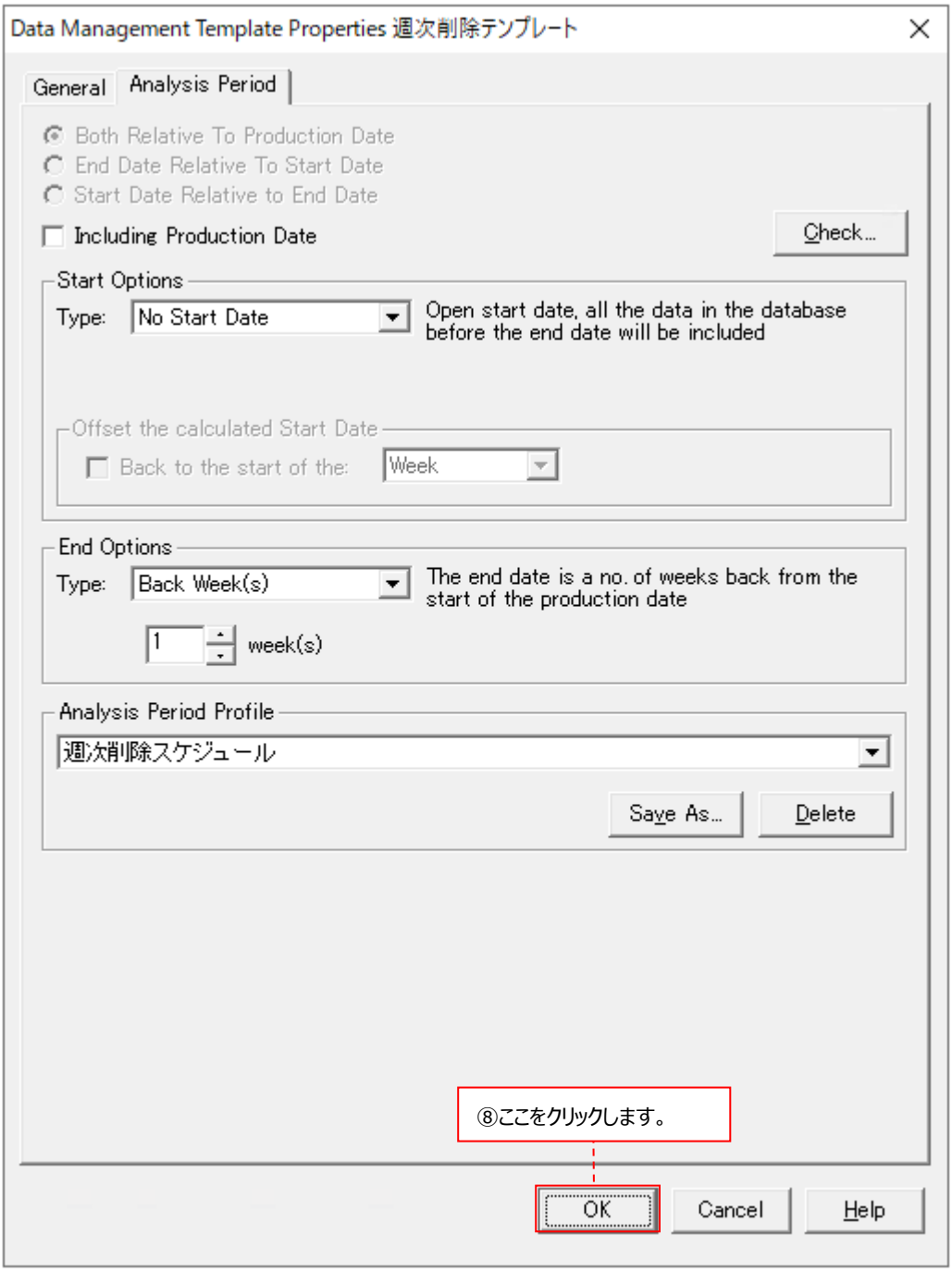
最終的に上図の画面のように設定されていることを確認してください。この設定では、1 週間前より過去のデータを削除します（Control Center が管理する period の状況によって 1 週間より長くなる場合があります）。

設定が終了したら、［Save As...］ボタンをクリックします⑤。

Save Profile のダイアログが表示されます。スケジュールの設定に名前を指定して⑥、[OK]ボタンをクリックします⑦。

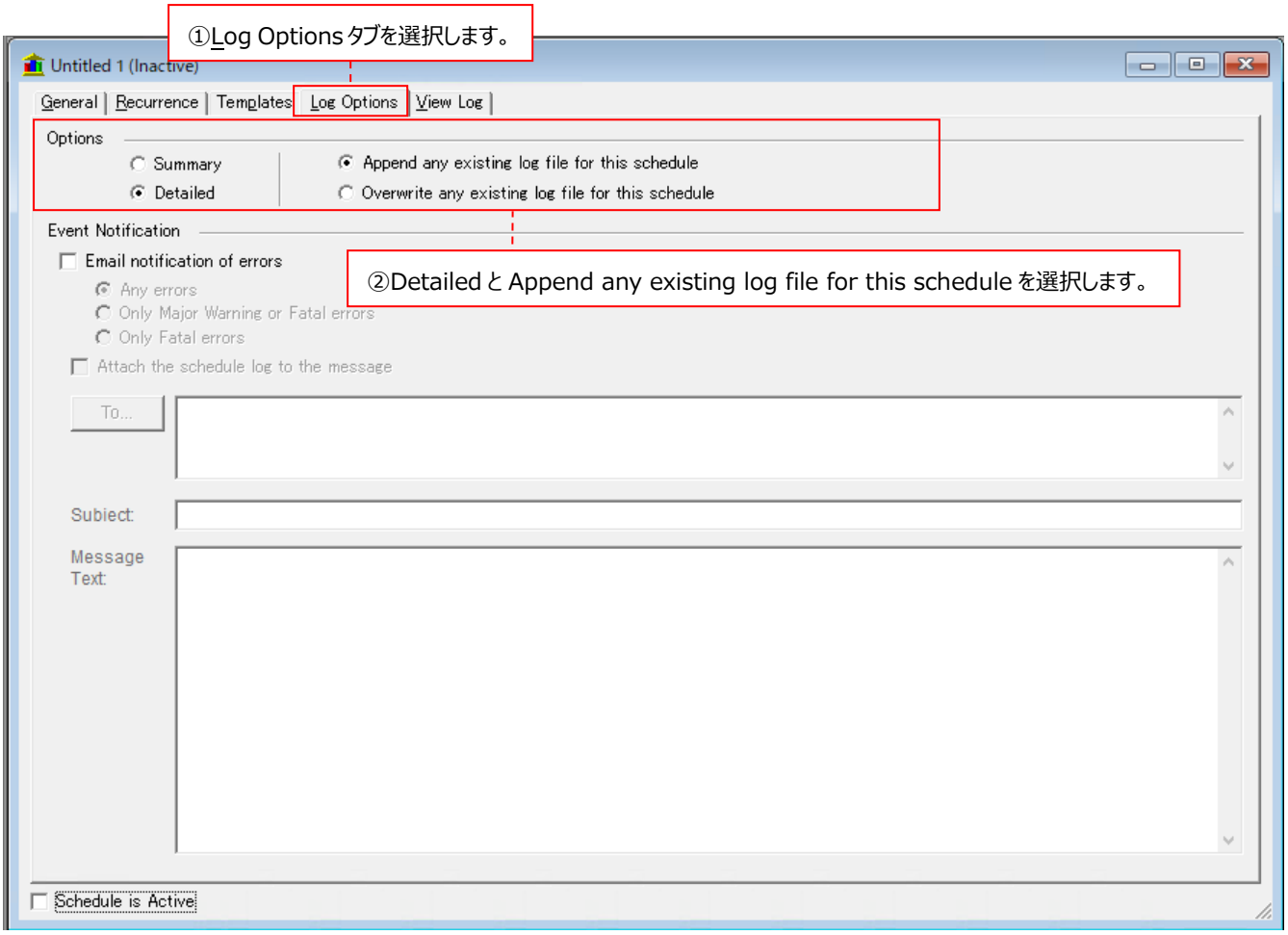


Analysis Period タブの[OK]ボタンをクリックします⑧。



(2-4)削除処理の実行ログの出力オプション設定

削除処理の実行ログを出力する際のオプションを指定します。Log Options タブを選択します①。

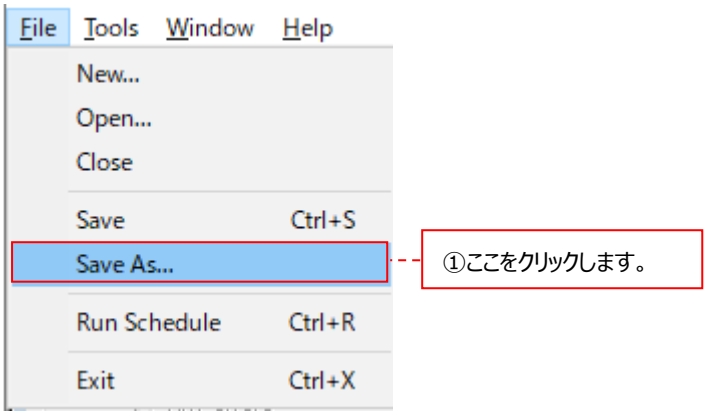


②Options　　：Detailed と Append any existing log file for this schedule をチェックします。

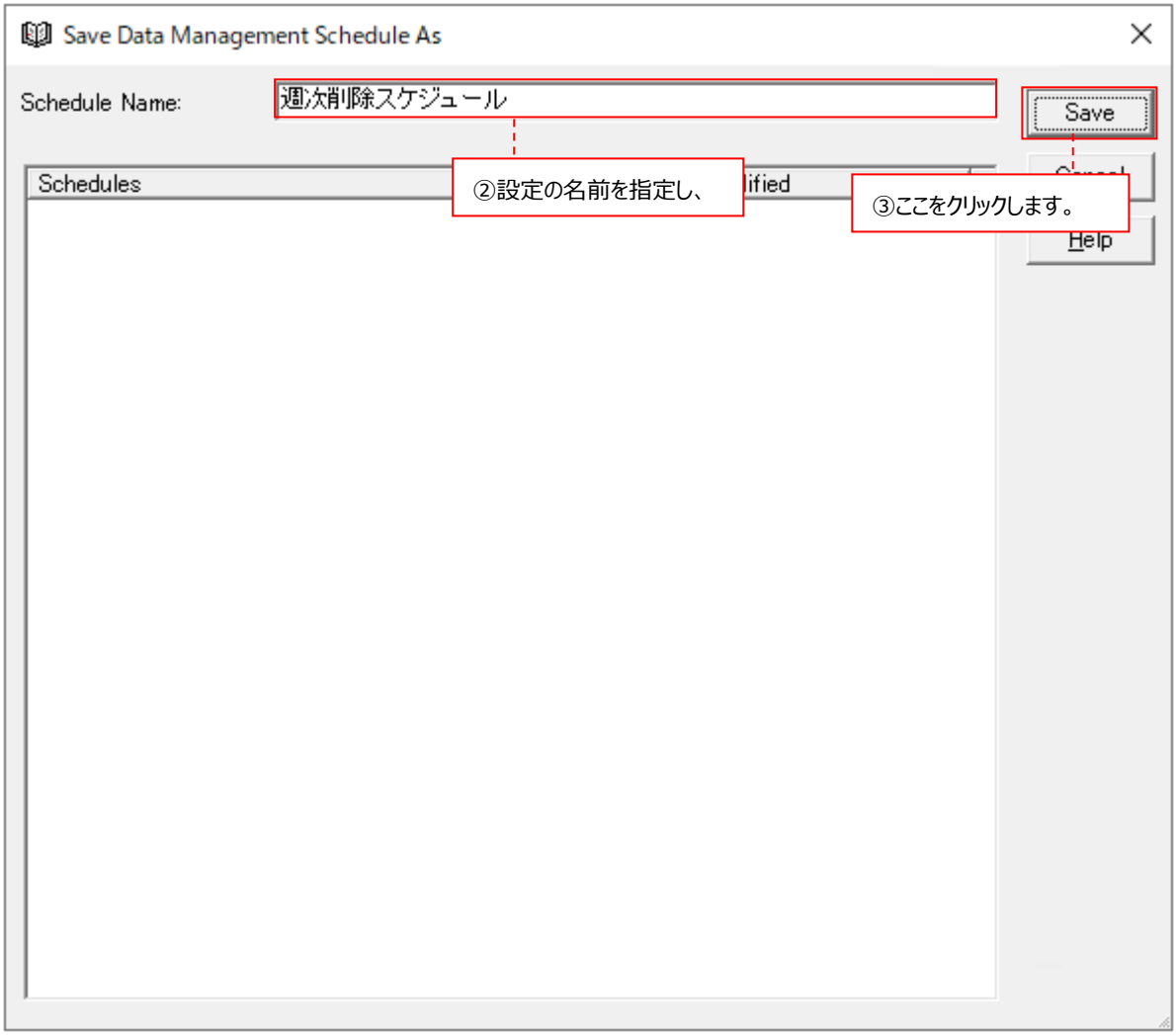
注意！
Event Notification 機能は使用できません。

(2-5)設定の保存

画面上部のメニュー「File→Save As…」を選択します①。



Schedule Name に設定の名前を指定し②、[Save]ボタンをクリックします③。



設定が完了したら画面右上の「×」ボタンをクリックして、Schedule Editor を終了します。

「(3) vbs ファイルを使用したバッチ実行設定」に進んでください。

(3)vbs ファイルを使用したバッチ実行設定

ここでは、「(2) Schedule Editor による削除処理設定」で作成した削除処理のスケジュールを、vbs ファイルを使用してバッチ実行させる方法について説明します。

(3-1) vbs ファイルの編集

「5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル」にてコピーした、パフォーマンスデータベースの削除用サンプルファイルを、お客様の環境に合わせて編集します。

「RunScheduleScript.vbs」をテキストエディタで開き、①③部分を編集します。

```
Set RunSchedule = CreateObject("AXM620.AtheneRunSchedule")
RunSchedule.Initialise "PDB_Delete.txt", 2, "C:¥ProgramData¥Metron¥Data Management", Now, True
                        ①            ②                    ③                            ④    ⑤
RunSchedule.RunSchedule
```

①File Name

Schedule Editor で作成した設定ファイル名を、ダブルクォーテーションで指定します。
この設定ファイルは「設定名.txt」の形式で③のパス配下の Schedules フォルダに作成されます。

②Type

実行される Schedule のタイプを指定します。
ここでは Data Management を意味する「2」を常に指定します。

③Schedules Path

Data Management フォルダがあるパスをダブルクォーテーションで指定します。

"C:¥ProgramData¥Metron¥Data Management"

④Schedule Date

実行日を指定します。ここでは常に「Now」を指定します。
設定した日を基準に、削除対象期間が計算されます。

⑤Automatic

Schedule Editor 以外の方法で実行するかどうかを設定します。
ここでは常に「True」を指定します。

(3-3)バッチファイルの編集

「5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル」にてコピーした、パフォーマンスデータベースの削除用サンプルファイルを、お客様の環境に合わせて編集します。

「RunSchedule.bat」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。

```
REM VBScript to run an Athene schedule (of type Automatic Reporting, Data Management or CustomDB)

cscript ①RunScheduleScript.vbs
```

①vbs ファイルが存在するフルパス
（例） C:¥IIM¥bat¥RunScheduleScript.vbs

(3-4)タスクスケジューラまたは管理コンソールへの登録

Windows のタスクスケジューラまたは管理コンソールのジョブ機能を使用して、「RunSchedule.bat」を毎週 1 回（例：日曜日の 3:00）実行するように、スケジュール登録してください。

注意！
vbs ファイルを使用してバッチ実行した削除処理に関しては、Scheduler Editor の「Schedule is Active」のチェックが外れているかどうかに関わらず、削除処理は実行されます。
「Schedule is Active」のチェックの機能は、Athene Scheduler サービスから処理を起動させる場合のみ有効です。

RunScheduleScript.vbs を定常運用に組み込む場合は、Athene Scheduler サービスを「停止」(スタートアップ"手動"に変更)して運用することを推奨します。

(1)vbs ファイルを使用してバッチ実行する場合、Data Management の削除処理が多重起動しないように、下記の点に注意してください。
・Scheduler Editor の設定を非有効化した状態で実行すること（「Schedule is Active」のチェックが外れている）

(2)「RunSchedule.bat」を実行する際は、Control Center サービスを停止してください。
また、Windows のタスクスケジューラまたは管理コンソールのジョブ機能へ「RunSchedule.bat」の実行スケジュールを登録する場合、Control Center サービスが停止している時間帯にスケジュールしてください。
Control Center サービスがデータを処理している時に Data Management の削除処理を実行するとデータが欠損することがあります。

「5.1.4. パフォーマンスデータベースの圧縮設定」に進んでください。

5.1.4. パフォーマンスデータベースの圧縮設定

「5.1.3. パフォーマンスデータベースの削除設定」によって、パフォーマンスデータベースから過去のデータを削除しただけでは、ディスク上のデータベースファイルのサイズは縮小されません。
SQL Server の機能を使用してデータベースファイルの圧縮を行うことによって、ディスク領域を解放します。
「5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル」にてコピーした、パフォーマンスデータベースの圧縮用サンプルファイルを、お客様の環境に合わせて編集します。

(1)「ArchiveDB.sql」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。

```
:error ①<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥ArchiveDBError.txt
:out ②<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥ArchiveDBOut.txt
USE [③AthenePDB]
GO
DBCC SHRINKDATABASE(N'④AthenePDB' )
GO
EXIT
```

①サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
②サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
③パフォーマンスデータベース名
④パフォーマンスデータベース名

(2)「ArchiveLOG.sql」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。

```
:error ①<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥ArchiveLOGError.txt
:out ②<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥ArchiveLOGOut.txt
USE [③AthenePDB]
GO
DBCC SHRINKFILE (N'④AthenePDB_log' , 0)
GO
EXIT
```

①サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
②サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
③パフォーマンスデータベース名
④パフォーマンスデータベース名（[AthenePDB]までがデータベース名です。「_log」は編集しないでください）

(3)「Archive.bat」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。
既定のインスタンスの場合

```
SQLCMD -i ①C:¥PDB 運用¥ArchiveDB.sql
SQLCMD -i ②C:¥PDB 運用¥ArchiveLOG.sql
```

任意のインスタンスの場合

```
SQLCMD -S コンピュータ名¥インスタンス名 -i ①C:¥PDB 運用¥ArchiveDB.sql
SQLCMD -S コンピュータ名¥インスタンス名 -i ②C:¥PDB 運用¥ArchiveLOG.sql
```

①サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ
②サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ

(4)Windows のタスクスケジューラを使用して、「Archive.bat」を毎週 1 回（例：日曜日の 5:00）実行するように、スケジュール登録してください。

5.1.5. パフォーマンスデータベースのインデックスの再構築設定

パフォーマンスデータベースの削除、挿入、更新処理によってデータベースの断片化が進み、読み取り処理や書き込み処理の時間が長くなることが懸念されます。
SQL Server の機能を使用してインデックスの再構築を行い、断片化を解消します。
「5.1.1. パフォーマンスデータベースのメンテナンス用サンプルファイル」にてコピーした、パフォーマンスデータベースのインデックスの再構築のサンプルファイルを、お客様の環境に合わせて編集します。

(1)「DefragScript.sql」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。

```
21 行目　USE [①AthenePDB]
29 行目　:error ②<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥DefragDBError.txt
30 行目　:out ②<論理ドライブ>:¥IIM¥MSSQL¥DefragDBOut.txt
```

① パフォーマンスデータベース名

② サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ

(2)通常は編集不要ですが、必要に応じて以下のパラメータを変更してください。

```
35 行目　SELECT @maximumFragmentationLevelAllowed = ①50.0;
40 行目　SELECT @reportOnly = ②0;
```

① 再構築対象とする索引の断片化率を指定します。デフォルト値は 50 です。断片化率 50%以上が再構築の対象となります。

② インデックスの再構築を行うか、断片化率の結果を表示するかを選択することができます。デフォルト値は 0 です。インデックスの再構築が行われます。1 を指定すると断片化率の表示のみが行われます。

(3)「Defrag.bat」をテキストエディタで開き、下線部分を編集します。
既定のインスタンスの場合

```
SQLCMD -i ①C:¥IIM¥bat¥DefragScript.sql
```

任意のインスタンスの場合

```
SQLCMD -S コンピュータ名¥インスタンス名 -i ①C:¥IIM¥bat¥DefragScript.sql
```

① サンプルファイル一式をコピーしたフォルダ

(4)Windows のタスクスケジューラーを使用して、「Defrag.bat 」を毎月 1 回（例：第 2 日曜日の 6:00）実行するように、スケジュール登録してください。

5.1.6. 旧バージョンでのパフォーマンスデータベースの削除設定

これ以降の章は、旧バージョンの CS シリーズで提供していたマニュアル内容を記載していますが、通常参照する必要はありません。

日々Control Center によって各ターゲットのパフォーマンスデータが変換／蓄積され、パフォーマンスデータベースのサイズが増大していきます。CS シリーズの pdbmagic2 によってフラットファイルを抽出した後は、基本的にパフォーマンスデータベースのデータは不要となります。
ここでは、蓄積された過去のパフォーマンスデータを定期的に削除する設定について説明します。パフォーマンスデータの削除には、Control Center アプリケーションの Data Management と Schedule Editor を使用します。

過去のパフォーマンスデータの削除を行うための設定順序は、以下の通りです。

(1)Data Management によるテンプレートの設定
↓
(2)Schedule Editor による削除処理のスケジュール設定

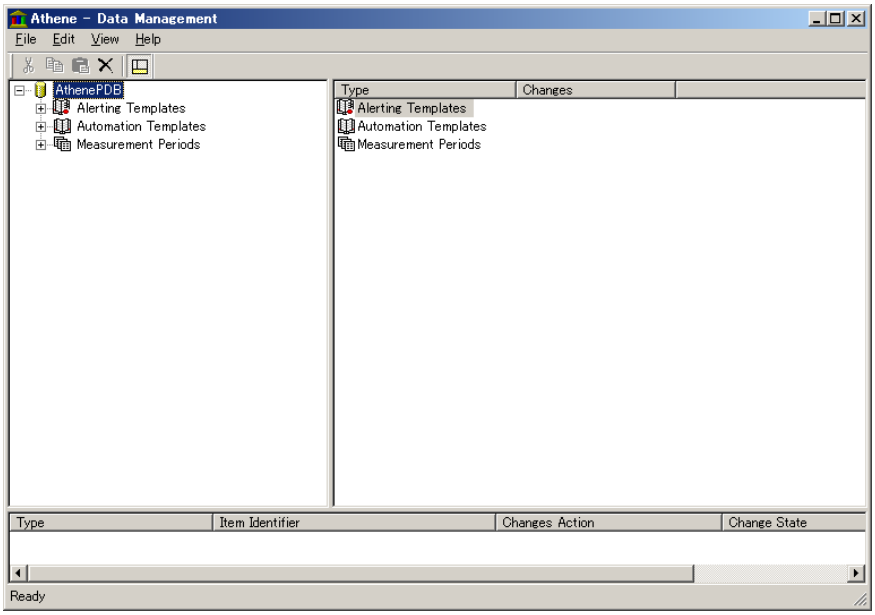
(1)Data Management によるテンプレートの設定

ここでは、パフォーマンスデータベースを自動削除するための Data Management の設定について説明します。Data Management では、「Template」という削除のための設定を作成します。作成した Template をスケジュール機能で定期的に実行することにより、パフォーマンスデータベースの自動削除が可能になります。

メモ！
パフォーマンスデータベース内の収集データが連続している期間を「Period」と呼び、Control Center は Period 単位でパフォーマンスデータベースの蓄積や管理を行います。Data Management によるパフォーマンスデータベースの削除も、この Period 単位で行われます。

(1-1) Data Management の起動

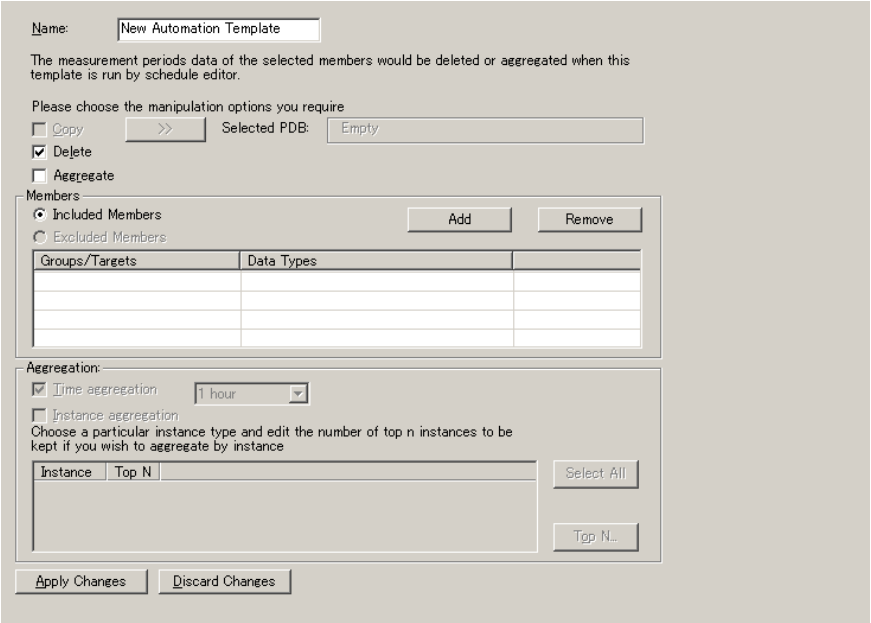
「スタート→プログラム→Syncsort Capacity Management Core→Data Management→Data Management」を起動します。



(1-2)Template の新規作成

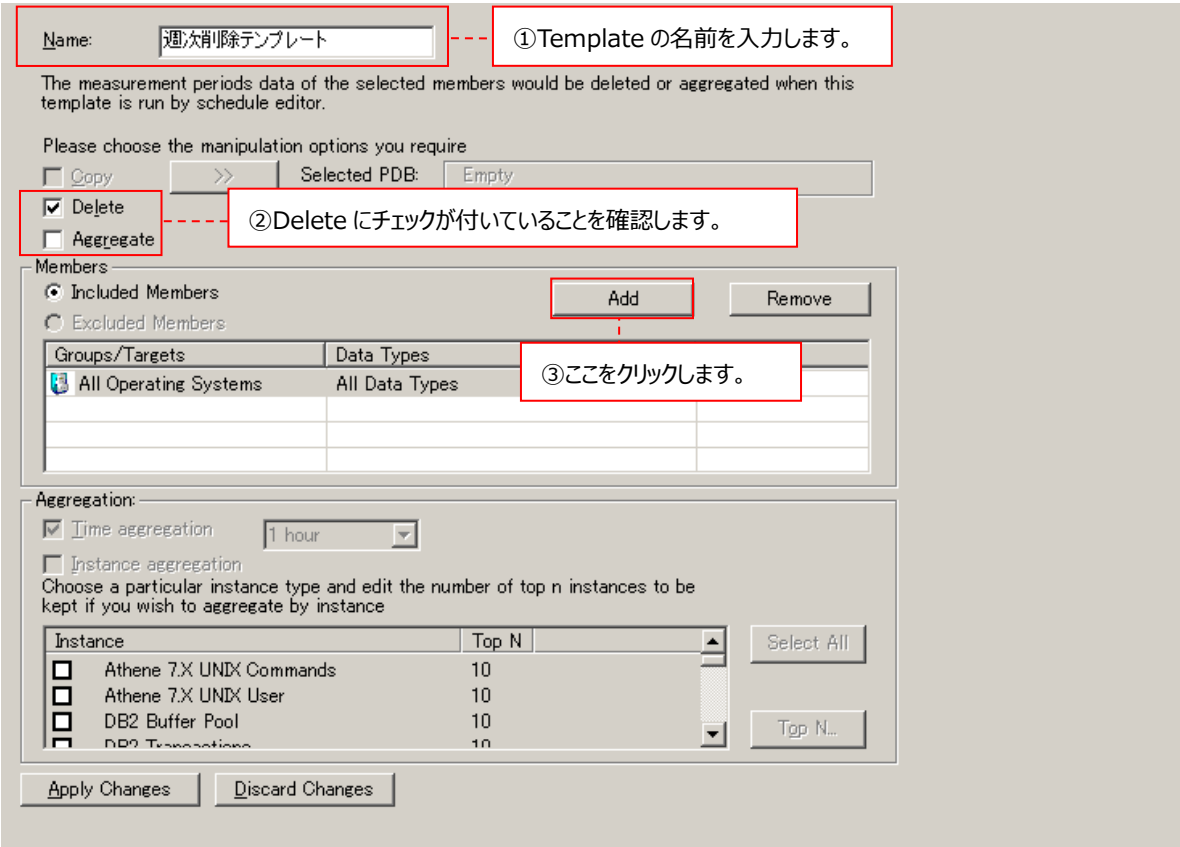
画面左側のツリー表示から「Automation Templates」を選択して右クリックし①、「Insert Automation Template」を選択します②。

画面右側に Template の設定ウィンドウが表示されます。



(1-3)Template の設定

Template に対する名前と過去のデータを削除するターゲットを指定します。

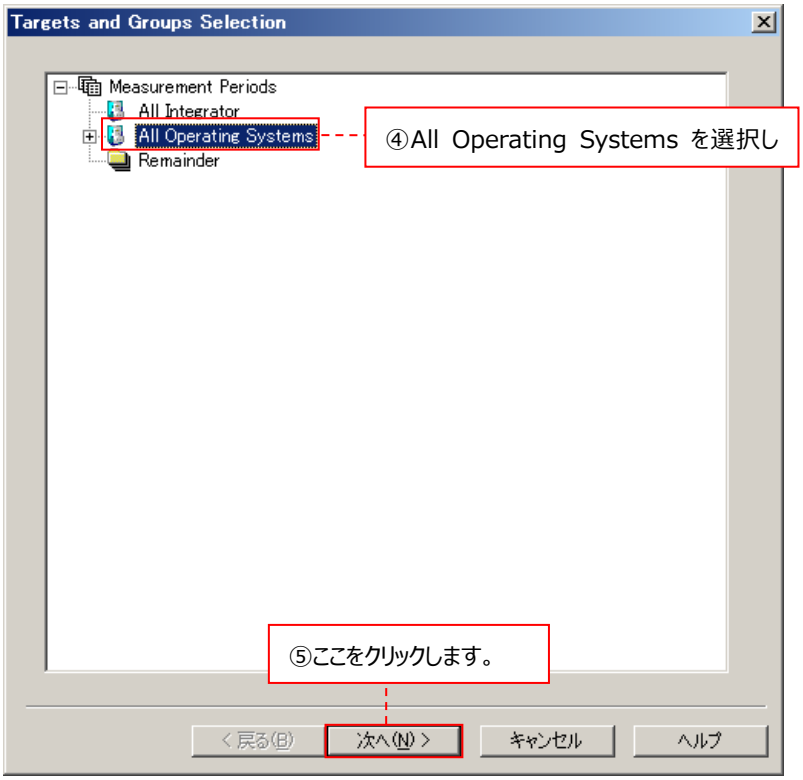


①Name　　：Template に対する名前を指定します。

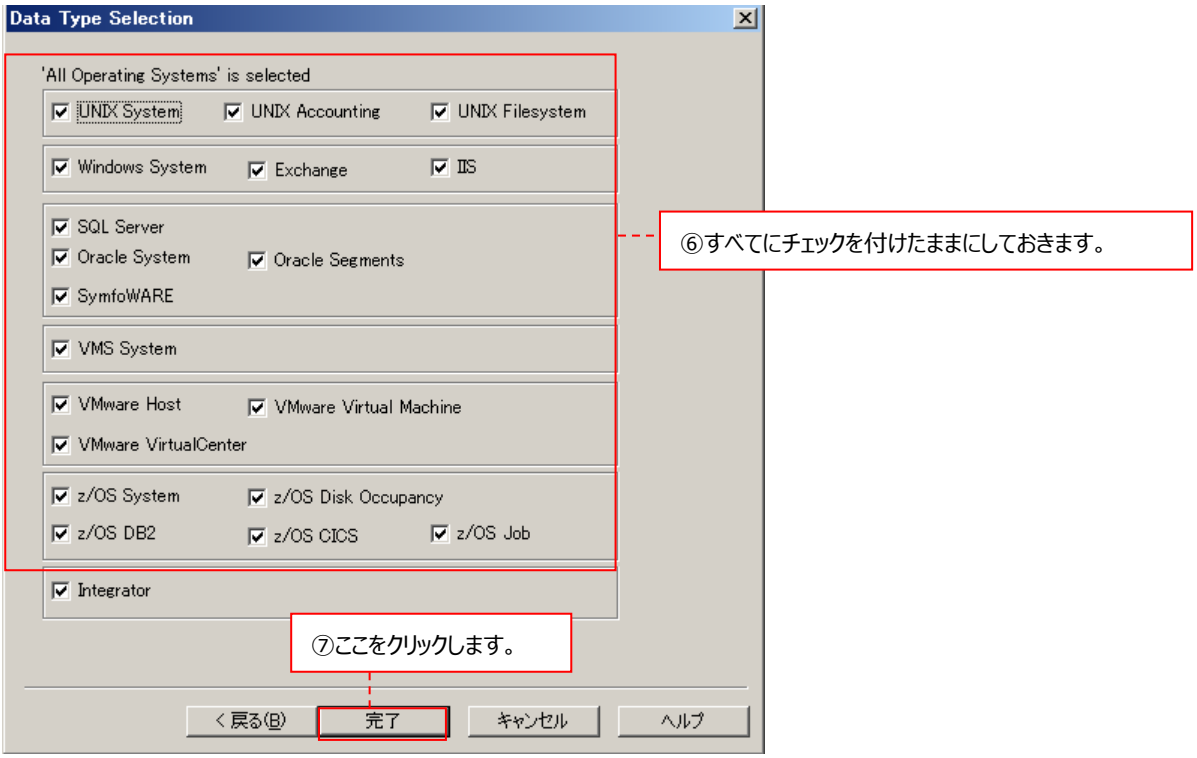
②処理の種類　　：Delete にチェックが付いていることを確認します。Aggregate は使用できませんので、チェックしないでください。

①と②を指定したら、画面中段の Members において過去のデータを削除するターゲットを指定します。
[Add]ボタンをクリックします③。

以下の画面が表示されます。ツリー表示の中からターゲットを個別に選択することもできますが、ここでは All Operating Systems を選択した後④、[次へ(N) >]ボタンをクリックし⑤、全ターゲットを対象とします。

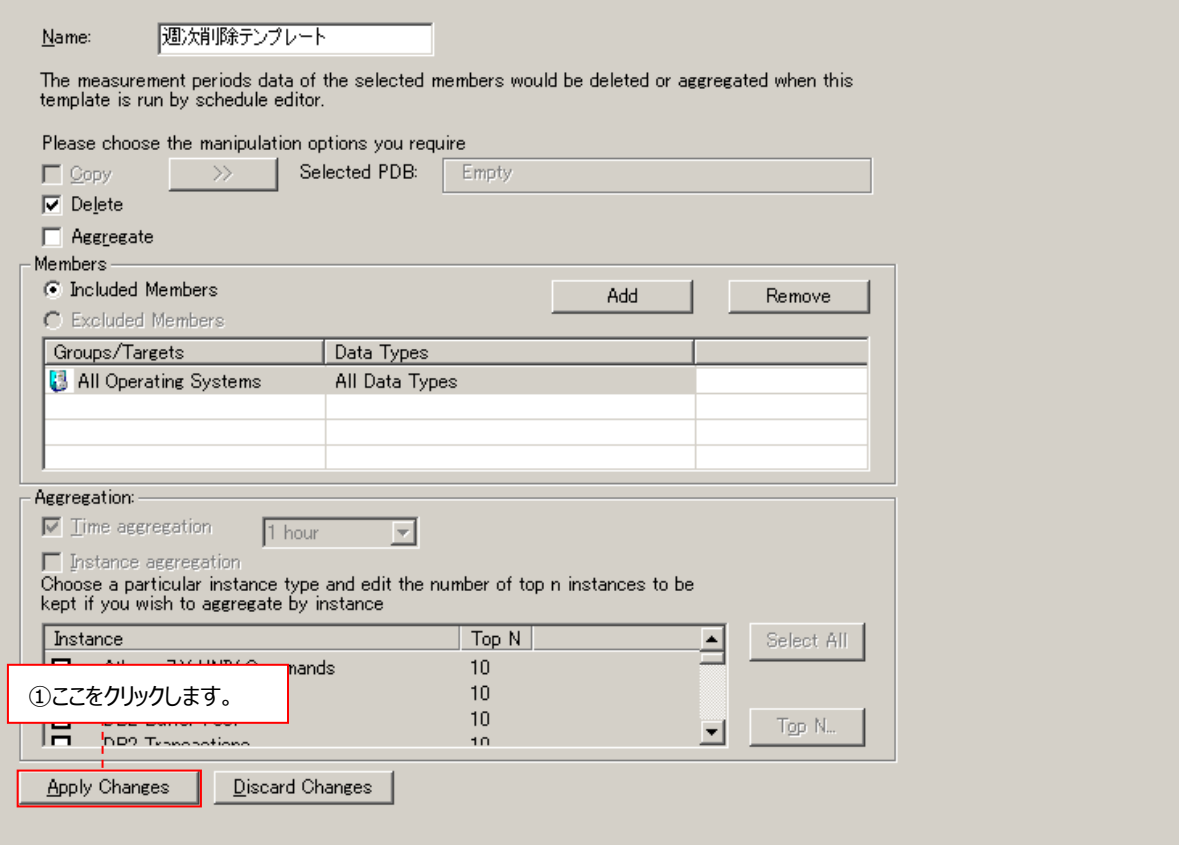


以下の画面が表示されます。削除するデータの種類を選択することもできますが、ここではすべてにチェックが付いた状態のままで⑥、[完了]ボタンをクリックします⑦。



(1-4)Template の保存

Template の設定を保存します。画面下部にある[Apply Changes]ボタンをクリックします①。



設定が完了したら画面右上の「×」ボタンをクリックして、Data Management を終了します。
「(2) Schedule Editor による削除処理のスケジュール設定」に進んでください。

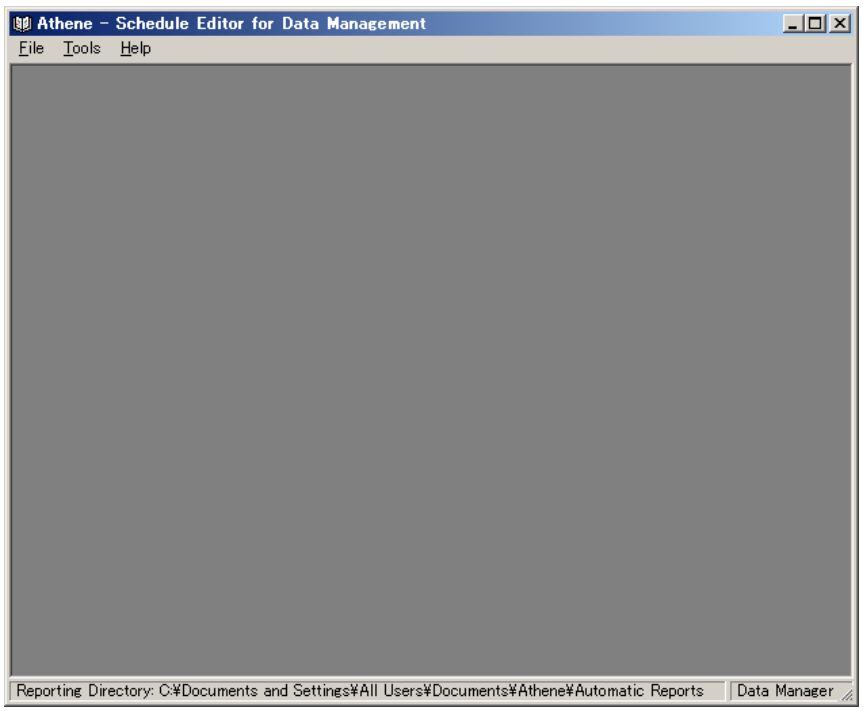
メモ！
データを削除する対象ターゲットとして「All Operating Systems」を選択している場合、一度 Template を設定した後に定義した新たなターゲットも、Data Management による削除処理の対象になります。

(2)Schedule Editor による削除処理のスケジュール設定

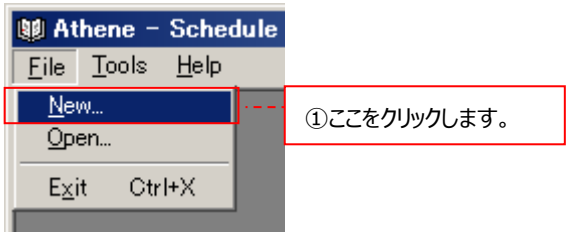
ここでは、「(1) Data Management によるテンプレートの設定」で作成した削除処理の Template を定期的に実行させる Schedule Editor について説明します。本マニュアルでは、毎週 1 回、削除処理を実行する設定を記載します。

(2-1) Schedule Editor の起動

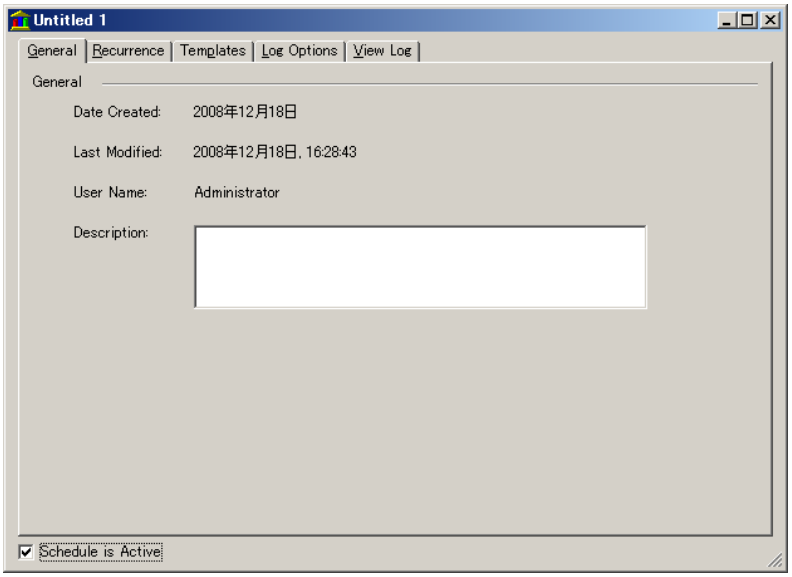
「スタート→プログラム→Syncsort Capacity Management Core→Data Management→Schedule Editor」を起動します。



画面上部のメニュー「File→New…」を選択します①。

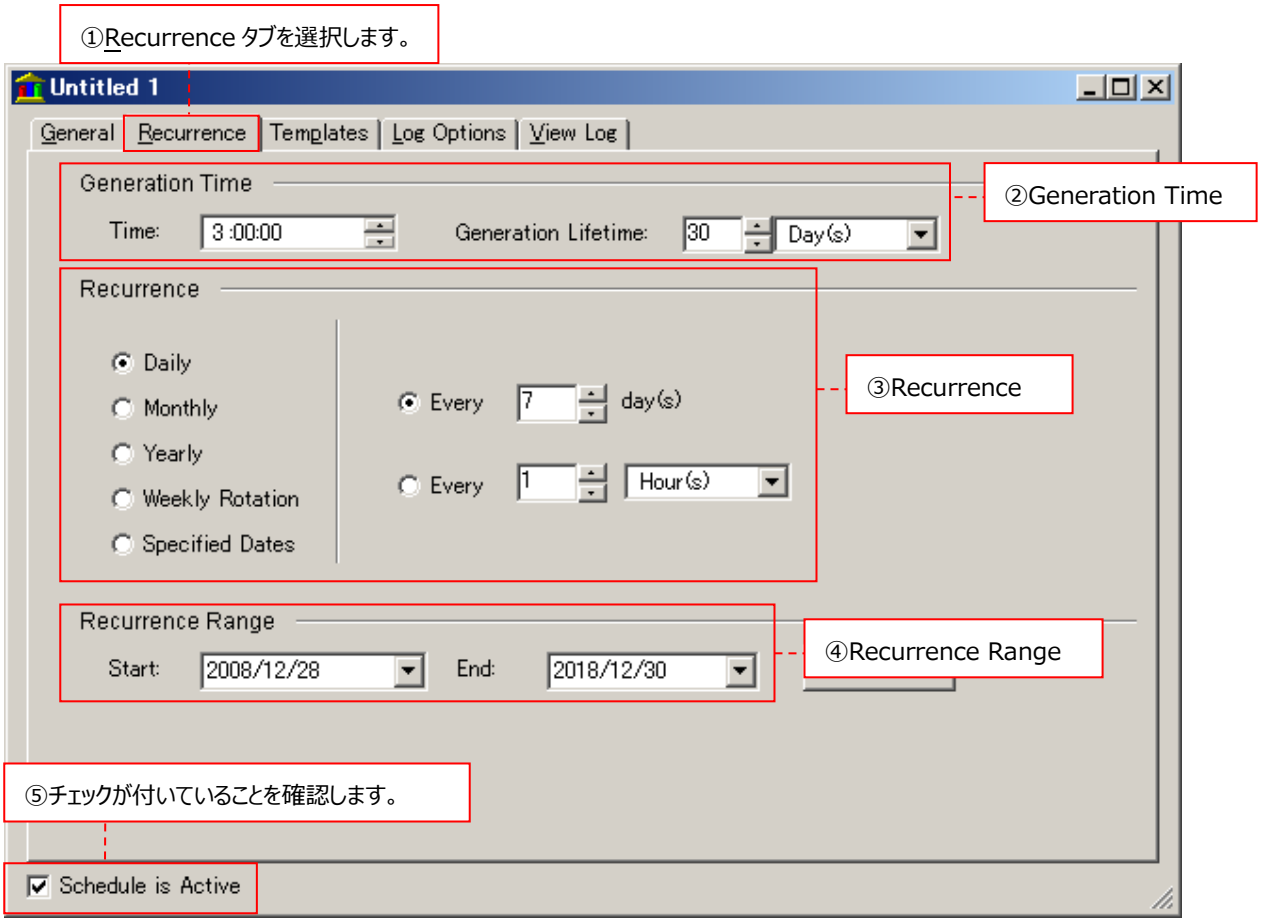


下図の画面が表示されます。



(2-2)Template 実行タイミングの設定

削除処理を実行するタイミングを設定します。Recurrence タブを選択します①。



②Generation Time

Time ：削除処理を起動する時刻を指定します。ここでは、3：00 を指定します。Control Center サービスが停止している時間帯に削除処理が実行されるようにスケジュールしてください。Control Center サービスがデータを処理している時に Data Management の削除処理を実行するとデータが欠損することがあります。

Generation Lifetime ：管理用マシンの電源が切られていた時などスケジュール起動ができない場合に、再度起動を試みる期間を指定します。デフォルトの 30Days のままにしておきます。

③Recurrence

削除処理を実行する周期を指定します。ここでは、毎週実行するために、以下のように指定します。

・Daily にチェックします。

・Every 7 days と指定します。

④Recurrence Range

設定したスケジュール自体の有効期間を指定します。

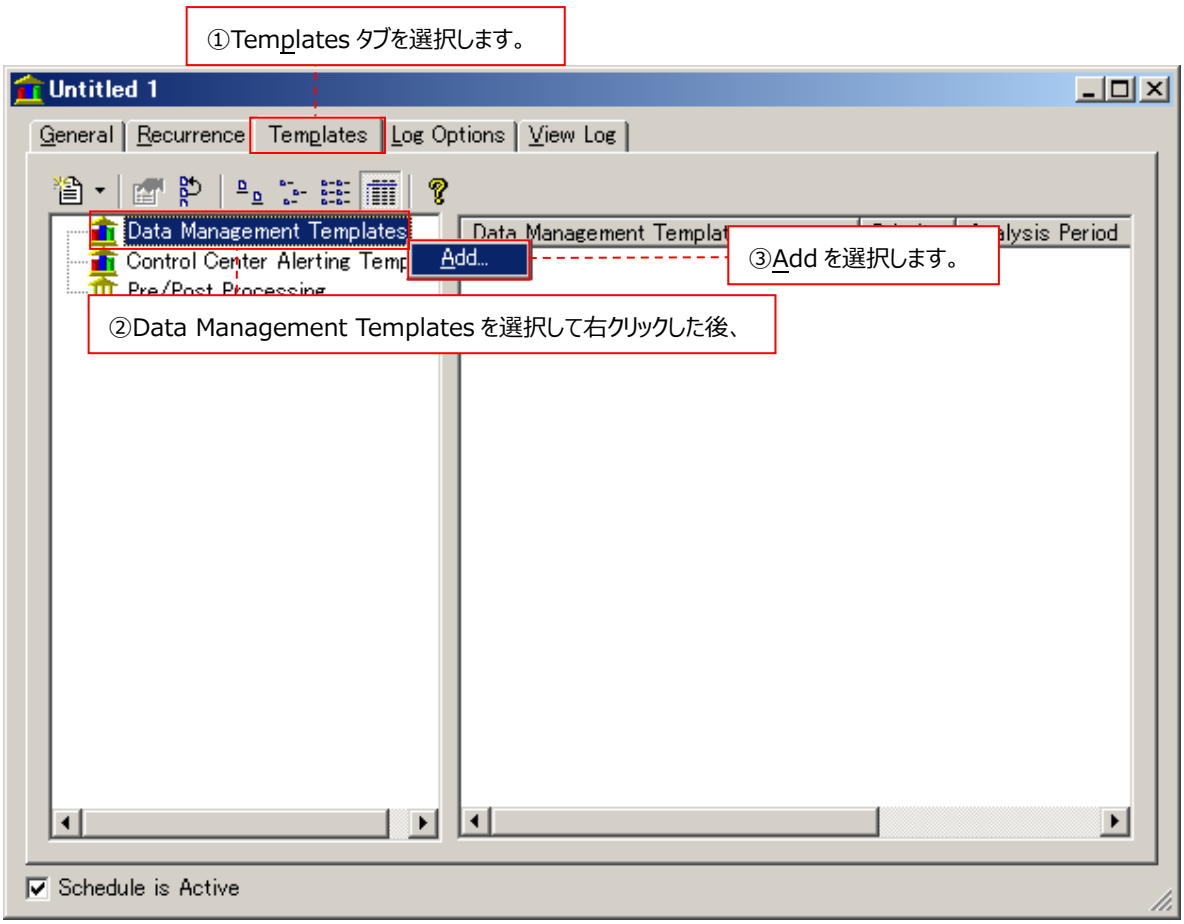
Start ：削除処理を実行する曜日の日付を指定します。例えば、2010 年 2 月 28 日（日曜日）を指定すると、その日から 7 日毎（Every 7days）、すなわち毎週日曜日に削除処理を実行します。

End ：設定したスケジュール自体の有効期限を指定します。

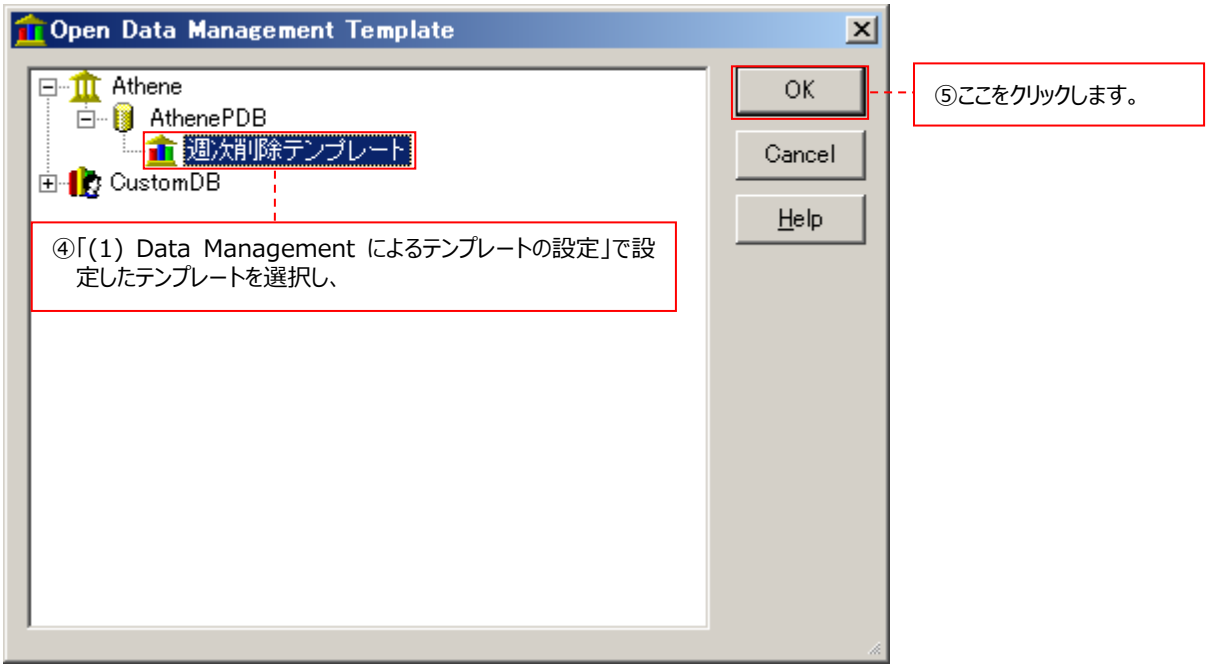
⑤Schedule is Active ：ここにチェックが付いていることを確認します。チェックが付いていないと、スケジュールが有効になりません。

(2-3)Template の選択および削除するデータ期間の設定

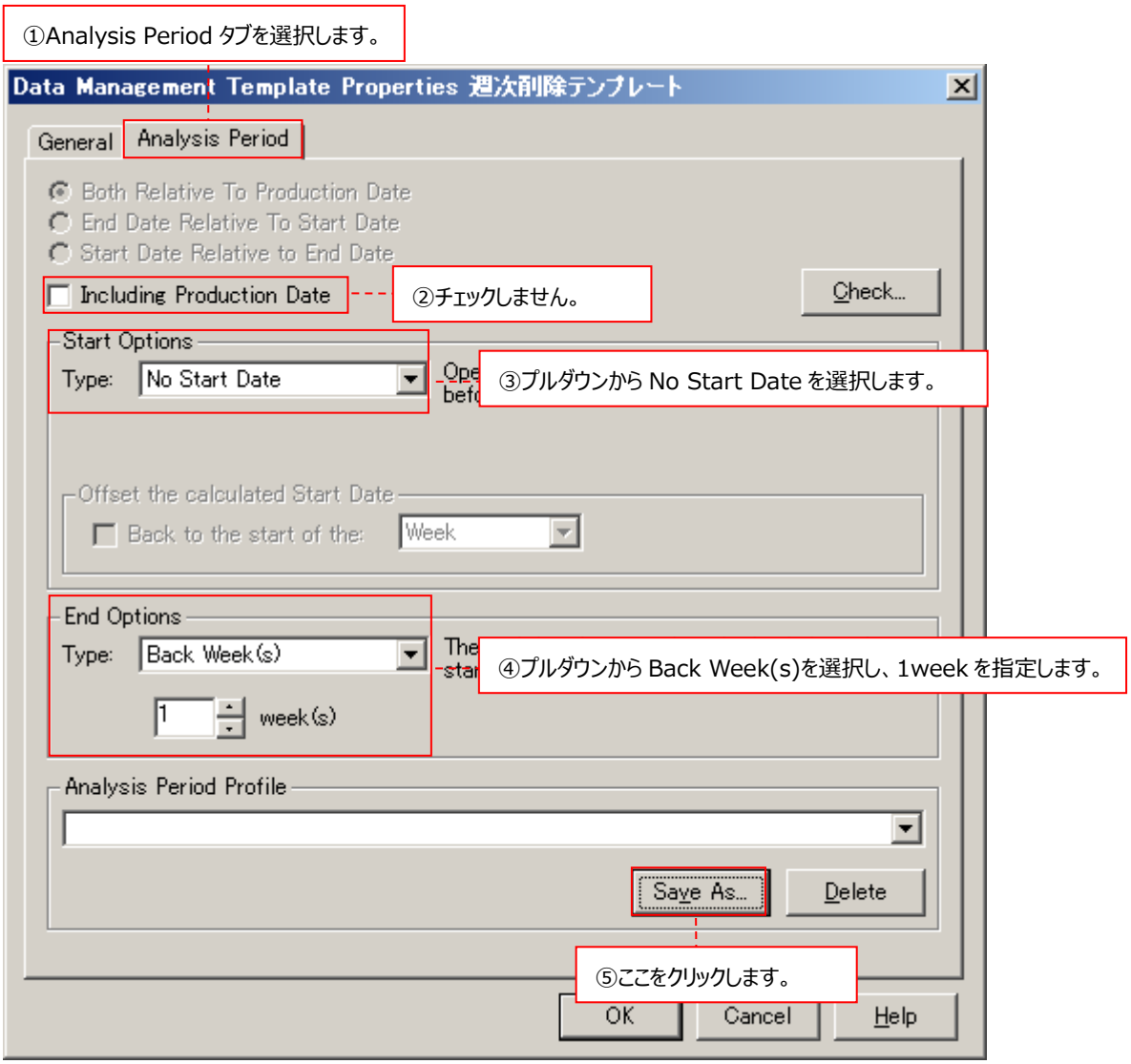
使用する Template を選択し、削除するデータ期間を設定します。Templates タブを選択します①。
画面内の「Data Management Templates」を選択して右クリックした後②、「Add...」を選択します③。



以下の画面が表示されます。ツリー表示の「Athene」を展開し、「(1) Data Management によるテンプレートの設定」で設定したテンプレートを選択した後④、[OK]ボタンをクリックします⑤。



以下の画面が表示されます。General タブでは何も変更せずに、Analysis Period タブを選択します①。



②Including Production Date　：チェックしません。

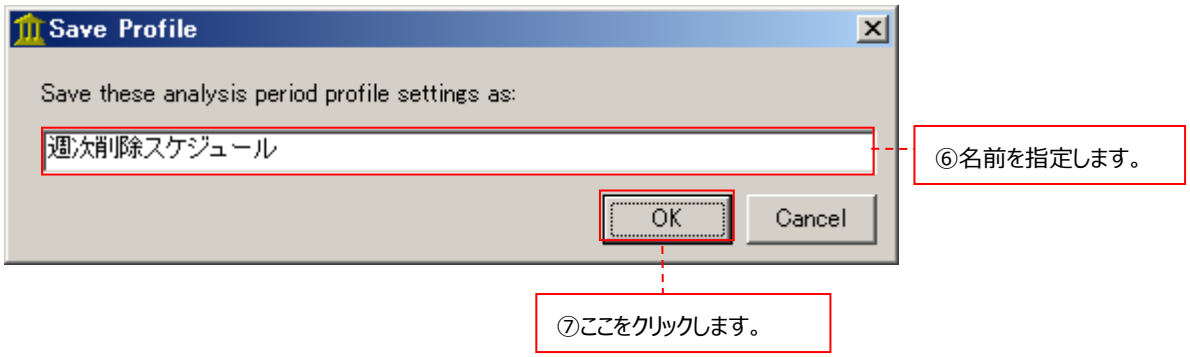
③Start Options
　Type　：No Start Date を選択します。

④End Options
　Type　：Back Week(s)を選択します。
　week(s)　：1week を指定します。

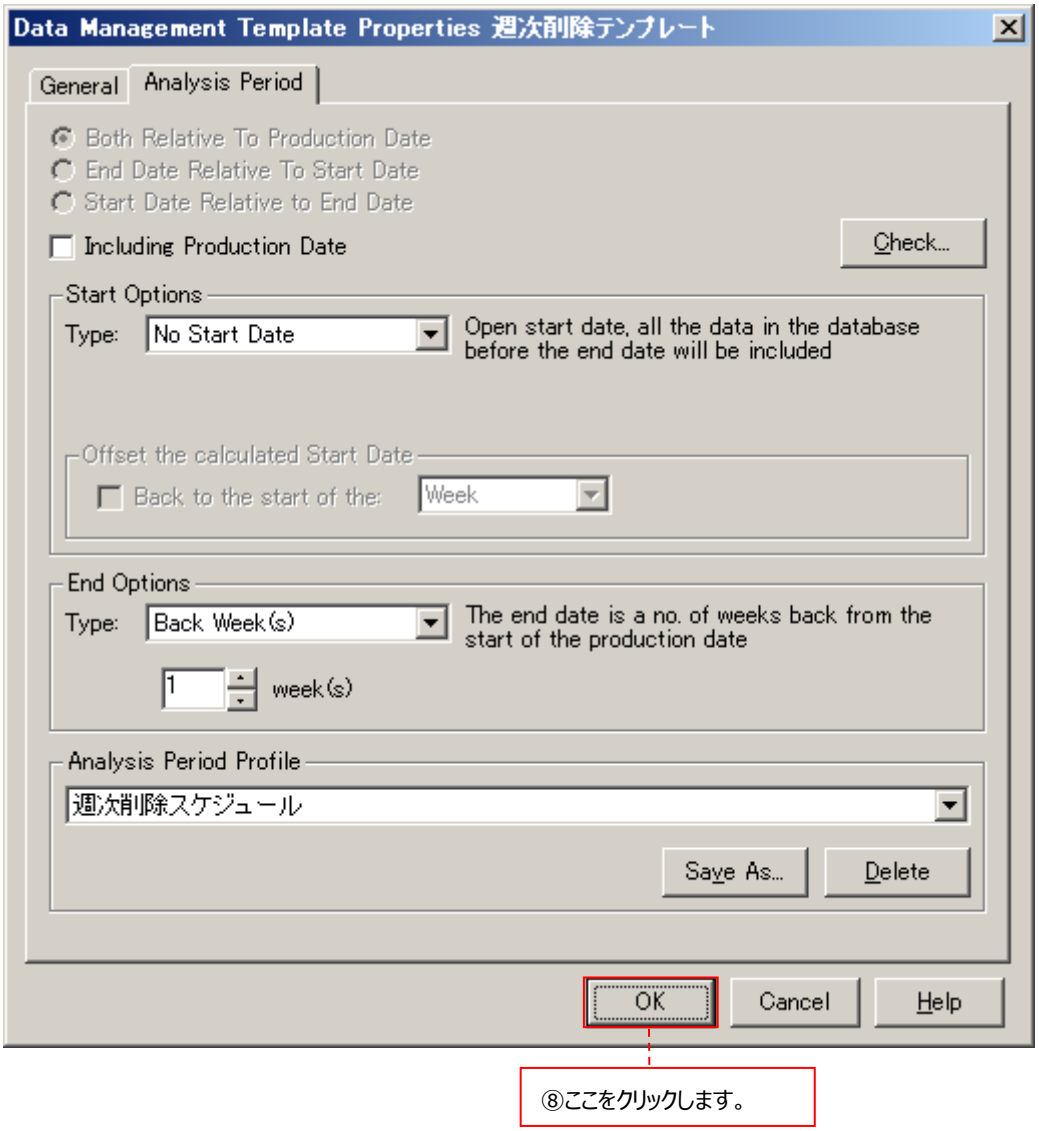
最終的に上図の画面のように設定されていることを確認してください。この設定では、1 週間前より過去のデータを削除します（Control Center が管理する period の状況によって 1 週間より長くなる場合があります）。

設定が終了したら、［Save As...］ボタンをクリックします⑤。

Save Profile のダイアログが表示されます。スケジュールの設定に名前を指定して⑥、[OK]ボタンをクリックします⑦。

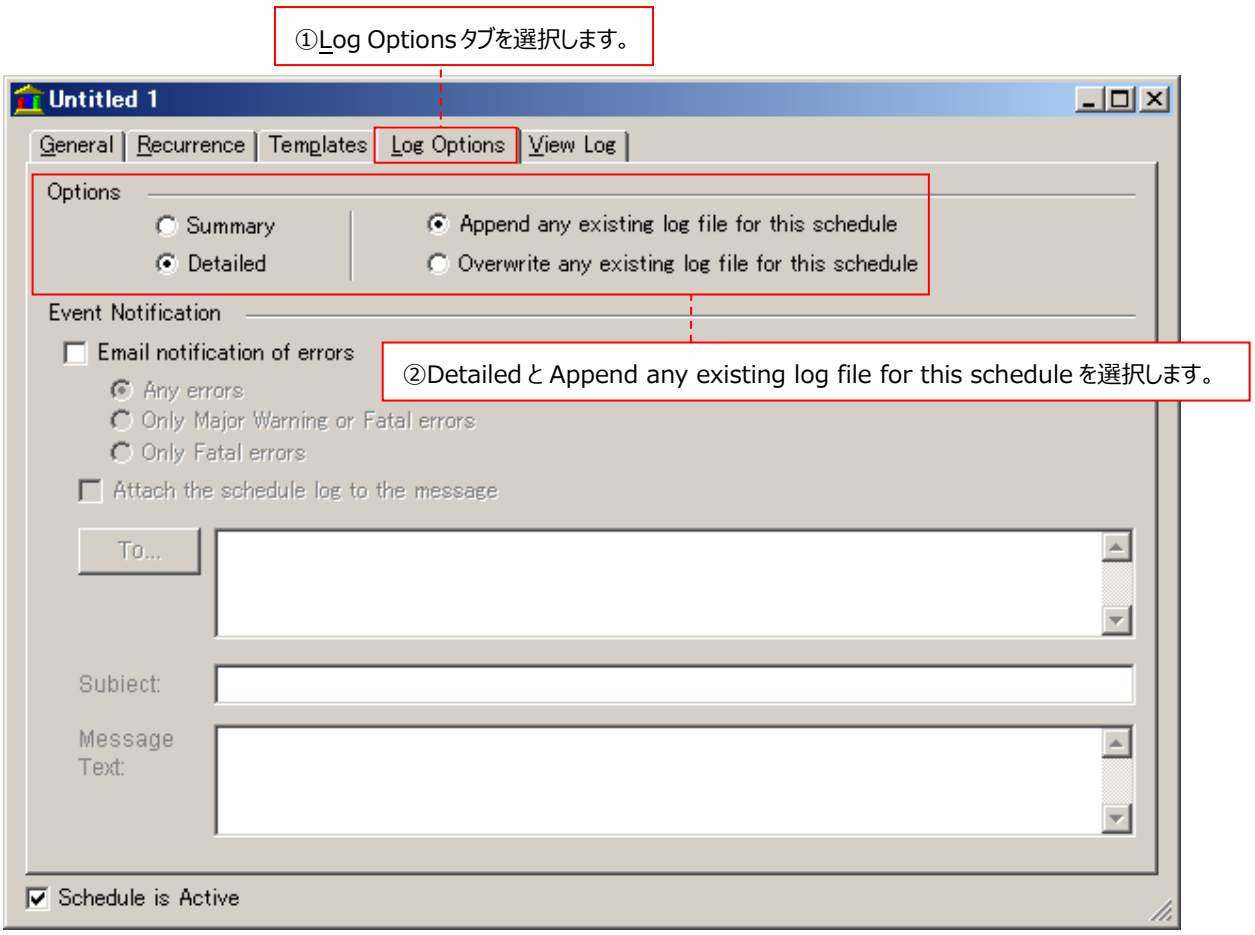


Analysis Period タブの[OK]ボタンをクリックします⑧。



(2-4)削除処理の実行ログの出力オプション設定

削除処理の実行ログを出力する際のオプションを指定します。Log Options タブを選択します①。

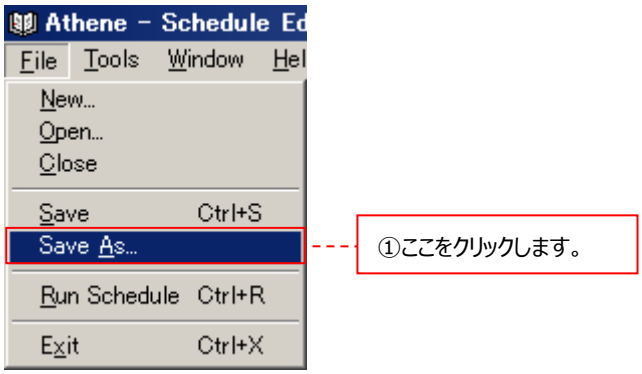


②Options　：Detailed と Append any existing log file for this schedule をチェックします。

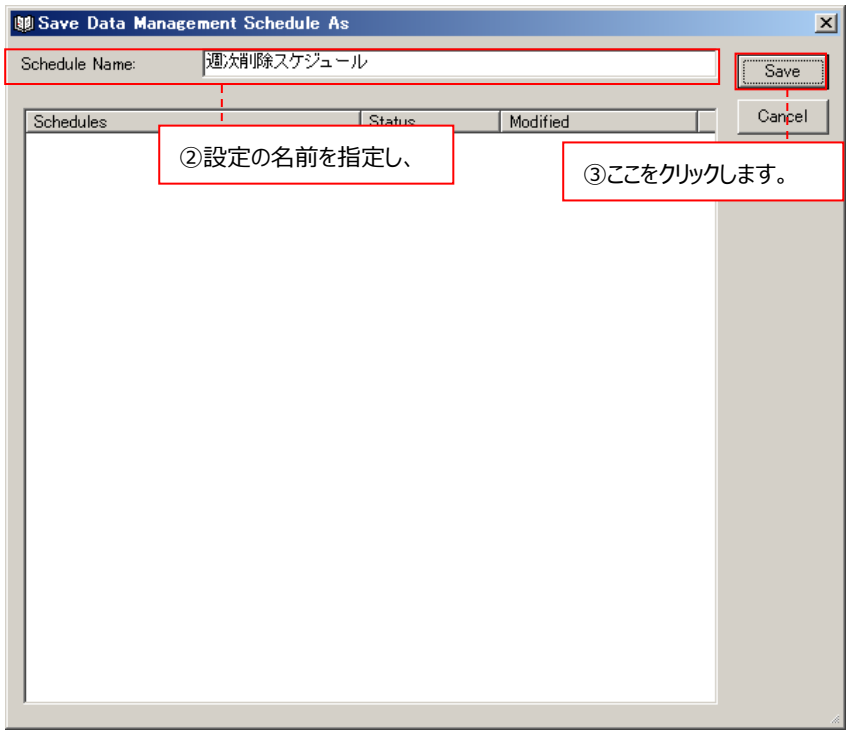
注意！
Event Notification 機能は使用できません。

(2-5)設定の保存

画面上部のメニュー「File→Save As...」を選択します①。



Schedule Name に設定の名前を指定し②、[Save]ボタンをクリックします③。



設定が完了したら画面右上の「×」ボタンをクリックして、Schedule Editor を終了します。

5.2. SQL Server Management Studio によるパフォーマンスデータベースの復元

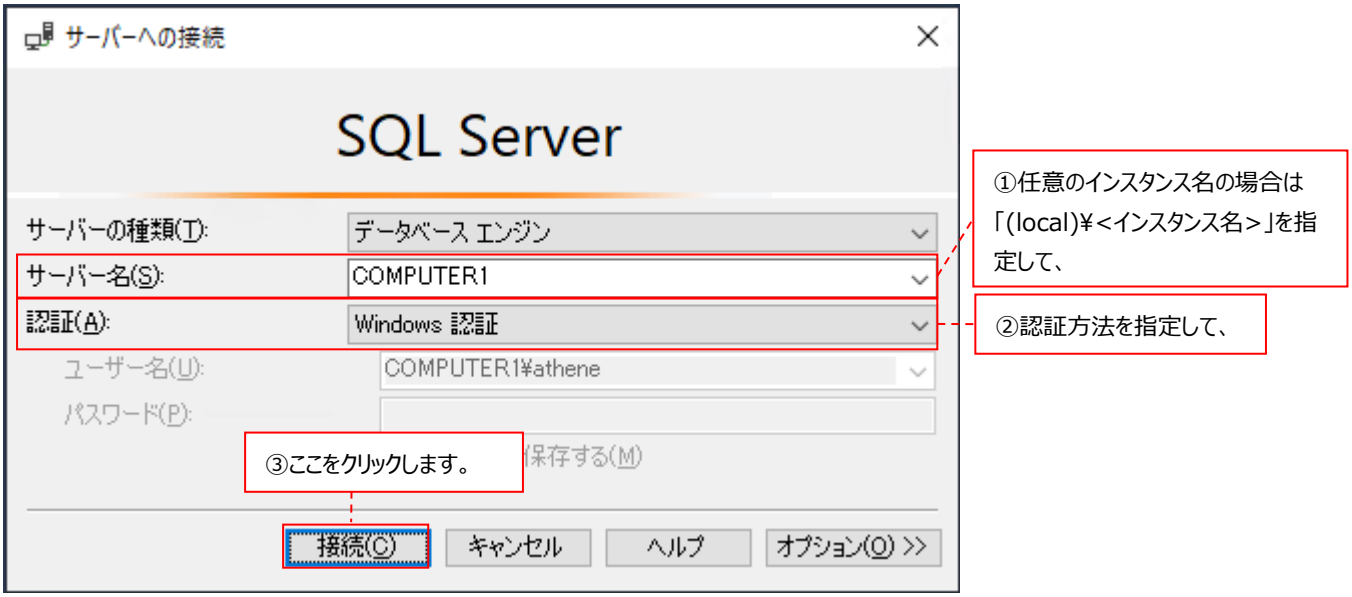
ここでは、何らかの理由により、過去にバックアップしたパフォーマンスデータベースを、同じ管理用マシンの現在のパフォーマンスデータベースに対して復元する場合の方法を説明します。
例として SQL Server 2016 における復元手順を紹介します。以降のデータベース復元手順は、管理ツール「SQL Server Management Studio」が使用可能であることを前提としています（SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません）。
使用している SQL Server のバージョンに応じた管理ツールにて復元を行ってください。

注意！
バックアップを取った管理用マシンと同じ管理用マシンに復元する必要があります。但し、Syncsort Capacity Management の再インストール後、以前に取得したバックアップを戻して使用することはできません。

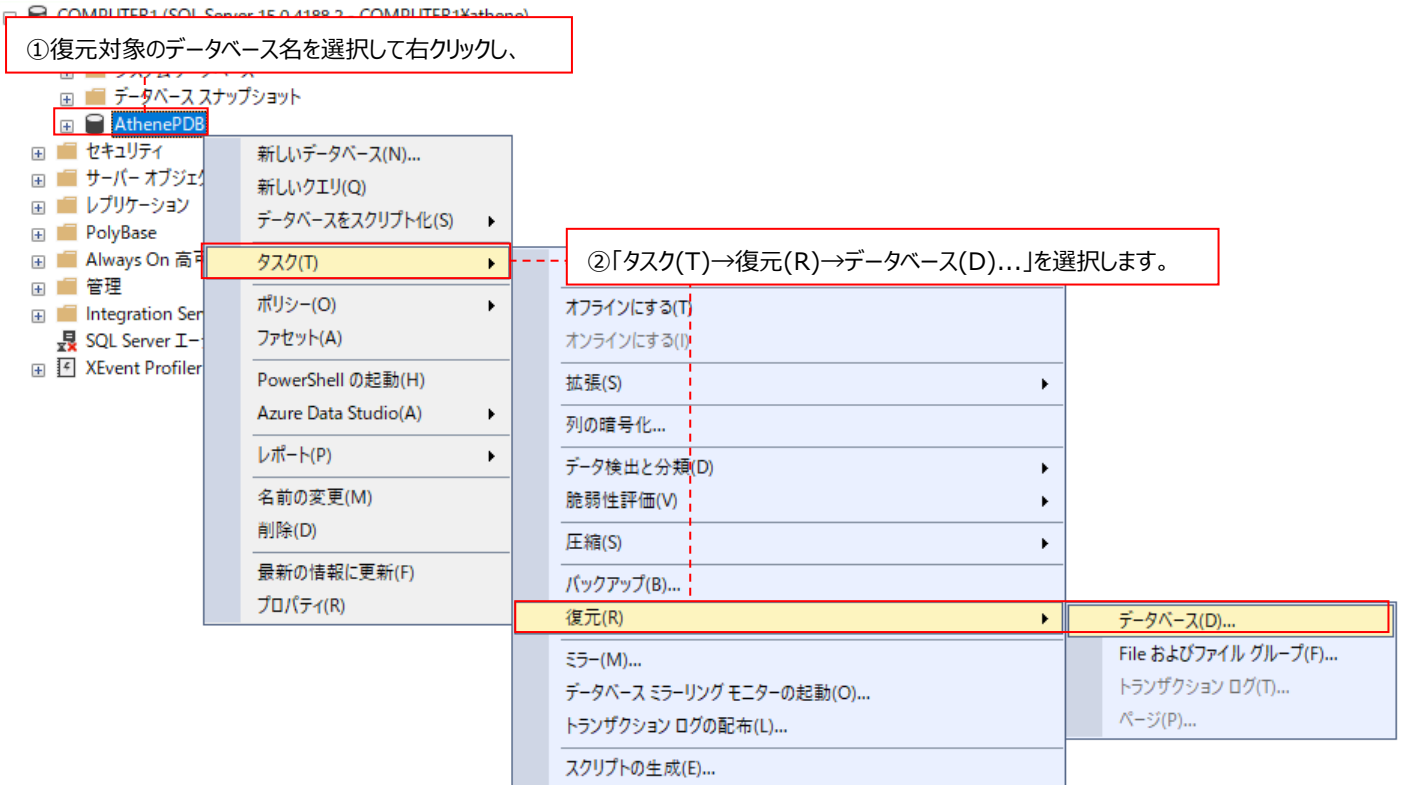
(1)「コントロールパネル→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center サービスを停止します。

(2)「コントロールパネル→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Scheduler サービスが停止されていることを確認します。

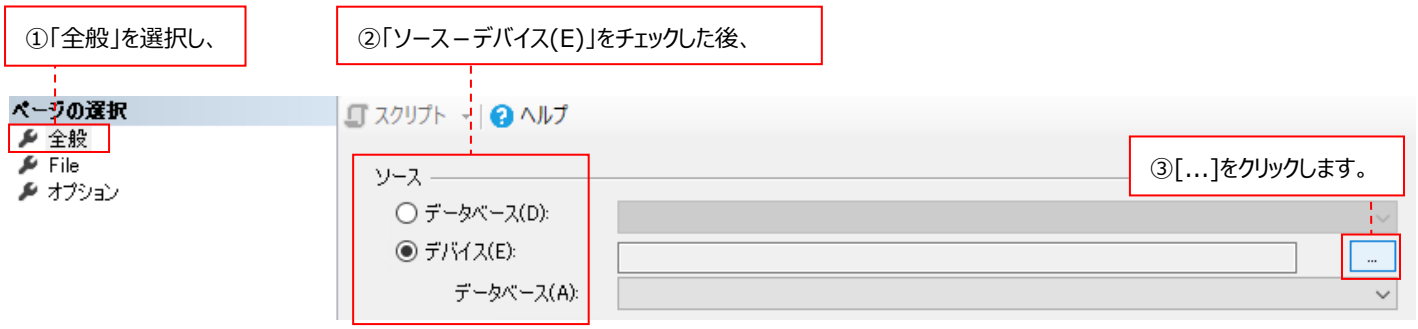
(3)「スタート→アプリ→Microsoft SQL Server Tools 18→Microsoft SQL Server Management Studio 18」を起動します。サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、SQL Server インストール時に任意のインスタンス名を設定している場合は「(local)¥<インスタンス名>」、既定のインスタンスの場合は管理用マシンのコンピュータ名を指定します①。また、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して②、[接続(C)]をクリックします③。



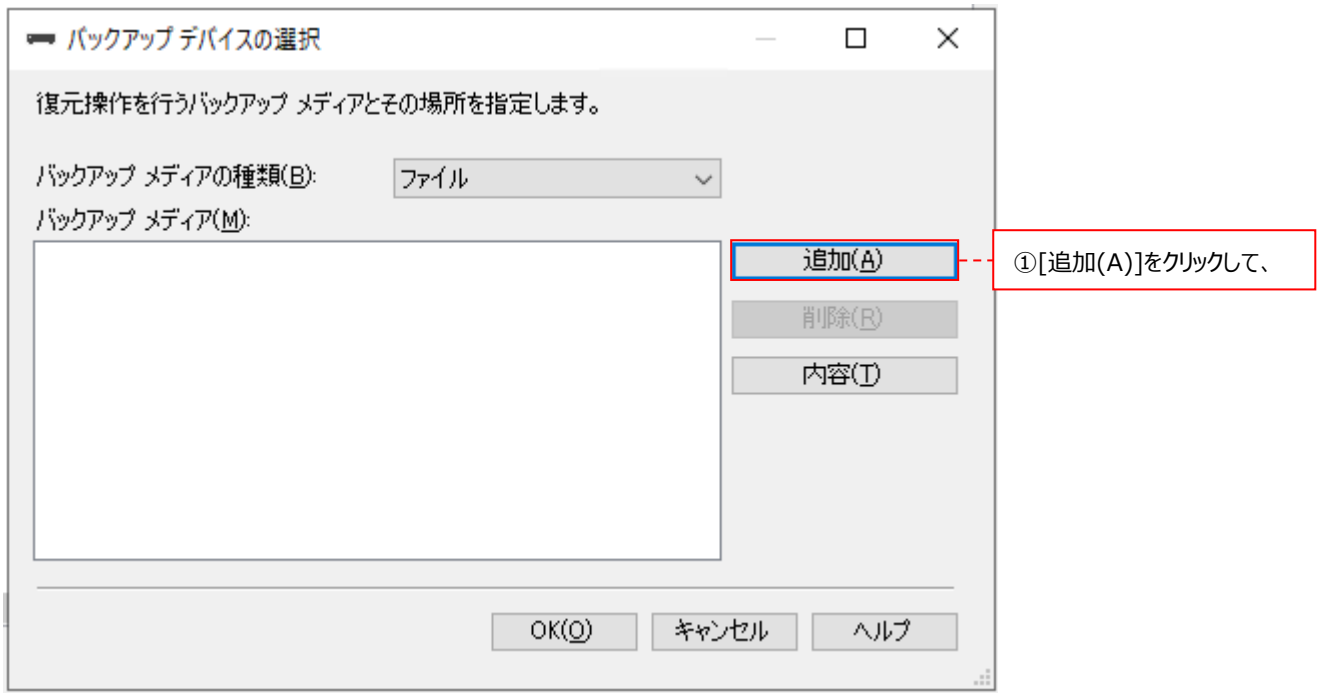
(4)SQL Server Management Studio メイン画面の左側に表示されるツリーの中から、復元対象のデータベース名を選択して右クリックし①、「タスク(T)→復元(R)→データベース(D)...」を選択します②。

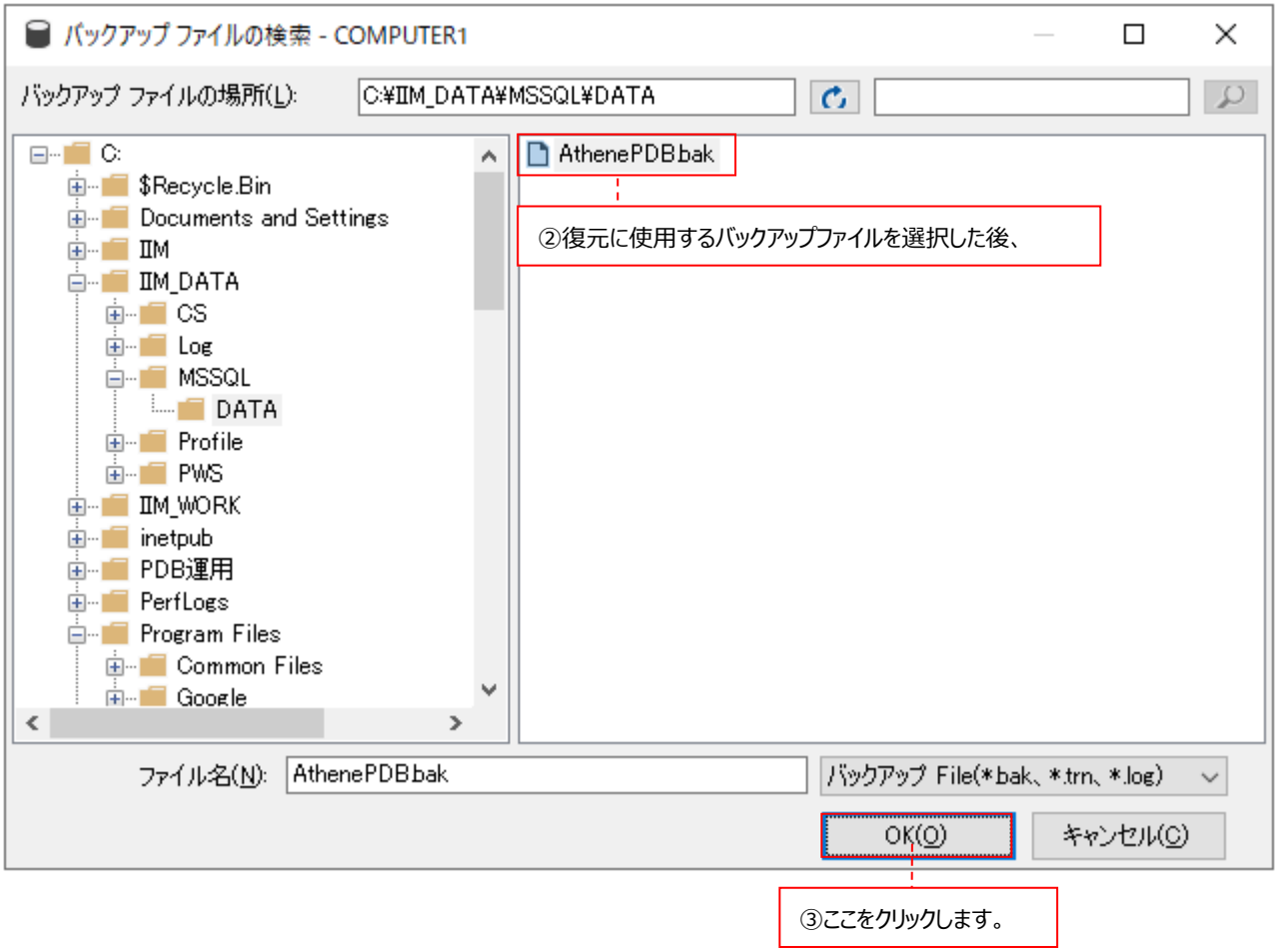


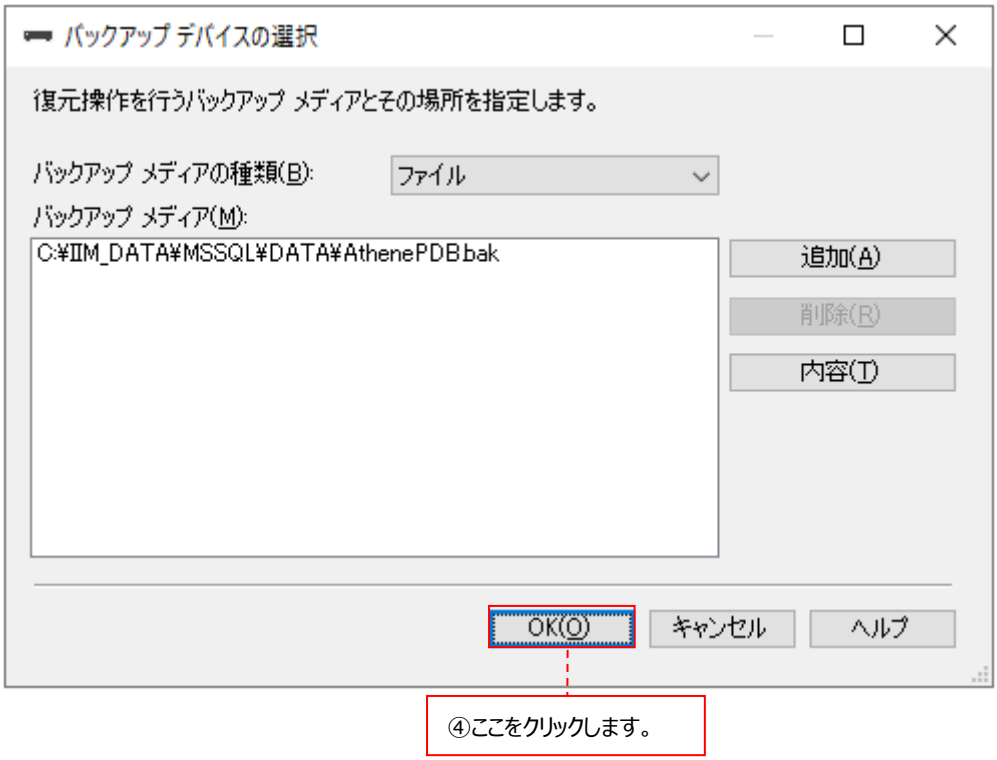
(5)画面左側の「ページの選択－全般」を選択して①、「ソース－デバイス(E)」をチェックした後②、右側の[...]をクリックします③。



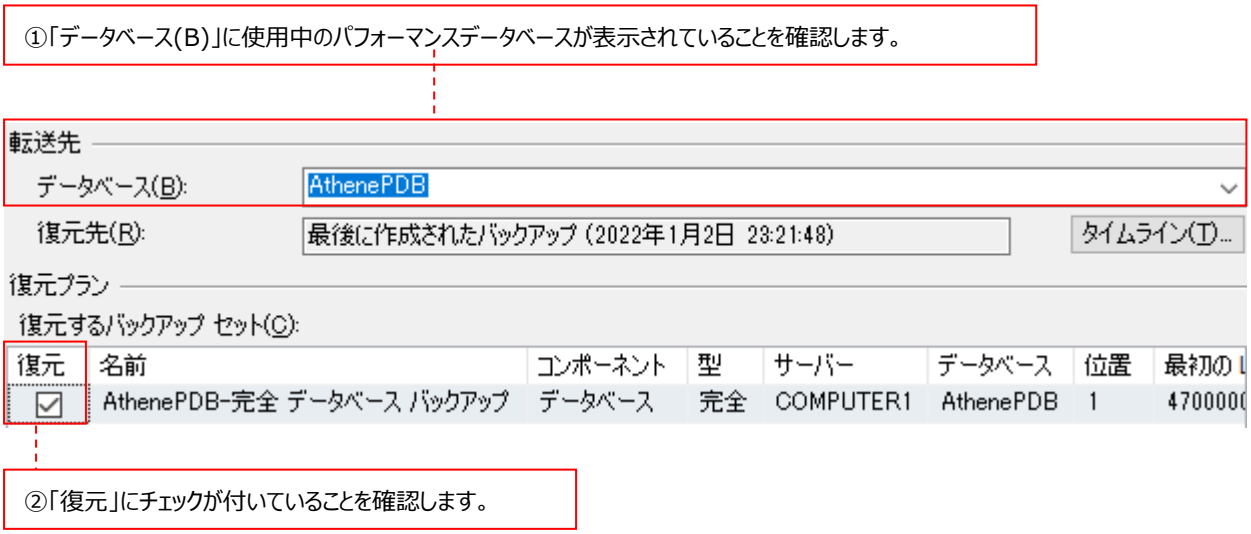
(6)[追加(A)]をクリックして①、復元に使用するバックアップファイルを選択した後②、[OK(O)]をクリックします③。前の画面に戻りますので、[OK(O)]をクリックします④。



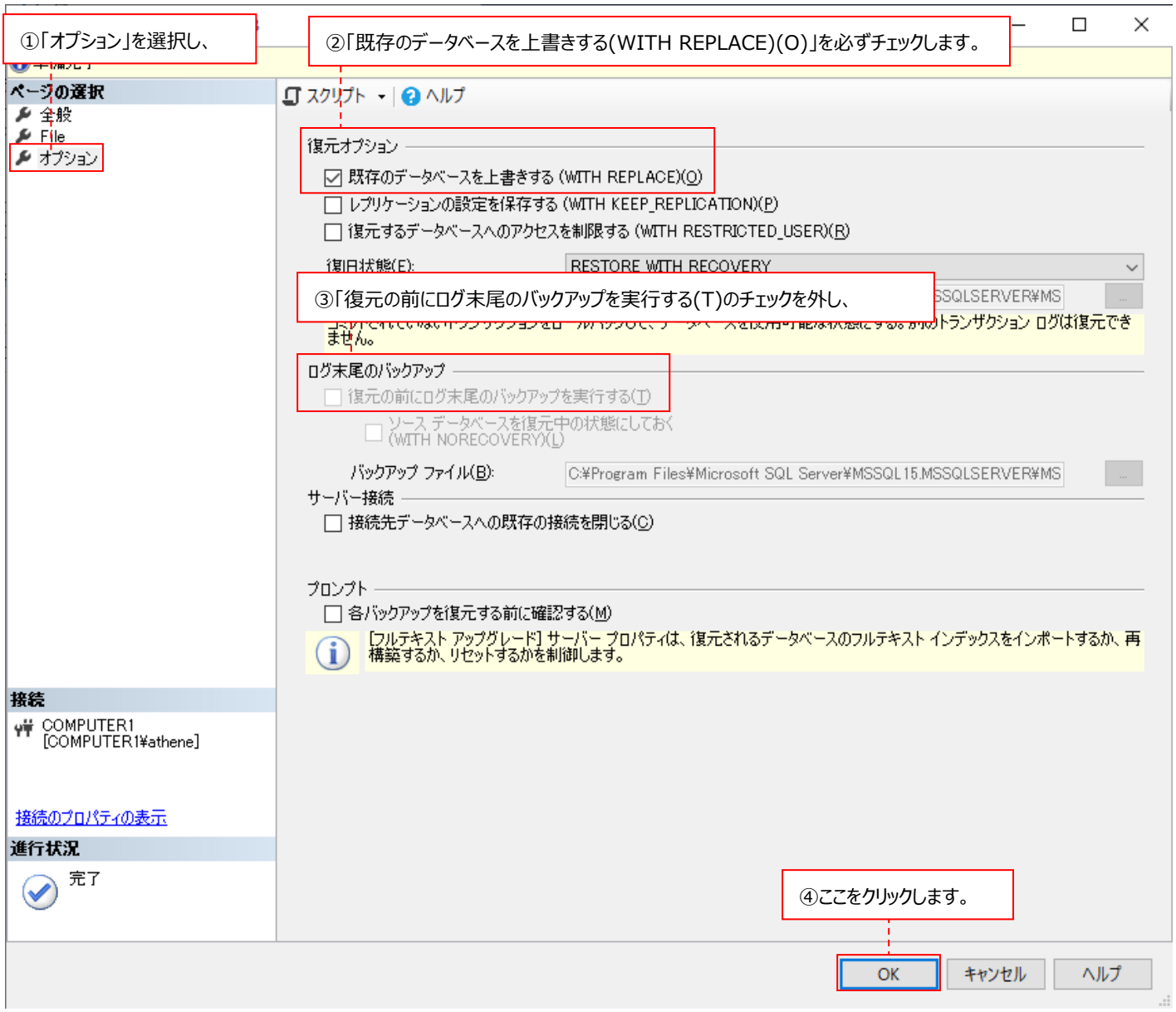




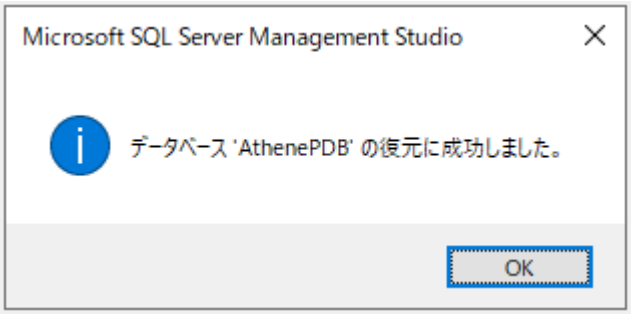
(7)「転送先－データベース(B)」に使用中のパフォーマンスデータベースが表示されていることを確認します①。「復元プラン－復元」にチェックが付いていることを確認します②。



(8)画面左側の「ページの選択－オプション」を選択して①、「復元オプション－既存のデータベースを上書きする(WITH REPLACE)(O)」を必ずチェックします②。「ログ末尾のバックアップ－復元の前にログ末尾のバックアップを実行する(T)」のチェックを外し③、[OK]をクリックします④。



(9)データベースの復元が行われます。



5.3. Data Management による手動でのパフォーマンスデータベースの削除

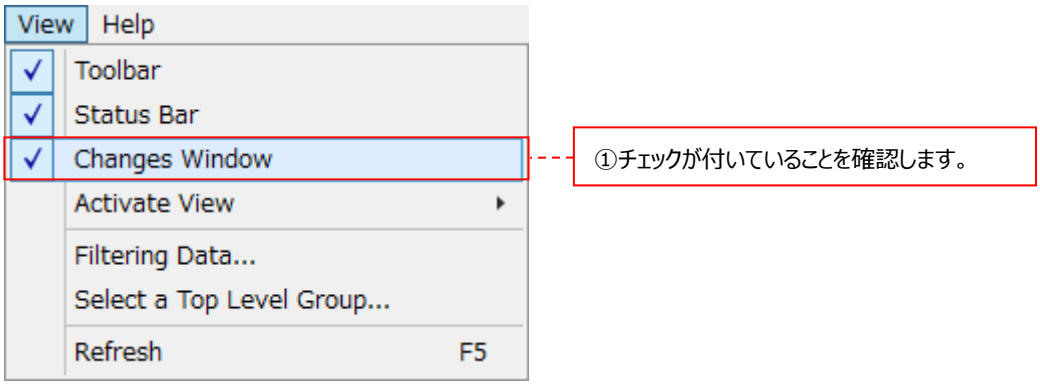
5.3.1. 任意の Period の削除

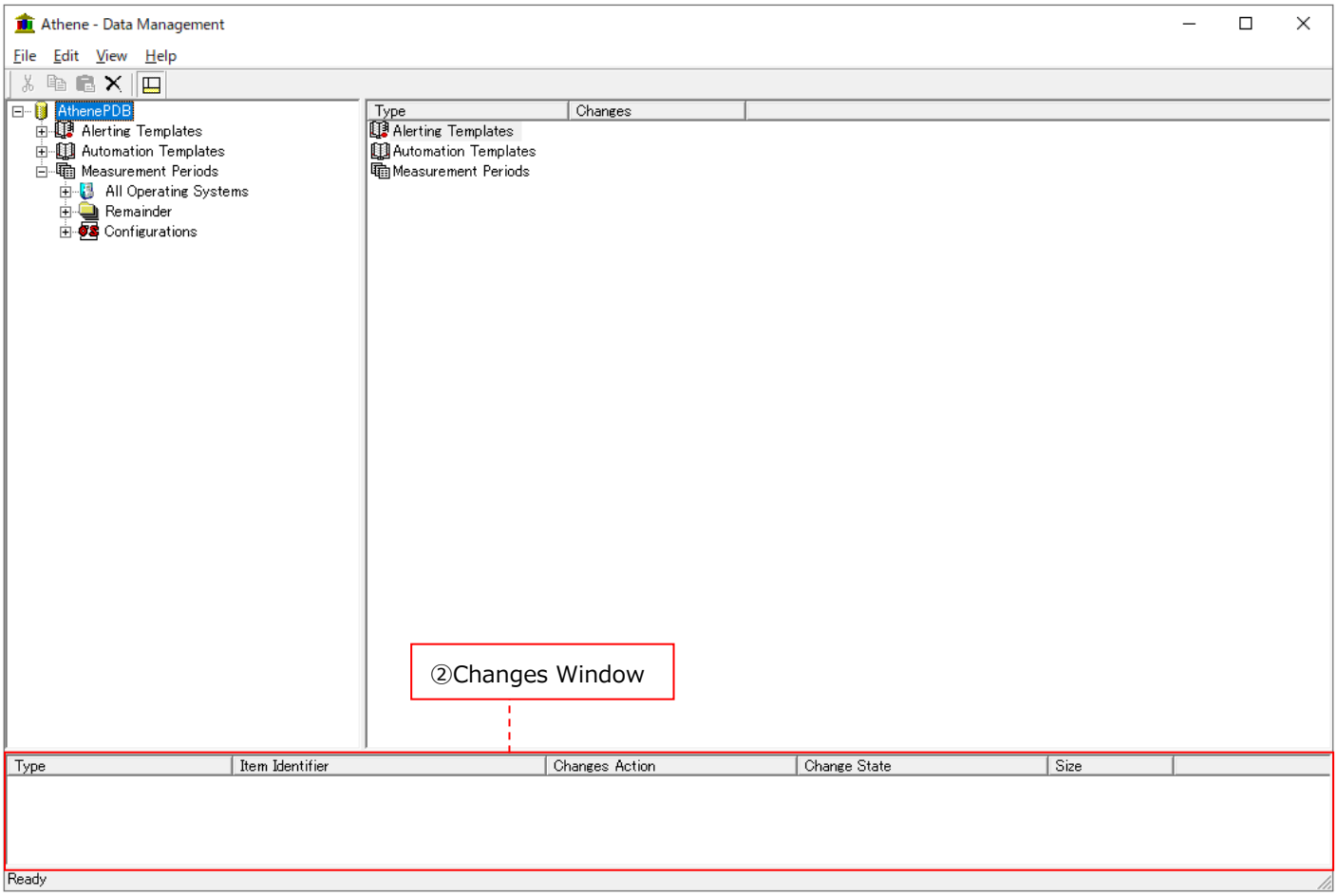
ここでは、蓄積されたパフォーマンスデータベースの中から任意の Period を削除する場合の方法を説明します。

(1)スタートメニューより「Windows 管理ツール→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center サービスが「開始」状態であることを確認します。

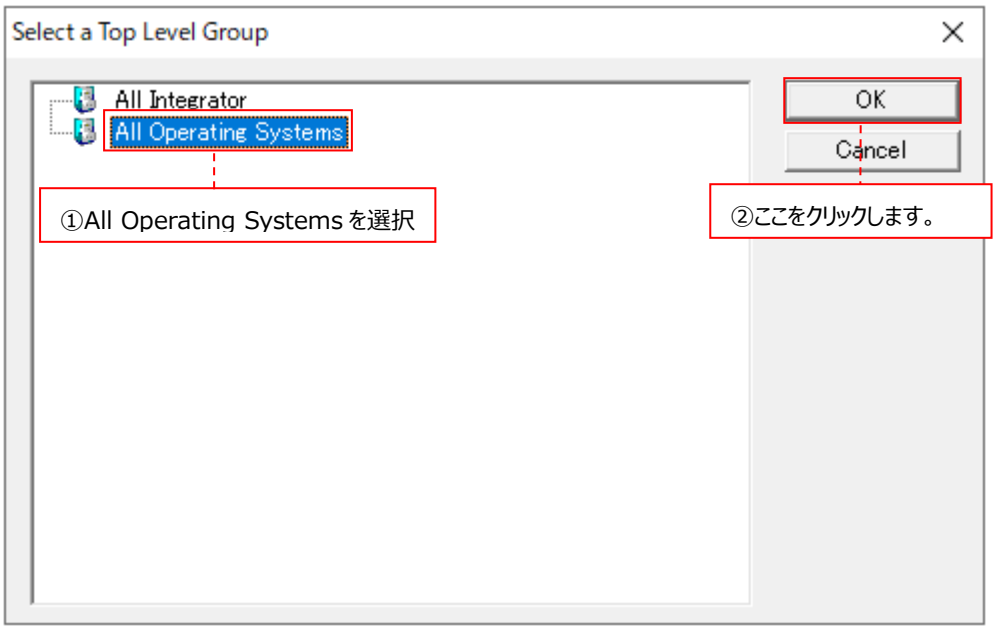
(2)「スタート→アプリ→Syncsort Capacity Management Core→Data Management」を起動します。

(3)メニューの「View→Changes Window」にチェックが付いていることを確認してください①。チェックが付いていない場合は、チェックを付けて画面下部に Changes Window を表示してください②。

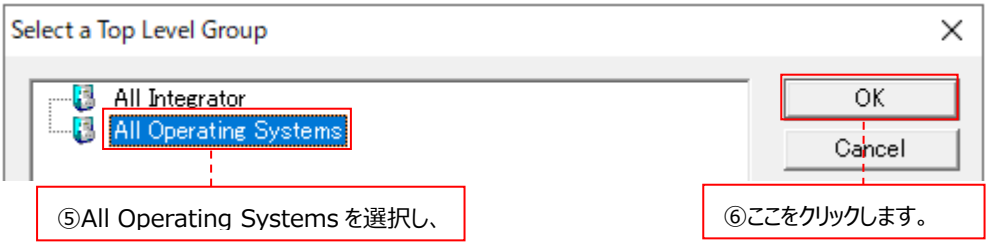




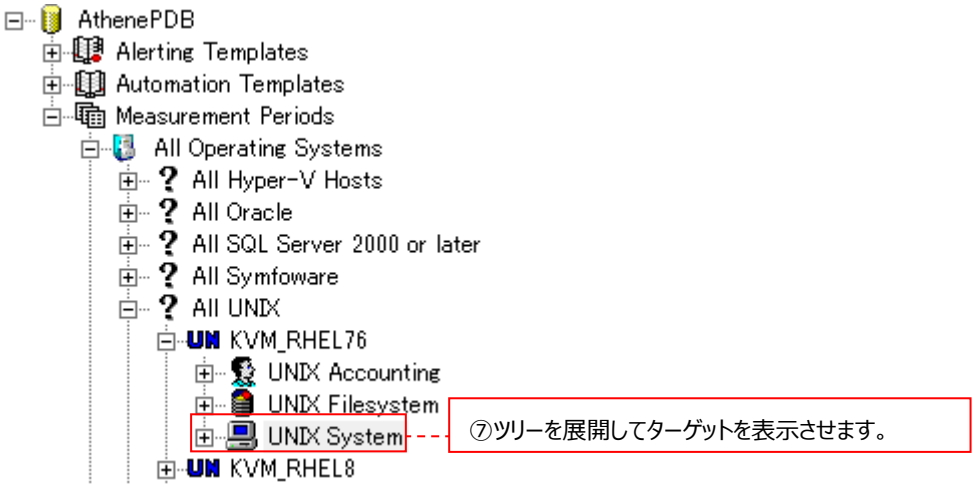
(4)画面左側のツリー表示において、Measurement Periods の「＋」をクリックしてツリーを展開します。最初に Measurement Periods を選択した際に、「Select a Top Level Group」画面が表示された場合は、All Operating Systems を選択した状態①で、「OK」をクリックしてください②。



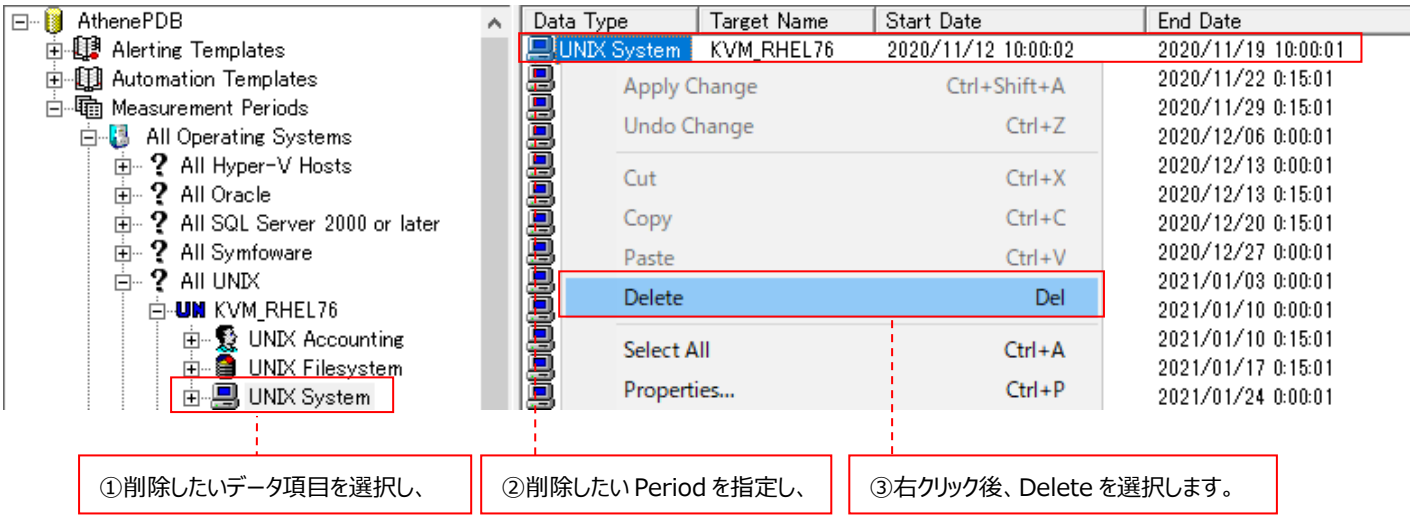
また、Measurement Periods の「＋」をクリックしてツリーを展開した際に、All Operating Systems が存在せず、Measurement Periods の直下に All Integrator が存在する場合は、「View→Select a Top Level Group…」④をクリックすると「Select a Top Level Group」の画面が表示されるので、All Operating Systems を選択した状態⑤で、「OK」をクリックしてください⑥。



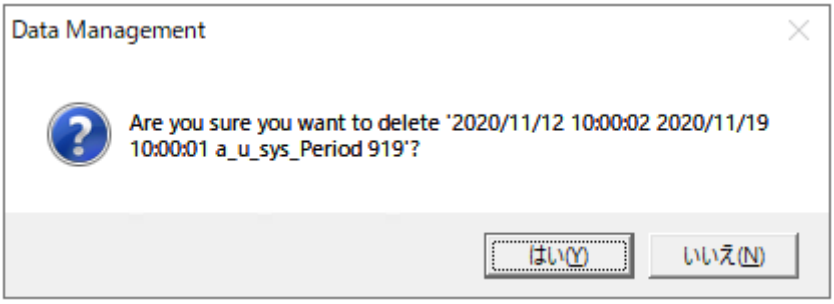
同様に、All Operating Systems（または任意のグループ）以下の下位グループの「＋」をクリックし、任意の Period を削除したいターゲットまでを表示させます⑦。



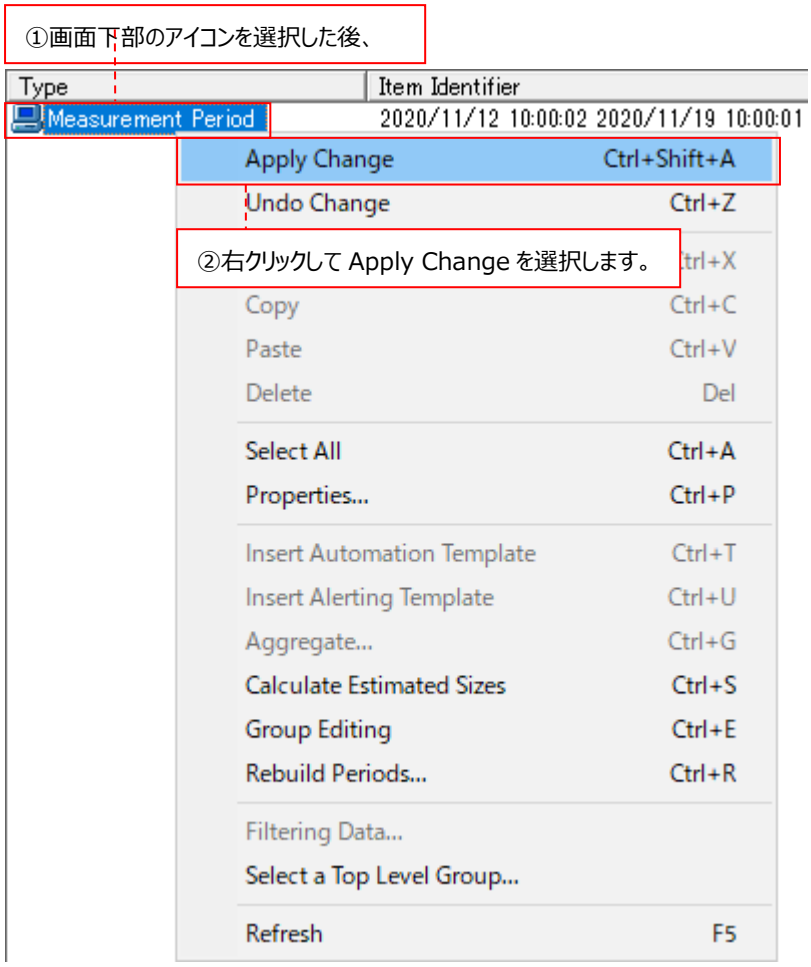
(5)削除したいデータ項目を選択し①、画面右側から削除したい Period を指定した後②、右クリックして Delete を選択します③。画面右側の各行が 1 つの Period を表し、含まれるデータの期間が Start Date／End Date に表示されます。



(6)以下のウィンドウが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。



(7)画面下部の Changes Window に表示されているアイコンを選択した後①、右クリックして Apply Change を選択します②。これで削除処理が開始されます。



注意！
Apply Change を実行しないと、削除処理は開始されません。

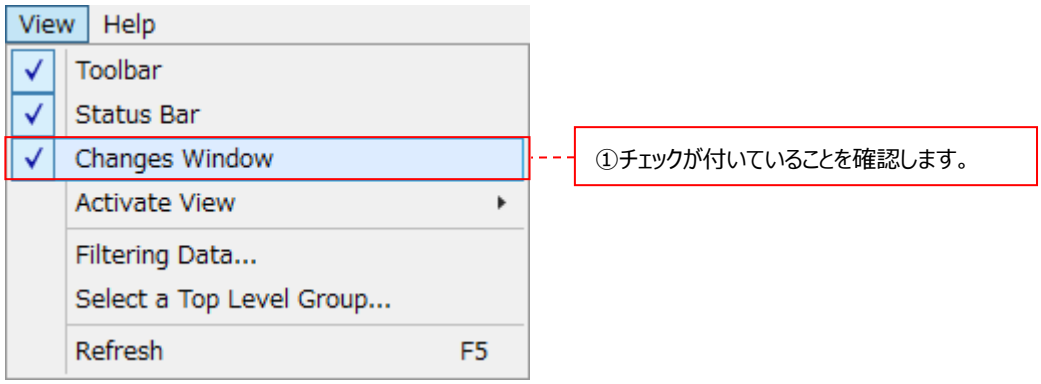
5.3.2. ターゲットの削除

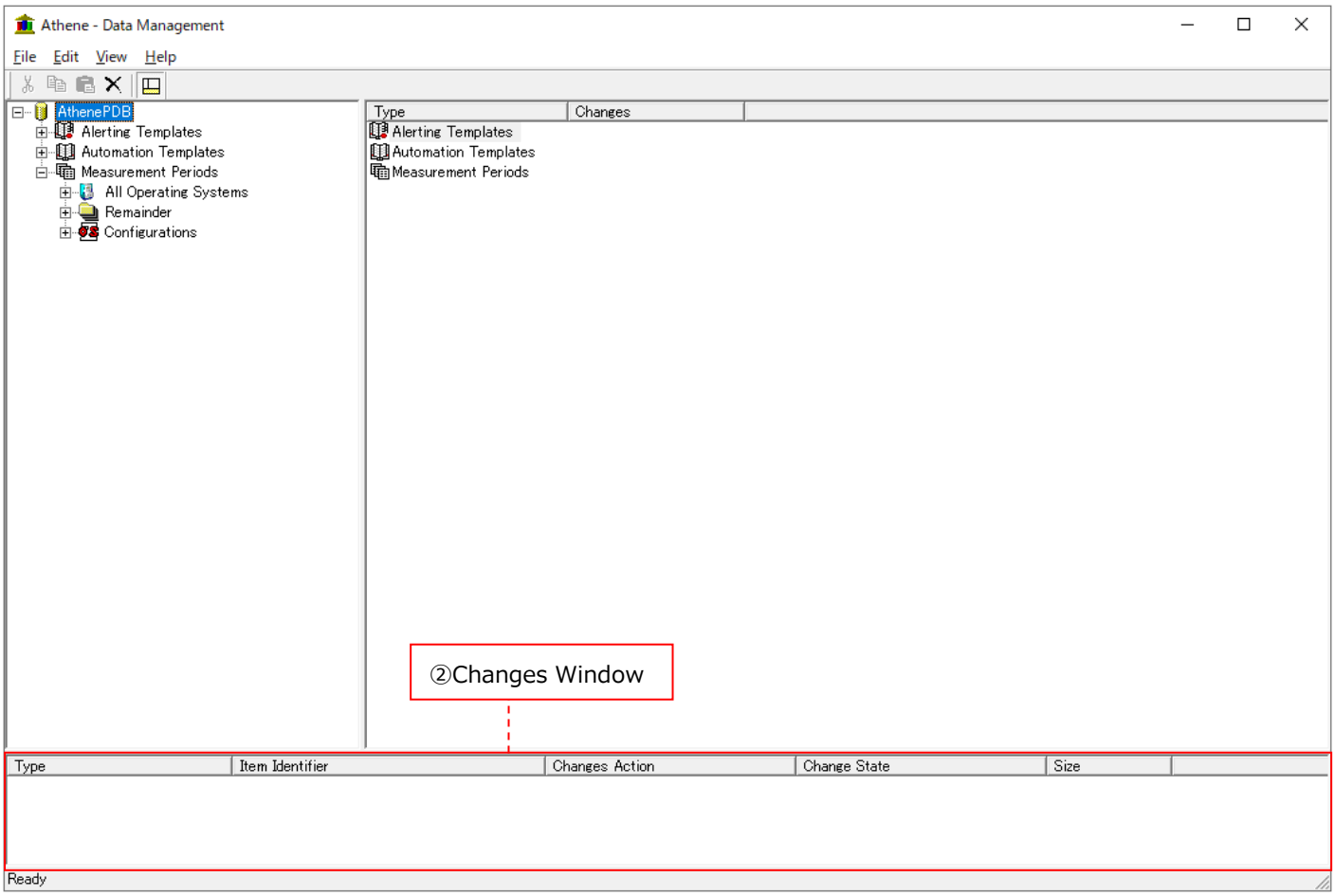
ここでは、不要になったターゲットを削除する場合の方法を説明します。

(1)「コントロールパネル→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center サービスが「開始」状態であることを確認します。

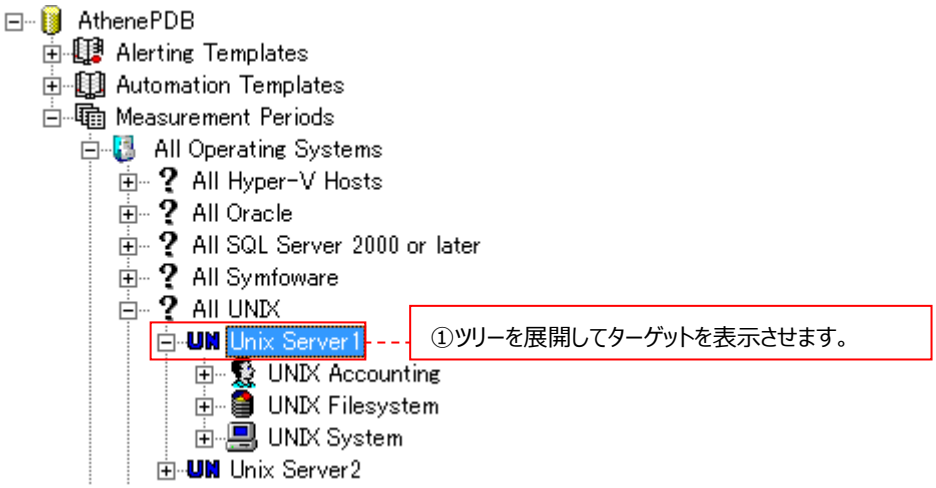
(2)「スタート→プログラム→Syncsort Capacity Management Core→Data Management」を起動します。

(3)メニューの「View→Changes Window」にチェックが付いていることを確認してください①。チェックが付いていない場合は、チェックを付けて画面下部に Changes Window を表示してください②。

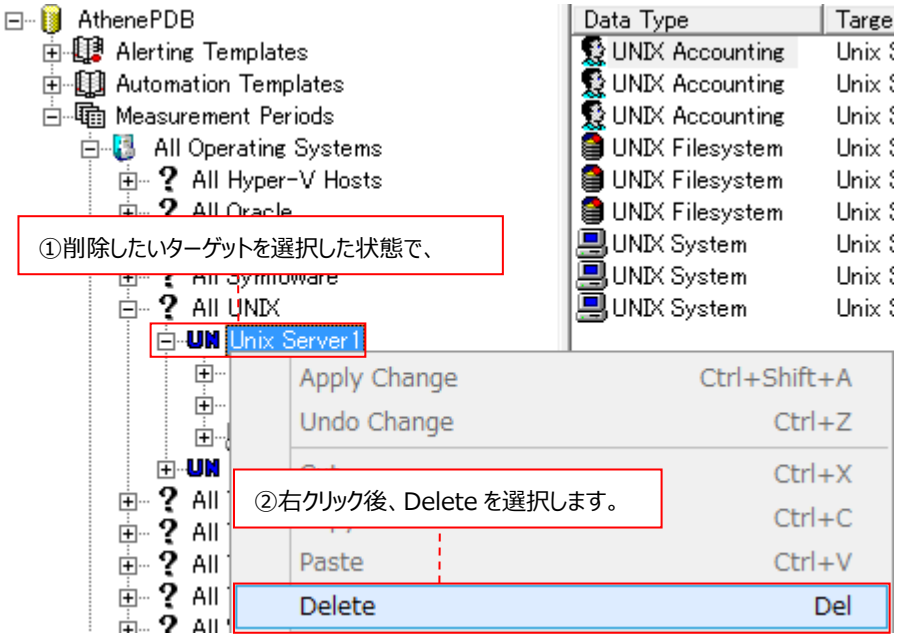




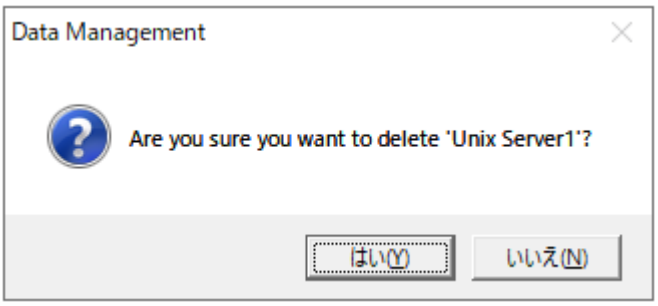
(4)画面左側のツリー表示において、Measurement Periods の「＋」をクリックしてツリーを展開します。同様に、All Operating Systems（または任意のグループ）以下の下位グループの「＋」をクリックし、削除したいターゲットまでを表示させます①。



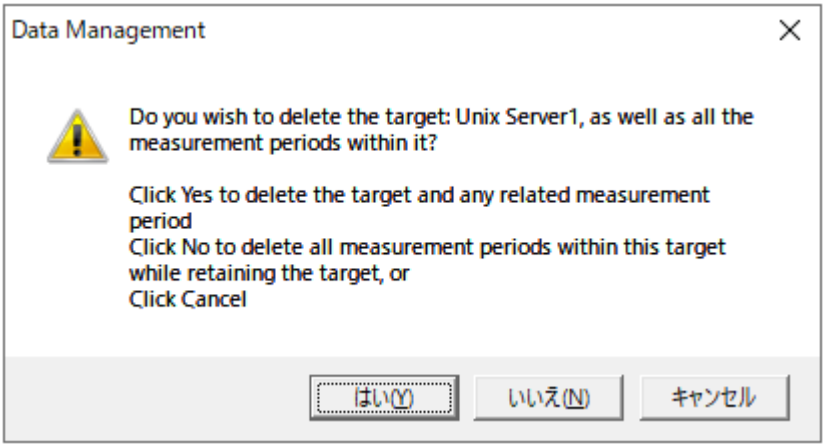
(5)削除したいターゲットを選択した状態で①、右クリックして Delete を選択します②。



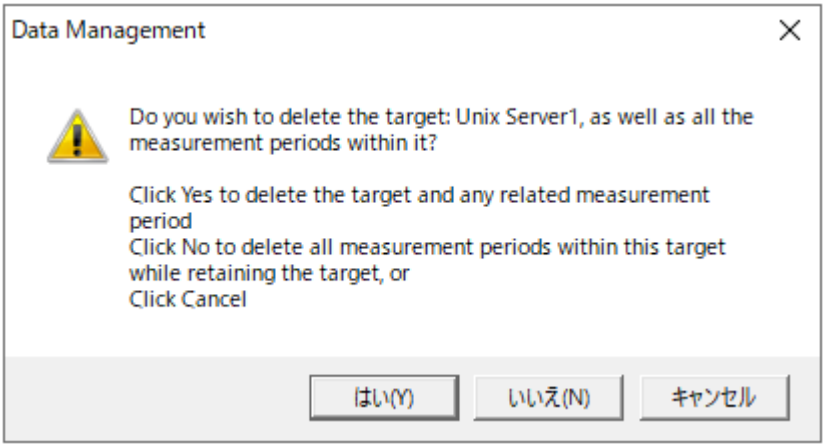
(6)以下のウィンドウが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。



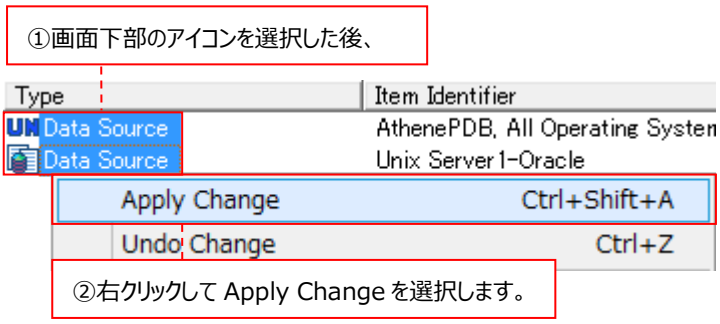
(7)次に表示されるウィンドウで、[はい(Y)]をクリックします。なお、ターゲットを削除すると、削除対象のターゲットに関するパフォーマンスデータも同時に削除されます。



もし、削除対象のシステムターゲットに Oracle／SQL Server／Symfoware データベースターゲットが関連付けられている場合、データベースターゲットも同時に削除するかどうかを確認するウィンドウが表示されます。
[はい(Y)]をクリックすると、データベースターゲットも同時に削除します。
[いいえ(N)]をクリックすると、システムターゲットのみを削除します。



(8)画面下部の Changes Window に表示されているアイコンを選択した後①、右クリックして Apply Change を選択します②。これで削除処理が開始されます。



注意！
Apply Change を実行しないと、削除処理は開始されません。

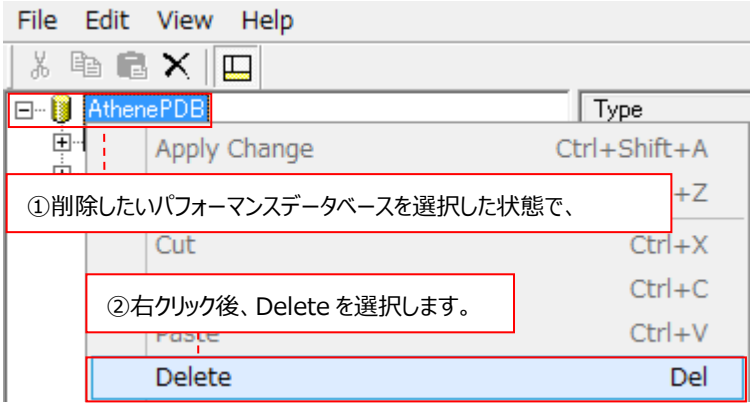
5.3.3. パフォーマンスデータベースの削除

ここでは、不要になったパフォーマンスデータベースを削除する場合の方法を説明します。

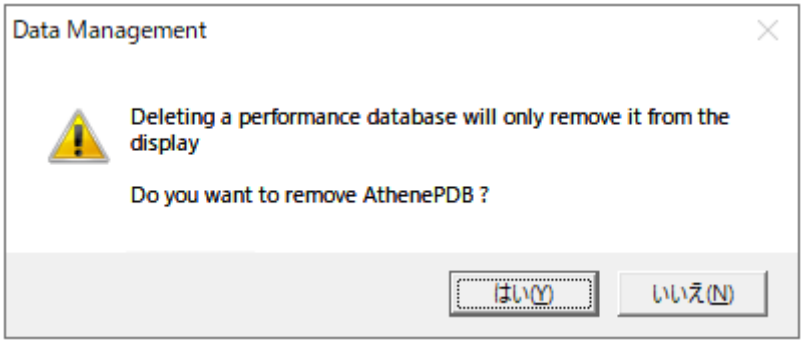
(1)「コントロールパネル→サービス」にて、Syncsort Capacity Management Control Center サービスを停止します。

(2)「スタート→アプリ→Syncsort Capacity Management Core→Data Management」を起動します。

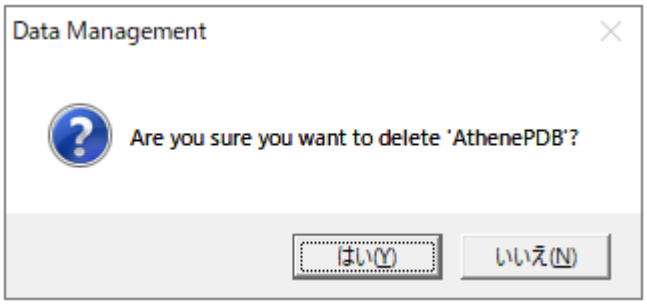
(3)画面左側にて削除したいパフォーマンスデータベースを選択した状態で①、右クリックして Delete を選択します②。



(4)以下のウィンドウが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。

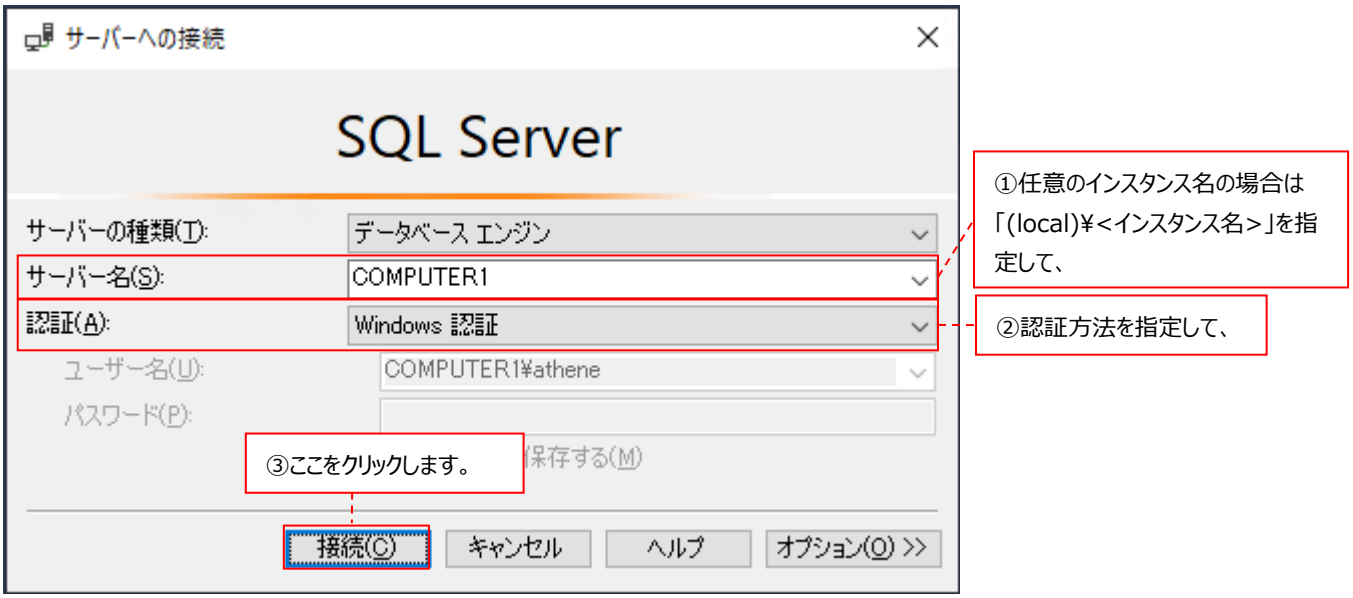


(5)次に表示されるウィンドウで、[はい(Y)]をクリックします。

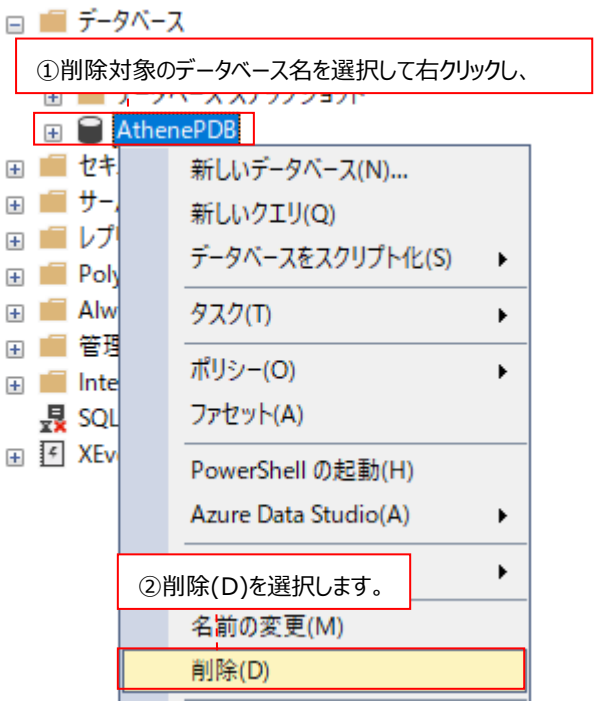


注意！
この段階では、パフォーマンスデータベースは Control Center 製品の画面上から削除されるだけであり、SQL Server の実データベースが残っている状態です。

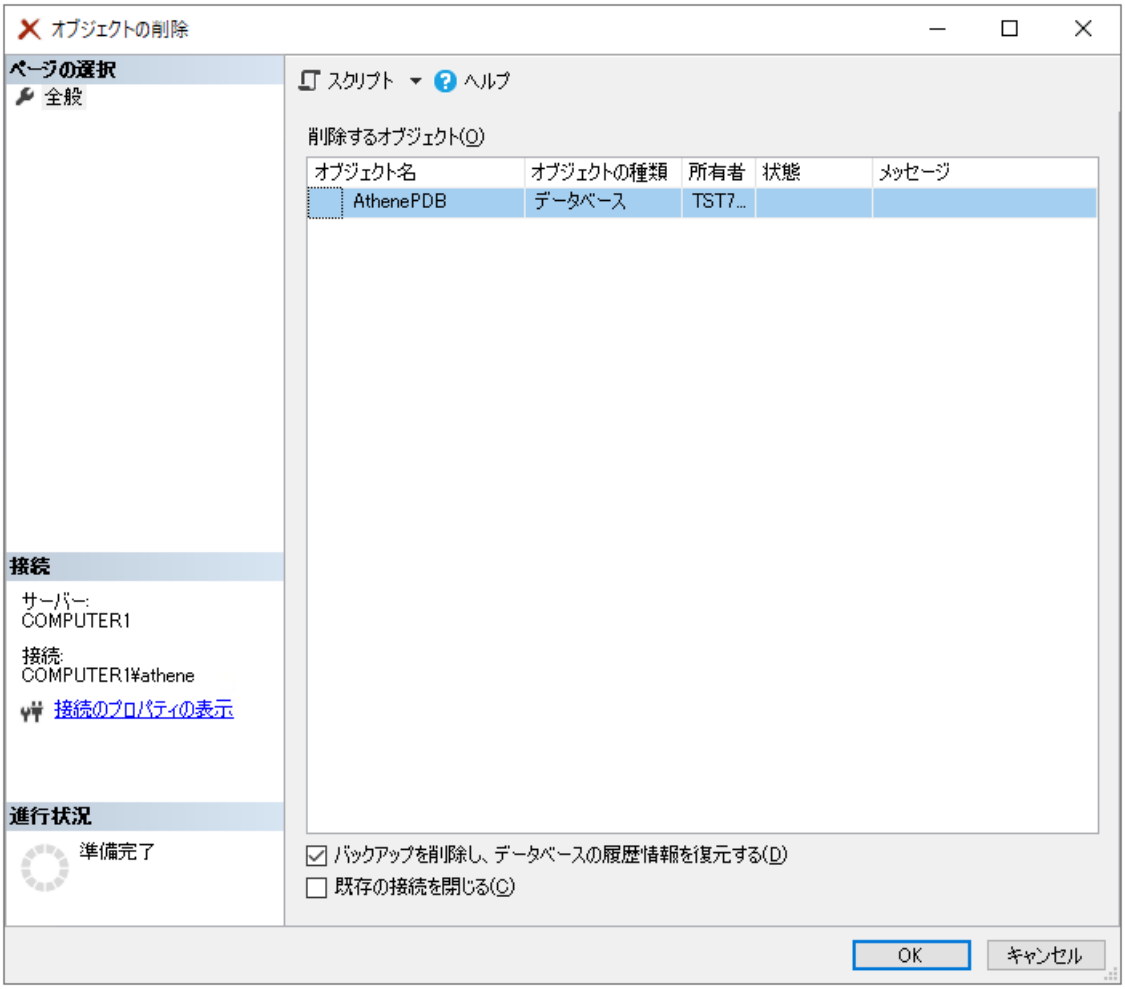
(6)Data Management にてパフォーマンスデータベースを削除した後、SQL Server の管理ツールを使用して SQL Server の実データベースを削除します。使用している SQL Server のバージョンに応じた管理ツールにて削除を行ってください。ここでは、例として SQL Server 2016 における削除手順を紹介します。以降のデータベース削除手順は、管理ツール「SQL Server Management Studio」が使用可能であることを前提としています（SQL Server 2019/2017/2016 の SQL Server Management Studio の画面に大きな差はありません）。
「スタート→アプリ→Microsoft SQL Server Tools 18→Microsoft SQL Server Management Studio 18」を起動します。サーバーへの接続ダイアログが表示されますので、SQL Server インストール時に任意のインスタンス名を設定している場合は「(local)¥<インスタンス名>」、既定のインスタンスの場合は管理用マシンのコンピュータ名を指定します①。また、SQL Server インストール時に設定した認証方法を指定して②、[接続(C)]をクリックします③。



(7)SQL Server Management Studio メイン画面の左側に表示されるツリーの中から、削除対象のデータベース名を選択して右クリックし①、「削除(D)」を選択します②。



(8)以下の画面にて[OK]をクリックすると、データベースの削除が行われます。



第6章　添付資料 A. Control Center の稼働とエラーメッセージ

6.1.　はじめに

Control Center サービスは Acquire をインストールした対象システムとの間の通信を司り、パフォーマンスデータベース（PDB）の更新などを行う Control Center 製品群のエンジンとして機能します。
Control Center は Windows サービスの一つです。したがってユーザインタフェースは無く、以下のように動作の指示を行います。

・System Manager　：ターゲットの定義、Capture／Collection プロファイルなどにより Control Center に各種ターゲットへ接続する方法、データ収集の頻度などを指示します。
・Data Management　：データの集計、PDB のデータ削除は Data Management アプリケーションで設定しますが、最終的な処理は Control Center が実行します。

6.2.　Control Center の機能

6.2.1. 送受信データ

Control Center はデータ収集対象システムとの通信において、データ転送の送信／受信両方の動作を行います。

・送信動作は Acquire へデータ収集命令（Captute Profile）を指示します。
・受信動作はパフォーマンスデータファイルを転送する機能が主となります。

6.2.2. Control Center の作業フォルダ

Control Center の扱うすべてのデータは作業フォルダを介して送受信されます。デフォルトの作業フォルダは、次のとおりです。

C:¥ProgramData¥Metron¥Work

Work フォルダの下には Out、In、Seen などのサブフォルダがあります。その用途は後述します。

6.3.　送信データ（Control Center からターゲットシステム）

以下の目的で Control Center からターゲットシステムにデータが送信されます。

・Capture Profile を Acquire へ渡します。Capture Profile には収集するデータのタイプや収集間隔などの指示が含まれています。

6.3.1. Capture Profile の送信

Capture Profile はファイル形式でターゲットへ送信されます。この送信は System Manager がプロファイルを初めて送信する時、更新時、または再送時に実行されます。

・Windows ターゲットの場合は、APMconfg.txt のみを送信します。
・Unix／Linux ターゲットの場合は、APMconfg と APMjob の 2 つを送信します。
・Oracle または SQL Server、あるいは Symfoware ターゲットの場合は、Acquire がインストールされているシステム（Windows または Unix／Linux）と同じです。

送信ファイルは、サブフォルダの「¥Work¥Out」へ出力されます。

tgtnnnnnnnn.metron

ここで「nnnnnnnn」は送信先となるターゲットシステムの一意の 8 桁ターゲット番号です。
ファイルが出力先のフォルダへ完全に書き出されると（ごく短時間です）、フォルダは次のようにリネームされます。

tgtnnnnnnnn.ready

Control Centerはファイルを適切なターゲットへ送信します。ファイルの送信後、tgtnnnnnnnn.readyフォルダは削除されます。

ウィルスチェックソフトやバックアップツールなどの市販のソフトウェアによって、tgtnnnnnnnn フォルダがロックされ、フォルダのリネームが阻害されることがあります。リネームができないために Capture Profile がターゲットに送られない状態が発生しますので注意してください。
System Manager メイン画面に表示される各ターゲットの詳細情報において、「Capture and Collection－Data Capture－Profile status」の状態が「Normal」に戻らず、「profile last sent at」が更新されない場合、上記の状態が発生している可能性があります。
フォルダのロックが解除された後に Capture Profile を再送してください。この際、Control Center の再起動は不要です。

6.3.2. Capture Profile の欠落や無効による問題

Capture Profile がターゲットへ送信されなかった場合、あるいはファイルが無効／破損している場合、ターゲットシステムの Acquire はデータを収集しません。
Capture Profile がターゲットへ送信されているかどうかを調べるには、System Manager の Profile Last Sent のタイムスタンプと Profile status が「Normal」であることを確認します。

(1)Windows Acquire の場合
ターゲットシステム内で Acquire のインストールフォルダ内にある APMIn フォルダを調べます。このサブフォルダには APMconfg.txt.last という名前のファイルがあるはずです。このファイルは最後に正常に送信済みとなった Capture Profile のコピーです。このファイルが存在しない場合は System Manager を使って Capture Profile を再送する必要があります。

(2)Unix／Linux Acquire の場合
ターゲットシステム内で、Acquire ホームディレクトリを調べて APMconfg ファイルが存在するかを確認します。また現在有効な crontab も調べて、cron が稼働中かを確認します。

6.4. 受信データ（ターゲットシステムから Control Center）

ターゲットシステムから受信するデータは、Acquire が収集したパフォーマンスデータのファイルです。このファイルは Control Center により転送され、削除対象になるまで、ターゲットシステム内に保存されています。転送済みファイルが削除されるまでの所要時間は、System Manager の Acquire Details タブを使ってユーザが日数単位で指定できます。

6.4.1. Acquire ファイルの命名規則

Acquire ファイルの命名規則は次のとおりです:

YYYYMMDDHHMMSS_<file type><data type><Syncsort Capacity Management Target Number>.<extension>

- ・YYYYMMDDHHMMSS　：ファイルを書き出した時のタイムスタンプ
- ・file type　：圧縮済みファイルの場合 az または NZ、圧縮していないファイルの場合 as
- ・data type　：ターゲットタイプ（Windows、Unix など）別に後述します。
- ・Syncsort Capacity Management Target Number　：Control Center および System Manager がデータを識別するための一意な 8 桁のターゲット番号
- ・extension　：増加した順序番号（16 進数）

ファイルは正常に転送された後、リネームして削除対象のマークが付けられます。これは転送プロセスが自動的に実行します。リネームはファイル名の先頭に「r」を付加する方法で行われます。

6.4.2. 受信データのフォルダ

受信データファイルはターゲットシステムからコピーされる時に、Work フォルダの次のサブフォルダへ出力されます。

Work¥In¥tgtnnnnnnnn.metron

サブフォルダ名については、データタイプ（Windows、Unix など）毎に後述します。
ファイル転送が終了すると出力先フォルダは次のようにリネームされます。

Work¥In¥tgtnnnnnnnn.ready

Control Center はこのファイルを取り出して次のフォルダへ転送します。

Work¥Seen¥tgtnnnnnnnn

tgtnnnnnnnn フォルダはそれぞれ、データタイプ毎のサブフォルダを持っていてファイルが処理済みになるとサブフォルダは削除されます。

何かの理由でファイルを処理できない場合、ファイルは次のフォルダへ移動されます

Work¥BadFiles¥YYYYMMDD¥tgtnnnnnnnn

ファイルを処理できなかった理由の詳細は Control Center Log（「6.5. Control Center ログ」参照）へ記録されます。ファイルが未処理となった理由（および対処方法）が判明したら、手作業で Work¥Seen¥tgtnnnnnnnn フォルダの適切なサブフォルダへコピーして Control Center で再処理することができます。

6.4.3. Windows データの受信

(1)Windows フォルダ

受信した Windows データファイルは tgtnnnnnnnn フォルダのサブフォルダ「APMout」へ書き出されます。同じデータ収集間隔（5 分、10 分、15 分など）で連続した収集期間内の最初に Acquire が取得したデータファイルは、Windows パフォーマンスカウンタに関する制御情報が含まれるため、その他のファイルよりサイズが大きくなります。拡張子の番号（16 進数）は常に偶数番号となり、新しいファイル毎に 2 ずつ増加します。

(2)Windows データタイプ

Windows ファイルの ＜data type＞ 文字は次のようになります。

・NP　　：システムレベル／プロセスレベルのパフォーマンスデータ
・NT　　：システムレベルのみのパフォーマンスデータ
・IS　　：IIS パフォーマンスデータ
・SQ　　：SQL Server パフォーマンスデータ
・OR　　：Oracle パフォーマンスデータ
・SG　　：Oracle テーブルスペースデータ
・SF　　：Symfoware パフォーマンスデータ

(3)その他の Windows ファイル

Windows 環境では 2Acquire.txt というファイルも転送されます。このファイルには Acquire のリリースレベルとバージョン番号が含まれています。

6.4.4. Unix／Linux 受信データ

(1)Unix／Linux フォルダ

Unix または Linux ターゲットから受信したファイルは tgtnnnnnnnn フォルダの以下のサブフォルダに書き出されます。

・¥system　：システムのパフォーマンスデータ
・¥account　：pacct ファイルからのユーザデータ
・¥disk　：ファイルシステムスペースのデータ
・¥oracle　：Oracle パフォーマンスデータ
・¥oraseg　：Oracle テーブルスペースデータ
・¥symfoware　：Symfoware パフォーマンスデータ

(2)Unix／Linux データタイプ

Unix および Linux ファイルの＜data type＞文字は次のどれかです:

・ps　：ps コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・sa　：sar コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・vm　：vmstat コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・io　：iostat コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・mp　：mpstat コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・sp　：swap コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・cf　：構成情報のデータ。¥system へ書き出されます。
・nw　：netstat コマンドのデータ。¥system へ書き出されます。
・ac　：acctcom コマンドのデータ。¥account へ書き出されます。
・df　：df コマンドのデータ。¥disk へ書き出されます。
・or　：Oracle データ。¥oracle へ書き出されます。
・sg　：Oracle テーブルスペースデータ。¥oraseg へ書き出されます。
・sf　：Symfoware データ。¥symfoware へ書き出されます。

なお、Unix または Linux の種類／バージョンに応じて、出力されるデータファイルが異なります。

(3)OK ファイル

データファイルの他に、各サブフォルダにはファイル拡張子毎に OK ファイルも存在します。これはサイズがゼロのファイルで、名前の形式は次のとおりです。

YYYYMMDDHHMMSS_ok<Syncsort Capacity Management Target Number>.<extension>

OK ファイルは、データ転送プロセスにデータ転送の準備ができたことを示すための Acquire が生成したサイズゼロのファイルです。このファイルは実際の転送対象とはならず、ターゲットから Acquire データファイルが正常に転送されたとき、tgtnnnnnnnn フォルダの適切なサブフォルダ内に生成されるファイルです。あるファイル拡張子の OK ファイルが存在しない場合、Control Center はそのデータの PDB 変換処理を行いません。

(4)奇数番号を持つ最初の ps ファイル

Unix／Linux 環境では最初に収集される Acquire ファイルは、奇数番号の拡張子を持つ ps ファイルです。この奇数番号ファイルは収集期間の開始を知らせる働きをします。次のインターバルの収集ファイルは、この奇数番号に 1 を加算した偶数番号を拡張子とし、以後、拡張子は常に偶数番号となります。Acquire は少なくとも 1 週間に 1 度、連続したデータ収集期間の区切りを示すための奇数番号の拡張子を持つ ps ファイルを生成します。

6.5. Control Center ログ

6.5.1. ログファイルの出力場所と名前

Control Center は以下のフォルダにログファイルを出力します。

C:¥ProgramData¥Metron¥Logs

また、次のレジストリキーにログファイルの出力場所が記録されています。

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Metron¥Shared¥Log Path

ログファイルの名前は次のとおりです。

Syncsort Capacity ManagementCC-<コンピュータ名>-YYYY-MM-DD-HH.log

6.5.2. ログファイルのメンテナンス

Control Center が出力するログファイルによってディスクスペースを圧迫することを避けるために、ログファイルは自動でメンテナンスされます。指定した保存期間を経過したログファイルは自動で削除されます。ログファイルの保存期間の変更方法は「4.9.1. Control Center の動作環境設定 (4) Control Center の動作ロギング」を参照してください。

6.5.3. ログメッセージのフォーマット

メッセージはタイプ（エラー／ワーニング／情報）に関係無くすべて同じ基本構造をしています。

メッセージタイプ	tnn	日時	アクション	メッセージ
記録するメッセージのタイプを示す文字 ID E – エラー I – 情報 W – ワーニング V – 詳細	メッセージをレポートするスレッドを識別します。	メッセージを記録した日時を示すタイムスタンプ。 YYYY-MM-DD HH:MM:SS.hhh	このフィールドは Control Center が何を処理していたかを記述します。 Collect： 設定されたターゲットからファイルを転送します。接続の詳細がメッセージに組み込まれます。 PDBUpdate： データを PDB に格納します。 Syncsort Capacity ManagementCC： Control Center のその他諸々の処理	メッセージテキスト。このメッセージは複数行にまたがることがあります。

6.6. ログファイル内のメッセージ

文書化可能な Control Center のエラーについて、以下に記載します。
発生し得るすべてのエラーについて記載しているわけではなく、発生する可能性のあるエラーについての一般的な原因および、エラーを解決する上で必要なデータを収集する方法を記載しています。

6.6.1. Control Center エラーの種類

Control Center エラーのほとんどは、Syncsort Capacity ManagementPDB 内の、s_ControlCenterEventLog テーブルに蓄積され、System Manager のエラーウィンドウで確認することができます。
s_ControlCenterEventLog テーブル内に記載されるエラーについて、エラーの原因及び対処方法を下記に記載します。

【s_ControlCenterEventLog テーブル内に蓄積されるエラーの種類】

Error Type	詳細	解決に必要なデータ/確認項目
FileReadError	収集データの読取不可	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 c)ウィルススキャン、インデックスの作成、バックアップが行われていないこと、また、これらを実行している場合には、metron...¥work ディレクトリ配下および、...¥Logs ディレクトリが対象外になっていることを確認する。 d)監視対象サーバが UNIX 機の場合は下記も必要 a.監視対象サーバ上の「Syncsort Capacity Management」ユーザに対するメール b.直近の APMconfg c.AcqSetup.log
WindowsDataError	Windows データ変換時のエラー	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要
AlreadyInserted	Control Center 内で既に処理されたデータの可能性あり	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要

Error Type	詳細	解決に必要なデータ/確認項目
NoMatchingTemplate	Control Center 内のテンプレートに合致しない種類のデータを変換しようとして発生するエラー	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた20～30個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 c)Control Center マシン上の..¥Badfiles ディレクトリ内のファイル d)監視対象サーバが UNIX 機の場合は下記も必要 a.監視対象サーバ上の「Syncsort Capacity Management」ユーザに対するメール b.直近の APMconfg c.AcqSetup.log
ParseError	生データ変換中のエラー。Control Center 内のテンプレートと生データの形式が一致しない場合に発生	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた20～30個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 c)Control Center マシン上の..¥Badfiles ディレクトリ内のファイル d)監視対象サーバが UNIX 機の場合は下記も必要 a.監視対象サーバ上の「Syncsort Capacity Management」ユーザに対するメール b.直近の APMconfg c.AcqSetup.log
MissingFileOrSection	生データ変換中のエラー。生データが不完全な場合や、作成されていない場合に発生	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた20～30個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要
TemplateError	Control Center のバージョンと、Control Center 内のテンプレートファイルのバージョン不一致によって Control Center がテンプレートファイルを読み込めずに発生するエラー。このエラーが発生すると、Control Center サービスが停止する	a)Diagnostics 実行結果

Error Type	詳細	解決に必要なデータ/確認項目
PDBUpdateError	PDB 内にデータを蓄積する際に発生するエラー。下記過程で発生する。 ・生データを解凍する時 ・Windows と VMware ファイルを解析する時 ・PDB の更新処理終了後、直前のインターバルのファイルを削除する時 ・PDB 変換完了後、生データを BadFiles フォルダに移動する時 ・SQL Server へ接続できない時 ・無効な値のため、SQL Server のデータベースへ値を Insert できない時	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 c)エラーの種類によって、下記情報が必要 ・ファイルの移動および、削除エラーの場合→ProcMon トレースが必要 ・SQL サーバエラーの場合→エラーが発生している際の SQL Profiler Trace ログと、連続した Acquire 生データ
RowInsertionError	SQL テーブルへ、特異なデータを Insert する際に発生	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要
OverlappingPeriods	予期しない統計データの期間重複	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 Diagnostics の結果を収集する際には、統計データが重複している期間を含んだデータが入っていることが望ましい。
ValidationError	統計データのインターバルが正常に並んでいない	a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた 20～30 個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要 Diagnostics の結果を収集する際には、インターバルが不規則になってしまった期間のデータが含まれていることが望ましい。

Error Type	詳細	解決に必要なデータ/確認項目
StartNewPeriod	統計データの期間が切り替わった際に発生。このメッセージはエラーではなく、データ収集に中断が発生した場合や、インターバルの変更を行った際に発生する。	もしこの問題が、左記に記載した原因以外で発生した場合には、下記データが必要。 a)Diagnostics 実行結果 b)監視対象サーバ上の「r」にリネームされた20～30個程度の連続した生データ(Windows 機の場合は、PerfText ファイル作成のために、データ収集開始直後のファーストインターバルデータも必要)エラーが発生しているインターバル前後のデータが必要
InvalidDecryption	このエラーは、データベースに蓄積されているパスワードを読み取る際に発生します。（このエラーは、Syncsort Capacity Management 外部から s_Connection.AuthValue テーブルを改ざんしない限り、滅多に発生しません。）	a)データベースを再編成するために、「Bulk Targets」を再実行する。
FileCollection	統計データ収集中に発生するエラー。下記箇所でエラーが発生している。 ・監視対象サーバからファイル収集する時 ・収集したファイルを、Control Center 上のワークエリアへの書き込む時 ・capture profile を作成して、「Out」ディレクトリへ書き込む時	a)Diagnostics 実行結果 b)Control Center マシンから対象監視マシンへの、同じ資格情報（ログインユーザなど）を用いた手動接続結果。
Housekeeping	Housekeeping ジョブの実行失敗。このエラーは、下記過程で発生する。 ・bad files の削除に失敗した時 ・古いログファイルを削除する時 ・構成データを読み込む際にエラーが発生した時 ・Metron Workディレクトリのリネームに失敗した時 ・データベースから、Auto Update Acquires の読込みに失敗した時	a)Diagnostics 実行結果 b)ウィルススキャン、インデックスの作成、バックアップが行われていないこと、また、これらを実行している場合には、metron...¥work ディレクトリ配下および、...¥Logs ディレクトリが対象外になっていることを確認する。
CaptureProfile	Capture profile を送信する際に発生。下記原因で発生する。 ・capture profile の送信に失敗した時 ・capture profile 送信後、「Out」ディレクトリの削除に失敗した時 大抵このメッセージは、Control Center に問題があるのではなく、単に転送設定に問題があることが多い。Collection の場合も同じ。	a)Diagnostics 実行結果 b)Control Center に指定した転送用ユーザが、監視対象サーバ上の接続先ディレクトリに、書込み、読み取り権限を有しているか確認する。

Error Type	詳細	解決に必要なデータ/確認項目
CaptureError	VMware Only: VMware 統計データにエラーが見つかった際に発生。(データ変換は停止し、変換できないデータは、Bad Files へ移動する)	URL の「sdk」が小文字であること、VMware の接続許可があるか確認する。 VMware のトレース機能を ON にする。（注意：トレース機能を ON にすると、同じプロファイルを共有している全ての VMware ターゲットをトレースすることになる） トレースログを入手する
CaptureWarning	VMware Only: VMware 統計データに問題がある場合に発生。(このエラーの場合、データ変換処理は継続する)	VMware のトレース機能を ON にし、トレースログファイルを入手する。（注意：トレース機能を ON にすると、同じプロファイルを共有している全ての VMware ターゲットをトレースすることになる） トレースログを入手する
CriticalMonitorError	Critical Service Monitor only: Critical service monitor profile が正確に定義されていなかったり、適切なターゲットに割り当てられていない場合に発生	a)Diagnostics 実行結果
ZerozOSCfgCPCount	z/OS only: z/OS の欠かせない重要なデータにゼロの値が入っていた場合に発生	a)z/OS の生データを入手
NullVMwareCpuCount	VMware Only: VMware 統計データに CPU Count 情報が無い場合	a)VMware 統計データを入手

6.6.2. Control Center エラーの詳細

既述のエラーのいくつかについて、下記に詳細を記載します。弊社に、Diagnostics の実行結果や、色々な情報を送る前に、お客様が対処できる方法について記載します。記述の表（「解決に必要なデータ/確認項目」）について、詳細を記載します。

【ファイル読込みエラー】
ファイル読込みエラーの詳細は、下記の通りです。

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
File is empty	sar コマンド結果が取得できないなど、統計データのファイルサイズがゼロの場合。主な原因は下記 5 つです。 1)監視対象 OS バージョンに対して、間違った種類の Acquire をインストールしている場合。 2)System Manager で、間違った OS が選択されている場合。 3)監視対象サーバ上で、OS のパッチが必要、またはパッチが適用された場合 4)転送中にファイルが破損した場合。 5)使用率が高い監視対象サーバにおいて、データ収集が終わる前に次のインターバル収集が始められるように abut 時刻を短くしている場合。Abut 時刻は、Target 詳細設定から変更可能。→UNIX オプションタブの、“Skip sample if previous sample overruns by more than XX seconds”の、「XX」数値を増加させる。	監視対象サーバが UNIX の場合、Acquire が正常にインストールされているか確認する。
AC File too large (<x>MB)	課金データ収集ファイルは、圧縮データで 50MB 以内、非圧縮で 400MB 以内であること。	System Manager 上でも同様。 ・UNIX 課金データ収集インターバルを短くする。 ・Target 詳細設定の UNIX オプションタブで、‘Discard accounting records for processes that use less than x CPU seconds’の設定を行ってデータ収集に必要以上の時間がかかるデータを収集しないようにする。
Error reading archive<error message> Cause <cause>	Windows 機の統計データが壊れていて、期待されたフォーマットではない場合に発生。	
Error reading file <error message> Cause <cause>	ファイルのアクセス競合違反などで、Windows の統計データを読み込むことができなかった場合に発生。	ウィルススキャン、インデックスの作成、バックアップが行われていないこと、また、これらを実行している場合には、metron…¥work ディレクトリ配下および、…¥Logs ディレクトリが対象外になっていることを確認する。

【Windows データエラー】
次のエラーは、Windows、IIS、Exchange、SQL Server データを収集する際に発生するエラーです。
Windows データエラーの詳細は次の通りです。

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
Actual Interval too different from Capture Interval	統計データが予定よりも遅れて収集された場合に発生。Acquire サービスや監視対象サーバを再起動した場合に、直前のデータと連続性が途切れる場合に発生。	
Syncsort Capacity ManagementCC WinParser has caught an unexpected Exception*. Please contact Action Line for support.	データ内の予期せぬエラー	
An Exception* occurred	データ内の予期せぬエラー	
Syncsort Capacity Management Exception* 1001, There is no performance text map available.	ファーストインターバルが無い、または壊れている。PTnnnnnnnn.dat ファイルが壊れている場合に発生。	新しくデータ収集期間（ピリオド）を切り替えるために、強制的に少なくても 2 インターバル分、Acquire を停止させ、その後再開させる。
Syncsort Capacity Management Exception* 1005, The version number in the PerfText file is incorrect	PTnnnnnnnn.dat ファイルが壊れている、または、監視対象サーバの OS が変更された場合に発生。	新しくデータ収集期間（ピリオド）を切り替えるために、強制的に少なくても 2 インターバル分、Acquire を停止させ、その後再開させる。
Syncsort Capacity Management Exception* 1006, The capture year is earlier than 1991	Acquire が古い、または、パフォーマンスカウンタが壊れている場合に発生。	Acquire をアップデートする、または、パフォーマンスカウンタを修復する。
Syncsort Capacity Management Exception* 1007, This interval has been skipped. Key performance data is missing (service started after Acquire?	1)統計ファイル内にデータが無い場合 2)統計ファイル内のデータが無効な場合	1)Acquire サービスは、SQL Server サービスが開始した後に開始されなければならない。 2)System Manager 上で登録した SQL Server のインスタンス名が正しいか確認する。
Two processes have the same PID	プロセスは、同じ PID を持たないので、このエラーが発生した場合、データが壊れている可能性がある。	
An attempt has been made to evaluate a non-snapshot counter in a snapshot profile	データファイルの形式が、期待されたものではない場合に発生。	

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
The performance text map is corrupt		ウィルススキャン、インデックスの作成、バックアップが行われていないこと、また、これらを実行している場合には、metron...¥work ディレクトリ配下および、...¥Logs ディレクトリが対象外になっていることを確認する。 ウィルススキャンが原因ではない場合、PTnnnnnnnn.DAT ファイルを削除して、強制的に少なくても 2 インターバル分、Acquire を停止させ、その後再開させる。
The SQL Server instance name in the data does not match the instance name in the target definition. Please correct the SQL Server instance name using System Manager.	System Manager 上で定義されている、SQLServer インスタンス名が正しくない。	System Manager で指定した SQL Server インスタンス名が正しいか確認する。

【NoMatchingTemplate and ParseError】

このエラーが発生する 5 つの要因は、

(1)OS 上に間違った Acquire がインストールされている時
(2)System Manager で間違った OS を選択している時
(3)監視対象サーバが OS のパッチを必要としている時、または、パッチをあてた時
(4)ファイル転送中の破損
(5)使用率が高い監視対象サーバにおいて、データ収集が終わる前に次のインターバル収集を始められるように abut 時刻を短くしている場合。Abut 時刻は、Target 詳細設定から変更可能。
→UNIX オプションタブの、"Skip sample if previous sample overruns by more than XX seconds"の、「XX」数値を増加させる。

NoMatchingTemplate と ParseError が発生しないために、下記に気を付けること。

a.監視対象サーバ OS に適した Acquire がインストールされているか、確認する。
b.System Manage 上で適切な OS 種別が選択されているか、確認する。
c.Abut 時間が充分に設定されている。
d.この文書に記載されているデータを弊社に送付する。

ParseError の詳細は下記の通りです。

エラーの種類	詳細
ParsingError	統計データに不正な行がある
UnknownSection	統計ファイル内のセクションが不正
TooFewFieldsOnLine	統計データ内のフィールド不足
UnrecognizedDataLine	統計データ内に認識できない行があるため、変換処理はスキップされる。
UnexpectedDataLine	統計データが期待した結果と違う場合
TooFewChildGroups	統計データ内の繰り返し行不足の場合
ParseFieldError	統計データのフィールドが期待した内容と違う場合。
UnexpectedEOF	統計データの終わりが予期せぬ時刻で終わっている場合
NotExpectedHeaderField	統計データのヘッダーが不正な場合

【PDBUpdateError】
PDBUpdateError の詳細は下記の通りです。

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
No database target for target <target number> with database <data file name>	Control Center が統計データとデータベースを結びつけることができない場合に発生。	データ収集を停止して、capture profile を変更するか、正しいデータベースを作成し直す。
Negative interval length	課金データ（ps データ）変換中に発生。課金データに異常がある場合に発生。	UNIX マシン上の、crontab と APMconfg を確認する。もし、この二つのファイルが不正な場合、capture profile を再送信する。もし、正しい場合、Acquire のインストールが失敗している。
Interval length invalid - too long.	課金データ（ps データ）変換中に発生。ピリオド期間が 7 日以上の場合に発生。	UNIX マシン上の、crontab と APMconfg を確認する。もし、この二つのファイルが不正な場合、capture profile を再送信する。もし、正しい場合、Acquire のインストールが失敗している。
Error during update: Index # <i> Message: <message> LineNumber: <line> State: <error state> Procedure: <name> Number: <error num> Class: <error class>	課金データ（ps データ）変換中に発生。ユーザ・コマンドデータを変更しようとして発生。	
Sample already exists in a_u_acc_Sample table OR Sample already exists in a_u_acczone_Sample table	課金データ（ps データ）変換中に発生。Control Center が既にこのデータを PDB 変換している場合に発生。	
Problem matching measurement period in a_u_acc_Period Or Problem matching measurement period in a_u_acc_Period - file may be out of sequence OR Problem matching measurement period in a_u_acczone_Period Or Problem matching measurement period in a_u_acczone_Period - file may be out of sequence	課金データ（ps データ）変換中に発生。課金データが順不同で処理されている場合に発生。	

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
No matching period in a_u_acc_Period table OR No matching period in a_u_acczone_Period table	ac ファイル変換中に発生するエラー。ps データのみが既に変換されてしまっており、ac ファイルのインターバルが、ps データと一致しない場合に発生する。	Target 設定の UNIX options タブ、'Ignore process data' にチェックが入っていないことを確認する。
Negative interval length.	統計データが壊れている場合に発生。	
Error during rollback: <message> OR Error during rollback: Index # <i> Message: <message> LineNumber: <line> State: <error state> Procedure: <name> Number: <error num> Class: <error class>	ac ファイル変換中に発生するエラー。ロールバックができない場合に発生する。	
Error during update: <message> OR Error during update: Index # <i> Message: <message> LineNumber: <line> State: <error state> Procedure: <name> Number: <error num> Class: <error class>	ac ファイル変換中に発生するエラー。データベース更新中に予期しないエラーが発生した場合に出力される。	
Error in Unix User Update: Cannot find target ID	ps、ac ファイル変換中に発生するエラー。変換しようとするデータの TargetID が見つからずに発生。	
Error in Unix User Update(GetTargetID):	ps、ac ファイル変換中に発生するエラー。データベース上の TargetID を読み込もうとして発生する。	
Syncsort Capacity Management 8 does not support NS or NU file types	バージョン Syncsort Capacity Management6 の Windows Acquire で収集されたデータを PDB 変換しようとして発生するエラー。既に旧バージョンの Syncsort Capacity Management はサポートしていないので、起こり得ないエラー。	Windows Acquire をアップグレードする。

【Housekeeping】
Housekeeping エラーの詳細は下記の通りです。

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
Control Center Target license count exceeded. PDB Updating suspended.	許可された Target 数を超えて PDB 変換しようとした際に発生するエラー。このエラーは、ライセンスを使用しているバージョンの Syncsort Capacity Management でのみ発生する。ライセンス超えエラーが発生すると、全ての PDB 変換処理が停止する。	下記のいずれかを実施 ・ライセンスを使用しないバージョンの Syncsort Capacity Management をインストールする。 ・ライセンスを増やしてもらうよう、弊社に連絡する。 ・ライセンス数以下になるように、Target を削除する。
No Control Center license available [Invalid License Server AXM001]	AXM001.EXE にアクセスできない場合に発生する。Control Center は停止する。	下記のいずれかを実施 ・ライセンスを使用しないバージョンの Syncsort Capacity Management をインストールする。 ・タスクマネージャから、AXM001.EXE プロセスを強制終了し、再度立ち上げる。
Error accessing License Server. PDB Updating suspended.	ライセンスサーバにアクセスできずに発生するエラー。Control Center は停止する。	Syncsort Capacity Management License Server サービスが開始していることを確認する。AXM001.lic ファイル内の、AXM001.exe パスの記述が正しいか確認する。
Control Center on <Syncsort Capacity ManagementPDB> has GUID <ControlCenterRegistryGUID> in registry but <ControlCenterGUID> in s_ControlCenter. Stopping.	このエラーは滅多に発生しない。 Syncsort Capacity ManagementPDB の内容が手動で編集されたような場合に発生する。	
Error reading Control Center field <field name> value (<field value>)	s_ControlCenter テーブルが壊れている場合に発生。	
"Error reading s_Connection for ConnectionID <ConnectionID> field <field name> value (<field value >)	s_Connection テーブルが壊れている場合に発生。	
Unsupported TargetType: <target type>	S_Target テーブルが壊れている場合に発生。	
Error reading target data TargetID <TargetID> field <fieldname> value (<value>)	S_Target テーブルが壊れている場合に発生。	
Error reading collection profile	s_CollectionProfile テーブルが壊れている場合	

CollectionID <CollectionID> field <field name> value (<field value >)	に発生。	
Error reading Integrator template AgentTypeID <AgentTypeID>	Integrator Templates が壊れている場合に発生。	

【Start Up Errors】

Control Center を停止させる、一般的なエラーは、s_ControlCenterEvent テーブルよりも Control Center のエラーログに記載されます。

これらのエラーログには、Control Center のエラーだけでなく、SQL Server のエラーも書き込まれます。

Control Center エラーの詳細は下記の通りです。

エラーメッセージ	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
Database <Syncsort Capacity ManagementPDBName> on <ServerName> version <DBVersion> - Syncsort Capacity ManagementCC requires <Syncsort Capacity ManagementCCVersion>	Control Center が期待するデータベースのバージョンと、実際の PDB バージョンが異なる場合に発生。	Control Center と Syncsort Capacity ManagementPDB が同じバージョンであることを確認する。
HKLM¥SOFTWARE¥Metron¥Shared is missing from the registry	レジストリへの登録が不完全なため発生するエラー。	Control Center の再インストール
HKLM¥SOFTWARE¥Metron¥Syncsort Capacity ManagementCC is missing from the registry	レジストリへの登録が不完全なため発生するエラー。	Control Center の再インストール
Syncsort Capacity ManagementCC¥AthCCWorkArea directory is missing from the registry OR AthCCWorkArea directory is missing from the registry	ワークエリアのパスが、レジストリに正常に登録されていないために発生するエラー。	Control Center の再インストール
DatabaseServer and DatabaseName must be specified in the registry OR Syncsort Capacity ManagementCC¥DatabaseID value is missing from the registry OR DatabaseID or DatabaseServer & DatabaseName missing from the registry	データベースの詳細情報が、正常にレジストリに登録されていないために発生するエラー。	データベースの詳細情報の入力に気をつけながら、Control Center を再インストールする。

【Event log messages】

何らかの理由で、S_ControlCenterEventLog テーブルに何のエラーも記載されない場合、イベントログのアプリケーションログにエラーが書かれます。

エラーが発生した場合には、弊社に Syncsort Capacity Management diagnostics の実行結果を送付してください。

アプリケーションログに記載されるエラーログの詳細は下記の通りです。

エラーの種類	詳細
Control Center failed while continuing. Use ¥"net stop Syncsort Capacity ManagementCC¥" to stop Control Center.	Control Center が一時停止後、稼働しなくなった。
Error during Stop	Control Center が正常に停止しない。
Error writing stop time to database	Syncsort Capacity ManagementCC サービスが停止した時刻を、s_Control Center テーブルに書き込もうとしてできなかった。
Error writing Target Number Map	Push Acquire のための sysinumMap.txt ファイルに書き込めない場合のエラー。
Error writing Push APMConfg	Push Acquire が書込み不可の際に発生するエラー。
Error reading installation targets OR Error reading installation targets	Legacy target の詳細が読込み不可の際に発生するエラー。
Error updating windows data	PDB 内の Windows データを更新する際に発生するエラー。
Error parsing Windows Data	Windows データの解凍エラーでなく、解凍後 PDB へ蓄積する際に発生するエラー。
Error parsing text data	PDBUpdateError 発生後、VMWarePV データを読み込む際に発生するエラー。
Error parsing DataSet data	PDBUpdateError 発生後、VMWare xml データを読み込む際に発生するエラー。
Error queuing timed jobs	タイマージョブが停止し、ジョブが処理されず、溜まりだした際に発生するエラー。
Error reading Configuration Data	構成データを読み込む際に発生するエラー。
Event error. <Name of job> OR Serious event error.	特定のジョブが失敗した際のエラー。
Error deleting alerts and events	古い s_ControlCenterAlertLog と、 s_Control CenterEventLog レコードを削除する際のエラー。
Critical error initialising Control Center.	Control Center サービスの初期化に失敗した際のエラー。

しかし、アプリケーションイベントログへエラーが書き込まれた場合、下記メッセージが Control Center ログファイルに追加されます。

Era-messe-zi	詳細	弊社にデータを送る前に確認する項目
Error opening event log.	Control Center がイベントログを開くことができない際に発生するエラー。	Control Center ユーザに、アプリケーションイベントログへの書込み権限があるか確認する。
Error writing event log.	イベントログへ書き込もうとして発生するエラー。	イベントログファイルを空にするか、容量を大きくする。

【AXL305log】

ファイル転送に関するエラーは、AXL305log ファイルにも書き出されます。主要なエラーについて、下記に問題解決方法と解決のためのデータ転送方法について記載します。

・Control Center から、監視対象サーバへ接続できない場合には、
－Control Center で登録したユーザ名を使用して、Control Center 以外の方法、手動で監視対象サーバへ接続できるか確認する。
－Control Center ユーザの権限を確認する。
－System Manager 上の接続設定を確認する（タイムアウト設定も含めて）
－SFTP の場合のみ：「..local location¥bin¥ssh2.exe」を使用して、手動で接続できるか確認する。
－SFTP の場合のみ：System Manager 上で設定した ssh のパスが正しいことを確認する。

メッセージ	詳細	対処方法
Win32 error [<error details>]	Win32 エラー。エラーの詳細については、メッセージの第 2 要素に記載。	
C run-time error	CRT エラー	
WinSock error	WinSock エラー	
Connection or authentication failure	接続の失敗（認証エラーも含む）	System Manager 上の接続設定を見直す。
Authentication failure	認証エラー	
The connection timed-out	タイムアウト	
Internal error, not connected		
Internal error, not reentrant		
FTP protocol error [<error details>]	FTP プロトコルエラー。エラーの詳細については、メッセージの第 2 要素に記載。	
The connection closed unexpectedly	リモートサーバが予期せず、終了してしまった場合に発生。	
The server name resolved to an invalid address type	無効なサーバ名	System Manager 上の接続設定を見直す。
WinSock would not initialize	WinSock の初期化失敗の際に発生。	

メッセージ	詳細	対処方法
SFTP protocol error [sftp status]	SFTP エラー。下記条件で発生。 ・ファイルの終わりが予期しない内容の場合。 ・ファイルが存在しない場合。 ・権限が無い場合。 ・一般的なエラー。 ・パケットが不正な場合。 ・接続が切断された場合。 ・サポート外の操作が行われた場合。	
Unexpected SFTP reply	SFTP の予期せぬ応答。パケットが予期しない種類の場合に発生。	
Invalid SFTP packet received	無効な SFTP パケットの受信。パケットが予期せぬ大きさだった、または。バッファサイズよりも大きい場合に発生。	
Unexpected error [error message]	内部エラー。メッセージに詳細が記載されている。	
Not found [directory name]	監視対象サーバ上に目的のディレクトリが無く、CWD や LIST コマンドが失敗した際に発生。	Acquire が正常にインストールされているか確認する。
Unrecognised transport		

第7章　添付資料 B. PuTTY の使用方法

7.1.　はじめに

Control Center は、SSH 接続に PuTTY を使用することができます。この章では PuTTY の一般的な使用方法について説明します。この章で説明する PuTTY のバージョンは「0.72」です。
本章の記載外の操作については PuTTY のコミュニティサイト等を参照してください。

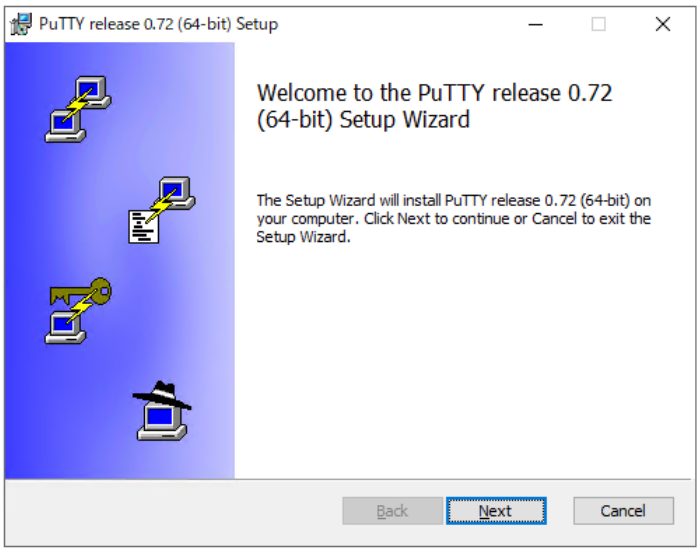
7.2.　PuTTY の導入方法

一般的な PuTTY の導入方法を説明します。

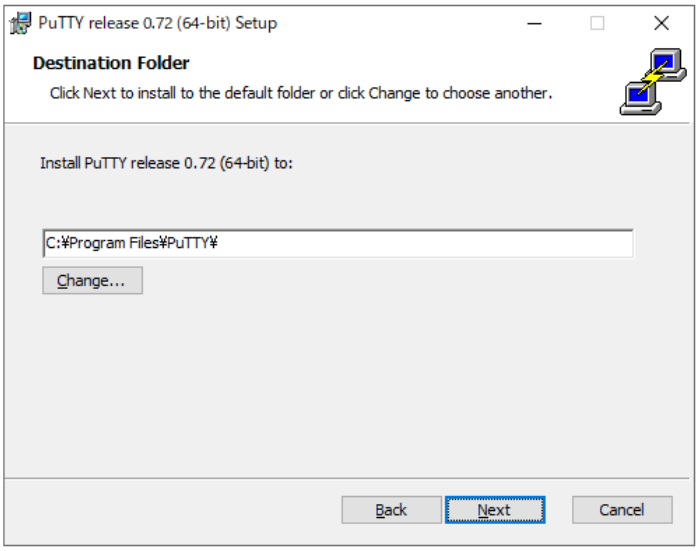
(1)インストール CD 内の PuTTY フォルダを任意の場所へコピーします。

(2)PuTTY フォルダ内の putty-64bit-0.72-installer.msi を実行します。

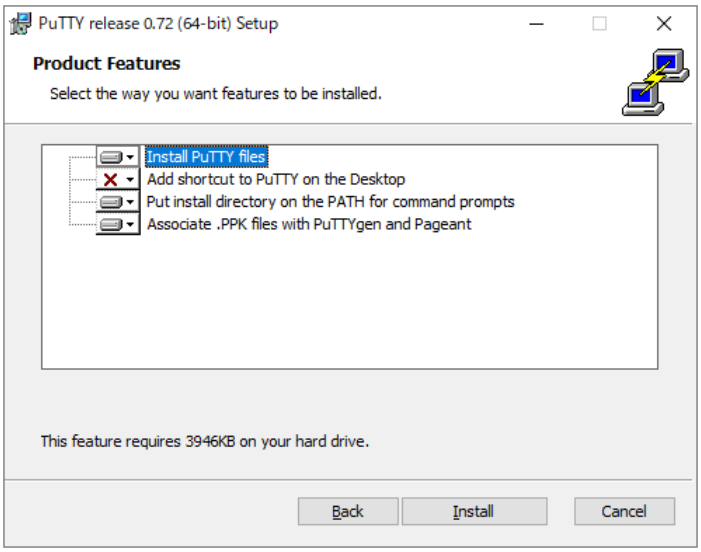
(3)Setup - PuTTY 画面が表示されたら[Next >]をクリックします。



(4)PuTTY のインストールフォルダの選択です。変更しない場合は[Next >]をクリックします。変更する場合は、[Browse...]をクリックし、任意のインストール先を指定します。

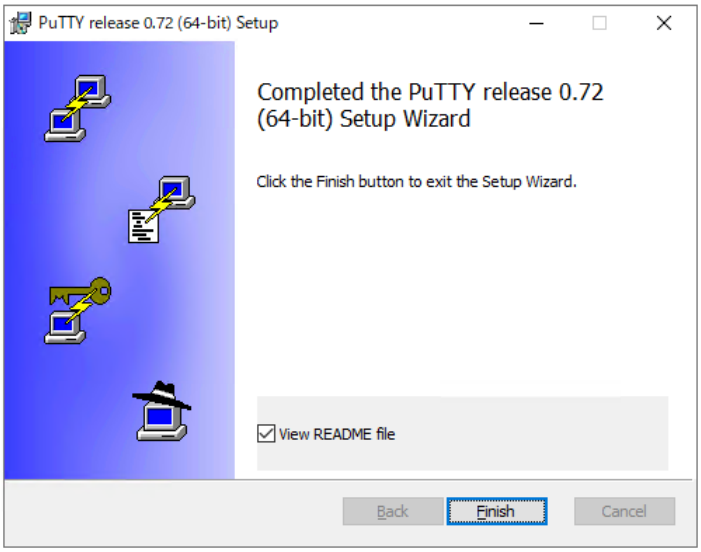


(5)チェックはデフォルトのままとし、[Install]をクリックします。



・Put install directory on the PATH for command prompts
　コマンドプロンプトの PATH にインストールディレクトリを置きます。必ずチェックを入れます。
・Associate .PPK files with PuTTY and Pageant
　拡張子が「.PPK」のファイルを PuTTY と Pageant に関連付けます。必ずチェックを入れます。

(6)この後インストールが行われます。[Finish]をクリックし、インストーラを閉じます。



インストール後、「スタート→アプリ」に「PuTTY」が追加されたことを確認してください。

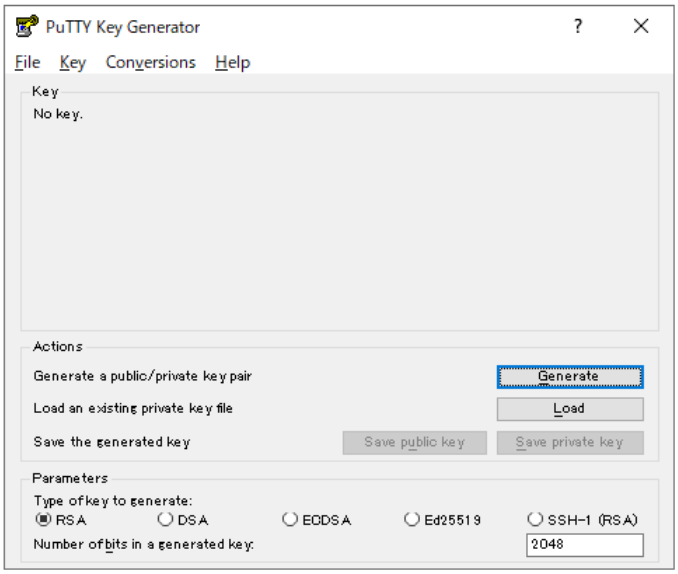
7.3. 鍵の作成と使用方法

7.3.1. 鍵の作成方法

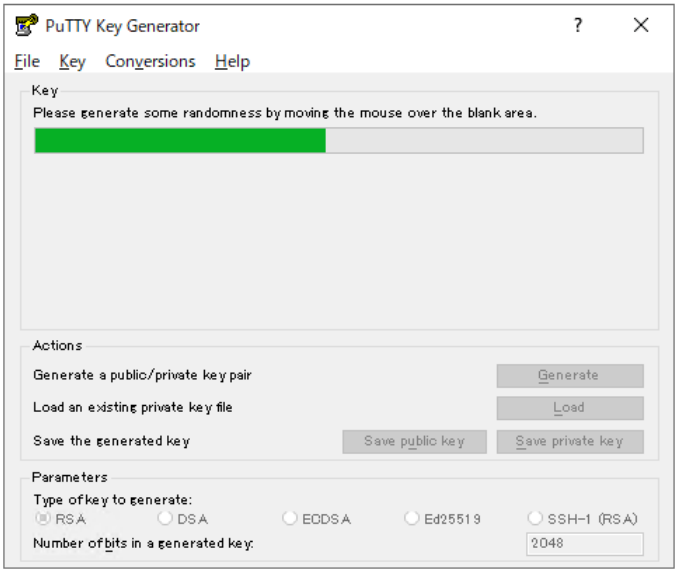
PuTTY の一般的な鍵の作成方法を紹介します。

(1)「スタート→アプリ→PuTTY(64-bit)」より「PuTTYgen」を起動します。

(2)Parameters の Type of key to generate に「RSA」が選択され、Number of bits in a generated key には「2048」が入力されていることを確認します。



(3)[Generate]をクリックし、鍵を生成します。マウスの動きで乱数生成を行いますので、プログレスバー下の空白部分で適当にポインタを動かしてください。

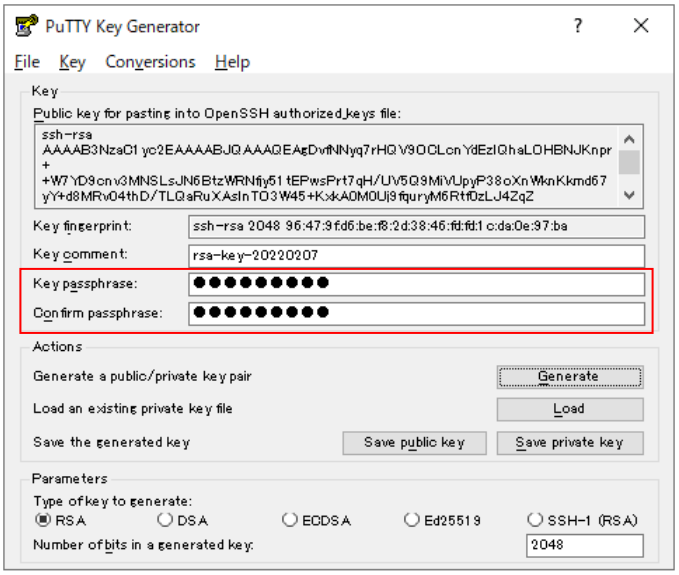


ポインタを動かし続けていると、「Please wait while a key is generated…」とメッセージが変わり、鍵が生成されます。

(4)鍵が生成されましたら，パスフレーズの入力を行います。

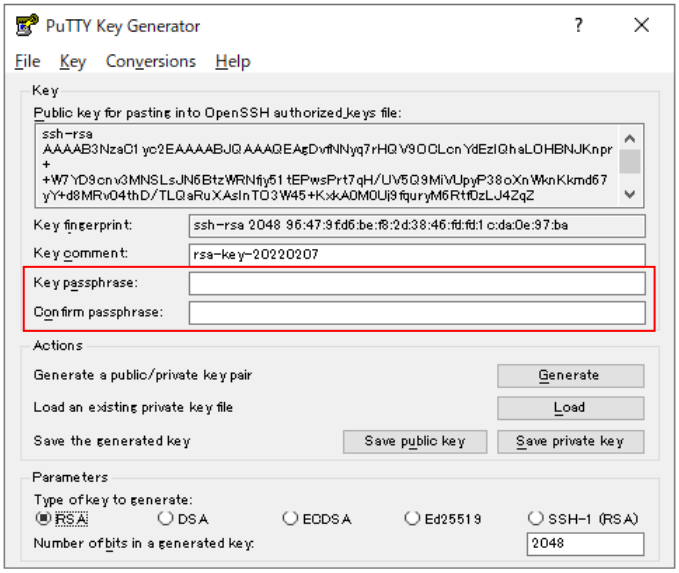
①パスフレーズ有りの場合

「Key passphrase」にパスフレーズを任意の文字列で入力し、「Confirm passphrase」に再入力します。

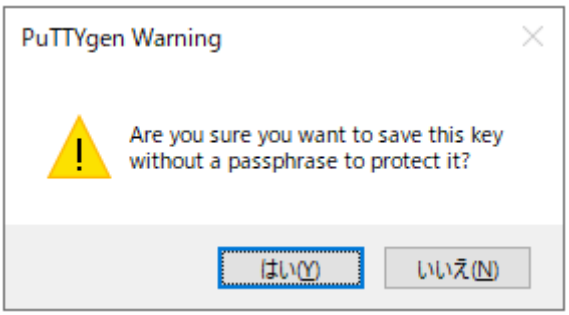


②パスフレーズ無しの場合

「Key passphrase」と「Confirm passphrase」は空欄にします。

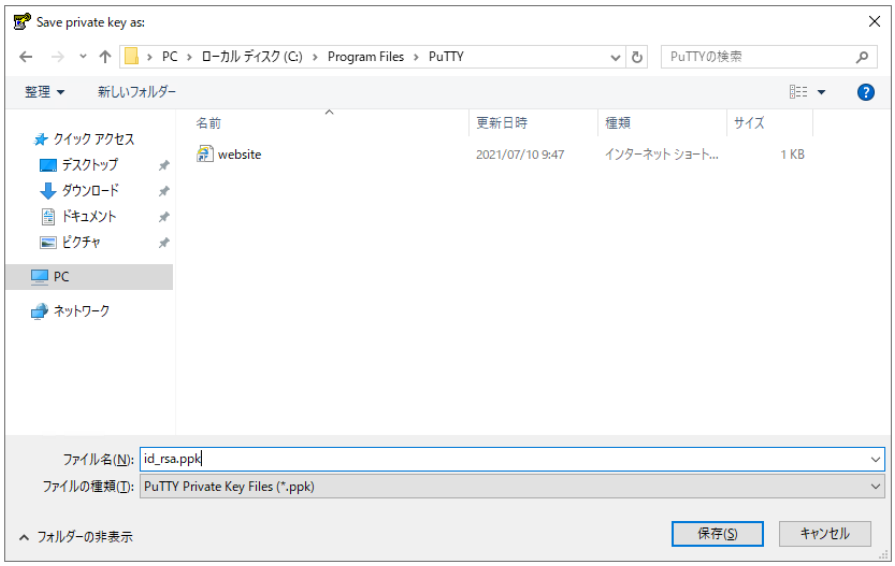


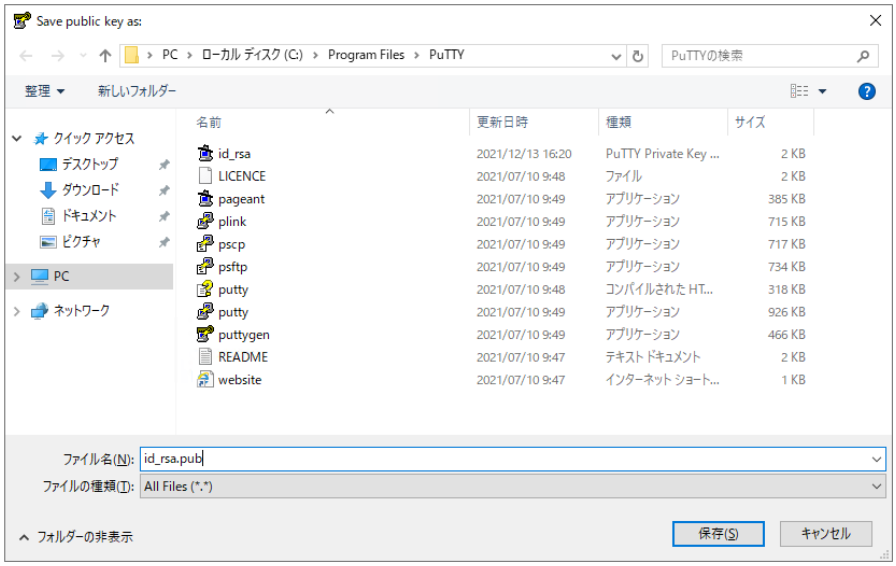
(5)パスフレーズを入力したら、作成した鍵を保存します。
「Save private key」（秘密鍵）、「Save public key」（公開鍵）を順にクリックしてください。パスフレーズ無しの場合には、警告メッセージが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。



①保存先
x:¥<PuTTY のインストール先>¥PuTTY

②保存するファイル名
秘密鍵を「id_rsa.ppk」、公開鍵を「id_rsa.pub」とします。





以上が鍵の作成手順となります。

7.3.2. 鍵の登録

PuTTY の一般的な鍵の登録方法を紹介します。

●鍵の登録先サーバが Linux の場合

(1)データ収集対象サーバの Acquire 専用ユーザの home ディレクトリ配下に「.ssh」ディレクトリが存在していることを確認してください。存在していなければ下記の内容でディレクトリを作成してください。

パス　　：/home/＜Acquire 専用ユーザ名＞/.ssh
ディレクトリ名：.ssh
所有者　　：Acquire 専用ユーザ
権限　　：700

(2)「.ssh」ディレクトリ配下に下記の内容で「authorized_keys」ファイルが存在していることを確認してください。存在していなければ下記の内容でファイルを作成してください。

ファイル名　：authorized_keys
所有者　　：Acquire 専用ユーザ
権限　　：600

(3)System Manager 導入サーバから下記のファイルをデータ収集対象サーバの Acquire 専用ユーザに転送してください。

ファイル転送元ファイルパス　：/home/＜Syncsort Capacity Management 専用ユーザ名＞/.ssh/id_rsa.pub

(4)転送された「id_rsa.pub」ファイルの記述内容を「/home/＜Acquire 専用ユーザ名＞/.ssh」配下にある「authorized_keys」ファイルに追記します。その際、「PuTTYgen」で作成した公開鍵を、OpenSSH で使用できるように変換を行う必要があります。下記のコマンドを実行して下さい。

```
% ssh-keygen -i -f id_rsa.pub >> authorized_keys
```

●鍵の登録先サーバが Windows の場合
※「第 8 章 添付資料 C. Cygwin を Windows 上で SSH サーバとして使用する方法」を参考に、Cygwin を SSH サーバとして使用した場合を下記に記述します。

(1)データ収集対象サーバの Acquire 専用ユーザで Windows にログインし Cygwin を起動します。起動後、Acquire 専用ユーザ名の home ディレクトリ配下に「.ssh」ディレクトリが存在していることを確認してください。存在していなければ下記の内容でディレクトリを作成してください。

パス　　：/home/＜Acquire 専用ユーザ名＞/.ssh
ディレクトリ名：.ssh
所有者　　：Acquire 専用ユーザ
権限　　：700

(2)「.ssh」ディレクトリ配下に下記の内容で「authorized_keys」ファイルが存在していることを確認してください。存在していなければ下記の内容でファイルを作成してください。

ファイル名　：authorized_keys
所有者　　：Acquire 専用ユーザ
権限　　：600

(3)System Manager 導入サーバから下記のファイルをデータ収集対象サーバの Acquire 専用ユーザに転送してください。

ファイル転送元ファイルパス　：/home/＜Syncsort Capacity Management 専用ユーザ名＞/.ssh/id_rsa.pub

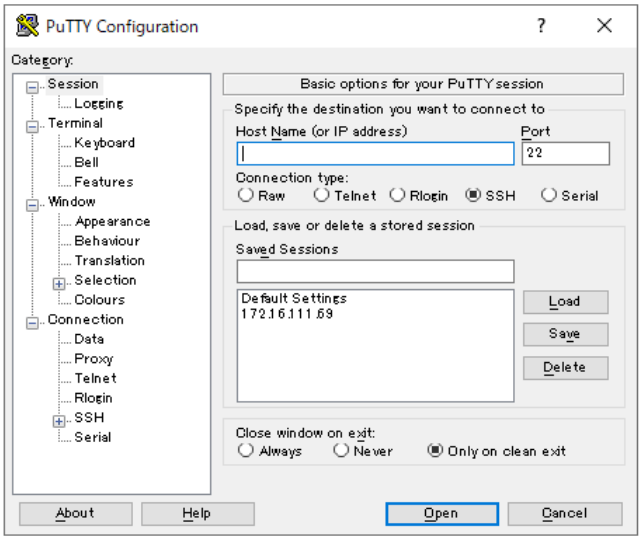
(4)転送された「id_rsa.pub」ファイルの記述内容を「/home/＜Acquire 専用ユーザ名＞/.ssh」配下にある「authorized_keys」ファイルに追記します。その際、「PuTTYgen」で作成した公開鍵を、OpenSSH で使用できるように変換を行う必要があります。下記のコマンドを実行して下さい。

```
% ssh-keygen -i -f id_rsa.pub >> authorized_keys
```

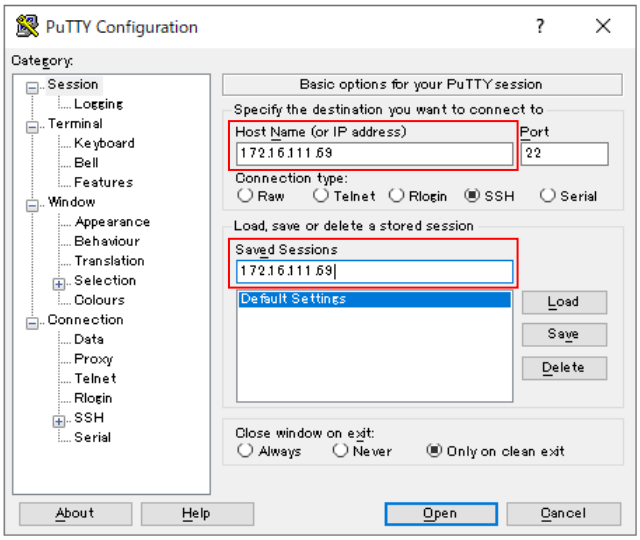
7.3.3. PuTTY による SSH 接続設定

サーバ側での鍵登録が完了しましたら、PuTTY クライアント側で SSH 接続サーバの設定および保存を行います。
PuTTY の一般的な鍵の認証方法を紹介します。

(1)「スタート→アプリ→PuTTY(64-bit)」より「PuTTY」を起動します。



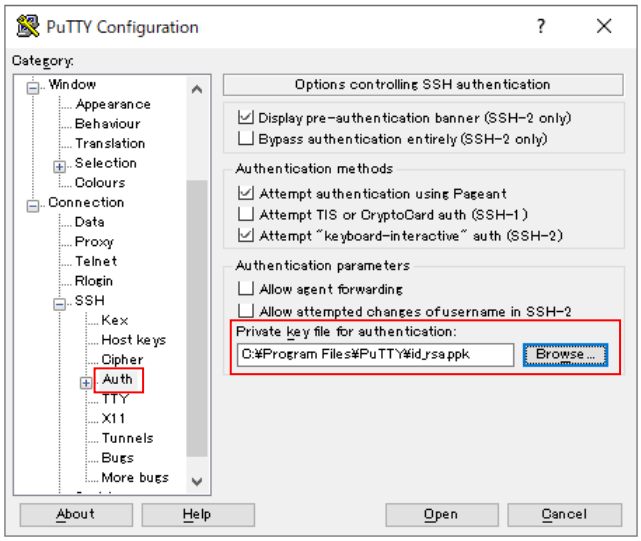
(2)Host Name(or IP address)と Saved Sessions に対象サーバの IP アドレス、もしくはホスト名を入力します。
Host Name(or IP address)は対象サーバとの接続に使用する設定値、Saved Sessions は System Manager の接続設定で使用する設定値となります。
System Manager から接続設定を確認しやすくするため、Host Name(or IP address)と Saved Sessions の設定値は同一とすることを推奨します。



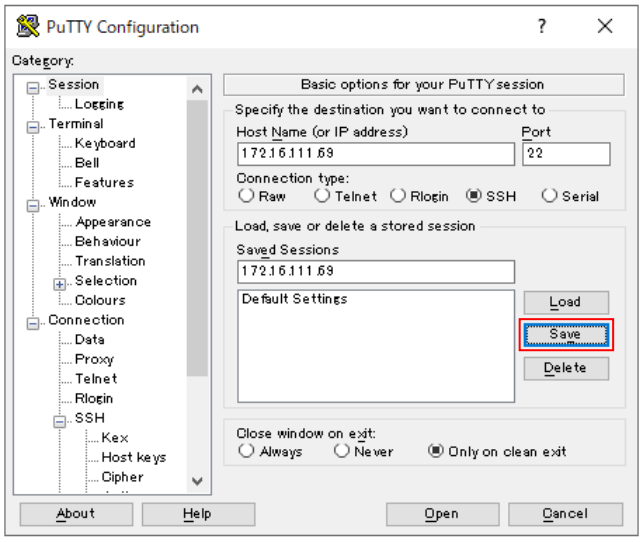
(3)認証に必要な秘密鍵の登録を行います。

①左のカテゴリより「Connection→SSH→Auth」を選択します。

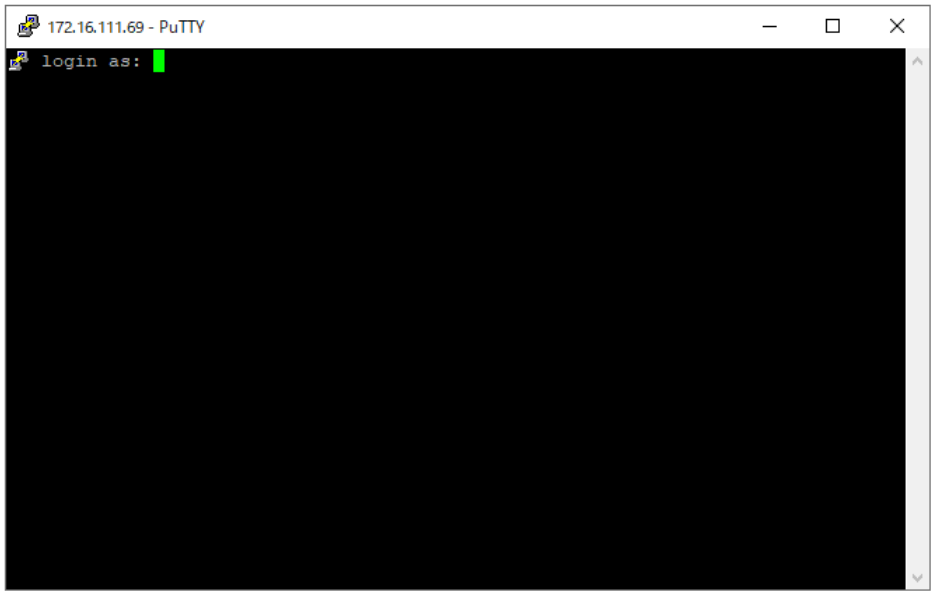
②「Authentication parameters」の「Private key file for authentication」で作成した秘密鍵（id_rsa.ppk）を指定します。[Browse...]をクリックし、ファイルを選択してください。



(4)設定が完了しましたら、「Session」のカテゴリに移動し、[Save]をクリックします。



(5)保存したセッションを[Load]をクリックし、再度読み込みます。下部の[Open]をクリックすると、サーバに接続され、PuTTYのウィンドウが表示されます。

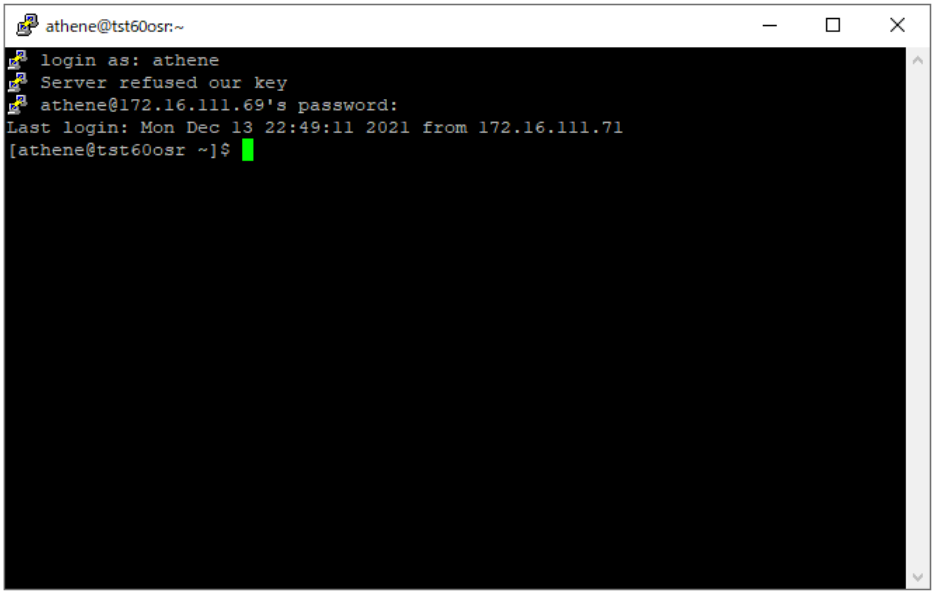


(6)下記の鍵認証に必要な情報を入力します。

●パスフレーズ有りの場合
login as: ←Acquire 専用ユーザ名
Authenticating with public key "rsa-key-20140917"
Passphrase for key "rsa-key-20140917" ←パスフレーズを入力

●パスフレーズ無しの場合
login as: ←Acquire 専用ユーザ名
Authenticating with public key "rsa-key-20140917"

正しい認証情報が入力されると、正常にログインが完了します。



以上が鍵の認証手順となります。

7.4. PuTTY を System Manager で使用する際の注意点

7.4.1. 公開鍵認証を使用する場合の注意事項

公開鍵認証を使用する場合には以下のような注意事項があります。

(1)Syncsort Capacity Management Control Center サービスのログオンに運用アカウント（Control Center 専用ユーザ）を設定する必要があります。「ローカルシステムアカウント」では動作しません。
詳細な設定方法につきましては、「4.9.1. Control Center の動作環境設定 (2) SSH 接続を使用する場合の設定 (2-3)」を参照してください。

(2)PuTTY で設定した「Saved Sessions」は System Manager の接続設定で使用します。

注意！
System Manager の「4.8. 新規ターゲットの定義」にて SFTP 通信を使用する場合は、「②Server name or IP address」と PuTTY の「Saved Sessions」を一致させる必要があります。

7.4.2. ssh サーバのホストキーが変更された場合の対応

PuTTY のレジストリに登録されているホストキーと接続対象のホストキーに差異がある場合、Control Center 接続時に以下の認証エラーが記録されます。認証エラーの影響で対象のサーバに接続することができなくなります。

```
[Error Type] FileCollection
  [Description] 1500,109: Win32 error [ p C v    I              B   ][Pipe read 2][Connection
or authentication failure][   xxxx SFTP connection to 'TargetHost']
```

PuTTY に新しいホストキーを登録するため、以下のいずれかの対応を行ってください。

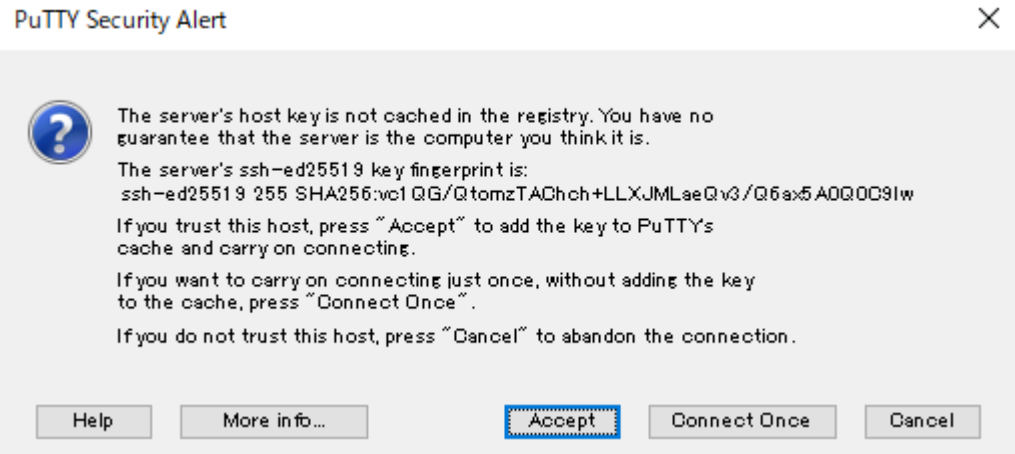
対象サーバに PuTTY を使用して接続を行える場合は、下記の手順でホストキーの再登録を行います。
（※通常はこちらの手順を実施します）

＜PuTTY を使用してホストキーの登録情報を更新する＞

(1)Control Center サービスを停止します。

(2)PuTTY を起動します。Host Name(or IP address)に接続情報を入力し、Open をクリックして接続します。
鍵認証の接続を行っている場合は、すでに登録されている接続情報を SavedSessions から Load して接続します。

(3)ポップアップ画面に対象サーバのホストキーが表示されますので、接続先が正しいことを確認し、[Accept]を選択します。



(4)ユーザとパスワード・パスフレーズを入力してログインしたのち、ログアウトします。

(5)Control Center サービスを開始します。

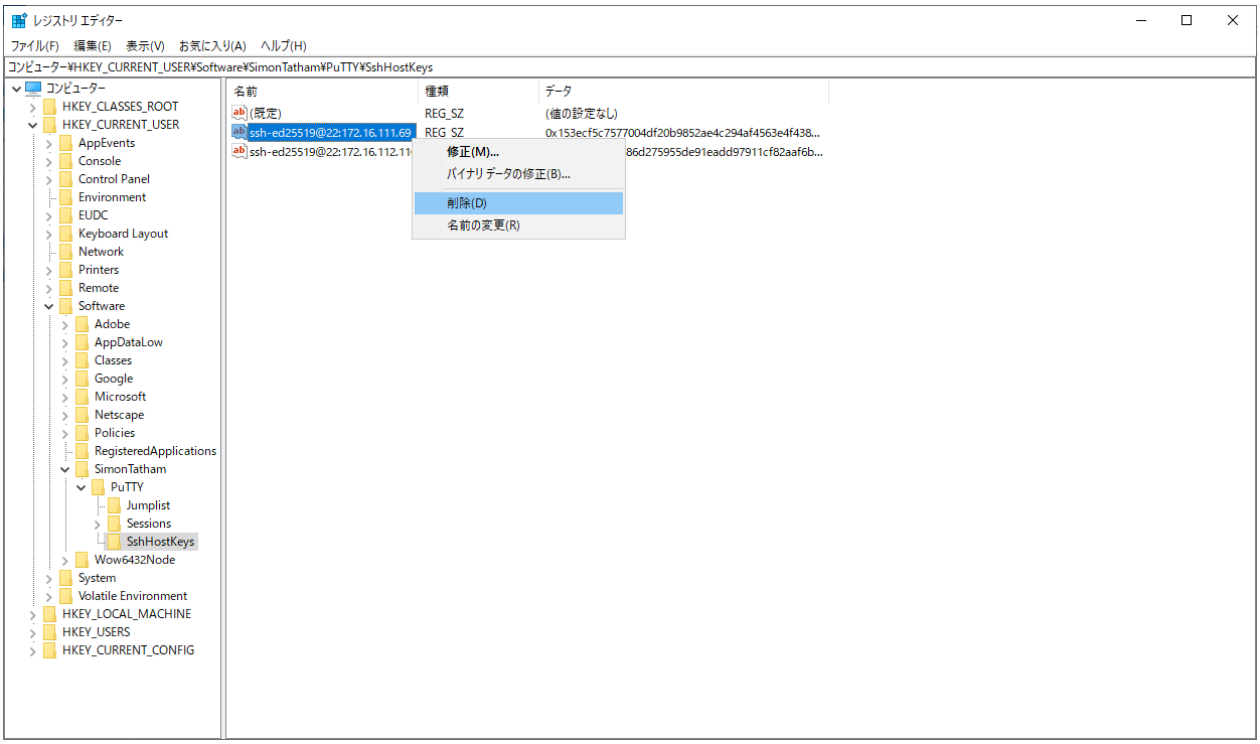
対象サーバに PuTTY で接続を行えない場合は、下記の手順でホストキーの削除を行います。

<レジストリの削除手順>

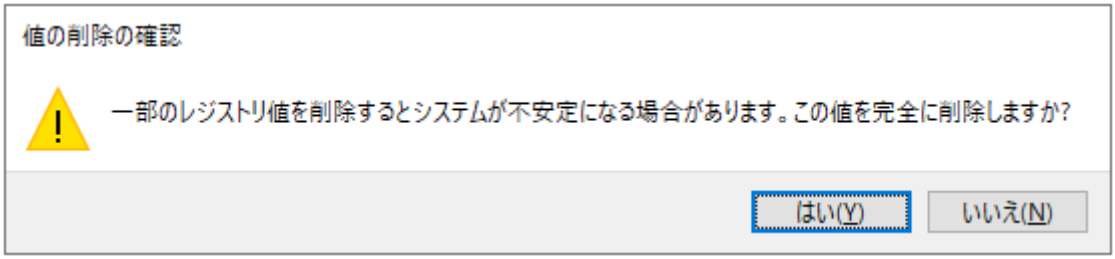
(1)Control Center サービスを停止します。

(2)レジストリエディタを起動します。

キー HKEY_CURRENT_USER¥Software¥SimonTatham¥PuTTY¥SshHostKeys を開き、対象サーバの値(暗号方式@接続情報)を選択し削除します。



(3)確認画面は、[はい(Y)]を選択します。



(4)レジストリエディタを閉じます。

(5)Control Center サービスを開始します。初回の接続にて Control Center がホストキーを登録します。

第8章　添付資料 C. Cygwin を Windows 上で SSH サーバとして使用する方法

8.1.　サービス登録の設定とサービスの確認方法

Cygwin の一般的なサービスの登録方法と確認方法を紹介します。

●サービス登録の設定
Cygwin を起動して下記のコマンドを入力します。

```
ssh-host-config                                          ←Enter キーを入力
Should privilege sepration be used? (yes/no)             ←yes を入力して、Enter キーを入力
new local account 'sshd'?(yes/no)                        ←yes を入力して、Enter キーを入力
Do you want to install sshd as a service ?
(Say "no" if it is already installed as a service (yes/no)) ←yes を入力して、Enter キーを入力
Enter the value of CYGWIN for the daemon: []             ←Enter キーを入力
Do you want to use a different name? (yes/no)」          ←no を入力して、Enter キーを入力
```

●サービスの確認方法
Windows のサービスマネージャを起動しサービス名「CYGWIN sshd」が下記の内容であることを確認します。

サービス名　　：CYGWIN sshd
状態　　：開始
スタートアップの種類：自動

8.2.　データ収集対象サーバのイベントビューアに出力される情報イベントについて

Windows OS のデータ収集対象サーバに Cygwin で ssh 接続を行う際に、イベントビューアに下記の情報イベントが収集インターバル毎に出力されますが問題はありません。

«ログの例»
イベントの種類　：情報
イベント ソース　：sshd
イベント カテゴリ　：なし
イベント ID　：0
日付　：2011/10/20
時刻　：20:00:00
ユーザー　：IIM¥cyg_server
コンピュータ　：IIM
説明　：イベントにより説明内容は異なります。